

明星の年輪

— 明星学園 100 年のあゆみ —

学校法人 明星学園

明星の年輪

—— 明星学園 100 年のあゆみ ——

1924 ~ 2024



小学校中央棟と北棟の間、さくら大通りからグラウンドを臨む

表紙について

題字は創立同人、照井げん先生の筆。『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』（1974年）刊行の折にいただいた。

表紙写真は黄葉した公孫樹^{いちょう}の樹。1924年5月16日、明星学園の創立を記念して植樹した二本のうちの一本である。開校した5月15日が悪天候だったため、翌16日に、「入口の左右に教師たちが一本、児童が一本植えた」と記録にある。1999年、小学校新校舎建築の際、一本を校門脇に移植したが、こちらの一本は創立以来この場所に立ち、100年の歴史を静かに見つめてきた学園のシンボルツリーである。

表紙撮影……大草 鷹平（79 回生）

芯のあるしなやかさ ― 明星 100 年の軌跡

創立 50 周年に、原田満寿郎（社会科教諭・理事）等の並々ならぬ努力で、学園史『明星の年輪―明星学園 50 年のあゆみ』が刊行された。その後 10 年ごとに学園史に記録を残し続けて 100 年目を迎えた。

明星学園創立の前年、1923 年 9 月の関東大震災は、首都東京に壊滅的被害をもたらした。物的被害のみならず、「大正デモクラシー」と言われた風潮を、昭和の「戦争の時代」へ転換させるきっかけとなった。激しい時代の転換期である 1924 年 5 月、澤柳政太郎という大きな後ろ盾を持つ成城小学校を離れ、理想に燃えた 4 人の教師は、自然豊かな井の頭の地に小さな小学校「明星学園」を創設した。太陽の沈んだ暗闇に明るく光る金星を見て名付けたと言う。「男女共学・小規模学校・子ども中心主義」にこだわって創設した私立学校を、100 年間存続させてきた苦労は計り知れない。

明星学園の教育理念「個性尊重―自主自立―自由平等」は、明治の教育を引きずった当時の学校教育のあり方を批判し、特に“児童中心”の教育をめざしたものであった。この理念の実現には、社会状況の変化や子どもを取り巻く文化状況によって、教育内容や方法を、常に振り返りつつ実践することが要求される。ある時期に評価を得た実践であっても、それを固定化・形式化することは、新しい自由な実践を阻害しかねない。しっかりとした理念を持ちつつ、常に今を振り返り、柔軟に対応していく「しなやかさ」が要求される。創立者が掲げた理念・理想を実現するには、我々学園関係者のためめ実践・研究と、それをささえる自由な「場」を創ることが要求されている。

戦前・戦後の激しい変動の時代を経て、現代社会は地球規模での自然破壊、核の脅威など、人類の存続までもが脅かされる事態を迎えている。また、人工知能の急速な進化・IT 機器の拡大は、教育内容・方法の変化を加速させ、それへの対処は教育現場の課題となっている。あふれる情報の中で、子どもたちは身体性に根ざした総合的な知の獲得が要求される。自分で経験し、考え、広い視野に立って生きていく力が必要とされる。これからも、創立者の理念を生かし、新たな課題に立ち向かっていく柔軟な力を、明星学園は持っていると感じたい。

本誌『明星の年輪―明星学園 100 年のあゆみ』第 1 部「黎明期の明星」～第 4 部「一貫教育の新たな実践」までは、依田好照元校長を中心として丁寧に読みやすくまとめられた『明星の年輪―明星学園 90 年のあゆみ』の叙述を生かしつつ、基本的な学園史の流れをまとめ直した。限られたページ数のため、90 年史への寄稿文や資料等の具体例はやむを得ず不掲載とし、「詳しくは 90 年史参照」と記した。そうした意味からも「90 年史」と「100 年史」を併読されることを望んでやまない。

第 5 部「原点を見つめ未来を開く」は、最新の 10 年間でまとめたものである。中高一貫「6・6 制」へ移行し、12 年一貫教育の充実へ向けた流れが大きく動き出した時期から始まる。更に、世代交代、コロナ禍を経て、教育内容・方法が大きく変化し、ますます自分で考える力が必要なことも明らかになった。現教員から寄せられた多くの実践報告からは、新しい世代の新しい試みが始まっていることが解る。教職員だけでなく、保護者・卒業生等が学園の運営・行事等に深く関わってくださっている事も、明星学園の特質として伝えることができれば幸いである。

本誌を多くの方に読んでいただき、今後の明星学園のために、役立てて欲しいと願っている。

『明星の年輪―明星学園 100 年のあゆみ』編集委員 渡辺 京

日時計の由来と「明星科學館」

小学校の門を入り石段を上ると、小学校舎の前に創立者赤井米吉先生の像があり、その右手に古びた日時計がこぢんまりと佇んでいる。風化した石の台座には「明星科學館備品 川井清寄贈」と刻まれている。この日時計の由来を学園の未来に遺したいと思う。

明星科學館の実現を望む

照井 猪一郎

…前略 過去十年の間、私達はまことにささやかながら教室だけは辛うじて間に合わせて参りました。しかしそれとても御覧の通りほんとに一般小学校のように教科書いじりにのみ終始する場合ならば間に合うという程度の校舎であります。私達の主張のように少しでも個人個人の能力を天分的に伸ばしていくために、個別的な指導を加えたいとすればする程、それに対応するだけの設備の必要が^{ひしひし}轟々と迫って参ります。…中略… 貧しい私達はせめて児童が学習に際して自分の玩具同様に^{きやすく}且つ自由に利用することの出来る設備を完成してやりたいという心でいっぱいであります。そしてそれは私達の教育方法の最後のものであります。

「求めよ、与えられん」で、それは私達にもあてはまる可能性を十分に予想できます。…中略… 私達の集めるのは、充分に、そして自在に児童の学習に活用させたいが為であります。消耗品ならば惜しみなく消耗させたいが為であります。ショーウィンドウの見本のように^{ため}遙拝させる為でなく、手にとってさんざんいじり廻させたいが為であり、子供達の手で自由に取り出し又は整理させたいが為であります。それには先ず第一にそうしたことに^あ充てる即ち保管と実験室を兼ねた建物が欲しいのであります。最初には是非建設したいのは数学、理科、地理、国史の研究館であります。私達は^{これ}之を明星科學館と名付けました。まだ建物のないのに名称があるのは変ですが、実は名称ばかりでなくこれに付属する備品ももう名簿に載って居るのであります。

それは昭和6年(1931)故川井清君の在校記念として川井(源八)氏より金五百圓を寄贈されましたことに始まります。私達は清君を永久に記念する為に此の金^こを如何に善用すべきかの計画について長い間凝議した結果、之を契機として^{やが}予て熱望せる明星科學館を設立し、消失し易い物品で清君を記念するよりも「明星科學館建設」なる事業の名に清君の生命を永遠に宿しました。そうしてそのお金で第一に英国ワットソン会社製^{えん}3.5インチの天体望遠鏡を英人ケネデー氏から二百圓で譲り受け、次に三鷹天文台に依頼し、百二十五圓を以て校庭に日時計を建築しました。爾來是等は総て学園の子供達に大きな興味と暗示を与えて彼らの科学的驚異感を示唆し続けて居ります。…中略… 昨年の12月20日夜、この望遠鏡で万年に一度あるかなしという月の背面を通過する金星土星を観測したし、2月14日の日蝕も十分に見る事が出来ました。…中略… こうして建物のない明星科學館は内容的に次第に形づくられ哺まれつつ成長して居ります。

^{しか}併し前にも申したように十分に保管と実習に充てる建物のないことはこのよい発展を行きづまらせる大きな支障であります。バラックでもいい、せめて五間に十二間位の建物が一つほしい(1間=1.8m)。そして子供達のこの方面の学習は今の幾倍の能率を挙げ、家庭学習の学校への逆延長となり得ることを信じます。後略…

小学部教育月報『ほしかげ』第5号(1934年2月25日)

天逝した川井清さんの在校記念として贈られた寄付金で創られた“明星科學館”備品の日時計。愛しそうに擦る小学部長(“校長”のことを明星ではこう呼んだ)の照井猪一郎先生。



いちよう広場を見守る
赤井米吉先生の胸像と日時計



個性尊重の精神



学校法人明星学園理事長 平田 和孝

2024 年早々に起きた能登大震災、昨年から続くパレスチナ・イスラエル問題、ロシアのウクライナ侵攻、地球沸騰化による自然災害の頻発など、地球全体に今、大きな問題が起きています。

世界中いたるところで目先の利益優先主義が蔓延し、これによって地球と人にやさしい社会の在り方が困難になってきている現状があります。

こうしたなか、『明星の年輪—明星学園 100 年のあゆみ』を刊行いたします。明星学園と社会の 100 年の歴史がどのようなものであったかを振り返る機会になることを願っています。歴史を学ぶことの意味、歴史を掘ることの意味は、「いま・ここ」を明日に向かって生きていくための糧とすることです。

スウェーデンの教育学者エレン・ケイは、その著書『児童の世紀』の中で、20 世紀を「児童の世紀」と呼びましたが、自由教育はまさに国際的潮流へとなっていきました。

明星学園の自由教育はこの流れの中で、関東大震災後の混乱期や第 2 次世界大戦をしたたかに乗り越え、今日に至っています。

自由とは、人間の本性に基づくからこそ、その自由の拡大が必要になるのです。人は、自分という「かけがえのない自分」を生きると同時に、社会の中で他者と共に生きるもう一人の「社会的自分」という、両義性をもって生きています。「一人一人の個性を尊重する」という建学の精神の根本の意味は、この両義性を統一的に生きるということです。

今、改めて人間教育の力が問われています。「寛容」(トレランス)と「リスペクト」を根本に置いた人間教育こそが現代教育の課題となるにちがいません。

明星学園と共に



明星学園小学校校長 照井 伸也

明星学園は今年 100 周年を迎えました。

私は 1 年生から 12 年生まで、この学園にお世話になり、また教師としてこの学園に戻り、30 数年が過ぎました。入学前にも学園には遊びに来ていましたので、創立 100 年の歴史の中の半分近くは自分の目で学園の移り変わりを見て来たのではないのでしょうか。平屋の校舎、小さなプール、飼育小屋や石炭置き場など、その間に無くなったものもあれば、第二体育館や小学校の新校舎など、新しいものもたくさんできました。

地球の歴史、人類の歴史から言えば、100 年など「点」にもならないほんの短い期間にしかありません。しかし日本の教育史の中でこの 100 年間の変化は大きな意味を持っています。この 100 年は「科学的教育」、「体系的教科教育」、「少人数制」、「男女共学」など、今では当たり前のように行われていることが当たり前ではなかった時代でもありました。そのような時代に設立された明星学園は、児童の個性を尊重し、児童自身が自主自立することを望み、児童の自由で平等な学習や生活を守るために必要な教育とは何かを考え続けて来ました。これからもこの理念を掲げ、現代社会においてどうすれば子どもたちの「個性尊重」「自主自立」「自由平等」を確保できるのか、そのみを願って我々は常に研究を続けていかななくてはなりません。回遊魚が泳ぐことを止めると死んでしまうように、我々も常に考え続けていかなければ、教育は死んでしまうと思うからです。

明星学園 100 年の歴史に学び、 次の 100 年へ



明星学園中学校・高等学校校長 平野 康弘

新しい教育の理想に燃えた 4 人の先生たちが創り上げた明星学園は、今年創立 100 周年を迎えます。

この 100 年間、創立時の理想であった『個性尊重・自主自立・自由平等』の精神を脈々と引き継ぎながら、ここまで続いて来たことの重みを改めて感じざるを得ません。その歩みは、決して平坦なものではありませんでした。その時代の教育行政の変化に振り回される世間の要請にさらされながらも、頑固に、真面目に、常に子どもを中心に据えた教育実践をひたすら守り続けてきた 100 年だったのだと自負しています。

しかし、子どもを中心に据えた教育と一口に言っても、その考え方にはかなりの幅があります。それが時には学内の路線対立として顕在化したことも多々ありました。しかしそれは、真剣に理想の教育を追求めてきた証でもあるのではないのでしょうか。

明星学園の教師たちは、常に理想の教育を追求め、信念を持って日々の教育に邁進しています。『明星の年輪』は、これまで 10 年毎に更新し続けてきましたが、その中に記されたあゆみを見ますと、教育の体制や環境や指導法など様々な部分で紆余曲折があったこともわかります。例えば、教育体制に関して見ても、小中高の過程を 4 年毎に区切る「4・4・4 制」の時期もありました。これは、子どもの発達段階を最重要事項として考えた体制であり、教育学的にも大きな意味のある制度であったと思います。しかし、中期 4 年の途中の 7 年生からの編入、後期 4 年の途中の 10 年生からの編入の難しさ、つまりは外との関係に於いて無理が生じたこともあり、15 年間の実施期間を経て「6・3・3 制」に戻すことになりました。これはひとつの例にすぎませんが、明星学園の実践には理想と現実との狭間でもがきながら、子ども中心の教育の理想を実現しようと頑張ってきた歴史が沢山見られます。

この 100 周年誌にはそのようなあゆみが記されております。

是非、お読みいただき、この先の 100 年に向けての新たなあゆみを造りあげる、新たな挑戦を見守って頂き、応援して頂けますようお願い申し上げます。

目 次

芯のあるしなやかさ ― 明星 100 年の軌跡

日時計の由来と「明星科学館」

個性尊重の精神…………… 学校法人明星学園理事長 平田 和孝

明星学園と共に…………… 明星学園小学校校長 照井 伸也

明星学園 100 年の歴史に学び、次の 100 年へ…………… 明星学園中学校・高等学校校長 平野 康弘

第 1 部 黎明期の明星

第 1 章 明星学園の誕生

- 1 誕生前夜 …………… 18
 - (1) 一本の標木 ― 18
 - (2) 大正デモクラシーと新教育運動 ― 20
 - 1) 大正デモクラシー ― 20
 - 2) 新教育運動・大正自由教育 ― 20
 - (3) 成城小学校の教育 ― 22
 - 1) 澤柳政太郎と成城小学校 ― 22
 - 2) 成城小学校での小原国芳 ― 24
 - (4) 明星学園創立へのあゆみ ― 24
 - 1) 成城小学校での出会い ― 24
 - 2) 両雄並び立たず ― 24
 - 3) 創立への第一歩 ― 26
- 2 学園の誕生 …………… 27
 - (1) 明星学園設立趣意書 ― 27
 - (2) 開校の日 ― 27
 - (3) 「社会立の学校」をめざして ― 29
 - (4) 建学の精神 ― 30
- 3 創立者と後援者 …………… 32
 - (1) 4 人の創立同人 ― 32
 - 赤井米吉 ― 32
 - 照井猪一郎 ― 36
 - 照井げん ― 38
 - 山本徳行 ― 40
 - (2) 上田八一郎 ― 42
 - (3) 後援者「隠れた人」茶郷 基 ― 45

第 2 章 初期の教育実践

- 1 新教育の開拓者 …………… 48
 - (1) 創立当初の教科課程 ― 48
 - (2) ドルトン・プランと明星 ― 50
 - (3) 『新読本』 ― 53
 - (4) さまざまな実践 ― 56
 - 1) 低学年における自然科の授業 ― 56
 - 2) 霜田静志『芸術を基調とせる低学年の教育記録』 ― 57
 - 3) 霜田静志の学力観 ― 60

2	創立期の子どもたち	61
(1)	通学	61
(2)	初期のころの学校のようす	61
(3)	第1回生・2回生の生活	63
3	学校と家庭の連携	66
(1)	母の会の活動	66
(2)	学校・家庭・子ども	67
(3)	「部落会」の提唱	69
4	中学校・高等女学校の創設	70
(1)	山積する難問	70
(2)	上田八一郎の上京	71
(3)	保護者の協力と後援会の発足	72
(4)	初期の中学校	75
(5)	初期の高等女学校	78
5	初期の学校行事（小学校）	81
(1)	行事について	81
(2)	遠足・見学旅行	81
(3)	夏季生活	84
(4)	学芸会（舞踊の会・展覧会）	88
(5)	体育会・運動会	89
第3章 初期の学園経営		
1	赤井学園長の苦悩	90
2	初期の後援者たち	93
第4章 創立10周年		
1	10年の星霜	94
(1)	創立10周年への思い	94
(2)	創立10周年の記念事業	99
(3)	創立10周年記念式	100
2	明星学園行進歌の誕生	102
第2部 アジア・太平洋戦争期の明星		
第1章 戦時教育体制のなかで		
1	赤井学園長の欧米視察	106
(1)	世界新教育会議	106
(2)	赤井が見た世界の動き	108
2	「国民精神総動員」のもとで	110
(1)	日中戦争の開始	110
(2)	創造力と自由	110
(3)	国民学校令と私立小学校	112
第2章 戦時下の明星		
1	戦時下の小学校	115
(1)	「お知らせ」に見る戦時下の小学校のとりくみ	115

(2) 戦時下の小学校教科外活動	—— 118
(3) 時局と音楽教育	—— 119
(4) 『さかだち学校』	—— 120
2 戦時下の高等女学校	122
(1) 1935 年（昭和 10）～ 1942 年（昭和 17）の女学校	—— 122
(2) 1943 年（昭和 18）～ 1945 年（昭和 20）の女学校	—— 126
3 戦時下の旧制中学校	130
(1) 教師から見た上田校長	—— 130
(2) 『星雲時代』から 中学校生活の断面	—— 131
(3) 学徒動員を中心に	—— 133
(4) 社会情勢	—— 135
4 戦時下から戦後へ	136
戦時体験の断片 原田満寿郎	—— 136
集団生活の指導・社会生活への訓練 原田 満寿郎	—— 137

第 3 部 戦後教育改革期と明星

第 1 章 新制度による再出発

1 「6・3・3 制」と男女共学	—— 140
(1) 敗戦直後の教育再建	—— 140
混迷のなかで／「青年学徒に告ぐ」／赤井米吉と前田多門／「日本的民主主義」	
(2) 教育基本法と 6・3・3 制	—— 143
アメリカ教育使節団報告書	—— 143
赤井米吉の教職追放	—— 144
ある卒業生の場合 『私は貝になりたい ある BC 級戦犯の叫び』	—— 144
教育基本法の制定	—— 145
6・3・3 制のスタート	—— 146
2 終戦直後の明星学園	147
(1) その頃 明星学園では	—— 147
(2) お知らせに見る終戦直後の明星学園小学校	—— 148
(3) 卒業生の体験談	—— 151
(4) 新制高等学校の発足	—— 152
(5) 花ひらく明星祭	—— 155
3 小・中・高一貫教育への始動	158
(1) 学園一体化への志向 新体制の発足	—— 158
(2) 『明星 創立 25 周年記念』の刊行	—— 158
(3) 新 PTA の発足 父母にささえられて	—— 160
(4) 学校劇へのとりくみ	—— 161
(5) 明星学園振興事業計画	—— 164
創立 30 周年を機に	—— 164
小学校のジグザグ校舎	—— 165
(6) 第 1 回教育研究集会	—— 167
何が話し合われたか	—— 169

第 2 章 4・4・4 制の軌跡

1 一貫化をめざして	170
(1) 教科課程案の共同研究	—— 170

(2) 「4・4・4 制」の提案	170
(3) 「4・4・4 制」発足へ	171
教育課程編成の基本	172
(4) 「4・4・4 制」の反響 新聞報道にみる論評	173
2 教育研究活動	174
(1) 公開研究会の始まり	174
1960 年度の動き	174
公開研究会へ向けた全園の合宿研究会	174
公開研究会をなぜ開いたか	175
(2) 第 1 回教育研究発表会（のちの公開研究会）	175
「明星学園 PTA 教育研究協力者集団」	176
3 低・中学年部の実践	177
(1) 教科書の自主編成	177
1) 自主編成教科書『にっぽんご』	177
2) 自主編成教科書『わかる さんすう』	179
(2) 4・4・4 制時代の夏季生活	180
(3) 「4・4・4 制」と寮を拠点とした夏季生活	182
4 高学年部の実践	183
(1) 教育研究「夏休み教育研究会から（高学年部）」	183
(2) 生徒の状況と自治会	184
(3) 仮装大会	185
(4) 修学旅行	187
5 試練の時	188
相次ぐ訃報	188
橘全園教務の急逝	188
照井校長も逝く	188
創立 40 周年と市村理事長の逝去	189
上田校長の逝去と次期校長問題	189
6 「4・4・4 制」と一貫教育をめぐる論議	190
(1) 学内対立の激化と生徒減	190
中等部内の夏季行事をめぐる対立	190
(2) 「4・4・4 制」の手直しは必要か	191
(3) 9 年生は 8 年生に続けるのがよいか	191
(4) 3 校長の辞任	192
(5) 9 年生は中学校へ——鈴木校長の提案	196
(6) 「4・4・4 制」の廃止	197
赤井学園長の逝去と学園葬	198
(7) 「4・4・4 制」とひとつの時代の終焉	200

第 4 部 一貫教育の新たな展開

第 1 章 4・4・4 制後の明星

1 教育をめぐる状況と明星	202
(1) 1970 年代の風潮	202
(2) 学校改革への実践	202
(3) 1970 年代の明星	203

2	創立 50 周年	203
	記念式典	203
	初めての学園史『明星の年輪 — 明星学園 50 年のあゆみ』発行	203
	50 周年記念・施設整備事業計画	204
3	小・中学校の実践	205
	(1) 明星学園小・中学校の方針	205
	(2) 授業を創る	206
	(3) 公開研究会	209
	(4) 評価のあり方を変える	211
	(5)『明星の教育』	211
4	高等学校の実践 — 高校の改革	214
	(1) 新教育課程 1973 年（昭和 48）の編成	214
	(2) 独自の選択授業「講座」	215
	(3) 運営委員会体制と教育研究部の新設	216
	(4)『明星の高校教育』	217
	(5) 生徒指導と教科外カリキュラム検討	221
	(6) 教育総点検運動	222
	1) 新校舎建築と基礎学力問題	222
	2) 授業・カリキュラムの見直し	222
	3) 自治活動・行事の再検討	223
	4) 歴史と共に生きる共修生活科	225

第 2 章 新体制下の明星

1	新体制の発足	227
	(1) 学園の危機的状況	227
	(2) 新理事会の発足と松井理事長	227
	(3)「明星学園・建学の原点を求め明日への出発」	228
	(4)「学園のお金は父母と都民からいただいている」	229
	(5) 遠藤校長、無着教頭の辞任	230
	(6) 恩地・依田両校長の就任	235
2	教育現場の運営	237
	(1) 全園校教務会	237
	(2)「内部進学テスト」の廃止	238
3	小・中学校の実践 実践記録の発刊	239
	(1)『明星の教育』	240
	(2)『都市を描く子どもたち — 明星学園中学校、生活の絵・10 年間の記録』	242
	(3)『画集 みつめる目 — 明星学園小学校の実践』	244
	(4)『みる つくる かんがえる — 明星学園小学校の総合学習』	246
4	高等学校の実践	248
	(1) 新教育課程（1984 年度実施）新教科カリキュラム	248
	(2) 高等学校研究紀要を『明星』と改題して復刊	250
5	創立 60 周年	251
	(1) 記念式典・祝賀会	251
	(2) 美術展と協賛展	252
	(3) 60 周年記念学園史の発行	253

第4章 「学校週5日制」

1 学校週5日制	254
2 小学校校舎建築	256
(1) 新校舎建築 ——	256
(2) 旧校舎お別れ会 ——	257

第5部 原点をみつめ未来をひらく

第1章 6・6制への道のり

1 「6・6制」の構想	260
(1) 1994年「中長期の運営方針」 ——	260
(2) 「6・6制検討委員会」(1995年6月～1996年1月) ——	260
(3) 「21世紀学園構想委員会」(1997年9月～1998年9月) ——	260
2 「6・6制」開始へ向けて	261
(1) 6・6制開始年度の決定 ——	261
(2) 「6・6制推進委員会」 ——	262
(3) 6・6制スタート ——	265
3 6・6制中高一貫教育の推進	266
(1) 内部進学制度 ——	266
(2) 人事交流 ——	269
4 中学校校舎建築問題	270
(1) 全園建築委員会の発足 ——	270
(2) 難航する建設計画 ——	270

第2章 新たに動き出す明星学園

1 教科教育の継続と発展	272
国語科 ——	273
理科 ——	281
算数・数学科 ——	284
社会科 ——	293
英語科 ——	298
生活科(高等学校) ——	306
体育科 ——	309
音楽科 ——	315
美術科 ——	322
工作科・木工工芸科 ——	325
2 教科外の取り組み	331
(1) 小学校の教科外活動 ——	331
1) 小学校の特別活動 ——	331
2) 小学校の宿泊行事 ——	333
(2) 中学校の教科外活動 ——	334
1) 卒業研究 ——	336
2) 宿泊行事 ——	337
3) 職場体験 ——	339
4) 特別講座「この人に会いたい」 ——	342
5) 中学校自治会 ——	343

(3) 高等学校の教科外活動	—— 344
1) 自治会	—— 344
2) 行事	—— 345
3) 二者協議会	—— 347
3 公開研究会と春の全園研究会	 351
(1) 小・中学校公開研究会	—— 351
(2) 春の全園研究会	—— 355
4 クラブ活動	 356
(1) 小学校のクラブ活動～好きなこと得意なことを通じて	—— 356
(2) 中学校のクラブ活動	—— 356
(3) 高等学校のクラブ活動	—— 358
5 教育相談部	 362
6 学園の危機管理体制	 363
(1) 施設設備対応	—— 363
(2) 児童生徒の事故対応・防犯対応	—— 364
(3) 防災対応	—— 364
(4) 健康安全対応 新型コロナウイルス感染症等伝染病対応	—— 365
7 明星学園をとりまく団体 保護者・地域・卒業生との協力	 367
(1) 明星学園父母と教師の会（PTA）	—— 367
(2) 明星学園後援会	—— 371
(3) 明星会（同窓会）	—— 372
(4) 学童クラブ「すずかけの木」	—— 375
(5) 学校ボランティア	—— 379
(6) その他の団体	—— 381
1) 明星学園史研究会	—— 381
2) 「輝け！明星学園」の会	—— 384
3) へいわのたねをさがす明星学園の会	—— 386
4) おやじ会	—— 388

第3章 100周年、そして次の世紀へ向けて

1 「探究」を柱とする活動	 389
(1) 小学校	—— 389
1) 「みいつけた」から始まる子どもたちの学び	—— 389
2) 小学校の学びの集大成『卒業論文～12歳の主張～』	—— 391
(2) 中学校「総合探究科」新設の経緯	—— 394
1) 新設の背景と目的	—— 394
2) 「カリキュラム作成委員会」の任期と構成員	—— 395
3) 現状整理と課題設定	—— 395
4) 総合探究科新設までの流れ	—— 395
5) 独自性の高い教育活動	—— 396
6) 総合探究科カリキュラム（2018年度版）	—— 396
哲学対話	—— 397
図書館と情報	—— 399
探究実践	—— 401
卒業研究	—— 403

(3) 高等学校の探究的な活動	405
1) 高等学校 総合科	406
整体的文化論／哲学／好きから始める SDGs	
2) 進路講座	410
2 「国際交流」と「国際理解教育」	413
(1) 小学校「世界平和への第一歩」	413
(2) 中学校	415
1) 語学短期留学（ニュージーランド／オーストラリア）	415
2) タイ短期留学	416
(3) 高等学校	417
1) 高校の国際交流—短期留学	417
オーストラリア短期留学	417
タイ短期留学	420
2) インターナショナル・ウィーク	421
3 未来を生き抜く力	424
(1) 今こそ必要とされる「明星教育」	424
1) 小学校における「総合」の授業（1～3年）と「教科内総合」	424
2) 教科の授業の中での探究	425
3) 芸術教育における探究	426
4) 中学校における「総合探究」	427
5) 高等学校で花開く「個性尊重・自主自立・自由平等」の理念	427
6) 開かれた学校へ	429
7) 高大連携	430
(2) ICT に向けた取り組み	431
1) 小学校	431
2) 中学校	432
3) 高等学校	434
4 学校図書館・学園資料室の役割とその展望	436
(1) 学校図書館	436
(2) 学園資料室・資料整備委員会の活動	438
5 「明星教育」を具現化するための中学校新校舎建築構想	440
(1) 新たな中学校校舎建築「建築委員会」の発足	440
(2) 中学校新校舎建築の基本コンセプト	441
6 創立100周年、その先の100年に向けて	444

明星学園・校地の今昔 — 446

略年表 — 449

修学旅行一覧 — 499

運動会・球技・体育祭一覧 — 502

編集後記 — 504

編集委員会 — 505

凡 例

- 引用文については次のとおりとした。
 - ① 本文より小さい字で記すか、「カッコ」で区別した。
 - ② 原則として原文通りを基本としたが、旧かなづかいは新かなづかいに、旧漢字は新漢字にあらためるか、適宜ルビを振った。
 - ③ 明らかな誤字・誤植と判断したものは改めた。
 - ④ 引用者の注記は（编者注： ）として意味を付記した。
 - ⑤ 省略は箇所により「…前略」、「…中略…」、「後略…」で示した。
- 引用文献、参考文献については該当箇所または脚注を付して各ページ下部に記し、巻末の文献一覧をなくした。
- 脚注番号は、第1部から第4部までは各部のなかで通し番号とした。ただし第5部は文章量が多く脚注は少ないので、必要なページごとに脚注番号を振った。
- 本文では暦年は西暦を基本としたが、日本の元号を付記する場合は「2024年（令和5）」のように記した。
- 参考文献としてたびたび引用している『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』『同一60年のあゆみ』『同一70年のあゆみ』『同一90年のあゆみ』は、それぞれ「50年史」「60年史」「70年史」「90年史」と略した場合もある。

第 1 部 黎明期の明星

1924 年（大正 13）～ 1934 年（昭和 9）



開校記念写真

創立同人と 1、2、3 年生の児童（1924 年 5 月 16 日撮影）

第1章 明星学園の誕生

1 誕生前夜

(1) 一本の標木

1924年（大正13）、自然に恵まれた井の頭公園の南の丘、雑木林に囲まれた麦畑に、明星学園は誕生した。学園が誕生した時の様子を創立同人のひとり照井猪一郎は美しい筆致で記している。

大正13年2月29日、むさし野はまだふかぶかと冬のとばりの中に眠っていた。

霜柱にふくれ上がった麦畑を、一足一足かみしめるようにきざんで行く4人の一団があった。一行はぼくぼくの黒土の上をとりつかれたもののようにむさぼり歩いた。

畑中の小高い地点に最後の歩みをとめた一行は、やおらかついで来た一本の標木を打ち立てた。「明星学園建設地」……したたかなような墨あとがあざやかに白木のおもてに読まれた。

彼らはそれをかこんでいっせいに大空をふりあおぎ、さて思い深げにまわりの森や林をながめまわした。誰からともなく無言のほほえみがかわされた。

大海の底のようにしずまりかえったひと時だった。真昼の太陽は真珠色のスポットをこの謙虚な開拓者たちの上におとした。

輝く日光、すみきった大気、ゆたかな土壌、それは彼らの久しくあこがれていた求道の聖地であった。

池近く富士遠き森の台地——彼らはこの日この地に真教育の精舎の礎をすえた。〈※1〉

4人の一団とは、創立同人の赤井米吉・照井猪一郎・照井げん・山本徳行^{とくこう}で、標木を打ち立てたのは、正確には大正13年3月16日のことであった。創立に向けての高鳴る心と緊張が伝わってくる。明星学園の原風景である。

創立同人のひとり赤井米吉は創立のときの様子を次のように記している。

この日、空はあくまで澄み渡っていた。井の頭台地は霜解けで、道がぬかるんでいた。畑の麦は2、3寸に伸び、標木は麦畑の真中に建てた。この日こそ学園創設の第一歩を踏み出した記念の日であった。それから校舎建築、児童募集の仕事が進められて、5月9日に明星尋常小学校設立認可を与えられ、その15日に開校式を挙げた。その当時ここは人家漸く两三軒、あたりは悉く麦畑であった。開校当初の敷地僅かに千坪、集まった児童は尋1・2・3の3年、3クラス21名であった。

荒野に水は湧きて

砂漠に河も流れん。

やけた沙地は池となりて

うるおいなき地は水の源とかわらん。

とある文の言葉をそのままわれ等の学園に見出すのである。武蔵野の赤土の中に掘った一本の井戸、その水に渴を癒する幾百幾千の児童生徒。たれかこうしたことを夢みえられようか。〈※2〉

〈※1〉 照井猪一郎『呱呱の声』『明星誕生ものがたり』（1994年5月15日復刻発行）、文芸部『明星25周年記念』（1949年11月15日）に初出、『残照 照井猪一郎先生遺稿集』（1968年2月25日）所収

〈※2〉 赤井米吉『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』（1974年11月3日）P.18

こうして麦畑の中に「明星学園建設地」の標木を立てたのであったが、新しい学校の名前はどのように決まったのだろうか。それにはこんな話がある。

学園の名称は初めから同人の間にいろいろと議せられていた。「啓明」「黎明」「三鷹」「井の頭」「桜の丘」なども考えられたが満足されなかった。或る日、敷地を見に行ったら夕暮の井の頭公園の森を逍遙した私はその美しい星の光に驚かされた。何だか初めて星を見る様な心地がした。(その後も感ずることであるがその付近の星の光は他とは違う。実際美しい。)それは所謂「明星」そのものではなかっただろう。然しその時ふとこの言葉が胸に浮んだ。ついに皆の意見も「明星」と決定したのである。幼い子等の心の明星、人類の憧る理想の明星、それを慕って、それをみつめて伸びよう、登ろう、精進しようとの意味であった。(※3)



4人の創立同人
(照井げん、赤井米吉、山本徳行、照井猪一郎)

学校を建設する前年に関東大震災が起こった。そのような混乱期、復興を目指す世相の中で明星学園の建設は進められた。3、4寸に伸びた麦を刈って校舎を建て、グラウンドにしたのだが、若々しい麦の芽を取り除くことの厳粛さを、赤井はのちに最初の卒業生を前にしてこう語った。

4年前のこの頃、私共がここに学園建設の仕事にかかった時にはここは麦畑であった。此頃あちこちの麦畑に見えるような3、4寸の麦がここにも作られていたのであった。私共は校舎を建てるには先ずその麦をとって地均しをしなければならなかった。私は人夫の人々が麦を取除いているのを見て空恐ろしい感に打たれた。一つは百姓の人々がこれ迄に丹精したものをむぎむぎと取り棄てることがその人々に対してまことに済まないことだと考えられたのである。今一つはこの麦が実ればそれで幾人かの生命をつなぐことが出来る。その麦を取り棄てるということの勿体なさであった。昔ある名僧が便所で飯粒を発見して、それを勿体なく思って塵を払って押しいただいて食ったという話もある。かかる貴い食物を私共は取り棄てるのである。私はこれは何か大きな罰が来ないではすまいような気持ちがした。これは非常に大きな収穫をして償をしなければならぬと考えた。人々の食う糧は作れないが、人そのものを造ることに努めねばならぬと考えた。然しそれから後、春来る毎に他の畑には麦が青々と生じ、夏来る毎に黄色く実ったが私共の学園には実りがなかった。私はいつも淋しい気持ちで私共の収穫は何時かと今日の日を待ちに待った。然し終にその日が来た。私の心は今漸く平になった。慶び限りない。然しこの実りは如何であろうか。豊作か不作か。それは全く君達の今後の生活如何にある。どうか大きな実りであって欲しい。(※4)

麦畑は小学校に変わった。「あんなところに学校をつくったって子どもなんか入るものか」と皆からはそう言われた。多難な前途を抱えての第一歩であった。しかし画期的だったのは若き情熱を持った、教師たちがつくった学校だったことである。

〔※3〕 赤井米吉「明星五年」『渾沌』第8巻・第1号(1929年1月22日)P.4

『渾沌』一広島高等師範学校出身のベスタロッcher研究者が中心となってつくった教育誌

〔※4〕 赤井米吉「明星五年」『渾沌』第8巻・第1号(1929年1月22日)P.16

(2) 大正デモクラシーと新教育運動

明星学園は「大正自由教育」ともいわれる新教育運動の中で誕生した。成城小学校を母体として明星学園、玉川学園、和光学園が生まれた。この3校ばかりではなく、時を前後してたくさんの私立小学校が誕生した。明星学園が誕生する背景となった大正時代とはどのような時代であり、当時の教育はどのようなものであったのだろうか。

1) 大正デモクラシー

明治時代の2つの戦争——日清・日露戦争を通じて日本の資本主義は急速に発展した。しかし急速であったがゆえに、日露戦争以後行き詰まりを見せ、不況に陥った。その不況を一気に打開したのが第一次世界大戦であった。

戦場となったヨーロッパ先進国の工業は大打撃を受け、工場は破壊され、あらゆる工業製品が不足した。これを商機としたのが日本とアメリカであった。この時期、アジアの市場にも食い込んで急速に工業化を進めていた日本にとって、まさにビッグチャンスの到来であった。なんでも作れば売れるという特需の中で、日本経済は空前の好景気に沸いたのである。都市には人々が集まり、それらの人々のために新しい住宅がたくさん建てられた。こうした時期に都市の中産階層が幅広く形づくられ、この人々がのちに「大正自由教育」を支えることとなったのである。

第一次世界大戦とその後における国際連盟設立、軍縮へとつづく反戦平和運動の高まり、ロシア革命などに触発されて、日本の政治・文化にも大きな変化が訪れた。ヨーロッパの最新の思想、芸術、文化が新たに紹介され、人々は競ってそれを吸収した。それらを通じて人々は人間の権利、人生の価値観、生き方の追求などを主体的に考えるようになった。新聞や雑誌の発行が盛んになり、ラジオ放送が始まり、映画もつくられた。子どもの世界でも鈴木三重吉が刊行した『赤い鳥』（1918年7月創刊）は大きな役割を果たした。明星学園行進歌を作詞した北原白秋も、文部省唱歌を批判して、新しい内容・形式の童謡を同誌にも数多く発表した。

このような人々の考え方の変化は、政治の世界でも民主主義（デモクラシー）的な要求となって現れた。1916年（大正5）、東京帝国大学教授・吉野作造が「民本主義」を提唱し、普通選挙と政党内閣制を主張、それを受けて国民の間に普通選挙を要求する動きが高まった。こうした時代の風潮が、のちに「大正デモクラシー」と呼ばれるようになったのである。

2) 新教育運動・大正自由教育

1886年（明治19）、それまでの教育令を廃して森有礼^{もりありのり}文部大臣の下に公布された第1次小学校令は、4年後の1890年（明治23）、教育勅語発布と同じころに改められ、第2次小学校令として公布された。

第2次小学校令では小学校の目的を「児童身体の発達に留意して道德教育および国民教育の基礎ならびにその生活に必須なる普通の知識・技能を授くることを以て本旨とする」と第1条に明示している。天皇中心主義、国家主義に基づく国民の育成を目指したものであった。

明治30年代初頭には、日本の近代国家体制を支える根幹として学校制度の一層の整備が必要とされ、1900年（明治33）8月に第3次小学校令が公布されるが、第2次小学校令の第1条は継承された。天皇に忠義を尽くし、国家を愛するという「忠君愛国」のイデオロギーと、父母に孝行、兄弟仲良くというモラルを教えることが教育の目的で、この考え方はその後大正、昭和の時代まで

続いたのである。国定教科書がつくられ、訓練・練習を主体とした画一的な教育、知識注入の教育が行われていた。

しかし一方、既成の価値観にとらわれず自由な発想で政治や文化を動かすという大正デモクラシーの気運の中で、教育の世界でも改革が進められるようになった。すでに欧米では19世紀の終わりころから「新教育運動」(New Education Movement)という動きが起こっていた。ルソー、ペスタロッチー、デューイなどの思想に支えられ、学校教育に支配的であった「画一」「知識注入」ではなく、「子ども中心」「感性」「自学」を尊重する学校が築かれてきた。

遅ればせながら、日本でも民主主義的な潮流に支えられ「新教育」を目指す動きが活発になった。それがのちに「大正自由教育」といわれるもので、その大きなきっかけは1917年(大正6)、澤柳政太郎によって創立された成城小学校であった。この成城小学校に集まった教師たちが新しい学校づくりを始めたのである。明星学園ものちに、この成城小学校を「親」として生まれる。

大正デモクラシーの動きの中で教育現場から始まった学校改革について、もう少し見ていくことにする。明星学園誕生への道すがらが明らかになるからである。

学校改革の先駆けとなった学校には、兵庫県明石女子師範付属小学校、日本済美学校、成蹊実務学校、帝国小学校などがある。ここでは、そのいくつかにふれたい。

・明石女子師範付属小学校

及川平治は1907年(明治40)、33歳の若さで兵庫県の明石女子師範付属小学校の主事(教頭)になった。そこで13人の「劣等児」と言われた子に勉強を教え、ある確信を得た。それは子どもが悪いのではなく、間違った教育の方法にこそ問題があるということだった。学級編成、進級制度、教育課程を子どもに合わせることで救済できると考えた。のちに著した『分団式動的教育法』(1912年)はベストセラーとなり、学校は参観者であふれた。この教育法は子どもの生活経験・直接体験を基にして、子どもの自主的な活動を促すことを通して、知識や技術を習得させ、人格を形成させていくという方法であった。「分団式」というのはグループ学習に個別学習を加えたもので、「可動的分団式」と呼び、一斉授業を否定するものではなかった。及川は「万年主事」として30年も仕事を続け、その間自分一人で改革をするのではなく、多くの教育仲間と研究実践を積んだのであった。

・私立成蹊実務学校

1906年(明治39)、中村春二^{はるじ}は岩崎小弥太・今村繁三とともに池袋に私立成蹊実務学校の設立を志し、1912年(明治45)完成した。教師と子どもは「ともに学び、ともに遊ぶもの」とし、「ともに修業し、ともに進歩しよう」と呼びかけた。教科教育は詰め込みや暗記主義を排し、「自研自修」を強調した。曹洞宗に基づく^{きょうねんほう}「凝念法」と名付ける独特の訓育法を採用した。また労働を通しての教育も重視した。

こうした新教育の流れは澤柳政太郎を中心とする成城小学校に引き継がれていく。

明星学園誕生の源となった成城小学校について述べるまえに、同時代に生まれた2つの小学校のことについて触れておきたい。明星の創立同人、赤井米吉もかかわった「教育の世紀社」、その考えのもとに生まれた「池袋児童の村小学校」と「自由学園」についてである。

・池袋児童の村小学校

1924年（大正13）、池袋に野口援太郎の私邸を開放し「池袋児童の村小学校」が創立された。教育の世紀社という民間教育団体を母体にできた小学校である。初代の主事である志垣寛は次のように述べている。

人間の活動を機械化しようとする学校、どこまでも自由で流転伸長して止まぬ人間の生命を切って揃えたように鋳型にはめようとする教育、そんな場所、そんな方法、そんな意見から教育を解放したい。

児童の生命を培い、彼等の感官を練磨し、肉体の十二分なる発育を助長する陽光と土と新鮮なる大気とをほしいまにやる場所、春光和風、そぞろに人の心をやわらげる植物の色彩に富める自然のふところ、そこに、われらの教育所を建設したい。

教師対生徒という観念に囚わるる処なく、教科目や教授時や、はては教授法などというものに縛らることなく、児童らしき生活を生活せしむる場所としての新しい学校、われらの共同生活の場所であり、われらの研究所であり、われらの労働所であり、われらの娯楽所であり、われらの競技所であり、然してまたわれらの安息所たるべき楽しい場所、即ち子供たちの生活の場所、それがわが児童の村である。(※5)

・自由学園

自由学園はキリスト者であった羽仁もと子・吉^{よしかず}一夫妻によって1921年（大正10）に創立された。羽仁もと子は「各自、自主独立の人格を与えられている個人がそれぞれのかかわりによって、他の個人の存在および発達を助けまた助けられて、そこにおのずから大小さまざまの社会をつくり出しつつ、全人類社会を支持し発達させていく、その姿が自然のものだと思っているのです」という信念のもと、自労自活の学園づくりを進めた。「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」を標語として掲げ、生活の中でこそ教育が行われ、その生活を通して教育された人間が社会の改造に向かうことを期待したのであった。

（3）成城小学校の教育

1) 澤柳政太郎と成城小学校

明星学園は成城小学校で出会った4人の教師たちによって創立された。その母体となった成城小学校とはどのような学校だったのであろうか。

1917年（大正6）、成城小学校は澤柳政太郎初代校長を中心に創立された。これまでの日本の教育の在り方を改革する教育の理想を求めたものであった。

創立者澤柳政太郎は信州松本の生まれ、東京帝国大学を出てから文部省に入り、文部次官、東北帝大総長、京都帝大総長を歴任、教育者でもあり教育行政家でもあった。澤柳政太郎は京都帝大辞任の後に、東京牛込区（今の新宿区）の成城中学校に校長として迎えられた。当時の成城は陸軍士官学校の予備校のような存在であった。以前から「教育のものは小学校



澤柳政太郎先生

〈※5〉 志垣寛『池袋児童の村小学校要覧』（1924年）、中野光『改訂増補版大正デモクラシーと教育』（新評論、1990年12月10日）P.117

にあり」と考えていた澤柳は中学校の中に小学校を併設した。それが成城小学校であった（現在の成城学園は明星学園が創立した1年後に世田谷につくられた）。成城小学校の設立趣意書には次のように述べられている。

我が国の小学校が明治維新後、半世紀間に為した進歩は実に嘆賞に値しますが、同時に又、此の50年の歳月によって今や因習固定の殻が出来、教育者は煩瑣な形式に囚はれかけました。外観の完備に近い程の進歩の裏には、動もすれば、教育の根本精神を遺れて形式化せんとする弊害を醸しつつあるやうに思はれます。我が国教育界には今や所謂、物極ま^{いわゆる}って変じ、変じて通^いずべき時節が到来したのではありませんまいか。されば今こそはこの固まりかけた形式の殻を打碎いて教育の生き生きとした精神から児童を教養すべき時であらふと思ひます。後略…(※6)

澤柳は形式主義、画一教育のカラをうちくだいて、生き生きとした精神で児童を教育すべきと主張したのである。そして教育改革を進める4つの柱を掲げた。これはその後誕生した明星学園、玉川学園、和光学園に引き継がれていくベースになる目標であった。

1. 個性尊重の教育 附、能率の高い教育 3. 心情の教育 附、鑑賞の教育
2. 自然に親しむ教育 附、剛健不撓^{ふとう}の教育 4. 科学的研究を基とする教育

「個性尊重の教育」は画一主義教育を批判する核心的な考え方である。子ども一人ひとりは無限にその性質に差異がある。相違ある児童に全一様の教育を強制することはできない。子どもの能力に応じた少人数教育を目指すべきである。

「自然に親しむ教育」は、大都市の生活環境は子どもをいたずらに早熟にさせ、神経過敏にさせていると分析。自然の中で、自然相手の教育を目指そうとするもので、具体的には「自然科」の教育をカリキュラムに加えた。

「心情の教育」は二つのことを内容としていた。一つは教師と子どもとの間の人格的接触および感化を重視することであり、もう一つは芸術教育の尊重であった。

これらは「新教育」に共通する特徴であったが、第4の柱「科学的研究を基とする教育」は成城小学校の大きな特色であった。1年ごとに研究を積み重ね、その研究をもって教育の改善を図っていくものとする。学者と実践家の溝を埋め、理論と実践を一致させるような研究学校を目指した。

私立学校の教師たちの心のありよう、いわば澤柳精神というものを、教育研究家の中野光氏^{あきら}は次のように語っている。

もっとも大事なこととして、澤柳がねがったことがあります。それは私立学校の教師は、どういう立場におかれても「教育」と「研究」をとおして子どもと共に成長していくべきだということでした。

ですから、私立学校は閉鎖的であってはいけない。ひとりよがりであってはいけない。実践と研究をとおして公教育全体を改革していく力を持たないといけない。したがって教員は教師であると同時に研究者でなければならない。そこに教師としての誇りと喜びを感じとるべきだ。これが澤柳精神でした。(※7)

〈※6〉 成城学園『成城学園六十年』(1977年) P.13～14

〈※7〉 中野光『大正自由教育研究の軌跡』(学文社、2011年1月20日) P.149～150

のちに赤井米吉が述べた「社会立の学校を目指す」という言葉に通ずる精神である。中野氏が赤井を「澤柳精神の継承者」と呼ぶ所以であった。こうして成城小学校は教育研究を実証的に行う実験学校、研究学校として誕生した。そして日本の教育改造運動を推進する存在として、日本の教育界に大きな影響を与えていくのである。

2) 成城小学校での小原国芳

成城小学校創立2年目に主事（教頭）として着任した小原国芳は、成城小学校の中心人物として研究実践を推進した。小原は1887年（明治20）生まれ、明星学園の創立同人赤井・照井と同年代であった。故郷鹿児島では赤貧の子ども時代を過ごし、電気技師養成学校で勉強、電信局で働いた。何とかして勉強したいと鹿児島師範学校に入学、さらに広島高等師範学校に進み、赤井米吉と運命的な出会いをはたす。二人はよき友となり、キリスト教青年団体「光塩会」で活動を共にした。

小原の同級生に上田八一郎がいた。後に上田は赤井の誘いを受けて明星学園の教育に参画した。

小原は広島高師卒業後、香川師範に2年勤め、さらに京都帝国大学の哲学科で学び、1918年（大正7）、広島高等師範附属小学校の教務主任（主席訓導）となった。1919年（大正8）、校長の命により東京への出張が決まった小原は、京都帝大で指導を受けた小西重直の紹介を受け、上京後初めて澤柳政太郎と会った。当時澤柳53歳、小原31歳であった。

澤柳は小原を成城小学校の主事として迎え入れた。主事就任とともに小原は精力的に仕事をし、成城小学校は活気づいた。1920年（大正9）には研究発表のための機関誌『教育問題研究』を発刊し、講演、著述、学校内改革に邁進、成城の名声を広めた。小原は『教育問題研究』誌上に「教育改造論」を連載し、講演では「全人教育論」を語った。彼は軍人を育成するような学風の成城中学校ではなく、成城第2中学構想を持っていた。そして澤柳校長のヨーロッパ教育視察の折、校長不在のまま第2中学を創ったという実力者であった。

（4）明星学園創立へのあゆみ

1) 成城小学校での出会い

赤井米吉は1922年（大正11）5月、成城小学校の主事であった小原国芳の誘いを受けて、秋田師範付属小学校から成城小学校に幹事として赴任した。小原と赤井は広島高等師範学校の1学年違いで、共に学んだ間柄であった。二人は互いに惹かれあうものがあった。小原が成城小学校で創刊した研究誌『教育問題研究』に赤井はすでに投稿していた。成城小学校で二人はよき同志でありよきライバルでもあった。赤井は小原とともに学校運営・管理においても指導的役割を担っていった。赤井は秋田師範付属小学校で一緒に教鞭をとった照井猪一郎、愛媛師範時代の教え子であった山本徳行を成城小学校に呼び、教育の充実を図った。この二人はやがて赤井と共に明星学園を創っていくことになる。

2) 両雄並び立たず

赤井は学校経営にも有能さを発揮したが、教育研究に熱心で、同僚の教育研究・教育方法にも厳しい評価を加えていった。赤井が特に強調したことは、教科書や教材を自分たちでつくらなけれ

ばならないということだった。『教育問題研究』誌に「教科書民間刊行論」を書き、「いかに」教えるかだけでなく「何を」教えるかをともに研究対象にしようという主張であった。赤井はまた、小原が対外的な講演にしばしば出かけ、学校での教育活動をおろそかにすることに猛反発した。やがて成城小学校では教師たちが「小原派」「赤井派」の二派に分かれ、対立は表面化した。

そのころのことを、池袋児童の村小学校の初代主事であり赤井の盟友でもあった志垣寛が、著書『教育太平記』に記している。

赤井は石川の生れ、広島を出て愛媛師範や武生^{たけふ}中学を経、秋田師範の主事になった。在学中は名物男で落語の名人だった。何かあるとすぐ一席やる。「ええ相変らずお笑いを一席申し上げましておあとは……」というわけ。31室^{たむろ}に屯して四六時中煙草ばかり吹かしているのも三亭煙突の称号を奉られていた。秋田に行って3か月目に学校劇をやるやらせぬで校長の柏木三郎と正面衝突、こんなやばな校長と仕事ができるかッと辞表を叩きつけ、こんどは止める止めさせんで4か月もごたごた。4か月目にやっと勝って（まけてたかも知れない）秋田をすてた。合計7か月の秋田生活だった。それから小原に招かれて成城入り。もとより一介の訓導のつもりできた。ところが小原は幹事という肩書つきの辞令をくれた。

「何をやるんだい」

「まァ会計のことなどもやって貰いたいが」というわけ。小原にしてみれば自分より先輩である赤井だ。平ではすまんと思ったろう。

ところが赤井は仕事ずきでノラリクマリとしてはいられない性。グングン仕事をするので、何だか副主事みたいなカッコウになってしまった。小原には直言するし、なまける訓導にはピシピシ叱る。まるで沢柳が小原を叱るみたい。

そのころ小原は奥野や田中を外遊させたりしたが、自分も一度外遊したいと思っていた。その準備もあり、著述に忙しく自然自宅にこもって学校を留守にすることも多かった。赤井がいるからとの安心感もあったろう。そうすると赤井の勢力はますます伸びる。赤井に叱られた訓導は小原に訴える。小原は赤井と正面から議論するのは嫌いだ。どだい赤井と小原は性が合わない。赤井は沢柳に近い。二人は火と水だ。くちさがないジャーナリストは小原をルソーとし赤井をカントだといった。気の弱い小原は赤井と向き合っていると気が重くなる。何が何でもこの機会に外遊して息抜きがしたくなった。小原は本腰で外遊準備に没頭した。(※8)

「小原派」は赤井の排斥運動をするに至った。主に赤井が経理に独裁的であったこと、子どもたちに厳しすぎることで、父母に横柄であるという批判だった。赤井は反論した。経理の乱脈をただす必要があったこと、教師の研究が思いつきの発表主義におちいっていること、児童の生活面である程度の規則の必要性を痛感したこと、父母の機嫌取りが度を越していることなどを挙げた。さらに学校の規模をめぐる考え方の違いもあった。小原は広大な敷地を用意し、農園や牧場を含む大きなスケールでの学校を夢見ていたのに対し、赤井は小さな学校で教育の成果を上げることを目指していた。職員会議が持たれた。沢柳校長の「双方で言い分があるのでお互いに話し合って誤解を解いてもらいたい」という要望もむなしく、一緒にやっていくことの困難さを痛感するものとなった。学校内外で「両雄並び立たず」と言われた。赤井は別の学校を創らねばと決意し、照井夫妻、山本とともに新しい学校づくりへと動き出した。赤井が『沢柳研究』第5号にこの頃のいきさつを記している。

(※8) 志垣寛『教育太平記 教育興亡五十年史』（洋々社、1956年）P.84

12年になると小原君はいよいよ外遊準備がいそがしそうで、ほとんど出勤しなかったのも、わたしの担任の桜組は小野誠悟君にゆずって、わたしは主事代理のようになった。…中略…ある日（澤柳）先生から「今晚おそく宅へ来るように」とのおことづけがあった。（2月21、22日ころと思う）…中略…先生の話によると、数日前に成城の奥野、谷、田中、上里、岸、田中宣、吉田、（もう一人だれだったか）の8人が来て、赤井の独裁的であること、職員に対してエコヒイキのあること、子供たちに厳格すぎること、母さま方に横柄であること、結城・照井などが赤井派をつくって、古いものを追払うとしている、などを列挙して、赤井を出してくれといった、ということをお話され、その説明を求められた。

わたしは成城の経理、教育問題研究の経理の乱脈を直すには、暫く独裁的、厳密すぎるようにしなければならなかったこと、職員の研究の思いつき、デッチアゲ、発表主義であることを制裁するには、従来の発表に対して厳しい批判を加えねばならなかったこと、児童の自由が学習の自習をこえて、生活全面的の放肆^{ほうし}になっているので、ある程度の規則の必要性を痛感したこと、月謝の高いこと、後援会を盛んにする必要から父母のきげん取りが度をこしていること、などをあげ、この人々の非難は全面的にみとめるが、少なくともこれまではこういう態度でいなければならなかったことを弁明した。

澤柳先生はほとんど全部を認容して下さって、25日（月曜日）に職員会を開いてよく話合うことにして、12時近くお宅を出た。…中略…翌25日月曜日午後3時すぎから職員会が開かれ、澤柳先生、小原君も出席され、澤柳先生から8人の諸君から赤井非難のあったこと、赤井には赤井のいい分があるので、これから互に話し合い、誤解を解き、よい交りに戻してもらいたいといわれた。（※9）

こうして開かれた職員会は、4時間に及ぶものだった。その場では「お互いの心はわかった」ということで散会したが、その後小原から届いた手紙で、赤井は彼と一緒に成城で仕事をするのは難しいと判断、新しい学校設立に向けて、資金援助を請うため茶郷^{さごう}氏のもとに向かった。なお、新しい学校の顧問は、澤柳氏へお願いし、承諾を得た。

3) 創立への第一歩

新しい学校づくりに取り組むことになった創立同人たちは希望に燃えていた。創立同人は赤井米吉、照井猪一郎、照井げん、山本徳行の4人だった。

学校建設のために資金を貯めていたわけではなかったのも、どうしても経済的援助が必要だった。赤井は国分寺の茶郷^{さごう}基氏を訪ね、新しい学校の設立について援助を願い出た。

茶郷氏は朝鮮で鉱山を経営する実業家で、成城小学校の保護者であり、一人娘の担任は照井猪一郎だった。茶郷氏は赤井らの申し出を快諾した。土地代金ばかりでなく建築資金、教員の給与の分も約束してくれた。

赤井たちの学校建設のための土地探しは本格化していった。いくつかの土地を下見し、疲れ果ててたどり着いたのが「井の頭」の地であった。池があり林があり自然豊かな土地はみんなの夢を駆り立てた。そしてさっそく土地の所有者である大盛寺の許可を得たのであった。

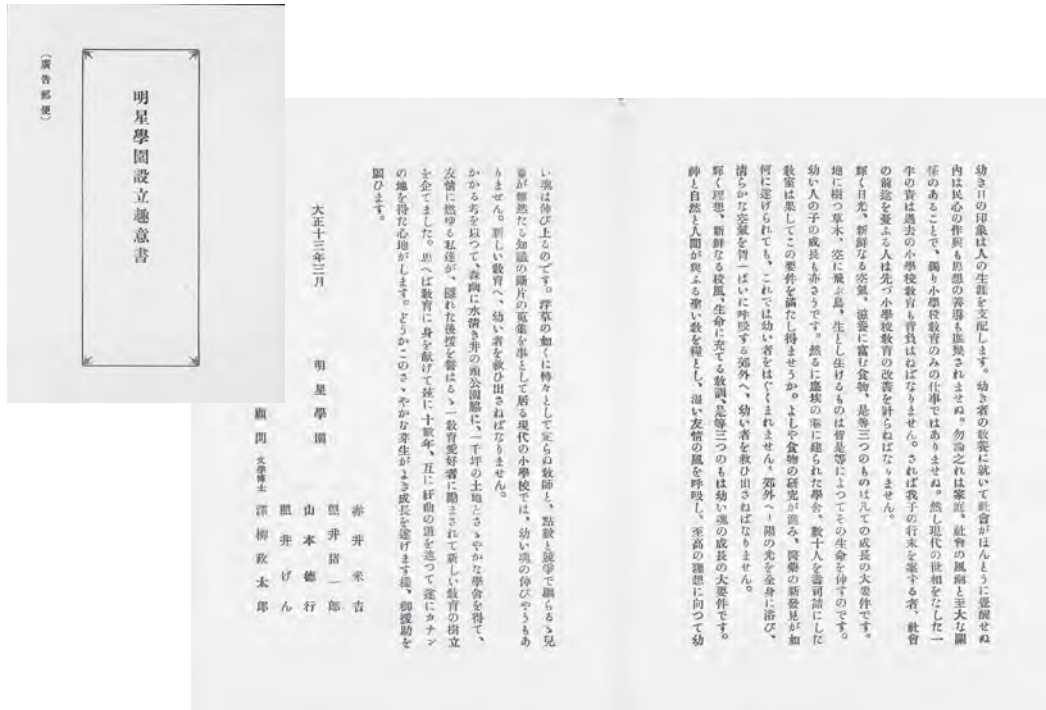
1924年（大正13）3月16日、井の頭の照井家（照井猪一郎・げん夫妻の家）に4人が集まり、麦畑の中に「明星学園建設地」の標木を立てた。3月の明るい穏やかな午後早い時刻であった。ここに新しい学校建設の第一歩が記されたのであった。

〔※9〕 赤井米吉「沢柳政太郎先生」『沢柳研究』第5号（1971年9月10日）P.8、14、15

2 学園の誕生

(1) 明星学園設立趣意書

1924年（大正13）3月24日、児童募集のちらしに記した設立趣意書は次のとおりである。



児童募集に関しては次のように記した。

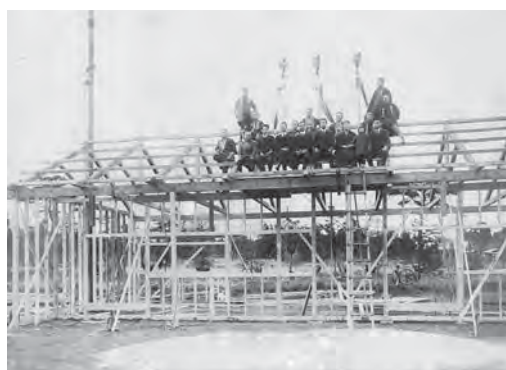
- 一、名称 明星学園（尋常小学校）
- 一、位置 井の頭公園弁天黒門前（吉祥寺駅より7町）
- 一、募集人員及び学年 尋1, 2, 3年 各級男15 女15宛
- 一、開校期日 4月20日の予定
- 一、授業料 6円
- 一、申込所 市外千駄ヶ谷911赤井方
毎日午後1時より4時迄の間にお子様同道で御下下さい。

創立同人はこのちらしを8,000枚作り、中央線沿線に配布した。

(2) 開校の日

設立趣意書には「4月20日開校」と記したが、3月下旬のそのとき、校舎建築はまだ始まってもいなかった。慌しかった開校準備の様子を、のちに創立者たちがそれぞれに述懐している。

開校予定は4月20日としたものの実は校舎の建築契約もこの日漸く出来たのであった。学校とはただ一本の立れだけであった。思えば無謀なことであった。建築屋にはどうか1か月間に出来上る様にと念を押したが、それも後から考えれば無理な注文であった。が兎に角にこうして児童をまつことになった。…中略…困ったことには校舎の建築は一向に捗らない。毎日車に1台位づつしか材木が運ばれなかった。大工小屋が出来て釘の響きだしたのは4月21日であった。これでは魔法を用いない限りは4月中に出来よう筈がない。止むを得ず15日開校ということにして、5月1日に父兄を招集してその諒解を求めた。その頃のもどかしさは筆につくされない。が兎に角に5月5日には漸く上棟式、14日はコケラの屋根だけ出来た。勿論床も張れず腰板も出来ておらんぬ。然しもはやこれ以上に延期は許されない。その翌日を以て開校式をあげることにした。〈※10〉



上棟式 5・6年生の教室増築のとき（1926年）

開校式当日、校舎は仕上がっていませんとも森の学校という主張で盛り上がりたそうと思っていた創立同人。しかし開校の日はあいにくの雨であった。それでも児童父母は集まってくれた。1年7人、2年5人、3年9人、総勢21人、教師4人の学校はこうして始まった。開校の日には、ドルトン・プランの提唱者、ヘレン・パーカー・スト氏にも来てもらう予定であったが、雨が激しく断りを入れた。澤柳政太郎氏には来校していただいた。

当時の様子を、同人たちは以下のように記している。

5月15日明星学園の開校の日は、朝から荒天だった。パーカー・ストは全国を巡って、その2、3日前に帰京していたので、パーカー・ストと先生と2人に開校式に立会ってもらうことにしていたが、とてもパーカー・ストを招くことはできない天気だったので、それはことわって、澤柳先生だけをお迎えにいった。

吉祥寺駅から学園まで歩いてもらったのは、ほんとうに穴があったら入りたいくらいであった。先生はきれいな赤皮のくつをはいておられた。そのころは赤皮のくつは第一流の人々でなければはかないものだった。それも雨の日には黒くつにかえたものである。その赤ぐつで、いなか道を15分間も、雨の中を歩いていただいたのは、ほんとうに恐縮なことであった。

校舎はまだ半たちで、雨がふきこんだ。入学生は1・2・3年で21人、その父母、まことに淋しい入学式だったが、澤柳先生はわたしらをほめ、必ず立派な学園になると思うと激励して下さった。（赤井米吉）〈※11〉

開校の日はすがすがしい若葉の5月15日、天気よかったら武蔵野の空気を吸っただけでもどれくらいいい印象を残したかわからないのに、これはまたどうしたものか大変な荒天、印象の点からだけ考えるとこの方はむしろ強かったでしょう。朝から冷たい冷たい雨が止まずに降りつづけて居る。今のようにより便利な自動車があるでもなく、淋しい公園の道を御臨席の澤柳先生をはじめ皆歩いてお出でになったものです。然も校舎はやっと半出来で、周囲には窓一つなく、床板も仮張りのがたがた、ほんとに屋根があるというに過ぎなかったのです。仕方がなしにあたり幕など借りてまわしたが、それでも雨は

〈※10〉 赤井米吉「明星五年」『渾沌』第8巻・第1号（1929年1月22日）P.5～6

〈※11〉 赤井米吉「沢柳政太郎先生」『沢柳研究』第5号（1971年9月10日）P.23

遠慮なく吹き込んで来るので、澤柳先生も、「これではあんまりひどいなア」とおっしゃいましたが、ほんとにお気の毒で皆に済まないという気持ちでいっぱいでした。せめて今日だけでも朗らかな天気を恵んでくれたらと、薄暗い空がうらめしくてなりません。それから2、3年学園に何か催し事のあつた度に雨が降ったので、明星と雨とはつきもののように言われたものです。

学園の誕生は今では故人となられた茶郷氏の後援に依って案外楽に出来たが、さてこれを哺育育てて行く苦心はまた決して容易なものではなかった。その意味に於て開校の日の嵐は、吾々にそうした暗示と覚悟を与え、兎角誇らかに勝つ人間^がの心に強い鞭をあて、謙譲と反省と同情とを教えてくれたのかもしれない。(照井げん)〈※12〉

大正13年5月15日、明星学園開校の式典は入学式を含めて行われた。あいにくの雨を半ぶきの屋根はしのぎかねて、式壇はぬれるにまかされた。参列の子どもたちの、親たちの、来賓の頭から頬をつたって雫は床をぬらした。でもみんなの顔はかがやきにあふれていた。

* * * *

校地は緑にかこまれた1,000坪の畑地、校舎といってもそれは109坪のほんのバラック普請、集まった児童は1年2年3年の3学級あわせて男女21名——これは明星学園発祥の種の起源であった。(照井猪一郎)〈※13〉

次の日は前日と打って変わっての晴天。井の頭の新緑は洗われた鮮やかさに輝いた。保護者はこの日も子どもに付き添って来校してくれた。前日できなかった記念撮影を、校庭で1枚、森の中で1枚撮った。記念植樹も行った。植樹の木は寿命の長い公孫樹(イチヨウの木)とし、入口の左右に教師たちが1本、児童が1本植えた。

校舎はまだ出来なかった。然しそれも考えようによっては却ってよかった。ここは児童の家であった。教師ばかりで考えてはいけない。「これから皆で考えて立派な学校を建てよう」とも云った。…中略…校舎の方は大工を急がせ^なが、私達は毎日児童と共に校庭の手入をした。自然科の第一歩はこうして自分たちの家の営みとなったのは意味あることであった。校舎の日に日に完成に近づくのを見るのも心地よかった。正面に土手も出来た。周囲に大きな樹木も植えられた。しだいに学校らしいものが出来て来た。児童も続いて入って来た。私達の明るい心地がずっと続いた。〈※14〉



開校記念写真(1924年5月16日)

(3)「社会立の学校」をめざして

6月21日に校舎は完成した。学園の敷地は1,000坪、落成した校舎は109坪、3間に4間の教室

〈※12〉 照井げん「追憶二三」小学部教育月報『ほしかげ』第7号(1934年5月15日)

〈※13〉 照井猪一郎「呱呱の声」『明星誕生ものがたり』(1994年5月15日復刻発行)

文芸部『明星25周年記念』(1949年11月15日)に初出

〈※14〉 赤井米吉「明星五年」『渾沌』第8巻・第1号(1929年1月22日)P.6

5つ、事務室、小使室、物置、便所で、その工費は1万2千円、バラックとはいえ心地よい建物であった。南にたたきの廊下を置き、教室からすぐに庭に降りられる構造だった。児童をできるだけ外に出させるためであった。

当日、児童30人と父母その知己の人々とともに開校披露式をあげた。梅雨時には珍しい晴天の日であった。人々は口々に「おめでとう」と言い合った。来校者は70名。赤井米吉が学校の教育方針を述べた後、澤柳氏の講演、栃内海軍大将、福田北多摩郡部長、自由学園の羽仁もと子女史、成蹊小学校の小瀬松太郎氏などの来賓祝辞があり、父兄総代祝辞は中川景輝氏が行った。児童も「お星さま」を斉唱した。

この開校披露式で赤井校長が語ったことは、私立学校のあり方として画期的なことであった。

学園はわたくしが設立者ということになっています。しかしこれは法律上の手続でありまして、わたくし一人の設立したものではありません。照井夫妻、山本君の4人が一心同体で経営して行くのであります。がこの4人でも経営できません。この4人はここで仕事をするもので、この経営はわたくし共の陰にかくれて絶大な援助をして下さる人によってなされているのであります。この人は名を出すことを好まれませんので、暫くかくれた人としておかねばなりません。むろんその人も自分の学園を作るつもりで助けて下さっているではありません。この国、この社会の一教育機関を作るつもりで居られるのであります。これは全くこの社会のものであります。この教育機関を利用してわが子を教育しようと思われる方は、何人でもこれを利用することができます。

わたくし共には一個の教育上の理想があります。この理想を実現するために新しい学園を建てるが必要であると思って、ここに建てたのであります。しかしわたくし共の理想はわたくし共の私かな（編者注：「私的な」の意）考えではありません。わたくし共はこの理想はわが国社会の理想であると思っています。この理想によってわが国社会の必要とする人物を養成しようと思うのであります。

かく経営においても、教育においても、ここはわれわれのわが優勝手をするところではなく、わが国社会の一教育機関で、わたくし共は暫くここに働くものであります。だから、「私立」といわれますが——むろん「公立」ではありません——いわば「社会立」であります……この意味において、御来会の各位に将来この学園の成長発達に対して深い御関心を持たれんことを希うのは、敢てわたくし共への御援助を希う私的な希いではなく、わが国社会の発展を助ける「公」の義務であることを訴えたいのであります。（※15）

私学ではあるが社会を視野に入れて、研究の成果を社会に返し、社会を変えていくのだという決意と、「社会立学校をめざす」という創立者のはっきりした意志が示されていた。事実、明星学園の教育研究は公的教育に大きな影響を与えるものとなっていったのである。

（4）建学の精神

明星学園は4人の教師によって創立された。4人を、そして初期の明星学園を支えていた教育理念とはどのようなものであったのか。照井猪一郎の「明星誕生ものがたり」を中心に記述する。

めまぐるしい新教育の花園から、この草深いむさし野にわけ入って来た私たちのあの日の姿を人は何と見たであろう。

「あんなところに学校をつくったって子どもなんか入るものか」。親しい友だちまでがそういつてとめ

〈※15〉 赤井米吉「お礼に代えて」『明星学園 PTA 会報』30 周年記念号（1954 年 6 月）P.2

た。電車は東京から30分おき、駅から徒歩20分、お天気でも霜だけ道では靴を泥にすいとられる井之頭でもあった。

しかし、子どもと学び、子どもと生きる私たちには、そこにいささかの不安もなかった。

個性尊重——自主自立——自由平等

ただそれだけが私たちの上に輝く教育の灯火^{ともしび}であった。

ただそれだけが明星教育のゆるがぬ基本理念であった。

その日から学習も訓練もその他の一切の教育活動もこの根源からこんこんと流れ、うるおい、しみわたって行くべきであった。

森のひとつ屋はせまかったが、子どもたちの教育の場は広がった。とざさぬ窓から子どもたちは無限に解放さるべき教育の約束だからである。

学校と家庭と社会——それは子どもたちの生活環境であった。両親と先生とちまたの人たち——それは彼らの指導体制であった。

子どもたちはつねにこの三次元の中に学び育てばよいのであった。〈※16〉

ここで照井が述べた明星学園の教育理念、「個性尊重——自主自立——自由平等」、この三つは以来脈々と引き継がれ、今日に至っている。

「個性尊重の教育」

子どもたちはそれぞれの個性に生きている。個性が理由なく傷つけられたり歪められたりしたのでは正しい教育はできない。教育の原則はまずこの個性を十分に伸ばすことで、ひとりひとりの個性に即してきめ細やかな教育の方法が工夫されねばならない。ひとりひとりの個性に合わせて、伸ばすべき長所を伸ばし、補うべきことを支援していく。

「自主自立のひとたらしめる教育」

子どもの自主性を重んじ、自立的な態度を身に着けるためには、学び方も主体的であるべきである。自信に満ちた生活は自主性によって支えられる。創意、発見のある学習態度はそれを促進させる。明星で保障される自由は勝手気ままにふるまうことなく、自己の確立に向かった自由である。

「自由と平等の教育」

人は自由であり平等でなければならないということは、子どもたちの上にも無条件で当てはまる。子どもたち同士が平等であり、子どもと教師が平等であるように、教師同士も平等なのである。何人も「強制」による束縛は受けない。自分が自由であるということは、他人の自由をも同等に尊重されねばならないことである。

〈※16〉 照井猪一郎「わが道をあゆむ」『明星誕生ものがたり』（1994年5月15日復刻発行）文芸部『明星25周年記念』（1949年11月15日）P.7に初出

3 創立者と後援者

(1) 4人の創立同人

■赤井米吉（あかい よねきち）

赤井米吉は1887年（明治20）6月1日、石川県石川郡野村（現金沢市）に生まれた。生家は山本、後年赤井家を継ぐ^{（※17）}。

少年期に金沢市川上新町のメソジスト教会の日曜学校に通い、15歳の時洗礼を受ける。

1902年（明治35）、15歳で石川県尋常師範学校乙種講習科を修了すると11月、石川県犀川村駒埴尋常小学校二又分教場の準教員として赴任する。赤井の教員としての出発点である。翌年3月、この準教員生活に別れを告げ、石川師範に入学する。師範在学中、内村鑑三・島崎藤村に書を送る。藤村からは丁寧な返事をもらい文学を志すきっかけとなる。1907年、師範卒業に際し赤井は将来の希望について「私立学校の設立」と書き、高師の英文科入学を希望したが受験の結果は不合格、石川郡金石尋常高等小学校に赴任することとなる（20歳）。赤井学級はきわめて活気に満ちたクラスであったが、この異色教師に対し町長をはじめ町の有力者は彼を白眼視、ただここでの教員生活が1年だったこともあり、問題が表面化することはなかった。また、のちに赤井夫人となる野里つるは、当時の高等4年女児組に在籍していた。

1908年広島高等師範学校予科に入学、多くの師友に恵まれる。小原国芳との出会いもここにあった。英文学の研究にも力を入れ、アーヴィング、T.S.エリオットの著作のいくつかを全訳し、バルザック、ツルゲーネフ、トルストイの英訳本を読んだ。また、英語劇に力を入れ、講談部長への就任、キリスト教青年団体「光塩会」への加入など、その活動も多彩で精力的であった。

1910年、本科2年の夏休みには、山口県秋吉台に本間俊平を訪ね、1か月滞在し、労働と信仰の鍛練と教えを受けた。そんな中のひとこまである。——ある朝、赤井を含む5～6人の学生が自動的に礼拝をしていた。ひょっこり顔を出した先生は礼拝していた学生に対し、「なに？ 神さまあの人たちは寝ていますが、わたしは起きています。わたしは善人です、アーメンか。馬鹿やろう！ ……何故友達を起こさないのか」と大雷を落とし、あわてて起きたほかの学生には「しっかりやらねば駄目だぞ」と言われただけだったという。納得のできなかった赤井はこのことについて本間に質問した。その時のことを、のちに赤井は次のように書いている。

その晩、庭で涼んでおられる先生に、このことを聞くと、「学校ではよい子をほめて、悪い子を叱る。それがいけないのだ。悪い子がおるといのは、善い子が本当に善い子でないからだ。自分の友だちが悪いことをするのを黙って見ているのは、自分もなかば悪事の手伝いをしているのだ。本当に友情があるならば、なぐられたって、友人の悪をとめねばならぬ」といわれた。先生が非行少年に同情されたり、小菅の刑務所では囚人に、自分の不親切をわびたりされたのは、この精神である。「世の罪を負う」ということを実際に感じ、なされたのである。^{（※18）}



赤井米吉

〈※17〉 1908年（明治41）8月、西田幾多郎の仲介により、赤井家の養子となった。

〈※18〉 月刊『全人』（玉川大学出版部、1963年10月）

赤井はここで「学校の先生でおまんまを食って、文学創作をやろう」という二足のわらじの生活を夢見ていたことに厳しい自己批判を加え、教師としての生活に「身も心も」統一しようと決意する。

広島高師を卒業した赤井は1912年（大正1）、25歳で野里つると結婚。愛媛師範学校に赴任する。校長山路一遊から深い感化を受け、教育問題を語り、ロックの『教育論』、ルソーの『エミール』、ペスタロッチーの『ゲルトルート』などの古典に触れた。後に明星学園創立の同人となった山本徳行は、この時代の教え子である。

1916年、福井県立小浜水産学校教諭兼舎監に転任。小浜という町は漁村特有の漁と酒の雰囲気^{いちゆう}に満ちていた。学校は春先、鰯の時期になると、あたかも鰯屋のようにあわただしくなり、学校生活^{いしゆう}が労働を中心に展開していた。漁師気質で気の荒い生徒も実習に出たときはまことに生き生きと活躍していた。教師赤井は、そういう労働の事実と教科指導を結びつけた場合、生徒の眼が授業中に生き生きとしてくることを知った。

1919年、福井県立武生中学校教諭に転任。校長は教育に対する情熱を持たない小人物であり、生徒と教師集団の関係もまるで仇同士^{たけふ}のようだったという。教科書もいかにも味気なく、このとき赤井は「出口のない袋小路」の中で、教師の頹廃と形式主義教育に対する反発を感じ、新たな天地を求めていたようだ。

この時期、大正デモクラシーの思潮は教育界にもしだいに顕著になり、1917年成城小学校設立、翌18年には鈴木三重吉が『赤い鳥』を創刊する。小原国芳が成城の主事となり、『教育問題研究』を出すと、赤井も投稿の機会を与えられた。その一方でスペンサーの『教育論』の翻訳を進めていた赤井は澤柳政太郎、小原国芳から成城へ招かれたが、秋田師範の付属小学校主事としての招きもあり、澤柳と相談の結果、1921年9月、ひとまず秋田へ赴くことになった。

秋田師範では照井猪一郎との出会いがあったが、校長の官僚的態度に反発を感じ、半年で辞任、1922年春、成城小学校に幹事として着任すると、愛媛師範時代の教え子だった山本徳行、秋田師範付属小の照井猪一郎というすぐれた教師を成城に招く。6月、澤柳政太郎・小西重直・長田新の3氏が欧米教育視察より帰国。澤柳や長田はドルトン・プランに注目、赤井にこれを紹介することを勧めた。彼はE. デューイ及びH. パーカーの著作を、それぞれ『児童大学の実際』『児童大学の教育』という題名のもとに翻訳、紹介し、そのことによって赤井米吉の名は一躍全国に知れわたった。当時のすぐれた教育者でもあった澤柳政太郎と識り、ドルトン・プランの紹介者となったことは、赤井がこの時期のいわゆる新教育運動の重要な担い手になったことをも意味した。しかし成城小学校の教師集団の内部では、幹事赤井に対する反感が強まり、彼の排斥運動が表面化した。このいきさつについては、志垣寛が紹介しているが^(※19)、結局は小原国芳と赤井とは「両雄ならびたたず」ともいべき存在だったのである。ここで赤井は小原派とたもとを分^{わか}って照井猪一郎、山本徳行とともに、新たに自分の学園を創ることを決意するに到る。

学園設立にあたっては、当時朝鮮の永中金山を経営しており、子女を成城に入学させていた茶郷基氏に資金援助を仰いだ。1924年（大正13）3月16日、赤井は照井・山本と家族を引き連れて、幸運にも確保できた井の頭の一角に「明星学園建設地」の標木を立て、4月20日の開校予定日を

（※19）志垣寛『教育太平記教育興亡五十年史』（洋々社、1956年）

目指して準備が始められた。予定より遅れはしたが5月15日開校を迎え、校長となる。

赤井は「児童の研究、教材の研究、然して方法の研究」が統一的におしすすめられてこそ「真の教育研究」に値する、と考えた。その限りでは彼は当時の文部省の教育課程政策に対しては、はっきりと批判的立場に立った。「国定教科書以外のことを教えるのは法律的犯罪であるかのように考えられている今日の状況」(※20)を不合理・不自由だと断じ、岡田文相に対してもかなりきびしい批判を投げかけた。(※21)

したがって、赤井が明星学園を創設したのは、学校教育が国家権力によって画一的に統制されていることを批判し、何ものにもとらわれない自由教育を実践する場を研究的に創造していくことが、その重要な目的なのであった。ドルトン・プランについても、彼はそれを我が国に紹介したことについては責任を負ったが、プランそのものについては決して無条件に共鳴したのではなかった。むしろきびしい態度でそれが流行現象になることをいしめた。

1928年(昭和3)、明星学園中学校、高等女学校開校、校長となる。この時期日本はファシズムへの傾斜を見せ始め、歴史が変動の渦中にあることが誰の眼にも明らかになってきた。赤井はその著作『新しき教育計画のために』(※22)の中で、資本主義社会の矛盾を「集团的労働と集团的経済」によって克服すべきだと説き、社会改良主義ないしは修正資本主義の立場から教育改造論を展開したのであった。マルクス主義とは立場こそ異なれ、「明確な社会認識と、非合理的なものを極力排斥する」という基本的態度を堅持しようとしたことは、この時期に彼が自由主義の立場をいぜんとして守っていたことをも意味したのであった。1934年に、彼が大阪へ講演旅行中、特高(※23)の自宅搜索を受けたのも、赤井がそのような理論ないし思想の持ち主であったことと無関係ではないだろう。

1936年、英国ロンドンの郊外チェルトナムで開催された第7回世界新教育会議に出席、つづいて欧米諸国の教育を視察。赤井はさまざまな会合において国際理解と平和を説くが、一方でイギリス・アメリカの経済的・政治的支配が、後進資本主義国ならびに植民地においていかに甚だしい矛盾を生んでいるかを認識することになる。欧米視察を転機として、赤井の思想の中に、それまで稀薄であったナショナリズムがあらわれてくる。

政府が国家総動員法を公布し、文部省が『国体の本義』を発行した1938年、赤井は「日本民族は再び大飛躍をなすべき時期に来了」(※24)と述べ、「皇国の道」教育に協力する立場をとった。明星の中学部第1回卒業生が徴兵の年齢に達したのは1937年であるが、以後10回生までが軍の庭に出陣していった。赤井自身、敗戦間際の本土空襲により母を防空壕の中で失っていた。



英国へ出発(横浜港)見送りの
教職員と赤井先生の家族

〈※20〉 小原国芳『日本の新学校』新学校叢書(玉川学園出版部、1930年)

〈※21〉 赤井米吉『ドルトン案と我国の教育』(集成社、1924年)

〈※22〉 赤井米吉『新しき教育計画のために』(刀江書院、1932年)

〈※23〉 特高=特別高等警察。おもに思想犯を取り締まった。

〈※24〉 赤井米吉『新世界観と教育』(教育建設社、1941年)

敗戦を迎え1945年（昭和20）の秋、赤井は連合軍総司令部顧問として教育再建のために力を尽くすことを要請され、新しい教育方策の樹立に参画する。他方、彼は郷里金沢に女子のための専門学校、金沢女子専門学園（のち金沢女子短期大学、現在の金沢学院大学）を翌年設立、園長となる。

これらは赤井が戦後の社会、教育にそれまでになしえなかった活動分野を切り開こうとしていたあらわれであるが、1946年11月4日の教職追放令により赤井はいっさいの教職から退くことを余儀なくされるにいたった。この間の事情を赤井は後年、次のように述べている。

わたしは戦前にしばしば警視庁の特高刑事のお見舞を受けた。岡・三木・戸坂といった左翼学者が訪ねてきたからであろう。満州旅行をした時には、大連の水上署はわたしの乗船をとめようとしたし、欧米旅行から帰った時には、横浜の水上署がわたしの下船をとめた。わたしは何かあやしいものだったらしい。

ところが、戦争がすむと、「超国家主義者」ということになって「追放」を命ぜられた。追放係のアロウッド少佐は、わたしの助命運動をするといったが、わたしは辞退した。わたしはたしかに追放令にひっかかるような行動をしているのだから、多少の知り合いの故をもって助命されるべきものでない、と思った。あまたの教え子が「先生いつきます」「よし、やってこい。万歳」と送り出し、その中の28人もが帰ってこないのに「わたしは平和主義者でありました」ということはできない。（※25）

彼には自分の過去をいつわることができない良心があった。

1952年（昭和27）10月、赤井は追放を解除された。追放期間中、明星、金沢女子短大とも新たな発展過程を歩んでいた。彼は両校に戻ることなく金沢、北陸新聞社社長に熱心な勧めがあり、就任するも1953年1月に辞任を決意。6月、明星学園理事長に迎えらる。創立30周年を祝い、学園拡張のための資金集めに奔走するなど、明星のために力を尽くした。

この間、1955年ふじ幼稚園設立、1956年には成立した新教育委員会法にもとづいて、武蔵野市教育委員会の委員長となり、全国市町村教委連合会会長に四たび推された。1957年11月、天皇・皇后の園遊会に妻とともに出席。1959年（昭和34）、教育功労者として藍綬褒章を、さらに1964年、勲四等瑞宝章を受ける。この年6月、喜寿を迎え、多くの友人知己・教え子らの勧説により喜寿記念として教育論集『愛と理性の教育』（※26）を平凡社より上梓。

学園においては1958年（昭和33）理事長を辞め理事に、1965年7月上田八一郎小・中・高校長逝去にともない、8月1日学園長となる。1973年10月、悪性貧血のため三井記念病院に入院、入退院を繰り返す。1974年（昭和49）2月15日容体急変、急遽吉祥寺森本病院に入院。容体刻々悪化。2月26日永眠。86歳。病名腸出血。3月9日、明星学園にて学園葬。



赤井先生胸像
（小学校いちょうの広場）

（※25） 赤井米吉「教委四年」（全国市町村教委連合会編『教委研究』1961年3月号）

（※26） 赤井米吉教育論集『愛と理性の教育』（平凡社、1964年）

■照井猪一郎（てるい いいちろう）

1887年（明治20）4月7日、秋田県平鹿郡川西村（現横手市）、照井直吉（秋田師範第1回卒業生）の長男として生まれる。1902年、県立横手準教員養成所を卒業すると、4月から平鹿八沢木村尋常高等小学校に準教員として奉職。照井15歳の時であった。1904年、同校を辞して上京。1年独学したのち、私立順天中学校4年生に編入、2年間昼は順天中学で、夜は正則英語学校に通う。1907年3月、順天中学校を卒業。郷里からは医学専門学校に入り医者になるよう要望されるが、本人にその意志なく、独学を続け、かたわら太平洋画会で絵画を学ぶ。



照井猪一郎

1916年（大正5）秋田県仙北郡内小友小学校代用教員となる。1918年小学校尋常科正教員の免許を取り、内小友小学校訓導となる。さらに1920年、小学校本科正教員の免許（全教科）を無試験で取得すると、翌21年秋田県師範学校附属小学校訓導として迎えられる。在任中公会堂で学校劇（照井は日本の児童劇を芸術としてあつかわず、教育のために劇を活用した。だから児童劇といわず、後年学校劇といっている）を発表、秋田魁新聞紙上で県知事と学校劇論争を行っている。

秋田県教育界での学校劇の草分けであり、地理教育・理科教育・文学教育・歴史教育に重要な役割を担った。この年9月赤井米吉が附属小学校主事として着任。二人の出会いがここにある。翌1922年5月、赤井が東京都牛込区私立成城小学校に幹事として転任すると、照井もまた同年11月、成城小学校訓導として迎えられる。また翌1923年、同僚の加藤げんと結婚する。

1924年（大正13）5月15日、現在地に明星学園開校。創立同人赤井米吉・照井猪一郎・照井げん・山本徳行の4名。また茶郷基が資金面からこの仕事を援助した。この年は関東大震災の翌年、経済・社会は混乱し、大正デモクラシーの気運は衰え、日本が再び暗い時代に入っていく時代でもあった。

照井の教育については柴田勝（元成城初等学校長）が『新教育研究』1号^{（※27）}の中で次のように評価している。要約して紹介する。

照井の教育実践は総じて“やりぬいた”、“考えぬいた”というところから生まれた独特なものである。教養の広さと児童認識の適切さを示す実践といえる。その特徴をあげると、24時間教育の必要性に着目した夏季生活、歩くことを基本とした見学行事、子どもが自然に目を向けることを重視した「自然科」、リトミックによる音楽教育などがある。そればかりではなく文学教育について、また具体的方法についての研究と実践は特筆に値する。彼の作った『新読本』は長い間のプリントによる実践を活版にしたものだが、日本の小学校の国定教科書に影響を与えた。センテンスメソッドによる国語教育の基礎と方向を示す役割を果たした。さらに学校劇を好み、その教育的効果と重要性を児童教育の上に置いた先覚者であった。

（※27） 柴田勝「照井猪一郎とその教育」『新教育研究』1号、1965年4月

1927年（昭和2）、NHK（愛宕山）から学校劇を放送する。その時の出演は5・6年生で、出し物は「夜明けまで」。照井猪一郎作・演出であった。1937年（昭和12）、創立以来つづけてきた夏季学校が軌道にのる。6年生は軽井沢寮で10日間、4・5年生は千葉県建田村の農家と朝日屋に分宿して10日間。これが千倉生活の第1回である。1939年、この年から逆立ちのできない子どもが一人もいないくらいに体操が盛んになり、当時世間から「逆立ち学校」とも言われた。



照井先生と受持ちの2年生（1925年）

1941年（昭和16）4月1日、小学校が国民学校に改組。私立小学校は国民学校と認められず、明星学園では小学校を初等部と改称した。この年の12月8日に太平洋戦争が始まる。1943年7月、汽車に乗らず、歩いてでも千倉まで行き、夏季生活をさせると頑張ったが許可されなかった（前年7月20日に学童の旅行禁止令が出されていた）。1944年4月、学童疎開はじまる。明星では縁故疎開をすすめ、疎開先のない子どもたちを学校で守るために寝具・食糧を確保し、100人あまり収容する防空壕建設のため、5・6年の子どもたちと小学校の職員が突貫工事をした。また用務員が帰郷したため照井は用務員室で宿直し、学校を守りぬく決意であった。



初等部の教室の前で（1940年）

終戦の翌年、1946年（昭和21）照井は東京私立初等学校協会理事、日本私立小学校連合会副会長となる。1947年3月、明星学園初等部を小学校に改称。4月1日、学制改革（6・3・3制）が行われると新制中学校の初代校長に就任。1948年4月、日本新教育研究会理事に就任。7月、夏季学校が6年ぶりに復活。1949年7月、文部省国語審議会委員となり、1957年7月まで継続4期にわたり同委員をつとめる。1955年、東京都知事から教育功労者として表彰される。

1956年（昭和31）3月、新しい千倉寮で第1回千倉研究会をもつ。さらに翌1957年11月には、第1回校内教育研究集会がもたれると、「このような研究会が、職員側から自主的に発案され実行されたことは非常にうれしい。学校がこの会を主催する」といって、今後毎年続けるように要望したという。また、照井は教育研究について『明星誕生ものがたり』の中で次のように語っている。

すぐれた教師というのは授業と入試準備のうまい先生のこと、うまい授業というのは、決められた教材の分量を45分の1時間内にはめこみ、巧みな演技で器用にまとめあげられることをいい、参観人をアツといわせ、子供たちを五里霧中にさまよわせることをさしたものであった。

それはすべて子供のためのように見えて、その実先生自身の満足のためのものであった。…中略…

教育は常に教師の一方的な思わくで行われ、授業は相手の個性を無視した十把ひとからげの一斉取扱いであった。

こうした技術をいやがうえにも磨きあげようとする授業の研究会は、ひんぱんに各所に行われたが、教育の本質を極めるための研究会はどこにも見られなかった。

私たちはまずこうした教育の世界に見切りをつけ、ことごとくこれを非難した。

子供たちはそれぞれの個性に生きている。それが理由なく傷つけられたり歪められたりしたのではそのこの正しい成長はない。教育の原則はまずこの個性を十分に伸ばしてやるところに終始する。一人一人の個性に即して教育の方法が工夫され施されなければならない。〈※28〉



照井先生レリーフ
(小・中図書室)

さらに、次のような戒めも忘れてはいない。

教科の研究、授業のくふうは教壇に立つものの当然の任務であり、責任であります。特に私立学校の場合にあっては、それぞれ建学の理念に基づく信条のもとに、それらが進められるものであります。しかし、その教育が単なる特殊であるならば、それは論外であります。窮極において一般に通用しない“特殊”は、それは特殊でもなんでもなく、奇型と言うべきでしょう。わたしたちが求めてきた教育は、まさに、人間がする教育として最も正しく、最も豊かなものを目指していたものであります。人間の子どもに、否、日本民族の子どもに、“なにを”“どのように”教えなければならないか、考えさせなければいけないのか、その一点にかかわっているものであります。(第1回公開研究会校長挨拶)〈※29〉

1960年(昭和35)2月、はじめて御飯がのどを通らぬといいだす。2・3・4・5月と病床に伏す。同年5月3日、藍綬褒章を授与される。1961年11月21日、第1回公開研究会において「私立の教師には、教育の本質をとことんまで追求する使命がある。それをやろうとしている明星の教師に拍手してやってください」と、終わりの挨拶をする。1962年8月、千倉の夏季生活には元気な姿を見せたが、しゃっくりが止まらなくて苦しんだ。1963年11月22日、第3回公開研究会には最後まで出席するつもりで頑張っていたが、研究会の前夜40度を超す発熱で倒れる。1964年(昭和39)2月25日永眠。76歳。病名急性腎炎、食欲不振による心臓衰弱。3月2日、学園葬。

■照井げん(てるい げん)

1890年(明治23)12月、秋田市に生まれる。1910年4月、秋田県女子師範学校を卒業、西馬音内、川尻、船川小学校を1922年3月まで歴任する。

同年4月、私立成城小学校に奉職。5月には赤井米吉が、また9月には照井猪一郎が成城に着任している。研究のための実験校として創設された成城小学校は開校5年目。研究成果を次々に発表していた。教育問題研究会・教育講習会発足、雑誌『教育問題研究』発行等、成城小学校のもっとも教育活動の躍動した時期に教鞭をとったわけである。

1923年(大正12)11月、照井猪一郎と結婚。翌1924年、明星学園小学校創立に際し、同人として参加する。創立当初、1年生の担任、その後は音楽科を担当、かたわら会計、学園創立当初の

〈※28〉「三つの生命」『明星誕生ものがたり』(1994年5月15日復刻発行)、文芸部『明星25周年記念』(1949年11月15日)P.7に初出、『残照照井猪一郎先生遺稿集』(1968年2月25日)所収

〈※29〉第1回公開研究会資料『明星の授業1961』

多忙な学校事務一般の整理にあたる。

音楽教育において、音楽の3要素の中でも最も重要な要素と言われるリズムに焦点をあてた。リズム教育は肉体運動を通して行うべきであると主張、1年生に対しては歌を教えることよりも、まずピアノの音に合わせて歩かせることから始めた。また、小学校における音楽教育の目的を和音感をつけることとし、これこそが日本人の耳をよくする本当の音楽教育であるという考えのもと、実践を深めた。

人間、照井げんについて原田満寿郎は「“学園の母”と親しまれ、慈母と女傑の二面が巧みに調和された人。～美しというにあらねどわが妻は人の妻とは異なりてあり～と猪一郎から愛され、慈しまれた女房」と記している。また、『ほしかげ』第36号には、「先生を語る」と題し、次のような生徒の文章が掲載されている。

「げん先生」 松縄昭子（13 回生）

この学園（小学部）中たった一人の女の先生、音楽のげん先生はお母さんのような先生で、私の母のようによく肥^{ふと}って居られる。その肥った体から澄みきった声を出して、私達に教えて下さった。

「ゲアーゲアーゲアー」「1と2と3と4」「それでは歌ってみて下さい」と言うように。

げん先生は明星学園のお母様だ。いつもいそがしそうにして居られる。会計をやったり、書方をやったり、それで居ておうちの事は一切おやりになるそうなの。つくづく感心させられる。

去年の秋の関西旅行の時もあの長い道のりを私達といっしょに大きな体を少しもくたびれた様子もなくお歩きになった先生。ずいぶんお丈夫だなあ。先生のくせは眼鏡ごしに私達を見るのがくせ、はてあの眼鏡は近眼か、いやいや老眼かな、私にはわからない。（※30）

1953年（昭和28）9月、東京都から教育功労者として表彰される。1963年11月、猪一郎（小・中学校長）の病気、快復進まず、専心看護のため依願退職。猪一郎は1964年2月逝去するが、げんは翌65年5月、創立同人として、また永年の学園に対する功労により明星学園名誉教諭となる。退職後も小学校図書室において、小学生に読書指導を行う。

1976年（昭和51）4月27日永眠。85歳。5月16日、追悼式。



照井げん



音楽の授業

〈※30〉 小学部教育月報『ほしかげ』第36号（1940年3月20日）

■山本德行（やまもと とくこう）

1897年（明治30）3月、愛媛県に生まれる。1915年、今治中学校を卒業、小学校代用教員となる。翌1916年愛媛師範第2部に入学。このとき寄宿舎の舎監をしていたのが赤井米吉であった。1917年、小学校訓導となり、1922年に私立成城小学校に奉職する。一方、翌1923年には日本大学高等師範部に入学する。

1924年（大正13）、私立明星学園創立に際し、赤井米吉、照井猪一郎・げん夫妻とともに同人として参加。創立当初3年生を担当、引き続いて6年生卒業まで担当する。この間、日本大学法文学部に入学。山本は希望に燃えていた。



山本德行

私たち3人は思い切った新教育を考えていた。まず、時間割のない教室である。始業・終業の合図もいっさいないのである。学籍簿もなければ出席簿も作らない。もちろん通知簿もない。そしてあるものは、克明に記した教育記録簿だけである。教授の方式はプロゼクト・メソッドであり、ドルトン・プランである。校舎ができ、花壇の花が美しく咲き揃った頃には、生徒数も次第に増加して、1学級30人の定員にほぼ近いまでになっていた。運動場にはスベリ台もでき、小鳥の舎もたった。小さな夢の学園である。子供たちはいっぱい太陽を浴びて、広い武蔵野を駆けめぐるっていた。教師も子供もまっ黒であった。野外が常に教室であって、教室はむしろ休憩の場であった。（山本德行自叙伝『坂』）（※31）

しかし、まもなく山本は壁にぶち当たる。彼の悩みは大きかった。

しかし、妙案であると思っていたプロゼクト・メソッドも凡々の私たちでは長くつづけられえないものであるとわかった。2か月もすればもう教材の発展が限界きて、堂々めぐりをしている感である。こんなことで「学力」がつくであろうか。ドルトン・プランそのものも、生徒たちは伸びるようには見えるであろうが、ヒョロ長い伸長で練り鍛えることに欠けている。叩き鍛え、教材の背後にあるものをつかみ取らせることが、これで果しうであろうか。始業・終業の合図も、あってみれば邪魔くさいものであろうが、段落のケジメをつけることもまたあってよいのではなかろうか。反省せしめられることが多い。私の悩みは更に大きくなるばかりであった。（山本德行自叙伝『坂』）（※32）



1925年3月、山本德行先生と3年生の子どもたち

結局山本は、第1回卒業生27名を担当として卒業させた翌1929年（昭和4）3月、明星学園を退職する。この間の経緯について彼は後に次のように記している。

〈※31〉『坂』（今治明德高等学校、1967年1月5日）P.53～53

〈※32〉『坂』（今治明德高等学校、1967年1月5日）P.53～54

開校時に受け持った3年生が6年を卒業するので、私はここの教壇を降りた。その理由の一つには明星同人の教育観と、私のそれとの相違もあった。私には「学力」というものがあるとの信念がある。教育とは児童を成長せしめることであり、習得する力を得せしめることであるということは肯定する。しかし3年生には3年生としての「学力」があり、5年生には5年生としての学習知識を得ていなければならないと私は信じている。そしてそれはある場合においては、詰め込むこともまたやむをえぬ教育であると信じている。真理は日々新しい。真の教育こそ新教育であるというのである。私は間違っているのかも知れない。しかしかかる私はすでに学園の異端者であった。もっともっと早く去るべきであつたろうが、恩師赤井先生の恩情にあまえて、5カ年をお世話になったわけである。申し訳のないことであった。(山本徳行自叙伝『坂』)※33

明星学園退職後、1929年、天王寺師範学校教諭、34年大阪府視学就任。36年豊中市の小学校長、翌37年豊中市高等実践女子校長に就任、1941年愛媛県主事など歴任した後、今治明德学園初代理事長に就任、今治明德高等学校長、短期大学学長を兼務する。

1966年(昭和41)6月3日、藍綬褒章を授章、伝達式に参列。翌日、三十数年ぶりに明星の地を踏んでいる。

翌4日は小雨の日であつたが、私は文部省・大蔵省に出かけたので、妻は在京の子供3人に案内されて、箱根路を周遊する。そして次の日は、一同うち連れて赤井先生をお訪ねした。私はこの先生によって今日がある。まず何をおいても先生にこの光栄をご報告しなければならないと思ったからである。家族一同して井の頭の杜を歩く。そして明星学園を訪う。明星を創めたあの頃は、この杜も、もっともっと幽邃であつた。原始林の面影が残っていた。27歳だった私はこの泉の傍で物思いにふけたものである。今ここに同行する3人の子はその頃まだ生まれてもいなかった。明星学園も随分変った。照井猪一郎君も逝ったし、上田八一郎君も他界した。「カナンの地」として逃れて来た花園ではあつたが、私は同行を離れて一人歩きをして来た。しかし明星の発展を希わない日は1日とてもなかった。何分にも思い出深い草分けの一人である。あの頃植えた木が、今では一抱えもの大木に生長しているのに驚かされる。その頃色をまっ黒にして武蔵野をかけめぐっていた教え子も、今ではもう52歳だという。嘘のような話である。思えば、お互に年輪を重ねたものである。(山本徳行自叙伝『坂』)※34



1928年、創立時に3年生だった1回生の子どもたちは6年生になり、まもなく明星最初の卒業式をむかえる

1978年(昭和53)永眠。81歳。著書に『尋一教育の実際』(1924年)、『欧米旅日記』(1964年)などがある。

※33) 『坂』(今治明德高等学校、1967年1月5日) P.57

※34) 『坂』(今治明德高等学校、1967年1月5日) P.133～134

(2) 上田ハ一郎（うへだ はちいちろう）

1890年（明治23）5月15日、富山県福野町に生まれる。父義男は富山県城端村助役、後に初代町長となる。しかし、1898年、祖父の米相場の失敗などにより一家破産、金沢市に移り住むことになる。

1909年、広島高等師範学校入学。本人は苦学してでも東京に出て政治家になりたいかったが、すべてが官費であるという経済的理由と、校長北条時敬先生をはじめ、金沢の第四高等学校の先生が多くおられるということで、父が広島高師進学を強く推したようだ。同じ英語科の1年先輩には赤井米吉がいた。また、小原國芳とは同級であり、寄宿舎も同室であった。

1913年、広島高師卒業と同時に英語の教師として附属中学校に奉職。1921年、家族8人とともに朝鮮大邱^{テグ}に転住。大邱中学創設に参加し、同校教頭に就任する。転任の理由は大家族の生活、弟妹の教育という経済的理由と、長男八郎の言によれば、それまで精力的に活動していた高等師範の大学昇格運動の頓挫が一因にあったようだ。

1923年（大正12）、赤井が朝鮮旅行の途次^{とじ}に上田を訪ね、宿泊する。家族にとっても金沢時代から面識があり、気楽な来訪者であった。「東京に來い」が赤井の口癖であったようだ。英語の教師である以上、どうしても本場のロンドンに行きたいという気持ちを述べたが、赤井は、「東京に來るとスポンサーができるぞ」と、いとも簡単に言ったようだ。後になって「東京に來れば」が、「明星に來たら」に変わったらしい。



上田ハ一郎

大正13年の夏、赤井園長は講演のため私の前任地朝鮮に來られた。その時明星学園も3年後には中・女を併設するから上京されたいとの話があった。私の方から色々な希望を出してみた。1学級30名、生徒総数150名を超えざること、男女共学、無認可の学校、上級学校入試準備の要らぬ学校、武道と教練のない学校等。それらのことに対し、園長は笑って聴いていた。〔※35〕



広島高師で小原國芳と
（1913年）

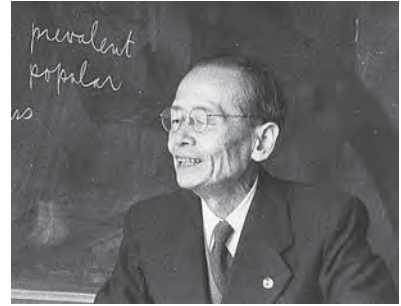
1927年（昭和2）、明星学園中学校・女学校設立のため大邱を去り、一家で東京に転住。翌1928年、明星学園中学校（旧制）の部長に就任する。中・女設立にあたっては不況もあり、困難を極めた。まさかの時は無認可の学校で差し支えなしとしていたが、父母の間からどうしても大学受験可能な学校にという意向が強く、資金計画、実行等当時の父母の献身的な活動により設立が実現した。結局夢であった受験教育をしない学校は、父母たちの熱意によって、受験を考えなくてはならない学校としてスタートを切ることになる。

以来、上田は「生徒の人格を尊重しよう。彼らの個性を尊重しよう。彼らを英漢数で割りきってはならぬ」という信念を、父母・社会に対し常に主張し、明星学園の教育に全力を尽くした。

上田自身は次のように述べている。

〔※35〕 上田ハ一郎「25周年の回顧」文芸部『明星25周年記念』（1949年11月15日）P.86

私はあくまで個性の尊重者である。世間では（個性——自由——我侬——放縦）（団体——規則——服従——統制）という風に飛躍的に考える人が多い。しかし私は特異性を持った大個性の集団でなければ団体も社会も強固なものにならないと信ずる。個性を滅却した団体は、よし強制によって一時的の統制は得られるであろうが、決して永続きはしないと固く信ずる。〔※36〕



私の娘は女学部、息子は小学部に通っている。そして私は二人のためにこの小さなマッチ箱のような明星が此の上もない結構な生活の場所であると信じている。ところが一面、鉄筋コンクリートの学校にさえ通わせて置けば安心が出来、また、大定員の学校に入れてさえおけばお互いに揉まれ磨かれて自然に玉となるかのように聞かされると、私もなるほど一応は領^{うなず}いても見るが、さて静かに考え廻^{めぐ}らすと、団体的訓練や社会意識の養成は、いかにも大定員学校の特権であるかのように思われるが、実際の処、内から発する自得の力でなくて、外から強制的に鍍金されたものとしたら、その瞬間だけは奇麗^{きれ}に見えても、いつかは剥げる。外から揉まれ磨かれた玉といっても硝子玉であり、飴玉は飴玉である。

一体、世間では学校教育に余り価値をおき過ぎる傾向がある。私の短い教師生活から考えてみても、学校教育の力というものは誠に微々たるものであって、子供の一切合切を学校に一任して安心している親があったら大変な間違いである。なお、また、貴方のお子様は私が責任を以てお引き受け致しますなどと大きな口をきく教師がいたらその教師はよほど偉い人か、でなければ……（一寸うまい言葉が出て来ない）ごまかされてはならぬ。親切そうにみえて一向親切でない学校があり、不親切に見えて、とても親切な学校もある。元来親切そうな教育というものは生徒の成長には甚だ迷惑なものである。設備が完全であり標本が沢山あれば、それだけ親をごまかす力を持っている。然し私の経験では満ち足りと倦怠が来たり、教育墮落の第一歩を踏み出す恐れがある。足らざる処に何かを以^{もつ}て補わんとする努力が起り苦しみが生れる。ホントの教育はこの見えざる処に行われるものではないだろうか。〔※37〕

そんな上田は生徒から愛された。彼らの目に上田は次のように映っていた。

「ハチ公先生の追想の一端」 藤田早苗（5回生）

1. 小さい体で右手をあげて「ヤァー」のポーズ。
2. 立派な教育理念をもちながら、教育論をブツでもなく、書くでもなし。実践のみ。
3. 人間教育、社会教育を中心とした、教養と学習の調和。
4. 過ちも過度のイタズラも、反省なき時は、厳しく恐ろしい叱責があるが、反省しているとオトガメなし。曰く「叱るより本人の方がモット悩んでいるヨ」「それでよし」と。
5. 安月給の学園に、よくも多くの名教師、名物教師を揃えた能力。
6. 学園教育を目の仇に赴任したハリキリ配属将校を学園教育のよき理解者とハチ公先生信奉者に変身させる人格と魅力。
7. 中学部生徒より女学部生徒に人気あった中学校校長。

「我らがパッチャン」 金澤康（13回生）

木造平屋の教室、カーンカーンと鐘の音が始業を告げると、煙草をくゆらせ乍^{なが}ら上田先生が到来する。漫画「江戸っ子健ちゃん」の先生（モデル？）は短身瘦軀、眼鏡の奥に光る眼。「水曜日はウエズネズデー（上田寝ず）だよ」、名指しされるのを恐れ且つ期待する英語の授業。——1学年30余名、5

〔※36〕 小学部教育月報『ほしかげ』第12号（1934年12月15日）

〔※37〕 上田八一郎「親・教師・人」『明星の教育』創刊号（1931年1月）

学年の全校生 160 余名の明星“星雲時代”の終期、中学生の愛着と尊敬の的、我らがパッチャンの姿である。

「常に人生の“bright side”を見なさい」卒業後、私が大病時に戴いた先生からの端書。以後、慈父の如き先生宅を訪れた折々「君、民主主義とは手間のかかることやね」と戦後の学校経営の労苦を洩らされた。

「特異性を持つ大個性の集団でなければ、団体も社会も強固なものにはならない」全体主義の時代に自由主義最後の教えを受けた私共同期にとってはパッチャンの薫陶を受けた所極めて大であった。今、同じ道を歩む者として先生を想うことしきりである。〈※ 38〉

1946 年（昭和 21）11 月、赤井の辞任にともない、中学校（旧制）・高等女学校（旧制）校長代理就任。翌 47 年 3 月、校長に、4 月には明星学園理事となる。48 年 4 月、新制高等学校校長に就任、これにより男女共学が実施されることになった。

1955 年（昭和 30）5 月、藍綬褒章を受章。その後、学園の振興事業始まるとともに酷暑の中を土地拡張のため奔走、体調を崩すも小康を得るや再度振興事業達成のため活躍し、そのためますます健康を害した。

1964 年 2 月、照井猪一郎の逝去に伴い、明星学園中学校長・小学校長を兼務。以前より脳血栓と右足と右手の軽いマヒ症状と微熱が続く。

1965 年（昭和 40）3 月、卒業式で卒業生全員と握手したのが最後となった。7 月 16 日永眠。75 歳。病名肺炎。7 月 18 日、学園葬。父祖の地富山県城端町の、昭和 4 年に自分自身で建てた先祖代々の墓に納骨された。子供の時、夜逃げ同然で出た町だけに故郷という印象は薄かったが、病気が進むにつれて、早く城端に行きたいと言っていた。

1966 年 5 月 15 日、レリーフ除幕式。明星学園にかかわる方々、広島附属中学校ならびに大邱中学校の卒業生の皆さん方のお力添えで、レリーフが完成した（制作は 11 回生の四田昌二氏）。現在、第三体育館入り口横に置かれている。



上田先生レリーフ（高校中庭）、
上田先生の直筆文字
「Cool brain and Warm heart」



旧制中学校の遠足・村山貯水池（1936 年 5 月 9 日）

〈※ 38〉「思い出の記」『上田八郎先生生誕百年誌』（1991 年 5 月）

(3) 後援者「隠れた人」茶郷 基

学園設立時の唯一の後援者、茶郷基氏^{さこうもとい}について、赤井米吉はのちに次のように語っている。

ことは茶郷基先生が逝かれて30年です。だしぬけにこういうことをいっても、今の父母のかたがたにはお分かりにならぬ方も少なくないでしょうが、明星学園創立のときの唯一人の後援者であった方です。

明星学園設立趣意書のおわりに、

「森幽に、水清き井の頭公園脇に1千坪の土地と、ささやかな学舎を得て、友情に燃える私達が、隠れた後援を誓われる一教育愛好者に励まされて、新しい教育の樹立を企てました」

とあるが、その「一教育愛好者」というのが茶郷基さんだったのです。

学園創立の議がおこったのは大正13年2月24日のことでした。照井猪一郎先生、山本德行先生（現今治明德高等学校長）などが、そのころ千駄谷にあった私の宅に集って話し合ったのです。われわれがそれまで勤めていた成城学園からはなれて、新しい学園を建てねばならない事情になっていたのです。がそれには資金を得ることが、何よりも必要なことです。その後援者として第一に白羽の矢をたてたのが茶郷さんだったのです。

2月27日の午後、私は代表格で、国分寺のお宅へ伺いました。

茶郷さんとはその前年からおつき合いさせて頂いていました。お嬢さんの喜久子さん（現出口正夫教授夫人）が成城小学の1年生で、照井さんの受持であったことから、当時問題になっていた成城学園の郊外移転の土地物色のために小原主事（現玉川大学長）と共に、しばしば国分寺のお宅へ相談にいらしたのです。

そして茶郷さんは、私と同郷の石川県出身であること、朝鮮の永中金山を経営しておられる富豪であること、学生数人に学資金をみついでおられることなどを知って、深い尊敬を払っていたのです。お宅は、今国分寺駅の南口になっているあたり一帯1万坪の屋敷に、瀟洒な作りの家がありました。

私は新しい学園を建てねばならないことになった事情を概略お話しして、「1万円」助けて頂かれないだろうかとお願ひしたのです。貨幣価値のずっと高い時代ではあったが、1万円で学園が建つものでないことはわかっていたが、突然のお願ひだから遠慮したのと、これだけあれば先ずスタートすることは出来ようし、スタートが出来れば後はまた後、といったような大まかな考えであったのです。

茶郷さんは即座に、「1万円では足りなからう。当分必要なだけの校舎を建ててあげよう。設備費も、経常費の不足も出してあげよう」と、ほんとうに棚からぼた餅のようなお返事であった。そして至急に「敷地」を選定するようにと注意されました。

2月29日、いまの小学部の敷地をきめると、すぐに1年間の地代500円を千駄谷の私の家までもってきて下さった。

校舎109坪（教室5、職員室、小使室、便所）をお知合の古賀貞周氏の会社へ委託して下さった。契約は私と古賀氏の間につくったが、支払は凡て茶郷さんがという了解のものでありました。契約高は1万2千円でした。設立認可願を東京府へ提出するとき、私は茶郷さんに設立者になって頂き、われわれは雇用人にしてくれと頼みました。設立者は相当の資財をもっていることを示す必要があったからです。それに対して茶郷さんは「あなたがたのために建ててあげるのだから、あなたが名義人になるように、資金をみせる必要があるならばこしらえてあげよう」といわれて、ラサ島燐鉍の株式4万5千円を私の名義に書換えて下さったので、私はにわか大尽のような顔をして認可願を出したのです。

2月の末にはじまった話が3月末には校舎建築にかかり、児童募集のちらしを配るというスピーディーな進行に、成城の人々はじめ知友の者は目をみはったものです。われわれも鼻高だかでした。ちょうどドルトン案の創始者ミス・パーカーストが来て、各地で講演をした時でした。私は女史の通訳をしてまわって歩いて、いたるところでお祝いを言われたりしました。みんな茶郷さんのお陰です。

茶郷さんは多くの知人をもっておられました。栃内曾次郎^{とちないそうじろう}（海軍大将）、加藤隆義（子爵・後海軍大



茶郷基氏

将)、水野鍊太郎(文部大臣)、床次竹次郎(内務大臣)、島芳蔵(正金銀行重役)、これらの方々のお宅へ私を連れていって、教育についての意見を聞かせたり、後援をお願いさせたりされました。

結局、校具備品費として2千円頂きました。敷地の地ならし、周囲の垣根づくりに出入の植木屋をいく日もよこし、ヒバ苗をたくさん持ってきて下さったのです。

こうして5月15日開校式をあげたのです。ただし児童は1・2・3学年、3組21人しか集まりませんでした。大震災後の郊外移住は始まっていましたが、井の頭公園南の学園付近は昔からの農家が2、3あるだけの、文字通りの武蔵野ですから、1千枚くらいのチラシをまいてもそう来ないのがほんとうでしたでしょう。しかし、これでは教師4人、小使夫婦の6人が食うことはできません。

そこで茶郷さんは4人の教師の月給380円を毎月補給することにして下さいました。月謝6円、21人分、126円は小使給と諸雑費にあてればよいことになったのです。まことに呑気な経営です。その内に児童数はだんだん増えてきました。夏の休みに開いた夏季学校の宣伝も手伝って、9月には40名近くになりました。それでも茶郷さんは、はじめ通り380円ずつ出して下さったのです。明星学園のものが、その後財界の不況にさらされた時でも、屈託のない顔をしてやっていたのは、初期の茶郷さんに助けられた時分にできた悠々とした校風のためです。

茶郷さんはもと神職の家から出られたので、古神道によく通じておられ、しばしばそのお話をされました。われわれが「先生」と呼んだのはこのためでした。さらに漢方医薬の造詣が深く病氣療養のんびりによい注意をなされ、ずっと後のことですが、私の長女もお世話になりました。「医は慰なり」というお言葉を私は今も至言と思っています。われわれが「先生」と呼んだわけもここにもあったのです。

むろん教育についてもいろいろなご意見をおもちで、よく教えられましたが、いわゆる「新教育」の意気に燃えていたわれわれは、かえって反抗を試みることもありました。その中でも「習字」と「制服」の問題はぜひ分議論しました。「画一」と「模倣」を何よりも嫌ったわれわれは、どうしても聞きいれなかったのですが、それから40年、時代の変遷もありますが、もっと冷静に教えをうけるべきだったというような悔が感じられるのです。

修身の教育も熱心で、「幼学綱要」を現代風に書きかえて、各学校へわけのことを考えつかれ、照井さんに書き直してもらい、私は近衛文麿さんの題字をもらってきたりして、立派なものをつくり数万部売ったのですが(※39)、出版者がずるくて茶郷さんも照井さんも骨折り損になったのは気の毒でした。茶郷さんのこうした力を利用して教育雑誌を出した先生もありましたが、これはうまくいきませんでした。

第2年目には、新1年生が予定どおり30名入学し、2年以上の組は皆20名以上になりましたが、第1年同様に経常費を補助していただくことになっていました。ところがその6月に、朝鮮の大雨洪水で永中金山にはひどい山崩れがあり、取引銀行の朝鮮銀行は戦後の第1の不況という二つの不幸が重なっておこったのです。口に出してはいわれませんでした、その被害は大変なものだったようです。われわれは進んで経常費の補助を辞退して、自立の方策をとることにしました。

その後山之内兵十郎さん、井野正次郎さん、川井源八さんなどに後援してもらったり、母の会・後援会をつくってもらったりして、多くの方々のご援助を願いましたが、それは当初の茶郷さんの援助によって、「愛される校風」ができていたからであります。

茶郷さんは国分寺の屋敷を処分して、小金井駅近くに静かな家をたてられて隠棲の生活にはいられました。

昭和3年小学校の第1回卒業生が出て、中学校、高等女学校を開始したときには、建築資金4万円は、当時の父母の方がたがつくって下さいましたが財団法人の基本金11万円を積んでみせねば、各種学校として発足しなければならないので苦労しました。茶郷さんは北海道炭鉱の株7万円を提供して下さいだったので、関係者一同愁眉を開いたことです。1校の設立認可でもなかなか困難なことなのに、中・女2校一ぺんに認可されたのは全く異例といってもよいことでした。これも全く茶郷さんのお陰です。

〔※39〕『幼学綱要読本』(成美會、1931年)

書がすきで、きれいな字をかかれました。毎年1月2日に私は必ずお宅へ伺って書き初めをしたものです。茶道にも通じておられ、好まれ、^{めいげつ}明月の夜私たち夫妻が招かれて、お座敷で月を眺めながらお茶を教えられたのも忘れられぬことです。〈※40〉

茶郷夫人

シヨ夫人は、表だつことを好まず、夫の意志に添い、あくまで陰の後援者としての立場を堅持して、父母会・母の会その他の公的なところの活動は控えていた。ただ創立当初は準備も整っていない時であったため、多少、表面的なこともされた。開校の日には150人分のいなり寿司を折詰めにして徹夜で作り、祝賀の会食に間にあわせた。校庭に樹木も少なかったので出入りの植木職人に植樹させたり、自宅の庭木を移植させたりした。

また後年、女学校の課外にお茶とお花の授業などをされた。1954年（昭和29）の30周年記念式典に、学園にとって第1級功労者のひとりとして茶郷基氏の功績が表彰された折、次のように語られている。〈※41〉

主人は在世中は明星学園の創立にお手伝いしたことなど外部の方へはいっさい洩らしませんでした。ことに、こどもに対しては絶対に秘密にしておりました。…中略…

はじめ、学園は先生がたった4人でしたが、主人はその方々、特に照井先生のご人格に接して、あんな立派な人のためなら、自分はどんなお力添えをしても惜しくないと常に申しておりました。後略…〈※42〉



茶郷シヨ夫人



創立まもない頃の様子。茶郷家から手配された植木職人が、教室前に植樹している。
中央には教師と児童たち

〈※40〉 PTA 会報『道』No.59（1963年7月10日）

〈※41〉 原田満寿郎記『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』P.98

〈※42〉 『PTA 会報30周年記念号』（1954年6月）

第2章 初期の教育実践

1 新教育の開拓者

(1) 創立当初の教科課程

赤井米吉は、創立してからの5年間を振り返った「明星五年」^{〔※43〕}の中で、開校当初の教科と時間数について次のように記している。

校舎も出来た、教育の内容については開校準備の間も殆ど毎日のように同人は集って研究していたのであったが、今や愈々落付いて討議も出来るようになった。当時の教科及時間は次の様に定めていた。

学科としての数学の仕事は2年から始め、1年では児童の日常生活の間に於ける数観念の自然的発達を待とうと考えた。数学の始期に就いては当時も我が教育界に問題のあったことであり、今日も尚つきない。当時私達は凡ての学習が常に児童の内からの要求に即すべきであることを信じていたので、この教科に就いては尋1時代は尚早の感をいだいていた。然しそれは教科としてなす数学の仕事の内容を現行文部省のそれのみ置いたものであった。その他の仕事を考えれば尋1でも数学の仕事は多々あり得たであろう。然しそれに就いてはまだ十分な案が立てられなかったので、暫し私達の案のたつまで、こうして児童の発達を待つ方が得策と考えたのである。

教科及び時間割

	1年	2年	3年
国語	12	11	11
美術及自然科	5	5	5
音楽及体操	5	4	4
数学	—	5	5



お芋掘り（1925年10月25日）

美術と自然科を一つにして考えたのはその間に一脈相通ずるものがあるように思われたからである。自然科の中には理科の初歩として、科学研究への前提としてのものがあることは勿論であるが、児童の自然に対する態度にはこれを美的対象として、これを全的に眺める風のあることを感じて二つを一つにして時間数を定めたのである。勿論時によって全然科学的に取扱うこともあれば、全然美的に取扱うこともあった。音楽と体操もかのダルクローズのレトリックの主張のようにリズム、ハーモニーの身体的表現が音楽教育の方法として非常に必要なものであり、体操、ことに低学年の体操にはリズムを担わすことが児童の心理的、身

体的発達に伴うものと考えて一つにして時間を取った。これも体操の時には必ず歌を歌わせるか、ピアノを弾いてやらせると云う意味ではなかったし、音楽にはいつでも身体的活動を伴わせようというわけでもなかった。両者に一つのリズムの相通ずるものがあることを考え、その方法を工夫せんとする意図に外ならなかった。

然し私達はここで私達が既に有していた多くの教育上の最良の方法を実行して、最も優秀な人を



〔※43〕 赤井米吉「明星五年」『混沌』第8巻第1号（1929年1月22日）

造り出すと確信してこの仕事を始めたものではなかった。寧ろ色々の試みをして真に善き方法を見出さんととの念願に外ならなかった。当時私達が共同の研究問題としていたものは、

1. この環境を如何に我々の教育に取り入れるべきか——自然科や美術の仕事は言うまでもないが、更に凡すべての学習を生活たらしめる為にこの環境を如何に処理すべきであろうか。——もしこの問題が解決したら我国の田園の学校の教育にかなり大きな問題を投ぜられようと考えた。所謂教育上の改革が多く都会地から発祥するのは余り面白からぬことである。どうかして田園の教育を振興させたいと思った。
2. 戸外教授業がどれだけ迄に行われ、如何なる方法で行うのが最も有効であるか。——従来外国で行われたオープンエアースクールは多く病弱児の為であった。健康児の為にそれは考える必要のない事であろうか。私達はそれも必ず善い事であろうと考えた。然しその方法は如何、——もしこれが解決するならば児童保健の問題に大なる光を投ぜられる筈である。然してこれもまた田園の学校のひと工夫となろう。

その他問題は多々あった。勤労教育の問題などもその一つであった。6月の末には馬鈴薯の収穫期であったので、百姓の畑に行ってそれを掘らせて貰い皆で洗って、共に食したりした。勿論まだ低学年の児童のことであるから大きな作業は出来なかったが、こうして土に親しむ機会は多かった。

7月になると井の頭公園のプールが開かれた。2・3年の児童に2、3泳ぐものがあったばかりで他は皆駄目であったが、浅い児童の徒渉池で毎日午前11時頃から水遊びをした。学園で裸体になって、畑の中をぬけてプールへ駆けつけるのである。学園の存在を知らぬ水泳客は皆驚きの眼をみはった。(※43)



井の頭池のプールにて
(1925年7月)

ちなみに、当時の文部省の教科課程は次ページのようなものである。これと比較してみると多くの相違点を見ることができる。「分科を手に小きざみにして集めてガンモドキのように包んでやる」合科主義を批判し、分科を四つにしばり、各分科間の連絡を十分にしようと考えた。また、修身の時間を特設しなかったことも特筆される。

すべての教科、すべての生活が児童の生活指導である時に修身なる特別の時間においてのみ道徳的生活の指導をしようとするのは自己矛盾である。国語も音楽も体操もすべて道徳的教育の使命をもつのである。もちろん突発的な児童相互間の道徳問題もある。しかしこれはその場合において、何時、如何なる教科の時でも、注意し、教訓すべきであると考えてこの科は特設しなかったわけである。(※44)

1919年(大正8)改正
小学校令施行規則による毎週教授時数

	学年	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
教科目	修身	2	2	2	2	2	2
	国語	10	12	12	12	9	9
	算術	5	5	6	6	4	4
	日本歴史	—	—	—	—	2	2
	地理	—	—	—	—	2	2
	理科	—	—	—	2	2	2
	図画	(1)	(1)	1	1	男2 女1	男2 女1
	唱歌			1	1	2	2
	体操	4	4	3	3	3	3
	裁縫	—	—	—	女2	女3	女3
	手工	(1)	(1)	(1)	(2)	(2)	(2)
	計	21	23	25	男27 女29	男28 女30	男28 女30

1941年(昭和16)の国民学校令による毎週教授時間数までもかわらなかった。
()内は課すことを得というもの。

(※44) 1919年(大正8)改正小学校令施行規則による毎週教授時数

しかし、この当初のプランは変更を余儀なくされる。試行錯誤が続く。

かように4大分科に分けて始めたのであるが、いよいよ実際に試みているうちにいつか従来の分科に墮^だしてしまった。さきにも述べたようにまず音楽と体操は教師が異なるので、自然仕事も分離し、その各々に時間も分配しなければならんことになった。次に美術も主任の教師が十分に指導できないので専科教師を置くことになり、自然科と分離してしまった。かくて国語・美術・自然科・音楽・体操・数学の6科になった。さらに同一教師が指導する国語の読方と綴方も書き方もそれぞれ特定の時間を要求するようになり、やがて6科目が8科目にもなり、高学年では地理・歴史が加わり、裁縫がはいり、全然元の木阿弥になってしまった。

それ等の跡を省みて気のつくことは、かかる分科の根本に横たわるものは、児童の能力開発の思想である。われわれが生活指導を目ざして立ったことは既に趣意書の吟味において述べたことである。しかしその実現の方法としての教科課程はまだ十分に検討せられていなかった。そしておよそ4大分科にしたものの、その中に各々の分科が依然として残っていたこともさきに記したとおりである。これ等の分科主義の根底に横たわっている思想は普通教育または基礎教育なるものは将来如何なる生活をなすにあたっても必然とせられるような能力を発達せしめることだということである。読む力・綴る力・書く力・描く力・作る力・観る力・歌う力・走る力・数える力・そうした力を養わねばならぬとすることである。だから児童の生活を指導すると称して、如何なる生活事象をもってきて、これについて理解を与え、その実践を指導していっても、その裏にそれによって読む力は如何に発達し、綴る力は如何に伸長するかとの問題が浮かび、それがいつも不安に感じさせられる。教師の方にはそれについて一応の考えをもっていても、父兄がそれを如何ですかと疑問してくると容易にこれを納得せしめられぬ。それを納得せしめられないと悟って自らも不安を感じてくる。かくて生活そのもの、指導よりも能力を養おうと考えるようになる。われわれの教師が結局従来どおりの分科主義に墮したはこの能力養成の古い思想に負けたのである。今もわれわれからこの思想は抜けきらない。一般教育界においても生活指導の主張は相当有力になっており、郷土教育や労作教育の流れを見ながら依然として新教科課程が構成せられないのは、この能力発達の思想に問われているためである。この思想を整理しない限り新教育は新しい展開をしないであろう。が、さらに進んで能力発達の思想は全然まちがいであろうか。新しい生活指導の教育はこの能力を如何に考え、如何に処理すべきものか、これが今われわれに課せられている根本的問題である。上級学校の入学試験の方法、それにつれて騒いでいるのは学校の入学準備教育も根本をただすと、この思想にある。(※45)



4人の教師と21人の児童（1924年）
お昼には先生も児童も外に並んで
陽光をあびながらお弁当をいただく

（2）ドルトン・プランと明星

アメリカ人、ヘレン・パーカーによって提唱された「ドルトン・プラン」は、その紹介者の予想を超えて大きな反響を呼びおこし、大正期の自由教育運動における一つの潮流を形づくることになった。彼女は1900年前後のアメリカの公教育が大衆化していく過程で、理想を失い、子どもを受動的地位に立たせ、画一化していることをするどく批判していた。一方、彼女自身、最初

〔※45〕 赤井米吉記『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』P.37

の教師としての体験が片田舎の単級学校であったことから、どうしても自学のための形態を創りだしたいと願い、ここから個々の子どもが能力・要求に応じて学習課題と場所を選び自主的に学習をおしすすめることのできる「教育的実験室」のプランを創り出すにいたった。それは1908年のことだといわれている。その後、彼女はモンテッソーリ法研究のためイタリアに留学し、帰国後マサチューセッツ州のドルトンのハイスクールならびに「児童大学」と名づけた一私立小学校において「実験室案」を実施するにいたった。1919年のことである。これがい



H. パーカースト氏を案内する赤井・照井・上田の3先生（1925年）

わゆるドルトン・プランであり、このプランは間もなくイギリスに紹介され、2,000を超える学校で実施するにいたったという。

ドルトン・プランは、パーカーストによれば「学校の社会化」を目指し、学校生活をデモクラティックな共同社会のひな型にしようというものであった。したがって、その原理は、第1に「自由」であり、第2に「協同」であり、第3に「個別的作業」であるという。子どもの学習には、学習主体である子どもが、集中・没頭できる条件＝自由が必要であり、同時にそこでは、集団生活の相互作用が有効に利用されなければならないという。また、子ども自らが自己の学習課題と自分の能力とを対応させ、計画的に仕事にとりくむとき、もっとも深い興味が生まれるし、最大限の力が発揮できると考えたのであった。

澤柳政太郎が小西重直、長田新らとともに第1次大戦後の欧米の教育の視察から帰ってきたのが1922年（大正11）6月、その時持ち帰ったのが『ドルトン実験室案』であった。赤井米吉は澤柳の勧めでドルトン案の第一の書、E・デューイの“The Dalton Laboratory Plan”を翻訳、出版、大きな反響を呼ぶ。赤井自身、この間のことを「ドルトン案20年」^{〔※46〕}の中で、次のように記している。

大正11年の秋、澤柳先生らの外遊報告の講習会が成城小学校で開催されたとき、ちょうどこの翻訳が出来たので、会場で売るとメチャクチャに売れ、またたくまに版を重ね、結局翌年9月、関東大震災で紙型を焼くまでに15,000部売った。

10月ころ創始者ミス・パーカースト自身の書いた“Helen Parkhurst. Education on the Dalton Plan”を長田教授のところへ送ってきたのを、長田教授からわたしのところへ転送されたので、早速翻訳にかかり、翌年大正12年2月『ドルトン案児童大学の教育』という題で刊行した。…中略…

翌13年4月、大阪毎日新聞社と成城小学校の共同でパーカースト女史を招待して、東京で3日の大講習会を開き、ついで仙台、富山、金沢、奈良、大阪、京都、松山、彦根、熊本など20ヶ所ほど廻って、大震災後の日本教育再建のようすをばらさでであった。

成城小学校は大正6年に澤柳先生がはじめられたのである。大きな改革として、1組の定数を30人の小学級とし、学年のはじまりを春秋2回、つまり半年、12学級制だった。それは児童の個人差に応じた

〔※46〕 赤井米吉「ドルトン案20年」PTA会報『道』No.89（1972年9月）

教育をし、進んだものはいつでも半年さきの学級へのぼらせるというしくみだった。

だがその半年の「超級」を認定するのはだれか、何を基準でそれをさせるのか、それがはっきりしないで、いろいろ苦心されていたが、そこをドルトン案はよく教え、はっきりと行うことが出来るようにする。成城がドルトン案を実行し、宣伝したのはこうした教育的配慮からであった。

ところで、ドルトン・プランがわが国の教育者に注目されるにいたった理由はどこにあるのだろう。中野^{あきら}光氏はその著『大正自由教育の研究』の中で次の3点を挙げている。

- ①明治以降の学校教育について、子どもの能力・個性の違いを無視した「学級教授」を行ってきたとする批判が当時起こっていた。この学級教授の弊害の克服こそが目下の課題であると考えた立場の者にとって、分団式教育法、児童中心主義の教育、自学輔導法などの普及が、学級教授の弊害を是正する必然的動向であると考えられた。
- ②ドルトン・プランのかかげていた「自由・協同」という原理は、当時の大正デモクラシーの教育思潮と一致していた。
- ③このプランが学習方法を問題とし、教科課程の改変を要求するものでないことから、国家権力と対立することなく、一般的普及をみるに適したものであった。

先に赤井米吉を、ドルトン案の我が国における最大の紹介者の一人として記した。しかし、赤井自身次のように語っている。

かようにドルトン案を率先して紹介し、また成城小学校で数度、案そのままの形で実施もし、あるいは一部だけを試みてもみ、さらに大正13年4月この案の創始者ミス・ヘレン・パークーストの来朝した時にはその講演の通訳にも当たった。こうした事から世間には私をドルトン案の絶対的支持者のようにレッテルをはっているものもあり、したがってまた明星学園はその実験学校であるかのように想像するものもあった。だからここでわれわれはこれに対して如何なる態度をとったかを述べることは、創立当時の学園教育を考えるうえにおいて必要な一項であろうと思う。(※47)

結果から言うと、赤井はこの案のもつ精神から、そこに多くの善きものがあることを認めつつも、明星学園において全面的に実施することを躊躇した。その理由の一つは、このプランが教育の内容について語らず、学習の方法・形態の変革のみを問題にしている点にあった。赤井はこの学園において教材研究こそ起こすべきだと考えていた。

また、ドルトン案の児童の自由研究なるものは、参考書を目で読み、手を使って書くという仕事を多くした。それは独自的学習の長所ではあったが、一方この案では軽く扱われている人の話を聴く、人に口頭で伝えることの教育的意



虫捕り（1925年9月）

〔※47〕『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』P.38～42

味を彼は「読む・書く」とともに重視した。

さらに、ドルトン案の研究法では室内作業が多くなった。実験室で参考書を繙く学習が中心だからである。赤井らは田園学校としてスタートする明星学園において「1冊の書を手にして戸外に出て、森の影、田の畝に腰かけて自由な学習をなす」そんな学校をイメージしていた。

これらの理由をもってわれわれはドルトン案をそのまま採用することはできなかった。ただし、といってその全部を棄て去ることもできなかった。アッサインメントを指導案とし、あえて請負仕事の形式にはせず、学習の手引として、児童にこれによって自ら学習を進行せしめることとし、教師は常にこれを視守^{みまも}って必要な指導を口頭で行ったこと。あるいは、児童の能力に応じて進度を自由にしたこと。机は従来の1人、または2人用であったのを協同学習に便するために6人用の大机にしたこと。これらはすべてドルトン案に学んだものであった。いわゆるドルトン案そのものからいったら、われわれは決してその忠実な実施者ではなかったであろう。しかしわれわれはドルトン案以上に忠実でなければならぬものがあった。それは教育における結果主義を否定し、過程主義を重視することであった。ドルトン案においてもパークーストはそのことを主張しているのであるが、あのアッサインメントではどうしても結果主義に墮^おするおそれを十分に持ち、わが国にて実施したところでもそのために失敗している。(※47)

ドルトン案の紹介者として時の人となった赤井米吉は、ドルトン案の限界を批判的に乗り越えようとした。それは教育の内容と方法を結びつけて研究することだった。それを実現するために、明星学園の教師たちは教材の自主選択、編成という至難の課題に立ち向かっていくことになる。それが一つの形となって立証された。学園の教師たちの手によって国語の『新読本』第1巻が刊行されたのは、1926年（大正15）年のことである。

(3)『新読本』

1923年（大正12）3月発行の『教育問題研究』第36号（成城小学校発行）において、赤井は「教科書民間刊行論」と題し、次のような文章を記している。

教科書国定は我国教育の1エボックをなした。そは確に種々の重大なる使命を果した。然し昨日善かりしもの、今日は必ずしも善くない。時代は進む、社会は動く。時代と社会を無視して1制度を固守するのは策の得たものではない。

もはや国定の時期は去った。再び民間刊行の時期が来た。

教師、学校、社会、国家が課業^{せんたく}を選択し、児童は従順にそを受容れている時代には国定は賢し策であった。然し今や児童は自らの要求と願望を持っている。然して将来の社会、国家はかかる人を要求するのである。この新しい児童に社会に応ずる教科書は多種多様、人々各自らの書を発見し得られる様でなければならぬ。

近時盛に行わるる児童読物の研究が次第にかかる趨勢をつくりつつあるのは喜ばしいことである。教育界にこの輿論^{よろん}の益々高まらむことを祈る。

折しも、時代は新教育運動に対する干渉と弾圧を増していた。1890年の教育勅語発布を受け、議会で教科書の国定制度の建議があいつぐようになった。一方、文部省は国定修身教科書の編集に着手、1903年にはついに、それまでの認可制度・検定制度を廃止し、小学校用教科書の国定制度を決議、翌年、まずは修身・国語・地理・歴史から実施された。その後、教科書における筆者や

編者の独創性を発揮する余地は急速にしばんでいくことになる。

赤井が「教科書民間刊行論」を発表した翌1924年、川井訓導事件（長野県松本女子師範学校付属小学校の青年教師川井清一郎が修身の授業で国定教科書を使わず、森鷗外作品を副教材として使い、休職処分になった事件）が起きている。また、奈良女子高等師範学校付属小学校でも、教師たちが創り出した新しい実践が官製の教科構造をくずし、国定教科書の権威を無視する可能性ありとされて、弾圧されている。

にもかかわらず、この年3月、『教育問題研究』第48号において赤井は再び教科書民間刊行の重要性を高らかに宣言、同時に成城小学校を去り、明星学園の開校に向け着手するのである。

国定教科書の範囲内で自由教育論が唱導されているのは現代の一奇観であろう。児童の内的興味はむしろ研究方法よりも研究の対象にある。論者は国定教科書が児童の学習材料として最上のものであると認めるのであるか。学習は「如何に」の問題よりも「何を」の問題がより重要であることを考えないのか。

ある所では児童の環境を整理すると称して教室内にところ狭き迄に学習材料を羅列し、宛として古物屋の店頭の如くになっている。然し宇宙間の凡ての材料を教室に集めることは出来ない。この人達は如何なる標準によってそれ等の古物を蒐集羅列するのか。或る人は教科課程は全然児童の撰擇に任すべしと云う。然し児童は自らの知らない物を撰擇することは出来ない。彼等の見聞の範囲に於てするのみである。然らば彼等の撰擇範囲に如何なるものを置かんとするか。

教材論の起らざるは我教育界の浅薄と怠惰を意味する。曾て教科書の民間刊行を論じたのもこの意味からであった。再びここに論じて識者の注意を促す。もし「教材」と云う言葉が嫌なら「学材」とでも言いなさい。児童の練習事項のことである。

教材論をなすときにまずブツかかる問題は教育理想論であろう。夫から児童心理の問題、社会文化の問題にも逢着しよう。然し児童に対して明瞭な答をなしうるものがあるだろうか。

教材論の起らざるも宣なるかなだ。

浅薄と怠惰の我教育界は如何に「方法」の問題に花が咲いても実は永久に結ばない。情ないことだ。

明星学園が開校し、共同研究の成果が実を結ぶ。国語の教科書『新読本』である。巻一が1926年（大正15）に、その後、巻五まで刊行された。

明星学園編の『新読本』は、当時の国定教科書「ハナハト」読本（『尋常小学 国語読本』1918～1932）を批判的に乗り越え、1933年に改訂された国定教科書「サクラ」読本（『小学国語読本 尋常科用巻一』1933～1940）に大きな影響を与えた。

「ハナハト」読本が単語の羅列から始まっているのに対し、『新読本』では反復を含めたりズムを重視している。また、季節感もあり、子どもたちにとってより親近感のある構成になっている。1926年（大正15）5月25日、集成社から発行された巻一の序文「児童の為に此の読本を撰擇される父母教師の方々に」の中で赤井は次のように述べている。〈※48〉



自主編成の教科書第1号

〈※48〉『新読本』巻一は1926年（大正15）5月に集成社から発行された。その後1938年（昭和13）に改訂版を文進社から発行した。

幸い私達のそれへの努力は立派に文部省の改正讀本の上に實現され、その方法は編纂方針の内容形式を通して十分に承認されました。

結局それはこの讀本を使用する事によって、國定教科書の教育目的をより深くより廣く徹底した上に國語的教養を一層豊に培い得る事を意味して居ります。

以上日本の教師父兄諸氏に之を頒ちたい趣旨の一端を述べて批正を仰ぎます。

この讀本は教師と父母と児童とが共同して作ったものです。讀本は單なる読み物とは違わねばなりません。單に読んでその内容を知ったり、感じたりすること以外に読む力を増すという要件が備っていないければなりません。児童が好んで読むから善い讀本だとも言われず、文字や語句を系統的に排列したものが善い讀本だとも言われません。児童の現在に立って将来を眺めたものでなければなりません。従って讀本は児童の読書力——（形式的に、内容的に）——（趣味的に、研究的に）——の発達と同様に發達的でなければなりません。この要件を十分に満たすには児童の發達相を十分に知らねばなりません。然しこれは容易なことではありません。心理学はまだ極めて概念的なものを教えるのみです。私達大人の記憶はもう朦朧としています。また、よしや明かに幼児を追憶し得ましてもそれは現代の児時にしっくりすることは出来ません。こうして多くの児童讀本はまだ児童の發達相にぴったりしていない様に思われてなりません。そこで児童と共同して作ったならば彼等自ら適当なものを選んで私達大人の想のどこかぬところを補ってくれるだろうと考えたのです。こうして出来たのがこの讀本です。



1918 年（大正 7）～1932 年（昭和 7）に使用された国定教科書『尋常小学国語讀本』。
この通称「ハナハト」讀本は全国各府県の三分の二以上で使用された。



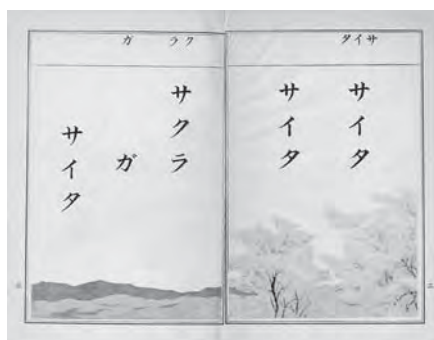
照井猪一郎著『新讀本』巻一 1926 年（大正 15）発行

然しそれも容易な仕事ではありませんでした。まず最初にこれを企てたのは我学園の照井猪一郎先生でした。児童の読み物として適当しそうなものを全部謄写刷にして児童に与えて、その中で児童の好んで読み行くものを見つめて行かれたのです。次に照井げん先生が、その次に霜田静志先生、大高義一先生が先に選ばれた物を修正して、また児童の反応状態を見つめて、前後 3 ヶ年、4 人の教師と 100 人余

りの次々と入り来る児童によって作られたものです。その為に要した謄写刷の紙は数万枚に及びます。材料を探したり、作ったりして、これを謄写原紙に書き、いよいよ謄写しているうちに夜を徹したことはどれだけあるか知れません。更に児童に与えたものは必ず一応は父母の方々にも目を通して貰いました。そしてその感想、忠言も聞きました。中には文字の使い方、文章の構成について迄も細かい注意を与えて下さった方々もあります。またこれをまとめるについては数次の職員会を開いて、山本徳行先生や私も加わって色々と推敲すいこうもしました。装幀は松岡正雄先生がやって下さいました。こうしてこの読本は我学園に關係のある凡ての教師と父母と児童が一緒になって作ったものです。

す。まだ十分とは言われませんでしょう。他の教師、他の父母の方々が他の児童に与えて御覧になったら、あるいは多くの欠点を見出されるかも知れません。それはむしろ私達の期待するところです。私達の過去3年の研究をひとまずまとめて提出して、広く多方の士のご批判に訴えたら更に改善の暗示を与えられることだろうと考えまして、こうして世に出して見ることになったのです。児童の教育に興味を持たれる教師、父母の方々がこれを児童に与えてその反応の状態を凝視して、忌憚なき御批判を与えられるよう切に御願致します。私達はそれによつていよいよこれを完全なものにしたいと思います。

大正15年4月 明星学園にて
赤井米吉



1933年（昭和8）発行の国定教科書
『小学国語読本』、通称「サクラ」読本

（4）さまざまな実践

1) 低学年における自然科の授業

当時、文部省が定める教科課程では、小学校低学年に理科は置かれていなかった。「独り理科に限ったわけではなく、歴史にしろ、地理にしろ、方法さえ適当であれば低学年においても現在よりはもっと適切に指導し得ることは確かであるし、4・5・6学年まで打ち捨てておいていい筈のものでもないのである。したがってこれらの学科のみを、殊に4年5年にくりのべたことについて、その理由とする根拠がいかにも



薄弱であった」と照井は言う。「そこで専門的な知識を授けるのでない限り、低学年には低学年なりの理科があり、地理があり、国史があり得るということは常識的にも考えられてきた」。(※49)

事実、低学年の「理科」は、心ある教師たちによってかなり早くから「自然科」「直観科」「観察科」などの名称で提唱され、実施されてきた。成城小学校でも「自然科」と称して、広大な戸山が原を教場にさまざまな実験の実践を行った。照井は成城での実践をさらに深め、同僚たちと一緒に研鑽を重ねた。

〔※49〕 照井猪一郎『自然科の究明』明星パンフレット第1輯（1931年10月）

照井らは、自然科は低学年の理科であると位置づけた。そして何よりも自らを戒めたのは、プログラムの配列のままに、ばらばらな教材を知識として蓄積させようとする指導者の態度であった。既成の知識をばらばらに頭につめこむだけでは意味がない。「私達は自然界を、出来るだけ生命あり、統整あり、調和あり、節理ある機構として理解させたい。選択する材料もこの目的を破壊することなしに、たといその一部を提供することは余儀ないとしても、それは全体とつながりを持つことを明瞭ならしめて欲しい」。(※49) これが彼等のねがいであった。

さらに、児童の自発活動を重視した。そこから、児童に絶えず科学上の疑問を提出させ、教師の介在の下にこれを協同的に解決することによって、低学年における理科教育の目標を達成しようとする実践が生まれた。

井の頭の地は自然の無限の宝庫であった。照井はダーウィンさえ驚嘆したという、あのファールブルの態度を子どもたちのどこかに植え付けたいとねがった。彼はまた、教室に容積約50リットルのガラス製の大水槽を2個おいて、子どもたちに1年のときから水棲動物を飼育させた。「子どもたちはこれを眺める。私はこれを眺めさせる。3年の間これを継続して来た。今ではこの水槽のミズスマシ1匹だって子どもたちの親しい仲間である。……子どもたちはよく『ゲンゴロウも3年生になった』と言う。彼等は彼等と共に水槽の動物たちもこの教室で生活し卒業することと思っているのであろう」。



1935年、新宿伊勢丹デパートで
「井の頭付近の水の昆虫」の展示

照井は『自然科の究明』の結語をつぎのように記し、児童の作文で結んだ。「子どもの眼にうつった自然界の一現象、これを取りこむ子どもの態度、子どもの人生観の反影——なんとわざとらしさのない素直さであるかを見よ」。

これらの実践は脈々と、現在の小学校低学年の「みいつけた」の取り組みへと連なっている。

2) 霜田静志『芸術を基調とせる低学年の教育記録』

霜田静志は明星学園創立の翌年、1925年（大正14）4月から1931年（昭和6）3月まで、小学校第4回生の教育を6年間担当した。そのうち第1・2学年における教育実践は、2冊の著書『芸術を基調とせる低学年の教育記録』(※50)、『低学年児童の教育』(※51)に詳細に記録されている。

ここでは、まず、そのような実践をするに至った経緯を略述する。

霜田静志（本名利平）は1890年（明治23）、埼玉県に生まれた。赤井・照井より3歳の年少である。東京美術学校（現東京芸術大学）図画師範科を卒業し、熊本県山鹿高等女学校と4つの小学校を兼任。肺患による4年間の闘病生活ののち、埼玉県立女子師範学校の教壇に立った。ついで1921年から成城中学校の図画科嘱託となり、翌年から成城小学校の図画手工科嘱託を兼ねた。

（※50） 霜田静志『芸術を基調とせる低学年の教育記録』（平凡社、1927年3月10日）

（※51） 霜田静志『低学年児童の教育』（刀江書院、1935年4月15日）

それと並行して東京帝国大学文学部の聴講生として美学美術史を専攻している。この頃から霜田の美術教育に対する研究は大きく進んだ。

当時すでに山本^{かなえ}鼎によって自由画教育運動が提唱され、沈滞した図画教育に爆弾が投じられていた。霜田はこの運動に共感を覚えながらも、満足しきれぬものがあった。——自由画教育は図画教育に革新をもたらしたが、所詮は絵を描くことにほかならぬ。しかも自由画といいながら、ひたすら風景と静物の写生に終始して



霜田静志先生と子どもたち（4年生）

いる。これは子どもの絵としてそのまま肯定しうるかどうかが疑問である。アメリカなどでは、子どもの生活環境に現れるあらゆる事象を描かせることが盛んだが、これは風景・静物以上に子どもの表現の興味の対象であり、心理的に見ても重要なものである。図画教育においては、風景・静物の写生ばかりに傾くことなく、もっと子どもの心理に合った生活表現、童謡・童話等の絵画的表現を大いにさせるべきだ——と霜田は説いた。

図画教育をこのような広い意味の美術教育と考えるようになった霜田は、この教育は美術の教育であるよりは、美術による教育であり、美術による人間教育であるという立場に進んだ。この立場からは、もはや絵画や工作だけが問題ではない。さらにそれ以上に、音楽も、童謡も、子どものつくり方も、劇や舞踊も問題になってきた。

こうして、霜田は総合的な芸術教育運動に乗り出した。幸い澤柳政太郎が理解してくれていたもので、澤柳を会長とする芸術教育会を組織し、1923年（大正12）4月、機関誌『芸術教育』を創刊した。顧問には坪内逍遙、正木直彦東京美術学校長、有島武郎、島崎藤村などを迎え、同人も多彩な顔ぶれであった。しかし、この年9月の関東大震災で大きなダメージを受け、『芸術教育』も最初の予想ほどには伸びていなかった。なんとかして存続させようと努力をつづけたが、ついに廃刊のやむなきに至った。

霜田は、振り出しにもどって教育の実践に徹しようと思った。この決意を当時創立したばかりの明星学園の赤井園長に話したところ、赤井から「それだけの考えがあるなら、ぜひ明星に来て君の思うとおりにやってくれ」と言われた。そういう経緯で小学校1年の担任となり、6年間の生活を共にすることになったのである。

霜田静志は、芸術教育を理解せず知育のみが教育であるように考える風潮を批判した。

国語や算数の出来る子どもがいつも優秀な子どもと考えられ、図画や工作や音楽のようなものの上手な子どもが、どれほどうまくとも、国語・算数のようなものが出来なければ、劣等な子どもと考えられやすい。これははたして何によるのであろうか。いうまでもなく、これは大人の功利的見地からの判断である。文字を多く覚えれば処世上どれだけ得とか、算数がよく出来ればどれだけ便利だとかいう、全く功利的見地からこれを考えるからである。真に児童の発達の本質的方面から考えるのではなく、現代の大人の社会から見ての功利的見地でのみ判断しようとするがためである。（※51）

霜田が求めたものは「大人の功利的な見方を捨てよ、そして純真な子どもの心に^{つちか}培え」というこ

とだった。国語教育においても、芸術性・文学的領域の重要性を主張した。低学年への指導方法では、学習を詩から始めたり、お話に絵を利用したりもしている。算術の学習も物売りごっこのように遊戯化され劇化される。「私たちの学園では、1年では本当の算術らしいものはやらないが、児童の生活の中に現れた数の問題を取扱い、遊戯の中から数の経験を導き出すことにしている」。(※51)

理科教育においても、従来の物を機械的・物質的にのみ扱う傾向を批判した。一輪の花を見るにしても、分解的に見るだけではなく、総合的に見ることの重要性を主張した。

「花卉が何枚だ、雄蕊が何だ、雌蕊がどうなっていると、詮索するだけではいけない。花そのものを知るためには、その成り立ちを調べると同時に、美しく咲いている花そのものの姿を、そのままに見、そのままに受け入れる必要がある。……切れ切れの物質と見ずして、花そのものを一つの生命として見る。そこにわれわれは尊い価値を見出す。言わばこれは芸術的態度によって物を見ていくことである」。(※51)

美術教育では製作だけではなく、作品を鑑賞させることにも力を注いだ。児童に絵を描かせた後は必ず展示し、どれがよくできたかを比較判断させた。もちろん鑑賞の対象は児童作品だけではない。芸術的に優れていると思われる童書家の作品から始め、有名な美術家の名作にも触れさせようとした。

「私はお話による美術鑑賞の教育を試みている。作品を示し、その絵の内容を語り、作家の生活を語ってきかすと、尋1の児童でも教師の取扱い次第で、相当に興味を持って聴くものである」。(※50)

最後に訓育の問題について彼の主張を記しておきたい。学園では1年から3年まで、修身科をおいていないが、児童はお談義めいたことを言われなくとも、日々の生活でしだいに社会生活意識が発達し、しだいに自己を知り、協調の精神を尊ぶようになるのだと言う。

「訓育は決して、子どもに徳目を教えてこれを守らせて行く方法によって徹底するものではない。何々すべしと教えてこれを守らしむべく強制して行く方法は、教育としては拙の拙なるものである。子どもには子ども同士の社会生活の中から、お互いを守るべき道徳を学ばせ、これが必要を感じしめて、これを実践せしむよう指導すべきである。私はこの立場から子どもの社会性を発達せしめ、その道徳性を高めることに専ら力を尽した」。(※51)

受持ちの子どもらが4年生になった1928年(昭和3)4月から10月まで、霜田はヨーロッパに出かけた。チェコスロバキア(当時)のプラハで開かれる国際美術教育会議に出席のためであった。

この渡欧によって、霜田はいままで文献でしか知らなかった外国の美術教育にじかに触れることができ、書物や文通を通して知った学者、教育家、美術家等と親しく語る機会を得た。また、それ以上の大きな収穫は、国際美術教育会議への出席に先立ってイギリスに渡り、徹底した自由と自治で知られるA.S.ニイル(※52)のサマーヒル学園を訪ねてニイルに会い、1週間子どもたちと生活を共にして、その教育の実態を見とどけたことであった。

霜田はヨーロッパからの帰途、35日を要する船旅のあいだに、ロンドンで買い求めてきたニイ

〈※51〉 霜田静志『低学年児童の教育』(刀江書院、1935年4月15日)

〈※52〉 アレクサンダー・サザーランド・ニイル(1883-1973)。イギリスの新教育運動の教育家。ロンドン郊外にサマーヒル学園を設立し、精神分析と心理学に基礎をおく、徹底した自由教育を実践した。

ルの新著『問題の子ども』を熟読した。一節一節に心をうたれ、この本の翻訳を決意した。『問題の子ども』の翻訳は、霜田自身の研究を児童心理と精神分析へと方向づけることとなった。また、霜田静志訳『ニイル著作集』全10巻（黎明書房）は1967年～76年に刊行されている。

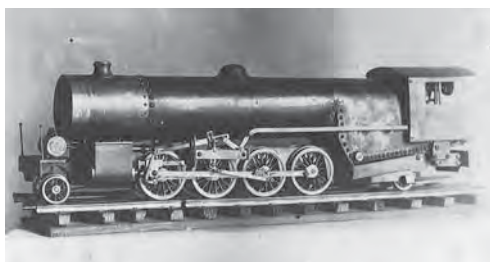
3) 霜田静志の学力観

昭和初年、とくに1930年代には、都市の新中間層の間で進学競争が過熱した。そうしたなか、霜田静志は明星学園小学校を卒業した長男光一（6回生）^{（※53）}を、府立中学ではなく明星学園の中学に進学させた。ある母親から「府立中学へ入れる学力があるのに惜しい」と言われたときの霜田の返答に、霜田の教育者・保護者としての想いが表れているので以下に要略する。

「私の子供も勉強させ受けさせれば、府立の学校に入れるかもしれません。しかし私の子供は今、そうした試験準備の勉強などとは縁の遠い勉強をしているのです」

「機械をいじるのが好きで、真鍮板だの針金だのを切ったり曲げたり叩いたり、電気の玩具か何か作ると言って、毎日ガチンガチンやっているのです」

「子供が好きでやっているこういう仕事は、子供の将来に何か役立つ大きな力となると思うので、これをやめさせるのは惜しいと思うのです。府立に入る準備をするとすると、こういうことを一切やめさせて、毎日教科書の丸暗記の勉強をさせなければなりません。それは子供にとって余りにかわいそうなことです」



霜田光一少年製作の蒸気機関車
中学4～5年頃に苦心して作った。実際に蒸気で走る。

霜田はさらに、つぎのように書いている。

子供が科学玩具の製作に夢中になっているということは、それ自身尊い体験活動であって、それが後に進むべき専門的研究に役立つ役立たないはどうでもよいことである。もちろん後に役立てばそれに越したことはないけれども、役立たぬからとて無駄ではない。子供はこうした仕事に熱中している間に、知識を実際化する方法を学ばし、その間に工夫創作の力を十分に進め得るからである。^{（※54）}

霜田の長男、光一は物理学者となり、レーザー・マイクロ波・量子エレクトロニクスなどの研究で物理学界を牽引した。大学教授として、また小学校理科・中学校科学・高校物理教科書の代表著者を務めるなど、教育にも力を注いだ。

〈※53〉 霜田光一 第6回生。東京大学名誉教授。2008年（平成20）11月、文化功労者顕彰。

〈※54〉 霜田静志「子供をめぐる親と教師の問題」日本児童社会学会編『今日の子供を如何に教育すべきか』（刀江書院、1936年）、復刻版：児童問題史研究会監修『現代日本児童問題文献選集17』（日本図書センター、1987年）

2 創立期の子どもたち

(1) 通学

現在、小学校の最寄り駅は井の頭公園駅であるが、創立当時はまだ井の頭線もなく（帝都電鉄＝京王井の頭線の全線開通は1934年・昭和9年）、吉祥寺が最寄り駅であった。

子どもたちは吉祥寺駅から井の頭公園を通り、池にかかる橋を渡って通学していた。当時の写真にはランドセルを背負った子どもたちがうっそうとした杉並木を通学しているものや、霞がたなびく池の橋を渡っているものがあり、さながら遠足にでも出かけているような風情である。

当時の様子を赤井米吉は以下のように語っている。

大正14年1月には1年22人、2年16人、3年19人総勢57人になった。武蔵野の冬は霜が実にひどい。朝は雪の降ったように白く地を蔽っているが、10時頃からぐしゃぐしゃに解けて、道も庭も野原も沼田のようになってしまう。靴の土は雪国の下駄につく雪のようで、それが教室の中までも入って来るのには閉口した。児童は自然廊下だけで遊ぶようになった。こんなことだったら廊下をもっと広くするのであった。但し南に廊下をつけたので、ここで遊べば、晴天でさえあればいつでも春のようにぽかぽかしていた。

雪の朝は教師は吉祥寺駅まで児童を迎えに行った。公園の杉並木の雪路をのぼって来るのは私のような雪国に生まれたものにはほんとに嬉しいことであった。私はしみじみと幼かりし昔の通学路を思い出した。特に寒い日には昼食に豚汁を造って皆で啜った。小さな群ではこんな事も出来た。

3月になると上水の土堤の南側にはタンポポ、スミレが咲き出し、ボケが紅の唇を見せ出した。やがて薄い霞がたなびき、雲雀が鳴き出した。天地の生命が復活して来るのを児童が1日1日とみつめて暮らすのもよいことであった。こうして明星の第1年は終わった。(※55)



井の頭公園の中の橋（現在の七井橋）を渡って登校する子どもたち（1928年頃）



通学路（井の頭公園入口）の除雪をする6年生（1936年）

(2) 初期のころの学校の様子

開校当初の児童は1年生7名、2年生5名、3年生9名の総勢21名であった。それに対し創立同人の4名と職員夫婦、敷地は1,000坪、校舎は3間×4間の教室五つに事務室、小使い室、物置、便所というスタートである。

教室は2年目（1925年）に高学年用の教室を2



水棲昆虫の飼育

(※55) 赤井米吉「明星五年」『混沌』第8巻第1号（1929年1月22日）

教室増築し、4年目には音楽室や図書室を別建物にするなど、順次広げていった。4年目になると児童数は6学級で160名、教員は10名という規模であった。

創立から数年経った頃、照井は校庭の隅に小さなコンクリートの池を作る。金魚や鮎、鯉を入れて、その後池の中にはミズカマキリやコオロシなどの水棲動物が自然に繁殖していった。池にはチョウやトンボ、ホオジロやヒキガエル、ヤマカガシといった多くの生き物が集まり、そこでは生物界の食物連鎖を観察することができた。教室には大小二つの水槽を置き、水棲昆虫や、貝類、魚類、藻類などを入れて教室内でも生き物を観察できるようにした。常に小動物や昆虫など、自然を身近に感じることで、それらに対する興味や観察眼が養われた。教室の南側にタタキの廊下を置き、教室からすぐに庭に降りられるような構造にしたのも、児童をできるだけ外へ、土のある場所へ出そうとした工夫である。これは100年経った今でも、子どもたちの生活の中に引き継がれている。

創立期の校舎は一面の麦畑と雑木林に囲まれていて、この環境を様々な形で利用した。

校庭の一部を畑にし、作物を育てた。また夏には近くの農家へ行って馬鈴薯を収穫した。林の中で読書・算数・自然科・図画の教授がおこなわれたこともあった。秋になると近くの森で茸狩りや栗拾い、畑では芋掘り、大根引きなどをおこなった。また真冬の夜には天体観察会をおこなっていた。

その頃の授業の様子を、当時の小学部教員、中村勇がつぎのように書いている。

創立の頃

1年生は教科書は「明星読本」1冊だけで、ランドセルにはいっている物は弁当・ノート・クレパス・筆箱・ブロック・ナイフ・ものさし・虫めがねなどのたぐい。朝学校で頭数が揃うとランドセルを背負って森へ出かける。門を出れば林があり麦畑があり原っぱがあり、柳の土手があった。



林の中で授業



校庭の水たまりでトンボ捕り



畑づくり



小学校校庭で金星と土星の連続掩蔽（惑星食）を観測する5、6年生（1933年12月20日）

森の中で話を聞いて歌を歌って、本を読んで、絵をかくて、蛇やとかげを追い回して、木登りをして、蜂の子を食べたり焼き芋をしたり、苗代の泥に靴を取られたりした。〈※ 56〉

(3) 第1回生・2回生の生活

卒業生が、当時をふりかえって記した文章から転載する。

1) 山本組 岸（横井）^{えいこ} 叡子（1回生）

理科（自然科） あざみ、りんどう、提灯草等の咲くかたわらで、日向ぼっこしながら土手に足を投げ出して、めいめい読んでいた「花の巻」は、自家受粉とか風・虫媒花等に1頁使い、写真も数多く、ピンクの厚い表紙も他の教科書と違う手応えがありました。

赤いボケの咲く人喰川（玉川上水）の向こう、三鷹まで歩いたのは白亜の天文台への遠い道でした。途中の林の中では、笠の裏が青変してくる初茸もよく見つかり、草にさしてぶらさげました。揃いの帽子の中へ女兒はれんげ草、男児はどじょうを入れて、宝物のように持ち帰った日は、何をしに行ったのでしたかしら？

顕微鏡の中で4本糸を手足のように踊らせてるつくしの胞子は、何回見比べてもガラス版の上の緑の粉でしかありませんでした。

学校の井戸端の朝顔棚は衝立のような形で大きく、その花の下で「黒いなあ」と先生は私の首筋の日焼けぶりに呆れて、さもおかしそうでした。

小使室のまわりは、山羊、鶏、猿、兎、蜜蜂の大家族で、お爺さんもお婆さん（用務員）もそのお世話で忙しかったでしょう。

地理 全員土を掘り、山を築いてグループ製作。1坪関東地方が五つ六つ。お互いに見比べ、富士の頂上へ一握り加えたりしました。

日本史 先生のお得意の教科。「羽柴どのー」と大声で片手をあげた時の先生の位置も、向きも、空の晴れ具合までも、テレビの実況放送に負けぬ印象を残しました。勇ましく切腹した武士が誰だったのか思い出せなくても、「遠き者は音にも聞け、近きは寄って目にも見よ」は耳の底に響いて、やはり読んだ話とは違います。あの調子で「板垣死すとも自由は死せず」を聞いたかったと残念です。

数学 何より私の苦手。鶴亀算なんて面倒くさい。それどころか、立てた棒の数よりもその間隔の方が少ないという事実は、自分で運動場へ10本立てたて歩いてもお狐につままれた気分。そんな子でも時が来れば「2点間の最短距離」だの、「長さだけで太さがない」等とお話変われば如何にも学問らしい観方が新鮮で、面白ければわかる。わかり始めれば優秀組入りと、土台作りは



鳩小屋の観察

〈※ 56〉『明星の年輪—明星学園 50 年のあゆみ』（1974 年）P.119

先生、苦労していただいた甲斐がありました。

国語 教科書は白黒（表紙）双方こなした筈にもかかわらず、中身の記憶がなく、自習書でコツコツやったこと自体が身に付き、今も辞書へは気軽に手が出ます。『新読本』（明星学園編纂）と、先生が刷って下さった童謡はいくつも覚えています。ストーブを囲んで『坊っちゃん』を会読した頃が、児童文学から純文学への入口。良い本できっかけを作って下さいました。教室の図書棚には児童文庫・小学生全集がずらり。中でも「クオレ」と「小公子」は素敵、未明も三重吉も懐かしい。

落伍者を出したり順位を発表する必要がないから試験はなかったが、自習の後始末として覚えるまで簡単なテストが繰り返されました。のんびり屋は予告されてもその日を忘れて遊びほうけたもので、テストが明日に延びると聞くと、「ああ助かった」を何気なく連発し、「そうか、助からんところだったんか？」と先生はニヤニヤなさいました。

図画 この時間くらいは松岡先生へバトンタッチして一服なさっても差し支えなかったでしょうものを、先生は折れそうに細い腰に似ずエネルギー。丘の草むらで生徒の間へ座ってパレットを出し、自画自賛しつつ松岡先生が廻っていらっしゃるのをお待ちになる。これだから学校というよりも「先生との生活」という実感が生まれたのでしょうか。

「この絵、うまいでしょう？」と或る放課後、私を招いて、教育誌の扉絵をお見せになりました。白い丸花瓶に菊かボンボンダリヤのありふれた構図。大写しの無彩色なので、まさか自分の水彩画だとは気付かず、うっかり「ええ」と答えたら、先生は写真の下に置いていた手を除けられました。自分の名が印刷されてそんなところにあるとは！ 実物以上に見えてついひっかかった驚きは今に至るまで。（この日「扉」という言葉を知りました。）

音楽 めったに休まないげん先生がお休みだった日、やっぱり音楽室に入りましたが、ピアノはそっちのけで、小椅子を半円型に並べ、向い合わせて山本先生のも小さい椅子を置かれました。端の人から順に好きな歌を独唱させていくうち、少人数なので全員終わっても時間は余りました。



ドンドン山（現在、三鷹三中がある付近）でスケッチ

「今度は先生の番」と立って、出来る限りゆっくりと荘重に「児島高德」をお歌いになり、終りの方は気持ちよさそうに歌っていらっしゃいました。その後いつだったか、放課後、先生はひとりでピアノを弾きながら「故郷の廃家」を歌っていらっしゃった、あの時はしみりした空気が漂っていました。^{（※57）}

2) 照井組 出口（茶郷）喜久子（2回生）

国語の授業 『国語読本』などというものがあることすら知らなかった私達は、先生はいつも読み物を作って下さるものと思っていました。その読み物は章の終りに問題と新しい漢字が書き抜いてあり、解答が出来ると一人一人見て頂き次に進むわけです。

先生独自の軽妙な筆致の挿絵が物語を一層楽しさそいこんで、次の読み物を頂くのがどんな

（※57） 山本徳行著『峠』（1977年4月5日）所収

に待たれた事でしょう。「羅生門」、「曾我物語」、「竹取物語」、「人魚姫」、「安寿と厨子王」等々、読解力に応じた文章に書きなおされ、新漢字を組みこまれてまとめられるのです。しかもグループによって違った題材の読み物を作られるのですから、その御苦勞は口につくせぬ感謝の思いです。

畑仕事 今の中学校のあたりでしょうか、畑を子供達に開放して下さって、2人1組に区切られた小さな農園は、都会育ちの子供達にとって裸足で踏む微妙な土の感触を楽しませてくれました。自分達の手でまいた種の発芽・成長の驚きと興味。朝ごとの手入れをはげんで、収穫をくらべ合う時の楽しさ。自分の名入りの鍬や手足を洗う時など、井戸端で誰かがポンプを替る替る汲みあって、大騒ぎした後の爽快感も今なお肌に残る感じがする程です。



バラック校舎 設備も実績も名声もなにもない、そんなささやかな学園へ大切な子供達を、親達が大きな夢を描いて託されました。その勇気と熱意と信頼こそ、どのようにか尊く美しく、明星をささえる礎となった事と確信せずにはいられません。

子供達は不便な電車を乗りついで、そそり立つ深い杉並木の公園の道を、繊細な心をときめかせて通っていました。

赤井先生、照井先生、おげん先生、山本先生。当時はまだお若く、新教育の創造へ身を挺して邁進していられました。その燃え上る情熱の火は、御父兄の方々の厚い信頼を得てこそ、開校の日、雨のしほきにもめげず列席の人々の顔に、希望の輝きを満ち溢れさせたものと信じます。

通学路 当時の通学路は長橋を渡らずに弁天様の前の急な石段を上って、縁台を並べた休み茶屋の前の小径を辿り、今の井の頭会館の前あたりに通ずる道を通して通学する時期がありました。ちょうど梅雨時のしとしと降りつづく朝など、御茶の水のあたりは大杉の根元そこかしこから澄んだ清水がこんこんと湧き出でいて、一面に黒小豆をまきちらした様に小さく動く小蛙の大群と知って驚き、踏みつけずにはどうしても歩けずに、思わず足がすくみ、つまさき歩きでとびとび通った道すじの雨に洗われたあの鮮やかな緑の美しさと共に浮ぶ思い出の一つです。



吉祥寺駅北口から井の頭公園の杉林を通して学園へ。
1934年3月までこの道が通学路だった。

学芸会 教室前の歩廊を舞台にした学芸会で、照井先生作の児童劇がたびたび上演されました。見物のお母様方は庭に椅子を並べて楽しむその目は日ざしさえなごんで、親、子、教師のかもし出す、明星らしい風景でした。教室が楽屋で装置も衣装も工夫をこらした手作りで、子供らしく懸命にはりつめた目は真剣に輝き、協力して成しとげた喜びと充実感に充ちていました。(※58)

(※58) 「遠き日をふりかえりて」『明星学園後援会会報』5号(1969年7月10日)

3 学校と家庭の連携

(1) 母の会の活動

創立3年目に入ろうとする1927年（昭和2）の1月、「明星学園母の会」が生まれた。その経緯を赤井学園長はつぎのように記している。

児童の教養に母の力の大きなものであることは今さういうまでもない。したがって学園の仕事にも私たちはできるだけ母の共働を求め、これを学園の教師の一人とみなそうと考えた。それは単に児童一人の問題に対して教師と母とが十分に連絡しようとしただけでない。母親たち相互の間の理解と同情と共働をも望んだのである。

一村一校のところ、祖先代々その村で暮しているところでは、学校によらずとも父母は互いに知り、また互いの児童を知っている。何某は誰々の子どもとよくわかっている。しかし私たちの学園のように寄り集まったところでは、特別に学園を中心としてお母さんたちが集まって来なければ互いに知りようもない。30人のお母さんたちがみな30人の子どもを持ったつもりでと希ったのはそのためであった。創立の初期、まだ学園の教室に余りのあった頃、その一つを母の部屋としておいたのもそのためであった。

教師と母との連絡だけならばお母さん一人一人学園に来てもよければ、教師が家庭訪問をしてもすむ。しかし横の連絡のためには母の会を開いてときどき一緒に集まる必要がある。こうして学期学期の母の集まり、ときおりの母のための講演会等、ずいぶん頻繁に母の会合を催してきた。お母さん方もその意味を理解してよく学園に来てくださった。いろいろな仕事の手伝いもしてくださった。

大正14年の夏、15年の夏、有志の児童をつれて神奈川県三戸の海岸で10日の生活をしたときのごときは、つきそいのお母さん方によって炊事の方はことごとく引き受けてくださった。ことに15年の夏行ったときには、一児童は猛烈な疫病にかかって、一時は危篤の状態にまでも陥ったが、つきそいのお母さんの方がわが子のように看病してくださったのは、ほんとうにうれしいことであった。

こうして1年、2年と年を重ねるうちに、学級学級でお母さん方の交わりが密になり、やがて他の学級との間にも交わりが加わり、ついに昭和2年の1月には、母の会として形の備わったものがお母さん方の間に生まれてきた。それは互いの親睦と修養と学園の手助けを目的とし、年1円の会費で講演会の開催、盆暮れにおじさん・おばさんへの心付けなどを事業とする。さらに有志の人々は自分の小遣いを節約して学園と教師の危急の場合のためにと献金してくださった。それはただ今までにおよそ2,000円になっている。苦しい学園の生い立ちを助けはぐくんだのは、やはりこうした母なる人々の心からの同情であった。児童の教育そのものにおいて、学園の対社会の問題において、私たちがしばしば失望の淵に沈淪したとき私たちを慰め、励まして、学園をここまで押して来たものは私たちのお母さん方であったことを忘れてはならぬ。（※59）

この「母の会」の熱意が父親たちを動かして、中・女学校創設の資金づくりを目的とする「明星学園後援会」を発足させたのは、その年の2月であった。また、バザーも母の会の活動のひとつであった。たとえば、1931年5月、学園創立7周年記念事業として、母の会主催のバザーが開かれた。『明星の教育』第1年第4号（1931年7月）の巻末、「学園便り」につぎの記事がある。



『明星の教育』第4号表紙

〈※59〉 赤井米吉「明星5年」『混沌』第8巻第1号（1929年1月）、『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』『同一60年のあゆみ』に再録

- ・母の会主催でバザーを開く。この日の純利益 600 余円。目下その金を如何に効果的に費消するかに苦心擬議中とか。明星はかくして力強く支持され、発展して行く幸運を持つ。
- ・お母様方のバザー開催の熱意に動かされ、これを援助する立場で、この日小学部では学校劇を催した。表紙の写真は当日演出の「退屈な王様」の一場面。照井氏おおわらわでの演出指導に好評で酬いられた。この日のプログラム。「お地蔵様は知ってるか」1・2・3年。「退屈な王様」5年。「壺は誰のものか」4・5・6年。

(2) 学校・家庭・子ども

初期の学園では、母親とともに父親も学校と密接に連携し、授業参観をはじめさまざまな学校行事にも積極的に参加していた。2人の兄とともに11年間在学した久保田宏明氏（12回生）は、つぎのように往時を回想している。

私は明星学園が誕生して2年後の1926年（大正15）、東京・阿佐ヶ谷で兄弟3人の末子として生まれました。

両親は明星学園の教育方針に感銘し、当時は官尊民卑の公立優位の時代の中で長男を入学させ、続いて次男をも通わせました。そして、5、6歳離れた兄たちの経験をもとに私もその仲間に入れたのでしよう。当時の明星学園は、1学年1クラスの小さな、小さな学校でした。1学年20名という小規模な学校ということが、さらに両親の心を動かし、喜ばせたのだと思います。

当時の小学部は担任が1年生から6年生まで持ち上がりで、卒業させるとまた1年生の担任に戻っていました。私の担任は牧均先生という九州八代のご出身で、眼鏡の奥には優しさを秘めながらも、1年生の時からビシッと物を言われる大変厳しい先生でしたが、今でも一言一言が私の心の隅に残っています。九州弁で「センセイ」と言えず、「シェンシェイ」というアクセントが今でも忘れられません。父とはすっかり親密で、なんでも語り合える仲だったようです。私が大人になってからも、父はよく子どもの頃の話聞かせてくれました。

その一つに、私が1年生の時、牧先生が5つのリングを取り出し、「ここに同じリングが5つあります」と話し出した際、私が「先生、リングは大きいのも小さいのもあり同じではない」と言い出し、周りの友人達も「そうだ、そうだ」と騒ぎ出して、授業が続かなくなったことがあったそうです。先生は、職員室から包丁を持って来て、一番小さなリングに合わせて皮をむき、結局6つくらいのリングになってしまい、後に「大変な授業でしたが楽しい思い出の一つです」と父に笑いながら話されたとのこと。私は後に教育の世界に入って、明星学園の先生方が1年生の問題提起に対してそこまでやって下さったのだと、何か大きな示唆を与えられた気がしたものです。

また、当時の私立学校は、家庭との連携も大変密でした。もちろん明星学園もそうでした。運動会や学芸会の時などは、父母による模擬店の参加が慣行で、私の家がみつ豆の当番のとき、母は数日前から黒豆を煮たり、寒天に赤や緑色をつけたりして準備していたこと、そして当日は、出来上がったみつ豆の材料を大風呂敷に幾つも包んで、それを母の後からあの厳格な父が持って、阿佐ヶ谷の家から吉祥寺へ、そして井の頭公園を抜けて学校へ持って行ったことなどを思い出し、その姿を想像するだけで懐かしく、また微笑ましさを感じています。

そのように、私立学校では当時も広い地域から児童・生徒が集まっていたにもかかわらず、学校と父母・生徒の三者が密接な関係にあり、それが教育全般に良い意味で強い影響を与えていたことも確かです。

先にみつ豆を母の後ろから持って行った厳格な父と言いましたが、父は早稲田大学に学び、卒業と同時にフランス・ドイツに留学、帰国し、教授としてまた、政経学部新聞学科を創設したり、学部長としても力を注ぎ、博士論文であったフランス・ケネー経済学を生涯のライフワークとした、大変厳格な学者であったと思います。

しかし、母とは学生結婚という当時としては全くリベラルな考えの持ち主でした。私には学校の宿題をやるより多くの本を読むことをすすめ、小学生の頃にはシートンの動物記やファーブルの昆虫記、島崎藤村など日本の作家のものを、中学生になるとロマン・ローラン、ヘルマン・ヘッセやゴンクールの日記、アミエールの日記などの外国の作品を次々と持ち込んで読まされたものです。明星学園のような学校でも夏休みなどには宿題はありましたが、両親は宿題よりも読書や山歩きをすすめましたので、私は両親に隠れて宿題をやったものでした。

外では厳格な、そして、家でも書斎に閉じこもりがちな学者としての父も、土曜日の晩は必ず家族でトランプやダイヤモンドゲーム、コリントゲームなどを楽しみましたので、土曜日の晩が来るのを待ち遠しく思ったものです。そして、毎年夏休みには、信州の山で父が先頭になって草花を採集したり、昆虫類を追いかけて過したものでした。…中略…

このような父母の子どもへの接し方は、学校の保護者を巻き込んだ全人的な教育によるものと、明星学園に今でも感謝しております。(※60)

また、著名な版画家・装幀家の恩地孝四郎氏は、4人の子どもを明星に学ばせ、学園の教育を強く支持された。1934年（昭和9）の夏、伊豆伊東での4・5年生の夏季生活に参加、スケッチなどを指導、その体験記を『ほしかげ』に執筆された。

たった8日間であるが、多くの子供たちと一緒に暮らして、いままで知らずに、もしくは漫然としか感じていなかった彼らの世界を、新たに見直し得たことは私にとって甚だ幸いであった。僕はいわゆる漢学式厳格なおやじの下にあったため、例えばいろいろな所行なども善悪にはっきり割り切る心のくせがあるし、人間をとかく善玉悪玉に分けたがる。しかしああして40人からの子供のなかにあってその心の動きを見ていると、その行為を簡単に割り切ることのいかに難しいかを感じる。すべての行動がその環境のなかに於て必然であることを明確に知った。例えば結果に於て善でない行動にあっても、その成因を知るときに、その行動の必然性が知られ、その行動の成果については、そこに順致される所の環境こそ責任者であって、行動者に責任を求むべきではないことだ。児童に於て殊にそう観じたい。この事は、私自身の家庭にあっての子女の教育に関して、自省せられるものだ。

また、40人からの子供たちの精神が、各々やはりその性格の必然によって行動され、その行動の妥当さが、比較の容易さから、非常にはっきりと分ったことだ。これも私の家に於て4人の各々異なる性格——まだ性癖というべきものだが——の上にあてはめてその行動の善悪を簡単に律することの不当なのを悟られる。われわれの社会にあっては一つの道德律によって個を律する。この道德律に合致し難き性格者は、その行動を非妥当視されがちである。この一律主義は一般教育にみる弊であるが、この明星夏季生活の8日間で私はまた、明星教育の美点を讃美しなければならないものを味わされた。40人の一人一人に対する教導者の周到なる理解とそれに適応せる対応だ。この教育はなまやさしい努力では就せぬ。御定まりや、学習教育法では出来ないことである。児童に対する愛、私愛でない公の愛情、児童に対する細心なる不拘束、そして児童の心に立脚した教導。いままさに生きた教育の伸長性を感じた次第であった。若い魂の損なわれない発展、それを見ているような心持であった。40の子供の魂が密集した存在としてそこにあった。…中略…

集合した子供の世界は、一人一人の子供の生活とも違うし、ああした夏季生活の子供たちの生態はまた学



〔※60〕『親の役目—子どもをより善くするために—』（日本教育システム開発協会、2007年3月）

窓生活とも異なるものがある。五十嵐先生も教室だけで子供の全容を知るは難いといっていた。先生の細心を以てしてそうであるのかと思う。そして、こうした生活は子供を知るについてまことにいい機会とされていた。僕の如きでは、こうした機会は、子供そのものを知るについてまたとない好機である。学園の父兄方も、こういった機会に「子供」と明星の教育に接せられることをおすすめしたい。魯鈍、僕の如きでさえこんなに感慨させられるものが多かったのだから。〈※ 61〉

(3)「部落会」の提唱

初期の教師たちは、子どもたちの成長にとって学校と家庭の連携の大切なことを訴えていたが、もうひとつ、同じ地域に住む父母同士のコミュニケーションの大切なことを考え、「部落会」を提唱した。『ほしかげ』には次のように記されている。

同じ学園に子供を託して、同じ歓びと同じ悩みをもつ近隣——それは必然相寄る魂でありましょう。

近所の同年級の子供が優等賞を頂いた、級長になった、受験準備で夢中だ、と眼に触れ耳に聞こえる時。随分子供の教育に理解をもち堅固であった筈の教育方針も、心の底に動揺と焦燥の相を呈してくる親心は決して無いとは申されませぬ。稀には学校が違うために近隣の子供と遊ばせるのはどうかと思い、また遊ぶ友達の無くて困るということもある。学校でこうしてくれるとよいが、と平常思っていることでも、さて学園に行って大勢の前で話すとなると引っ込めてしまう。腹を割った父兄と教師でこそ子供達を托して、しみじみ安心な気にもなる。それに近い所で、しかも夜でもあれば両親揃って出られるが、学校だとなかなかその分に行かぬというのも事実でしょう。

そうした沢山の理由から、例えば荻窪部の父兄、阿佐谷部の父兄、といった具合に、近い場所の父兄がその場所の適宜の家を中心に集まり、学園から2、3の教師が加わって、「明星に子供を托してる」意味を中心とした会合が欲しいと思います。荻窪明星会、阿佐谷明星会、名前などどうでもよいが、如何なものでしょう。子供達だけはよく行ったり来たりするが、親達はお互いに顔も家も知らぬなどはいいいことではありません。この際、子供を契機として、近隣愛に欠けた東京の生活の上に彩色をすること自身も無意味ではないでしょう。子供の学校を選ぶにしても、近所の父兄、子供を本当によく知れば——学校を理解する程度も深く——安意な気持ちで決定されるものですから、この部落会には、そうした人々の参加も結構だろうと思います。

歓びと慰めと、励ましと理解と、そうした意味で和やかな部落会の誕生を提唱します。〈※ 62〉

提唱の成果は大きく、『ほしかげ』13号（1935年3月20日）、15号（1935年7月20日）には、早くも以下のように部落会が開催されたことが報告されている。

1月19日	吉祥寺第2区部落会（大津氏宅）
20日	阿佐谷第1区部落会（荻野氏宅）
21日	三鷹第1区部落会（加納氏宅）
25日	三鷹第2区部落会（両角氏宅）
	阿佐谷第2区部落会（松田氏宅）
26日	荻窪部落会（森氏宅）
30日	吉祥寺第2区部落会（田畑氏宅）

2月2日	吉祥寺第3区部落会（野村氏宅）
	帝都電鉄沿線部落会（宮原氏宅）
16日	西荻窪方面部落会（武田氏宅）
5月30日	阿佐谷第1区部落会（荻野氏宅）
6月7日	荻窪部落会（恩地氏宅）
13日	吉祥寺第2区部落会（大津氏宅）
14日	吉祥寺第3区部落会（大澤氏宅）
21日	東中野部落会（市村氏宅）
24日	三鷹第1区部落会（二村氏宅）

〈※ 61〉 小学部教育月報『ほしかげ』第10号（1934年10月30日）

〈※ 62〉 小学部教育月報『ほしかげ』第12号（1934年12月15日）

4 中学校・高等女学校の創設

(1) 山積する難問

1927年（昭和2）の4月、創立4年目にして6学年がすべてそろった。普通教室や特別教室の増築にかかる資金に苦慮しながらも、その窮状を察して支援の手を差し伸べてくれた父母たちに助けられ、ようやく小学校として完成をみたのであった。

それは大いによろこぶべきことであったが、しかし一方で、また新たな問題に直面することになった。赤井学園長は、当時の状況を以下のように述べている。

この年の初め頃から中等部の問題が次第に起こって来た。一般の小学校では5年生から中等学校への入学準備をするそうである。私達は如何にすべきであろうかが最上級を持つ山本君の大きな悩みであり、同人すべての頭を痛めた問題であった。小学校教育の本質からいえばこんなことは問題にはならぬ。誤まれる中等学校の教師の教育観に迎合して準備などはなすべきものではなからう。しかし児童にとっては中等学校へ入られぬということは大問題である。父兄においてもそうである。この現実の問題に当面すると理論ばかり言うておられぬ。父兄（特に5年）の間にも不安な気分が次第にあらわれてきた。しかもことは経費と関連する。同人は集まるごとにこれが問題になり、ほんとに鳩首したものである。ある時は私は出て、某中学校の経営をひきうけ、それをこの学園の中等部としようとしたこともあった。しかしそれも思う様にはならなかった。この年の春全部が完成し、6年生が出来た当時、この問題に対する私たちの態度くらい不安なものではなかった。（※63）

赤井は明星学園を創設したときから、小学校の上に法令によって定められたいわゆる「正規」の中学校・高等女学校を併設することは考えていなかった。文化学院や自由学園と同じように、いわゆる「各種学校」として行こう。その方が法令上の煩瑣な制約にしばられないで、自由に新しい試みができると考えていた。しかし、その考えをいよいよ実現させようとする、各種学校では困ることが多い。

ひとつは、上記のように、小学校を終える子どもたちの進学問題であった。

この時期——大正・昭和初期、小学校を終えれば労働に従事するのが当然とされていた時代に、都市部を中心とする比較的富裕な新中産階層の間では、中等学校への進学競争が過熱していた。受験に成功するためには、それなりの受験準備が必要とされた。新中産階層の親たちのなかには、子どもの自発的な活動を尊重する新教育を支持しながらも、同時に、当面の受験に必要な学力を学校に求める心情もあった。

明星学園には中学校・高等女学校がないから、子どもたちは既存の中学校・高等女学校を受験することになる。進学競争の過熱や受験準備のための教育をいくら批判してみたところで、肝心の子どもが志望する学校に入学できないのでは困る。

また、中等学校を「各種学校」として運営した場合、生徒たちは卒業しても上級学校（高等学校、専門学校）を受験する資格が得られないという問題もあった。上級学校を受験するためには、改めてむずかしい認定試験を受けなくてはならない。「生徒はわたしの所有物ではない。わたしの教育理想の犠牲になるべきものではない。やはり普通の中学校・高等女学校としての認可を受け

〔※63〕 赤井米吉「明星5年」『渾沌』第8巻第1号（1929年1月22日）

て、その規定の範囲内で可能な限り新しい試みをやるべきだ」。

赤井はそう考えて、「財団法人明星学園」という組織をつくり、財団が経営する中学校・高等女学校として認可をとることを決心した。

しかし、財団法人をつくり、中学校・高等女学校を設立するまでには、資金計画をはじめとして、越えなければならない難関がいくつもあった。

学園創立当初からの後援者・茶郷基氏は、朝鮮で経営する鉱山が風水害で甚大な被害を受けたため、1年余で手を引かれることになった。もはや援助を乞うわけにはいかない。

つぎの後援者である山之内兵十郎氏は、女学校だけくらいなら引き受けようと言われたが、1927年（昭和2）、不況による取引銀行の閉鎖でこれも絶望。

さらに、人を介して城北中学設立の援助を乞われたので、赤井が参加してこれを明星の中・女学校にすることに奔走してみたが、これも絶望となった。

赤井学園長から中学校・高等女学校設立の仕事への協力を懇願されていた上田八一郎が、朝鮮の中学を退官して上京したのはこのような時期であった。

（2）上田八一郎の上京

上田は広島高等師範学校で赤井の1年後輩。のちに玉川学園を創設する小原国芳（当時は鯉坂）とは同級。3人とも互いによく識り、親しい間柄であった。上田は広島高師を卒業と同時に付属中学校に奉職したが、1921年（大正10）、一家をあげて朝鮮に渡り、大邱中学校の創設に教頭としてあたった。

3年後、明星学園が誕生した1924年（大正13）の夏、赤井は講演のため朝鮮を訪れ、上田の家に立ち寄った。二人は上田の母のつくった日本的キムチを肴に杯をかたむけ、夜を徹して語り合った。

このとき、赤井は、3年後に中学部・女学部を併設するから、上京してこの仕事を手伝ってくれと言った。上田は、自分は英語の教師であるから、本場のロンドンに行きたいという気持ちを述べた。赤井は、そうか、それはよい、東京に来るとスポンサーができるぞと、いとも簡単に言った。そして、赤井はまたすぐに話をもどして、どうしても上京して中学部・女学部設立の準備をやってくれという。

上田は大邱中学校の創設をふくめて、10年間の官・公立学校の体験から、いろいろな希望を出してみた。——1学級30名、生徒総数150名を超えないこと。男女共学、無認可の学校。上級学校入試準備の要らない学校。武道と教練のない学校 etc.

赤井は上田の話を笑いながら聴いていた。

その後、二人は文通を重ねていたが、赤井から上田のもとに「いよいよ出て来い」という連絡があったのは、1927年（昭和2）の2月であった。3月、学園中学部を創設する代わりに城北中学校を引き受けることに決まった、という手紙がきた。4月になって、中学部・女学部設立の趣意書の案文が送られてきた。「一、文化理想の教育。二、文化創造の教育。三、文化体験の教育」という赤井の文字が躍っていた。



上田八一郎先生

5月、赤井から来信。「城北中学校は不認可となった。中学部創設は困難、女学部だけの創設で我慢してくれ」とあった。

7月28日、上田は大邱中学校を退官して上京した。以下、上田の手帳に記された「日誌」を抄録する。

- 7月30日(土) 品川着。駅にて赤井君より^{いよいよ}愈々また中・女同時創設の事に進捗しつつありと告げらる。
- 8月11日(木) 赤井、照井君と中学部敷地を見に行く(注:現在の校地にあらず)。
17日(水) 赤井、照井君と新敷地を見に行く(注:現在の校地にあらず)。
19日(金) 赤井君と茶郷基氏を訪問す。
27日(土) 官立中学校新設の経験は私立中学校新設には何等の用をなさざるものの如し。不安なしとせず。創設に対する不安よりも教育そのものに対する良心的不安甚だし。
- 31日(水) 学園へ行き、赤井と語る。「教育方針」が書き難い。まず文化がわからぬ。大分気が楽になった。
- 9月 4日(日) Quit uneasy about the new school.
5日(月) 職員一同と新・新敷地を見る(注:現在の校地)。校舎には京橋区林間学校「三鷹」を入札、移転せしむる事とす。(注:現在の本館なり)
6日(火) 始業式。紹介。小学5・6年生の一部を持つ。
14日(水) 初めて6年生に授業す。赤井と土地測量せんとす。〈※64〉

こうして2学期からは小学5・6年生に英語を教えたり、土地を見て回ったりしていた。しかし、創設の資金をどう調達すればよいのか、まったく方策が立たなかった。

上田は、いざというときは各種学校でもよしと考え、自由学園や文化学院も何度か訪問し、実際の授業も見学していた。だが、父母の間からは、どうしても将来は大学受験が可能な学校にしてほしいという要望が強くなり、「母の会」が動きはじめた。

(3) 保護者の協力と後援会の発足

明星学園「母の会」が誕生したのは、前述のように、1927年(昭和2)のことであった。当初は母親たちの自主的な会で、学園の経済的な面の援助もするが、むしろ自分たちの文化活動をするのが主な目的であった。この「母の会」が積極的に動きはじめた。

母の会の熱心なる働きが次第に父兄の人々を動かし、父兄の有志の集会在頻繁に催されるようになった。それが夏から秋に盛んになって、ついにこの年10月2日をもって父兄の総会が開かれ、明星学園後援会なるものが組織せられて、それが中等部の設立をひきうけて下さることになった。かくて上田八一郎君をこの方の主任として迎えて設立の準備に着手してもらうことになり、山本君も落着いて6年の仕事を進められるようになった。

かつて成城小学校でその父兄後援会^{けんりつ}の建立をした私は、その困難な仕事であることを十分に知っていたので、ここで再びそれを繰返そうとはほとんど考えなかった。何人が特志な人があったらその人にとのみ願っていた。それに学園の父母は実際のところ富豪といわれるものではない。児童の教育に熱心

〈※64〉「創立に至る迄の日誌抄」『星雲時代』38号(1934年)、および『上田八一郎先生 生誕百年誌』所収の手帳から

であるということのほかには一般小学校の父兄とさほどに違ってはおらぬ。その事情を十分に知る私は、ほんとにかかる（編者注：「このような」の意）後援会によって中等部、しかもそれは一つではなく、女学部、中学部の二つを設立してもらうということは忍び得られぬことのようにも考えた。しばしば自ら回避の道をとろうかとも思った。しかし金があれば出来るという問題でもない。金よりも情熱であり、理想であり、和合であると思うと、かかる父兄なればこそ出来るのだと考えた。自らの子女の教育の機関を自ら経営するということは最も望ましいことで、第三者から慈善的に出された金の恵みにあずかって行くのが必ずしも能でないとも考えた。行こう、行けるところまで行こう。皆が和合して行ったら、そして大なる理想に向かって努力をつづけたら如何なることも成らぬということとはなからう。というような風にも考えられて、ついにこれに一切をお願いして進むことになった。

こうした土地の選定、校舎の設計、教科課程の研究等に夜の8時、9時までも職員会が^{そうぼう}幾晩もつづき、後援会の委員の人々の奔走が日夜営まれて、この年の暮は実に^{そうぼう}匆忙として暮れた。（※65）

ここに至るまでの状況を、上田の手帳（日誌）から抄録する。

- 9月18日（日） 父母と相談会、創設多少困難と思わる。
- 22日（木） 赤井君宅にて父母5名と創設費出資案を練る。
- 23日（金） 38年間の坊主頭をオールバック式とす。
- 25日（日） 父兄有志会。出資金につき協議、難産。
- 10月 2日（日） 父母大会、依然光明を認めず。
- 11日（火） 山之内氏宅にて役員会。
- 25日（火） 山之内氏宅にて役員会。
- 26日（水） 渡辺万助氏を赤井と訪問。土地の件につき依頼。
- 11月 8日（火） 中等部・女学部の学課課程の相談会。教育理念について、正しい理想を抱いて社会に奉仕する人を。
イ、健康の人、ロ、感謝の人、ハ、熱意の人、ニ、明知の人。
- 11月23日（水） 赤井、照井両君と京橋区林間学校を見に行く。
- 12月22日（木） 公証役場に行く。水質分析検査に衛生試験場に行く。

10月に発足した後援会は、父母総会を開いて1口30円ずつ拠出することがきまり、山之内兵十郎氏とほかに2人、100口の方がおり、全校110名が1人平均10口、全体で3万3,000円が集まることになった。当時としては大変な金額であった。山之内氏が顧問、会長は岡崎栄松氏、会計は新締五郎氏、ほか数人の役員は、毎週のように山之内邸で会合した。

こうして、父母の支援態勢はより強固なものになってきた。しかし、創設のためにはまだ大きな難問があった。その年も押し詰まった12月29日（木）、上田は日誌に悲痛な文字を書きつける。

「赤井君より呼びに来る。基本金の問題で難産、ほとんど絶望なりと」。明けて1928年（昭和3）の元旦。「拝賀式後、職員に赤井君より中・女創設中止声明」と上田の日誌。

難問は設立認可に必要な財団法人の基本金であった。明星学園は中学・女学校の両校で11万円積んで見せなければならなかった。赤井にも上田にも、そんな大金を工面する方策はない。新年早々、教職員も意気消沈した。

1月10日、山之内邸で父母の役員会が開かれた。上田は、無認可でもやる決心で臨んだ。とこ

（※65） 赤井米吉「明星5年」『渾沌』第8巻第1号（1929年1月22日）

ろが、役員たちは万難を排して「正規」の中学・女学校を創設するという。役員会は連日開かれて、父母の間にはこれに賛同する空気が濃厚となってきた。

問題の基本金は、2月6日までに、茶郷基氏（内藤正太郎氏名義の株式）7万円、尾高豊作氏（刀江書院社長）2万円、川井源八氏（三菱電機会社社長、父母）1万円、服部春一氏（国際図書社長、父母）1万円、合計11万円を借り受ける見通しができ、ようやく設立認可を申請できる目鼻がついた。

こうして、中学校は現在の高等学校の場所に、高等女学校は既設の小学校校地内に建設することとなった。中学校の校舎は当面、京橋区（現在の中央区の一部）が三鷹に所有する林間学校の建物101坪を、公買入札のうえ落札して移築することにした。高等女学校の校舎125坪は、川井源八氏や井野正次郎氏の尽力で、三菱銀行深川支店の建物を移築することにした。

以下、上田の日誌から――。

- 2月17日（金） 創立書類完成。役場経由、東京府に提出。
- 18日（土） 生徒募集、職員採用準備、教科書選定、新聞広告、チラシ、広告、要覧作成。
教育趣意「一、聖き大望を。二、創造的に。三、体験的に。四、健全に」
- 22日（水） 小学校宛広告チラシ、多忙多忙。
- 25日（土） 地鎮祭27日（月）中・女建築、土台がため（セメント）始まる。
- 3月2日（金） 東京府より中・女同時に出発は無理なりと言い来る。
- 14日（水） 中学校前新橋、架橋工事開始。
- 22日（木） 第2回提出書類完成。赤井君宅より午前1時帰宅。井ノ頭の森暗し。
- 4月5日（木） 中・女校舎落成。
- 9日（月） 女学部第1回入学式。
- 10日（火） 中学部第1回入学式。
- 20日（金） 中・女設置認可せらる。

入学者は、中学校16名、高等女学校14名。まことに小さな中等学校だが、学園の歴史のあゆみに大きな一歩を記した壮挙であった。母親たちの熱意が父親たちを動かし、父母が一体となって取り組んだ支援の賜物である。

「紆余曲折を経て、ともかく形だけは創立ということになった」と上田は書いている。

「その当時、小学部の父兄であった故茶郷氏、故山之内氏および岡崎氏、新氏など、その他母姉



村山貯水池へ遠足（1936年5月9日）



中学校の校舎

の方々が園長を助けて異常な努力を払われたことに対し、衷心感謝の念を表してやまない」。(※66)

(4) 初期の中学校

第1回生の生活

旧制中学校第1回生の加藤誠之助は、中学校第5学年に在学中、校友会誌『星雲時代』第4号(1933年1月1日)～第7号(1933年3月6日)に、「中学部をめぐりて——楽しかりし5年間の思い出」を連載している。かなりの長文なので、ところどころ要約・補足しながら再録する。なお、学校の正式名称は「中学校」だが、学内では「中学部」または「中等部」と呼ぶことが多かったので、ここでもそれにしている。

1928年(昭和3)4月10日、開校式というのに朝から雨。傘礼の畑の中の小さな校舎に新しき生活を求めて集い来た者は、小学部から9名、他校から7名。

勉強の方は、上田先生に英語、国語、作文を習った。上田先生の国語は面白かった。時々この畑の中の中学校に自動車が来ることもあった。これは郷土教育連盟の尾高豊作先生(※67)の車で、僕等に有益な話をしに来て下さったのだ。尾高先生のお話はとても滑稽で、笑いの中に「社会」というものが如何なるものか僕等の頭にピンと来た。

数学は岡邦雄先生で、僕等のために教科書をつくられた。「僕等はこの書によって明日の数学を今日学ぼう」と一番はじめに言われたのを思い出す。音楽は吉原規先生で、僕等はよくレコードを鑑賞した。地理の山下重輔先生が唾を飛ばして講義したのも楽しい思い出の一つである。

3学期になって内野健児先生が就任され、漢文をはじめ習った。お天気のよい日は椅子を草原に持ち出し、車座になって講義するのは先生が始めたことで、僕等はのんびりした気持ちで講義を聞いた。

第1年は終わったが、校風というものを新しくつくり出したようでもなく、小学部の校風をそのまま延長したようなものだった。2年になって、生徒が増すにしたがって他校の気風も少しずつ入ってきて、ここに一種変わった中学部の校風を生み出しつつあった。

5月には多摩川へ遠足をして、帰りに雨に出会ってビショぬれになって駄足で帰ったことがあった。この頃から新しい2教室が増築されつつあったが、6月30日には落成した。この夏は昆虫採集に夢中になった。2学期になって、みんな一生懸命集めた昆虫標本を陳列して父兄に供覧した。

僕等は新校舎に入って心ゆくばかり勉学にいそしんだ。その結果が通知書にあらわされた。誰も彼も満足の態であった。通知書はそれにつけられてある点数が必ずしもその人の価値をあらわすものではない。人の価値が点数によってあらわされるということは不可能のことである。唯これによって少しでも勉学の跡を反省する資料とし、また将来の自分の態度を決定するにいいものである——というふうに考えている僕達にとっては、通知書の点等はたいして気にもかけなかったのである。

3学期には作品展覧会を開いた。相当苦心して描かれた大きな作品もあった。上田先生は「わしにはこの方面のことはあんまりよくわからんが」と言われて、それでも何くれとなく絵を陳列するのを手伝ってくださった。小学部の卒業式当日のこととて、たいへん大勢の人が見に来られ、僕達は大満足であった。かげに松岡政雄先生がいて僕達の図画・手工を指導して下さったことを忘れてはならぬ。

伊藤至郎先生、尾形鶴吉先生、新1年生を迎えて、中学部の第3歩は大なる希望に満ちて大きく踏み出される。

これより先、教員室のストーブを囲んで上田先生に、「今度の1年生は何人くらい入りますか？」と質問すると、上田先生は「今度か、今度は小学部から何名、他から何名」と親切に教えて下さった。ど

(※66) 「25年の回顧」文芸部『明星25周年記念』(1949年11月15日)

(※67) 尾高豊作(1894～1944) 渋沢栄一の孫。刀江書院社長。赤井米吉と親交があり、明星学園顧問。郷土教育運動の推進者

んなに僕は僕達の仲間が増えていくのを互いに喜び合ったことか。

あの唾を飛ばして熱弁を振う山下先生は退職せられたが、その代り温厚で雄大な尾形先生が就任せられた事は僕達にとっては嬉しいことであった。

この年はテニスが盛んだった。上田先生・内野先生はテニスコートに出られなかったが、伊藤先生が出て得意の腕を振った。僕もテニスがぐっと上達した。

大津君兄弟は鮮やかなものだった。新テニスコートが出来て、コート開きをやって、皆で戸外でお菓子を食べた。

やがて美術の秋が訪れ、11月2日より5日間、銀座伊東屋で作品展覧会を催した。この展覧会は学園が世の中へ出る第一歩であった。都会の人々は絵画を通じて、田舎の学園に魅惑せられた者も少なくなかったろう。

かくして秋も過ぎ、冬立ち初む頃の僕は勉強に追われて忙しかった。それでも天気の良い日は、三鷹の方や立教女学院の裏の方など遠くまでスケッチブックを小脇にかかえて出かけ、田舎の風景をスケッチし、楽しげに歌をうたいながら西日さす畑の中のちっぽけな——それでも尊い学園に帰って来るのだった。

4年生になった。なんだか急に偉くなったように感じて、すばらしい空想を理性は留めることが出来なかった。中学の4年は随分悪戯ですね……等とよく外部から聞いた。実際よく荒っぽいこともした。しかしダークサイドばかり見てはいけない。ブライトサイドには常に美が存在していた。一種の筆舌に尽し難き級風も出来ていた。

5年になった。もう4年生の時のような運動もしなくなったし、たいして暴れもしなくなった。受験という障害物を越す準備をしなくてはならぬからだ。各先生方は非常にお骨折り下さり、僕等に都合よいようにして下さい。

1学期の終りには軽井沢の明星学園寮に5泊して、浅間山の大自然を背景に野外演習をやった。夜襲のとき小哨長となり、指揮刀を振って指揮した折の気持は忘れられない。夏休みには勝山で臨海生活をしたのに、僕は忌中で参加出来ないのが残念であった。

2学期には緊張した気持で勉強せざるを得なかった。最後の運動会も過ぎ、実弾射撃演習も過ぎ、大きな行事はたいいてい終った。そして上級学校進学という大なる希望に満ちた昭和8年を迎えた。そして今はもう春だ。

吹く風は遠山の雪の冷たさを伝えるけれど、日の光はなんとなく肌に暖かい。小川のほとりにぽっかり緑の芽がめぐんできています。もうすぐ卒業だ。



内野健児先生と中学校生徒たち



教室で朗読会の練習中（1937年4月）



村山貯水池へ遠足（1936年5月9日）

『星雲時代』

中学校の校友会誌『星雲時代』の創刊号は、開校から4年目の1932年（昭和7）11月に発行された。B4判縦書き4段組み、謄写刷り、12ページ。巻頭の「創刊の辞」は、まさに「星雲時代」に在る若人の夢と苦悩と希望とを格調高くうたいあげている。

太陽系の生成される前は、地球も火星も太陽も、みんなが混沌たる星雲の渦巻きであったのだ。その星雲の中から若い星が一つ二つ三つ……と無数に生れて、蒼々とした宇宙に輝き始めたのだ。その嬰兒のような星——それは或は形の整わぬものもあったろう。或は安定せぬ軌道をころげまわっていたかも知れない。しかし、それを混沌たる暗夜に仰ぎ見た原始人がもし居たとしたなら、その驚異はいかばかりであったろう。そしてそれらは年代を経ると共に地上の花にまさる輝きを以て、悠久の詩をまたたき、智慧の光を人類世界になげかけている。

* * *

学園に集ったわれらはまさに星雲時代だ。今は混沌としているがやがては新しい世界にその軌道を占めるであろう。真理の使徒としてあらゆる方面にさんぜんと輝くであろう。此処には希望がある。歓喜がある。幸福がある。と同時に苦悩もある。悲嘆もある。煩悶もある。時には手を執って語り合いたいし、時にとっては詩文に託して慰めたいこともある。僕達はそれらをただ自分一人のものとして喜び、苦しむだけでなく、学園の友達同志が相扶け相励まして、よりよい自己と社会に発展させてゆきたい。今ここに創刊の運びになった「星雲時代」もそういう類の僕らの一つの機関でなければならない。

* * *

以前から各クラスで回覧、もしくは謄写の雑誌が出ていた。5年の「黒潮」（以前の「轍」「浮子」）、4年の「曙」、3年の「あかつき」等がこれである。それらを見ても、みんなが何か発表機関を持ちたい欲望のあったことが分る。しかしそれが中学部全体として統一されなかった為、各クラスのはごく一部分の人によってしか行われず、一般の人々の関心をかち得なかった。また普通の中学校では大抵校友会誌があるが、僕らの中学部ではまだそれが持たれていない。女学部の方からは既に「明星時報」が出ているし、僕らも僕らの新聞なり雑誌なりをもちたいと願っていたが、「星雲時代」によってその願望の達しられたのはこれほどうれしいことはない。

* * *

「星雲時代」は結局新聞と雑誌の中間をゆく、我が中学部独自のものになりそうである。要するにそれは、僕らの学芸、運動、趣味等あらゆる文化生活の反映であればよいのだ。此処で僕は言いたいことを言い、論じたいことを論じ、歌いたいことを歌いたいのだ。此処は僕らの談話室であり、討論場であり、鍛錬場であり、文苑であり、詩歌の花園である。星雲時代の我若人の群は此処から出発して、やがて成長した数々の美しい星の群となって世界の空に輝き出るであろう。

執筆者は、中学校国語科教師の内野健児。当時34歳。長崎県対馬の生まれで、広島高等師範学校卒業。赤井米吉・上田八一郎の後輩にあたる。日本支配下の朝鮮に渡り、教職のかたわら詩誌『耕人』『亜細亜詩脈』などを主宰し、早くから注目された。しかし、朝鮮人に対する支配者でなく人間的な友であろうとするこの詩人は、総督府から朝鮮追放を命じられて日本へ戻り、1929年（昭和4）1月、明星学園に奉職した。



『星雲時代』創刊号

中学校での教え子のひとり、恩地邦郎（5回生）は、のちに明星学園PTA会報『道』^{※68}に次のように書いている。

「教師としての彼はいつも柔和なまなざしと烈々とした気魄が満ちていて、不真面目な授業態度に怒ると時には、教科書で頭からぶちのめすことすらあった。けれども生徒からは愛され、いつも生徒と共にあり、教科外活動の指導などに面目躍如たるものがあつた」。

内野の教科外活動の指導は、校友会誌『星雲時代』の編集指導、詩集『北斗抄』編集指導、版画集の作成指導、演劇部の設立など多岐にわたっている。

教師としての仕事のかたわら、「新井徹」の筆名でプロレタリア詩人会の活動にも精力的に取り組んだが、やがて中野区江古田の結核療養所「浄風園」に入所。空襲の激しくなった1944年4月12日、夫人と2人の幼い子どもを残して他界した。享年46。

夫人で詩人の後藤郁子さんは、のちに、明星学園との関わりにふれてこう書いている。

6年間の病中、勤務先の明星学園の諸先生、父兄達、教え子達の変らぬ子弟の情によって私たちは経済的にも守られ、代る代る見舞われる前後、上級生達は学徒出陣してゆきました。彼の死の翌朝うす紫のジンドロギュームの高価な蘭の一鉢が卒業生から届き、心のこもった贈りものを一眼、彼に見せたいと思ったものです。

…中略… 新井（内野）は学校では「星雲時代」という教え子の新聞をたすけ、『星雲詩集』を編んだせいか教え子の手紙をよくもらいました。その中で「先生もうあんな烈しい詩は書かないで下さい」とあるところを見ると、名を変えても教え子は別のところでの先生の行動を知ってなお尽して下さったようで深く感謝しています」。^{※69}

（5）初期の高等女学校

以下の文章は、明星学園高等女学校校友会の機関誌『M I O Z I O』No.50「十周年記念号」（1924年7月30日）に寄せた、赤井学園長兼高等女学校長の回想である。

「思ひ出づるまゝに」赤井 米吉

昭和3年4月9日、第1回入学式の朝はきれいに晴れて、春の陽差しが^{みなぎ}漲っていた。開校式にふさわしい、晴れ晴れした、希望に満ちた日だった。

生徒は14人、余り丈の高いものはなかった。ちょっと今の1年生を連想させる組だった。如何にもちっちゃなものであった。

今の第1教室が普通教室で、第3教室が職員室、第2教室は控室のように使っていた。便所は第1教室の脇にあった。講堂もなかった。芝生もなかった。そこには雑草がぼうぼうと生えていた。それを14人で刈るのは大変だった。

全園の集りは音楽室と図画室を打ち抜いてやっていた。その秋の御大典慶祝式もそこで挙げた。翌年の春、女子部だけで学芸会をした。「青い鳥」の劇をやった。青い鳥にセキセイインコを使ったが、放れてストーブの煙突の上にとまって捕えられなくてこまった。

第1回の遠足は中学生と一緒に「鳥獣研究所」へ行った。小学校を^{おわ}了ってまもないことだったのと、両方とも小人数だったので、そんなことも出来た。

その年の夏は神奈川県の鴨居で、小・中・女一緒に臨海生活をした。宿は中学生だけが別だった。栄

※68）恩地邦郎「ある詩人のこと」明星学園PTA会報『道』59号（1963年7月）

※69）「新井徹との道」「新井徹の全仕事—内野健児時代を含む抵抗の詩と評論」（創樹社、1983年）

養協会から来た料理人が一人でさっさと食事を造るのに皆感心していた。

講堂のできたのは次の年の6月だった。全国の学芸会をして祝った。大きな講堂が出来たと思って喜んだものだが、今では狭くてしょうがない。芝生もそれと一緒に出来たのだった。

沓掛の寮の出来たのは5年の夏であった。その時も小・中・女一緒に林間生活をした。壁が乾いていなかったり、電燈が来ていなかったりして、随分不自由だったが、自分たちの寮の出来たことを喜んだものである。

割烹室などの出来たのは6年の春だった。第1回生は4年から料理を始めた。最初は昼食の折、その料理の仕方をひと通り話したものであった。

創立25周年にあたり、1933年から1944年まで高等女学校の教職にあった青木ふみ子から寄せられた文を紹介する。

「思い出」青木 ふみ子

私が女学部のお手伝いを始めましたのは、昭和8年の4月、女学部の第1回生が巣立ったばかりの時でした。従って私は、第2回生の皆さんから、只今高等学校3年にご在学の方までを知っております。あの頃はまだ至って小人数で、女子部全員が80名そこそこでした。それだけお互いによく知り合えて、教師と生徒というよりは、年の違う友達同志という感じでした。

卒業生の皆さんと私共との間の、楽しい話題の一つは「散歩」です。終戦前に女子部にいた人でなければあの「散歩」の妙味を理解出来ないでしょう。今ご在学の生徒さんにこの話をお聞かせするのはお気の毒にも思いますが、書かないではいられません。10年くらい前まで、正門を出て今の高等部へ行く道の左右はまだ一面の草原や雑木林でした。春はすみれや木瓜が咲き、ところどころに金蘭や銀蘭（今は見ることも出来なくなりましたが）が可憐な姿を見せました。秋は草ひばりの声が風の音の様に満ち、りんどうが幾つもの花を着けた頭を重そうにもたげました。春は、新学年の動揺がやゝおさまった頃にどのクラスからともなく、散歩のおねだりが始まるのでした。いつもの様に教科書を持って教室の方へ行くのを途中で待っていて、「先生、お散歩」「ね、ね」とせがみます。「さあ」と一応は言っていますが、こちらも堪らなく行きたくなってついに首を縦に振るのでした。林に分け入ったり、草原に坐ったり、上水のふちを歩いたり、心ゆく許り楽しんだものです。各クラスの散歩の相伴をして、一日中あまり授業をしなかった日には、さすがにちょっと気がとがめる思いもしましたが、今となって振り返ってみますと、明星の散歩は私の生涯にとって、ワーズワースの「水仙」にも等しい祝福の思い出になります。あの折にふれた自然のいぶきと皆さんの心とは渾然と無形の詩になって、いつも私の



女学部の校舎と1回生の生徒たち（1928年）



女学部1回生と青木ふみ子先生、赤井米吉学園長



軽井沢の沓掛寮から散策に行く4回生

心の奥深い所を占めておりますから。

明星生活のもう一つの楽しい思い出は、週3回の会食でした。各学年が交代で調理いたしました。1年から割烹があるというのが明星の1年生の誇りでした。専任の先生を迎えるまで3年間ほど、私が皆さんと御一緒に割烹を致しました。お料理の種が尽きて随分苦労致しました。皆さんはお菓子作りが何より好きでした。その頃、真っ白な御飯にオムレツやカツレツのお菜、それにお菓子をそえて、一食の費用が15銭から20銭だったと言っても、この頃の生徒さんには夢のお話の様に聞こえるでしょう。中学部や初等部の先生からよく御注文があって、御馳走をおかもちに入れたり、お盆に載せたりして、エプロン姿の2、3人がお届けにいきました。中学部からは、今は亡くなりましたが、あの生きながら仏像のように円満だった「中学のおじさん」がよく受け取りに参りました。1年生が初めて御馳走を作る日の、割烹室も割れそうなあの歓声と混雑の中にもう一度入って見たい気が致します。

初めの頃の職員室もごく小人数で、女学部の専任は金子先生、佐々木先生と私くらいなもの。渋谷先生が私より2年近くおくれて御就任になりました。中学部・女学部かけもちの、吉田先生、多湖先生、杉山先生、岩瀬先生、越智先生などの御新入ごとに、円卓やストーヴのまわりに、赤井先生を中心にして、気持のよい座談がはずみました。その折々の社会現象や、美術、音楽などに就いての、型にはまらない自由な批判や感想でした。職員室の話題のよさが、絶えず私を啓発し、明星の一員であることに誇りを感じさせました。こうして書いておきますと、先生方お一人お一人のお声が聞こえて参ります。

職員室と言えば、大抵の学校ではおよそその反対でした。11月の末に、教室よりも一足お先にストーヴに火が入りますと、休み時間ごとにあたりに来る生徒の群で室が一杯になるのでしたし、卒業式前の2、3日、巣立ちを控えたひよこさん連の羽目をはずしたおしゃべりや、「何か書いて下さい」のおねだりで、それはそれは賑やかなことでした。終戦後になって急に民主化とか言ってさわいでいる学校に、明星の初めからの風景を見せて上げたく思います。

「あの頃はよく喧嘩したわね」これも卒業生の皆さんの言い草です。どのクラスも、3年くらいまで、盛んに喧嘩したものでした。なれないうちは、どうもこのいざこざが気にかかってなりません。が、12年もいるうちに、赤井先生の「ほっとけばいい、自然に解決がつく、4年の夏休み過ぎには自然に落着く」という御診断が、なるほどと呑込める様になりました。喧嘩するほど自分を吐露したからこそ、裏表の無い、のんびりした中に何か力のある、所謂明星気風が出来上ったのでしょうか。

音楽観賞、ぶどう液づくり、見学、遠足、運動会、さては戦時の白衣縫いから動員と、思い出は限りありませんが、多くの方のお顔やお声が渦巻く中に、ぼんやり考えにふけり勝ちで、もう書けなくなりました。

終りに学園の御隆昌と、先生方、卒業生の皆様の御多幸を心の限りお祈り申し上げます。(※70)



割烹の授業 (1931 年、1 回生)



女学部 1 回生と青木ふみ子先生、多湖実輝先生

(※70) 文芸部『明星 25 周年記念』(1949 年 11 月 15 日)

5 初期の学校行事（小学校）

（1）行事について

当時の学校行事は、その教育的意義を高く評価し、多面的な実践を試みた。行事はカリキュラムの一環として授業と関連付けられていた。また6年間を見通して、学ぶ内容が深まっていくように工夫されていた。それぞれの行事によって教育的効果が十分あげられるように、時期、場所が綿密に練られ、毎年4月に新年度が始まると、年間計画が明瞭にわかるよう、保護者にも予定表の配付・保護者会での説明などを行い、周知に努めた。

（2）遠足・見学旅行

明星では創立以来、見学・旅行・登山・宿泊行事を、教室での学習を補完・充実させるために欠くことのできないものとして位置づけてきた。

遠足や旅行のような見学学習では、ものづくりの現場（生産）、できたものがどのように人々に届くのか（流通）、どのように売られ、買われ、利用されるのか（消費）、などの経済活動を学ぶことはもちろん、歴史・文化的な背景や、地理的な特徴を考察することにも重点が置かれた。

また普段の学校生活の中でも集団生活指導・社会生活の訓練は重視されていたが、校外へ出かけることによって社会道徳を学ぶ機会も得た。

したがって見学学習は総合的に学び、かつ身体を鍛えることもできる行事なのである。

教師たちは系統的に教案を立案し、あらかじめ遭遇するであろう問題についても周到に準備した。

行事では児童は現地において深い印象を得る。それをさらに帰ってから教室で整理し、次の学習へと積み上げていくものであった。

「小学部遠足旅行見学系統案」^{〔※71〕}を次頁に掲載する。じっくり読むとカリキュラムとして何を学習させたかったのかが見えてくる。



筑波山



箱根大涌谷



1、2年生、青梅へ遠足（1939年9月）

〔※71〕 小学部教育月報『ほしかげ』第14号（1935年5月15日）

— 15 —

ほ し か げ

○ 其他臨時催物ヲ適當ノモノアル場合

月 三	月 二	月 一	月 二十	月 一十	月 十
			上野動物園 不忍ノ池	製菓工場 (森永、明治)	多摩川附近製糖 (一〇錢程度) 八洲園(地形展覧島瞰圖)
			田中玩具工場 (千住ノ九一七) 玩具工場 東京セルロイド (寺島)	製菓工場 (森永、明治)	高尾山(地理) (関東平野西部) 多摩御陵
遼東観音 隅田公園(川蒸汽) 震災記念塔	養魚場 (砂町方面)	ワイオン齒磨工場 (口野衛生ノ語)	青木組、メタル工場 (西原町池袋) 鉛筆、クレヨン (大日本鉛筆) 西原鴨池袋	カルビス會社(渋谷) 鐵道省汽車博物館 (有樂町)	大山登山(地理) (ケーブルカー終点迄) (関東平野西南半部) 阿夫利神社
靖國神社 遊就館 國防館	製紙工場 (王子製紙下十條工場) 石鹼工場(下十條) (エス、ケイ粉石鹼其他) 上野、下十條下車團體 回遊券利用 四〇錢	博物館(上代文化) 科學博物館 動物園	精糖工場 (鹽水港一芝浦) (大日本精糖一砂町)	自動車工場 (鶴見フナード)	筑波登山 高山訓練所 (筑波男休) (全關東地方展望)
明治神宮 寶物館 繪画館 乃木神社 乃木大將墓	紡織工場 メリヤス工場 綿織物工場 モスリン、綿糸紡織	肥料藥品 (大日本人造肥料) 王子 川口	文房具、タイプライ ター(黒澤工場) 荏原矢口町	製糖工場 (程ヶ谷、鶴見) 製油所(鶴見)	大島行 汽船一泊小使共二圓 (複式六山ト航海)
染物工場 製糸工場 絹織物工場 (八王子方面)	東京市役所浄水場 (一五錢) 麵草專賣局從橋工場 三河島汚水處分場	芝ト上野 (東京史蹟) 寛永寺、増上寺、泉岳寺 薩摩邸 (西郷、聯會見所)	時計工場 (精工舎一柳島) 帽子 (東京帽子一柳島)	新聞社 (日日、朝日) 東京青果市場 (秋葉原)	卒業學年關西旅行 小使共一六圓 (汽車汽船共) 六泊一七日間

け か し ほ

— 14 —

小學部遠足旅行見學系統案

月 九	月 八	月 七	月 六	月 五	月 四	
製氷工場 アイスクリーム工場		立川飛行場	豊島園 村めぐり (農村ノ生活)	五日 全校遠足 (二〇錢程度) 全校沙千狩	井之頭動物園	一 年
奥多摩川原 御嶽驛下車 射山溪	夏季生活 學校宿舎	軍用鳩教訓(中野) 軍用大教訓・警察大	植物園 (小石川) 製氷工場 アイスクリーム工場 清涼飲料工場	關前淨水池 村めぐり (箭山・養鵠) (養鵠・田植)	武蔵境淨水池通過場	二 年
三鷹天文臺 葵ノ栽培場 深大寺	夏季生活 學校宿舎 夏ノ天休觀測	軍港(横須賀) 軍艦ノ内部 三笠艦	鐵道省大宮工場 鐵道博物館 氷川公園 氷川神社	鎌倉ト江ノ島 名所めぐり 村めぐり (養鵠・田植) 養鵠園	宮城造拜 日比谷公園 航空館	三 年
府立農事試驗所 立川養豚場 立川飛行場(陸軍)	夏季生活(海) 神奈川縣三戸 城ヶ島燈臺 荒崎ノ高射砲 武州御嶽登山(有志) 日歸り	商港(横須賀) 旅客汽船 其他港ノ設備 野毛山公園 船舶信號所 生絲検査所	ガラス工場 吹ガラス、型ガラス 電球 (村松ガラス工場) 錦絲町 龜戸	箱根、熱海一泊旅行 小田急遊園利用 日光一泊旅行 東武線利用 (四、五合同、一年交替)	村山貯水池 山口貯水池	四 年
武蔵國分寺趾(一〇錢) 府中大國魂神社 (武蔵國南趾) 分倍河原古戦場	夏季生活(海) 神奈川縣三戸 城ヶ島燈臺 荒崎ノ高射砲 昇仙峽登山(有志) 夜行登山日歸り	浦賀造船所 久里濱(ペリー上陸地) 觀音崎燈臺 走水神社 追濱飛行場	ゴム工業 (東京ゴム工業 綾瀬) セルロイド加工 (ロイヤルセルロイド) 龜戸	箱根、熱海一泊旅行 小田急遊園利用 日光一泊旅行 東武線利用 (四、五合同、一年交替)	多摩川遊園 鳥獸試驗所 (京王電車 南武電車) 多摩丘陵ヨリノ展望	五 年
國會議事堂 兵營 魚市場	夏季生活 淺間、妙義、小諸 碓氷、善光寺 日原鐵乳洞(有志)一泊	北伊豆ノ史蹟 北條、葦山、三島 一泊ナラニ修善寺泊	陶磁器工場 (大倉陶園) 雜司ヶ谷 王様タレーン工場 (池袋)	日立鑛立 水戸 水戸城址、常磐神社 勝樂園 日歸り	鎌倉ノ史蹟めぐり	六 年

(3) 夏季生活

校外活動の中でも、特に夏季生活は規模・期間において学習の重要な位置を占めている。

当初、夏季生活は参加希望者によるものであった。目的や意義を懸命に保護者に説明し、次第に参加者を増やしていった。

夏季生活について、学園では次のように考えていた。

児童の日常生活は、学校、家庭、社会の三つに分かれている。時間的には児童は24時間のうち4分の1だけを学校で過ごし、あとの18時間は家庭環境の中にいる。学校と家庭で生活理念が異なっているとしても、児童は環境に順応しやすいので、平気であるかもしれない。しかし、これは教育上重要な要素であると同時に、危険性をも持つものであり、教育の徹底が欠いたものとなる。学校と家庭とで統一した教育ができればよいのだが、それは困難であろう。そこで、学校で夏季生活を実施することで、教育の統制下で、それぞれの持つ生活経験を持ち寄って、洗練された一般性を持った生活を創造するのである。夏季生活で、教師は今まで以上に時間をかけて、子どもの生活全面に質・量ともに多くかかわることになる。子どもの成長に中断や休止はない。

40日におよぶ夏休み期間であっても、子どもの生活は依然として学習的に発展し得る。どのようにこの期間を過ごすべきか、学校がひとつのサンプルを示して、その後の継続を家庭にお願いするということになる。

夏季生活期間は、友達や教師とともに食べ、ともに宿泊する。全面的に集団生活をするのである。この生活の中で、友達の美点を発見し、自己の短所を反省し、お互いの個性を深く知り合うのである。

夏季生活の1日は3期に区分する。起床から9時までの午前を第1期、日中を第2期、夕食後を第3期とする。第1期には主として算術、読み方もしくはその他の幅広い学習を配し、生活の基礎を学ぶ。日中の第2期は図画、手工その他の工作や作業とする。夕食後は娯楽読み

物、映画、花火、ラジオ、蓄音機などによる趣味生活に充てる。以上の基本プランに、個々に応じた行事——水泳、釣魚、採集、見学等を入れる。すべてを自律的な生活となるよう時間割を作る。



三戸浜の海辺生活（1925年7月21日～30日）

こうして練り上げられたのが以下の表である。この表のように、1年生を除く2～6年生で夏季生活が実施された。2・3年生は学校に泊まり、4・5年生は静岡県伊東町の海へ、6年生は軽井沢寮に宿泊した。布団は持ち寄りであった。

げ か し ほ

[illegible]

夏季生活と3つの学園寮

前述のように明星学園では創立以来、宿泊を伴う夏季生活を重視してきた。創立年の夏休みには早くも教室を利用して夏季学校を行い、翌年には希望者を募って臨海学校が始まっている。

しかし児童数の増加にともない校舎は手狭となり、海や山の旅館に宿泊して行う夏季生活は、場所の選定から宿泊施設の確保まで、毎年苦労の連続だった。参加費も高額となるため、開始当初の参加者は3割程度であった。

その後参加者は格段に増えていくが、そのきっかけとなったのは、新校舎（裁縫室・割烹室）が増築された1931年（昭和6）に、小学校2年から6年生を対象に学校内で夏季生活を実施したことと、軽井沢に寮ができたことだった。

参加費を抑え、通い慣れた学校内での夏期生活には7割を超える児童が参加し、保護者の参観や手伝いも随時受け入れられた。その成果は大きく、これまで繰り返し説明してきた夏季生活の意義や目的が、保護者に実感として伝わり理解を得られた。また、軽井沢に学園寮ができたことで参加費も抑えられ、海や山での夏季行事への参加者も増加していく。

その後、小学校では前ページの表にあるように、2・3年生は高等女学校の裁縫室、4・5年生は海岸沿いの施設、6年生は軽井沢で実施され、夏季生活は学園の重要な行事として定着していった。

学園寮の存在は大きい。寮の敷地内は学園関係者だけの世界。自由で自律的な共同生活が確保され、自然環境を生かした学園らしい夏季生活が展開された。上野原寮（長野県）に続いて千倉寮（千葉県）、その後、清里寮（山梨県）も完成し、教職員の研修やクラブ活動など、その他の用途としても大いに活用された。^{（※72）}

学園が得た3つの学園寮、それぞれの生い立ちを以下に紹介する。

◆上野原寮（軽井沢）

1930年（昭和5）春、学園保護者の市村今朝蔵氏から長野県中軽井沢の土地3,000坪が寄付され、山の学園寮が誕生した。

▶▶詳しくは本誌P.93参照

その夏には、できたばかりの寮で小・中・女の3部合同、10日間の夏季生活を実施した。

天候不順による工事の遅れのため、寮の完成が間に合わなかったが、完成までの数日は無理を言って星野温泉に泊めてもらい、予定どおり決行。未完成の寮へ豪雨の中食事を運ぶという場面もあった。



女学部5年生、沓掛寮生活（4回生）

海拔1,000メートルの高原、うっそうとして遠く浅間のスロープに達する落葉樹林に囲まれた、沓掛字上野原台地の一角に建つ寮は、「明星学園上野原寮」と名づけられ、通称「沓掛寮」とも呼ばれた。寮を囲んで明星の保護者の山の家が3軒、4軒とつくられた。

この寮を起点に、林の中での学習や、浅間山、妙義山、八ヶ岳へ出かける夏季生活がおこなわ

（※72）『明星の年輪—明星学園60年のあゆみ』P.43、44

れた。戦後、寮は2階建に増築され、長い間精力的に活用されていたが、建物が老朽化したため1968年を最後に使用されなくなり、1983年に明星会（同窓会）の寄付により改築された。

◆千倉寮（南房総）

軽井沢寮ができ上がり、山の生活の拠点として盛んに利用されるようになるが、海の行事は三浦海岸などを転々としていた。教師たちは、海の家を持ち夏季生活を充実させたいと願い、行動を起こした。その当時の思いを、照井猪一郎は次のように記している。

吾等と与えよ。「海の家」を

—— 照井小学部長記 ——

私たちは私たちの子供のよい生活場として軽井沢に「山の寮」を持っている。ねがわくば、近き将来において、同じ意味でのよい「海の家」を与えられんことを切に祈るものである。海に子どもたちのために寮が欲しい。そして年毎に繰り返す漂泊的巡礼の境遇からまぬがれて安心のできる場所で、落ち着いた夏季生活をさせなければ……という祈願は年既に久しい。今年（1936年）休暇明け、夏季生活の印象まだ生々した中に私たちは、来年のためにまた永遠の将来のために、理想の安住地を求めて小学部の職員（安藤・中村・牧・原田）と第1回卒業生の2、3の者（岡崎・加藤・江川）が動員された。候補地としての原則的な条件は次のようなものだ。

- (1) 人気や風俗が、いわゆる避暑地ずれていない土地。
- (2) 交通所要時間は、片道3時間以内の海に近いところ。
- (3) 衛生・物価その他の生活条件が最適の所。
- (4) 将来、寮を設備する目的のうえから、できるならば土地を無代提供してくれるか、さもなくば地代や部屋代もしくは宿泊料のごく安いところ。

といった虫のいい一方的な要求が主で、それには休暇中大体の見当もつけてある関係から、房総半島沿岸内外にわたって一応の調査をした。そして安房郡千倉町に接続する松林中に白羽の矢を立てた。(※73)

こうして照井たちは房総半島を歩き回り、堤防に守られた遠浅で穏やかな海、生物が豊富な磯、半農半漁の村で食料が豊富にあるこの地を見出した。同じ頃、千倉に明星村を建設する計画が進み、水産組合の管理地を借地契約した。近い将来、この地に臨海生活に必要な寮を建て、また近くには保護者の別邸を建設し、理想的で健全な「明星村」を設立する計画であった。

そして1937年（昭和12）7月、千倉にて初めての4・5年生の臨海夏季生活が実施される。寮建設以前のことで、子どもたちは青木家と朝日屋に分宿。炊事場と食堂は旧漁業組合の事務所を使用した。

1941年（昭和16）、近くに売家が出たのでこれを400円で買い取り、旧漁業組合の事務所のと



(※73) 小学部教育月報『ほしかげ』24号（1936年12月5日発行）

ころに運び、事務所に隣接させた。しかし戦争が激しくなってきたため、終戦後しばらくするまで、この建物を使用することができなかった。

千倉での夏季生活が再開したのは1948年（昭和23）のこと。この年は6年生が20名ずつ2週間の臨海生活であった。1956年（昭和31）には青木家の庭に新しく寮がつくられ、千倉寮（瀬戸寮とも呼ばれた）と命名された。

1976年（昭和51）、創立50周年記念事業として、後援会の寄付により改築され、その後長きにわたって千倉での夏季生活の拠点となった。

◆清里寮（八ヶ岳）

上野原寮・千倉寮に比べるとずっと後のことであるが、明星学園の3番目の寮として1966年（昭和41）7月に清里寮が完成する。当時の学園の経営状態を考えると非常に困難な事業ではあったが、1963年に亡くなった橘正薫全国教務
▶▶本誌P.188参照の義弟に当たる坂本菊雄氏はじめ、さまざまな方たちの尽力により実現できた。

清里寮（八ヶ岳寮とも呼ばれた）は、山梨県八ヶ岳連峰の南麓、北杜市に広がる標高1,200mの緩やかな高原の一角、借地ながら（山梨県が清里高原周辺を学園村とし、学校寮建設を勧奨していた）7,000坪の敷地の中に建てられた。遠くに富士山や南アルプスを望み、四季折々の美しい自然に抱かれた場所だった。（※74）

小学生のスケート行事や中学生の登山行事、高校生の合宿など児童生徒の行事の拠点となり、夏のみならず一年を通して大いに利用された。

残念ながら漏電による火災で1984年1月7日にその幕を閉じ、土地も返還されたが、深い森に囲まれた清々しい清里の自然と小ぢんまりした寮の記憶は、当時を知るものの心に今も鮮やかに残っている。



八ヶ岳寮の庭でボール遊び（中等部、1971年7月）



高原のさわやかな空気の中で
（初等部1、2年生、1972年）

（4）学芸会（舞踊の会・展覧会）

明星学園では、学んだことを自分のものにし、表現するという活動を重視していた。学芸会・音楽会・舞踊の会・展覧会などが一年を通じて行われた。これらの活動は教育の実態を総合的に、学園内外の方に理解してもらうための良い機会でもあった。

昭和の初期には3月17日、18日に行われた「卒業生送別学芸会」において音楽・舞踊の発表を行い、国家の祝日——1月1日（元始祭）、2月11日（紀元節）、4月29日（天長節）、11月3日（明

（※74）『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』P.314

治節)には「演劇の会」が定期的に行われ、演劇を発表した。

また、舞踊に関しては1931年(昭和6)6月から著名な舞踊家・宮操子氏を招いて毎週水曜日に小学部の女兒60名を2部に分けて指導を受けた。新しい学校舞踊の世界を開拓しようとする研究的態度でなされた。宮操子氏がドイツへ外遊したあとには、当時「現代舞踊芸術の旗手」とも呼ばれていた石井小浪氏を迎え、小・女学部の生徒が指導を受けた。

さらに、芸術教科の発表の場として、図画工作・手芸・裁縫の展覧会を行った。1930年(昭和5)11月2日～7日には、銀座伊東屋において学園児童生徒作品展覧会を開催するなど、明星学園の教育の実体を学園内外に明らかにした。

(5) 体育会・運動会

秋には小・中・女3部合同の運動会を行っていた。運動会とは体育祭であり体育展覧会とも呼べるものであった。日常の学校体育の実践を活性化し、あわせて技量の発達程度を見せるものだった。

運動会とは別に小学部独自の体育会・体操会も行っていた。ここで言う体育会とは、日常の授業の発表の場であり、体育の公開授業とも言える。日常的にどのような体育教材をどのような子どもたちに、いかなる方法で指導しているか、いかなる指導体系によって指導されているかを観てもらい、体育への関心と理解と自覚を図り、子どもたちの体位の向上、体力の充実を目的とした。単に体育を身体的鍛練とのみ見るのではなく、スムーズに学校生活ができる身体の生活訓練と考えているのである。

また、これら運動会や体育会とは別に、集団継歩や駅伝継歩といった長距離を集団で歩く行事も行われていた。学園——多摩御陵間、学園——羽田間、夜間強継歩は夏季・秋季にしばしば実施された。1943年(昭和18)には「長距離部隊駅伝継歩」として、学園——甲府駅間の120kmの継歩を入念に計画したが、諸般の事情により実現できなかった。

このように明星学園では、自然に学びつつ、すぐれた芸術や文化に触れることが大事にされていた。子どもたちは幼い時期に本物と出会うことで、表現意欲を引き出されていったのであった。

當日のプログラム			
種目	学年	種目	学年
一 開會の辞	全生	三 健康体操	中二
二 ラグビー操	高三	三 二六米競争	中二
三 羽子つき競争	高三	三 オリンピヤマー	以二
四 縄跳競争	高三	三 陸物競争	五五
五 スパレンレス	高三	三 スパレンレス	五五
六 四〇〇米競争	高三	三 陸物競争	五五
七 面巾リレー	中一	三 陸物競争	五五
八 騎馬帽子取	中一	三 陸物競争	五五
九 排球	中一	三 陸物競争	五五
一〇 一〇〇米競争	中一	三 陸物競争	五五
一一 一〇〇米競争	中一	三 陸物競争	五五
一二 輪技綱跳競争	中一	三 陸物競争	五五
一三 障子競争	中一	三 陸物競争	五五
一四 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
一五 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
一六 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
一七 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
一八 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
一九 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
二〇 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
二一 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
二二 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
二三 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
二四 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
二五 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
二六 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
二七 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
二八 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
二九 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
三〇 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
三一 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
三二 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
三三 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
三四 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
三五 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
三六 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
三七 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
三八 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
三九 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
四〇 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
四一 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
四二 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
四三 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
四四 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
四五 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
四六 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
四七 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
四八 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
四九 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
五〇 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
五一 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
五二 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
五三 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
五四 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
五五 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
五六 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
五七 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
五八 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
五九 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
六〇 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
六一 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
六二 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
六三 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
六四 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
六五 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
六六 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
六七 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
六八 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
六九 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
七〇 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
七一 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
七二 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
七三 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
七四 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
七五 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
七六 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
七七 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
七八 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
七九 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
八〇 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
八一 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
八二 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
八三 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
八四 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
八五 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
八六 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
八七 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
八八 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
八九 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
九〇 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
九一 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
九二 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
九三 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
九四 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
九五 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
九六 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
九七 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
九八 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
九九 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五
一〇〇 大旗競争	中一	三 陸物競争	五五

『ほしかげ』第10号(1934年10月30日)に掲載された第10回運動会プログラム

第3章 初期の学園経営

1 赤井学園長の苦悩

明星学園が創立された大正から昭和初期は、私学にとって大変厳しい時代であった。一方では国の教育政策があり、教育は軍国主義の方向に傾いていく。またもう一方では財政難であった。創設された私立学校のいくつかは財政難によってひとつひとつ理想のとし火を消していった。池袋児童の村小学校や『窓ぎわのトットちゃん』（黒柳徹子著）で有名になったトモエ学園もその一つだった。

明星学園では赤井は学園長・校長として授業をもつ傍ら、金策に飛び回らねばならなかった。その苦悩を学校日誌や赤井本人の日記から読みとることができる。

大正14年 学校日誌

- 1月 3日（土） 元始祭 夜、教職員一同茶郷基氏邸にて会食、本年のことを談ず。
大正14年度経常費予算
収入 授業料 5,940円 一人66円 90人分
支出 総額 10,900円
内 職員給 7,560円 小使給 540円 賞与 400円
地代 1,200円 図書備品 600円 消耗品費 600円
差引不足 4,960円
- 5月25日（日） 茶郷氏からの金を当てにしていたが、今日も来ない。淋しい気がする。
今日訪ねようかと思ったが止めた。
- 6月 1日 茶郷氏より金が来た。一息つく。
山陰震災見舞募集したのが児童たちから44円90銭、捨得金1円70銭、職員3円4銭、計50円として日日新聞社に委託す。
- 6月27日 茶郷氏来校、茶郷氏から300円来た。とても不足。
2人分の俸給をとって他は来月に延ばすことにした。同人諸君の苦痛や如何に。
ああ何とかして金が得られぬものか。
- 9月 9日 保護者会を開き、月謝引き上げの件決議す。
- 9月19日 今日の東京日日新聞の「角笛」に投書があった。父兄か、父兄の話を聞いたものか、いずれにせよ多少は教育に関係近いもののように思われる。何の反感か。8円の月謝は安くないことは知っているが、どうにもできない。この現状を如何にせんや、悶々の情にたえない。
- 9月30日 この月もどうやら過ごされた。職員給未払150円、備品130円、諸方の買い物100円、来月は300円ほど借りねばどうしてもやっていかれないだろう。
- 12月 3日 赤井夜、茶郷氏を訪ね校舎のことを相談す。駄目なり。山之内氏へ依頼することにする。
- 12月 4日 赤井、午後山之内氏を訪ね校舎の件相談す。心よく容れらる。帰途井野氏を訪ねしが不在。とにかく、校舎だけは出来ることになった。窮すれば達する。神の与へだ。感謝しなければならぬ。(※75)

〔※75〕 原田満寿郎「学校日誌は語る・大正14年」PTA会報『道』No.93（1974年9月20日）P.60

このように創立1年目にして早くも財政は厳しさを極め、すべての責任は赤井が負わねばならなかった。茶郷氏からの資金援助は彼の事業の関係で打ち切られたが、幸いにも山之内兵十郎氏の援助が得られた。しかし学園の財政は一向に好転せず、赤井の苦行は続く。毎日毎日金策に駆け回り、子どもや教員に心配をかけまいとした。一方、家族には厳しかった。自分の家族の食べるものまで節約してお金を学校につき込んだ。そうした努力を支えていたのは、明星学園を何とか生き続けさせようとする思いであった。赤井は同人に向けて次のようなメッセージを書いている。

我々の学園は、もともと現代の教育のかけているものを補い、誤れるものを正さんとして建てられたのである。正しく児童を教育しようとの考えであった。従がってそれは教育の改造であると同時に社会の改造を目的として建てられたのであった。この根本的目的が我々の間に常に意識されているならば我々の学園の存在の意義は失われない。それはもとより容易な仕事ではない。我々の知と徳をもって完成し得られることができないかもしれない。然しこれを意識し、これに向って努力するその努力は、よしや不完全であっても、必ず大きな酬をうけるにちがいないと思う。一粒の種子が地に落ちて育くまれることによって百倍千倍の実が実るように、我々の仕事はいつかは大きな結果を招来することにちがいない。若しこの精神が失われるならば、かくの如き小学園が一つ在るもないも、それは大した問題ではない。否かくの如き小さなものにこれだけの費用と人々の苦心を集める必要はない。むしろ無くなるのが経済的にも精神的にも有利であるかもしれない。どうかこの根本的なことを凡てが意識して進んでほしい。(※76)

この後赤井の苦悩は単に金策にとどまらず明星での教育の質にまで及んでいる。そのことを日記で見えていくことにする。

昭和3年の日記

6月15日

学園の教師の理想の低いのは、何よりも心配である。経済上の苦心などを十分に知らせることによって、ほんとに学園を愛し、心の奥からこの事業に精進せしめたいと思ってこれまで凡てのことを打明けて言って来たのであるが、その為にこんなに委縮しては何にもならぬ。……うつむいて教育は出来るものではない。大空を見なければ駄目である。今の学園の根本的病は大空を見ないことである。そこへ来るとやはり宗教的信仰の人でなければ駄目である。

昭和4年の日記

5月20日

朝、私の生活も思想も全く行き詰ってしまった。日々の支払はこれまでの負債で動きがつかなくなった。雑誌の原稿もいつも期限がすぎてしまう。

10月3日

雨、朝、江川氏を訪い誘って玉川学園に小原氏を訪う。土地^{不明}○○について何物かうところであろうと思って。彼の経営は实际的である。夢の様なことを言っているが、確かに現実に立脚している。赤井の如き及ぶところではない。大いに啓発せられた。

12月10日

午前、学校で母へ手紙を出した。学園の生活を収入に適したものにしたいと。その為に種々の緊縮を行わねばならぬ。ついては先ず私自身が実行しなければならぬ。それでこの家を出てもっと小さなところに入ると。夜久し振りに家庭札押をなす。学園のことを祈って涙が出た。すると子供たちも泣いた。彼等の泣くのをを見ると、いよいよ悲しくなる。なんとかしておだやかに暮させたいとも思った。然し、

(※76) 赤井米吉「同人諸君」1927年(昭和2年)9月29日の日付の原稿用紙、『赤井・照井両先生 生誕百年誌』P.22

凡てを犠牲にしなければならぬ。十字架のイエスを深く考えねばならぬ。学園の為に血を流さなければならぬ。子供達も苦しいだろうがやがてそれが大きな恵となる時が来るであろう。……

「主よ、汝は雲の柱、火の柱となりて我等を導きたまえ。我等の明星は永劫に消ゆることなかれ。曙の空にさきがけ、黄昏の空にさきがけ、光れ。我等の明星、燦として清く、高く」。(※ 77)

一時は死さえ考えた赤井を支えたのは聡明なる夫人と娘たちであり、神への信仰であった。財政的に苦しみながらも1929年（昭和4）には小学校卒業生を送り出し、中等部、女学部を新設した。その時の心境を次のように述べている。

世間には苦しみの中に楽しみを見出す、という言葉があるが、打明けたところ、私はまだその苦中に楽は見出しえない。苦しみはもう御免蒙りたいようにも思う。然し、あれやこれやと種々の苦しみをなめている間に、私の人生観、社会観、従って又教育観が幾分ずつでも開けて来るのを最大の収穫と思っている。今後なお幾年かの苦しい生活がつづくだろうが、その間にもさらに私自身の眼に開かれていくことを望み、待っている。児童を教育する、といって実は自ら教育せられているのである。（1929年、小学校第1回卒業生を送り出すにあたっての心境——赤井の日記より）(※ 78)



赤井を支えた家族

そして1930年（昭和5）4月4日職員会議では次のように職員に語りかけた。

天下、学校実に多い。その中へ我々の学園が出現したのは何の為であったか。文部省の定めたところのものを克明に実現しようとしてならば何もこう苦しんでこの学園を建てる必要はなかった。実に新しい時代が要求する教育をせんが為であった。その為には文部省のものに囚われず、厳密な批判を行って行かねばならぬ。勿論敢て異をたつる必要はない。然し、研究、実験の労をさけ、既成の教育に追従するのは学園の墮落である。深く慎まねばならぬ。その為には常に研究的態度をもって教材に、教法に研究をおこたらぬ様でなければならぬ。(※ 79)

〈※ 77〉 中野光著『教育改革者の群像』（国土新書、1976年）P.115

〈※ 78〉 中野光著『教育改革者の群像』（国土新書、1976年）P.117

〈※ 79〉 中野光著『教育改革者の群像』（国土新書、1976年）P.118

2 初期の後援者たち

初期の明星学園にはその財政を支えてくださった多くの支援者がいた。

茶郷基、山之内兵十郎、井野正次郎、川井源八、服部春一、木谷吉二郎、市村今朝蔵という方々であった。

茶郷基氏は学園創設時の唯一の後援者であった。創立の趣意書に「森霊に、水清き井の頭公園脇に千坪の土地と、ささやかな学舎を得て、友情に燃える私たちが、隠れた後援を誓われる一教育愛好家に励まされて、新しい教育の樹立を企てました」とある影の後援者こそ茶郷基氏であった。

茶郷氏に続いて発展途上の学園を支援してくださったのは、山之内兵十郎氏と鈴衛夫人であった。山之内夫妻は新しい教育を目指した4人の同人の熱意に惹かれ、末娘を明星に転入させ、保護者となった。小学校の校舎建築費、中・女学校開設の後援会費など多額の寄付をしてくださったばかりでなく、後援会の最高顧問となり、各界の有力者とも交誼をとりついでくださった。夫人は「母の会」設立の立役者であった。



山之内兵十郎氏



山之内鈴衛氏



井野正二郎氏

井野正二郎氏は工務店の店主。一人娘の富枝さん（4回生、のち音楽の北川先生）が入学した年に小学校5・6年の教室、音楽室、美術室、つづいて中・女学校の建築を請け負い、資金を立て替えてくださった。彼もまた夫人とともに後援会の役員として活躍された。夫人はのちに建築費の未払い金を帳消しにしてくれた。

市村今朝蔵氏は軽井沢の3,000坪の土地を寄付して下さった。そこに軽井沢寮が建てられ、林間学校として利用された。後には戦後の困難な時期に理事長を引き受けてくださり、財政面でも多くの貢献をされた。子どもたち、孫たちを明星で学ばせ、きよじ夫人は長らく学園の評議員として尽力された。



市村今朝蔵氏

第4章 創立10周年

1 10年の星霜

1934年（昭和9）5月15日、明星学園は開校の日から10年目を迎えた。

（1）創立10周年への思い

創立同人は、その時の思いを小学部教育月報『ほしかげ』第7号（1934年5月15日発行）に載せている。そこには創立2年目から7年間明星学園で教鞭をとった霜田静志も「明星の教育」と題して原稿を寄せている。また、就任3年目の教師・中村勇が後に続く者の思いを「私どもの立場」と題して綴っている。ここに4人の文章を紹介する。

創立10周年に当って 園長 赤井 米吉

愈々10周年を記念する時が来た。「10年たったら」という気持ちが随分持たれていた。

「10年たてば」と言っておさる方もあった。がその10年が来てもまだ何一つとして纏ったものはない。凡てがまだまだ創業の途上にある。このテンポの速い時代にこれはまた余りにも遅々たる歩みだった。この10年に世界は急激な変化をなした。一面から言えば不況の10年だったが一面から言えば躍進の10年であった。日本も、東京も、井の頭もこの10年に面目を一新している。そうしたものに比べると我々の歩みはさほどでもなかった。もっと大幅の歩みが出来た筈だったのにと満ち足らぬ思いがする。

勿論外形的に見ればここにも相当の発達があった。兎に角に、武蔵野の麦畑の中に一学園が生れたということは不思議な出現であった。「うるおいなき地」が水の源になったのである。麦畑の中に掘った一本の井戸、その滾々たる水、それを幾百人の幼い者が飲んだ。そして成長した。「生命の水」。然もその水は彼等の胸中深くに更に永久の泉となって、滾々として湧いている。これは偉大な変化であった。

大正13年5月15日開校したときには児童は小学1年7、2年5、3年9、合計21名、職員は照井君夫妻、山本、私の4人、校地は1,000坪、校舎110坪それだけで総てだった。今は小、中、女3部350名、卒業生小学部200名、中女60名、職員30名、校地6,300坪、校舎650坪、こう比較して見ると随分発展したものと言わねばならぬ。

校庭の公孫樹、松、さわらは皆苗木を植えたものだが今では一人前の樹木になっている。10年たてばやはり10になるものだ。然し小学部の第一期の校舎の如きはもう古びてしまった。色はあせ、床も朽ちかけて来た。程なく改築を考えねばならぬ様になった。それにつけて思うのは生きた草木と死んだ物の違いである。生きた草木は10年の間に伸びたが死んだ物は年一年と腐朽して行く。世界の不況と躍進の二面もそれから来たのである。「外なるものは日に朽つとも内なるものは日に新なり」である。いや生命は絶えざる死と生によって伸びる。昨日のものを葬らねば今日のものは生れない。世界の躍進も一面に不況があったればこそである。学園の如きも多くの死を嘗めればこそ成長も出来たのである。

10年の間には随分風雨に曝されたこともあった。然しそんな日ばかりだったのではない。暖い春の陽に照らされもした。記憶というものとは変なもので、あるときはこの10年を風



草創期の小学校校舎

雨の連続だった様に考えたり、又或る時は不断の春風和光だった様に考えたりする。今の気分で昔を追うからである。実際はそんなものではない。苦楽相寄ると言った方がよい。然もそれが成長に必要なだった。或は同情ある人々に慰められ或は理解なき鞭に打たれた。熱せられたり、冷されたり。その間に伸びたり、緊ったりするのだ。伸びてばかりも居られまいし、緊ってばかりも居られない。が結局必要なものは皆与えられたということになる、顧みれば凡て有難い。



中女学校の卒業生はこれで2回出ている。小学校から続けて考えると第1回生は9年、第2回生は10年ここで生活したわけである。現在の5年生が同校の時の1年生で、これが出ると学園の仕事が丁度一巡りしたことになる。自動車が出来ても、飛行機が出来ても、これだけは10年たたねば10にはならぬ。社会の目覚しい躍進、急テンポの進行にもかかわらず、教育のみはいつも遅々として進まぬように思われる。時勢に取り残されているように嘲けられることもある。然し世の中には自動車の往けぬ山道があったり、飛行機で飛込めぬ竹叢もある。自動車の都合のよいところ、徒歩の便利など様々である。自動車が便利でもどこもかしこも自動車というわけには行かぬ。教育の如きはその徒歩か手押車で行かねばならぬところの多い道である。生理的に1年に10年分の成長が出来ぬならば心理的にも同様10年の仕事は10年かかる。それを飛躍させようとして実に多くの失敗が示されている。

時代と共に教材は変わる。教法も進歩する。然し成長の法則には変化がない。ギリシャ時代よりも今日の社会文化のレベルは上って居るが、今日の愚人はギリシャの賢人よりもえらいというわけにはいかぬ。恐らく人間知情意は2,000年前も今も異ってはいまい。教育の遅々として進まぬ理由はそこにある。学園の教育研究は速成栽培の研究ではなかった。むしろ物質的方向の進歩をただちに精神方面にもたらせて、人間速成を急ぐ時勢へ反省を与えんが為のものであった。

澤柳博士の学園へ寄せられた書に、

「児童数の増加は結構ですが余りに順調過ぎるかと思ひます。初めは辛抱する時期を経過したいと思う位です。自然に来るのでなくてはいけないと思います。人員よりも教育の実質実績を第一として進まねんことを、さすれば必ず盛んになります。名の顕れんよりは実の揚らんことを希望します。」

とあった。学園が生徒募集の宣伝に熱中しない伝統はここにある。中途種々の事情から宣伝に苦心したこともあったが翻ってみるとそれはよい結果にはなっていない様に思われる。勿論教育の如きは最も社会的な事業である。したがってそれを世に示し、人に問うことは必要である。こそこそ隠れてやるべきものではない。然しそれも内からの自然な必然な、発展でなければならぬ。内を忘れた外、実のむなしい声、であってはならぬ。貝類のあの堅き貝殻もやはり内なるやわらかい肉が生み出したものである。我々の器械道具、校舎もやはり我々の内から生み出したものでなければならぬ。外への仕事は内への仕事、内の充実が外の発展である。



10年の間に実に沢山な人々の御世話になった。お父様方、お母様方、友人、知人、先輩、静かに想い廻らすと無数の人々の顔、言葉、奔走が浮び出て来る。有難いことである。学園開校披露の日（大正13年6月21日）私は式辞の一説に次の様に言った。



「ここは私が設立者になっていますが、これは名義だけのことで、実はこの4人の同人の共同経営です。然もこの4人も実は設立したのではなく、私達の蔭にあって絶大なる援助をして下さる方の力によって出来ているのですが、その人も敢て自らを現わされないのは、その人もこれを自らのものとせず、社会のものたらしめんが為です。私達はこの社会のものたる学園に働くものです。

ここの教育に対して私共は一個の理想をもっています。然しこの理想は決して私共の我儘勝手な考えではなく、この社会の理想であるとかたく信じています。今多くの人々がそれを認めてくれなくともやがては凡ての^{すべて}人々に明瞭に認められ、熱心に求められる理想になると信じています。それ故に精進し、その故に敢て憚らず幼いものを導こうと決心しているものです。

かくこの学園はその経営も教育も共に社会のものです。これを私立とは呼ばれていますが、——勿論公立とは言われませんが——社会立ともいふべきものです。従ってここの盛衰は私共ここに働くものの喜憂のみではなく、全社会の喜憂であらねばなりません。この意味に於て私は御来会の諸君がこの学園の振興に対して同情と助力を寄せられる義務があると訴えるものであります」。

10年私はこの考えで暮して来た。仕えるつもりで。乏しいながらに全力をあげて仕えて来た。此処は使う人なき奉仕の道場である。児童の何よりも学ばねばならぬことは奉仕の道である。職員も父兄もこれを第一眼目として指導して行かねばならぬ。今日迄の学園はそれによって立って来た。将来も更に多くのそれが要求せられる。諸共に奉仕の道に進みたい。(※80)



第二の誕生を目ざして 照井 猪一郎

風に薫る若葉、日に映ゆる新緑——目路限り知らぬ武蔵野の樹海の底に黙々として5月の学園は今年の営みをいそしむ。

渺茫際涯知らぬ野と森を侵す浅緑、そが波間を踊り出た鯉鱗は爽かな銀鼠色の大気の中に悠揚と泳ぐ。

5月は武蔵野の生命である。鯉鱗は関東武人の象徴である。学園明星は実に11年前の昔ゆかりあるこの季節^{はく}をトしてこの地に誕生した。

爾来私達は年毎に週り来るこの生く日の足る日を待ち侘びて、校庭の空高く鯉鱗を樹立する。そして180の児等の将来を祝福する。特に今年はその画期的な10周年であるという。私達は学園の歴史を愛慕すると共に、更に第2の誕生を意図して明日への躍進を思念せねばならぬ。「温故知新」は将に私達に課せられた今年の命題であろう。

「10周年記念祭」それは誰の耳をもそそるに十分な言葉の響である。幾多の美談や観劇や努力の結果を以って今日を将来したいという過去を言い換えたものだからである。けれども私達にあっては無条件でその昂奮と感傷^{はしいまま}を恣にすることは許されない。

歴史は尊い。併しその尊い所以は一度性という古い事実の存在と蓄積に於てのみの謂ではない。徒に過去の追憶を掘り返してはその回顧に陶醉するだけでは老人の愚痴と撰ぶところはあるまい。私達の視野は更に明日への歩みに向かって拡がって居るではないか。

私達は今日を劃期として吾学園10年の歩みの中から、「何が学園を今日にまで導き得たか?」「今日



〈※80〉 小学部教育月報『ほしかげ』第7号(1934年5月15日)P.1～3

の吾々は現代従業員として如何なる役割を勤めつつあるか?」「それは果して国家社会の待望に添ふものであり、而も将来への発展的生命を宿す體のものであるか否か」を厳密な客観的立場の上から再吟味して見なければならぬ。そこに10周年という劃時代的、或は周期的回顧と反省の意義と必要性が成り立つ。そして其上にこそ今年の吾々の仕事が新しく発祥する。そしてこの第2の誕生を哺む第2の創業は今学園を耕しつつある人々によって営まれねばならぬ。

唯私達は将来についてそう軽率に語り得ないかも知れない。それから不渡り手形の濫発をも慎まねばならない。併し過去の再吟味その事自体の中には多くの未来への暗示が芽ぐみ、次に掲げるような些かな仕事の計画の端々にも私達の歩まんとする劃線^{かく}の方向が解^{わか}って頂ける様な気がする。(※81)

この後も、照井は「学科目について」「学習指導について」「自律的生活の指導」「今年の行事プランについて」「校舎の修理」等、計画していることを述べている。つづいて、『ほしかげ』に寄せられた元教師霜田静志と、当時就任3年目であった中村勇の一文を紹介する。

明星の教育 霜田 静志

明星も早10年になったか、思えばまことに感慨無量のものがある。私は第2年から、明星の教育に参加したのであるが、当時私は自分の教育生活に於ける止み難き要求から、是非学級訓導として1組を受け持つての仕事をして見たいと思い、これに馳せ参じたわけである。

此の時入学した子供等を卒業させる迄の6ヶ年其の間には随分と苦勞もしたが、同僚の諸君と父兄の御援助によって、どうやら大過なくすごす事が出来た。最近私はその詳細なる記録をまとめて「子供への理解」なる一書を著したが、其の書の最後の1頁に私は6ヶ年を通じての私の態度を次の如くに記して置いた。

振りかえって考えて見るに、私の6年間の教育は、知識の集積という点に於ては、何としても大きな効果を挙げ得たとは思わない。私は常に単なる知識の集積でないもっと大きな立場からの教養という事に力を注いで来たのである。

多くの人々は知識の量の多きことのみ欲する。そこで詰込み教育が盛に行われる。併しそうした詰込みの知識が果して真の知識であろうか。成程試験のためには、そうした知識も役に立つであろう。併し試験を通り過ぎれば忘れてしまっていていい知識である。

お互に自分の学生時代を反省して見れば分かる事で、吾々の頭に後まで残って居る知識は、決して試験勉強のために覚えた知識ではない。必要に応じて求めた知識である。

此の見地から私は子供に対して、単なる知識の注入は出来るだけ之を避けた。そして彼等をして知識探求の興味と必要とを感じしめ、之によって研究せしめたその結果、子供等の研究の方法なり態度なりはかなり確かなものになった。

知識の所有という事にのみ重きを置く人々は何でも覚えて居なければならぬように考えるが、之程馬鹿な話はない。昔は物識りが必要であった。併し百科事典も図書館も完備せる現代に於て、物識りがそんなに必要だとはどうしても考えられない。大事なのは研究の方法や態度の出来て居る事である。どう調べれば之が分かるかという点にすぐ気がつく事である。

知識の所有の量の多きを望むよりは、知識を働かす力の方が大事である。即ち大事なのは所有の教育ではなくて創作の教育である。結局私の6年間の努力は、子供の力を創作的に発展せしむる努力であった。



5年生(9回生)大盛寺前の杉並木

(※81) 小学部教育月報『ほしかげ』第7号(1934年5月15日)P.3、『赤井・照井両先生 生誕百年誌』に再録

子供は勉強する時期が来れば勉強する。それを余りに親や教師があせって詰込ばかりすると、子供は却って勉強に対して拒否するようになる。それでは何にもならない。之をマラソン競争に比較して考えて見ると誠によい。始めに余り走らせて疲れさせてしまつては、後の大事な時になって、力が出て来ない。然るに今日の教育者や親達は、最初から走らせるつもりだからかなわない。子供こそいい迷惑である。私はそうした態度を決して採らなかった。それ故に私の教えた子供達は将来に発展する可能性を多分に持って居ると信ずる。

私は之が明星の教育の本当の精神だと思って、徹頭徹尾押し通して来たのであるが、今日に於ても此の点は同じであらうと思う。否、今後に於ては益々此の精神を発揮して、明星の光を輝かすであらう事は私は確く信ずる。

併しそうした教育は、今の世間の実情とは隔りがある、今の世間の多くの人々は準備教育ばかりを要求して居る。明星では小学部を終えて後に進むべき中学部女学部があるのに、それにも関わらず、父兄によっては、屢々^{しばしば}他の学校に行く準備教育を要求した。併し私はそれを勇敢に斥け、あくまで明星教育の立場を説いて思い止らせるようにした。幸にして私の教えた組の父兄は私の此の精神をよく理解して呉れて、私の思う所を貫徹させて呉れた。私の教えた組の子供等が、1、2の例外をのぞいて悉く^{ことごと}明星の中等部に進んだのはそのためである。而して「子供への理解」一篇に記したる如き思い切った教育の出来たのも、父兄の此の理解による事と今更に感謝の念を禁じ得ない。〈※ 82〉

私どもの立場 中村 勇

10周年記念日を迎えて、確かに3年目に足を踏み入れたのみの私には、自分で骨折らなかつただけに草分をされた方々のようにしみじみ来し方を回想するというようなことが出来ないのを遺憾に思う。何事によらず創業の苦心というものは一通でないことをよく聞く、そしてほんとうにそういうものだろうと思う。だから最初から此の学園の建設に苦しんで来て居られる方々、または苦しまれた方々に対して頭が下がる思いがすると同時にその方々に対して此の記念日を心からお祝したい。そんなことをいうと、まるで自分が局外にあるように見えてよくないと思うのであるが、此の10周年に、たった2ヵ年より参加しなかつた私自身がどれ程の意義も持たないことが考えられてならないのである。

日本の創業当時に参加した者は一人も居なくとも私どもは紀元節をお祝する。それと同じような意味に於て私は此の記念日をお祝し、同時に十分に意義あらしめ、且つ創業にあづかった方々の苦心を偲び度いと思う。私立学校の創業は公立学校の創設とは全然異つて、何等の背景を持たずに自力で立たなければならぬものが多く、それこそ文学通りの「草分^{くさわけ}」で、だから一般の公立学校の記念日とも全くその趣を異にするものである。

そこで私自身此の際どんな意味を自分自身に持たせなければならないかを考えて見なければならない。つまりどんな気持で此の記念日を迎うべきかを考えて見なければならない。

私どもが何事かを記念するということは単にその事を回想するという感傷の外にその最初の精神に新しい動力を与えることであるというよりも、自分の内にもう一度その精神を見直して新しく踏み出すことを予約することに外ならないのである。だからそうした立場からするならば、此の際最も重要な役目^にを擔う者は他の誰よりも現在此の学園を組立てている人達、そして明日の一步を踏み出す人達でなければならないわけである。

此の学園の出来た当時はわたしはまだ学校を卒業して間もない頃で、方々で私立学校が新教



日光旅行（中村勇組）

〈※ 82〉 小学部教育月報『ほしかげ』第7号（1934年5月15日）P.7

育の烽火を挙げていた頃である。私は遠い僻村から、そうした新鮮な教育を行い得る学校の教師と児童達の幸福を思っていた。過去10年間に於ける日本の教育が思い切り轉回されたことは何人も疑わない所である。而してその轉回は何と言っても、従来の教育と軌を異にして進んだ私立学校の人達の力に因るものが多大であった。何事も思い切りやる人によってのみ改造もされ轉回も可能なものであって、私立学校であればこそそれが可能であったのかも知れない。そして又それなくして私立学校の立場が失われてしまうのである。敢然と進む者のあとには必ず思い見なかった欠点が残されることがまぬがれないものであるが、それを怖れ過ぎては何事も成し得ずに終わってしまうのである。多くの賢い人達は、決して最初から手を触れない。そして前進した人の残した欠点を拾いあげては何とか難くせをつけ度がるものである。現在では公立学校も一見変る所がないように見えるが、それは一般の小学校が漸く水準に近づいたのであって、何とかかんとか言いながらもその先驅をなした人達のおかげを多かれ少なかれ受けているのである。

新しい教育の芳香に陶醉して教育の真実な姿を見失うことは自ら戒めなければならないことではあるが、統一とか統制のために動きの取れない固い殻を自ら着てしまうことは教育の発展を阻止してしまうことになる。そしてそうした殻を破ること、否そうした殻を着ないで自展して行くことこそ私立学校の使命でなければならないのである。

今や私立学校の教育は教育者達の手から経済的にもぎ取られつつあることはまことに悲しむべき現象である。勿論教育は教育者の意志一つでは出来る仕事ではない。然しながら、教育者の教育理念外に教育が求められるようになったら、教育という事務だけは保たれるかも知れないが、教育そのものは地を払って居なくなるのだ。児童の自由（放任の意では毛頭ない）が教育の第一条件であると同様に教育者の權威も亦教育の第一条件でなければならない筈である。私どもはもっと積極的に私どもの教育理念の前に奴隸になり、義理や体裁や意地やを跳越えて奉仕することを必要とする。華やかな覇氣も教育には惜まるべきものであるとともに老大家の如き勿体振るも亦何物も貢がないであろう。「親鸞は弟子一人持たず候」という沈潜よりも「天下の教育を如何せん」の不退轉こそ目下の我が国の教育に、殊に私どもになくてはならぬ態度ではあるまいか。〈※83〉

（2）創立10周年の記念事業

学園10周年を記念するために、いくつかの事業が計画された。その第一期計画として下記の校舎増築が具体化し、以下のように発表された。

1. 中学部
 - ①講堂1棟 平屋建 80坪 ②作業室 平屋建 20坪
2. 女学部
 - ①普通教室 平屋建 45坪 ②理科室 平屋建 25坪
3. 小学部
 - ①科学館1棟 平屋建 50坪

※地、歴、数学、理科の実験室、作業室及び器械標本その他の教鞭物の陳列、保管に充てるもので前号にもその必要と実現の可能を記載したもの。

※小学部の校舎、机、腰掛、便所等の大修理及器械備品の為めに1,000円が計上されてあります。器械備品というのは主として理科学習に使用する児童実験用具、体操用具、地理教授用掛図等でありませう。〈※84〉

〈※83〉 小学部教育月報『ほしかげ』第7号（1934年5月15日）P.8

〈※84〉 小学部教育月報『ほしかげ』第7号（1934年5月15日）P.9

(3) 創立 10 周年記念式

1934 年（昭和 9）5 月 15 日 学園の講堂で式典は営まれた。

創立当初児童 21 名、教師 4 名だった学園は、この時、児童生徒 349 名、教師 31 名になっていた。

10 年前のあのどしゃぶりの開校式とはうってかわって、この日の天気は晴れ。教師と子どもたちとの心を映した空はどこまでも青く、これまで幾多の困難を乗り越えて迎えた 10 年目を天も祝ったかのようである。

式典の様子が『ほしかげ』（小学部教育月報）に次のように報告されている。



創立 10 周年記念式典での赤井学園長

創立 10 周年記念式

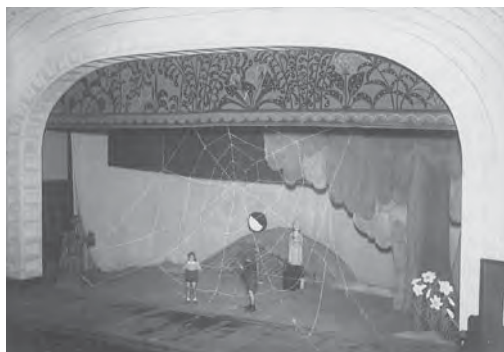
5 月 15 日 於 当学園講堂

好晴に恵まれて学園創立 10 周年の意義深い式典は 15 日午後 2 時文字通りの盛況裡に挙行された。来会者約 200 名、それに三部の職員生徒児童で狭い講堂は鮎詰め乍ら静肅に、^{ことほ}寿ぐ者も祝われるものも今日の佳き日の昂奮を感じた。最初園長の創立前後の回顧より将来の待望に互る式辞があり、永井柳太郎拓務相、藤井皇子御養育掛長、羽仁もと子自由学園長、赤堀後援会長、卒業生代表等の式辞、山積する祝電披露の順に式程を進め、「明星の歌」の合唱に終了した。〈※ 85〉

記念学芸会

5 月 19 日、午後 1 時半から日本青年館に於いて公演され、来場者はおおよそ 2,000 名に達した。〈※ 86〉

学びの場の営みとしては、小・女学部合同の学芸会（5 月 19 日午後 1 時半から神宮外苑日本青年館で）、小学部の児童劇放送などが行われた。



「お地蔵さんは知ってるか」小学部児童劇
（1934 年 5 月 19 日）

〈※ 85〉 小学部教育月報『ほしかげ』第 8 号（1934 年 6 月 20 日）P.1

〈※ 86〉 小学部教育月報『ほしかげ』第 7 号（1934 年 5 月 15 日）P.16

ほ し か げ

— 16 —

記念學藝會

十周年を記念する意味で既にお知らせしました如く十九日午後一時半から日本青年館で音楽、舞踊、劇の公開を致します。

當日のプログラムは次の通り

第一部 音楽 指導 關口典之

1、合唱 五月 濱邊	女學部生徒 尋常小學唱歌 編曲 宮原祐次
2、合唱 イ 雁 新興日本少 女の歌	詩 波邊 雄作 譯詩 中群 節二 ハ希望のさ やき
3、合唱 イ かくれんぼ	小學部、五、六、七、八、九、十、十一、十二、男女
4、合唱 ハ 山彦	詩 永井 花水 曲 中山 晋平
5、合唱 ハ 山彦	詩 福井 直秋 曲 川路 柳作
6、合唱 イ 夢	小學部 一年
7、合唱 イ 竹の子	小學部 二、三年
8、合唱 イ 夢	女學部 有志 佐藤 誠實 シムウヤン 永村 農三 サヤンギ
9、合唱 イ 夢	女學部 有志 佐藤 誠實 シムウヤン 永村 農三 サヤンギ
10、合唱 イ 夢	女學部 有志 佐藤 誠實 シムウヤン 永村 農三 サヤンギ
11、合唱 イ 夢	女學部 有志 佐藤 誠實 シムウヤン 永村 農三 サヤンギ
12、合唱 イ 夢	女學部 有志 佐藤 誠實 シムウヤン 永村 農三 サヤンギ

第二部 舞踊 指導 石井小瀨

1、荒城の月 歌 土井 義翠 曲 瀧 龍太郎	女學部生徒 女學部二年
2、小鳥の唄 歌 瀧 龍太郎 曲 中山 晋平	女學部二年
3、春風 歌 中山 晋平 曲 久保田 青二	女學部二年
4、鳥籠 歌 久保田 青二 曲 佐々木 清	女學部二年
5、略和の子供 歌 佐々木 清 曲 室崎 琴月	女學部二年
6、姉妹 歌 室崎 琴月 曲 室崎 琴月	女學部二年
7、夕日 歌 室崎 琴月 曲 室崎 琴月	女學部二年
8、ヤマト 歌 室崎 琴月 曲 室崎 琴月	女學部二年
9、ヤマト 歌 室崎 琴月 曲 室崎 琴月	女學部二年
10、飛騨 歌 室崎 琴月 曲 室崎 琴月	女學部二年
11、飛騨 歌 室崎 琴月 曲 室崎 琴月	女學部二年
12、飛騨 歌 室崎 琴月 曲 室崎 琴月	女學部二年

第三部 兒童劇

1、お地蔵さんは知つてるから (所要時間二十分)	作及指導 膳井 猪一郎 曲 吉原 規
2、お地蔵さんは知つてるから (所要時間二十分)	作及指導 膳井 猪一郎 曲 吉原 規
3、お地蔵さんは知つてるから (所要時間二十分)	作及指導 膳井 猪一郎 曲 吉原 規
4、お地蔵さんは知つてるから (所要時間二十分)	作及指導 膳井 猪一郎 曲 吉原 規
5、お地蔵さんは知つてるから (所要時間二十分)	作及指導 膳井 猪一郎 曲 吉原 規
6、お地蔵さんは知つてるから (所要時間二十分)	作及指導 膳井 猪一郎 曲 吉原 規
7、お地蔵さんは知つてるから (所要時間二十分)	作及指導 膳井 猪一郎 曲 吉原 規
8、お地蔵さんは知つてるから (所要時間二十分)	作及指導 膳井 猪一郎 曲 吉原 規
9、お地蔵さんは知つてるから (所要時間二十分)	作及指導 膳井 猪一郎 曲 吉原 規
10、お地蔵さんは知つてるから (所要時間二十分)	作及指導 膳井 猪一郎 曲 吉原 規
11、お地蔵さんは知つてるから (所要時間二十分)	作及指導 膳井 猪一郎 曲 吉原 規
12、お地蔵さんは知つてるから (所要時間二十分)	作及指導 膳井 猪一郎 曲 吉原 規

2 粟 畑

出演兒童 百姓のお父さん その子(男) 同その子(女)	六年男 六年男 六年男 六年男
出演兒童 百姓のお父さん その子(男) 同その子(女)	六年男 六年男 六年男 六年男
出演兒童 百姓のお父さん その子(男) 同その子(女)	六年男 六年男 六年男 六年男
出演兒童 百姓のお父さん その子(男) 同その子(女)	六年男 六年男 六年男 六年男
出演兒童 百姓のお父さん その子(男) 同その子(女)	六年男 六年男 六年男 六年男
出演兒童 百姓のお父さん その子(男) 同その子(女)	六年男 六年男 六年男 六年男
出演兒童 百姓のお父さん その子(男) 同その子(女)	六年男 六年男 六年男 六年男
出演兒童 百姓のお父さん その子(男) 同その子(女)	六年男 六年男 六年男 六年男
出演兒童 百姓のお父さん その子(男) 同その子(女)	六年男 六年男 六年男 六年男
出演兒童 百姓のお父さん その子(男) 同その子(女)	六年男 六年男 六年男 六年男
出演兒童 百姓のお父さん その子(男) 同その子(女)	六年男 六年男 六年男 六年男
出演兒童 百姓のお父さん その子(男) 同その子(女)	六年男 六年男 六年男 六年男

餘 滴 五十嵐生

△若葉搖ぐ學園の五月は十周年の榮光に映えて、此の十五日に記念の式典が舉げられる。永井拓務大臣、吉田廣島文理大學長に、御多忙の中お割いて御臨場下さる筈、この異例の事實に對して我等亦異常の感激を覺えるものである。

△四月の中島先生を送つて山梨縣より原田先生を新一年増任として迎へた。中島先生が六個年學園のために辛苦なされたことを深く謝するものである。

△本報記事の中、間長、膳井(げ)先生のものなご校正中私に何となく眼頭熱くなるのを覺えた。膳井先生の「第二の誕生を以てして」はその緒言に我々の意志を代表してあるし、記念事業の記事並に中村先生の「我等の立場」と照合して、本當にこの學園の總意が理解して貰へること、思ふ。雷田先生並に安田さんには御多忙中編者の無理を容れて玉稿を下さつた。向十周年に因んで安藤、牧、岡先生の原稿を戴いたが紙面の都合で割愛したのは惜しかつた行事歴、遺足系統室は是非御熱筆御利用を願ふ。

△十周年記念號を輯するに當つて、我等は特に地下に在る甘美に酔ふことなく又現實の此の構成を虚説することなく只管に革創の精神を新たに生かして將來の充實を企圖する決意がこもるべきでないと思ふ、その爲には汎ゆる恣意のなものを斥けねばならぬと自省せられる。(五月十三日)

2 明星学園行進歌の誕生

「明星学園行進歌」は、1934年（昭和9）、創立10周年の秋、運動会の後の式で、初めて合唱された。

北原白秋作詩・細谷一郎（白秋氏の知人）作曲である。

夫人とともにお嬢さんの篁子さんの応援にみえていた白秋氏は、このとき特に保護者席から出て、生徒たちの前に立って聴いておられたそうである。〈※87〉

この「明星学園行進歌」は次のようにして誕生した。

10周年記念学芸会が5月19日、神宮外苑の日本青年館で催された折、お嬢さんが出演する劇を観にいらしていた北原白秋氏と赤井は偶然並んで観ていた。かねてから「中学部の生徒たちに、行進しながら威勢よく歌われるものがほしい」と思っていた赤井は、白秋氏に「明星行進曲」を作ってもらいたいと頼んだ。白秋氏は快く承諾してくださった。赤井は「明星学園の歌」（赤井米吉詩・吉原規曲^{いさむ}）と、学園の要覧とを改めて資料としてお渡しした。しばらくして原稿用紙に記された「明星学園行進歌」が白秋氏から届いた。曲は白秋氏の知人の細谷一郎氏によるものであった。この時の喜びを赤井はこう記している。

「深き木立」は今の若い人々にはびんと来ないかも知れないが、戦争前までは井の頭の池の両側から新東京辺りまで樹齢40～50年の杉が深く茂っていた。「富士」は校庭から晴れた日の朝夕は望まれたものである。それらの風物がことごとく詠みこまれ、「校歌」といわないで、一篇の井の頭の詩としても立派なもの。それにわれわれのモットー「清く」「朗らか」がよまれ、「若き魂」が歌われているので、われわれは有頂天になってよろこんだ。〈※87〉

また、戦時中の「明星学園行進歌」の取り扱われ方についても赤井は次のように記している。

戦時中は何でも統制ばやりで、「校歌」も東京都の許可をうけねばならないというので「明星学園の歌」と一緒に「明星学園行進歌」も提出した。すると許可にはなったが、「めざめ若き魂」を、「さめよ若き魂」と訂正せよとの条件がつけられていた。大詩人白秋さんの詩を訂正する官吏の無謀さにおどろいたが、暫くそのように直して歌っていた。戦争がすんでからまた元どおりになった。〈※87〉

その後、「明星学園行進歌」は小・中・高で校歌のようにして歌われてきた。

しかし、小学校では1976年以降、中学校では1978年以降歌われなくなった。

2000年に「なんで歌わないの」と、卒業生で元中・高国語科教諭の岸すみれが、『明星会会報』で発信。以降3年間このことを会報で取り上げつづけた。〈※88〉

40年近く小・中学校では聞かれなかった「明星学園行進歌」は、さまざまな時を経て、中学校では2013年度の入学式から、小学校では2014年度の入学式から、ふたたび歌われている。

〈※87〉 赤井米吉記『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』P.110

〈※88〉『明星会会報』No.47（2000年秋）～No.50（2003年初夏）



明星学園行進歌

北原白秋 詞 細谷一郎 曲

1 黎明、
 暁に笑る明星、
 暁は近く、
 ふかき木立、
 我等輩ふこの木上、
 さながら
 静かなり、常に静のう。
 ゆきめ 霜きたましい、
 ひびけ 雲と地の声な。
 明星、明星、
 明星、学園。

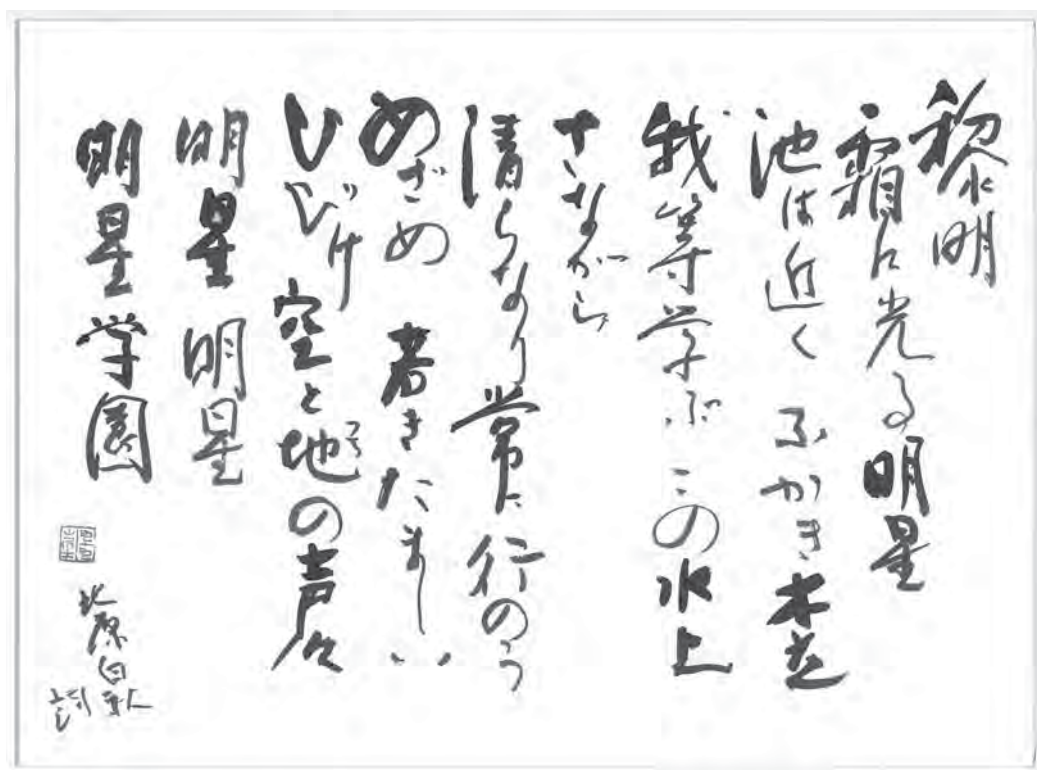
2 義照、
 すでに笑る明星、
 雲はなびき、
 ひろき武蔵、
 我等輩うこの山のもと、
 幸あれ
 静かなり、常に静けり。
 思え、遠きかがやき、
 はなて 目をば富士のあなたへ。
 明星、明星、
 明星、学園。

明星学園 東京都二葉市中礼

明星学園行進歌

北原白秋 詞 細谷一郎 曲

力強く (M.M.J = 100 拍は 120)



白秋氏の詞への愛着を込めて墨書された色紙（作者不詳）

第2部 アジア・太平洋戦争期の明星

1935年（昭和10）～1945年（昭和20）



太平洋戦争開戦2か月前の1941年10月7日、
女学校5年生は修学旅行で上高地を訪れていた。
上高地旅行は1942年まで続けられた。



1944年、戦況の悪化に伴い学校行事は縮小され、
旅行の記録もほとんどなくなる。
その頃女学生たちは、学校で薙刀訓練を行っていた。

第1章 戦時教育体制のなかで

1 赤井学園長の欧米視察

(1) 世界新教育会議

内外の情勢

1936年（昭和11）1月8日、赤井学園長は、新教育協会の野口援太郎会長からの手紙を受け取った。手紙の内容は、「今年8月、イギリスのチェルトナムで第7回世界新教育会議が開かれるので、日本の首席代表として出席してもらいたい。文部省の普通学務局長・河原春作氏とも話してある」というものであった。

野口は赤井より19歳の年長で、かつて姫路師範学校の校長として自由教育の実践に先鞭をつけ、また新教育運動の実践機関「教育の世紀社」（1923年結成）の中心人物であり、赤井とは社友という間柄であった。赤井らが明星学園を創設した年、野口は「教育の世紀社」が母体となって設立した池袋児童の村小学校の校長として実践を進め、いまや新教育運動の関係者が大同団結をはかる新教育協会（1930年結成）の会長という重責を負っていた。

当時、国際的な教育会議には二つの流れがあった。ひとつは「世界連合教育会」（WFEA）の会議で、各国の教育会・教員会の全国組織（日本では帝国教育会）が世界的規模で行うもの。かつて澤柳政太郎などがたびたび出かけたのは、こちらの会議であった。もうひとつは、各国の新教育運動家によって成る「新教育連盟」（NEF）の国際的な会議である。野口が会長を務める新教育協会は後者の日本支部としての性格をもち、フランスのニースで開かれた前回の会議には、協会代表として羽仁もと子（自由学園園長）らを送っている。

新教育連盟は1915年、第一次世界大戦（1914～18年）の真最中に結成された。発足してまもなくロシア革命がおこり（1917年）、ソビエト社会主義共和国連邦が成立し（1922年）、やがてスターリンの独裁体制になっていく。イタリアではムッソリーニの率いるファシスト党が政権をにぎり（1922年）、ドイツではヒトラーが政権をにぎった（1933年）。ドイツがベルサイユ条約を破棄し、再軍備を宣言、イタリアがエチオピア侵略を開始したのは1935年、イギリスで第7回世界新教育会議が開かれる前の年である。ヨーロッパには新たな戦争の危機が醸成されつつあった。

自由主義の新教育運動がおびやかされてきたため、連盟は各国の教育行政機関にも会議への派遣協力を呼びかけた。日本の文部省にも初めて招請状がきた。文部省の河原春作は新教育協会の野口援太郎と相談して、赤井を首席代表として文部省から出し、その他のメンバーは新教育協会の有志を募ることにした。

文部省がイギリスでの新教育会議に代表を送ることにしたのは、5年前の満州事変（1931年）以来、日本の国際的評価が著しく悪化したからであった。日本は国際連盟を脱退し（1933年）、ドイツ・イタリアとともにファシズムの国とみなされていた。文部省は、日本は世界平和をめざし、自由教育を行っている国であることをアピールしようとした。赤井に白羽の矢を立てた背景にはそういう事情もあった。

赤井は世界新教育会議への出席を承諾した。しかし、赤井が渡欧の準備を進めているあいだに、二・二六事件（1936年）がおこり、軍部は政治への発言権をいっそう強めていった。そういう情勢のなかで、赤井代表らの渡英はあやぶまれたが、平生飢三郎文相の決断で実行された。ひら お はちさぶろう

こうして、赤井学園長は1936年（昭和11）6月7日、大勢の人々に見送られ、横浜港から鹿島丸で出発した。

チェルトナムへ

赤井は、毎日、見聞した事柄や感想を『外遊日記』に書きとめている。日記によれば、上海、香港、シンガポール、ピナン、コロンボ、アデン、スエズ……と、2、3日ごとに寄港し、それらの港では上陸して見学している。健康と社交を兼ねて、デッキ・ゴルフなどの競技にも進んで参加した。教育会議で行う講演の原稿も船室で書いた。



埠頭をはなれて行く鹿島丸

7月19日、船はマルセイユに入港した。その後、パリ、カレー、ドーバー、ロンドンを経て、目的地チェルトナムに着いたのは7月29日。日本を発ってから52日の長旅であった。

チェルトナムはロンドンの西郊。当時は列車で3時間余り、人口5万の小都市であった。三方を丘陵に囲まれた静かな美しい町で、男女別のカレッジと教員養成所があった。日本代表の宿舎は緑したたる木立のなかの白亜の建物で、男子学生の宿舎のひとつであった。

会議は7月31日から8月13日まで、2週間にわたって開かれた。参加者名簿に登録された会員は980余名。このほかに講演の聴講者が約500名で、多い日には1,500名もの人が集まった。イギリス人とアメリカ人が多く、日本人は首席代表の赤井を入れて8名。ほかにベルリンに留学していた東京高師の教授と、ケンブリッジ大学を出て研究を続けている人を通訳として雇ったので、合計10名だった。ソ連、ドイツからはひとりも来ていなかった。

世界新教育会議での講演

赤井は世界新教育会議で、挨拶（新教育連盟の招待会、日本の茶の会）と講演（「日本文化と国際理解」、「日本における新教育運動の社会的意義」）を行っている。そのうち、新教育連盟の招待会での挨拶を一部紹介する。赤井は挨拶を求められるとは予期していなかったが、その場の雰囲気になごやかさから、通訳を通さず、直接英語で話し、大喝采を得た。

…前略 日本に『婦人の友』という有力な雑誌があります。この雑誌の記者が本年の始めに二つの質問を出しました。その一つは「日本から世界に贈りたいものは何か」、その二は「世界から日本に貰いたいものは何か」というのでした。これにたいして沢山の回答がありましたが、その中でもっとも意義深いものは、上田博士のなされたものでした。

第一の質問に対する彼の答は、「平和を求むる声」で、第二の質問に対する答もまた同じく「平和を求むる声」というのでした。（喝采） 今日世界はいずれの国でも皆これを必要としているのであります。「国際理解」「国際的精神」、われわれの新教育精神がそれであります。

われわれは日本の代表者として、この一つの声を諸君に伝えるためにきたのであります。そしてまた、われわれは日本の代表として、この声を贈られることを期待してきたのであります。（喝采） 後略

…（※1）

（※1） 赤井米吉「世界新教育会議での講演」『愛と理性の教育』（平凡社、1964年6月1日）P.278

別の日、赤井は他の日本代表に語り、チェルトナムの有力者や連盟本部の役員、各国の首席代表などをクインズ・ホテルに招待して、お茶の会を開いた。かれはそこで、ユーモアにあふれたスピーチで日本という国を紹介した。

また別の日、日本における新教育運動についての報告では、「自由綴り方」の主張から始まった日本の新教育運動が、いまや「自由教育は農村の疲弊を救済することができるか」という問題に直面し、郷土教育という第二の段階に達していることを話した。アメリカ代表のひとり、ウォシュバーンとも再会した。ウォシュバーン博士は日本の教育界でも著名で、先年来日したこともあった。

(2) 赤井が見た世界の動き

世界新教育会議につづいて、3か月余り、赤井は精力的に欧米諸国の教育を視察して回った。そのことに関連して、中野光氏はこう書いておられる。

赤井は、さまざまな会合において国際理解と平和を説いた。しかし、他方、各国を巡る過程でイギリスおよびアメリカの経済的、政治的支配が、後進資本主義国ならびに植民地諸国にとって、いかに甚しい矛盾を結果しているかということをも認識せざるをえなかった。とりわけ彼の眼に映じたのは、インドにおけるイギリスの植民地支配の現実であり、それには深いいきどおりを感じた(※2)

ドイツでは、オリンピック直後のベルリンとミュンヘンに滞在し、ヒトラー・ユーゲント（ナチス・ドイツの青少年団）の活動も見た。のちの研究用にドイツの教科書も手に入れた。イタリアでは、ムッソリーニの青年団・少年団の訓練場も見た。だが、赤井の眼はヒトラーやムッソリーニの思想と行動への安易な同調者のそれではなかった。

アメリカには10月10日から1か月滞在した。ローズベルト大統領のニューディール政策が実行に移され、ふたたび選挙戦がはじまっていた。赤井はラジオでよくローズベルトの演説を聴き、ボストンでは演説会場にまで出かけた。また、さまざまな種類の学校を訪問して、教育の実情を知ろうと努めた。

10月14日、ニューヨークのドルトン・スクールにヘレン・パーカー女史を訪ねた。校舎は5階建てで、幼稚部、小学部、中学部、高等部が各階に分かれ、それぞれに図画室、図書室、音楽室を持っていた。生徒は400人というが、そんなに要るようには思えないほどに部屋が多い。どの部屋も多くて12、3人、少ないのは4、5人で、めいめいが自由研究をやっていた。ドルトン・プランは活かされていた。

求道の旅

10月28日、ウィネッカ市に教育長のウォシュバーンを訪ねた。チェルトナムで再会して以来の対面であった。この日の対面が機縁となり、赤井は第二次世界大戦後、ウォシュバーンの著作『生きた教育哲学』『新教育の生かし方』『世界意識への教育』を翻訳して日本の教育界へ紹介することになる。

〈※2〉 中野光「教育者としての赤井米吉」、赤井米吉『愛と理性の教育』（平凡社、1964年6月1日）P.429

11月3日、ローズベルトが大統領に再選されたことをロサンゼルスで聞いた。アメリカも素朴な自由主義の時は過ぎ、帝国主義の時代に入ったと感じた。赤井はのちに書いている。

今日の世界の国々の教育にあらわれている一つの大きな旗じるしは、国家教育、民族教育というようなものである。そういう方向から教育の改造を行おうとしているものが著しく見える。ドイツ、イタリア、日本等においてわれわれはその代表的なものを見ることができる。ロシアもそうであろう。英米もそうであるともいわれよう。そして民族精神の復興が叫ばれている。人々はこれを復古的、反動的ともいっている。しかしそれはただ復古のための復古や、反動のための反動ではない。民族をひとまずうしろ向きにすることによって、その団結を強固にし、かくて大いなる前進をなさしめようというのである。より大なる精神力をもって、より豊かな物質力を実現せんとする目論みである。うしろむきの前進である。したがってそれは分裂の前進であり、対立の前進である。^{〈※3〉}

しかし、そういうなかであって、「デモクラシー」の大切なことを考えつづけ、訴えつづけている人がある。赤井は、敬愛するジョン・デューイの講演「教育に於けるデモクラシーの課題」を直接聴くことはできなかったが、講演記録を入手して、帰国後に翻訳しようと考えた。これは帰国後の著書『世界の教育の動きをみて』に収められた。

欧米の旅を通じて、赤井の思想のなかには、ナショナリズムが一段と強くなった。しかし、それとともに、迷いも苦悩もいっそう深くなった。毎日欠かさずつけていた『外遊日記』に書きつけている。

世界はこれでよいのか。……日本は一体どうしたらよいのか。こんなことを考えている間に私の一生はすんでしまいそうである。私は一体どうしたらよいのか。……沢山の書物を読んでも、多くの人々に会っても、その文字、言葉だけをおぼえて帰ったって何もならない。私という人間が生きなければならない。……自分を作らねばいけない

彼は、ヨハネ伝を初めから読み直した。「13章あたりからのキリストの言葉に深く感じた」と『外遊日記』に書きとめている。

帰国の途上、竜田丸が太平洋の真ん中を過ぎて日本に近づいた頃、船内の放送で日独防共協定が結ばれたことを知った。日本はファシズムへの道を突き進んでいた。

〈※3〉 赤井米吉『世界の教育の動きをみて』（刀江書院、1937年11月18日）P.7

2 「国民精神総動員」のもとで

(1) 日中戦争の開始

欧米の旅から帰った翌年——1937年（昭和12）、赤井学園長は多忙な日々を過ごしていた。3月は卒業の月で、小学校は第10回生18名、中学校・高等女学校は第5回生で、それぞれ21名、19名が卒業した。依然として小さな学園である。

4月は入学の月。入学者はわずかに増えた。5月に入って、ヘレン・パーカー女史が来校した。赤井が去年の10月にドルトン・スクールを訪問して以来、7か月ぶりの対面であった。その日、小・中・女学校全員が講堂で女史の話を聞いた。通訳はもちろん赤井学園長である。他方、8月には世界連合教育会（赤井がイギリスまで出かけた新教育連盟とは別の組織）の世界教育会議が東京で開催されることになっていて、赤井は主催者側の帝国教育会の理事なので、その準備に奔走していた。

6月4日、近衛文麿内閣が成立した。およそ1か月後、7月7日の夜、北京郊外の盧溝橋付近での発砲事件を契機に、日中両軍が交戦した（盧溝橋事件）。近衛内閣は不拡大方針を出したが、軍部の圧力に屈して兵力を増派し、戦線を拡大した。政府はこの宣戦なき戦争を「北支事変」と名づけ、ついで「支那事変」と呼んだが、実質的には「事変」ではなく全面的な「戦争」であった（日中戦争）。

赤井は近衛首相を訪ねて、「8月には世界中から多数の教育者が集まって来るというときに、こんな騒ぎを起こすとは、とんでもない下策である」と直言した。近衛とは明星の初期の保護者であり後援者であった市村今朝蔵・きよじ夫妻を介して昵懇（じっこん）の間柄であった。赤井はまた、近衛のいわゆる革新派の官僚・学者から成る昭和研究会にも加わっていた。近衛は「大事に至らないですむだろう」と言ったが、事態はもはやどうにもならない段階に進んでしまっていた。

第7回世界教育会議は、8月2日から7日まで東京帝国大学を会場として開かれた。海外からの参加者は43か国におよび、総員869名。国内の参加者も予想をはるかに超えて2,409名に上った。会議は18部門に分かれ、大学内の各教室で行われた。赤井は各国の要人を応接したり部会に出席したりと多忙な毎日であった。

その間にも日中戦争は拡大して、8月には上海でも戦闘がはじまり、日本軍は年末には首都南京を占領した。

(2) 創造力と自由

日中戦争開始直前の1937年（昭和12）5月、文部省は『国体の本義』という小冊子を発行し、全国の学校や官庁に配布して、国民思想の教化をはかった。それは、『古事記』『日本書紀』の神話にもとづいて、日本は天皇を中心とする一大家族国家であると教え、現人神である天皇に絶対服従すべきことを説いていた。

近衛内閣は、日中戦争開戦後、国家主義・軍国主義を鼓吹し、国民の戦争協力をうながすために、国民精神総動員運動を展開した。「挙国一致」「尽忠報国」「堅忍持久」をスローガンに、消費節減、貯蓄奨励、勤労奉仕を要求した。

戦時体制が形成されるにともなって、国体論にもとづく思想統制、社会主義や自由主義に対する弾圧がきびしくなった。言論界では、国体論やナチズムの影響を受けた国家主義的な思想が主流となり、また、欧米の植民地支配からアジア諸民族を解放し、日本を盟主とする共存共栄の新秩序を建設することを説く大東亜共栄圏論が叫ばれた。

こういう社会状況のなかで、赤井は年来の同志である志垣寛らとともに、私立学校の生き延びる道を模索しながら、国策に協力していく姿勢を強めた。しかし、国策に協力しつつも、納得できない教育政策にはきびしい批判を加えた。

思うに新東亜の建設は我が国民に課せられた一大創作である。これを属国にするのでは勿論ない。各々の民族の主体性を認めつつ、その経済、文化、政治に大協同帯をつくり、生活を共にしようとする。この新秩序は他に何らの模倣すべきものがない。全く新なる創造でなければならない。従ってそれはどこまでも我が国民の創造力の発展を要請するものである。将来の国民教育に於て、創造力の涵養の重要なことは言をまたない。(※4)

赤井はつぎのように言う。

創造力は命令によって発展せしめることは出来ぬ。何事でも命令と通牒^{つうちょう}で出来ると心得ている官僚とその亜流は、創造力をも命令を以て生み出させようと考えているかも知れぬが、それは不可能である。創造力を生むものは実に個人の自由活動である。

子供の心を自由にするには先ずその足を自由にせよ。

子供の心を自由にするにはその手を自由にせよ。

子供の心を自由にするにはその口を自由にせよ。

これは創造力のイロハである。

「陶冶」^{とうぎ}、「涵養」^{かんよう}の言葉を嫌って、「錬成」、「修練」を使った人々には、このイロハはわからないかも知れぬ。従来の教育を軟教育^{なんきよう}だとして、しきりに硬教育をととなえ、到るところ児童の体罰問題を起こしている人々は、創造力を錬成するのだ、硬教育でなければいかぬ、大いに打ちのめさねばと考えているかもしれない。が、古来の人間生活の事実によるならば、自由のないところに創造力は伸びなかった。現在、将来の人間が急変せざる限り、この事実は変らない。かくの如き教育観、教育法の行われる限り、創造力は伸長しないであろう。(※4)

赤井は、個人の想像力と、それを生むための自由が必要であることを強調し、指導者の養成を重要視した。

児童の創造力を伸ばすべき、教員の創造力は全然封鎖し、閉じこめて、文部省の定めたこと以外には一足も出られぬようにし、その研究は特定の雑誌以外に於ては、発表を禁止し、その雑誌に於ては、誰は自由主義、彼は個人主義、教員の額に烙印を押し、自ら教育界の法王の如き態度を取るものを許しているとは、実に不可思議千万である。「児童の創造力は伸ばせよ」「教員の創造力は厳に取り締まれ」は、余りに矛盾した考えではないか。結局教員を、否教育を、機械視する物質主義・統制主義者の教育政策である。国家の危機これより大なるものはない。(※4)

自他の生き方にきびしい赤井の性向と鋭い批判精神は依然として健在であった。

(※4) 赤井米吉「個人創作力を国家創作へ」『新世界観と教育』(教育建設社、1941年10月1日)P.145

学園では、赤井は生徒からどのように見られていたのか。当時の生徒で後に学園教師となった田中一水が、赤井学園長の印象を校友会誌『星雲時代』に書き残している。

スマートな講話 田中 一水^{〈※5〉}

創立以来、先生は園長兼女学校長で、小学校（6年）と旧制中学（低学年）では週1回修身を教えておられた。しかし何といっても印象に強いのは式典のときであって、明星の中ではもっとも外向的かつ外交的性格を具えておられた。スマートな先生の講話は、幼い小学生をもあきさせなかった。当時は祝日には必ず式があったわけだが、何かの都合で、小学部長の照井先生や中学部長の上田先生が代行されると、それはもう式とはいえないと私共チビには思えるほどだった。もとより戦時下であり、日本軍が米英を敵にまわして大勝利をおさめた折など、「誠にザマア見ヤガレといたいのであります！」と拳を振り上げて熱弁をふるっておられた姿は今も記憶に鮮かである。

先生は自由教育の推進者であると同時に情熱的なナショナリストでもあったといえるだろう。

日本を大日本と呼んではいたが、その頃の日本は世界の片隅のオトギの国としてしか一般には認められておらず、それを歯がゆく思わぬものはなかったのである。だが、先生の修身にせよ講話にせよ、御自身の信念を語られ、私共には決して型にはまった道徳を押しつけることはなかった。修身の教科書も先生の授業でつかったおぼえはない。ともかく先生のお話は、当時としては例外的に視野の広い、国際感覚にあふれた楽しいものであった。先生も御自身の雄弁を楽しまれていたようである。^{〈※6〉}

（3）国民学校令と私立小学校

「紀元 2600 年」

1940 年（昭和 15）。この年は神武天皇（『古事記』『日本書紀』に書かれている伝承上の天皇で、『日本書紀』では初代の天皇とされる）の即位から 2600 年とされ、11 月 10 日から 5 日間にわたって、全国各地で「紀元 2600 年」を祝う祭典が盛大に行われた。

皇居前の特設広場に天皇・皇后を迎え、5 万人が参加した。近衛首相が寿詞^{よごと}を読み上げ、「天皇陛下万歳」を唱えた。東京だけでなく全国各地で旗行列や提灯行列などが行われ、子どもたちは学校で日の丸の旗をつくり、「奉祝国民歌」を歌って行進した。

明星学園でも 11 月 10 日、小・中・女合同の式典が行われ、赤井学園長の音頭で万歳を三唱した。この祝典行事は、「万世一系」の天皇の下、国民を戦争遂行に邁進させる国民精神総動員の総仕上げであった。祝賀の 5 日間は、8 月から禁じられている昼酒も許され、赤飯用のもち米も特別に配給された。そして 15 日の朝には、全国の町や村に大政翼賛会による「祝い終った、さあ働こう」のポスターが貼り出された。

この年の流行語は、「祝い終った……」のほかに、「バスに乗りおくれるな」「ぜいたくは敵だ」「新体制」「八紘一字」など。「八紘一字」の「八紘」は八方と四隅、全世界のこと。「宇」は屋根、家のこと。つまり「全世界を覆って一つの家となす」という意味で、日本の海外進出を正当化するための標語であった。

〈※5〉 田中 一水（16 回生）新制中・高等学校理科教諭

〈※6〉 『星雲時代』復刊第 1 号（1974 年）、『赤井・照井両先生 生誕百年誌』（1988 年 5 月 15 日）所収

国民学校令

「紀元2600年」を盛大に祝った年、1940年（昭和15）の12月6日、国民学校令案が閣議に提出された。これは3年前の日中戦争開始の年、近衛内閣が国民教育の再編成を行うために設置した教育審議会が検討してきたもので、とくに従来の「小学校」を「国民学校」に改めることが注目されていた。

国民学校の目的（第1章）は、「皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ皇国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」と述べ、教育勅語を具体化する「皇国民の基礎的錬成」を主眼に置いた。制度の面では、従来の尋常小学校（6年）、高等小学校（2年、義務制ではない）を改めて、初等科（6年）と高等科（2年）とに分け、義務教育は6年から8年に延長された。

12月24日、国民学校令は正式に閣議で決定され、同日、橋田邦彦文相はその大綱をラジオを通じて公表した。

橋田文相の説明は10項目にわたっていたが、そのひとつは、「私立の国民学校は認めない」というものであった。ラジオ放送を聞いた私学関係者のあいだに衝撃が走った。——「これはいつたい、どういうことだ!? 私立小学校をつぶすということなのか……」。

私立小学校協会の濱野重郎会長（清明学園長）以下3名は文部省に出向いて、担当官に説明を求めた。「閣議決定である」と繰り返すばかりでちがいが明かない。私立をつぶすようなことはしない旨の説明を受け、一同はひとまず退出した。

疑心暗鬼の4人は2日後、文部大臣に面会を求めたが、ついに大臣は現れず、担当官から私立小学校は国民学校としては認められないが、「私立学校令」による学校として今後も存続が可能であると伝えられた。

年が明けて、1941年（昭和16）1月、文部省は「既存の私立学校は玉石混淆で、設備も教育内容も甚だ不十分で国民教育機関として認め難いものもあるので、たとえ既存の学校でも条件に合わなければ認可取り消しもあり得る」との方針を打ち出した。

危機感を募らせた協会関係者は、2月8日、東京府下の私立小学校校長ら30数名を九段の暁星小学校に緊急招集し、対応策を協議した。その際、従来の私立小学校協会に未加盟の学校は新たに参加し、さらに組織を強化することになった。^{〔※7〕}

ちなみに、2月8日の緊急集会のとき、私学の結束を呼びかける檄文を書いたのは明星学園の照井猪一郎で、それは情熱を込めた名文だったと語り草になった。^{〔※8〕}

この檄文は、残念ながらどこにも残っていない。

校名に刻まれた歴史

国民学校令は、1941年（昭和16年）3月1日に公布され、4月1日から公立（市町村立）の小学校は一斉に「国民学校」に改められた。しかし私立小学校は、国民学校という名称をつけることも、従来どおり小学校を名乗ることも許されなかった。それは明らかに官尊民卑の思想の現れであり、私立学校の否定であった。

キリスト教主義、児童中心主義、自由教育、個性重視、等々、それぞれに独自の教育理念を掲

〔※7〕 『東京私立初等学校協会—結成70年の歩み』（2005年3月3日）P.63

〔※8〕 「座談会 日小連35年の歴史を語る」『日本私立小学校連合会のあゆみ—創立35周年記念—』（1977年5月12日）P.40

げ、苦しい経営状態に耐えながらも、教育の開拓者として創造的な実践を積み上げてきた私立小学校は、挙国一致、戦争遂行を第一義とする支配層にとって好ましからざる存在、危険な存在とみなされたのである。

私立小学校はみな校名を変えた。明星学園小学校は「明星学園初等部」、成蹊小学校は「成蹊初等学校」と改称し、成城小学校は「成城学園初等学校」に、清明小学校は「清明学園初等学校」に変えた。1884年（明治17）に「東洋英和女学校」として開校した東洋英和女学院の場合は、1909年に「小学科」を新設して「東洋英和女学校小学科」と名乗っていたが、「英和」の「英」は英国の「英」だということで永久の「永」に変え、小学科を「東洋永和女学校附属初等学校」に変えた。

一方、自由学園の創立者・羽仁もと子は、幾度となく東京府の学事部から校名変更を要求されたが、羽仁は「人間の自由を重んずるのでなくては教育はできない」と、確固たる信念をもって主張し、文部省にも何回も出向いて「自由」の大切さを主張しつづけた。こうして戦況が激しくなっていくなかで月日が過ぎ、終戦を迎え、「自由」の校名が守りつづけられたと、身近にあった人が証言している。^{〈※9〉}

また、自由学園と同じ1921年（大正10）に創設された文化学院は、小学校を持たず、文部省の学校令によらないユニークな学園として知られている。根っからの自由主義者・西村伊作校長は、偶像礼拝否定と反骨の精神から「紀元2600年祭」を批判するなど、戦時体制になっても教育方針を変えず、巣鴨の拘置所に拘禁されたが、ひるまずに抵抗の姿勢を貫いた。1943年8月、文化学院は強制閉鎖され、校舎は陸軍によって接収された。^{〈※10〉}

戦後、新しく学校教育法ができて、多くの学校が校名をもとにもどした。しかし、たとえば成城学園のように、戦争が終わってもあえて変えず、「成城学園初等学校」と名乗っている学校もある。「私立小学校協会」も「小学校」を名乗ることができず、「東京私立初等学校協会」と改称したが、戦後になってもその名称を変えず今日に至っている。協会の先達は、これも「抵抗のいしぶみ」であると述べている。

〈※9〉 千葉貞子「ミセス羽仁の思い出」『自由学園の手紙①』（自由学園出版局、1994年5月1日）P.8

〈※10〉『愛と叛逆—文化学院の五十年』（文化学院出版局、1971年5月25日）P.507

第2章 戦時下の明星

この章では、1931年（昭和6）の「満州事変」から日中全面戦争を経てアジア・太平洋戦争、そして敗戦に至るまでの期間の、学園の様子を伝えたい。

しかし、戦禍の中、残された資料は限られるため、『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』『同一60年のあゆみ』『同一90年のあゆみ』編纂時の内容をもとに、便宜上、小学校、高等女学校、中学校に分けて構成した。

1 戦時下の小学校

（1）「お知らせ」に見る戦時下の小学校のとりくみ

学園には小学校から保護者宛てに出されたガリ版刷りの「お知らせ」が保存されている。そのなかから、戦時下の小学校の教師たちが子どもたちのために、保護者の協力を得てどんなことにとりくんだか、その一端を見てみたい。わら半紙5枚半にわたる「お知らせ」。冒頭に「第3回体操会に当たり一応この目的の由来を説明しておく時期に達したと思う」と言う。大意を要約する。

1)「お知らせ 第3回体操会に当たって」 1940年（昭和15）4月23日

国民、とくに都市生活者の体位低下の傾向は著しく、このなかに私たちの児童が含まれていることは重大な問題である。私たちの見るところでは、明星学園小学校の子どもたちは、一般に發育良好で、如何にも健康らしい外観を持っていた。しかし、最も生活活動に重要な関与を持つ握力、懸垂、登攀、打撃等は一般に不得手で、跳躍、投擲、担負等に著しい劣性を示し、最も簡単に見える直立不動の正常姿勢でさえ、ものの5分とは持続できない有様だった。私たちはそうした傾向を児童一人ひとりについて科学的に調査し、児童の体位向上のための年次計画をたて、実施にとりかかった。

まず、それへの準備運動として最も無理のない、最も全身鍛練である徒歩行を課した。爾後、登山・遠距離歩行等が組織的に行われて、この目的は充分な効果をあげた。

昨年になると、2年生が神奈川県の与瀬から高尾山塊を越えて多摩御陵までの純徒歩逆コースを平気で征服し、一人の落伍者もなく、翌日みな平日のように元気で登校した。徒歩時間6時間内外の山道は一般の大人でさえ楽でないコースである。

5か年にわたるこうした準備鍛練は大体目的の段階に達した。いよいよ本格的な体操の学習である。まず、昭和13年度の第1回体操会では、子どもたちの日常生活のなかから体育的な動きを抽出した。彼等は例外なく下肢の運動能力は高いが、上体、特に胸背の運動の劣弱さを演技の事実によってはっきり自覚することが出来た。

私たちはこの事実の前に第2回の体操会の発表は懸垂を中心とし、第3回は跳躍・転回を中心とし、つぎの第4回は以上を統合・充実することによって、ひとまず第1期の4年計画を完成することを約束した。今回は即ちその第3回目に該当する。

そして、「お知らせ」はつぎのように結ばれている。

せいかくの子どもたちの頑張りである。必ずプログラムの最初からお見落としなくご覧くださることは、子どもたちへの大人としての儀礼でもあり、限らない激励でもあることを申し添えてお願いに代える。

第3回 体操会プログラム

期日 昭和15年4月28日（雨天なれば5月5日）午前9時開始——午前11時30分終了

順番	種目	学年	方法	目的
1	国民体操	全体	徒手	平素における仕事への準備運動
2	走技（1）	全体	100メートル・200メートル・50メートル	
3	登攀・懸垂移行	全体	吊竹・竹柱・横木・肋木等の登攀および移行	胸背筋鍛錬
4	上肢の振り	全体	徒手	胸郭の拡大と肺活量の増大
5	跳躍	全体	スプリング・跳び箱・バック等使用	全身の鍛錬とテスト
6	担負	全体	類似した体重同士が背負い合う	上体の腰部の強化
7	柔軟運動	全体	徒手	諸関節の動きの面を拡大円滑にする
8	動きの旋律	有志	あらゆる運動の組み合わせ	体動の総合的動きと総括的な表現
9	メディシンボール	1年	1年生のボール遊戯	初めて課せられる団体訓練
10	諸筋の力運動	全体	徒手	筋力鍛錬
11	球技の基礎練習	有志		各球技への基礎練習
12	巧緻運動	全体	徒手	意志の命ずるままに最も効果的にかつ正確に動きうる身体鍛錬
13	タンブリング	有志		力のバランスの総和
14	転回	全体	跳び箱・スプリング使用	最も高き総合運動
15	縄跳び	有志		跳躍の一般化
16	走技（2）		300メートル・400メートル	
17	綱引き	全体		



第3回体操会と練習風景 指導は高橋律之助。学校体育を理論的に追求する高名な実践家であった。跳躍・転回などを無理なく、順序を踏んで、積み上げていく指導法が工夫されていた。

2)「お知らせ 空襲警報発令時の処置」 1942年（昭和17）5月7日

下記三つの立場を総合ご考慮の上、万遺漏なきようご配慮願います。

児童では

1. 登校途上の場合

- イ 乗車前だったら家に引き返す。
- ロ 乗車後だったら急いで学校に来る。

2. 帰宅途上の場合

- イ 乗車前だったらすぐ学校に引き返す。
- ロ 乗車後だったら家に急ぐ。

3. 徒歩通学の者は

- イ 井の頭公園まで来た者は学校へ来る。
- ロ 公園までの途中だったら家に引き返す。

4. なるべく垣根添いや木下をえらんで急いで歩く。

5. 警防団員のさしずによく従うこと。

学校では

1. 帰宅途上の場合

登校前の発令が午前中解除されない時は、その日は休業とする。

2. 午後授業中もしくは帰宅途上発令された時は、その後の状況に即応して乗車帰宅か徒歩帰宅のいずれかを選ぶ。

3. 学校出発の時刻は電話で当番家庭に伝達する。必要あれば家庭群通伝法もしくは電話網によって全部に知らせる。

4. 隔遠の子にして特定されている者は必要あれば学校側で泊めておく。

3)「お知らせ 工作展覧会の開催」 1942 年（昭和 17）3 月 9 日

来る 14 日（土曜）・15 日（日曜）の両日午前 10 時より午後 3 時まで、本年度卒業児童を中心とする工作展覧会を開催しますから、ご家族ご知人お誘い合わせご来観くださいますようお願いいたします。

工作は機械科学の表現法として今後日本の科学教育の中軸をなすべき重要な部門であります。物資材料の制約は児童の計画実行を甚だしく不如意ならしめ、客観的效果としては隔靴搔痒の感なきを得ないと存じます。しかしそれが却って教育としての効果をもたらし、彼等ならではの警拔大胆なる独創と手法は大人をして思わずほほ笑ましむるものあることを信じます。

しかも彼等のたえざる努力と苦心とによって寄せ集められたる材料……空箱を解体した板と釘、缶詰殻を展開したブリキ、いやしくも彼等の手に触れ目に映ずるもの一つとして資材ならざるなく、いわゆる「捨てりゃ廃品、活かせば資源」の標語を一層積極的に、「捨てりゃ廃品、活かせば力」とした児童の率直なる構想には、未来日本の大きな姿を髣髴させ、大人に大きな示唆を与えることと存じます。



模型飛行機づくりがさかん

4)「お知らせ 算数学習の実際」 1943 年（昭和 18）5 月 14 日

行事暦によって予てご承知おきのことと存じますが、末記日程によって初等部全学年の算数学習実際をお目にかけます。毎々申し上げることですが、国民学校案の中で算数ほど思い切った革新を断行した科目はございませんが、それだけにまた家庭でのご指導も種々な困難が生ぜられていることと存じます。

よって本年度の教育事業の一つとして、全学年を通じて算数の取扱い方を皆様と共に徹底的に研究吟味して、最も正確な、最も能率的な教育効果を挙げたいと念願してこの企画をしたものであります。

特に時刻を午後配当したもの、ご来会の便宜を考えてのこととございますから、当該学年のみの方に限らず、なるべく多数のご来会を待ち上げます。

5 月 16 日（日曜）13 時より 初等部 1 年、2 年、3 年

5 月 23 日（日曜）13 時より 初等部 4 年、5 年、6 年

学園では非常の場合に備えて、前年度から「非常集団帰宅演習」を実施していたが、空襲警報発令時を想定して、さらに詳細な確認事項を家庭との間に共有した。

(2) 戦時下の小学校教科外活動

1941年（昭和16）12月8日、アジア・太平洋戦争開戦。日に日に厳しくなる社会の状況下で、初等部の子どもたちはどのような日常を送っていたのだろうか。当時の実践の内容を残された資料から読み取ってみたい。

登山・遠足・修学旅行

学園は創立以来、教科外活動を重視してきたが、この時期、登山・遠距離歩行・学年単位の遠足・見学行事のほかに、春季強歩訓練（高尾山）、秋季強歩訓練（御岳中心）、多摩御陵（八王子市）～学園間の集団継歩なども年間の行事として定着していた。後者の三つは学年単位ではなく、全校児童を体力別・コース別6班に編成して行われた。

これらの行事は戦時下であっても、計画、引率する教師の強い思いのもと実践されていた。当時若手教員だった原田満寿郎が、小学校の教育月報に記した次の文からも学園教師たちの意気込みが感じられる

小学部の登山と集団徒歩・見学と旅行

登山・遠足・旅行である限り、学習の助成として若しくは延長として、さらに必要な学習それ自体として計画されるものである。興味本位の行楽とははなはだ本質を異にするものである。

見学・旅行・登山・集団生活その他、直接教科課程以外の一般学習は、狭い教室学習の徹底と拡充に必須のものであることについては、絶えず声を大にして父母側を教育してきた。そのためには詳細綿密な遠足・旅行・見学の系統案も学校行事表も毎年4月早々に配布して、小学部の総父母会を開いて十分承知してもらったものだ。集団生活の指導、社会生活への訓練は、当時の小学部での学習の原拠として重視してきた。したがって遠出の見学学習の中でも現代文化の総合所産としての生産・配給・消費・交通等の経済活動への理解に重点をおき、それらは当然つきまつわる史的文化・地理的地域性等の考察はもちろん、新に考うべき社会道德の実践および心身鍛練の機会等を巨細に吟味し、把握し、これをもって一系統の教案を立案し、あらかじめ遭遇すべき問題は、学校において綿密・周到な学習を遂げ、しかる後に児童を現地に連れ出したものである。したがって連れ出された彼等は、その都度現地において一々彼等の学習に引きあててその妥当性を探究し、新たな疑問と発見を構成し、解決し、正確な知識と深い印象を蓄えて帰るが、学習はそれで終わったのではなく、帰ってからさらにこれまでの過程を総括的に吟味し整理し、次の学習の基底として積みあげられていく。しかもそれらの生々しい必要と必然のもとに、その法則を生活し、逐次に彼等の生活を向上発展させていく。

もちろん児童のことであるから、大人のそれのように、まとまった観察を持帰り、これを父母に報告することは困難であり、質問に対してもすこぶる断片的で不徹底のものは免れないところであるが、彼等が向けられた眼、立たされる方向さえ誤っていなければ、この記憶と印象は以後たゆまぬ指導と^{しばしば}屢々なるそれへの訓練を繰返すことによって立派に効果をあげていく。「たゆまず繰返す」これが教育の真義であって決して一度性のものではない。次第に高められていく新しい把握への繰返しこそ真の教育である。一団の児童が家と学校を離れて移動する。さらに幾泊かを外で過ごす……これだけでも一通りならぬ配慮と手数が加えられなければならないもので、よし児童には多分に猟奇的興味の伴うことがあるにしても、引率の教師にとっては全く命がけの仕事である。学習の効果と十分に収穫しようとする油断のない努力のほかに、カスリ傷一つけずに幾十かの生命を無事に家庭まで送り届けるまでの心労は並大抵のものではない。

のんびりした学校……暢気な学校、年中出歩く学校……自由な学校、などという言葉か、意味で呼ばれたり、考えられたりすることは心外である。必死な学校……油断のない学校、活きた学習をする学校……厳粛な学校、この言葉にあたるような児童たらしめようと努力をつづけていた。昔は10人が10人地歴を嫌い、地歴はわからない暗記科目だったということを当時直接父母の方から伺ったが、私たちの児童は100%地歴を

愛好したものである。教室だろうが、外だろうが、家庭内だろうが、街頭だろうが、いやしくも児童の生活する所に教育がある。…中略… 教室学習以外の学校行事のうち、現地調査を主体とする見学、総合学習としてやや規模を拡げた旅行、心身の練成を目的とした登山・遠足・集団歩行 …中略… などは現在の明星学園の見学・旅行案の基礎となるものであって、以来その具体的プランは教科の学習との関係、時代の流れ、社会の変貌などによって当然かわってきたが、その教育的意義は伝承され今日になっている。(原田満寿郎記) (※11)

■夏季生活

初等部2、3年生は校内で、4、5年生は神奈川県海辺で、6年生は軽井沢沓掛寮での夏期生活が行われていた。その後1942年(昭和17)、新宿まで空襲が迫ったこの時期にも夏季生活は行われていた。翌1943年、19回生は念願であった学園の海の拠点・千倉での臨海生活を行なっている。

■遠足・見学旅行

戦時下にもかかわらず見学・旅行・登山、大島への宿泊行事などの伝統はしっかり守られていた。旅行へ行く前には目的地の地理や歴史の予習をし、帰ってくると見学記としてまとめていた。

1945年の6年生関西修学旅行は戦争末期の混乱のため中止になったが、1944年までは戦時中でも各学年の行事は、ほぼ例年通り実施されていた。

(3) 時局と音楽教育

日に日に戦争の影が色濃くなるなか、教師はどのような思いで子どもたちと接していたのか。以下に照井げん(小学校音楽教諭)の文章を引用する。

「天に代わりて不義を討つ……勝たずば生きて還らじと……」。一度東京駅上野のホームに出征軍人を見送って、行く人、送る人々の五臓の底から燃えて出るこの軍歌の叫びを聞いた時、誰がその意気の盛んなのに感激しない者はあろうか。こうした光景を目のあたり見、かつ聴いている子供等は、時代の子であるが故に一層関心が深い。根強い何者かが魂の中まで浸透しているに違いない。時局の影響からくる子供達の表れを音楽の方面のみから眺めると、まず朝の登校にも「天に代わりて」を歌いつつ足並み揃えてやって来る子が、小さな軍歌集を常時ポケットから離さない張り切り屋もいる。また陸海軍の歌のプリントを、どこからたたくさん持ってきたのか、得意になって皆にわけてやってる子供もある。箒持^{はし}手も軍歌のリズムに動き、仕事の合間にも「煙も見えず……」が自ら^{はし}進り出る。

私は今ここで軍歌の芸術的価値や教育的価値を究明しようとするのではないが、ただこの動かすべからざる事実をどうするかということである。たとえ非芸術的なものであるにしても、子供の生活の中に生きて作用していることは否定できない。明治の中期に外国輸入風の学校唱歌に倦^あき厭^あきた折柄、あたかも我が国有史以来の27、8年戦役に遭遇し、いわゆる際物的ではあったが軍歌集が続々出版されたので軍歌はたちどころに全国を風靡し、以来3、4年の間は学校唱歌は軍歌で終始されたと言っても過言ではなかったばかりか、むしろこの軍歌時期を以って児童唱歌上の一大革新だといっている向きもあるくらいだ。しかしその当時と今日とは国民の音楽的教養に格段の差があるので、音楽そのものについてももちろん同列の比較をしようとはしないが、その感情のうえにおいては愛国心とか敵愾心とか正義感とか、ある一貫したものが流れていると思う。

この感情のためには子供等が興味を中心である軍歌を取り上げることもまた一方法ではなかろうか。聞き

(※11) 『明星の年輪—明星学園60年のあゆみ』P.36

かじりの間違いは歌曲ともに訂正してやる必要もあるし、それを題材にいろいろな音楽的取扱いもやりうる。また、同じ目的のもとに歌なり、オーケストラなり、内外のよいレコードを静かに聴かせることも誠に当をえた扱いだと思う。

ただ私たちの忘れてならぬことは、子供等の興味にのみ引きずられて目的を転倒することなく、常に高次な芸術的教科であることを思念し、それに対して着実な精進努力を怠らぬよう指導することである。〈※12〉

(4)『さかだち学校』

これまで述べてきたように戦時下においても、明星学園は子ども一人一人を大切にし、平時と変わらぬ教育に取り組んでいたことがうかがわれる。保護者も苦難のただなかにあったが、学園の姿勢に共感し大切な子どもを預けてくださった。当時の様子を彷彿とさせる奈良正博氏（元保護者・元後援会会長）の文章を90年史〈※13〉から転載する。

1942年（昭和17）7月、偕成社から出版された『さかだち学校』〈※14〉は、明星学園をモデルに描かれた「童話」の傑作である。

作者田畑修一郎は、1903年（明治36）生まれの作家、小林多喜二と同年に当たる。宇野浩二に師事、井伏鱒二、太宰治、坂口安吾、坪田譲治などの文学者と交流・呼応しながら作品を書き続け、1938年（昭和13）『鳥羽家の子供』が芥川賞候補作に挙げられた。

1943年（昭和18）取材先の盛岡で急逝、享年40だった。彼には、二男一女の子どもがいたが、3人とも明星育ち〈※15〉だった。長男・志摩夫は『さかだち学校』について「明星学園とのお付き合いの中から生まれた、修一郎の“心象スケッチ”“自分の夢と明星学園の理想を重ね合わせて描き出した創作」と語っている。ここで、物語の一部を紹介する。

「私」、山川新吉は、貧乏な画学生、幼くして両親と死別、祖母に育てられた。絵が好きだったので、印刷所で働きながら絵を描きつづけた。…中略…

ある日、新聞にふしぎな広告を見つけた。「教師兼小使を求む。ただし、機械、農作、絵、手工なんでもかまわぬが知識よりも技術のことをほんとうに知っている人。または技術はなくても働くことの好きな人、正直な人、夢を持つ人。／東京府下 ちんがの村／さかだち学校」というものだった。…中略…

そこで私は、学校を創った紅鯉先生、白熊先生といっしょに子どもたちと生活をともにすることになる。「教えるのではありません。生徒たちといっしょに勉強したり、働いたりするのです」と、紅鯉先生は話された。

美しい牧歌的な風景に包まれた「さかだち学校」の名の由来は、子どもたちが挨拶がわりに跳んでみせる「とんぼ返り＝空中転回」などの体育演技にあった。

紅鯉の養殖や乳牛を飼って乳をしぼり、バターを作る。畑でとれたサツマイモをふかしてバターをぬった「バタサツ」をみんなで食べる。果樹や野菜、薬草、稲などの作物を育て、花を咲かせ、堆肥も泥まみれ汗まみれになって作る。機械工作室には見事な模型飛行機がぎっしり格納されている。それはゴム動力だが、本物そっくりの質感で、飛びっぷりもまた素晴らしい。…中略…

野外でのスケッチに出かけたおり、崖から落ちた生徒の手当てをしてくれた校医の馬越先生は、「この学校を見ているうちに、世の中にはやっぱり楽園というものはあるものだ、と信じるようになりました。大人がそういうものを馬鹿にするのは、それは目と心が汚れているのです。ないと思うのは大人の猿智慧で、信じ

〈※12〉 照井げん記、『ほしかげ』第29号（1937年10月5日）

〈※13〉『明星の年輪—明星学園90年のあゆみ』＝「90年史」と略す（以下同様）

〈※14〉『さかだち学校』田畑修一郎著（1942年、偕成社少年少女文庫）

〈※15〉 長男・志摩夫（11回生）、長女・光草子（12回生）、次男・夏樹（14回生）

ようとしなからです。求めようとしなからです。信じて求めさえすれば、どこにでも美しいものは現れて来ます」と話してくれた。後略…

1941年（昭和16）10月、赤井先生と女学校生徒が上高地の河童橋で撮った写真に田畑の姿がある。当時彼は親友の経営する宿にこもって、長編小説の執筆中だった。しかし完成した作品は、「時局に合わない」という当局の指令で出版されず、彼はその240枚ほどの原稿をみずから焼いたという。『さかだち学校』はその翌年に出版された。節を曲げず表現する途を童話に求めたとしても、ほとんど戦時色のない、自然のエネルギーに温かくつつまれた夢の学校物語が創られたのは、奇跡のように感じられる。

1939年頃には、逆立ちのできない子どもが一人もいないくらいに明星の小学校では体育がさかんになり、世間からは“逆立ち学校”ともいわれた。

たしかに『さかだち学校』は明星学園をモデルにした創作であるが、「紅鱒先生」が照井猪一郎先生を、「白熊先生」が赤井米吉先生をモデルにしていること、校医の「馬越先生」が実在の医師井草先生（ご子息が11回生）を反映していることなど、描写からすぐ感じとられるところだが、なぜ明星学園が「夢の学校」としてこのようにとらえられたのだろうか？

1935年（昭和10）12月20日発行の明星学園小学部の教育月報『ほしかげ』17号に、作者は、本名田畑修蔵の名で、「感想」と題した一文を書いている。

「子供を預かっていただく前には、私は明星学園については殆ど何も知らなかった。…中略…そして少しずつ明星のよさが解って来た。今では、最初の偶然が子供達のためにどんなにいいことであったかを思い、又、今日の困難な世相の中で、子供のためにこんなによい生活を教えられる場所があることが不思議な感じさえるのである。

私はあまり楽しかったとは云えない自分の学校生活から考えて、子供達が大きくなったときどんなにか明星での生活を楽しく思い出さだろうかと、彼らの幸福のために自分も胸のうちが温まる気がする。…中略…私は明星の特長がますます深くなり、今よりもっと世に知られて欲しいと思う。…中略…又一つ、世間には不幸な教育しか受けられない子供も沢山いるので、明星の子供達が特殊な空気に慣れて自分の幸福さをそろそかにしないように、願わくば今の質素な空気が失われないように、と思う」。

1941年8月の同人誌『文学草紙』には、「事変っ子」と題した一文が掲載されたが、そこで田畑修一郎は、苦しい家計のもと3人の我が子を明星に通わせる苦労の重さを、照井先生にいかんも助けてもらったかを率直に記し深く感謝しつつ、明星学園の「教師たちが子どもの中に入りこみ、子どものことをよく知っているのは驚くばかりだ」と賛嘆している。

田畑修一郎自身が教室の様子、子どもと教師の濃密な生活、教師と父母の辛抱強い交流、父母の協働などを直接体験し、そこで生れた感動や愛が、「子ども一人一人を大切に！」という明星教育のモットーの確信に昇華して、純真・素朴な「理想の学園、夢の学校」のイメージを創り上げたことを、彼自身残した文章が素直に伝えてくれる。



2 戦時下の高等女学校

昭和3年に創立された女学部は、戦後の学制改革まで21年間つづいた。しかしながら長引く戦争の影響を受けた後半の7学年は、軍需生産に従事する過酷な学生生活を送らざるを得なかった。創立時の精神が教育に生かされ具体化されたのは、ぎりぎり12回生までであった。

それぞれの年代の女学部の様子を戦局が激化する前後に分けて紹介する。

(1) 1935年(昭和10)～1942年(昭和17)の女学校

昭和10年代、戦争の影響がしだいに色濃くなってきたこの時期にあっても、明星学園での授業は少人数教育を活かしたユニークさがあり、生徒たちは音楽、演劇、美術、文学なども豊かに与えられた。戦争の足音が聞こえてきた時代の女学部で、創立時からつづく伸びやかさを体験した最後の世代の学校生活はどのようなものであっただろうか。当時を語る卒業生の文章を、90年史とPTA会報から抜粋する。▶▶全文は90年史P.134～P.142

1) 学校生活で学んだこと——赤井 英乃(8回生)〈※16〉

女学校入学は1935年(昭和10)4月でした。1クラス16名、小学校から上った生徒が9名、他の小学校から入学した人が7名で、卒業まで数人出入りはありましたが、卒業時も16名でした。クラス担任は佐々木アヤ先生、教科は代数・幾何でした。

英語は青木ふみ先生。現在のように英語が日常語のように通用している時代とは異なり、アルファベットから覚えなければなりません。

国語の副読本の指導は吉田賢次先生。国語の授業のほかに吉田先生に教えて頂いたのは、クラシック音楽の解説でした。毎週土曜日と雨の日は、女学生全員が広い理科室に集まり、クラシック音楽のレコード鑑賞をしました。

ベートーヴェン、モーツァルト、シューベルトなど、当時は都内の音楽会でしか聴かれない曲を聴かせてもらいました。これらのレコードは校長室に置かれている蓄音機の横に並べてあり、希望者には1週間貸出して下さいました。人気のある曲、例えばベートーヴェンのヴァイオリンソナタ、「ロマンス」などは順番待ちするほど希望がありました。このレコードを借りるために、生徒は校長室に自由に出入りしていたのです。校長室は北向きの狭い部屋で、しかも生徒の静養のためのベッドも置いてありました。隣室は職員室でした。

教科の中で自然に関することは、多湖実輝先生に教えていただきました。女学校1年生の時、1年生16名を多湖先生お一人で引率され、江ノ島へ行きました。

夏季生活の軽井沢沓掛寮でも、たくさん教えていただきました。寮生活の中で、浅間山が活火山であることを話していらっしゃる折も折、「ドカーン」と噴火して、先生は「それ来た!」と真先に駆け出して、山のよく見える所へ、私たちを連れ出して下さいました。噴煙がもくもくと立ち昇って見えました。暫くすると、サーと音がして、「アラ雨が降って来た」と言っていると、雨ではなく、砂でした。砂が雨のように降って来たのです。この砂は今、地面の底から噴き出したのだ、と教えられ感動しました。

教室で教科書を読みながら学ぶ以外に、実習を伴う料理、お割烹は大変愉しみな勉強でした。1年・2年・3年生までは3週に1回、4年・5年生は2週に1回の実習でした。当番は前日に材料の注文に店へ行き、野菜やお肉などを届けてもらいました。最初の指導は料理専門の先生がいらっしゃらず、英語の青木ふみ先生に習いました。1年生ではじめての料理は「炒り卵」一品、これを在校生と先生方全員が、裁縫室に座っていただきました。

〈※16〉 赤井英乃(8回生) 小・女学校卒業、創立者赤井米吉の三女

お裁縫の指導は、渋谷直先生でした。まずミシンの使い方、簡単なドレスが縫えました。和裁は、浴衣で基本を習い、単衣の着物、羽織、帯も教えていただきました。

一方運動は、竜崎恭子先生にバスケットボールやバレーボールを習いました。

音楽は関口典之先生に歌唱の指導を受け、後任の森民樹先生には先生ご自身がオペラを唱われるので、教室でも「君よ知るや南の国」など素敵な歌を教えていただきました。

当時、すでに日中戦争がはじまっていました。戦争で傷ついた兵隊さんの着る病衣（白無地の単衣）を女学生の私たちもあてがわれて、一針一針丁寧に縫いました。当時は“日支事変”と言い、“戦争”とは言いませんでした。

私たちが卒業した1940年（昭和15）3月頃はまだ、おだやかに暮らしておりました。



裁縫室前の芝生にて



朝日新聞社見学



体力テスト

2) 女学校の興味深い先生方の授業——岸 すみれ（10 回生）※ 17

・多湖実輝先生の「生物」

まずは1937年（昭和12）の春、現在の小・中学校前のバス停広場は一面の菜の花と麦畑。最初の観察授業で絵に描きとった菜の花は十字花冠植物と覚え、麦の実りの秋は初夏であるところから、この時期を「麦秋」と言い、逆に春のような日との訪れる頃を「小春」と呼ぶなど、季節を表わす日本語の美しさを、早い時期に教え下さったことが今も有難く懐かしい。当時もうご年配で、やや白い口髭を蓄えていらした先生は、声の大きいことで有名でした。また「明治の文学青年」という風格のエッセイを女学校発行の機関誌『明星』誌上に寄稿されるなど、生物学の大家以外の面も印象に残った。

・赤井米吉先生の「修身」

私たち10回生が入学する前の年の1936年（昭和11）、先生は第7回世界新教育会議へ日本代表として渡英された。帰途、欧米各国の教育視察を経て来られて間もない頃だったから、毎週必ず新鮮なお土産話が展開された。先生の話術の巧みさは、「公民」の杉山清先生と双璧で、非常に魅力的なのだった。私たちはどんなに視野が広がり、多くのものを吸収し得たことか。

後年他校出身の人たちが、「『修身』と『公民』ほど退屈でつまらない授業はなかった」と言うのを耳にした時は、明星では全く正反対だった……と誇らしく思ったものである。

また先生によって初めて日本の教育界に紹介された“ドルトン・プラン”の提唱者、米国の教育学者ミス・ヘレン・パーカーストが来校、先生の通訳で講演の会があったことも、遠い記憶だが残っている。

各学年に担任の先生が居られたが、赤井先生は全生徒の一人ひとりをよく把握してくださっていて、少人数だったからでもあろうが直接の面談の時間もあり、私たちは校長先生に受け持たれているような実感があつた。

・金子金治郎先生の「国語」

たった2年間だったのに、先生との絆が強かったのに驚くことが多々ある。以前から研鑽を重ねておられた成果の「連歌の研究」により、後年“学士院賞”受賞の功績を残された方で、当時から生徒たちの尊敬を得ておられた。

〈※ 17〉 岸すみれ（10 回生）女学校卒業、新制中・高等学校国語科教諭

私たちが1年の学年末のこと、先生から提案があった。新学年から『花屋日記』ともう1冊（覚えていない）のどちらを読もうか決めておこうとのこと。内容も判らないというのに私たちは勝手に、当時少女小説で有名な吉屋信子の『花物語』を連想し、とっさに声を揃えて「ハナヤニッキー！」と叫んだものだ。その結果、2年生（13歳）になって手渡されたのが、意外にも極薄ながら岩波文庫！ 実はもう、それだけで感動的だった時代。急に大人扱いされた気分で、明星ではこういうこともあり得るのだ、と。ただし、頁を開くとそれはまさしく日記ばかりの古文体。「えーっ？」と困惑しつつも毎回読み進んだ末に我々の脳裡にイン・プットされた中身と言えば、「松尾芭蕉という人は、とにかくおなかをこわしてこわして、それがもともと死んだのだ……」ということだった。俳諧の頂点に立つ人の最期を、多くの門人たちが様々な想いを胸に見守る日々の記録なのだった。

今は、この作品を私たちの学年に選ばれた先生の意図はなに？の思いと共に、何はともあれ辛抱強く一冊を読み終えたのは、ひとえに先生の力量の賜物と敬服のほかなく、これが古文の世界を覗いた最初の段階であった。

・岩瀬富士雄先生の「美術」

常に新しい体験が出来てワクワクした時間。素描などでも、鉛筆ばかりではなく、竹や割箸などの先を削ったものや筆で、墨汁を含ませて光と陰を表現したり、絵具も既成概念にとらわれることなく、見たまま感じるままの色を置いて行くという描き方。

眼を開かされたおかげで私には生涯の傑作（!?）「丹ちゃんの肖像」が生まれ、さらに4年生（15才）のとき、クラス全員で作り上げた『蕪村句集』という木版画集が現存しており、この二つは今も尚、私にとっては無二のお宝である。特にこの版画集というのは、芭蕉の死後、俳諧の中興の祖とも評された与謝蕪村の作品を、クラスの一人ひとりが一句ずつ与えられ、句の文字と内容にふさわしい絵とを2枚の版木に思い思いに彫り込み、人数分の和紙に刷っては順繰り送りにして製本まで、総て手作りで仕上げたものである。

しかも最終段階の、和綴じの直前に至って初めて私たちは自分の受け持った句は、あの国語の金子先生が選ばれたものだということを知ったのだった。表紙に貼る題名と、目次に当る見出しは、岩瀬先生の手で、「金子金次郎氏撰」と彫られていた。

いったい2教科の先生の間で、どういう話合いがされていたのだろう。芭蕉の終の記を読んだ学年に、2年後さらに蕪村が用意されていたなんて。

それにしてもこの作業は“製作過程”が実によかった。自分の受持った句や絵のほかに、友人たちの句は憶え、構図には触発され、（元々蕪村は画家として大成した人でもあったから、句にも絵画的・物語的な作が多く、面白い創作の画が沢山添えられた）そして最終的に、それぞれ自分の1冊を仕上げたことが、皆で同時に達成感を味わったことに通じるわけで、“一生分の楽しい授業を受けた”ことの一つに間違いはない。

3) 文化・芸術に恵まれていた女学部——御喜（北川）晶子（11回生）〈※18〉

・学園の生活

学園生活の一日は朝礼で始まります。5つ並んだ1年から5年までの教室の前庭、芝生と花壇のある場所で、朝の挨拶、明星学園行進歌を歌い、ラジオ体操をするのが日課でした。

雨天の日は全生徒が広い理科室に集まり、クラシックレコード鑑賞。聴く前の吉田賢次先生の解説が実に楽しみでした。先生の話は、その音楽の生まれた頃の歴史的背景、音楽史の中での意味、作曲者のエピソードなどでした。

・授業について

文部省で決められた正課はすべてありました。少人数の利点で実験のようなこと、また生物の場合は、周辺の自然の中から採集すること、蛙の解剖など。英語は週4時間を5年生まで続けられたのが不思議なことでした。つまり昭和17年度までです。1941年（昭和16）12月8日の開戦で敵国語である英語は廃止、または削減のはずでした。明星では2時間だけを正課にし、あと2時間を選択制にしました。英語を選択しない者は、技能科のように美術工芸をしていました。

〈※18〉 御喜（北川）晶子（11回生）女学校卒業、新制高等学校英語科教諭

家庭科の授業で、今調理といわれているのが、大好きな「お割烹」の時間でした。上級生になるにつれメニューは豊かになり、ビーフシチュー、グラタン、シュークリームなど、4時間にはそのおいにわくわくしたものです。

・正課外のもの

音楽、演劇の活動は盛んで、それらの発表会はしばしば講堂で行われ、時には音楽家の演奏もありました。女学校ではコールロココ(※19)という合唱団が昭和13年、4・5年生22名でスタートし、のちに3年生以上がメンバーになりました。日比谷公会堂での合唱コンクールにも出場しました。ロココを創められた音楽の森民樹先生が、1・2年生向けヴァイオリン課外授業も始められました。その中から現在もマリ室内楽団を主宰する梶原マリ(黒田眞子・11回生)さんも生まれました。ヴァイオリンをご両親に反対され、その傷心ぶりを見かねて赤井先生が楽器を買い与えてくださったのでした。

音楽については、学外へ出かける定期演奏会がありました。新交響楽団(現N響)の「青少年のための音楽会」へ土曜3時限終了後、日比谷公会堂へ連れて行ってくださいました。

・学校行事について

- ・春：遠足 富士山麓、三つ峠、日光など。
- ・夏：軽井沢沓掛寮の合宿、10日間。落葉松林の中の小さな山荘で全校生徒、食事は女の先生方と5年生が作って下さり前庭の木のテーブルで頂きました。先生方のお話をきいたり、遠出は鬼押出し方面、星野温泉、軽井沢など。忘れられない楽しい日々でした。自然についても多く学びました。
- ・秋：美術館へ。日比谷公会堂の場合と同様に土曜日3時限終了後、上野へ。公園でお弁当を食べて、美術館へ入りました。
- ・修学旅行：行き先は日光、東北などでしたが、やがて上高地に定着しました。宿泊／五千尺旅館コース／明神池、梓川、徳の沢方面、前穂高の麓の雪渓、焼岳登山日程／11回生は昭和17年6月8日～10日これが女学部で実施された最後の修学旅行となりました。



5年生 日光旅行

・特筆すべきこと。教室内本棚

1年から5年まで並んでいる教室の後壁面に本棚がありました。それぞれの学年に合わせた本がギッシリと並べられてあり、教室で読んでも、持ち帰って読んでもよいというものです。持ち帰る時はノートに記名するだけ。本の選択は先生方ですが、日本文学と外国文学の割合や興味の持たせ方が見事なものであったと、大人になって思いました。2年で第一次『クマのプーさん』ブレイク。英国のファンタジーに魅了されたものでした。3年で翻訳ものが急速に増え、シェークスピア、トルストイ、そして内外の詩も。

4年でドイツ、ロシア、フランスの文学作品が増え、私は4年の夏休みに読んだトルストイ『戦争と平和』を忘れることができません。強い印象でした。5年でドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』を見つけ、感動したものでした。

このシステムは学校に図書館がなかったためのものでしたが、図書館よりむしろはるかに強い影響力を生徒に与えたことはたしかです。私たちは何十年経っても、友だちとその話題で楽しい時間を持つことが出来るのですから。その当時、学校では講演会がしばしばあり、保護者の文学者とか政治家とかが来てくださったものでした。この講演会に前述の『クマのプーさん』の翻訳者・石井桃子さんが来てくださったことがあります。彼女はこの本棚の図書館に深く感動されました。明星の昭和の少女たちは、これらの本の中で夢を見、育っていったのでしょう。

上田八一郎先生の手書されたものの中に「松を梅に変性せしむることは出来ないように、教師も生徒の個性を変えることは出来ない。個性に、良い方向を与えしむることにあるのみ」とありました。明星学園で少女期をすごした私たちは、勉強することで学問を身につけ、同時に実に豊かな情感を与えられて、日々を送っていたと思います。

(※19) コールロココについて詳しくは、『明星の年輪—60年のあゆみ』P.82

(2) 1943 年（昭和 18）～ 1945 年（昭和 20）の女学校

御喜さんたち 11 回生が卒業して 3 か月後の 1943 年（昭和 18）6 月、政府は「学徒戦時動員体制確立要綱」を決定。これ以降、軍需工場への動員が本格化した。

明星学園では翌年 4 月から、女学校 3・4・5 年生が学業を放棄して軍需生産に従事した。

11 回生までの花園のような学校生活にくらべて、次に紹介する 13 回生、14 回生の体験はわずか 2 学年ちがうだけなのに余りに過酷なものであった。▶▶全文は 90 年史 P.134～P.142

1) 戦時下の女学生の生活——学徒動員を中心に——馬場（志村）洋子（13 回生）※20

私は、1940 年（昭和 15）、明星学園女学部に入學しました。小学校は公立です。1927 年（昭和 2）、横浜で生まれた私は、5 歳のとき吉祥寺へ越してきました。父の勤務先が昭和恐慌で倒産したので、未だ開発途上の吉祥寺駅前通り（現サンロード）で古本屋を始めたのです。

当時、文化人と呼ばれる方々が来店なさり賑やかでした。赤井米吉先生、武者小路実篤先生のお宅へ本の買入れに伺うとき、私もついて行きました。

そのようなご縁もあって、兄が 1938 年（昭和 13）中学部へ、私が 40 年女学部へ入學しました。1 学年 1 クラスで小さな学校でした。

入学式の日から、上級生と芝生に座ってお話したり、担任の青木ふみ先生も静かで優しくて、明星大好きになりました。

初めての教科・英語は青木先生でした。先生は最初の授業のとき、「私の英語はロンドンの標準語です」とおっしゃいました。その通りで、発音ははっきりと分かり易く、リーダーの勉強に入ってから毎時間、ディクテーションの小テストをして下さいましたので、スペルを覚えるのによかったと思います。

音楽の末綱卓一先生も忘れられない先生です。愛称はドンちゃん。明星の卒業生で、みんなが大好きな先生でした。コールユーブンゲン、コンコーネなどの後、教科書にないコーラス曲を沢山教えていただきました。「美しく青きドナウ」「流浪の民」「ハレルヤコーラス」「グローリア」「アイダ」「タンホイザー」他にもクラシックを数多く歌わせていただき幸せでした。

喜びが急に悲しみになりました。私たちが 2 年生のとき、突然、急病でお亡くなりになったのです。お葬式で私たちは号泣いたしました。

演劇部の活動も楽しかったです。恩地先生ご指導で、クラスメート、小平さん創作・脚色の「森の仲間」「ミンチン先生」「ポールとヴィルジニー」等、放課後、暗くなるまで稽古しました。バスケットも盛んで、学年対抗試合をやりました。

3 年生から「割烹」の授業が加わり、育ち盛りの私たちは、美味しいお料理がいただけるので待ち遠しい時間でした。お米は配給制度になっていましたので、各自 1 合ずつ持ち寄りました。最初の授業は、お味噌汁、桜御飯と他に 1 品でした。裁縫室で先生方と一緒にいただくお食事は格別の味でした。

秋の運動会は初等部、中学部、女学部合同でいたしました。兄は運動神経抜群で走るのが速く、「シムコ（私の愛称）のお兄さまー」の声援を受け嬉しそうでした。

3 年生になると、戦争の影響が少しずつ出てきました。1931 年（昭和 6）の満州事変から、1937 年（昭和 12）日中戦争、1941 年（昭和 16）太平洋戦争とエスカレートし、1945 年（昭和 20）8 月 15 日まで 15 年も戦争が続きました。戦争が拡大するなか国内では「国民総動員法」「大政翼賛会」「大日本産業報国会」



楽しみな「割烹」の時間

※20 馬場（志村）洋子（13 回生）女学校卒

など、国民生活は戦争協力体制にしっかり組み込まれていきました。

女学部3年生になった1943年（昭和18）からは勤労奉仕が義務になり、井の頭公園、宮城（皇居）の清掃などいたしました。

1944年（昭和19）1月から3月まで、近くの三鷹航空社員寮の掃除、社員の昼食作り等も加わり、授業を受ける時間は少なくなっていきました。

体操の時間に雑刀が加わり、デンマーク体操も教えていただきました。音楽の授業で「海行かば」を歌い、初等部の体育では「八日は大詔奉戴日」の歌を太鼓に合わせて歌い、体操をしておりました。

英語の授業は禁止されましたが、青木先生は勤労働員されるまでは教えて下さいました。

「勤労働員」とは？「戦争の拡大に伴って、戦況はきびしさを増していった。青年、壮年男子の大部分が軍人や軍属として徴用されて戦場へ行き、大学生の徴兵延期の停止（学徒出陣）や徴兵年齢の一年繰り下げ（19歳から）も実施された。そのため国内の労働力不足は決定的なものとなり、『国内必要労働対策』として『女子挺身勤労令』『学徒勤労令』が閣議決定された。現在の中学生・高校生に当たる生徒たちも、戦力の一端をになう貴重な人的資源『産業戦士』としてお国のために働かされたのである。これを『勤労働員』という」。(※21)

1944年（昭和19）4月、私たちに勤労働員が発令されました。女学部3・4・5年生は立川の昭和飛行機株式会社で、飛行機作りを命令されました。14歳から16歳の少女たちです。5、6名ずつ班を作り班長（社員）指導で、エアポンプでタイヤに空気を入れる。電気ドリルでの穴開け、リベット打ち。私は、電気コテでのハンダ付けを、またダグラス輸送機や九九式艦上爆撃機等の製図をした班もありました。作業中に空襲警報が鳴り、慌てて防空壕へ走ったり、間に合わないときは作業台の下に潜り、身をひそめ、警報の解除を祈ったりしました。

昭和飛行機は中央線立川から青梅線に乗り換え、昭和前（現在のJR昭島駅）下車、すぐのところにありました。立川飛行場の広い敷地のはずれでしょうか。飛行場側の電車の窓は、ベニヤ板で塞がれており、軍事機密だということが解りました。

昭和飛行機への動員学級は数が多く、青梅線はダイヤが少なかったため、毎朝の通勤は恐怖を感じるほどの混雑でした。息が止まりそうになることもあり、女学生の悲鳴をきかない日はありませんでした。

当時は食糧事情が日増しに逼迫し、お米の配給も滞りがちで、食べ延ばすため、重湯にお米粒が少し浮いている、というような食事しかできなかったのです。育ち盛りの女学生、中学生が栄養失調状態で、お国のために飛行機を作っていたのです。当然、カルシウム不足で骨も脆くなっておりました。車内で女学生（明星ではないのですが）が肋骨を折りました。私たちは「明日は我が身」と不安でした。

数日後、ついに来るべきものがきました。やはり明星ではないのですが、女学生が圧死する……という最悪の事態になったのです。

明星学園では私たちのために、すばらしいご配慮を下さいました。青梅線昭和前から下り二つか三つ目の駅でしたか、福生に急接近の寮を用意して下さいました。

恩地邦郎先生は動員に付き添っていらしたので、事情をご存知で、逆コースでの通勤を学校に提案して下さいました。福生の農家を探し歩き、木村さんの家の蚕室を借りて下さいました。2階建ての大きな蚕部屋は、1階が食堂、2階が寝室と分けられ、仕切りのない広い部屋には畳が敷き詰められました。私も入寮しましたが、体を悪くしたため長くは居られませんでした。食事は？入浴は？等の記憶がはっきりしません。毎週土曜日に家に帰り、月曜日に寮に戻る生活でしたので、洗濯物は家に持ち帰り、入浴は家ですませる、ということだったと思います。火の気がなくて冬の寒さはこたえました。私たちは大勢で車座になり、足を投げ出し、沢山の脚が集まったところへ、掛け布団を何枚も掛けて「ワー、人間コタツだー」とはしゃぎました。

一番不安だったことは、情報が殆どないということでした。新聞もラジオもない。電話もない。福生は空襲を免れましたが、夜、寮の庭で、立川方面の空が真っ赤になっているのを見たとき、みんな同じ心配をしたと思います。「中央線が空襲されている！」私たちは不安で泣きそうでした。

〈※21〉『Story 日本の歴史』日本史教育研究会（山川出版社、2000年2月）

工場の朝礼のとき、各学校の出席率が公表されるようになり、明星は殆ど最下位でした。「お国のため」とか、「一億一心」「進め火の玉」「撃ちてし止まん」「米英撃滅」「欲しがりません、勝つまでは」などの標語が巷にあふれていました。私は脚気がひどくなり、心臓脚気になりましたが、毎日工場の診療所で注射を打ち、なんとか続けておりました。

恩地先生が声をかけて下さったのは、そんなときでした。「顔色が良くないよ。無理をしないで休みなさい。こんな時代は、自分の体は自分で守らなければネ」とおっしゃって下さいました。出席率最下位の理由がわかりました。先生たちは非国民のそしりを恐れず、私たちを守って下さったのです。

1945年（昭和20）3月21日、学校で卒業式。1年下の14回生も繰り上げて、一緒に卒業式でした。卒業後も専攻科と呼ばれ、敗戦の日まで動員は続きました。3月31日まで昭和飛行機、4月からは学校工場として再び三鷹航空の仕事を教室でいたしました。私は4月に疎開をしましたので、8月15日、敗戦の日の明星学園の様子はわかりません。戦争の影響を強く受けた私たちは、学力不足のまま大好きな明星学園とお別れいたしました。

戦争中、日本の教育が子どもたちのためのものでなくなり、戦時体制にすべて支配されたことを怖ろしく思います。戦後はその反省から出発したはずですが、年月と共に政治の介入が酷くなり、全国の良心的な先生方が苦しんでいます。

大正デモクラシーの中で創立した明星学園は、教育の自由を標榜し、先生方は生徒たちの成長のために研究・実践を重ねていらっしゃいます。私は動員中に、先生が国策に抗って生徒を守って下さったことに感謝し、二人の娘の教育をお願いしました。明星の先生方は、自由な教育の実践者として、日本の教育に明かりを灯していただきたい。後輩の皆様が学ぶ喜びを奪われるような時代にならないよう祈ります。

2) 短かった日々より 戸坂 嵐子（14回生）

私の明星生活は戦争末のわずか2年たらずである。1人の転校生は時たま女学生らしい詮索好きな眼にぶつかり退屈な授業もあって淋しい日を過ごしたこともあるが、9年ほど経ち、私は明星生活がどの様にか私にたのしく豊かな過去をあたえてくれたことに気づく日々がある。そんな気持ちから今は全てたのしい思い出となったことがらをたぐって、30年の貴重な時の刻みに一文をしるし、ささやかな御祝辞に代えたいと考える。

入学して2日目の午後、窓の外に若いすすきが光る教室は快い眠気でしびれそうであった。

「文語の上一段活用ぢゃ。――煮る。に、にる、にる、にれ、によ……」黒い背広のK先生は知らん顔で読み進まれるが、もうろうとした私たちには上一段も上二段もさだかに見分け難くてただうめしかった。やがてカランカランとM先生（愛称）の振られるひなびた鐘が井戸のそばで鳴って、あたりは途端に解放感に満ちあふれた。こんな風にして広々とした草むらと林に包まれた私の明星生活が女学校3年生――昭和18年（1943）9月からはじまる。

リベラルなB学院（※22）からの転校生である私を、明星の人たちは好奇心をもちつつも大して気にとめず受け入れてくれ、私は10日経ち20日経つ中に難なく明星っ子に同化していた。

けれど女学生らしく楽しく「よく遊び、よく遊んだ」のはわずか翌年の5月までで、一級上の人たちと一緒に私たちはやがて思い出すのもいとわしいあの“昭和飛行機工場”に動員されたのである。その日の来るのを知ってか知らないでか、その秋から翌春にかけて私は新しいお友だちとともによい日々を得ていた。その思い出はいつもあの美しい武蔵野の風景をバックにして私の胸によみがえってくるのである。絵具箱をかかえて写生から帰る11月の夕暮れには、上水のそばの広い畑にダリヤが美しく咲き残っていたし、（2回生の）武者さんのお宅で遊びすぎたある日、暗くなった池の面に晩秋の濃いもやがよどみ、橋でふいに白い水鳥が私たちのかたわらに浮かんだこともあった。（その橋で或る日、カバンを振りまわして鯉をおどかしているとき、友だちの手の勢いが余ってびしょぬれになって、浮いたカバンをよそのおじさんが呆れた顔ですくい上げてくれたこともあったっけ。）

〈※22〉 戸坂嵐子氏は京都学派の哲学者・戸坂潤の娘で文化学院に在学。1943年、西村伊作校長が反政府思想による天皇批判、自由思想によって不敬罪で拘禁され、文化学院は強制的に閉鎖、生徒たちは他校への転校を余儀なくされた。

女学生らしく感傷的でそしてその流行ったように戦争にわけてもなく感激する、というには明星っ子はあまりにも明るく自由で、幾分伸び伸びしすぎていた。B学院から転校した私が学校の雰囲気あまり抵抗を感じなかった理由はここにある。けれどこうした明星気分の故に、楽しかるべき最後の一年を学徒動員によって、いばり散らす配属将校や、工場での10時間近い作業という現実につきあたって、他校の女学生よりもっとみじめな気持ちで過ごさなければならなかった。私は取り返すことのできない、こうして過ぎた大切な時間を本当に残念に思うけれど、それまで当たり前のように受け入れてきた明星のよさにふいに気がついたのは、そうした或る一日である。私は同じ工場にいるT女の人たちを探していたが、或るお昼休み、B学院の同級生であったN子ちゃんたちとやっと会うことができた。カーキ色の作業服を着たNちゃんはしばらく泣いている中に「動員になってまだよかったわ。T高女に転校して私たちほんとうにみじめだったのよ……」と言う。B学院が文部省の閉鎖処分にあったとき、T高女は編入情実校となり、40人ほど移って1クラス作られたが、つい昔の気分を出して騒いでは怒られ、お話をねだって怒られ、おさげをほどいて怒られ、数学ができなくて怒られ（これは私も同であったが）みんないじけ切って、わずかに半年のうちに残った人はわずか10名たらずになったという。動員になったとき、女子工具寮の一部にNちゃんたちは住むことになったが、それでも学校でしられるより余程いいそう。明星ではその頃、福生という町の農家を借り、平林先生の叔母様にお料理をお任せして家庭的な愉快な寮を作っていたが、それでも学校に戻れたらと誰しも思っていた頃である。別れる時「けっきょく嵐子ちゃんがいちばん幸せだったのよ」とNちゃんが言った。B学院から明星へ——もちろん転校してずいぶん気分は違ったが、明星のほうが健康でそして足が地についていたので、私は私なりにあまり矛盾も感じないで、明星生活に順応し、そして極めて楽しかった。私は学校というものは私を自由に生長させてくれるものだというふうに思っていたから、明星の明るさを当たり前のように受け入れていたのに、このときやっと気がついたのである。

これが明星のよさであったというわけである。後年、都立高女を卒業した多くの人と知り合って、「戦時中の学生生活が如何にも規則づくめで思い出すのも嫌」と聞かされたとき、私はいぶかしそうな相手に「吉祥寺にある明星学園です」と所在地まで言わなければならないけれど、明星生活とは素晴らしいものだったとその都度気がつく。戦争中に与えられた楽しい自由な学校生活。これは戦後考えても想像もつかないほど貴重なものではなかったかしら。

傷つくことなく、いためつけられることなく、伸び伸びと生長させてもらえた——とこれは卒業生の誰もが、先生たちに抱く感謝の気持ちである。わずか2年足らずいた私でさえ、そう思って明星が大変なつかしいし、そのなつかしさを支えるように、変わりつつ、新しく生まれつつ、いくつかの友情が私の生活を支配している。『薔薇は生きている』(※23)の古い時代より、伸び伸びと歴史を誌しつづけてきた明星よ。このつたない一文が編集部の方々にわたる頃、福生の寮で生まれた10人ほどのお仲間某所に集り、悪童気分をよみがえらせて思い出話を花を咲かせ、明星を出てよかったわね、とささやかに30周年をお祝いしているであろう。(※24)

〈※23〉『薔薇は生きている』……肺結核のため16歳で他界した山川彌千枝の遺稿集。彌千枝は成城小学校6年生の夏に発病。休学して療養ののち、1年遅れで明星学園高等女学校に入学。明星の女学部4回生として楽しく過ごすも5月に再発し、療養生活のなかで文章を書き遣した。

〈※24〉『明星学園PTA会報』学園創立30周年記念号（1954年5月）P.27

3 戦時下の旧制中学校

女学校と同様、中学校も戦争の影響を受け、過酷な学生生活を強いられていたが、明星らしさは失われてはいなかったようだ。当時の様子を語る教師、生徒の文章を90年史から以下に抜粋する。

(1) 教師から見た上田校長

戦時中、中学校以上の男子校には陸軍の現役将校が教官として配属され、軍事教練を行うことが義務付けられていた。明星の教育を目の仇にして赴任した配属将校を、明星教育のよき理解者、上田先生信奉者に変身させた話は今も卒業生の間に語り継がれている。

名物教師の一人が綴る上田八郎校長の魅力も味わい深いものがある。

私が明星で習ったこと ― 杉山 清（旧制中学校、高等女学校の公民、新制高校の社会科元教諭）

明星は、私においては、教えた学校であるよりも習った学校のような気がする。それほどに明星は私にアット・ホームの雰囲気を与えてくれる。上田先生が、「杉山君は明星へ気晴らしに来ている。君が来ると喧しくて仕事が出来ん」と、時に笑われるが、まさにその通りであろう。しかし、これは私にだけの現象ではない。昔、軍事教練はなやかなりし頃、ある教官が、「自分は某学校に行くときには、家の玄関を出る時から威張って行くが、明星に来るときには、どうも精神がなごやかすぎて困る。遠くの方から『先生お早う』などと声をかけられると、『なぜ敬礼せんか』と怒鳴ることを忘れて、つい『よう、お早う』と答えてしまう」と話したことがある。事実、この教官先生、やかましい例の査閲^(※25)の時、査閲官から「気を付けの姿勢がなっておらん、訓練が足りん、眼がきよろきよろしとる」と叱られたが、昼食懇談の時、査閲官に向かって、「お叱りの通りですが、明星の子どもは可愛くて可愛くて自分の子どもに向かって号令を掛けるようでどうもうまく行かんです、ハハ」とおそろおそろ釈明陳弁これ努めたのであった。ここに明星の雰囲気があり、それが私に気晴らし講義をさせる所以であるかもしれぬ。

大体、こういう雰囲気は、もともと上田先生ご自身の創られたものと、先生には諦めていただきたい。というのは、昔、上田先生は、8時になっても朝礼の鐘を鳴らせなかったからである。鐘を持ったお爺さんを引き連れて、今も同じに有るか無しかの校門に仁王立ち ― というのには少ししなびているが ― 背伸びして、「爺さん待て、今頃来るやつは、朝飯噛み噛み飛び出して来る。鐘にあわてて走ると、胃が悪くなる。横腹が痛くなる。まあちょっと待ってやれ、……もう橋まで来た、もういいだろう」カランカランカラン……。これが先生の毎朝の人情行事であった。このヒューマンイズムに非常にしばしば救われた愛すべき先生もあった。

しかし、この人情を甘くみてはならぬ。今日、甘く見ている学生も無きにしもあらずと、気晴らし先生かも知れぬが、私は正直なところ嘆きもし怒りもしている。爺さんの逸話を書こう。この爺さん。若い頃は出生地界隈の利ヶ者で、誰一人立ち向かう者もなく若いときから怖いと思った人は一人もなかったという。その爺さんが「上田先生だけは怖くて怖くてたまらん。腹の底まで見透かされているようで」、と何回となく私に述懐した。「わっしゃ、年をとって先生に救われて、初めて真人間にかえれたから、明星のためなら命をも捨てるが、字が読めなくちゃ明星の小使として相済まんから勉強する」と文字通り何十かの手習いを始めたのである。そして、時に「先生、アルゼンチンなんてどこにあるんですかね」などと、私は、新聞の字を聞かれるほかに新聞に出る地理をも尋ねられることがしばしばあった。

学生諸君、ここだ。上田先生は「親しむべくして馴れるべからざる人だ」。明星のヒューマンイズムに、逸脱のない節度を欲しいとつくづく思う。

話を戻して鐘のことに関連させるが、昔、明星には朝礼の鐘はあっても、時間の始まりや終わりを催

〔※25〕 査閲―学校の軍事教練の成績を査閲官が実地に調査すること。

促する鐘はなかった。鐘のない学校はおそらく日本中に一つもあるまい。その鐘のない学校も、明治以来の自由競争教育に新たに再吟味を加えて、天下に真の自由教育の警鐘を打ち鳴らしたのだから愉快じゃないか。当時は「何年生はじまり」と漢文の先生が教室の入口で怒鳴ると、角笛に応ずる子羊のように、学生たちがぞろぞろ集まって来るのであった。鐘のない学校の真の鐘は「人間は英・国・数の点数で割り切れるものではない。人間には必ず一つ優れた所がある。それに信頼し、それを伸ばせばよい。それが教育だ」というのである。明星卒業生で、このプリンシプルによって救われ、そして社会的に立派に活躍している人々が沢山ある。ありがたいことと思う。

以上のようなことは、明星が私に直接教えたものではないが、私が昭和7年の12月1日から、明星で身にしみて習ったところのものである。

そうそう、もう一つある。昔の明星では、喧嘩をして負けた子どもは教員室に逃げ込んで、入口の戸をガランピションと閉めて中から押さえていた。「開けろ」という外からの声に、「馬鹿野郎、開けるかい」と頑張って押さえていた、ところが、声の主は喧嘩の相手であっても、入ろうとする主が先生で、ダーとなる悲喜劇も沢山あったが、どうせ、教員室に逃げ込む方が弱虫なのだから、入口の戸は必ず強虫によってこじあけられる。そして、強虫弱虫は、必ず、今もある円卓子の周りを2、3回ぐるぐるやる。追いつめられて、いよいよかなわないとなると、弱虫は上田先生の身辺にビタリと寄り添う。上田先生は、寄りそわれてよろめきながら、にこやかに煙草をポカリポカリ。それで喧嘩はゲームセット。

こういったような雰囲気は、未だに明星に残っている。最も伝統に忠実な者が最も厳しい改革者でありうる。最も保守的なものが最も進歩的でありうる、という言葉もある。明星の伝統や精神はどこまでも生かし、かつ新しい時代にふさわしく伸ばしたいものである。

最後に、これは淋しく習ったもの。皮肉や、ひがみと思わずに、虚心に同情をもって考えてもらいたい。それは、昔、私が父母との会合で感じたことである。子どもが非常に優良であると、インテリの母親は「それは、私の生んだ子ですもの」と言いたげである。子どもがちょっとぐれたり親の意——その中にはヴァニティもある——にそぐわなくなると、「友達が悪い、学校が駄目だ」と言いたげである。教育と個性の問題は、勿論この私には分かるはずもないが、右のような淋しさに真に耐えうるもの、汝の名は先生なり、という気がしてならない。その淋しさに一生耐える者こそ、「先生といわれる程の馬鹿」であろうが、そういう馬鹿がいないとまた世の中は困るものらしい。明星はそういう馬鹿者の集まりであるかも知れぬ。

我々先生は、淋しくても、人間には必ず一つ良いところがある、という確信をもって、それを育むことを考えよう。父母の皆様には、先生の淋しさに同情していただきたい。そして学生諸君には、明星のヒューマニズムに、もっともっと気品あらしめていただきたい。(※26)

(2)『星雲時代』から 中学校生活の断面

旧制中学校の校友会誌『星雲時代』は、中学校の国語科教師・内野健児の指導によって、1932年（昭和7）11月に創刊された。「創刊の辞」は高らかに謳っている。▶▶本誌P.77参照

此処は僕らの談話室であり、討論場であり、鍛練場であり、文苑であり、詩歌の花園である。星雲時代の我若人の群は此処から出発して、やがて成長した数々の麗しい星の群となって世界の空に輝き出であろう。

しかし、もともと「校友」同士が課外活動、親睦、厚生などを行う団体である校友会は、高等女学校ともども、1942年（昭和17）から「皇国民ノ基礎的修練」を目的とする「報国団」として再編成され、国土防衛と勤労作業にも動員されることになった。クラブの名称も「××部」から

（※26）文芸部『明星 25周年記念』（1949年11月15日）所収、『明星の年輪—明星学園90年のあゆみ』P.143

「××班」に変わった。それでも『星雲時代』の発行はつづけられた。ここではまず、20号（1935年3月）から50号（1943年3月）までに掲載された記事のなかから、中学校の主な行事、クラブ活動、催物等を拾い出してみる。

- 遠足・旅行・登山——馬頭山、秋川溪谷、村山・山口貯水池、狭山丘陵、長瀬、富士山、大島、陣馬山、大菩薩峠
- 見学——慶應義塾大学病院、東京慈恵会医科大学、貴族院議院、裁判所、朝日新聞社、中央郵便局、東京中央電信局、製氷工場、三鷹内燃機工場
- クラブ活動——演劇部、音楽部、美術部、科学部、陸上競技部、籠球部、剣道部、銃剣部
- 催物——演劇発表会、音楽会、美術展、科学展、レコードコンサート、写真展
- 教練査閲



1937年度新入生（10回生）



1934年日立鉾山見学旅行（3回生）



1934年ラグビーチーム（3・4回生）

つぎに、上記の中から、いくつかの記事を紹介する。

①東京慈恵会医科大学見学 5年・林 春二（7回生） 38号：1938年（昭和13）7月

6月24日、第5学年及び第3学年は多湖実輝・越智忠良両先生に引率されて、愛宕山下の慈恵医大の正門にはいった。階上の1室に通された。多人数で狭い室にはいったので少々蒸し暑かった。

西丸先生が出て来られて、30分間ぐらい「血液及び循環器」について話され、次いで、「えらい学者はすべて、ちょっとした事柄に細心の注意を払い、熱心と“See and Do”で物事を考え、世界文化に貢献してきたと思われます」という意味の話をされ、「諸君はもっと科学に興味を持たれ、大いに世界文化に貢献せられんことを望みます」と講話された。

次に僕は標本室に導かれた。室にはいて、その先生に陳列してある骨格や人体の部分部分について説明を聞いた。また、姿勢の正悪を骨格の標本によって注意された。標本室を出て、上の実験室に行き、顕微鏡で「蛙の毛細管」「赤血球・白血球」「腎臓の一部」や「蛙の心臓の鼓動」を見た。帰りには雨が降り出していた。

②レコードコンサート 5年・市田 嵩（7回生） 38号：1938年（昭和13）7月

曲目：「セレナーデ」「水上の音楽」「王宮の花火の音楽」「道化師」そういう曲目が、この日（6月18日）の2、3日前に掲示された。吉田賢次先生や末綱卓一先生の解説のあることも、誰かに聞かされて知っていた。吉田先生の解説が始まる。ちょっとそこらに転がっている本には出ていそうもない、いわゆる「通」のそれである。感心して聞いているうちにレコードが始められた。

ヘンデルの組曲「水上の音楽」、ハミルトンハァティ指揮、ロンドンフィルハーモニックオーケストラ。典雅な音は教室に流れ始めた。

後ろの方に内野先生その他スゲエ4・5年生が5、6人、今までさわいでいたあの蜚声とエネルギーを何処に置き忘れたのか、目をつぶったり外を眺めながら神妙に聴いている。

ヘンデル、モーツァルトと続き、最後に末綱先生の御説明があり、歌劇「道化師」が始まった。その力動的な歌曲にびっくりしているうちに、この日のコンサートは大団円となった。

レコードは吉田先生提供4枚、恩地君提供2枚、末綱先生提供2枚。ごく少人数で聴くことが出来た。

③科学班報にかえて 5年・大木 保太郎（11回生） 50号：1943年（昭和18）2月

昭和17年度校友会は発展的解消をなし、新たに全国の学校と繋がりを持つ報国団として誕生しました。これにつれて我が科学会も名称を「明星学園中学校報国団科学班」と改めて、報国団の一部門として新しく出発しました。

我が科学会は昭和12年、支那事変突発の直後、多湖先生の御援助により、川上元郎、霜田光一、清水育夫君等、数名の者によって創設され、それより6年間、科学展覧会、模型電車運転会、昆虫採集会、天体観測会、その他工場及び博物館の見学会を行って来ました。

我々は、新しい言葉で「科学する心」、明星古来の言葉で「独創的精神」を持って科学についての研究を行って行く。

（3）学徒動員を中心に

松本唯史さんは16回生。旧制中学校の卒業生であり、またのちに新制となった明星学園高校では英語科教師として後進の指導に当たった。太平洋戦争の終焉を中学3年生のときに迎えた松本さんの経験もまた、現在の同年代の少年からは想像もできないものであった。90年史にご寄稿いただいた文章を転載する。

——学徒動員を中心に—— 松本 唯史（16回生・元英語科教諭）

私は16回生、83歳。明星学園の創立90年史に70年以上前のことを書けとの注文。記憶というものの頼りなさを痛感させられ、引き受けたことを後悔しながら書いたものなので、記憶違いも多々あると思う。そのことをご承知の上でお読みいただきたい。

私は旧制中学校の5年間を明星学園で学んだ。学んだと言っても、まともに授業を受けたのは、1、4、5年生の3年間だけで、2年から3年の夏の第2次世界大戦の終戦までは、勤労動員で学校ではなく工場に通った。

変な話だが、私は、自分が何故明星学園を受験したのかを知らなかった。父は「横浜事件」という出版社、編集者等への弾圧事件で逮捕されて不在だったし、母は父が留置されている横浜刑務所に妹を背に通ったり、まだ3歳だった上の妹の世話その他で多忙を極めていて、私の進学まで手が回らなかったのだろう。恐らく刑務所の父が母を通して、父が日本評論社の前に勤めていた平凡社の社長、下中彌三郎氏に明星への紹介を依頼したのである。

その頃、私たち一家は西荻窪の家から、新宿で空襲に遭い亡くなった画家柳瀬正夢氏の牟礼のアトリエに移り住んでいた。西荻窪より少しは安全だと思ったからだろう。徒歩で通学できることを理由に私は明星学園旧制中学校を受験した。入学試験は内申書と面接だけで、上田八一郎校長が「キミは何が好きか」と訊かれたので、ついいうっかり「メジロとタナゴ釣りです」と答えると「小鳥は可愛くてエエ、釣りは楽しいナ。はい、よろしい」と、たったそれだけで面接は終わり、入学は許可された。

1年の時の授業は思っていたより楽しかった。英語は上田校長、国語は船山博彦先生、歴史は堀淳二先生、数学は田口武丸先生その他で、それぞれ個性的な授業だった。それに軍事教練なるものがあった。風貌からガマさんと呼ばれていた中年の陸軍将校と、そして途中から立川の刀剣屋の息子だという若い陸軍将校に兵隊ごっこを習ったが、兩人ともかなり不熱心で、軍事教練は苦にならなかった。

中学に入って私には気になることがひとつあった。それは、父親がいないのに、他校よりいくらか高いという学費をどうやって納めるのだろうということであった。母にそれを尋ねると、絶対に他言無用とクギをさされた上で話してくれた。それによると、後に東京芸術大学の学長もされた小塚新一郎氏が、当時日独文化協会という団体の会長をされていて、父と親しくしており、父をその協会の職員ということにして給料を出してくれているから心配するなと言われ、ほっとしたことを憶えている。

しかし楽しかった中学生生活は1年で中断された。正確な月日は覚えていないが、2年になったある日から授業がなくなり、工場で働かされることになった。日本無線の子会社、船用無線が動員先であった。船用無線は船舶用無線機を作る会社で、恐らく軍艦や輸送船の無線機を作っていたのだろう。当時すでに成人男子はかなりの年齢のものまで徴兵され、工場の人手不足が深刻で、中学生までも使わざるを得なかったのだ。中央線三鷹駅北口から徒歩5、6分のところだったが、今そのあたりはすっかり変わってしまっていて、船用無線の工場がどこにあったかわからない。恐らく、現在横河電機のあるあたりだったと思うが、自信はない。

私たちは月曜から土曜まで毎日、軍服色の上着を着て、長ズボンにゲートルを巻き、鉄兜を背に工場に出動した。登校するのは何曜日だったか忘れたが、たった半日、それも軍事教練をやるだけだった。工場では、工作機械、組立て、配線の3部門に別れて働いたが、私は手先が器用そうだからという理由で配線部に入った。組み立て部から回ってくる無線機の裏側に、色とりどりのエンパイアチューブに通された銅線をハンダ付けする作業だった。無線のことなど全く知らない私は、ただひたすら工具が教えてくれる通りに作業した。監督という立場だっただろう、船山先生が毎日工場へ来られていた。

工場での座りっぱなしの仕事は辛かったが、雑穀入りとはいえ、米の昼食が食べられた事と、給料が貰えたのは嬉しかった。いくらだったか忘れたが、学校から貯金という名目でいくらか天引きされても、日曜に浅草へ大好きな軽演劇を見に行くには充分だった。4才になっていた妹の手を引いて、浅草の金龍館、常盤座などへ、シミキンこと清水金一のアチャラカ芝居をよく見に行った。しかしそれも2年生の10月頃までだった。

その頃日本の敗色は濃厚で、B29というアメリカの、当時とすれば大型爆撃機の空襲で、東京の中心部は半ば焼野原になりつつあったからだ。三鷹も、船用無線近くの飛行機会社の工場は空爆を受け破壊されていた。船用無線はまだ無事だったが、仕事の量が減りだし、3年生になるあたりで全く無くなってしまった。材料が無くなったからだ。その後私たちがやらされた仕事は、さすがに文字に残すのを控えざるを得ないような汚れ仕事もあったが、まずは防空壕掘りだった。会社の敷地内では危険だということで、徒歩で10分程離れた雑木林の中に壕を掘った。どの位の広さで深さのものを幾つ掘ったかは、とても辛かったのに覚えていない。アメリカ空軍の爆撃は日増しに激しくなり、警戒警報が鳴ると防空壕に走り、空襲警報になると壕の中でうずくまっていた。それが毎日数回あるので、工場と防空壕の往復が私たちの仕事になった。

夏も近づいたある日、悲しい出来事が起こった。グラマンというずんぐりした小型戦闘機の機銃掃射で友人の一人が負傷したのである。すでに2百万を越す戦死者が出ていたので、この事件を当局は無視した。その後、彼がどうなったか、私は知らない。

8月に入ると、日本の敗戦は決定的だったのに、軍と当局の大本営発表では、まだ本土決戦になるから竹槍でアメリカ軍を迎え撃てなどと言っていた。しかし8月6日に広島に、8月9日に長崎に原子爆弾が投下され、その間の8月8日にソ連が対日宣戦布告をするに至り、日本政府もポツダム宣言を受諾せざるを得なくなり、8月14日に無条件降伏をした。8月15日の昼、私たちは船山先生と一緒に船用無線内の広場に立ち、玉音放送なるものを聞いた。抑揚の強い天皇の言葉は、13歳の私には殆ど理解できなかった。耐えられない程の暑さで暑かったことだけが記憶に残っている。

戦争が終わり、明星学園に戻った私たち3年生は、4年生、5年生と一緒に教練で使った小銃その他の武器をアメリカ軍に引き渡すため揃えたり、工場の倉庫にでもなっていたためだろう、油だらけの教室の掃除などをする日が続いた。授業はあったのかどうか、よく覚えていない。

しかし4年生になると楽しかった。1年生の時の授業に加えて、横川武先生の美術、戸塚（富永）三郎先生の音楽、多湖実輝先生の生物が面白かった。木造平屋建ての旧校舎の教員室の南側の校庭をテニス愛好者で掘り返し、ローラーをかけ、石灰でラインを引き、軟式テニスに打ち込んだ。恩地先生、横川武・尚先生兄弟、そして堀先生までも生徒と一緒にテニスを楽しんだ。5年生になってもテニス中心の楽しい生活は続いたが、ここで難問が待っていた。旧制から新制に移行するので、旧制5年で卒業するか、新制高校の3年に入るかという選択を迫られたのだ。迷った挙句5年で卒業することに決め、受験勉強らしきことをしながらもテニスは続けていた。そして翌年3月、私の明星生活は終わった。

(4) 社会情勢

過酷な学生生活を強いられた学園児童・生徒たち。子どもたちを護り、指導していた教師たちは、どのように感じていたのか。当時の状況を上田八郎旧制中学校校長が記しているの、以下に一部引用する。(※ 27)

戦争へと至る社会はどんな様相を呈していたであろうか。…中略… 1931年（昭和6）9月、満洲事変が勃発し、相次いで起った白色テロ、澎湃^{ほうはい}として起って来たファッショの波、翌7年3月には上海事件が起り、5月15日には犬養首相が暗殺（所謂五・一五事件と呼ばれるもの）され、8月には國民精神文化研究所が設立されるという極めて多事な時代が現出した。12月には陸軍省が上智大學と暁星中學の教育方針に不満を持ち、終に配属将校を引き上げてしまった。昭和8年3月にはドイツ国会がヒットラー首相の全権委任法を可決してナチス独裁が成り、次いで日本は國際連盟を脱退するに至った。この年、中・女学校は第1回卒業生を送り出したのである。

昭和9年盟軍団事件の裁判の判決に対し暗殺は認の風潮が出て来た。しかも徳富蘇峰氏の如き同事件を目して「報国の丹誠」から出たものだと公表した。かかる風潮がますます日本をしてファッショ化へ拍車をかけることになった。10年 相澤中佐事件、11年 二・二六事件、12年 日華事変、かくの如き大事件が続出するに至った。國体明徴問題で美濃部達吉氏が貴族院と東大を追われ、「戦争は創造の母」と云う陸軍のパンフレットが出て日本は凡て軍部の天下となってしまった。それから後の事はもう書く必要もないであろう。

ただその間にも明星は依然として自由教育を堅持して来たと思う。明星學園の「學園」という文字が氣に喰わぬと配属将校を通じて師団司令部の意向が伝えられた事もあった。父兄の間にも将来軍人を志望する生徒は他に転校させたがよいと云い出した人もあり、先生の中にもそれに賛成するが如き言辞を弄する人も出て来た。事実子供の意志に反して自分の子供を他校に移した父兄もあった。父兄の中には子供達が自分の學校が好きになるということを恐れる不思議な現象も生れた。學校が好きになるのは學校が生徒を甘やかすからで、學校に行くことを嫌う程に學校がピシシ生徒に硬教育を施してほしいという要求も出て来た。何かすばらしい文句の額を校内至る所に掲げて欲しいと云う希望も出た。奉安庫の設置、校旗に対する敬礼、色々な命令指示が引き続いたが、どれも実現するに至らなかった。ささやかな数員室の前で「〇年〇組何某〇〇先生に用事あって参りました」と大声に怒鳴られた時にはよく驚かされた。普通の声量で普通の事を云えばもっと大きな声で云えと叱られたものだった。質問に対する正しい答えは問題でなく、「忘れました」「知りません」と特別に大きく発声すると「よろしい」といつて誉められていた。随分恐ろしい教育が一時流行したものである。

昭和19年1月、太平洋戦争もだんだん酷^{たげな}くなった頃、第3學期始業式で「本日より校内は勿論登校下校の際もゲートル着用のこと」と通達した時、当時の5年生Kが名状すべからざる不快な顔をしたことを今も忘れない。



1942年4年生銃剣道（12回生）



1944年4年生の教練（14回生）



1938年富士山麓軍事訓練（5・6回生）

(※ 27) 上田八郎「25年の回顧」文芸部『明星 25周年記念』(1949年11月15日) P.86

4 戦時下から戦後へ

三鷹市は戦後40年を経て、戦争の記憶が風化しないようにとの願いから、市の事業として体験記を募り本にまとめた。^{〔※28〕} 明星学園の元教師・理事だった原田満寿郎は、戦時中の学校日誌や私記を市に提供した。その私記を90年史から転載する。なお、文中の「時限爆弾」というのは、投下されて一定の時間が経過すると、自動的に爆発するように装置した爆弾のことである。

戦時体験の断片 原田満寿郎^{〔※29〕}

時限爆弾投下の夜半から未明（1945年4月2日）

空襲警報を耳にして学校警備のため家を出た。井の頭御殿山のソロの林の道は、10年来歩みつづけている明星学園への通勤路であるが、灯火管制下、一度森林の中に入ると、全く手さぐりの状態。3～5分で通過するところを20～30分もかかって、やっと牟礼の街道に出て学校にたどりついた。

連日の東京空襲に脅えて用務員が郷里石川県に疎開して留守となった用務員室に、照井猪一郎初等部長が数日前から24時間、昼夜ここで籠城していた。職員室の前庭に椅子を出して、照井先生と私は、極度に悪化してきた戦況と日本の将来を語り、最悪の予想こそ口にしなかったが暗黙のうちにこのことを意識して、学校、子どもたち、家族の行方を、静寂な暗闇の中で言葉少なにしんみりと語っている時、B29一機が南西から北東に爆音を残して消え去った。「サァー」と、何か落としたようにも感じられたが、爆発音もなく火焰もおこらず、B29の去ったあとは再び不気味な静けさで更けていった。「おかしい、今夜の空襲。B29の動き」と照井先生と話し、空襲警報解除のサイレンを待って、3時ごろ学校を出た。

帰路は、大盛寺前の弁財天堂参道を経て、石段を下り、弁天堂わきの梅林の坂道を上がって吉祥寺の我が家に。ゲートルしたままのゴロ寝。足が冷えきって眠れず、ウトウトまどろむことしばし。突然の大音響（6時ごろ）に目がさめ、何事かと近所の方と語りながら、音響のあった方向へと急いだ。公園のプールの南側と、先刻歩いてきた弁財天堂参道に、摺鉢状に作裂した穴が大きな口をあけていた。3時間前に歩いていたところ。時限爆弾が投下されたその上を歩いていたのだ。「知らぬが仏」とはいうものの、いのち拾いをした幸運を心からかみしめた。…中略… この日、中学部の「学校日誌」には——4月2日（月） 晴 午前2時より5時近くまでB29一機または二機ずつ、吉祥寺・三鷹・田無方面へ。

時限爆弾。午前5時半ごろより正午ごろまで爆発に驚かされる。午前9時一機、正午一機。時限爆弾が投下され爆発したところ。——上連雀1丁目、明星学園の北の雑草地、大盛寺前の弁財天堂参道、井の頭公園のプール、七井の池の北辺、吉祥寺南町1丁目にかけて。

P51の機銃掃射（1945年4月19日）

警戒警報があって、空襲のサイレンがまだ鳴らないのに、P51数機が超低空で、女学部の平屋の屋根すれすれに、学園の南、千代田光学工場の隣接の森に向かって機銃掃射。児童たちはすでに防空壕に駆け込んでいた。

職員室から飛び出した私は、4、50メートル先の運動場の防空壕に全力疾走した。走りながらP51の乗組員の顔が見えた。瞬間、グラウンドに突っ伏した。その時、右足首の裏に衝撃を感じた。“やられた！”と逆上し「死」を思った。1、2秒後、痛みのないことを意識し、“助かった！”とホッとした。

衝撃は、機関砲の葉莢（弾丸を発射する筒）が落下して足首に当たったのだった。P51は、千代田光学の工員たちの避難する群れを見て、掃射したらしい。工員何人かの軽い負傷ですんだのだった。この日、中学部の「学校日誌」に——4月19日（木） よく晴れていた。B29三機の飛来とP51二十機からの機銃掃射あり。新校舎に一発当たる、との記事あり。

児童たちはB29の時は壕の入口に顔を出して、銀翼をながめ、「きれいだなあー」の私語もあるが、

〔※28〕『いま語り伝えたいこと——三鷹戦時下の体験——』三鷹市（1986年3月24日）

〔※29〕原田満寿郎 学園小・中学校教諭（社会科）、学園理事

P51の機銃掃射のダダダ……とピュピュピュ……と一緒になった音、それに低空飛行の烈しい飛行音には、みんな壕の中で息を殺し、歯をくいしばってうずくまっていた。

1945年（昭和20）8月、アジア・太平洋戦争は終戦を迎えた。しかし世界情勢は不安定で、占領治下の日本は混乱状態に陥っていた。戦後も続く苦難のなか、学園はどのように教壇を守り抜いてきたのか。原田はPTA会報『道』の誌面に繰り返し学園の歴史を綴っている。その中から「明星学園史の一齣〈その10〉」を取り上げる。

明星学園史の一齣〈その10〉

集団生活の指導・社会生活への訓練 原田 満寿郎

“飯が足りないから授業を操短する”のではなく、「飯が足りなくとも、積み上げられて行く学習」——これは昭和21年6月13日付の初等部保護者宛のお知らせの内容である。

学習即訓練・生活指導を今回とりあげたが、こうした「学習即訓練」や「生活指導」をどういう背景の中で実施していたかを認識してもらうため、戦禍の中に児童を護り抜き、敗戦後の食糧難に喘ぎながら児童と其の苦しみをわかちつつ、来る日も来る日も明るく朗らかに教壇を護った当時の初等部の全貌をこのお知らせで紹介します。

お知らせ〈昭和21年6月13日〉

6月7日附を以て授業時数について御希望を取りまとめました結果、御回答家庭数200中、下の内訳となりました。

全授業継続	午前にて打ち切り	全一か月休業	任意食疎開
25%	71.95%	3%	0.05%

5月27日全父兄会開催以後十日の試行期間を経過した今日、食事情は益々緊迫の一路を辿ってきたことは、授業半日打ち切りの御希望が絶対多数を占めた統計が雄弁に物語って居ります。

併し食事情の一事のみの為に、日本の将来を決する児童の学業に大きな支障を来たすことは、何としても忍び難いことであります。

教育道の上からしてもたとえ如何なる事態に阻まれるとも、毅然として教育の本道から転落することなく、飽くまで時難を克服して半歩一歩でも国家再建の道に前進することこそ、救国の任務としなければなりません。

このため前からして食糧窮迫緩和策としての授業時間操作も、どこまでもこの教育の本質に基準を据え、その上に新なる学習の構想を打ち立て、その方法が同時に食難の一解決でもあり得るものでなければなりません。

“飯が足りないから授業を操短する”のではなく、“飯が足りなくとも積み上げられていく学習”が工夫されなければなりません。ですから食料不足の期間の暫定措置ではなくて、食糧充実後といえども継続に値する学習案、系統案でありたいと思います。

この意味で私たちの今後の計画としては児童の自律活動を強化し、自学自習の態度を確立し、家庭と学校との連携を一層立体化し、「教師なき学習」「家庭なき生活」にまで児童の生活を最大限に能動化するよう指導に努力せねばなりません。

その一案として当分以下の方法によって学習の体系をつくり、即時実施することに致します。

各学年（当時は1学年1組、したがって6学年で6組）を3つの組に分ち、各組とも1か月の10日間は全授業をうけ、他の20日間は午前打ち切りとします。全授業の日程は

第1組＝1日より10日まで

第2組＝11日より20日まで

第3組＝21日より月末まで

但し第1組は既に終わり、明日より20日までは第2組の全授業に所属する期間、なお兄弟でもその特質はまちまちだから同一組とは限って居りません。こうすることによって、

1. 学級が三箇の分団として特質づけられ構成される。
2. 各分団は大体知能の近似したものによって成立しているから、児童相互の協力が円滑かつ緊密で、学習の能力が^{たかぶ}昂る。
3. 午後の授業は殆ど1/3という少人数となるのでまとまりもよく、従って教師の指導も徹底する。
4. 午前打ち切りの組には家庭学習の研究課題、協同研究の機会と組織等を計画的に与えることによって、学習の自学自習、生活の自立自営を訓練づける。
5. 各分団は学年一般としての基本教育をうけることに差別はないが、その他の範囲では必ずしも同種即ちある組に与えられた課題、教科教材は必ずしも同一の形で他の組にも及ぼすとは限らないということ
6. 伸びられるものはどしどし伸ばし、遅れがちの者をば懇切に引き上げる機会が得られて、比較的指導が均^{きんてん}落する。
7. 家庭に於ける教育力を児童の面に一層高度に動員して、半日授業から起こりがちの弊害と損失を積極的に^{てんぽ}填補解消する。

等がさし当たってこの計画の新しい収穫を予定されています。

この学習が逐次整備され、軌道に乗るまでには、学校も家庭も児童も、一苦労は免れますまいが、この三位一体の調和が定石化すれば、その後は順調な^{すべ}まりをつづけて行くことは明らかであります。

そこにこそ新装の明星の姿が次第に本格化して大きく現れてくるに違いありません。

何事であれ創始創業に困難は付きものです。併し誕生の苦しみと、死滅の苦しみといずれを選ぶべきでしょうか。困難の点では誰よりも寧ろ職員のそれが思われます。職員には午前打ち切りの日もないばかりか、食糧買い出しの時間も金も極度に貧困であります。

併し誰一人悲鳴をあげないのは職業的宿命への従順さからでありましょう。即ち我々は児童と共に生きる以外に生活の方法を知りもしないし、求めようともしないからであります。

戦禍の中に児童を護り抜き、今また食糧難に喘ぎながら教壇を護って居ります。

皆様とても同様の事と存じます。

今ここで親も子も教師も、徒に時流に押し流され、渾沌の底に沈淪し去るとしたら、誰が教育救国の礎を築き、民族の魂に火を点ずものでしょう。国破れて山河また昔日の倂はありません。この見るも無残な祖国の興廃は一体誰の肩にかかって居るのでしょう。吾々の最後の資産は吾々の後継者として僅かに残された今日の学童であります。このかけがえのない資産の処理までを連合国にでも頼むというのでしょうか。

ここに集って居る三百の学童の中からだって、将来日本を背負って立つ真の英雄が出ないと誰が断言出来ましょう。

必死の努力を傾けつくして生き抜き戦い抜き、吾が子のために、日本のために、一歩も教育の敗退をしてはなりません。

敗戦は去年の8月にあったのではなくて、一に将来二十年の国民教育の成果にかかって居ります。

（以上）（※30）

〈※30〉 PTA 会報『道』No.82（1969年7月12日）P.43

第 3 部 戦後教育改革期と明星

1945 年（昭和 20）～ 1970 年代



入学式の後、高校生から記念品をもらうため高校へと向かう新 1 年生と寒川道夫先生（1962 年 4 月）。
高校と小中学校間の旧道は、この頃まだ舗装されていなかった。

第1章 新制度による再出発

1 「6・3・3制」と男女共学

(1) 敗戦直後の教育再建

混迷のなかで

天皇がラジオを通じて戦争終結を告げた1945年（昭和20）8月15日。日本国民の多くが茫然自失し、虚脱状態に陥っていたその日、鈴木貫太郎内閣が総辞職した。2日後の8月17日、皇族ひがしくにのみやなるひこおうの東久邇宮稔彦王が内閣を組織し、文部大臣には前田多門が就任した。

1887年（明治14）大阪に生まれた前田多門は、立教中学在学時にキリスト教に入信し、第一高等学校時代に新渡戸稲造と出会い、その思想と人格に傾倒し多大な影響を受けていた。大学卒業後は内務官僚の道を歩み、やがてジュネーブの国際労働機関（ILO）に日本政府代表として駐在した。帰国後は自由主義路線の朝日新聞に入社し、論説委員として軍部や右翼勢力の拡大を食い止めようとした。しかし、軍部に詰め寄られて新聞社を辞し、ニューヨークに新設された日本文化会館の館長を務めた。かつて、師・新渡戸稲造は「われ、日米の橋とならん」と言ったが、遅蒔きながら自分も「日米の橋」となることを決意したのである。だが、志なかばで太平洋戦争が始まり、交換船で帰国しなければならなかった。

1945年5月25日の東京大空襲で東中野の家を焼かれ、軽井沢の山荘に移り住んでいた前田は、敗戦の詔勅を聞き、廢墟の上にどんな日本を打ち建てるか、果たして新日本が打ち建てられ得るかを考えていた。そんな矢先の文部大臣就任であった。「敗戦は悲劇だが、今後、軍国主義の圧迫のないところで、予て、新渡戸先生の言って居られたような教育の理想を行えるなら、働き甲斐もある」と考えて、決意したのであった。^{〔※1〕}

連合国軍はまだ日本進駐を始めていなかった。

前田文相は8月27日の夕刻、ラジオを通じて、子どもたちに、「さあ、新しい元気で、いい体、知恵を磨きましょう」と語った。^{〔※2〕}「知恵を磨くためにはまずなんでもよく調べて見るのが大切です。先生に教わったことをそのまま暗記するという事ではなく、常に頭を働かせて『ハテナ、その訳は』と自分で一応考えて見て解けないところはよく調べ本当に自分の考えを練るのが知恵を磨く道であります」と呼びかけた。

ここで、「ハテナ、その訳は」と自分で考えることが大切だと述べているが、後日の回顧のなかで、これは「私の独創ではなく、恩師新渡戸稲造先生が常にのべられていたところであった」と言い、「ハテナ」と考える訓練が日本の教育に最も欠けていたと指摘している。

「青年学徒に告ぐ」

3日後の8月30日、連合国軍最高司令官マッカーサーが神奈川県厚木飛行場に到着した。さらに3日後の9月2日、アメリカ戦艦ミズーリ号の艦上で降伏文書の調印が行われた。

この時期、日本の教育改革に関する占領軍の指令はまだ何ひとつ出されていない。

〔※1〕 前田多門『山荘静思』（羽田書店、1947年）

〔※2〕 前田文部大臣「少国民へ、さあ新しい元気で」、『朝日新聞』（1945年8月28日）

降伏文書の調印から1週間後の9月9日、前田文相は「青年学徒に告ぐ」という放送を行った。^(※1)

まず、「私は、あなた方の先輩の一人として、吾々、先輩のやり方が悪かったために、諸君を、この窮状に陥れたことにつき、深く自責の念に駆られ、御詫びをしなければならないのであります」と詫びた。そして、青年学徒の戦時中における働きに感謝するとともに、敗戦後の新時代に生きる日本人としての心構えを説いた。「新時代とは、如何なる時代であるか。日本の往く道はただ一つ。武器を持たぬかわりに、文化で行く、教養で行く、ほんとうの道義日本として、世界の進展に寄与する。…中略… それには、真の教育を、益々盛んにしなければならないのであります」。「要するに、上っ面で物を考えるということは、一切やめたい。一番排斥すべきものは世の中の流行不流行で動いて、本当に各自が自分の心で、自分の責任で、物を考え抜かぬことである。…中略… 全体主義が流行する時は、それに軽々しく便乗し、また、今度のような時代になると、何の反省も思慮もなく、漫然、齒の浮いたような皮相の米英追随主義に早変わりするという如き軽薄なことでは、到底、立派な国民にはなれない。連合国側と雖、心ある者は、さような不見識の追随を喜ばぬであらう。どうか、心の奥で、物を考えるようにありたい」。

それにつけても、第一に考えねばならぬことは、国体の護持である。第二に、戦いに負けても、捨ててはならないのは自尊心である。第三に、科学を重んじることである。第四に、宗教的情操を養うことである。そして、最後に、「真理を愛する心、それが、学徒の心でなくてはならぬ」と述べ、つぎのように結んでいる。「親愛なる学徒諸君、本来、元気に充ちた諸君の心身も、永い戦争の苦勞と、最近の精神的衝撃で、さぞかし、疲れた割り切れない気持ちにあるであらうと御察しする。どうか、幾重にも、健康に気をつけ、心境を整理し、捲土重来、日本新使命のため邁進して頂きたい。日本今後の隆替は、全く、諸君の双肩に懸っているのである」。

この放送をするに至った事情は、前田多門の長女で精神医学者、文部大臣の父を援けて私設秘書をつとめた神谷美恵子の日記に、つぎのように記されている。「9月3日（月）昨夜父と二人で上野まで電車に乗ったとき、学生たちがいかにも疲れきっている様子を見て、父は、これはどうしても元気づけなくてははいけないと思ったと言う。それで昨夜2時まで『青年学徒に告ぐ』という原稿を書いていた」。^(※3)

赤井米吉と前田多門

連合国軍の日本占領からまもない1945年（昭和20）10月の初め、赤井米吉は連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の教育顧問となった。その経緯は、GHQ当局から前田多門文相に、日本の教育改革を行う上で自由に懇談できる人物を何人か推薦してほしいという要望があり、前田が赤井をその一人として推薦したからであった。

赤井米吉と前田多門は旧知の間柄であった。赤井は成城時代に、前田の長男・陽一（のち東大教授・フランス文学）を教えたことがあり、二男の寿雄は明星の旧制中学年を卒業していた（10回生）。また、金澤義一（10回生）・康（13回生）兄弟は前田の甥（妹の子）であった。

家族ぐるみの交誼を始めた1930年頃、前田は東京朝日新聞社の論説委員として健筆をふるっていた。赤井は自由教育運動の指導者のひとりとして活動していた。前田は赤井より3歳の年長だが、ともにまだ40代なかばの壮年。熱心なキリスト教信者として自己を形成してきた二人であっ

〔※3〕 『神谷美恵子著作集 第6巻』（みすず書房、1981年）

た。そして明治生まれのリベラリストらしく、天皇を崇拜し、教育勅語を教育の根本理念とする考えをも共有していた。

「日本的民主主義」

1945年10月に入り、東久邇宮内閣に代わって、幣原喜重郎^{しではら き じゅうろう}を首班とする内閣が成立した。文部大臣には前田多門が留任した。

この時期になって、GHQは日本政府に対し、つぎつぎに指令を出してきた。マッカーサーは憲法の自由主義化と人権確保の5大改革を指示し、そのなかで婦人の解放、労働組合の育成、秘密審問司法制度の撤廃、経済機構の民主化と並べて、教育の民主化をあげた。

ついで、GHQは、つぎのような「日本教育制度に対する管理政策」を示した。

- 1) 軍国主義的および極端な国家主義的イデオロギーの普及を禁止し、軍事教育・教練を全廃すること。
- 2) 議会政治、国際平和、個人の権威の思想、集会・言論・信教の自由など基本的人権の思想に合致する諸概念の教授と実践の確立を奨励すること。

11月から12月にかけての帝国議会で、前田文相は「教育の方針」について繰り返し語っている。要約すれば、まず軍国主義と極端な国家主義を教育面から払拭し、「個性の完成」を教育の目的として、さらに「個性の完成」を通して国家社会に奉仕する。また、極端な画一主義を教育界から除去し、健全な民主主義、自由主義を育成する、というものであった。

前田文相は「日本流のデモクラシー」、「日本的民主主義」による平和文化国家の建設を考えていた。天皇を上にいただき、民衆が政治に関与し、政治は「権力」というよりはむしろ「奉仕」に重きを置く。これが日本的民主主義の特長であると述べ、「国体護持」の理念を明確にした。

しかし、国内には一方で、天皇制批判や天皇の戦争責任論も高まっていた。そして、前田文相のような日本的民主主義の主張は天皇制の地金をかくす「ごまかしの論理」だという批判も強かった。

その年、1945年（昭和20）も押し詰まった12月23日、前田多門は幣原首相から突然の呼び出しを受け、天皇が自らの神格を否定するいわゆる「人間宣言」の草案を書くようにと言われ、執筆にとりかかった。^{（※4）}この詔書は翌1946年（昭和21）1月1日に発表され、その日の新聞は第1面で大きく報道した。

時代は大きく動いていた。焦土の街に映画『そよかぜ』の主題歌、並木路子が歌う「リングの唄」が流れていたが、非情の風も冷たかった。

天皇の「人間宣言」から3日後の1月4日、GHQが発した軍国主義者等の公職追放の指令によって、前田多門は文部大臣の職を退いた。敗戦直後、「敗戦は悲劇だが、今後、軍国主義の圧迫のないところで、予て、新渡戸先生の言って居られたような教育の理想が行えるなら、働き甲斐もある」と思い、文部大臣に就任して5か月間の在任であった。

（※4） 前田多門「『人間宣言』のうちそと」『文芸春秋』（1962年3月号）

(2) 教育基本法と6・3・3制

アメリカ教育使節団報告書

連合国軍総司令部（GHQ）は、戦後日本の教育改革を進めるために、1946年（昭和21）1月、すぐれた専門家によって構成する教育使節団の派遣を本国に要請した。その結果、46年3月の初旬、ジョージ・D・ストッダード（イリノイ大学名誉総長、ニューヨーク州教育長官）を団長とする27名の教育使節団が来日した。

いっぽう、GHQは日本政府に対しても、教育家の委員会を組織して使節団に協力することを要請した。日本側の委員は、南原繁（東京帝国大学総長）を委員長とする官民の教育家29名で構成された。

アメリカ教育使節団は、滞在約1か月の間に、GHQに置かれた民間情報教育局（CIE）の係官、日本側の教育家委員会、各界の日本人などから可能なかぎりの知識を得た。また、さまざまなタイプの学校を訪問し、教育の実際も見た。その上で、協議の結果を報告書にまとめ、3月末にマッカーサーに提出した。（教育使節団は1950年にも来日したので、両者を第1次、第2次と区別している。）

GHQは、4月中旬に報告書を公表し、日本の新しい教育制度の重要な指針となる勧告であることを明らかにした。

使節団はまず、自分たちの基本的立場をつぎのように述べる。

われわれは、決して征服者の精神をもって来たのではなく、すべての人間の内部に、自由と、個人的・社会的成長とに対する測り知れない潜在的欲求があると信ずる、経験ある教育者として来たのである。…中略…われわれの最大の希望は子供たちにある。子供たちは、まさに未来の重みを支えているのであるから、重苦しい過去の因襲に抑圧されるようなことがあってはならない。だから、われわれは、悪い教育を止めさせるばかりでなく、できる限り、子供の心情を硬化させることなくその精神を啓発する教師や学校を準備し、教育の機会均等を計るようにするつもりである。後略…（※5）

そして、日本の教育の特徴として、極端に中央集権化された教育制度、複線型の学校体系、画一的な詰め込み教育、無条件の服従や自己犠牲などをあげ、「民主主義の生活に適応した教育制度は、個人の価値と尊厳との認識をその基本とするであろう。それは、個人の能力と適性に応じて、教育の機会を与えるよう組織されるであろう」という。

具体的な内容として、学校制度では、男女共学を基礎とする6年制の小学校の上に、男女共学・3年制の義務制下級中学校を、その上にやはり3年制の男女共学・無月謝・無選別の上級中学校を設けることを勧めた。高等教育については、大学の門戸開放と女性への機会均等を実現することが強調されていた。また、教育行政の地方分権化を提言し、都道府県ごとに政治的に独立の、一般投票によって選ばれた代表市民によって構成される教育委員会が設置されることも勧告した。

この報告書によって、その後の教育改革の方向が示されることとなった。しかし、この文書が連合国軍による占領という特異な政治的状況下で作成されたという事情から、戦後の教育改革が連合国（実質はアメリカ）から押しつけられたとみるのは一面的だろう。

なぜなら、まず、日本側の教育家委員会は、使節団が来日する前に会議を開いて検討を重ね、

（※5） 村井実 全訳・解説『アメリカ教育使節団報告書』（講談社学術文庫、1970年）

改革上の諸問題についての意見を報告書の形にまとめて準備していた。使節団との会合で、双方が意見を十分に述べ合い、共感したり、一致する見解がいくつもあった。とくに6・3・3制の教育制度の創出には日本側の意見が大きく貢献した。

また、アメリカ教育使節団も、日本の教育についてよく研究し、一定の理解を共有していたことである。中野光氏はつぎのように述べている。

使節団のメンバーは1920年代から30年代にかけて日本の教育に展開された国際的新教育運動につながる学校改革への自主的な運動についても一定の理解を有していた。1919年（大正8）デューイが来日したこと、H・パーカーが三度来日し、明星学園園長・赤井米吉らと親しく研究交流をしたことなども知っていたものと思われる。^{〔※6〕}

赤井米吉の教職追放

敗戦の翌年、1946年の11月3日。その日は明治天皇の誕生を祝う「明治節」^{〔※7〕}であった。また、この日、新生日本の柱となる日本国憲法が公布され、各地で新憲法公布記念祝賀会が盛大に举行された。前田前文相の推薦によって連合国軍総司令部の教育顧問となり、教育再建のために尽力していた赤井米吉にとっても、この日は大いに慶賀すべき日であった。

しかし、この慶事は一夜にして暗転した。翌11月4日、赤井はGHQではなく、教育職員適格審査委員会において不適格と判定され、いっさいの教職から追放されたのである。前田多門が公職追放の身になってから10か月後のことであった。

赤井が教職追放とされた判定理由書にはつぎのように書かれていた。

戦時中時局に迎合して著書『新世界観と教育』等に於て所謂日本の世界観に基く教育を強調し、全体主義的教育理論を鼓吹した。

共同省令別表第1第1項第6号後段の規定に該当

教育職員適格審査委員長 山崎匡輔

赤井をよく識る中野光氏は、「赤井が教職から追放されるという処置が妥当であったかどうかは、立場によって見解が分かれるだろう」と書いている。「追放令そのもの、あるいはそれに誰が該当し、誰がまぬがれたか、ということのみをみても、そこには矛盾があった。おそらく赤井にも異議があったにちがいない。占領軍内部でも赤井を識るものの中で助命運動をする動きがあったようである。しかし、赤井はあえて異議を申立てず、いさぎよく教職から去った」。^{〔※8〕}

彼の良心は自分の過去をいつわることができなかったのである。▶▶詳しくは本誌P.35参照

ある卒業生の場合——『私は貝になりたい あるBC級戦犯の叫び』

赤井の教職追放処分と同じ時期に行われた東京裁判は、ある卒業生の人生にも大きな影響を与えた。戦争のもたらした一つの事例として記録しておく。

〔※6〕 中野光「国際的視点からみた日本の学校改革」『学校改造の史的原像—「大正自由教育」の系譜をたどって—』（黎明書房、2008年）

〔※7〕 明治天皇の誕生日で1927年（昭和2）制定、1948年（昭和23）廃止。

〔※8〕 「教育者としての赤井米吉」赤井米吉『愛と理性の教育』（平凡社、1964年）所収

戦後まもなく行われた極東国際軍事裁判（東京裁判）でBC級戦犯として死刑判決を受けた人は千人以上いた。その中の一人に明星学園の卒業生である加藤哲太郎氏がいた。彼が発した「わたしは貝になりたい」という言葉は、「戦争犯罪人」とされた死刑囚の心情を伝えるものとして映画やTVで話題となった。「私はもう二度と人間には生まれてきたくない。どうしても生まれ変わらなければいけないのなら、深い海の底で戦争も兵隊も無い、家族を心配することもない、貝になりたい。」という言葉は、戦争に駆り出され、戦犯として死刑を宣告されるという戦争の理不尽さを端的に伝えた。

哲太郎氏は大正の民衆芸術運動の指導者・加藤一夫氏の長男で、創立して間もない明星学園小学校に1925年（大正14）に転入、明星学園第2回目の卒業生である。1942年（昭和17）、語学力を買われて、東京捕虜収容所新潟第5分所の所長を務めた。この収容所で彼は外国人俘虜の待遇改善に取り組んだ。終戦間近、脱走したアメリカ人俘虜が殺害されるという事件が起こった。自分がやったのではないにもかかわらず「罪は自分一人が引き受ける」として逮捕され、長女が生まれたその日に死刑を宣告された。

哲太郎氏の妹・不二子さんはすぐに助命嘆願運動を始めた。この嘆願運動には明星学園の同窓生・恩師も協力した。明星学園創立同人の照井猪一郎・げん両先生が書いた嘆願書の控えが学園史資料として保存されている。嘆願書は連合国軍最高司令官マッカーサー元帥宛に書かれており、明星学園で学ぶ哲太郎の明朗で心優しく、正義感にあふれた様子が綴られている。げん先生は「あの子は絶対人の道に外れることはしない」という確信のもとに書いている。不二子さんは当時収容所にいた外国人俘虜から「所長は俘虜を殺してはいない。命令してもいない」という証言を受け、マッカーサーへの直訴状を作り、直接手渡した。その結果、1949年5月16日、異例の再審が認められた。再審の結果は終身刑だったが、即日禁固30年に減刑、1958年4月には残りの刑を免除され巣鴨拘置所から釈放された。

哲太郎氏は戦争の悲劇が二度と起きないように、服役中からペンネームで執筆活動を開始していた。遺言の形を借りて執筆した『狂える戦犯死刑囚』の中で「わたしは貝になりたい」という言葉を残した。自由の背後には責任がある。困ったことは人のせいにしてしまうことの多い時代、哲太郎氏は自分の責任をしっかりと果たした人であった。

教育基本法の制定

政府は、アメリカ教育使節団に協力するために組織された日本教育家委員会を、1946年8月、教育刷新委員会へ改組し（委員長安倍能成^{よししげ}。1947年11月から南原繁）、教育改革を進めさせた。教育刷新委員会のメンバーは、日本教育家委員会の委員だった人のほかに、各界で活躍する知識人をも加えていたが、その主流は自由主義的知識人であった。教育刷新委員会は、精力的に活動をつづけ、重要な改革提案を何回も行った。これらの改革提案にもとづいて、教育基本法や学校教育法などを中心とする教育関係法が整備された。

1947年3月に公布された教育基本法は、国の教育に関する基本的な理念と原則とを、戦前のように天皇の名において詔勅の形式によって確定するのではなく、国民の代表によって構成される国会において法律として定められた。また、法律の形式としては異例の前文を置き、あえて日本国憲法の理念を踏まえて教育の理念を宣言した。「異例」の前文を掲載しておく。

われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。

われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。

ここに日本国憲法の精神に則り、教育の目的を明示して、新しい日本の教育の基本を確立するため、この法律を制定する。

教育基本法が「占領下」という特殊な状況で制定されたことから、自主制定性に疑問をはさむ意見がある。しかし、それは妥当な見解とはいえない。立法を推進した田中耕太郎文相も、貴族院議員として憲法改正草案の審議に参画し教育刷新委員会の副委員長として尽力した南原繁も、教育基本法制定の過程に大きく貢献している。また、GHQの方針の伝達や文部省への指導・助言を行ったCIE（民間情報教育局）は、男女共学規定の成立などに積極的な役割をはたしたが、総じてそれは部分的であり、結果として文部省の教育基本法構想や教育刷新委員会の決定した大綱の枠を出るものではなかったといわれる。

6・3・3制のスタート

教育基本法の原則を具体化するために、基本法と同じ1947年（昭和22）3月、学校教育法が公布された。この法律によって、6・3・3・4の新学制が成立した。これが一般的に「6・3・3制」や「6・3制」と呼ばれ、それ以前の学校制度を「旧制」、以後を「新制」と呼んでいる。

新教育制度は公布されたが、経済的裏付けはまったく見通しがなかった。とくに大都市では、戦争によって学校施設が破壊され、焼失していた。新制中学校は新規につくらねばならない。文部省の予算請求は大幅に削られ、都道府県、市町村の財政負担は急増した。当初から懸念されたとおり、計画はにっちもさっちも行かず、いったんは6・3制実施の延期が濃厚となった。

教育刷新委員会は、GHQの承認をとりつけ、「六三義務制度実施断行に関する声明」（1947年2月20日）を発し、祖国再建のため万難を排して6・3制を実現させるよう政府と国民に強く要望した。政府もついに2月26日、新学制実施を最終的に決定した。この決定が、新年度開始の4月1日を目前にした、2月26日であったことに注意したい。

こうして、どうにか6・3・3制はスタートしたものの、新教育とは名ばかりで、「青空教室」や2部授業、3部授業が常態であった。校舎建築が間に合わなかった多くの新制中学校では、小学校に間借りして、机や椅子を自宅から運んだり、一つの机を3人で使ったり、二つの椅子の間に板を渡して腰掛けるなどの工夫をした。

いっぽう、新制高等学校は翌1948（昭和23）年度に発足した。高等学校は旧中学校の施設を活用し、教職員人事を改編して対応したが、新制高等学校設置にあたっては学区制、男女共学、総合制の3原則が求められた。この3原則にもとづいて旧制中学校（男子校）と旧制高等女学校の統廃合も行われたが、地方によっては若干の混乱が生じた。

私立の高等学校は3原則に拘束されないため、男女別の学校が少なかった。中学校を併設して6年間の一貫教育を行う学校も多かった。

上記のことは6・3・3制スタート時の一般的な状況である。明星学園の場合については後述する。

2 終戦直後の明星学園

(1) その頃 明星学園では

天皇がラジオを通じて戦争終結を告げた日から5日後の8月20日、初等部では2学期の授業が開始された。しかし、空襲で焼け出されたり、通学が困難だったり、地方に疎開している者もあったりで、欠席者が目立った。その日、明日21日午後1時から父母総会を開催し、「時局に対する学校の見解と教育の将来について」お話ししたいというお知らせを出した。

翌21日、父母総会が開催されたが、あまりにも急なことで出席できない父母が多かった。出席した父母も、学校側の決意と真摯な取り組みを聞いて、ひとまず安心はしたものの、これからの日本がどうなっていくのか、不安を隠すことはできなかった。

学校にも、家庭にも、いますぐ取り組まなければならない仕事如山積していた。それで学校は月末まで休業することにした。

2日後の8月23日、初等部の教師・原田満寿郎は、学校に行ってみてびっくりした。裏門から初等部の職員室へ行く途中に井戸がある。その井戸端で、7・8人の兵士が炊事の支度で動き回っていた。原田はわが眼を疑い、まわりを見回した。ここはまぎれもなく、初等部にちがいがなかった。

各教室と講堂には兵士たちがたむろしていた。グラウンドの西南隅に、竹棹と藁縄でつくられた1坪ほどの立方体の空間があり、その中に一人の兵士が立ち、外では銃を持った二人の兵士が監視していた。それも初めて見る光景であった。

原田は近くに住む照井部長宅に行った。聞けば、昨日の午後6時頃、陸軍見習士官らしい者4名が照井部長宅に来て、厚木部隊130名の宿舎として当分のあいだ校舎を借用したいと言う。隣の千代田光学の寮にも分宿するということで、承知したのだということであった。原田は、近日中に連合軍の先遣部隊が厚木に進駐するというので、急遽、厚木とその周辺の部隊の撤収が命じられたためだろうと思った。

グラウンドの隅の異様な光景は、昨夜、講堂に宿泊した一兵士の失火で天井の一部を焦がしたため、罰として仮設の重営倉（罪を犯した兵士を拘禁する施設）に入れられていたものであった。

この部隊が学園に搬入した物資の主なものは、ガソリンのドラム缶3本、味噌、メリケン粉、大豆と数百枚の軍用毛布であった。^(※9)

音楽科と事務を兼任していた照井げん教諭がつけていた初等部の『学校日誌』には、つぎのように書かれている。

- 8. 31（金）部隊、漸く引上げた。
- 9. 1（土）部隊引上げたあとが、ひどくよごれたので、大掃除す。
- 9. 2（日）日曜日だが昨日に引きつづいて大掃除を行う。
- 9. 3（月）兵隊の教室あらしには、驚くの外なし。敗戦の原因又ここにあり。

ちなみに、初等部で本格的な授業が始まったのは、翌4日からであった。3日後の9月7日、照井猪一郎は、初等部父母につぎのようなお知らせを出して、父母たちの奮起をうながした。

（※9） 原田満寿郎「明星学園で一戦時体験の断片」『いま語り伝えたいこと―三鷹戦時下の体験』（三鷹市、1986年3月）

お知らせ

昭和20年9月7日 明星学園

今回政府が議会に於て敗戦への歩みを率直大胆に発表されたのを聞いて、国民の誰もが今更のように愕然とし、呆然とし、さらに啞然としたに違いありません。

下世話にいう「知らぬが仏」で、本土決戦で最後の必勝を信じていた昨日の我々を思えば冷汗背に霑うを禁じ得ません。

同時に無条件降伏の実に余儀なき措置であったことを何人も納得したと存じます。しかし覆水は最早盆にはかえりません。徒らに過去を呪ったり現在の屈辱感に憤慨したりしている時ではありません。

大詔の御喚発とともに干戈は既に収まりました。丸腰となった我々は、大国民の名誉にかけて国際正義の旗じるしの下に、武器なき熾烈な文化戦に勝ち抜かねばなりません。よし行く手は累々たる荆の道であろうと、三千年の伝統に気負う我等の彼岸には、新生の大光明が燦としてその到達を待っております。堪え難き屈従と痛手の中から立上がった我々の努力が大きければ大きい程、それへの苦難の道程が短縮されるのであります。

敵来らば一億特攻の体当たりというあの闘魂を転用して、必死の精魂を日本再建の一本に打込みましょう。かくして万一私達一代で未完のものとしても、後に続くこの子供達、その孫達が継続して、かつての皇国に幾十倍した躍進を完成することを確く信じます。

これがためには私達はより速かに私達のかつての過誤と失敗を精算し、是正し、盤石の礎を固めて、以後を子孫に俟たねばなりません。

この負荷の大任は、一に教育の力によって育成せられねばなりません。教育こそは更生日本の聖業であり、救国救民の大使命であります。

師たる者、父たる者、母たる者、兄たる者、姉たる者、よろしく思いをここにいたし、相寄り相助けてこの大任を果すことこそ、皇国の将来をして世界に輝く金字塔を建てしむる所以であります。

いささか学校当局の所感を述べて各位の奮起と協力を求める次第であります。(※10)

(2) お知らせに見る終戦直後の明星学園小学校

終戦直後、日本社会は極度の食糧不足という問題を抱えていた。学校では保護者の協力のもと、食料を調達し、配給するというのを頻繁に行っていた。取り扱った品は、乾燥リンゴの粉末、リンゴジュース、昆布、うどん粉、スルメ、食用油などであった。お弁当を持ってくるのできない子どもたちもいて、授業の打ち切りもやむを得ない状況であった。学用品や靴に至るまで学校が取り扱う必要があった。そのなかでも、教師たちは、安い給料で、懸命に、子どもたちの教育にあたった。学力不足の子への補習、川での総合学習、校外に出たの見学行事も行われた。

前項にもあるように、学校から出されたお知らせは、当時の日本国民が置かれていた状況の厳しさと、そのなかで教育・学園運営をすすめるなければならない苦勞と決意が表れている。

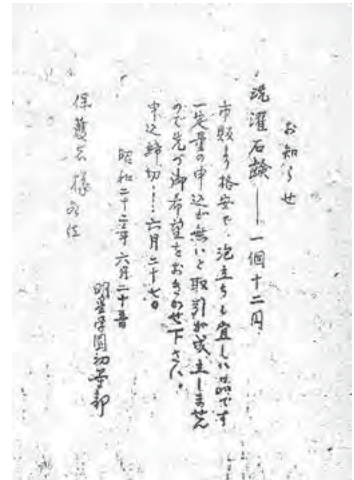
1946年(昭和21)4月17日 教科書及び学用品

教科書および学用品について

教科書の一部が配給されましたが、16頁分を1枚刷りにしたもので、1種が50何回かに追加されて1冊を完成するのでせうが、仮に読本1冊分だけでも150頁として4円から5円ちかい定価となり、各科がそろったら大変高いものになるわけです。そのくせ色彩もなく紙質も粗悪でよほど大切にしないと使用にたえません。だんだん綴じこんでいくように表紙でも工夫して気持ちのいいものにしてやってくださいますよう。

〔※10〕『赤井・照井両先生 生誕百年誌』(1988年)所収

もとは日本一やすいものは児童の教科書でしたが、これでは日本一高いものになってしまいました。教科書がこんなですから、学用品に至っては驚くべきもので、クレヨン 12 色入 12 円、ケシゴムが 3 円、限定品の雑記帳 40 枚綴り紙質の薄いものが 2 円 50 銭など法外の値段です。雑記帳などはザラ紙を切って綴じるなり、使い余りの古帳面なり何でもかまいません。間に合わせてください。今までのように学校が一手に買い入れて、使用させるなどはとてもできそうにもありません。ただし、コンパス、三角定規、分度器、そろばん、ルーペ、ものさし、クレヨンこれらの他高価なものは一人一人買い整えては負担が大変ですから、100 人分なり 150 人分なりを学校にそなえつけて、共同で使用させるようにいたしております。はっきりとした見通しはつきませんが、差し当たりこうした教科書代・学用品代として全学期児童 1 名 10 円お預かりしてこれに当てます。18 日にお納めください。後略…



1946 年（昭和 21）5 月 25 日 食糧事情困難深刻化

食糧事情困難の度が次第に深刻味を加えてまいりました。お子様のお弁当についてもご苦心の色が濃厚に思われます。…中略…

学校でもこの際、児童の教育はいかに対応し臨機に善処すべきかについていろいろと考慮を重ねてまいりましたが、こと食糧に関する限り教育の力を持って直接打開する方法とはあり得ません。唯消極的ながらいいささかにも家庭における食糧事情を緩和し得る方法ありとしたら、それはどうしたら適切であるかをお話したいと存じます。

来る 27 日（月曜）午後 1 時父兄会を開催しますから漏れなくご参集願ひあげます。

この話し合いの結果、10 日間試験的に 11 時 15 分にて授業を打ち切り、昼食を家でとるという、午前中だけの授業とした。1 か月後の 7 月、再度の希望調査でも、保護者の 72% 近くが、引き続き午前授業を希望した。5 月には、学園が甘藷粉などの配給品を販売している。

1946 年（昭和 21）5 月 28 日

- 一、一級品甘藷粉 1 貫目 130 円
- 二、大麦の胚芽粉 1 貫目 120 円 甘み強くこのままうどん粉の代用になり栄養価大
- 三、ドン栗粉 1 貫目 60 円 30 日に限りお申し込みを受けます。代金は現金引換えのこと。

こうした状況でも、少しでも子どもたちが、いきいきと学べる場をつくろうと、遠足を計画した。

1946 年（昭和 21）11 月 多摩川強歩行

- 一、来る 21 日（土曜日）、下記条項に基づき多摩川往復の強歩訓練をいたします。空襲が激しくなってきたというもの、子どもたちは家と教室に軟禁同様の生活を強いられてまいりました。

終戦となっても、食事情の不如意や交通機関の不備と混乱などのために、せっかく解放



小学校の遠足

された自由な生活もこれを享受する術なく、初等部伝統の体位向上施設ももち腐れのまま、脾肉を嘆じつつ今日に至りました。

せめて足のみに頼れる地点までも、久しぶりに子どもたちを連れ出し、心行くばかり実り豊かな大武蔵野の秋の景観を満喫させたいものです。…中略…

＊目 的 武蔵野および玉川を主題とした地理学的臨地学習と、心身の鍛錬

＊コース 学校より新川、野崎、大沢、車返を経て、京王閣下の多摩川原に至る約 8km…中略…

二、運動靴

今回児童 1 名 1 足宛、運動靴を配給します。

価格はこれまでに比して 10 倍以上で、一足 15 円以下、各文数によりそれぞれ差があります。

ただし、市販に比して問題にならぬ廉価で、しかも純綿良質のゴム底です。後略…

1946 年（昭和 21）11 月 教員の待遇

時局下教育の危機はまず教職員の待遇問題にかかっていることは、各方面の与論に徴してすでにご承知のことと存じます。

学園においても、これまで皆様のご配慮のもとに不十分ながらも教職員生活を負担してまいりましたが、元より一般公務員より比較すべくもない薄遇で、昨今の高物価内にあってはもはや破綻の危機に瀕している実情であります。

就きましては、来年 3 月まで 5 か月間の臨時措置として、三部とも従来の後援費を 30 円に増額し、本 11 月より月謝 20 円共、都合児童一人当たり 50 円づつ御収め頂くことによってこの窮境を切り抜きたいと存じます。

ただし、それとても教員一人宛にすればいくばくの増給ともならず、結局はやや世間の学校は並みに近づく程度の待遇予算が計上し得るくらいのものでございます。もとより優遇などいふ筋合にはまいりませんが、現在の窮状を緩和する援助となることは申すまでもありません。切り詰められたご予算の中、これだけの控除は容易ならぬことは万々お察し申し上げますが、こと教育の問題にかかっております。なにとぞ職員とともにその苦をおわち下さらんことを重ねてお願い申し上げます。

明星学園長 赤井 米吉

学園内での「呼び方」の変遷

旧 制	明星学園小学校（1924 年） ★通称＝小学部	初等部（1941 年）	
	明星学園中学校（1928 年） ★通称＝中学部		
	明星学園高等女学校（1928 年） ★通称＝女学部		
新 制	明星学園小学校（1945 年～） ※ 4・4・4 制	初等部（1966 年～） ※ 4・4・4 制	小学校（1974 年～）
	明星学園中学校（1947 年～） ※ 4・4・4 制	中等部（1966 年～） ※ 4・4・4 制	中学校（1974 年～）
	明星学園高等学校（1948 年～） ※ 4・4・4 制	高等部（1966 年～） ※ 4・4・4 制	高等学校（1974 年～）

(3) 卒業生の体験談

戦後間もない時期に小学生だった出口一彦氏の寄稿文を『明星の年輪—明星学園90年のあゆみ』から転載する。

私の小学校時代——出口一彦（24回生・前学園理事長）

私の小学校入学は昭和20年、敗戦という節目の年に当たっている。4月初めの入学式の当日に、急遽家族疎開に旅立つことになり、式には出席していない。東京の夜空が真っ赤に染まった3月10日の下町の大空襲をはじめ、連日の米軍による無差別空爆が三多摩まで迫ってきたことで、家族のギリギリの判断であったのだろう。8月15日の敗戦は北海道の僻地で迎え、ようやく11月に帰京し編入させてもらった。その時迎えて下さったのが、この間学園を守りぬいた照井先生ご夫妻をはじめとする諸先生であり、担任は慈愛あふれる照井げん先生で、50人を超える生徒を抱えるクラスの一員となった。木造の小さな校舎は幸い焼け残っており、建学20年目の由緒あるものであった。

それから、先生方も次々に復員されたり新たに加わったりされたのだろう、2年時、3年時と小刻みに担任の先生が変わり、ようやく4年時から3年間、寒川道夫先生にじっくり担任していただくことになった。

寒川先生は昭和23年4月、明星学園の教師となった。故郷新潟の小学校で大関松三郎を見出すなど児童詩、つづり方教育の実践はもとより、戦時中は会社勤めの経験をも有する、38歳にして多彩なキャリアーの先生であった。

学園の創立精神とその時迎え入れた校長照井先生の人格に引かれ、加えて新教育にそれまで情熱を注いでこられた赤井先生の著述と実践に感銘を受け、明星での教師生活を始められることになった。その最初の教え子であった私を含む50人にとって何物にも代えがたい3年間であった。

今思い返して申し上げるならば、寒川先生の明星での教育の柱は、一つに表現力を中心とする国語力の充実であり、もう一つは集団生活の中での人としての生き方の問題であったのではないと思う。作詩、作文の不出来な私に学級新聞の下働きの仕事をさせてくださったのは印象的であった。休みの日に何人か、新築間もない山小屋風のご自宅に呼ばれ、与えられたマスの中に先生の書かれた文章を、先生の特徴ある字体をも懸命に真似てガリ版で書き込んでいく。偶に添削を受けた自分の書いた小さな記事を載せてもらった時の興奮は今でも忘れられない。50人の生徒一人一人をその力量、特徴に応じて何とか言語力とそれを通じての考える力を養わせようとして下さったのだと思う。

寒川先生から薦められた吉野源三郎氏の『君たちはどう生きるか』は、今も私の座右の書となっている。中学生の主人公コペル君が友人を裏切り自責の念に駆られる有名な場面は忘れがたく、今もってつきつけられるものがある。卒業して後に寒川先生をご存じの何人かに、私が不肖の教え子であることを話した時「それは君、大変な財産だよ」と言われたことが多々あった。

当時校長であられた照井先生から直接教えを受けたことはなかったが、学園の行事には欠かさず参加され、楽しい高尾・御岳・丹沢への山行や、千倉での臨海学校ではいつも先頭に立って見守って下さった。先生の温顔は今でも目に浮かぶ。

敗戦前の苦しい時期、創立同人である赤井・照井・上田先生を支えた同志の橘先生、原田先生等をはじめ、戦後すぐに明星教育に参加された諸先生方は、結束を固め新しい時代に相応しい明星教育を進めていく意気に燃えておられた時代ではなかったかと思われる。

寒川先生はその時期から20余年学園に在籍され、多くの教え子を送りだされたが、晩年は校長等の管理職としての仕事に忙殺されることになる。先生が学園を辞する時の一文を読ませていただくと、建学の同人である照井先生、上田先生がお亡くなりにな



寒川先生とのひととき

なった前後から、学園の規模の拡大とともに新たな教師も加わり、学園の中は教育研究校としての研究が深まる反面、教師間の対立によって大きな混乱を招いた時期でもあった。これがひいては保護者にも動揺を与え、生徒数に影響を及ぼし、財政的にも困難な状態を招いたが、その間校長職を務められた寒川先生の悲痛な訴え、改めて学内で一致協力して明星教育の原点に返れとの主張には胸を打たれる。

創立者亡き後、教育集团としての組織を守っていく難しさのなか、そのような身を削るご苦労があつて今日の学園があることを改めて認識させられる。いずれにしても私の小学校時代は建学の同人の方々の大きなふところに抱かれていた、ある意味で幸せな時代であった。

(4) 新制高等学校の発足

戦後日本の教育改革により、明星学園も 1948 年（昭和 23）4 月 1 日、従来の中学校と高等女学校を統合し、男女共学の新制高等学校として発足した。初代高等学校長・上田八一郎は、この改革の経緯を次のように記述している。

戦後に於ける本学園高校教育の概観——上田 八一郎（1954・昭和 29 年記）

昭和 20 年 8 月 15 日（水）の教務日誌（抄）に次の如く書いてある。「今朝 6 時警戒警報発令、直ちに空襲警報、艦載機 3 面より波状攻撃、延 190 機、8 時解除、報道に曰く『本日正午大詔が煥発されます、天皇陛下御自ら御放送を行われます』……」

かくして正午を境にして旧日本を送り、忍従苦難の新日本を迎えることになった。其の翌日から当時の旧制中学部 3・4・5 年生は工場には出勤せず、家庭にて待機。一方配属将校会議の決議により教練に関する検定原簿、考科調書、考科資料其他兵書一切は焼却することになった。

9 月中旬になっても終戦前から学校に疎開していた三鷹航空は中々撤退せず、従って授業の準備も一向に進捗せず、授業らしき授業を始めることが出来たのは 10 月下旬頃であったと思う。其間体練科に関する改正が行われ、剣道、柔道、弓道其他軍国の遊技は一切中止すべしとの指令が出た。

終戦前一時、中、高女共に 4 年制となったものが、21 年 2 月を迎えて再び 5 年制となり、特に希望する者には 4 年で卒業することを得、という特例が示された。しかもそれは卒業記念写真を撮影した数日後の改正であったので、洵に複雑怪奇な様相を呈したのである。洵に雑然たる学校生活で、1 日として落着かざる状態のうちに従来の修身、歴史、地理の教科書が回収されることになり、職員が附添い、生徒 20 余名に府中町の国民学校に運搬させるということもあった。

とにかくにも、21 年 4 月からは多少落着きを取り戻した形であったが、しかし其の当時の食糧事情は甚だ悪く、午前中で授業を打切った事もあり、教室の窓ガラスの盗難が頻発して、ガラス 1 枚 1 枚にエナメルでマークするといったような洵に陰鬱な状態が続いた。其の当時のガラスが今も可なり残っている。

6・3・3・4 制移行

これよりさき、21 年 3 月、米国教育使節団が来朝し、約 1 か月間日本の教育状況を視察し、日本教育改革の資料として報告書を提供され、それによって所謂 6・3・3・4 制が採択され、当時財政経済が異常な窮境にあったにも拘らず、国際社会に於ける日本の信用回復の契機となることを信じ、新憲法の実施と同時に新学制実施も発足することになったのである。（教育基本法、昭和 22 年 3 月 31 日、学校教育法、同）

この学校改革の基本方針は、従来の誤った過激な国家主義、画一的形式主義の弊を打破し、人間性の開発を目指し、民主的平和的な国家及社会の形成者として真理と正義とを愛し、相互の人格を尊び、勤労と協和とを重んずる心身ともに健康な国民の育成を期す事にあった。

かくして昭和 23 年度から本学園中学校、高等女学校が男女共学の新制高等学校として、発足することになったが、しかし考えて見れば、新学制の基本方針は本学園の創設以来の学園教育方針と何ら変わる

所なく、万事極めてスムーズに移行することが出来たのである。

カリキュラム

このようにしてわが高校の教育を如何に進めて行くべきかに就て、職員一同は相当な時間をかけ、数回の会議を経て出発したのであるが、まず第一に着手せねばならなかったのはカリキュラムの問題であった。従来の旧中学校は男生徒ばかりであり、しかも将来殆んど全部が上級学校への進学希望者のみであったので、カリキュラムも極めて簡単であったが、男女共学の実施と個性伸長のための幅広い科目選択制と、其の運営上の単位

	必修	選択
1年	英語 生物・保健体育 一般社会・解析 (1) 国語 (甲)・(乙)	家庭・芸能・その他
2年	英語 保健体育 世界史・幾何 国語 (甲)	家庭・芸能・その他 化学・国語 (乙)
3年	英語 保健体育 日本史 国語 (甲)	家庭・芸能・その他 人文地理・地学 国語 (乙)・物理 解析 (2)

制採用により、従来の学年別固定学級は解体され、教科時間ごとに離合集散する教科別集団や、学校生活の根拠となる HR 集団が編成されることになった。教科学習のほかに特別教育活動が時間割に組込まれ、教科課程は全人的教育のための課程となり、教育課程と呼ばれるようになった。

この教育課程とその運営とは学制改革前のものに比べると極めて大きな変革であって、しかもその変革が実験的研究や準備期間を経ないで急激に行われたわけである。われわれはこの変革に適応するために異常な努力を払ってきたが、大幅の選択制による教養の偏り、狭義の受験準備化の指導、普通課程卒業後就職する者の職業教育をどう行うか、単位失格者の取扱、転校者の取得単位の調整など、多くの面倒な課題は山積したのである。

最近においては現行教育課程の全体に対する再検討が加えられようとしている。更にまた地理歴史教育、道徳教育など輿論としての社会の要望が、いずれも、我国の自立を契機として新たな教育課題として提起されている。

本学園に於てもこの選択制と単位制につき、出発当初に於ては選択制を極めて広範囲に実施して来たが、設備と担当教師の問題で、数次に亘り変更を余儀なくされたが、現在 (29 年度) は次の如き形で実施している。

前にも述べたように、個々の生徒に自由に科目を選択させることは運営を至極困難にならしめるので、最近では将来の進路に応じた科目選択の組み合わせ (コース) の例を示し、示されたコースのどれかを選択させる、所謂コース制を採用しているが (全国でも約 3 割の高校は本校と同じである)、尚選択制の教育課程では固定学級は解体すべきだが、管理上の困難から固定学級を作り、これをホームルームとしている。(この形をとるもの全国で約 3 割)

結局、現行教育課程の長所は選択制によって、生徒の個性、能力、将来の進路に即した教育が行われるが、短所としては、①教養が偏る、②安易な教科を選択する、③選択が功利的で友人関係に支配される、④選択能力が不足である、⑤学習集団の構成員が変り教室移動が多いので安心感をもたない、などである。

然しながら、短所と見られる点は学校当局の指導によって漸次改善され得ると考えているので、只今の処、矢張り本校としては選択制を引続き実施せんとするものである。

ガイダンス

選択制の関係上ホームルームが出来ているが、勿論ホームルームの 1 時間や 2 時間では訓育と生活指導が出来るものではない。最近青少年の不良化が特に注目されているが、勿論子供の先天的素質や身心の欠陥から由来することもたしかにあるが、終戦後の混乱が未だ癒えず、家庭や社会の悪い環境が青少年の心に大きな影響を与え、素質の弱さや欠陥のある生徒には特にはげしく作用するのが認められる。米国の学者は青少年の犯罪の原因について 70% が家庭の影響と述べている。

ガイダンスは指導することである。但し先頭に立って率いることなく、指揮することでもない。子供に協力してやることである。助力を必要とする個人に自己決定、自己指導が出来るように助力が与えられることである。ガイダンスの領域を考えると、①学業及進学指導、②精神的健康の指導、③余暇指導、身体・健康指導、④社会性指導、其他色々あるであろうが、結局は個別指導がガイダンスの中心であるし、ガイダンスは先ず教師自らが健全な精神を持つことから始まる。骨の折れる、恐ろしく難事業と思われるが、本校では教職員一致協力、漸次ガイダンス事業の効果をあげつつある事は洵に喜ばしい。

男女共学

本学園では終戦後直ちに男女共学制を採用した。日本では明治24年に男女別学が規定されたが、思えばもう65年前の事である。現在生きている大部分の日本人は誰も彼もが男女別学の教育を受けて来たものばかりであるだけ、最近に於ける共学の実施は期待も持たれているが、一面相当の不安も持たれている事は事実である。然し現在に於ては、世間で心配されたようなものでなく、案ずるよりは生むが易し、と見ている。男女共学の目的は、将来男女の協力によってすぐれた社会を建設するための訓練にある。

即ち、女子あつての男子、男子あつての女子として、御互に深い理解の上に各々が個性的にその性情を充分発達せしめ、御互に社会の完全な一員となる事を理想としている。共学の最後の目的は、社会生活に於ける一夫一婦制の確立への準備でなければならぬ、と信ずるものであり、その理想に向って努力を続けねばならぬと思う。

従来学校に於ては、男女交際は厳禁されていた。そしてその禁制を破ることは罪惡とされていた。其の禁が解かれたために、世の中には漠然たる不安が起つて来たのである。勿論節度を失うかに見える場合がないとは云えないが、共学に経験なき者の取越苦労も手伝い、父兄も教師も戸惑っているのが実情で、生徒の側から見れば案外笑止の沙汰かもしれない。本学園は従来の中学校・女学校を共学の中学校・高等学校に編成したのであるが、男女共学は異性を正しく知性的に理解する事によって、各々の長短と任務を認識するようになり、同一家族内の兄弟姉妹関係に見られるように、終には御互に関心を持たないようにはならない。

しかし野球にルールがあるように、男女の交際に於てもルールがなければならぬ、即ちエチケットの指導が教育的になされねばならない。其の指導に就て考へべきは、

- ① 男女2人だけの交際は相互の家庭の了解がなければならぬこと。
- ② 異性を正しく知性的に理解させることが凡ての困難な問題の発生を防ぐ鍵となること。

男女共学が最も其の効力を發揮するのは自治会（生徒会）活動である。男女が同じものであると同時に異なったものであることの理解と、其の故に協力が必要である事を実際に学び、男女の共同生活を建設する目標に向って進ましめる事が出来る。学校新聞、雑誌編輯、其他劇、音楽、体育会、文化祭等に於ける男女協力の機会を出来る限り多く与える事にある。

かくして、男子の女子に対する偏見、つまらない自己優越感と女性蔑視の感情は改まりつつある。男性が女性に対する尊敬もふえ、男女協力の社会建設が彼等の深い理解によって営まれる希望が持たれる。

性教育に就ては簡単に実施は出来ない。しかしそれに当る教師の養成、再教育は英語や国語のそれにくらべて容易ならざるものがある。其の教師の人格、識見、年齢などを考えると恐ろしく困難な問題である。校内に於ける生徒の信望最も篤い教師でなくてはならぬ。更に社会科や生物や家政などの課程をも修得した人物でなくてはならず、更に医学にも一通り通じていなくてはならぬ。

要するに性教育は、家庭に於ける賢明なる両親の手で行われなくてはならぬ。学校に於ける性教育は単に生殖の事実を教うるものではなく、正しい性的行動をするように知育、情育、意育を施すものであるとするのが正しい考え方であると信ずる。結婚前の問題の多くは、知識階級よりも所謂労働者階級に多いと云われるが、即ち富の差よりも教育の差であつて、学生生活の長き者は交友範囲もひろく、知性的に異性を見る機会に恵まれているからではないか。この意味に於ても高等学校に於ける男女共学は意味深いものがあると云わなければならぬ。

高等学校の教育課程改訂案に就て

最近現行教育課程の全体に対する再検討が加えられようとしている。更にまた地理歴史教育・道徳教育など輿論としての社会の要望が、いずれも我国の自立を契機として新たな教育課題として提起されている。文部省の教育課程審議会の発表した高校教科内容の大幅の改訂案に対しては、各方面から反論を呼んでいるが、実際は高等学校のみ切り離して考えるべきものであろうか。小中はもとより大学も連関して考えねばならぬ大問題と思う。

今回発表された内容を見ると、必修科目をふやすことによって選択制度が大幅に制限されたこと、コース制を設けることによって文科系、理科系の進学コースと職業コースが分けられること、社会科では一般社会時事問題がなくなって、倫理などを加えた新科目がおかれること、この3点に要約される。しかも文部省ではこの答申に基いて昭和31年度から高校教育の改訂をするという。果してこんなことが出来るだろうか。

第一に、選択科目制は高校生の自主性を尊重する建前から実施されたが、改訂案により必須科目がふやされると、また昔の詰込教育となって生徒の負担が多くなるばかりである。高校教育の目標は国民として誰でもそなえておくべき一般教養を高めるにある。これを文理の両系統に分けることによって、大学への受験地獄を再発する恐れがある。

高校教育が人間完成の教育である本質的な目標を失うことなく、改訂案は更に深く検討されねばならぬことを含め、青年の将来のために、当局はもっと現職教員の批判に耳を傾け、慎重であるべきことを希望するものである。

現行のままで漸次改善の方法を講ずることは出来ないものだろうか。いたずらに朝三暮四や朝四暮三のやり方では、教育者も被教育者も落着を失し、マイナスの結果が得られるに過ぎない。改訂はあく迄も慎重でなければならぬ。〈※11〉

(5) 花ひらく明星祭

創立以来、学園では自然に学びつつ、すぐれた芸術や文化に触れることを大切にし、学んだこと、得たことを自分のものにし、表現するという活動を重視していた。

学芸会・舞踊の会・展覧会・音楽会・体育会・運動会などが一年を通じて行われていたが、アジア太平洋戦争中は、その活動も休止せざるを得なかった。

しかし終戦直後の1945年（昭和20）の冬、第1回文化祭（明星祭）が行われ、音楽とスタンツが発表された。物資はなくなるとも文化活動に対する熱意は並々ならぬものがあり、創意工夫に満ちた心に残る会だったと伝えられている。

「明星祭」という名の名付け親は、末光深海（6回生・当時の教師）と言われている。

その後、「明星祭」は、展覧会・音楽会・演劇会・運動会も加わり、年毎にさまざまな工夫を重ねて多彩に展開された。

終戦直後に行われた文化祭（明星祭）の様子を、上田八郎高等学校長と、長男で理科教諭の上田八郎（7回生）が、それぞれの記憶をたよりに書いているので、一部紹介する。

▶▶詳しくは60年史〈※12〉P.139～143参照

明星祭の生い立ち——上田 八郎（7回生・高校理科教諭）

長い戦争の疲労と敗戦の渾沌状態の中であって、豚の飼料よりも悪い食料、ボロボロの衣服、焼けト

〈※11〉昭和29年記『上田八郎先生 生誕百年誌』（1991年）所収

〈※12〉『明星の年輪—明星学園60年のあゆみ』＝「60年史」と略す（以下同様）

タンに囲まれた住居、夜とはいえば、停電ばかりの文字通り暗い生活の中にあっても“平和”という明るい灯に、人間らしい人間としての生活が出来るという希望と期待に人々が燃えていた時に、“明星祭”が生まれました。

カーキ色の作業服を先生も生徒も着て、栄養失調の蒼黒い顔をしてボサボサしていた時でしたので、ひとつ景気づけに何かやろう、それには音楽と寸劇の会でもしたら、という事になったわけです。初めは文化祭とも考えたのですが、内容が文化的より明星的の方がピッタリするので“明星祭”と名づけたわけです。今では“祭”という字に対して何の感慨も浮びませんが、長い戦争の間、祭りといえば武運長久・必勝祈願しかなかったあとですから、ことさら魅力的なあたたかな感じがしたものでした。

第1回は音楽とスタンツだけでしたが、第2回目からは、展覧会と本格的な演劇が加わり、その後、運動会も含めて明星祭と呼ぶようになりました。…中略…

この第1回の明星祭を契機として、明星の文化活動はもともと下地が充分ありましたので、ものすごい勢いで立ちなりました。なかでも演劇とコーラスの復活はすばらしいものでした。もっともこれ等明星の伝統は戦争中工場に動員されながらも続いていましたが、本当に当時の先輩諸兄姉の文化活動に対する熱意はすごいものでした。…中略…

明星祭は、明星で学んだ事、得たことの収穫祭とも言われています。そして明星祭はその始めから生徒諸君の創意と工夫と活動によって行われています。このよき伝統を残されん事を願います。〈※13〉



創立 30 周年記念演劇「樹氷」1954 年

明星祭を回顧する ― 上田 八一郎（高等学校長）

終戦後、文化祭と言う名で、どこかの学校も色々の内容を含む行事を実施する様になった。そしてその学校に於ける教科並に自治会（または生徒会）活動の総合的発表と、全校生徒の協力・親和を発揮する機会としたのである。わが学園も上記を目標として文化祭を行って来た。ところが昭和 25 年頃から文化祭とはいわずに明星祭という名を用いる事になった。数日間にわたって行われる明星祭を、その内容に従って「運動の日」「音楽の日」「演劇の日」などと呼んで華やかに展開されるようになった。矢張り 25 年頃頃からかと思うが、小の運動場が狭くなったので、小中と別れて高だけ高の校庭を使って「運動の日」を持つ事になった。

…中略… 明星祭は学園主催の行事であるが、高校では自治会の自主活動に一任している部分が多い。従って生徒特に役員に選ばれた者の努力は並大抵のものではない。また一方、陰の指導者、先生方の心労も言語に絶するものがある。其上仕事によっては、小、中、高各部の連絡会議も必要となって来るので、先生、生徒の苦労もまた並大抵ではない。しかし、小さい子供であれば先生の指揮で動かねばならぬ部分が多いが、準備から当日の進行に至るまで一切合切自分等の手で運ばねばならぬ高校生はまことに尊い経験を持つわけで、将来いつ迄も懐しい思い出となって残るであろう。各部が電燈の下で遅く迄工夫し研究製作している姿はまことに美しい。此等頼もしき若人達と乙女達に告げる。古人曰く「青年時代を失う者は人生を失う」と。

今年は各部に新校舎が出来、運動場もひろげられた。そして今年の明星祭行事は一遍に面目を一新したように思う。2、3 年後の明星祭は体育会も劇も音楽会も展覧会もどこまで進展して行くだらうか。〈※13〉

1948 年、新制高等学校が発足した年の 10 月に、文化祭は明星祭として本格的に復活する。

小・中・高一体で約 1 週間にわたり開催され、仮装行列もこの年より明星祭の一つの行事とし

〈※13〉 高等学校自治会機関紙『星雲時代』Vol.1-No.6（1956 年 11 月 18 日）

て行われるようになった。

さらに1950年以降は、体育会、展覧会、音楽会なども明星祭の一貫として毎年合同で実施され、毎週土日ごと1か月以上の期間を費やして行われていた。

1960年「明星学園教職員一同」による「父母各位 来賓各位」への招待状には、つぎのように記されている。

明星祭は学園の重大な、そしてもっとも待たれる年中行事の一つであります。学園全般にわたる教育活動の報告祭であり、児童生徒の学習収穫展示祭でもあるのです。

こうした機会には、いつもあえて児童生徒と限らず、およそ学園教育に関係深い家庭はもちろん、各方面の個人と言わず団体と言わず全部この祭典に参加していただくことを原則としております。祭典という言葉の意味もそこにあります。後略…(※14)

右の明星祭日程表にあるとおり、行事は10月9日(日)から11月20日(日)まで、ほとんどの日曜日に開催されていた。さらに年度末の翌年3月には低学年部、中学年部の演劇を行うという熱の入れ様であった。

しかし翌1961年、公開研究会へ向けた小・中・高、全園の教師による合宿研究会が行われ、教育の基本的な案件が話し合われた。▶▶詳しくは本誌P.174参照 長年続いていた恒例の明星祭の教育的意義や、その方法についても再検討が行われ、その結果、以下のような結論に達した。

- ・低・中学年部は、従来のような規模での明星祭行事は廃止する
- ・高学年部は、従来どおり自治会活動としての「明星祭」を充分生かし、今後も毎年秋に実施する

こうして、小・中・高一体で行われていた「明星祭」は、学園全体の祭典としての役割に終わりをつけ、1962年以降は、高校における自治会活動の総合的発表の場として行われるようになる。

時を経て、その形式や内容は変化・発展しながら、明星生の相違・工夫と活動をよりどころとする「明星祭」の伝統は、今もなおひき継がれている。

1960年度 明星祭日程表

- ☆10月9日(日) 低学年・中学生 体育会。(雨天順延)
- ☆10月16日(日) 高学年 体育会(雨天順延)
- ☆10月22日(土) 高学年仮装大会
- ☆10月30日(日) 展覧会 演劇会
 - 低学年校舎 — 低・中・P.T.A・幼稚園(招待)
 - 高学年校舎 — 高学年展覧会。P.T.A 展覧会
 - 本校講堂 — 低・中・高 スライド 8mm 高学年演劇
 - 明星台幼稚園 — 都下幼稚園(招待)
- ☆11月20日(日) 音楽会
 - 本校講堂 — 低・中・高音楽会
 - 低学年、中学年の演劇会は明年3月に行います。

〈※14〉 明星祭招待状『明星の年輪—明星学園60年のあゆみ』P.139～140

3 小・中・高一貫教育への始動

(1) 学園一体化への志向

新体制の発足

敗戦の翌年、赤井米吉理事長・学園長が教職追放によって学園を退き、1947年（昭和22）、理事のなかから市村今朝蔵氏が推されて理事長に就任した。市村氏は明星の元保護者で、学園寮の建設用地として軽井沢の土地を寄付された功労者であった。▶▶詳しくは本誌P.93参照 戦後も大山郁夫の後をうけて早稲田大学で政治学を講じながら、明星学園の経営に尽力されていた。

学園長は置かず、照井猪一郎が小学校と新制中学校の校長、上田八一郎が新制高等学校の校長に就任することになった。

1947年（昭和22）に新制中学校が発足、翌1948年（昭和23）に新制高等学校が発足して、創立以来の宿願だった男女共学体制はひとまず達成された。

その年、1948年の5月、小・中・高全園の職員会議で、明星学園の教育方針が新憲法・教育基本法と照合しながら再検討され、創立以来めざしてきた教育理念と基本的に異なるものではないことが確認された。以後、学園全体に関わる重要案件は全園職員会議で討議されるようになった。

一方、全国的に高まった民主化運動を背景に、この年6月、教職員組合が結成され、教職員のほとんどが加入し、中学校の橘正薫^{まさしげ}が委員長に選ばれた。全園職員会議の定例化と教職員組合の発足は、玉川上水をはさんで校地が離れ、日常的な交流が少なかった小・中・高の教職員を結びつける役割をはたすことになる。

また、戦時中は中断していた軽井沢上野原寮、南房総千倉寮を宿舍とする夏季生活が復活し、明星祭も復活して以後盛大に行われることになる。

このような動きのなかで、教職員のあいだに小・中・高一体化の論議が高まり、10月には三部（小・中・高）機構改革準備委員会が発足した。

しかし、この時期の学園は順風満帆というわけではなく、いくつもの喫緊の課題を抱えていた。新制度に対応する施設・設備の補充、老朽校舎の改築の問題。また、公立学校教職員の半分近くか、せいぜい3分の2程度という劣悪な教職員給与の改善、等々。今日とちがい、私立学校に対する国や東京都からの補助はなく、必要とする資金の調達は保護者にお願いするしか途はなかった。

保護者も裕福な家庭ばかりではなかった。いや、それどころか多くの家庭は、敗戦後の深刻な経済情勢のなかで、なんとか家計をやりくりしながら、我が子の教育のために授業料を工面しているというのが実情ではなかったか。

学校日誌の記録によれば、この年の9月、高等学校には生徒や教師の靴の修理のため週3日、靴職人が来校する。10月には高校新校舎のガラス54枚が盗まれる。そういう世相であった。

(2) 『明星 創立25周年記念』の刊行

翌1949年（昭和24）は学園創立25周年の年であった。11月、中学校のクラブのひとつ文芸部と、高等学校の文芸部との共同編集による『明星 創立25周年記念』が刊行された。編集発行者代

表は中川日出男、高等学校3年生（17回生）。編集委員として中川をはじめ高等学校1・2・3年生14名、中学校2・3年生14名の名前が記載されている。

作品は全147篇。小学生の詩・作文・日記、中・高生のエッセイ・詩・短歌・批評が主体で、ほかに卒業生・元教師と現校長が寄稿。さらに、寄稿をお願いしたと思われる父母（保護者）のなかの著名な人たち、たとえば坪田譲治・武者小路実篤・武田祐吉・古谷綱武・松本正雄・片山敏彦・舟木重信・與田準一など各氏の詩文が掲載されている。

巻頭の照井猪一郎小・中学校長の文章は、本誌『明星の年輪』にも一部転載されている「明星誕生ものがたり」の初出全文。また、記念文集に収められた上田八一郎高等学校長の「二十五周年の回顧」は、これも本誌に資料として使われている。

さらに留意すべきは「編集委員一同」の名で書かれた「編集を終って」の内容である。

冒頭「われらの明星学園は創立二十五周年の日を迎えた。自由な明星を愛するすべての人々に、この書をおくる。」として、つぎのように述べる。

私たち文芸部が記念誌の計画をはじめたのは、夏休み前の6月だったから、本書が出来上がるまでに正確に5か月の月日がたった。その間、照井、上田両先生をはじめ編集印刷の方面を指導された橘、押川両先生、そのほかの諸先生から有形無形のあたたかい激励と支持とをあたえられた。この記念誌「明星」の一貫したねがいは、初等部、中等部、高等学校の所謂学園三部生徒の友愛と協同とを、ほんとうに現実にかちえようとしたものであったから、生徒作品の選定などの煩雑な仕事の多くを、各部の先生におねがいしなければならなかった。

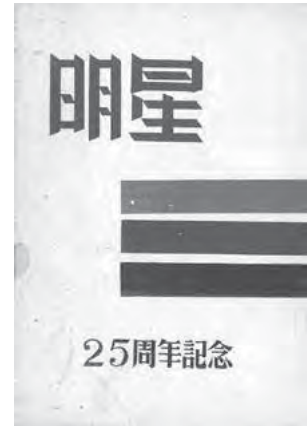
「橘・押川両先生」とは中学校の橘正薫先生と、高等学校の押川昌一先生のこと。ともに国語科で、それぞれの学校の文芸部の指導も担当していた。「両先生」は生徒にも信頼が厚く、教職員間では着実に小・中・高一体化を進めていこうとする運動の中心的人物であった。「編集を終って」の引用をつづける。

この記念誌が、いたずらな追憶のために計画されたものでないのと同じに、私たちも編集の思い出に耽ろうとは思わない。ただ、私たちは知った。考えられた全体の予想を、生きた形にまで作り上げるには、こまかい部分に対する日常の着実な実行がほんとうに大事なのだということを。

全体と部分の関係——それは、未来に対する現実の大切さと云いかえることが出来よう。百頁にみえない「明星」の編集が教えてくれたこのことを、私たちは学友諸君に告げる。

より大きい全体、さらに遥かな未来に向かって、いま明星は出発しようとしている。学園に祝福あれ。私たちは、明星のあらたな未来に向かって、本書をささげる。

いま、この「編集を終って」を読むと、敗戦から4年後のこの時期、学園が「より大きい全体」「さらに遥かな未来」に向かって出発しようとしている息吹が、教職員だけでなく、在校生、少なくとも高校生のあいだにも強く自覚されていたことを教えられる。



創立 25 周年記念誌

(3) 新 PTA の発足

父母にささえられて

1950 年（昭和 25）6 月、市村今朝蔵理事長が大学の講義中に倒れて急逝した。早稲田大学政経学部葬には明星学園からも全教職員が参列した。

市村理事長を失ったことは大きな痛手であったが、翌 1951 年（昭和 26）2 月、元学園保護者の神田五雄^{かずお}氏が後任の理事長に就任された。神田氏は、毎日新聞の主筆という多忙な身でありながら、学園の経営に尽力され、教職員の待遇改善と施設増強が急務であることを父母に訴え、窮状を救ってくださったのである。

全国で新制中学校・高等学校が発足した頃から、私立中・高のなかでは再起不能の学校が続出していた。大学の付属校として吸収された学校もあり、とくに中学校では休校あるいは廃校を余儀なくされたものが数十校に及んだ。

明星学園がきびしい財務状況のなかで存続し得たのは、歴代の理事会・教職員の忍耐や努力でもあるが、それを支え励ましてくださった学園関係者、とくに父母の皆さまのお蔭であることは改めて言うまでもない。

以下、明星学園における父母の貢献のひとつの例証として、PTA の誕生の経緯をたどってみた。

学園創立 3 周年目の 1927 年（昭和 2）、「母の会」が生まれた。それは父母会でも後援会でもなく、母親たちの自主的な会で、学園の援助もするが、自分たちの文化活動をするのが主目的であった。そして、学園が中学校・高等女学校創設の問題に悩んでいたとき、この「母の会」が父親たちを動かして、中・女学校設立の資金づくりを目的とする「明星学園後援会」を発足させたのだった。

その後、戦争中は活動の機能が中断していたが、戦後 2 年目の 1947 年（昭和 22）6 月、「明星学園後援会（第 2 次）」（会長：二村鍾氏）と「母姉の会」（会長：神田亀代枝氏）が結成され、「母の会」は解消した。結成の当初の目的は、当時学園が最も急を要した、新制中学校の 4 教室増築を含む第 1 期事業計画を後援することであった。

2 年後の 1949 年（昭和 24）は創立 25 周年に当たっていた。第 1 期事業計画も一段落し、つぎの第 2 期事業計画に発展する気運も生じたので、「後援会（第 2 次）」と「母姉の会」を一本立てに改組して新組織をつくることに意見一致して、「明星学園父母と教師の会（PTA）」が新たに発足した。「PTA」はもともと 1946 年にアメリカ教育使節団によって導入が提唱され、GHQ（連合国軍総司令部）による指導のもと全国的に組織化されたもので、発足した当初の明星の PTA も外からの貰い物の感をぬぐえなかった。父母と教師の熱意と努力によって、学園にふさわしい組織に改組され、新発足したのは 1952 年（昭和 27）6 月であった。

新会長に就任した高田止戈^{しかお}氏は、新発足に際して、つぎのように述べた。

いうまでもなく学園は、その根本である教育の面に於て特色のある性格のもとに、ゆるぎのない地歩を印していることは疑いのない事実であります。実に将来に向ってこの存在を強固にし、より大いなる発展を期するためには、PTA の側面的な活動を必要とすることは申し上げるまでもないところであります。

最近その必要を痛感する声が父兄並に職員の両面から期せずして高まり始め、今回新たな組織の編成と共に従来の在り方^{いってき}を一擲し、ここに全く改まった精神のもとに新発足をすることになりました。まこ

とに清風颯々の感があります。

学園創立以来の歴史から見ても、父兄と学園側とが緊密に一体をなして今日の成果を遂げた訳で、従ってそこに他の学校には見られない学園独自の性格を形成して来たのであります。今回特に父兄側から積極的な発言が顕著になったことも、言わば本来の姿に還ったものと申すべきでありましょうが、何れにしてもかかる機運に向ったことは御同慶の至りに存じます。後略…(※15)

新発足したPTAでは、Pの側としては小・中・高校の各学級から2名ずつ代議員を選び、その代議員のなかから各学校3名、計9名の常任委員を選んで常任委員会を構成した。高田会長は会報を通じて、PTAの活動の基盤は各学校・各学年・各クラスの父母会であって、常任委員会はその父母会の意見を集約してこれを実行に移す執行機関にすぎないことを強調し、父母会の活性化を呼びかけた。

また、文化部、編集部、厚生部という3つの専門部を設け、各学級から1名ずつ選ばれた部員によって構成した。

文化部は講演会・講習会などの企画、コンサート・観劇会など会員相互の親睦をはかるための仕事を担当した。編集部は会員名簿の作成、会報の編集・発行をおもな仕事とした。会報には学校行事の報告や父母・教職員の投稿も増え、制服賛否の論議や小・中・高の教師と父母の座談会の記録など、多種多様な内容が掲載されていく。厚生部は児童・生徒の厚生、保健、養護の改善を援助したり、文化部とも相談してバザーその他の収益事業を行い、会員の親睦をはかるとともに会の財源を豊かにすることにも努めた。

これらの活動は、その後も時代の変遷とともに修正・改善を加えられながら、継続されていくことになる。▶詳しくは本誌P.60～70、P.367～370、『50年史』P.71～72、P.104～108参照

(4) 学校劇へのとりくみ

明星学園では創立期から演劇活動が盛んで、現在も小学校の学習発表会として続いている。学園創立同人は、子どもたちの成長に対して演劇のもたらす効果が大きく、役立つものとして意義深くとらえていた。学園が創立した時代に学校劇がどのように考えられていたか、明星ではどうだったのかをふり返ってみる。

新教育運動のなかで小原國芳先生が提唱した「学校劇」

世界的な新教育運動が日本でも盛り上がった大正時代、広島高等師範学校附属小学校の教員・小原國芳（後に玉川学園を創立する教育者）は、音楽・朗読・理科・習字などの発表を中心として開かれていた学芸会に、大掛かりな演劇を加えることを提唱する。学校劇（この呼び方も小原による）は演劇活動を通して、子どもたちの集中力・想像力・表現力・感情表現などを育てる。また劇を鑑賞することや、さまざまな配役を演じたり裏方仕事を担うことで、民主的な生き方や人間性、連帯感などが育まれる。小原らの学校劇への取り組みは評判を呼び、またたく間に全国的に広まった。

小原は成城小学校の主事に転任してからも熱心に劇に取り組み、1921年には初めて同校で学校劇が上演されている。同じ年、秋田県師範学校附属小学校の青年教師であった照井猪一郎も、自ら

（※15）高田止戈夫「新発足に際して」『明星学園PTA会報』No.1（1952年6月）

創作した学校劇を県記念会館で発表上演している。

しかし、文部省は学校劇の広がりには反対した。時の文部大臣・岡田良平は1924年に「学校劇禁止令」を出し、学校劇に熱心だった公立学校の指導教員を左遷したり免職にするなど手ひどく迫害した。秋田師範付属小の照井も、学校劇上演が原因で県の教員を辞めなければならない羽目に陥り、同校の主事で学校劇を推奨した赤井米吉もまた責を負って退職した。

この後赤井は旧友の小原に招かれて成城小学校の幹事に就任する。赤井は秋田で優れた実践を行っていた照井も成城小学校へ招いた。「学校劇禁止令」が出された状況下であっても、直接文部省の指導下になかった私立学校では引き続き劇が続けられ、成城小学校をはじめとするこの時期の新学校では学校劇への取り組みは一層充実し、大きく発展していく。

明星学園の学校劇

1924年、赤井、照井、山本徳行、照井げんの4人の教員は成城小学校を離れて明星学園を創立する。成城小学校での学校劇への取り組みは明星学園にも引き継がれる。学園草創期に中心となって劇を指導した照井は、学校劇の教育効果と重要性を児童教育の上に位置付けた先覚者と呼ばれた。照井は演劇指導だけでなく劇の創作にも熱心で、「お地蔵さんは知ってるか」「栗畑」「夜明けまで」「玩具のお国」「^{かどで}首途の前」など、名作といわれる台本を数多く残している。1927年（昭和2年）、芝の愛宕山で中波放送の本放送を開始したばかりのNHKから、5・6年生の出演する学校劇「夜明けまで」を放送している。学校内でも教室前の廊下を舞台にした学芸会でたびたび劇が上演された。

創立者の赤井は著作の中で、教育というのは知・情・意のすべてをバランスよく育てる事だと述べている。机に向かって数字と文字を憶え込ませることだけが勉強なのではなく、休憩時間の遊びや、芸術に触れる時間のなかで「情」と「意」を育むことが大切なのだと説いた。日本で新教育が流行した大正時代、学校教育でも教科としての芸術科目の内容が見直されはじめた。赤井はここでも、芸術を教科として教え教わるだけのものではなく、子ども自らが生み出して楽しむものであるべきだと考え、その方法を演劇のなかに見出していた。

劇は総合芸術であり、絵画・彫刻・建築などの空間的芸術と、舞踊・音楽などの時間的芸術を総合するものだと赤井は主張した。大正時代以前の日本では演劇の社会的地位は低く、政府による圧力も演劇に対する差別・偏見を助長していた。しかし大正時代に児童中心主義の新教育運動が盛んになり、小原國芳らが子どもの演じる子どものための劇＝学校劇を推奨すると、その実践は瞬く間に社会に認められていった。考え方の古い時の政府や役人が学校劇の流行に歯止めを掛けようとしたが、学校劇で得られる教育的効果の大きさに気づいた現場の教員たちはその流れを止めたくはなかった。

明星学園は岡田良平文部大臣が「学校劇禁止令」を出した1924年に創立したが、文部省の指導は私立学校までは届きにくく、明星では創立以来途切れることなく学校劇が続けられた。小学校は



教室前の廊下を舞台にした学校劇（1928年）
講堂ができる前はこのような半野外で実施していた。

もちろん、その後併設された高等女学校・旧制中学校でも劇が盛んで、児童生徒たちの情育・意育に活かされていた。

戦後はじまった明星祭と演劇活動

アジア太平洋戦争は日本の教育にも大きなダメージを与えたが、明星の子どもたちは戦争が終わった直後にさっそく演劇活動に取り組み、学校生活を取り戻していく。演劇とコーラスは明星の伝統となっていて、女学部・中学部の生徒たちは戦争中工場に勤労働員されながらも練習を続けていたという。終戦直後の1945年末に早くも第1回目、翌1946年5月には第2回目の文化祭（明星祭）が小学校の講堂で実施され、女学部・中学部の生徒たちと教員たちがそれぞれ趣向を凝らしたコーラスや寸劇を全校児童生徒に披露している。

教育制度が変わって新制高等学校が発足した1948年からは本格的な演劇と展覧会・運動会も加えて全校的な行事となる。運動会では寸劇的な要素を含んだ“仮装大会”が高校のクラス対抗で行われ、大いに盛り上がった。

戦後の民主化の機運を受けて、演劇、ことに大学生らによる学生演劇が空前の高まりをみせていた時代の流れのなかで、明星学園でも記念行事などでは音楽（合唱）とともに演劇が披露された。教員が指導する表現活動としての小・中学生の学校劇と、高校生が自主的に取り組んだ演劇・オペレッタ・人形劇などが盛んに上演された。

三部合同劇「杜子春」

卒業生やふるい教職員の間で、小・中・高合同の行事のひとつとして語り草になった劇がある。1952年（昭和27）、創立記念日の祝賀行事として上演された、小学校・中学校・高校の三部合同劇『杜子春』だ。

戦後、新しい教育制度になり、明星学園でも組織が整えられ、小・中・高の連携も進んだかに見えた。しかし実際には小・中・高の日常的な交流はなく、依然として一貫教育が進まない現実があった。こうした状況を打破しようと考えた青年教師たちが、「全校で力を合わせて創造的な実践をやろうじゃないか」と一挙に盛り上がり、取り組んだのが三部合同劇『杜子春』だった。それまでの明星学園で行われてきた小・中学生の学校劇や高校生の演劇とは別のアプローチで、小・中・高の教員のなかから専門性を活かしたメンバーが集まり、熱心に子どもたちの演劇を作り上げ、指導した。



三部合同劇「杜子春」の一場面

▶▶詳しくは『90年史』P.189～193

演劇が盛んな明星ならではの取り組みだったが、上演後は賞賛・批判どちらの声もあった。しかし若手教師たちが閉鎖的な職場の壁を打ち破り、協働して創造的な実践をつくりあげようとしたことは画期的で、彼らの力はその後の学園の一貫体制を築く牽引力になっていく。

三部合同劇は翌1953年にも、1回目の反省点を踏まえた上で、宮沢賢治の童話作品を四幕にまとめ『イーハトーヴォ物語』として上演した。上演後の反省会の結果「明星祭の劇の部門を春に回

して、創立記念日の祝賀をかねて行うこととする。しかし必ずしも三部合同の形をとらない」と決まり、その後合同で行われることはなかった。

4・4・4 制時代以降、現在まで

2 回目の三部合同劇の翌年（1954 年）は創立 30 周年にあたり、小・中・高それぞれ劇を発表している。このころから高校生の演劇は小・中グラウンドにあった講堂や武蔵野公会堂の舞台で定期的に上演されるようになる。

1959 年（昭和 34）に小・中・高 12 年間を 4 年ずつに区切る 4・4・4 制がスタートしてからも、高校生の演劇発表は盛んだった。低学年部（小学校 1～4 年生）・中学年部（5～8 年生）では教師が指導するクラス単位・学年単位の学校劇が不定期に行われたようである。

1968 年度（昭和 43）、初等部（小学校 1～4 年生）の「劇と音楽の会」が開かれた。^{（※ 16）}

今、子どもたちがはりきってやっていること、3 月 6 日の発表会めざしての練習です。内容についてはあらためてお知らせする機会もありますが、学年単位の構成で、民話・童謡を主題にして、武蔵野公会堂ステージで発表いたします。子どもたちの創造性・表現性・活動性・集団性を育てる芸術的表現活動は、学園教育の体質的側面と言っているものでした。それがしばらく教科研究探究の必要性から保留にされていましたが、これに息吹を与えて新しい生命に育てたいということから、発表会を持つという念願は、一昨年の研究発表会計画の中で胎動し始めたものでした。それが今回ようやく点火されたということでしょうか。これからいろいろとお願いすることもあるかと思いますが、ご了承ください。え、成果をお待ちください。（1968 年 2 月 15 日「初等部だより」No.1）

これが現在も「学習発表会」として続けられている小学校の劇の会の始まりで、年度末の行事として小学校に定着している。1974 年に舞台を備えた第 2 体育館が完成するまでは、武蔵野公会堂・三鷹公会堂の舞台を借りて実施してきた。いっぽう、中学校の演劇の記録は少ないが、授業でとりあげた文学作品を劇にして演じるなど、1980 年代半ば頃まで、学年行事として不定期に行われた。

（5）明星学園振興事業計画

創立 30 周年を機に

戦後 8 年目の 1953 年（昭和 28）6 月、赤井米吉が理事長に就任し、毎日新聞社から人事院に転じていた神田^{かずお}五雄氏は理事長から理事に退いた。翌 1954 年（昭和 29）、学園は創立 30 周年記念事業として「明星学園振興事業計画」をかかげた。▶▶詳しくは 60 年史 P.149～157 参照

振興事業計画は、増加した児童生徒への対応のため、創立以来の老朽化した校舎を増改築して施設・設備面を整え、教育内容を一層充実させようという計画であった。教育環境の整備と教育内容の充実は車の両輪の役割を担っていた。

長年の懸念事項であった校舎不足問題は、数年かけて試案を練りあげていた。保護者への丁寧な説明を行い、PTA の常任委員会・代議員会・各クラス会での賛同を得て、遂に実行に移される

＜※ 16＞ 4・4・4 制時代は、1～4 年（低学年部）、5～8 年（中学年部）、9～12 年（高学年部）としていたが、1966 年 5 月に、1～4 年（初等部）、5～8 年（中等部）、9～12 年（高等部）と名称変更された。

ことになった。資金は積立金の他、寄付金、学園債、私学振興会と銀行からの借入金でまかった。生徒数の増加による毎年の収入上昇も大きく貢献した。

まず1955年度（昭和30）の事業として高等学校の運動場3,670㎡の拡張が実現した。

翌1956年、小学校鉄筋コンクリートブロック平屋建ジグザグ校舎第1棟（後列6教室）、中学校木造校舎2階建（9教室）が完成し、講堂を移築。その後も以下の表にあるように、学園は保護者の支援を受けながら、毎年振興事業を展開していった。

年度	工事名	内 容	面積(㎡)	完了年月	工費(万円)	備 考
1955	校地拡張	高等学校運動場	3,670	1956. 3	470	
1956	小学校校舎 （後列）	鉄筋コンクリートブロッ ク平屋建6教室、便所	870	1956. 8	1,060	中学校校舎完 成直後高校校 舎とする
	中学校校舎 付帯工事	木造2階建9教室、便所、 講堂移築	1,050	1956.10 年度内完了	1,090 150	
1957	高等学校校舎 付帯工事	木造2階建9教室、便所、 運動場整備	980	1957. 6 年度内完了	1,210 200	
1958	校地拡張	高等学校運動場	495	1958. 6	130	
	小学校校舎 （前列）	鉄筋コンクリートブロッ ク平屋建6教室	750	1958.10	890	
1959	小学校付帯工事	校門、前庭、塀その他		1959. 9	200	
1961	小・中学校特別 教室	鉄筋コンクリート2階建、 7教室及び管理部門、 運動場整地	1,175	1961. 1	2,700	中学校校舎完 成まで普通教 室
	付帯工事			年度内完了	150	
1962	校地拡張	小中学校運動場	2,640	1962.12	2,500	
	〃	中学校校舎敷地	1,451		3,450	
	高等学校体育館 特別教室	鉄筋コンクリート2階建	1,400	1962.10	3,000	
1963	中学校校舎	鉄筋コンクリート4階建、 16教室	1,718	1964.12	7,627	
1965	高校特別教室	鉄筋コンクリート陸屋根、 地下1階付4階建	1,735	1966. 3	7,739	
1966	清里寮	木造亜鉛メッキ銅板葺、 平屋建	566	1966. 9	2,242	
1973	第2体育館	鉄骨造亜鉛鉄板葺、 一部2階建	823	1974. 3	6,657	

小学校のジグザグ校舎

上述の振興事業のなかでも、小学校のジグザグ校舎は、そのユニークな形状と考え抜かれた建築コンセプトが秀逸で、建築関係者はじめ、見学に訪れる人も多かった。南向きに開け放した明るい教室や、教室とつながっている前庭で遊ぶ子どもたちの様子を見て、「我が子の学校はここだ!」と入学を決めた保護者が毎年何組もあったという。

設計者の清田文永氏は学園の保護者で、ひとり娘の雅子さん（29回生）は1年生から明星に通う在校生、夫人の宏子さん（旧姓・安田）は学園創立時に入学した2回生。施工者の藤木工務店の秦裕氏も卒業生（14回生）だった。

建築にあたり、赤井園長、照井校長は一定の条件をあげた。

1. 新築工事は、使用中の既存校舎に影響を与えず授業を中断させないこと
2. 極めて限られた工事費によること
3. 学園の教育の伝統の尊重と、新しい進展に応ずる建築的処理であること

教師たちも、明星の実践に合った教室のあり方、子どもたちの学校生活の様子などを設計計画のなかで、熱心に訴えた。清田氏は、それらを踏まえた建築上の工夫と、ジグザグ形状にしたわけをPTA会報^{※17}に「学園新築工事のこと」と題して解説している。以下に要略する。

1. ローコスト化

- ・平屋建て、コンクリートブロック構造として合理化を計り、工事費を削減。

2. 教室を南向きにし、1年を通してより良い日照条件を得る工夫

- ・小学校の東南向きの敷地に平行に校舎を建てると従来の校舎のように教室の日照時間は短くなる。そこで各教室の配置を斜めにずらしてジグザグの形状にすることで、各教室が南向きとなり、より長い日照時間を得ることができた。
- ・南側の高窓の外部に、傾斜のついた木製遮光板を組み込んだ。遮光版の傾斜角は東京の緯度から計算し、入射角の大きい夏季光線は遮り、入射角の小さい冬季光線は教室の奥まで通して、照度の均等化や輻射熱の調整をした。

3. 夏季の暑さ対策

- ・東京の夏季に一定に吹く風は南北であり湿度も上昇するので、教室の南側を大きく開けて通風を確保。
- ・屋根の鉄板と天井の間に空間を設け、換気口の設置、断熱材を用いた

4. 各教室の前庭の独立性

- ・教室をジグザグに配置したことで、それぞれの教室の壁が隔壁の役目を果たし、教室の前庭が各クラス専用の遊び場となった。

5. 各教室の騒音伝達の防止

- ・隣教室との間の隔壁が、教室間の騒音を軽減させる効果も得た。
- ・教室の北側に壁のない開放廊下を設けた。旧校舎の外廊下の良さを残すとともに、廊下の騒音を教室から遮断する効果があり、軽構造とすることで工事費の削減にもつながった。



小学校のジグザグ校舎。隣教室の声も聞こえにくく、教室の前にはクラス専用の遊び場ができた。

〈※17〉 PTA 会報『道』No.33（1956年6月11日）P.12（※2代目ジグザグ校舎については、本誌 P.256）

ジグザグ校舎は1956年8月に後列6教室が、2年後の1958年に前列6教室が完成した。創立70周年記念行事として2000年に建て替えられるまでの40数年間にわたり、学園の象徴的な建物として愛され、多くの子どもたちを送り出してきた。100周年を迎える2024年、初代のコンセプトを継承し、さらにシックハウス症候群への対策等も採り入れた2代目のジグザグ校舎は、築24年となる。今も教室には子どもたちの明るい声が響いている。

(6) 第1回教育研究集会

教育面においては、1954年（昭和29）、小・中・高から選出された教員で構成する教育研究推進委員会が発足し、12ヵ年を通したカリキュラムの編成、校外見学・旅行の系統プランの再編成の検討が始まった。これらの作業は、推進委員会の原案をもとに全園会議で討議し、さらに小・中・高それぞれの部会（職員会議）に持ち帰って検討するという手続きをとった。

11月、小・中・高合同の研究集会が開かれ、各教科の教科目標、教科課程を発表し合った。これは翌1955年度もつづけて行われた。

学園の外に目を転ずれば、1955年8月、鳩山内閣の与党・日本民主党が、『うれうべき教科書の問題』というパンフレットを配布し、現行教科書がいちじるしく「偏向」していると非難した。これをきっかけに検定を強化することをねらったものであった。その年11月、自由党と日本民主党が合同して自由民主党を結成。翌年、教育委員会が公選制から任命制にきりかえられ、また、教員に対する勤務評定制が導入されるなど、一連の政策を通じて教育に対する国家統制が強められていく。これに対して、日本教職員組合（日教組）は勤務評定反対闘争を展開し、教育課程の自主編成の運動を進めた。

教師の教育運動には組合運動だけでなく、民間教育研究運動とよばれる運動があり、さまざまな民間教育研究団体が「教育とは何か」を問い、「何をどう教えるか」を研究する活動を進めていた。おもな民間教育研究団体には次のものがあつた。

数学教育協議会（数教協）、科学教育研究協議会（科教協）、歴史教育者協議会（歴教協）、教育科学研究会（教科研）、日本作文の会（日作）、文学教育研究者集団（文教研）、新しい絵の会など。明星学園の教師のなかにも、これらの研究団体に所属する者があり、とくに小学校・中学校に多かった。

1957年（昭和32）11月、小・中・高合同の第1回教育研究集会が実施された。この研究集会が実施されるに至った経緯について、準備委員会の中心となっていた武者小路稔（高等学校社会科教諭）がPTA会報『道』^{（※18）}にわかりやすい言葉で報告している。

教師が教育にたずさわっている以上、その内容なり技術なりについて研究をすることは当然であるし、またそれぞれの教師がめいめいで研究をつづけてはいる。しかし、どこの学校でもそうらしいが、みんなが一しょになる時間というものなかなかとれないので、当面した問題をそのときどきで話しあうことはあっても、同じ教科のものが一つの課題で研究をするということは容易ではない。まして、他の教科と、あるいは他の段階（小・中・高という段階＝引用者注）との共同研究ということは、とか

（※18）武者小路稔「第1回教育研究集会始末記」明星学園PTA会報『道』41号（1958年2月）『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』P.183～184

くお題目におわりがちである。それじゃいけないんだということは切実にわかっている、だれかがしじゅう運営にあたるのでもなければ、とても実行できない。明星でも、むしろこういう学校だからこそ、ほかより一そう必要性があるので、この問題は従来もなんとかとりあげられ、教科編成のたびごとに会議がひらかれ、その成果は活用されてはきた。が、どうもいつでもそのとき1回かぎりでもとぎれてしまう傾向は否定できない。そこで、昨年組合の新執行部が選出されたときから、懸案の全体集会を、今度こそぜひ継続してやろうじゃないか、という方向がうちだされ、2学期になって準備委員もえらばれた。

組合の委員長は小学校の無着成恭。『やまびこ学校』の実践で一躍有名になった無着は、編入学した駒沢大学を卒業後、生活綴方の先輩・寒川道夫の紹介で照井校長に会い、1956年（昭和31）4月から小学校に採用された。それから1年足らずの1957年2月、組合の執行委員長の選挙のとき、無着は「明星学園寺子屋論」をぶって、四十数名出席したなかの26票もの票数で委員長に選出された。

ちなみに、副委員長は学園第1回生で高校美術科担当の横川武、書記長は高校国語科担当の押川昌一。初代委員長の橘正薫は中学校の校務主任になっていた。無着は退職後に刊行した著書のなかで、こう書いている。

私が明星学園に勤めるようになってから、明星学園はにわかにウルサクなったといわれるが、それは私一人の責任などではなく、当時、私より2か月早く、島田厚（教育科学研究会会員）がきていたし、私が組合の委員長になった年、上川淳（歴史教育者協議会会員）や鈴木五郎（新しい絵の会会員）、そして、佐藤文夫（科学教育研究協議会会員）などの各氏が、ぞくぞく明星学園に勤めだしていたからである。

私が組合の委員長として第1回の校内研究会をはじめたのは、1957年（昭和32年）であった。とにかく明星学園の小学校・中学校・高等学校の教育内容を一貫させて、日本における新しい学校教育のあり方を探求し、ここに実現させてみるんだ、というぐらいの元気があった。^{（※19）}

当初、児童・生徒を1日休みにして研究会を行うという組合執行部の企画を、照井校長が許可するかどうか懸念された。だが、それは杞憂だった。照井校長は、「このような研究会は、組合が主催すべきことではなく、学校がやるべきことである」と言った。つまり、明星に限らず戦前の私立学校が築きあげてきたすばらしい遺産は、戦後になって日本の教育のなかに普遍化された。それは日本の教育のためによろこばしいことではあるが、私立学校にはもはや誇るべき遺産はない。明星の教師たちは一致団結して研究に励んでももらいたい。そして、新しい明星学園の教育をつくってもらいたい、というのである。

こうして、組合とは別に研究集会を開くための準備委員が選ばれて、開催に向けての実務を担当することになった。さきの武者小路穰の報告をふたたび引く。

何回かの準備会で、課題は最近各方面で話題になっているいわゆる「基礎学力」を中心とすることになった。この「基礎学力」というコトバはいまいだが、どの学科でも共通する話題となりうるし、あらゆる方向に発展する可能性があるのも、もっともよからうということになったのである。それから各学科の協力をえて実施方法が討議されたが、資料としての実態調査にしても、全体集会の開催にして

（※19） 無着成恭『無着成恭の昭和教育論』（太郎次郎社、1989年）P.197～198

も、全学園の教務計画のなかでおこなわなければならないので、照井校長の指示のもとに、今年からの学園の年次計画による行事ということになり、準備委員はそのまま職務を継続することになった。その結果、開催されたのが、すでに通知でご承知のこととおもうが、昨年11月25日の第1回教育研究集会である。(※20)

何が話し合われたか

それでは、当日の研究集会はどのように行われたか。また、研究集会の成果は何だったのか。各教科のやや詳しい報告は前掲『道』に記載されているが、ここでは紙幅の都合で武者小路穰による報告を引く。

当日は、9時、照井校長のあいさつで開会され、資料の配布整理ののち、9時40分から11時まで、各学科ごとの分科会にうつった。分科会では、各学科ごとの予備討論で提出された問題点と資料のプリントを材料として、小・中・高通じての討議と問題整理がおこなわれた。つづいて、11時10分から13時10分まで、昼食を間にはさんで、国語・数学・体育科からの報告があり、以後15時30分まで、報告についての質疑討論と、のこりの学科の問題点説明があった。詳細は、報告書として整理、編集される予定なので、いまここでは要点だけにしておく。

- ・国語——中・高でおこなった識字・読解能力の調査をもとにして、当面している教授上の困難の指摘。小学校の国語教育との関連。
- ・数学——現在の教科編成上の矛盾、重複の指摘。中・高を通じての教科編成試案。
- ・体育科——集団訓練の問題。

以上はごく一部にすぎないが、講師をまじえての全員の出席のもとに、きわめて活発な意見がだされて、討論の収穫はすこぶるおおかったとかがえられる。

終了後は、グラウンドで大正組対昭和組のソフト試合、および茶話会を開いて、懇親をふかめ、のこった問題を談笑のうちにはなしあった。

では、今回の教育研究集会の結論は何か？ということになると、実は結論はない。というのは、この集会の準備にあたって一つの目標としたのは、りっぱな結論をださない、ということにあったからである。はじめにもいうように、教育研究の要点は継続にある。従来何回もおこなわれた集会の欠点は、ある課題についての結論をまとめ、一つの整然とした教科案ができあがることでおわってしまうことにあった。そこで、今回は、とにかくみんながよりあって、各科でぶつかっている困難をたがいにみとめあうこと、そして今後の協力体制をみんなの意識のなかにもちこむこと、そして各科では次年度の課題をそこから発見すること、つまり次の前進の用意をすることを目標としたのである。集会はその年度のまとめでなく、次年度の出発である。これが準備委員のくりかえし強調したところである。したがって、第1回の集会の成果は、各学科が次の行動でこたえるわけである。ただし、これも性急にもとめられてはならない。ようやく小・中・高での共同研究の体制が糸口についたとかがえていただきたい。生徒に教育の成果を性急にもとめてはいけないうと同様、われわれのしごとにも忍耐が必要である。第2回、第3回へとひきつづいていきさえすれば、それがまず一番の成果なのである。そのためには、ここで資料の蒐集とか、今後の継続へのよりよい方向の示唆とか、いろいろな形でのご助力をおねがいしておきたい。(※19)

(※20) 武者小路穰「第1回教育研究集会始末記」明星学園PTA会報『道』41号(1858年2月)『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』P.183～184

第2章 4・4・4 制の軌跡

1 一貫化をめざして

(1) 教科課程案の共同研究

1957年（昭和32）11月に実施された第1回教育研究集会で、教科ごとに時間をとって話し合ったことの成果は、決して小さなものではなかった。それぞれの教科がぶつかっている問題を確かめ合うこともできたし、それぞれに努力しながら、どれだけ無駄をしてきたかということもわかった。

次の1年間は、第1回目の集会で見出した問題点を掘り下げることになり、教科ごとの分科会で検討し、秋の全体集会までにまとめることになった。

分科会を進めていくにつれて、期せずして、一貫教育の教科課程案づくりという仕事が各教科の共通の課題になってきた。しかし、この仕事は口でいうほどに簡単ではない。児童・生徒の発達段階を考え、何を、どのような方法で教えていけばよいのかを考え、低学年から積み上げていかなければならないのだ。

これまでも教科課程を統一する計画が立てられたことは何度かあったが、一部の人の手になる机上プランで終わってしまった経験がある。同じ轍を踏むことはできない。

各教科ともいろいろと困難な課題につきあたりながら、教科課程案をつくる作業にとりこんでいった。この段階では、どの教科も現行の6・3・3制の枠組みを前提としていた。

ところが、秋の全体集会の少し前になって、小・中・高12年間の教科内容を考えるならば、全体の学級編成をも考え直し、12年を4学年ずつの3グループに分けたらどうかという提案が一部から出された。いわゆる「4・4・4制」の提案である。

(2) 「4・4・4制」の提案

この提案は「教育推進に関する教育研究所試案」として出されたが、実質はその年4月に小学校から高等学校国語科に転じた島田厚の提案であった。

これに先だち、第1回教育研究集会後、小学校の教師たちが照井校長を所長として明星学園教育研究所^(※21)を設立し、教育研究所の主催で勝田^{かつた}守一先生^{しゅいち}^(※22)を招き、一貫教育についての知見を広めるための研究会がもたれていた。勝田先生は諸外国の事例を引いて、学校制度や教育内容・方法には多様な考え方があることを示され、4・4・4制も一例として紹介された。とくに4・4・4制が望ましい枠組みだと言われたわけではないが、島田厚はこれについてさらに熟考を重ね、小・中・高校のだれかれをつかまえて議論しながら、提案を練り上げていったのである。

島田の提案は、おおよそ次のようなものであった。

- 1) 小・中・高12年を4・4・4に区切り、それぞれを前期2年、後期2年に分ける。
- 2) 小学校段階（1年～4年）では生活経験学習にあて、とくに現在1年生の課程を大幅に削減し、言

〈※21〉1959年3月、就学前の子をもつ親向けに『古い教育・新しい教育』作成。それを元に芸術教育研究所と合同で同年11月、『1年生誕生』（門書店）刊行。

〈※22〉1908～1969年 東京大学教育学部教授。教育科学研究会の初代委員長。

語読解力の育成をはかる。

- 3) 中学校前期（小学校5～6年）では生活経験学習から漸次系統学習への転換をはかる。適当な英語学習を開始し、国語・数学を学級担任、その他の学科は教科担任制とする。中学校後期（1～2年）では現在の中学課程のうち可能なかぎりを修得させる。
- 4) 高校前期（中学3年～高校1年）では現在の高校課程のうちもっとも基礎的なものの深化をはかる。後期（高校2～3年）では進路別により教科課程に大幅なバラエティを与える。特に芸術科コースには、校外の教育機関と密接な連携をはかる。

この提案が出された背景には、いくつかの理由があげられる。

第1に、子どもたちの心身の発達の度合が、小学校の5・6年とそれ以下ではかなりちがうということである。教科の内容も、5・6年あたりからかなり高度になり、学級担任が全教科を受け持つには困難が生じてくる。小学校5・6年では、もう中学校と同じように、教科担任制がある程度とりいれられてもいいのではないか。

第2に、教科内容のむだな重複である。現行の文部省指導要領とそれにもとづく検定済教科書は、小学校6年と中学校1年、中学校3年と高校との間に重複が多い。これは中学卒業者の全員が高校に進学する本学園の場合、もっと整理することができる。

第3に、中学校3年間、高校3年間はどちらも短かすぎて、中途半端な活動を余儀なくされる。ことに高校の3年間は、それぞれの生徒の適性を見出し、個々の能力を十分に伸ばす段階なのに、とかく受験勉強に押されて、生徒の自主的な活動が不活発になっている。そのためにも、4年間でひとつのグループと考えることは、広い意味での学習にとって有効ではないか。

これらの理由から、小学校1年から4年まで、小学校5年から中学校2年まで、中学校3年から高校3年までの3段階に分け、さらにそれぞれの段階を前期2年、後期2年に分けるのが妥当ではないか。

この提案は、1958年（昭和33）11月、秋の全体集会に提出された。

(3)「4・4・4制」発足へ

全体集会での議論は、当然のことながら、4・4・4制の問題に集中した。

現行の6・3・3制の編成を変える必要はない、という意見はもちろんあった。玉川上水をはさんで校地が離れている現状では、むしろ6・6制に切り替えるほうがいいのではないか、という意見も出た。しかし、全体としては、各教科の内容の整理が検討されてきて、おのずからこの案を支える方向に進んでいたのも、6・3・3制という区分はそのまま、教科課程の編成上の区分としてこの案を採用しようという意見が大勢を占めた。

その後、翌1959年（昭和34）1月の討議で、相当に問題を含むとされたが承認の方向に傾き、3月になって全園職員会議で4月からの実施が承認された。各教科部会が頻繁に開かれ、教育推進委員会はそれらの検討内容をまとめ、全体計画の具体化を急いだ。さらに、校務・教務はそれにもとづいて人員を配置し、時間割を編成するというやっかいな仕事に取り組んだ。こうして、4・4・4制はいくつもの課題をかかえながら、とにかく1959年（昭和34）4月から発足することとなった。

もちろん、学校運営上の重要事項は、最終的に理事会の承認を必要とする。教育現場が一貫教育の教科課程づくりをはじめた1958年（昭和33）、高齢の赤井理事長に代わって新理事長に就任

した市村寅之輔氏^(※23)は、教職員の熱意にエールを送り、4・4・4制は理事会で承認された。

新しい教育計画は父母総会で説明がなされ、PTA 会報『道』No.46 にも明星学園教育推進委員会が計画の概要を載せて理解を求めた。同誌には PTA の新会長に就任した松井憲紀氏の挨拶が掲載されたが、そのなかで松井会長は、学園の新しい教育方針の理解を深めたいと期待を寄せている。^(※24)

しかし、それでめでたし、めでたし、となったわけではない。この年（1959 年度）は 4・4・4 制の初年度なので、教科代表で構成されている教育推進委員会は、毎月一回の教科部会で討議された問題を持ち寄って、秋の全体集会で言う 4・4・4 制の進行状況を整理していた。その上で開かれた秋の全体会では、運営上さまざまな問題が噴出して、前年度よりも激しい討論が行われた。もう一度 6・6 制について検討したらどうか、という意見も出てきた。しかし、授業の面で理想を達成しようとするれば、ある程度の困難はあっても、学校全体をその方向に進めなければならない。

生徒にも、家庭にも、学園の計画をのみこんでもらわねばならない。そこで、これも全体会で論議しながら、学年の呼称を 1 年から 12 年までとし、4・4・4 の三つの段階の呼称もそれぞれ、低学年部・中学年部・高学年部とした。

教育課程編成の基本

当時考えられていた 4・4・4 制に基づく教育課程の基本は、次のようなものであった。

	低学年部 (1～4 年生)	中学年部 (5～8 年生)	高学年部 (9～12 年生)
	認識発達の段階に応じた指導基準を軸とし、生活的な単元の設定により、総合的学習から漸次系統性・分化性をもたせた学習へと進め基礎学力をつける。	各教科の特質に応じ、漸次その独立性と系統性を強化し、専科性を加える。	生徒各自の能力・個性・進路を考慮した適性別コースを設定し、勉学の努力と研究の自由を助け、将来の志望を達成するため、やや専門的な学力を身につけさせる。
前期	1・2 年生	5・6 年生	9・10 年生
	生活単元に立つ総合的な学習により、創造性・活動性・集団性の基礎を養う。	社会的集団性を組織的に進め、そのなかで創造的・論理的な思考力を養うことを根幹とする。	適性別コースに基づいた指導をする。
後期	3・4 年生	7・8 年生	11・12 年生
	音楽・体育などは専科制を加え、現実生活に立った思考力をのばすための基礎学力を養う。	いままでの基礎の上に、さらに学習態度の高度化・自主化を拡充して、基礎学力の整備と充実に主力を注ぐ。	進学・進路をも加味したコースを設定し、将来の志望達成の自信を養うよう、学力の発展と充実を期する。

〈※23〉 元理事長・市村今朝蔵氏の弟。学園の保護者。請われて実業界から理事長に就任した。

〈※24〉 PTA 会報『道』No.46（1959 年 6 月 27 日）P.2

(4)「4・4・4 制」の反響

新聞報道にみる論評

1959 年（昭和 34）4 月から漸進的に始めた 4・4・4 制は、翌 1960 年の 4 月から全面的に実施される。その年は、日米安全保障条約改定反対の闘争が全国的規模で展開された年で、新聞は連日“安保”に関する報道をつづけていた。それらの記事にまじって、明星学園の 4・4・4 制が報道され、さまざまな論評が加えられた。

たとえば、毎日新聞（1960 年 2 月 10 日、朝刊）は、「私立明星学園（三鷹）で実験教育／初、中、高等の四・四・四制に／教育課程組替え／新学期から踏切る」という見出しで、4・4・4 制の概要を報じ、これに対する文部省の態度と市村理事長の話を伝えている。

内藤文部省初等中等局長の話はこうだ。

名目はどうしても実質的に 4・4・4 制をとるのは現行制度を否定することで法違反だ。指導要領や教科書などすべて 6・3・3 制のワクを無視するようなことは、私立学校でも許されない。学校教育法に違反すれば、小中高校として扱うことはできず、洋裁学校や塾なみの各種学校としての扱いしかできない。

これに対する市村理事長の話は以下のとおり。

学校教育法、教科書法など法のワクはあくまで守っているし 6・3・3 制を頭から無視しているものではない。ただ 12 年間、一貫した教育を合理的に進めるためには、どうすれば一番よいかと考えて 4・4・4 制にふみきった。初等部の 4 年で小学校の 6 年分をやってしまうというむちゃをやるわけではなく、学習効果をあげるため、やりやすい形にするだけのことで、これを違法とするのは見解の相違だ。

同紙には東京大学・勝田守一教授と東京教育大学・梅根悟教授のコメントも掲載された。

勝田守一教授の話

教育効果を高めるため、学校内の問題として 4・4・4 制をとってもさしつかえないと思う。12 年間で教えることを 11 年間で達成し、残る 1 年を有意義な教育期間として利用することができればそれ自体、進歩ではなかろうか。私はまず先生たちの熱意と努力を高く評価したい。暖かく見守り、成果を期待する。学校教育法がどうのこうのというのは筋違いだ。

梅根悟教授の話

6・3・3 制がよいかどうかいろいろ問題がある。小学校 5 年にあたる中等部から教科担任制をとることは、学力水準も上っていることと、現在でも 5、6 年生の教科を一人の先生で教えられないことからみてもよいことだ。このような実験教育は大いに歓迎すべきで、自由奔放にやらせるべきだ。いまの制度をやかましく守らせるだけでは教育に進歩がなくなる。

新聞紙上には学者や研究者だけではなく、一般市民からの投書も多く、この制度への人々の関心の高さを示している。▶▶詳しくは 90 年史 P.200～203 参照

2 教育研究活動

(1) 公開研究会の始まり

1960 年度の動き

明星学園が「4・4・4 制」を全面的に実施した 1960 年は、歴史的に見れば日本中が大きく揺れた“60 年安保闘争”の年に重なる。後に「団塊の世代」と呼ばれる戦後ベビーブームの子どもたちの多くは、この年、小学校 6 年生になっていたはずである。

4・4・4 制一貫教育体制により、4 月 8 日の小学校入学式には小学校児童だけでなく、中・高の生徒代表も参列した。夏季行事は、中学年部前期（5・6 年）は従来どおり千倉、後期（7・8 年）は軽井沢、高学年部は上高地・裏磐梯高原・軽井沢で実施。

いっぽう、9 月には、「4・4・4 制」に即応した振興事業を後援するために、武者小路実篤氏を会長とする明星学園後援会（第三次）が発足。その月、管理棟・特別教室棟建設に着手している。

翌 1961 年 3 月には特記すべき行事があった。春休み中、千倉寮に低・中・高の教師が全員集まり、2 泊 3 日の日程で合宿研究会を実施したことである。

公開研究会へ向けた全園の合宿研究会

千倉寮での合宿研究会は、すでに 1956 年から小学校の教師たちが行い、中学校の教師たちも 1960 年から行っていた。しかし高校の教師を含めた全園の合宿研究会は、今回が初めてであり、画期的なことであった。

この研究会では、新年度の教育の基本的な案件を検討し、自主的学習態度を形成するための方策について話し合った。それとともに、低・中学年部の教師から出された、授業の公開を含む公開研究会開催をめぐる論議が熱っぽく行われた。高学年部からは、各教科が分化して専門的になるので、授業の内容について共同で討議するのはむずかしい。思春期の生徒たちに公開授業はなじまない等々の意見があった。低・中学年部の教師のなかにも、時期尚早、個々の教師の実践の成果が共有の財産になっていない。まず学園の父母を対象とすべし等の意見があった。また、恒例の明星祭の教育的意義や、その方法についても再検討が行われ、その結果、明星祭についてはおおよそつぎのような結論に達した。

- 1) 低・中学年部では、従来のような規模での明星祭行事を廃止する。体育会・展覧会・音楽会・劇の会などは年間に分散して、適期に無理のない規模で行う。従来明星祭に注いだ労力や時間は日常的な営みのなかで消化し、その集積を「明星教育研究発表会」に表現する。
- 2) 高学年部では、生徒自治会活動として従来行われてきた「明星祭」を十分生かして、本年度も大体例年に近い形で実施する。低・中学年部の研究会には教職員が参加する。研究会当日の授業は普通に行う。

また、夏休み中の 8 月末には、奥多摩の御岳で 2 泊 3 日の合宿研究会（高学年部は 1 泊参加）を実施し、秋の公開研究会の具体案の検討、教育内容とその組み立てについての研究討議を行った。

これら春と夏の合宿研究会を通じて、公開研究会の方向性が少しは見えてきた。

公開研究会をなぜ開いたか

明星学園が公開研究会を始めた理由については、人によってさまざまな説明がなされている。たとえば、高齢で病床にあることの多くなった照井・上田両校長を補佐し、学園全体の運営に碎身した全園教務の橘正薫は、わかりやすい言葉でこう語っている。

ひとつには学園が戦後、外部に向かっての授業の公開とか、教育理論における外部との討論といったことが、まったくなかったわけです。そこで今回はこれを一般に広く公開して外部からの批判を仰ぎたいということがあったわけです。それから、学園としての教育方針、あるいは主張といったものをさらに強化していきたい。それには学園の内部だけでやっていたのではだめで、外部からの声を聞き、自己反省をして、さらに発展させたいと考えたわけです。

また一方では、いま教育界で問題になっている教科構造の問題について、われわれもまだはっきりしたものをもっていないので、これについてのさまざまな分析検討が今後の教育の現代化にとって必要ではないか。

さらには、学園を組織している教師、子ども、父母の三つの要素のうち、とくに父母との共同の意識をもって教育をすすめていくということを日常化したいと考えました。(※ 25)



小・中学校校舎・管理棟

また、当時低学年部にいた上川淳は、次のように書く。

日本の子どもが、将来どのように育っていくか、そのことと切り離して明星の子どもの未来を考えることはできないし、また、日本の教育がどのような方向に進むかを無視して一明星学園の教育を考えることはできない。

このような観点にたつとき、学園のせまいわくの中だけで、教育のあるべき姿を吟味するのではなく、広く、日本が現在直面している教育の課題を反映させ、日本の教師がいただく問題意識をくみとりながら、大胆に且つめんど密に、教科の現代化と、生き生きした授業の創造をめざして教育研究をつみあげたいと念願するわけである。

これが、今回、公開の教育研究発表会を開くにいたった趣旨である。(※ 26)

(2) 第 1 回教育研究発表会（のちの公開研究会）

学外へも公開する初めての教育研究発表会は、1961 年（昭和 36）11 月、2 日間にわたって開催され、各地から多数の参観者が来場した。この時期の明星は、民間教育研究団体の成果を取り入れ、全校的にその実践に取り組む学校として実績を積み、「4・4・4 制」も 3 年目を迎えていた。明星の教師たちは、「今の公教育の教育内容は羅列的な知識の寄せ集めである」という批判的な意見を持っていた。そして教科を学問や芸術の成果と結びつけて体系的につくりかえ、教育内容を新しく創りだすことに意欲を燃やしていた。教師たちは民間の研究団体に属し、全国各地のすぐれた教育実践者に学び、科学者、芸術家、研究者らの協力を得ながら日々実践の質を高める努力を惜し

〈※ 25〉 PTA 会報『道』No.55（1962 年 3 月 1 日）P.27

〈※ 26〉 上川淳「教育研究発表をもつ意義」『明星の授業 1961』P.23

まなかった。

また、開催にあたって学園保護者による協力体制は万全で、松井憲紀 PTA 会長を中心に、受付から学内の案内その他、細部にわたり入念に準備されていた。

「明星学園 PTA 教育研究協力者集団」

1963 年 11 月の第 3 回教育研究発表会にはおよそ 800 人が参加し、そのうち学園保護者を除く 700 人の参加者の多くは公立学校の教師だった。

この第 3 回教育研究発表会を機に、1963 年度の保護者のなかから学術分野各方面の専門家・研究者を「明星学園 PTA 教育研究協力者集団」として募り、またこの時期から外部の研究者や教育実践家の協力も得て、学園の教育内容の充実に努めた。

内外の協力者総てをここでは紹介しきれないが、なかでも明星教育の進展に深く関わられた研究者のお名前を挙げると、数学の遠山啓氏、銀林浩氏、国語の奥田靖雄氏、国分一太郎氏、理科の真船和夫氏、玉田泰太郎氏、音楽の園部三郎氏、美術の井手則雄氏、体育の中森孜郎氏、正木健雄氏、教育学の勝田守一氏、保護者でもあった宮川寅雄氏（東洋美術史家）、金澤嘉市氏（教育評論家）、遠山茂樹氏（日本史学者）、丸山眞男氏（政治思想史家）、霜田光一氏（物理学者）、小野周氏（物理学者）、箕田源二郎氏（画家、美術教育者）など多岐にわたった。

これらの方々の協力も得ながら、子どもたちの認識の発展を保証するよりよい教科の構造を創りだし、それにふさわしい授業の方法を開拓するために、学内の研究体制の強化が図られた。毎週教科部会を持つ教科。全校で隔週に行った「授業研究」。1 クラスの授業を全教師が見て改善のために行う議論。教材の提示の仕方はよかったか、子どもたちは意欲的に取り組めたか、出された意見がクラス全体のものになったか、など授業は厳しく吟味された。教師たちは教科を越えて学び合い、共同研究の成立を目指した。そして、「実践者であると同時に研究者であること」を信条にしていた。

目 次	
特集 明星学園研究集会	1
明星学園研究集会の経緯	2
明星学園研究集会の目的	3
明星学園研究集会の参加者	4
明星学園研究集会の開催場所	5
明星学園研究集会の開催日時	6
明星学園研究集会の開催趣意	7
明星学園研究集会の開催内容	8
明星学園研究集会の開催結果	9
明星学園研究集会の開催意義	10
明星学園研究集会の開催後援	11
明星学園研究集会の開催協力	12
明星学園研究集会の開催報告	13
明星学園研究集会の開催感想	14
明星学園研究集会の開催写真	15
明星学園研究集会の開催動画	16
明星学園研究集会の開催音声	17
明星学園研究集会の開催資料	18
明星学園研究集会の開催記録	19
明星学園研究集会の開催評価	20
明星学園研究集会の開催展望	21
明星学園研究集会の開催お問い合わせ	22
明星学園研究集会の開催お問い合わせ先	23
明星学園研究集会の開催お問い合わせ方法	24
明星学園研究集会の開催お問い合わせ期間	25
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付時間	26
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付場所	27
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付担当者	28
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付電話番号	29
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付メールアドレス	30
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付ウェブサイト	31
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付SNSアカウント	32
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付QRコード	33
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付印	34
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付スタンプ	35
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付シール	36
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付ステッカー	37
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付ポスター	38
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付パンフレット	39
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	40
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	41
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	42
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	43
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	44
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	45
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	46
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	47
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	48
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	49
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	50
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	51
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	52
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	53
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	54
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	55
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	56
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	57
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	58
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	59
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	60
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	61
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	62
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	63
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	64
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	65
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	66
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	67
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	68
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	69
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	70
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	71
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	72
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	73
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	74
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	75
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	76
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	77
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	78
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	79
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	80
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	81
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	82
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	83
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	84
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	85
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	86
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	87
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	88
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	89
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	90
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	91
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	92
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	93
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	94
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	95
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	96
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	97
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	98
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	99
明星学園研究集会の開催お問い合わせ受付受付チラシ	100



PTA 会報『道』No.55 (1962 年 3 月) は“特集・明星学園研究集会”として当日の様子を詳細にレポートしている。

3 低・中学年部の実践

(1) 教科書の自主編成

明星学園の教師たちは創立以来、「教育の内容と教育の方法は一体のものであらねばならない」と考え、教育内容の自主編成を行ってきた。学園が創立した大正末期、日本の多くの学校では国定の教科書に依存した教育が行われていた。これに対し、照井猪一郎を中心とする明星の教師たちは、現場での実践をもとに『新読本』全5巻をつくりあげた。第1巻が発行されたのは、創立から2年後の1925年（大正15）であった。

この『新読本』の発行をはじめとして、明星の教師たちは長年にわたって教育内容を整備することに取り組み、より良い教育の方向を日本の教育界に提案し続けてきた。「私立であっても、“社会立”の学校をめざす」と述べた創立者赤井の精神と情熱は、後年の学園教師たちにも連綿と引き継がれてきた。実際、明星の自主編成教科書の内容は、長い時間の経過の後、つぎつぎと検定教科書に取り入れられていった。明星の教育研究は、民間教育研究の成果に学びつつ、さらにその推進力となる役割も果たしたのである。

1960年代、明星学園では教科書づくりがさかんに行われ、各教科で教科書や資料集、実践記録集などがつくられた。なかでも『にっぽんご』と『わかる さんすう』のシリーズは公教育にも大きな影響を与えた。▶▶詳しくは90年史P.224～227参照

1) 自主編成教科書『にっぽんご』

『にっぽんご 1 もじのほん』（1年1学期用）は1964年4月むぎ書房から発行された。つづいて『にっぽんご 2 もじ はつおん ふんぼう』（1年2学期・3学期用）は同年8月、それにひきつづいて日本語の文法の基礎を指導するための『にっぽんご 3』『にっぽんご 4の上』が出版された。

いずれも学園に言語学者の奥田靖雄氏を招いて指導を受けつつ、小学校の国語部会の教師が連日夜遅くまで議論しながら作り上げていったものである。その経過を追う。

『にっぽんご・もじのほん』づくりがスタート

1962年11月に開かれた第2回公開研究会の基本テーマは「教科で何をどう教えるか、その基本的な構造と本質の究明」であった。国語科の教師たちは「教材の自主編成」を掲げて公開研究会に臨んだが、参加した研究者・教師から厳しい批判を受けた。公開研究会を主導し、低学年部の国語の授業を発表する立場にあった無着成恭はこの批判を謙虚に受け止め、学園として講師を招き、教師たちが指導を受けることを決めた。この時、講師として招いたのが言語学者の奥田靖雄氏であった。

国語科では週1回奥田氏の講義を受けることになった。そして、それが4、5回つづいたころ、1年生の担任であった辻木猪一郎が、「1年生の国語の授業というのは一体何をどう教えたらよいのかさっぱりわからん」と言い出し、それを受けて奥田氏は



「1年生ではかな文字の正書法を教えるのだよ。それでは1年生の教科書を作ればいいのではないか」と言ったのだった。そこから教科書『にっぽんご・もじのほん』づくりがスタートした。

文部省の指導要領に準拠して作られた検定教科書は、「話す、聞く、読む、書く」の4領域にわけ言語を使用することで、日本語が自然に身につくことを期待していた。子どもたちは日本語そのものについての知識を教えてもらえないので、丸ごと暗記するしかなかった。

具体的に言えば、検定教科書では1年生の最初にいきなり、「はい」「せんせい」という単語が出てくる。この二つの「い」には単音としての「い」、長く伸ばす音（長音）に対応する「い」の違いがある。その二つがいきなり一緒に出てくるのである。正しい知識を持たない子どもたちは同じような文字の書き間違いを繰り返していた。「これは指導法の問題だ」と明星の教師はとらえた。言語そのものを教えることと、言語活動を教えることを区別して教えることの大切さに気づいたのであった。

日常業務を抱えた教師たちが教科書を作りあげるまでには、並々ならぬ苦労があった。放課後週3日、午後6時から原稿制作に取りかかり、作業が終わるのは深夜12時過ぎだった。明星の国語科教師であった内藤哲彦は、『にっぽんご』教科書づくりの様子を次のように伝えた。「放課後、奥田先生の講義を受けながら、壁に貼った模造紙にマジックインキで文章を書き込む。みんなで一字一句検討して修正を加えていく。ときに研究協力者の先生が交代で参加する。終電に間に合うギリギリまで頑張って、深夜の井の頭公園を駅に急ぐ。徹夜になることもある。共働きだった私は学校で徹夜して、朝一番の電車で家に帰り、子どもを保育園に送りとどけてから、その足で登校し授業に臨むこともあった。」

『にっぽんご』シリーズの発行

このようにして『にっぽんご』シリーズは発行された。それには多くの人たちの協力があった。言語学者でのに宮城教育大学教授となった奥田靖雄氏をはじめ、それぞれ音声、文法、言語心理、国語研究、語彙などの専門分野の研究者（上村幸雄氏、鈴木重幸氏、鈴木康之氏、高木一彦氏、高橋太郎氏、根本今朝雄氏、宮島達夫氏ら）、全国各地の学校現場で実践している教育科学研究会の仲間たち、さらには教科書づくりにも参加したむぎ書房の浅川満氏、教科書の挿絵を描き、明星の保護者でもあった箕田源二郎氏、装丁を担当し、明星の美術工作科教師でもあった安野光雅氏などである。

『にっぽんご』と検定教科書との主たる違い

検定教科書の多くは単語や文章を読ませ、その時々におぼえこませて、かな文字を表記させている。このような丸ごと暗記させる方法を「語形法」という。この方法だと、「オハヨー」という単語を文字表記するとき、なぜ「おはよう」になるのかはわからない。子どもたちは「う」と書いて「お」と読むときもあるのだと漠然と受け取るしかない。それに対し、原則として1音1文字という規則を持った日本語のかな文字を、体系的に教えていく方法を「音声法」という。

『にっぽんご』シリーズは音声法に基づいており、「おはよう」の「う」は長音の法則にのっとってつけられた「う」なのだと、子どもたちに理解させる工夫が盛り込まれている。

子どもたちをさらに苦勞させるのが、助詞の「てにをは」である。「ヤマエイク」は「山へい

く」と表記され、「ホン[・]オ[・]ヨム」は「本[・]を[・]よむ」と表記される。『にっぽんご』では単語と単語を結び付けるときの文字を「くつつき」と呼び、「くつつき」は発音通りではなく、「え」は「へ」、「お」は「を」と文字表記する規則があるのだと教えていく。「なんでもいいから覚えなさい」ではなく、規則は規則として教えていくのである。

新潟の公立小学校の教師であった須田清は、『にっぽんご』の教科書が出版されることを知った。彼はこの教科書で教えたいがために、妻子と共に上京し、明星の教師になった。彼は明星の子どもたちに『にっぽんご』を教えた実践記録をまとめて、『かな文字の教え方』（1967年むぎ書房）という本を記した。具体的な教材・教具まで掲載され、教師たちの指導書にもなっている名著である。

例えばこんな場面がある。日本語の文字表記を使い慣れた大人たちでさえ「おう」と書くのか「おお」とかくのか迷うことが多い単語がある。王様は「おうさま」なのか「おおさま」なのかと。

この本では基本的には「おう」と表記するが、例外として次の単語は「おお」と表記されるとし、1枚の絵を掲げる。「遠くの、大きな、氷の上を、多くの、オオカミ、十ずつ、通る」が絵であらわされ、子どもたちは山を歩く狼の絵とともに、この「規則」を歌のように覚えてしまう。そしてその後はこの歌に照らし合わせて、「これはお、こっちはう」と判断することができるようになる。

このように、『にっぽんご』は日本語の体系について順序立てて学習していくための教科書なのである。

2) 自主編成教科書『わかる さんすう』

1950年代、民間研究団体がたくさん結成され、教育の内容と教育の方法の研究が盛んに行われるようになった。「歴史教育者協議会（歴教協）」「新しい絵の会」「科学教育研究協議会（科教協）」「日本作文の会」「教育科学研究会（教科研）」「数学教育協議会（数教協）」など、多くの教師が集まり活発な議論が展開された。明星学園の教師の多くはいずれかの研究団体に所属し、民間教育運動の活動家でもあった。

1951年、遠山啓^{ひらく}氏らによって結成された数学教育協議会（数教協）の研究の成果の上に、明星学園での実践を裏づけとして作られた教科書が『わかる さんすう』（1965年むぎ書房）である。

『にっぽんご』は明星学園・国語部会著になっているが、『わかる さんすう』は遠山啓氏の監修で、編集委員として明星の教師・松井幹夫、野沢茂が入っている。『にっぽんご』が教科研国語部会の全国の教師によって実践され改定を重ねたように、『わかる さんすう』もまた全国の数教協の教師たちによって実践され改定された。

この二つの教科書は、子どもたちの「なぜ」に答える内容をもち、学んだことが積み重なって、わかりやすく、子どもたちの支持を得た。それゆえ、やがてその内容の一部が検定教科書に取り入れられていった。検定教科書のなかで、数をあらわす具体物が「おはじき」から「タイル」に変えられていったのはその具体的なあらわれである。



『わかる さんすう』と検定教科書との主たる違い

1年生の繰り上りの学習「6+7」を例にとってみよう。『わかる さんすう』では十進構造を教えるのにタイルを使う。タイルには「1」をあらわす「ばらタイル」、ばらタイルが5こ集まった「5タイル（5のかんづめタイルとよぶ）」、ばらタイルが10こ集まった「10タイル（ばうタイルとよぶ）」とがある。

5以上の数を扱う時、子どもたちは、6は5と1からできていることをイメージとして持つ。同じように7は5と2からできている。「6+7」を考えると、子どもの頭は6（5と1）、7（5と2）、これがいっしょになるのだから5が2本と、ばらが3こ=13（1本と3こ）。

「5と5で10、とび出している1と2を足すと3、だから13になる」と理解し、自信を持って説明できるようになる。教師は教える必要はない。子どもたち自らが学んだことをもとに、さらに新しい事柄に踏み出すのである。「13以外の答えはないのだから教えるのは簡単だろう」と思うかもしれない。だが、その答えに到達する過程が発展性を持っているかどうかは重要だ。

1年生といえども、なぜそういう答えになるか、自分の言葉で説明できるのである。前の学習が生きているということは、子どもたちの意欲を喚起する。これは検定教科書の“おはじき”ではできない。教材としてのおはじきは、数を「かたまり」としてみる観点（5のタイル、10のタイル）を持っていないからだ。「6+7」が理解できればほかのたし算、「5+8」も「6+8」も容易に理解できる。繰り上りのある計算の仕組みが理解できると、2ケタと2ケタの計算も1年生で学習可能になる。

検定教科書では一つひとつの単元をつながりのない別々のものとして学ばせていくのに対して、『わかる さんすう』では学んだことが次に生かされ、自らが考えて発展できるように仕組みられているのである。

(2) 4・4・4 制時代の夏季生活

「4・4・4 制」が実施されていた1960（昭和35年）年代、中学年部前期の5・6年生は水泳を主とした千葉県千倉寮で、後期の7・8年生は登山を主とした長野県中軽井沢・上野原寮で、それぞれ集団生活を実施している。自然に親しみながら、教師と子ども、子ども同士の交流を持ち、集団生活を楽しんだ。

子どもたちは共に過ごす日々の中で、虫や花や魚に触れ、山や海の大きさに包まれて生活した。家から離れて、時には我慢をし、時には笑いあい、励ましあって過ごした。自主・共同・研究・規律を学び、教師たちの入念な準備と見守りの中で明星学園の精神を学んだ。

1) 千倉でのとりくみ

卒業生たちに「小学校時代で一番覚えていることは？」とたずねると「千倉の海」という答えが多い。それだけ印象深い行事であった。波が打ち寄せる海辺、生き物いっぱいの磯、きれいな砂浜を持つ千倉海岸は水泳、波乗り、海の生き物観察、岩からの飛び込み、砂の芸術と多彩な活動ができた。子どもたちは大自然の中の一週間を満喫した。千倉寮での生活はみんなでつくるみんなの世界。



千倉 瀬戸寮（千倉寮）

各部屋にみんなで工夫した飾りつけがなされ、グループで生活の決まりを作る。食事もお風呂も一緒。学校では見られない友だちの姿を知ることになる。明星の精神を育てる大事な機会と場所であった。



堤防の上で日光浴



朝の浜辺ランニング



スイカ割りの後は、おやつタイム



外海で波乗り



遠泳に挑戦



磯遊びを見守る善方先生

2) 軽井沢でのとりくみ

中学年部後期の7・8年生は3～4班に分かれ、軽井沢の上野原寮で1週間から10日間の「山の生活」を体験した。

7月の20日前後に第1班が軽井沢へ向けて出発し、次々と交代で寮を訪れた。

参加にあたり、生徒側は家族旅行などを考慮し、家庭の都合で日程を選ぶことができた。しかしなぜか各班には2学年が半々になるように、また同じクラスが固まらないようにバランスよく分けられていた。普段と違う友だちとの交流が仕組まれていた。引率の教師に加え、大学生になった卒業生も助手として参加していて、初めて会う先輩から名前も知らない上級生、下級生、そして他のクラスの同級生、異年齢の新しい顔ぶれで共同生活が行われた。



軽井沢 上野原寮（沓掛寮）



寮敷地内の林で菅野先生、原田先生と



勉強・食事もある林の中で



ハケ岳・白駒池から ゆうの頂上へ

寮でのプログラムは自然の具体的な事実や現象にふれる研究グループ活動と、登山に重点を置いた野外活動が中心であった。そのほかにも、サイクリング、フォークダンス、キャンプファイヤー、風呂焚き、洗濯、食事の手伝いなど盛りだくさんの楽しみと仕事があった。



中庭でフォークダンス



浅間山を背にサイクリング



閉寮式、班全員で記念撮影

(3)「4・4・4 制」と寮を拠点とした夏季生活

こうした夏季生活は一朝一夕にできたわけではない。創立以来継続してきた、長い間のたゆまぬ努力の上に成り立っている。あらゆる困難を乗り越え、戦争中の一時期を除き、各学年の夏季生活は毎年続けられてきた。これは、24時間教育の必要性に着目した実践であり、明星教育のなかでも重要な位置をしめていることの表れである。

1959年（昭和34）に「4・4・4 制」が導入され、その移行期前後に完成した千倉寮（1956年）と清里寮（1966年）、そして戦前から続く軽井沢寮（1930年）と合わせて三つの寮を得た学園は、低学年部・中学年部・高学年部、それぞれの成長過程に合わせ、多様多彩な夏季生活を実施した。

低学年部前期1・2年	7月、学園教室にて3日間、8月末清里寮にて3日間
低学年部後期3・4年	7月、学園にて4日間、8月末千倉寮にて4日間
中学年部前期5・6年	7月、3班に分かれ、千倉寮で7日間
中学年部後期7・8年	7月、3班に分かれ、上野原寮にて7～10日間
高学年部9・10・11年	7月、希望参加で上高地・裏磐梯高原へ。8月、千倉寮、上野原寮にて希望参加で6日間

上記のように毎年7月の千倉寮・上野原寮は、中学年部5・6年～7・8年の夏季生活の拠点であったが、8月は高学年部の自然科学・音楽・美術・バスケット・ワングル・山岳部などの各クラブが、自主的な生活の場として寮を利用していた。

4・4・4 制独自の実践として、中学年部前期5・6年の段階の水泳を主とした集団生活から、後期7・8年の登山を主とした集団生活の基礎作りのうえに立って、高学年部のクラブによる自主的な合宿生活へと発展させたのである。

清里寮では、冬のスケート合宿なども実施され、1年から12年生まで年間を通して、それぞれの学年にふさわしい合宿生活が頻繁に行われた。

三つの寮は、児童生徒の夏季生活や季節ごとの合宿生活のみならず、教師たちの研修合宿としても利用され、また卒業生や保護者たちにも広く開放されていた。

▶▶詳しくは本誌 P.86～88、50 年史 P.304～331、90 年史 P.227～237 参照

4 高学年部の実践

「4・4・4制」の実施にあたり取り組んだことは、小・中・高の教育課程の一貫性を確保するため、内容の重複を検討し精選することだった。

高学年部は、「青年期の生徒各自の能力・個性・進路に合わせた適正別コースの設定」「将来の志望に必要な専門的な学力を身につけさせる」という方針を掲げ、教科課程の再編成・生徒の生活指導にも精力的に取り組んだ。

10年段階（高校1年）で外部からの入学者が年々増加するという変則的な状況のなか、4学年（9年～12年）という幅広い生徒集団のまとまり、クラブ活動、生徒主導の行事などは、年ごとに充実していった。しかし大学・専門学校への進学希望者が多く、進学対策を含めた教科課程の改善は容易ではなく、教師たちは試行錯誤しながら研究を重ねていた。▶詳しくは50年史P.216～223参照
PTA会報『道』No.59に、「高学年部教育研究企画委員」の次のような報告がある。

全園の教育研究会が開かれるようになってから、もうだいぶたった。教師が教育の研究をするのはあたりまえのことだが、この時代のなかで一人一人の教師の孤立した善意や才能だけでは、どんなに名人芸をきたいしあっても、それが生徒の成長に役に立たないことがあきらかになってきたところから、「全園の」研究会がはじまったのだ。12年の教科プランも、新しい編成も、そこから生まれてきた。毎年春夏秋の研究会は、その成果をさらに推進していくものである。ことに高学年部は、これからだんだんに新しい成果を身につけた生徒をうけとるだけに、いよいよ本格的な研究段階に入るわけである。

高学年部のばあい、各教科のなかでさらにいくつかの課目が分化し、かなり専門的なものをふくんでいる。また、生徒のがわも、一人一人の発達がかなりちがった面をしめしてくる。そのため、これまでは全教科での公開研究授業という形式はとっていないが、春、夏の全園の研究会はもちろんのこと、秋の研究授業も教師は参加して、低・中と共通のテーマで討議するとともに、高学年部独自の問題を話しあってきた。客観的には牛歩のそしりもあるだろうが、昨年度の経過と今年度の計画をここで報告しておく。

昨年春の全園の研究会で、「教師集団と生徒集団のかかわり」、「生徒の自主的学習」などの問題が、他のいくつかの問題とともに提起された。高学年部では、さきにもいうとおり、各課目が分化して専門的になるために、授業の内容について共同の討論がむずかしい面があるかわりに、一人の生徒を多勢の教師がみるという利点がある。したがって、「生徒の自主的学習」という点に光をあてれば、共通の討議がすすむし、いやおうなしに「教師集団と生徒集団」はかかわりあう。そこで、この二つを一年間の研究課題とし、「集団による指導」・「自治会活動」・「ホーム・ルーム活動」・「教室学習」の四部門にわけ、各教科部会・学年部会・全体会議をかさねながら、話し合いをすすめた。(※27)

「4・4・4制」を実施していた1960年（昭和35）年代、高学年部の多様な学校生活の様子を、当時発行された『道』、『星雲時代』などから抜きだしてみる。

（1）教育研究「夏休み教育研究会から（高学年部）」

昨年と同様、夏休みの終わりに研究会を実施した。ただし、旅館が思うようにとれなかったので、高学年部は学校に集まり、湯河原には教科代表と有志が合流して、低、中学年部の研究会に参加する形となった。考えてみれば、研究会をスタートさせてからもうかなりの年月になった。そのかわりに牛歩の

（※27）PTA会報『道』No.59（1963年7月10日）

感もなくはないが、教育という毎日の営みの中で、一つの方向に向かってきたと言うことはたしかだ。ことに高学年部としては、あたらしい低・中・高の編成ができてからの新しい指導の積み上げを受け取る時期になっただけに、問題がはっきりしてきたというべきだ。

今年は昨年秋の集会の結果を受けて、教室学習の充実と主点を置き、各教科ごとに具体的な検討をすすめることになった。今度の研究会では、予想される問題点が提起されたが、それは次のようなことである。

第一に、これは高学年部では常に論議の中心となることだが、大学入試との関係である。明星は予備校ではない。理想とする教育をキチンと受ければ、大学入試はおそるるところではない。これは正論であるが、具体的な内容となると、口で言うほど簡単なことではない。大学入試にもたえうる力（学力も精神力も）をどのような具体的な内容と方法をもってつけていくか。しかも、それが必ずしも同じ方向をめざすものばかりでなく、かなりの幅の適正の違いを、しかも明星ほどの少人数の中で示している場合、それはどのようなものとなるか。議論はいつも堂々めぐりをしているようだが、一学年ずつの授業の内容を検討していくことで、だんだん明瞭なものになっていく方向だけはできた。ここから、逆に低・中学年部の積み上げの内容にも、学年部としての批判・要求もでてくるはずだ。これを今年は主として9年についておこなう予定。

第二に、この教室授業の充実と並行して、生徒の生活指導の問題がある。これは昨年秋の集会で明らかになったように、車の両輪である。しかも、高学年部では、低・中学年部とちがって、教室学習即生活指導とならない部分が多い。授業内容もかなり高度なものになるにしたがって、自己の学力が追いつかない、というよりも追いつかないといわれたり、自分で思ったりすることから、教室外の行動に問題が生じやすい。その上、悩みの多い青年期に入る。そこで、個人の内的な要求に答えてやらねばならず、またそれを集団としてどう組織し、自主的活動のエネルギーをどう引き出してやるか、という問題が加わる。この点に関しても、まだ積み上げにじゅうぶんでない点があるのではなからうか、そういう疑問も出てくる。まだ、われわれの一貫性がつかみたりないところがあるようだ。それも話し合おうということになっている。

教育は、いわばつねに実験といえ、実験かもしれないが、生徒の立場からは実験という態度は許されない。それだけしんどい仕事であるのだが、まさに根比べだ。生徒にも、教師にも、いろいろな性格、能力があるとしても、それが一緒にやるのが学校だ。ここまで高学年部としてはまとまってきたのだから、これからもこの歩みを進める以外ない。秋の集会も、したがって、あまりはなばなしいものではないかもしれないが、この討議を深めるだけである。(※28)

(2) 生徒の状況と自治会

生徒の現状

「生徒に一言」宮川 幸三（中・高生物教諭）

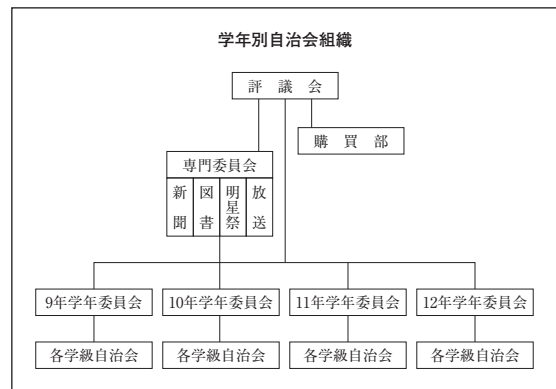
敗戦後もう18年になる。幸か不幸か諸君は戦後の混乱の中で幼児期を過ごしてきた。敗戦によって受けた親たちの自信喪失は諸君が知るすべもないが、物質的にはもちろん、精神面での虚脱感は大かった。国家観・社会観・倫理観にいたるまであらゆる面で頼るべき秩序を失ったのだから、かくして気の毒ではあるが諸君は頼りない親のしつけのもとに育ってきたのだ。いまさら高校生にもなって幼児と同じようなしつけをしようとしても滑稽である。諸君の自覚を促すのみである。近頃の生徒には先生に「あいさつ」をしないものが多すぎる。挨拶はした方がよい。一般に礼儀は人間の社会に欠くべからざるもので、封建的でもなんでもない。「遅刻」はやはりすこぶる無礼である。劇場で、「上演中の入場はご遠慮願います」とあれば、学校で「授業中の入室はご遠慮願います」としてもおかしくない。…中略…いくら楽しくてもけじめがなければいけない。「今度はA先生の時間だ。あの先生はうるさいから早く行かなくっちゃ」「今度はB先生だ。あのせんせいはゆっくり行っても平気だ」人を見て行動する

〔※28〕PTA会報『道』No.60（1963年10月31日）

とはなんと自主性のない事よ。諸君の間でよく言われている自治会の不活発の原因はこの自主性のなさ、無気力さに容易に見いだすことが出来る。諸君は教師のあやつり人形で満足しているのか。正面から教師にぶつかってきたまえ。無責任さが横行している当節ではあるが、気力あふれる人間は皆少なくとも自己に対しては責任を持っているのですぞ。自己に対してすら無責任な、真剣さが無いものは「生きている人間」とはお世辞にも言えますまい。…中略…つい欠点を評することになってしまうが長所をはめるのは非常に難しい紙面も限られているので無数にある諸君の長所についてはここでは触れない。悪しからず。「生きていく活力」は行動を禁止することから生まれてくるものとは思えない。何かやりたいことがあったら全精力を傾けてやりたまえファイトを燃やして、そこから生きがいを感じるはずだ。若さあふれる諸君の奮起を望む次第である。(※ 29)

今年の1月頃から、自治会で一番権限のあるはずの中央委員会が、組織力を欠くことになってしまった。というのは、流会が多くなり、各専門委員会もそれに乗じて活動が停滞してしまったからである。それは、それまでも会員が会員としての意識を持っていなかったことに拍車をかけることになり、会員と自治会幹部は遊離した。そんな中で3月21日に総会が開かれた。そこでは次期正副委員長を選出が行われ、推薦候補の中から多数決で決められた。ところが、選出された新委員長が家の都合で、任務に就くことが出来ない旨を申し出てきたが、代わりの委員長を見つけ出すことも不可能であった。このような事も原因の一つとなり、その頃の自治会は崩壊寸前であった。そこで自治会を正常に戻さねばならない、という意見が出た。それが以下三つの案である。

- 一、学年別自治会という新形式で、共通の問題を持って自治会を活発にする。
- 二、自治会解散論。
- 三、形式はこのままで、一部を修正し活動しやすくする。その結果、4月の総会で「一」の学年別自治会が承認され、現在にいたっているわけである。後略…(※ 30)



自治会のもと、明星祭・仮装大会・音楽祭などの行事やクラブ活動も活発に行われた。

(3) 仮装大会

明星祭は、2023年現在にいたるまで引き続き行われている伝統的な行事であるが、そのなかで、4・4・4制時代の象徴的な行事であった「仮装大会」は、1976年11月を最後に行われていない。

仮装大会とは、第1回明星祭の3年後、運動会でのプログラムの一つとして仮装行列が行われたのが始まりである。それは、1948年（昭和23）、新制高校が発足した年であり、その後形式は変化しながらも高校第1回生から続く明星ならではの行事の一つとなっていく。(※ 31)

明星創立35周年にあたる1959年（昭和34）、仮装大会は、明星祭のなかで丸一日を費やす一つ

〈※ 29〉 高校自治会機関紙『星雲時代』（1963年3月19日）

〈※ 30〉 高校自治会機関紙『星雲時代』（1963年7月13日）

〈※ 31〉 上田八郎「明星祭の生い立ち」高校自治会機関紙『星雲時代』（1956年11月18日）

の行事として実施されるようになる。

明星祭は学園主催の行事であるが、高校自治会の運営にゆだねている部分が大きく、特に仮装大会は各クラス選出の明星祭委員が主体となり、計画・運営にあっていた。

9年から11年まで、各クラス単位で一つの作品を制作・発表し、教師の審査によって順位が決定される。発表内容に関しては、規約が設けられていた。



1954年の明星祭、仮装大会の表彰式

各クラスの出費は4,000円以下の事／火を使用してはならない／動力を使用してはならない／先生が援助してはならない／演技は10分以内の事／など、その他細かく規定され、規約を破った場合は減点された。

発表の場所は高校グラウンド。360度・円形状に観客（来賓、教師、保護者、卒業生、在校生）が見守るなか、グラウンド全体を使い、クラス全員で毎日放課後遅くまで残ってつくり上げた成果を10分間の中に凝縮し、披露するのだ。

作品そのものの主題・構成・演出・衣装・舞台道具・音響効果・演技・踊りなど総合的に採点・評価され順位が決定する。受験を控えた12年は採点対象外・有志参加だったが、毎年多くの12年生が本気で参加するという熱の入れようであった。

各クラスは喧々諤々、紛糾を繰り返しながら、準備を重ねていく。そして迎えた大会当日、全クラス及び12年有志の演技が終了すると、順位の発表があり、大道具、衣装など燃やせる物をグラウンドの中央に積み上げ、キャンプファイヤーの炎が上がる。その炎を囲み、フォークダンスで手を取り合い、共に合唱する生徒たちの頬は夕焼けに染まっていた。悲喜こもごも各クラスは教室に戻り、後片付けをして仮装大会は終了する。

1960年代のPTA会報『道』、自治会機関紙『星雲時代』などに掲載された生徒の文章からは、初参加でとまどいながらも全力投球の9年生、高校受験を経て初めて参加する生徒も多いなか、一体感を強めていく10年生、3回目となり、掘り下げまとめあげる力をつけた11年生、有志参加ながら高校時代の喜び・苦しみをすべてぶつける12年生まで、仮装大会を通して成長していくそれぞれの姿が浮かび上がってくる。

4学年にわたる生徒たちが一堂に会することで得られた盛り上がり、そして4年間という経験の積み重ねが生み出す成果など、4・4・4制の利点が最大限生かされた行事だったと言えるのではないだろうか。

当時、PTA会報『道』(※32)に寄せられた教師の文章を以下に引用する。

「若さのエネルギーの爆発」 海津 修（高等学校英語科教諭）

毎年、仮装が近づくとなんとか楽しい。それというものが皆がかってないほど真剣に討論し題目を決め、一線となつて動く、そこに青年の美しさがあるからだ。

年々マナーリズムになると言われ、おびただしい時間の浪費を指摘されることはあるが、これ以上よいホームルームの結束があるのか、対策はあるのか、退屈なのは見る人の考え方と、目の覚めるような

〔※32〕 PTA会報『道』No.61（1963年12月23日）

力の不足ではないかと思い、私達も今年こそはと期待している。…中略…

11年生は仮装の内容も立派だった。協力と表現の光っていた10年、よく考えた9年と、縦の自治会さえあったら、規約にしろ熱意にしろ徹底していて、若さをたたきつけた12年のリードと共に、本当に全員が団結できたのではないか。

仮装は入賞しようと選外だろうと、それを契機にして各ホーム・ルームが知的にも高まり、強く団結し、若さがここにあることを確認することに意味がある。勝負は実はこれからだ。だからこれからの皆に期待したい。集団の力を強め、質を深め、個々勝手にぶらぶら歩き回ることが自由ではなく、一致協力した若さこそが皆の自由であると。▶▶詳しくは90年史P.243～247参照

(4) 修学旅行

高校の修学旅行は、新制高等学校が発足した1948年（昭和23）から実施している。当時、高校3年生（16回生）は1クラスであった。この年の行き先は箱根で、以後1957年（昭和32）まで、蓼科・志賀高原・裏磐梯などへ、いわゆる「修学旅行」を最終学年に実施した。1958年（昭和33）の東北旅行以後、毎年同じ所へ行く方が教育的効果が高められるという意見が大勢を占め、1968年（昭和43）まで、東北旅行が続いた。1966年（昭和41）からは、受験等であわただしい最終学年から11年（高校2年）時に実施時期を変更した。同時に最終学年の楽しい思い出になる旅行という趣旨から、見学や体験に重点を置く旅行へと内容も見直され、出発前に教師と生徒が一緒に“旅のしおり”をつくり、充実した旅行のための工夫がなされるようになった。

当時の様子を堀淳二（高等学校社会科教諭）の文章から一部引用する。

…前略 1969年（昭和44）の修学旅行は画期的なものであった。この年は伊豆に行き、先生と生徒、明星の生徒と下田北高校の生徒との話し合いをした。この旅行が終わった後、『伊豆』というパンフレットを出している。その中で内藤一（高等学校英語教諭）は次のように書いている。

「…前略 従来の月並みな修学旅行は僕の考えている限りでは、鉄道、バス、観光業者、待ちかまえる他境の風土、それらに全く貴方まかせといった主体性のない1週間という時間の集積であったように思える。

こうした反省から、修学旅行を話し合いの場にした合宿旅行にかえたのである。

…中略… 11年初頭のホーム・ルーム活動として、「何のために生きるのか、またどのように生きたいか。」という生甲斐、生き方の探求として課題化されたのは既に承知のとおりである。その後のホーム・ルームは一貫してそのことをめぐっての展開であった。

だから、合宿旅行そのものが、そうした意味での教科外活動の一つの頂点として考えられていたわけだ。こうした位置づけで合宿旅行を行った。そして、伊豆の下田北高校の生徒とは、制服・友情・自由について話しあった。『伊豆』に掲載されている片岡明子の文に「最後に（自由）ということについてだが、北校生は、未熟な高校生である以上、今は先生たちからの押さえつけがあっても良いという考えであり、明星生は、先生は押さえつけるのではなく、横から見守るようにして、生徒を引っぱっていくものだということになった。」

翌年も蔦温泉で合宿旅行が行われた。最近、生徒数が増加し、一斉に旅行を行うことが困難になってきたことと、内容の充実をはかるために新しい形の修学旅行が考えられている。単なる観光旅行ではなく、明確な目標をもついくつかの計画をたて、生徒がそのどれかを選ぶ、目標別の旅行がその一つである。昭和23年以来続けられている修学旅行は現在曲角にきているといえよう。（堀 淳二記）

▶▶詳しくは50年史P.272～274参照

5 試練の時

相次ぐ計報

1960年代前半は、教育・経営の両面にわたり、とくに大きな試練の時であった。

1963年（昭和38）に全園教務の橘正薫^{まさしげ}が急逝。以後、照井猪一郎小・中学校長、市村寅之輔理事長、上田八一郎小・中・高校長の逝去がつづき、その間、横川武事務局長の病気による退職まで重なった。この2年余の間に、学園は教育・経営の首脳部をつぎつぎに失ったのである。

橘全園教務の急逝

橘正薫は1904年（明治27）、山梨県に生まれた。山梨師範学校卒業後、県内の小学校に在職し、早くから県教育会の国語研究部委員として活躍していた。1933年（昭和8）に上京し、千葉春雄が設立した東苑書房に入社し、編集者として精力的に働いた。

教育ジャーナリストとして活動していた千葉が興した東苑書房は、子ども向けの『綴り方倶楽部』や、青年教師のための『教育東西南北』などの雑誌を出版していたが、1937年（昭和12）に日中戦争が始まると、言論統制がきびしくなり、自由な雑誌編集ができなくなった。橘は、すでに明星に在職していた山梨師範の後輩・原田満寿郎の熱心な勧めにしたがって東苑書房を辞め、1938年（昭和13）4月、明星学園に就職した。^{（※33）}

当時、学園は大きな課題に直面しており、就職から数年間で学園内のまとめ役的な存在となった橘が現場の教育に専心することを許さなかった。まず、赤井米吉・照井猪一郎・上田八一郎という強烈な三つの個性を結びつけ、明星学園というひとつの共同体の意志として方向づけていく仕事を担わねばならなかった。さらに戦後の改革期には、小・中・高等学校の一体化・一貫教育体制の確立に向けて、心ある教職員たちと全園教職員会議を置く運動を進めた。研究が進むなかで生じた教職員間の対立に際しては、互いに謙虚に学び合うことの大切さを説いた。また橘はPTAとの連携にも細やかな配慮を尽くし、さらには創立40周年記念事業の準備など、多忙を極めていた。

1963年（昭和38）6月4日、PTA常任委員会の会議中に脳溢血で倒れ、10日あまりの自宅療養の後亡くなった。享年58。



照井校長も逝く

橘正薫全園教務が急逝して半年後、1964年（昭和39）2月25日、照井猪一郎小・中学校長が他界した。76歳10か月であった。

近年、体調をくずし、3か月前の第3回公開研究会にはぜひ出席したいと頑張ったが、ついになかなかできなかった。3か月前の創立40周年記念式典に列席することもできなかった。

学園葬は3月2日、簡素ながらも盛大に行われた。



〈※33〉 原田と橘の「盟友」関係と、橘の長男・橘昭多の「親父を想う」（PTA会報『道』No.59 初出）は、『明星の年輪—明星学園60年のあゆみ』P.108～113

創立 40 周年と市村理事長の逝去

照井小・中学校長の学園葬から2か月ほどたった1964年（昭和39）5月15日、創立40周年記念式典が行われた。本来この記念式典を主宰するはずの市村寅之輔理事長は、式典の直前に体調をくずして入院し、式典には出席できなかった。

もともと実業界の人だった市村氏は、兄・市村今朝蔵氏^{※34}（学園初期の功労者で戦後間もない時期に理事長も務めた）のすすめで子どもたちを明星学園に託して以来、照井校長の人格にすっかり傾倒し、1957年（昭和32）、照井校長の懇願に応じて理事長に就任した。市村理事長は毎日のように学校へ出て、授業を参観したり、職員室で教職員と談笑したり、学園の施設・設備の状態を点検して回った。しかし、40周年記念式典から2か月後の7月24日、中学年部新校舎の完成を見ることがなく、静養先の軽井沢で逝去した。62歳であった。



上田校長の逝去と次期校長問題

1965年（昭和40）7月16日、かねて療養中であった上田八一郎校長が肺炎を併発して永眠した。享年75。2日後の7月18日、高学年部体育館で学園葬が執り行われた。

学園はわずか2年の間に、創立以来の教育・経営の中心人物を失った。照井校長逝去のときから懸案となっていた次期校長をどのようにして決めるかが焦眉の課題となってきた。

理事会は上田校長逝去後の緊急理事会で、次期校長が決まるまで赤井が校長事務取扱となることを議決した。しかし、教職員からはさまざまな意見が出され、8月14日に校長問題をテーマとする全園職員会議を開催することになった。

ここで、校長選考委員会を発足させること、選考委員会での推薦者を全園教職員による選挙または信任投票で決定すること、理事会は、その結果を尊重し任命することが提案・承認された。その結果、12月27日に小学校長に寒川道夫低学年部長、中学校長に上川淳中学年部長、高等学校長に恩地邦郎高学年部長が任命された。

翌1966年（昭和41）、1～4年生を初等部、5～8年生を中等部、9～12年生を高等部と名称変更した。



〈※34〉 本誌第1部P.93、『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』P.101～104

6 「4・4・4制」と一貫教育をめぐる論議

(1) 学内対立の激化と生徒減

「4・4・4制」が始まった1959年以後の5年間は、保護者の期待を受け、入学生は増加し、経営も安定した。しかし、創立者たちが相次いで死去し、1965年ごろから次期校長選出をめぐり学内対立が激化すると、学園の評価は下がり、生徒減は学園経営を悪化させた。4・4・4制ピーク時には1,500人台であった生徒数は、1970年には1,100人台に激減している。とくに、小中義務教育段階の児童・生徒減が大きく、経営は困難を極めた。その大きな原因は、教職員内部の対立にあった。

中等部内の夏季行事をめぐる対立

1969年（昭和44）全園会議の報告として書かれた中学校長上川 淳^{うえかわあつし}の文章を引用する。

「中等部夏季行事の中止について」

6月に入ってからのことです。夏季行事を行うことの可否、ということが突然部会にかけられました。私は、この夏季行事を、明星学園教育の重要な特色と考えていましたので、いまさらなんでこのようなことが出されたのか真意を疑いました。しかし、なんでもいい分を聞いてみることは、行事の内容を高めることにもなるだろうと、そのまま意見に耳をかたむけることにしました。そこで、多忙の時間をさいて臨時の部会を重ねました。6月6日を皮切りにして、18、20、23、24、25、26日と、それは6回にわたったのです。この間、夏季行事の中止をとる意見は、いろいろな角度から出されました。…中略…

主な反対意見

- 千倉 海が汚い・寮が非衛生・補修は予算がもったいない。
- 清里 寮建設費は無駄だった。体育館を作るべき。寮は処分すべき。
- 日常的教育活動と夏季行事がきちんと位置づけられていない。

上川校長の反論

寮施設の有効活用・経営効果を上げることや体育館建設などは理事会で検討。

日常教育活動との連携は、重視して実践してきた。欠けていたとしたら、ここ1、2年のこと。再度予備学習を強化する。

私は討論が重ねられているなかで、夏季行事の問題は全園的なことであるという観点から、校長・教頭会に2回にわたって議題にしてもらいました。そこでは、遠藤教頭をのぞき、5人がぜひ今年はやってほしいと要請しました。…中略…だが、校長教頭会の2度にわたる要請は無視され、最終的には9対6、保留2（私は採決に加わらなかった）で、中止を決めました。私は、意思の表示は認めるが、これは多数決で決定するのではなく、私が校長の責任でやることにするから、ぜひ了解してほしいと、再三再四懇願しましたが、駄目でした。…中略…私は業務命令を出しても夏季行事をやりたいと言明しました。だが考えてみると、私が強行することになると、おそらく子どもの前で学校の不統一を暴露することになるでしょう。父母もこれを聞いたなら、あきれて生徒を転校させてしまうものもあるでしょう。私は堪えがたい気持ちをもちながら、今回は中止することに決めました。…中略…

私は伝統に輝くこの行事は、必ず復活すると思います。むしろ、そのために時間をかけて検討するなら、必ず数年前に劣らない感激的な行事として、子どもにも父母にも喜んでもらえるかと確信しています。

全園のみなさん、私の力足りず、大変ご心配をかけました。以上のような次第ですので、今回の中止について、ご了解くだされ、今後を充分見守っていただきたいと思います。以上



上川淳先生

(2)「4・4・4制」の手直しは必要か

1960年代末から70年代初めにかけて、学園財政の危機が絡んで混乱を重ねた校長選出問題の背後には、「4・4・4制」と一貫教育をめぐる論議があった。

たとえば、上川淳中学校長は、PTA会報『道』No.80^(※35)に、「一貫教育と学校体制——3校長の意見」と題して、10年ほど前に発足させた「4・4・4制」の概要とその成果、欠陥と思われる点を書いている。

成果とみられること

- 1) 最初の4年間と次の4年間との切れ目は、子どもの成長段階からみても、教育的要求（教科内容を体系的に順序だてて教える）からみても適切であった。他の学校においても、5年からの教科担任強化の傾向は強まっている。
- 2) 小学校から中学校への教科の積み上げは、教科課程の編成からいっても、整備され、実践的にも効果をあげている。
- 3) 最後の4年間がまとまったことにより、高校では、生徒を把握する上で、大変やりやすくなった。
- 4) 高校の部活動が充実した。
- 5) 全園の研究交流が、教科課程や、授業面、訓育（生活指導）などで、活発とまではいかないまでも、少しずつ行われてきている。

欠陥と思われる点

- 1) 10年生（高校1年生）で大量の編入があるため、9年生の位置づけがむずかしくなっている。
- 2) 世間一般の体制とちがうため、当初から予想されたことであるが、事務的取扱いや編入生の組み入れに矛盾が出ている。（とくに7年生の場合、1クラスだけ別のクラスをつくっている）
- 3) 中学校の部活動、自治活動に矛盾が出ている。（たとえば対抗試合など、他の中学校としくい）
- 4) 全体にわたって切れ目があいまいになり、節がなくなっている感じがする。

そして、上川校長はこう付け加える。

最近、明星では9年生をどうするかで、とかくの意見が出ていますが、もし手直しを必要とするなら、12年間全体を見通して検討すべきことで、教科課程の上で8年生の上につなげておくべきだというのが、10年前にもいえたことです。義務教育の最終段階の一般的区切りを尊重すべきだということだって、やはり10年前にいえたことです。…中略…

“大岡さばき”の子どもとりあいのような、やり方はいたしません。この点をわたくしどもは、はっきり申し上げ、皆さんのご協力をお願いいたします。以上は3校長が話し合ったことをもとにまとめたものです。

(3) 9年生は8年生に続けるのがよいか

遠藤豊中学校教頭は、同誌^(※35)に「教科からの視角——明星教育発展の方途を探る」と題する長文の論考をよせ、末尾に近いところで次のように述べている。

「9年生をどうするか」という問題と、学校制度として、4・4・4制がよいとか、6・3制がよいとか、6・6制がよいかという問題は、多少異質な問題を含んでいる。

結論を先にいえば、9年生は8年生に続けて教育するシステムをとるほうが現在の状況ではよいので

（※35）明星学園PTA会報『道』No.80（1968年11月25日）

はないかと考えている。そして、まず9年生を1ラウンドとして教科のプログラムをくむことをまず第1段階として実現すべきである。

それは、9年生の問題は、単に、9年生の教育内容について、くわしく打合わせをすればよい、初・中等部が9年生の教育プログラムをつくって、高等部に送りどけるようにすればよいというような名目だけの処置によって解決のつく問題ではないからである。そうではなくて、すじみちだった知識の習得をどのようにして保証し、正しい世界観やしっかりした判断の基礎をもった子どもを、実質的にどのようにして現実のものとするかという問題だからである。だから9年生担当の教師が、中等部の校舎にきて、初中等部の教師といっしょに教育実践にとりくみ、10年生にもちあがるという方法がとればよい。…中略…

10年生から途中編入の生徒が5分の3近くもあり、生徒の学校生活にそれぞれの節をもたせることなど、いろいろな条件を考えると、わたし個人は、9年生を8年生に続けて1ラウンドとして教育できるシステムの方が現実的だと考えるのである。だがそれは必ずしも4・4制を学校の制度としていますぐ6・3制にもどすということを意味しているのではない。

9年生を8年生に続けて9学年までを1ラウンドとするという主張は、遠藤教頭のいる中学校の教職員に多かった。教育研究、とくに公開研究会に参加してくれる人たちを含めて、全国の教師たちといっしょに同じ土俵で研究を進めていくためには、8年生（中学2年生）まででは中途半端で、どうしても9年生（中学3年生）までを1ラウンドとする必要があった。

しかし、学内では4・4・4制継続が主流であり、6・3制の見直しが各所で論じられているときに後退する必要はないというのが大勢であった。一方で、高校の若手教職員が集う「若者会」は、「4・4・4制の問題を原点から明確にしていこう」と呼びかけていた。

これらのさまざまな論議がからんで、いわゆる「9年生問題」はなかなか決着がつかなかった。

（4）3校長の辞任

1965年（昭和40）12月に就任した寒川道夫小学校長、上川淳中学校長、恩地邦郎高等学校長、いわゆる“3校長”の時期は、学園財政の危機が深刻化した時期であった。

とりわけ寒川校長の場合、心ならずも事務局長として財政問題に取り組まねばならなかった。

昭和40年当時、物価上昇に伴い、人件費・物件諸経費が増加、さらに1954年（昭和29）から10年をかけて実施してきた「明星学園振興事業計画」^{（※36）}でも、建築費の高騰など、支出の増大に対し生徒数の減少により収入は激減、学園の財政は逼迫していた。

学園は財政立て直しのため、保護者代表の協力も得て経営の健全化を図ろうとしたが、刷新案はなかなかまとまらなかった。さらに教育研究をめぐる教師間の対立が顕在化し保護者の学園への不信が高まり、児童生徒数はさらに減少、退学者も続出し、悪循環は事態を一層困難にした。

こうした混乱の責任をとって、1970年（昭和45）2月1日、3校長は辞任し、鈴木満男高等学校長が小学校・中学校の校長を兼任することになった。

この間の切実な思いを、寒川道夫小学校長がPTA会報『道』No.84^{（※37）}に述べている。学園が

〈※36〉 詳しくは本誌P.164、『明星の年輪—明星学園60年のあゆみ』P.178～参照

〈※37〉 PTA会報『道』No.84（1970年3月15日）

大切にすべき基本的な考えが書かれているので、全文紹介する。

星章をはずして 寒川道夫

2月15日 日曜 晴

昨日、校長解職の辞令が届けられたので、今朝、照井先生の胸像お写真の前で、洋服の襟から学園のバッジをはずした。そして、

「先生、いろいろと長いこと、お世話になりました。学園に先生の教育的構想を發展させることのできなかった無能非力を非常に恥じお詫びします。お許しください。」と言って、深く頭をさげた。思えば22年間、この胸につけて来た星章だ。何と可憐、優美、諧調のあるバッジであろうか。これをはずすのは大いに心残りがする。しかし、今ははずさねばならぬ時だ。

そして、はずして下におくと、これでホッとしたという気持ちにもなった。

2月15日の日記の冒頭にはくはこう書きました。ほくのこのバッジに象徴される学園を非常に愛します。だから昭和23年4月10日に明星学園へ来てこのバッジを戴くと、どこへ出かける時もこれを胸にし、誇りにし、学園と共にほくの言動があり、思想があると思っています。子ども達に話している時も、力のこもった時は、いつの間にか左掌がこのバッジをしっかりとさえているほくに気がつくのです。

その明星学園——そこに学ぶ子ども達の大きな未来への光を祈りながら、ほくはこのバッジを胸からはずします。

ほくが学園をはなれるのは決してむずかしい理由ではありません。学園が未来を持つためにはぐんぐん若返らねばなりません。これは年来のほくの希望でした。ほくが学園へ来る時に、照井先生には、「教員の生命は45歳が限度と思います。一学級の子どもを相手に駆け回り、取っ組み合っとなおリードできなくなった時は教壇を去るべきだと思っています」という意味の手紙をあげたことがありました。今年ほくは間もなく60歳になります。全くうかうかと過ごしてしまって、済まない済まないと思って来ました。

照井先生のご病氣、それに続く学園の財政難などで、夢中になっているうちに、こんな無様なことになってしまったわけです。照井先生の代行という仕事をさせられるようになったのは8年前でした。3年後に先生がお亡くなりになり、翌年また全学園の校長になられた上田先生がお亡くなりになって、私共代行者は、次期校長の選定のため、全学園の教職員と共に懸命に探索しました。しかし、この大きな学園の財政難を背負って立つという方は遂に見つからなかったのです。探索半年、ある日、突然、校長はお前らが引き受けろと委員会(校長選考委員会)から言われたわけでした。これは全く思いがけないことで固辞したのですが、全教職員の推薦信任ということになれば、責任上引き受けざるを得ないはめになりました。

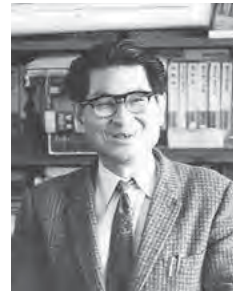
一つは校長職などは全くほくの適任ではありません。それから元来、ほくは校長という職を持つ人間に敬意を持たないことはほとんどないでした。それはもちろん公立校の校長ですが、これは国家管理の末端機構です。教育の自由の圧迫者です。だからほくはどんな時でも、「校長」となると信用できませんでした。

私立はそうではない。赤井先生、照井先生、上田先生、みな権力機構と戦う先頭に立って来られた。だからわれわれは仰ぎみることができた。しかし、それだけに、ほくなどがその役を引き受けるなど、身の程知らずに思えたのです。にもかかわらず、引き受けざるを得ないようになりました。

ほくは校長は決して権力を持つてはならないこと、金を持つてはならないことを信念として引き受けました。校長に権力を持たせないことは、教育行政の根本義です。マグナカルタは人間社会史のキーポイントです。金に動かされる人間の穢さ、くだらなさを、ほく達は毎日、新聞、TVでいやというほど見せつけられています。そういう意味で、ほくらは自分の給料もギリギリにして引き下げ、以降、定期昇給やベースアップもしないで来たのです。校長は理事にもなり、いわば経営者でもあります。

で、ほくの学校経営基本方針はごく単純です。一つはりっぱな子どもを育てるために、それこそ日本一のすぐれた教育をすること、二つは教員職員が安心してその仕事に精励できるように生活を保障してやること。そのためには、教育研究をしっかりと進めること。生徒を所要数だけ確保すること。

一年後、心ならずもほくは事務局長をさせられると、まともに財政問題ととり組まねばならなくなりました。



た。これは全く専門外で、非常に苦しい仕事でした。何よりも、もう教員ではありません。子どもに接しない教員など、岡にあがった河童のようなものです。ぼくは明星学園へこんなことをしに来たのではなかったと幾度くやしく思ったことでしょう。しかし、いい教育のため、教職員の生活安定のため、どん底にいてそれを支えることに意義を見出してがんばろうとしてきたのです。

無能非才はかくせません。教員としては生命の教育研究がバラバラになり、学園は混乱し、父母の信頼は失われて子ども達は減り、学園教育の危機を一層増大させてしまいました。しかし、これは今後のことにもかわる重大な問題なので、ここで敢えて言っておこうと思います。

明星学園が時流に先んじた教育研究校であったことは、今さら言うまでもありません。それは今度毎日出版文化賞を受けた『大正自由教育の研究』（和光大学教授中野光著）でも顕著に出ている所ですが、赤井先生の物凄い勉強ぶりや情熱とは、他を圧している観があり、それらは赤井先生の著述の数々を見ても十分に肯けることであります。これが明星学園の生命であり伝統なのです。新教育は真教育として探究され実践されて来たのです。これは学園の持つ最高の誇りというべきでありましょう。

戦後は、日教組をはじめ各種民間教育、教科研究が進むと共に、学園の勉強家がその中心的実践家として活動するに至ったことは、まさに学園の伝統に生きた実にすばらしいことだったと思います。明星学園は純粋に民間教育研究実践校なはずで。それは赤井先生、照井先生に脈々と流れている血脈です。

昭和38年の公開教育研究会の際出版した『明星の教育』（国土社刊）には（これは既に永く病床に伏せておられた照井先生のお名前をかりて、ぼくが書いたものですが。勿論出版前に照井先生のご検閲ご同意を得ています）「財界に頼らず権力に阿らず、身を削っても求めるものは真実の教育道である。今日安逸になずまず、明日栄達を夢見ず、その希望を子どもの未来に托して孜々として真理に励む情熱、ここに学園の伝統が生まれ、今日に及んでいるのである。」と述べていますが、ここに明星学園があり、ここをはずれて明星学園はないと思うのです。とにかくこうして、学園を中心として専門科学者、諸国の実践家等が集まり、学園教育に大きな寄与をするようになりました。

しかし、学園は大変混乱して今日の事態に至りました。その最大原因は、研究の深まりと共に、互いの間に対立が生じたということです。（一つは研究が個別教科の研究に深入りせざるをえない過渡的現象でもあります）それは学内のみならず、外の民間教育諸団体の間にも現出して来たのですが、研究からのおちこぼれ者は別として、その依拠する基礎科学や補助科学が違うことから生ずる成果の違い、また、自分の成果を誇り広めようとする競争心から、自説のみを主張するに急で、他の研究に耳を貸さぬ偏狭さ、そこから来る排他性、傲慢性が、研究会そのものを成立させないということが、しばしばありました。それがそのまま学園内に持ち込まれたのです。それに対して、学園教育の統体性一貫性の上から、互いに謙虚に学び合うように進めることが、ぼくの任務だったにもかかわらず、遂にそれは何の成果もあげえず、対立を深めるのみということになりました。

学園が4・4・4制に踏み出したことも、学園の教育研究の一つの成果だと思えますし、それが何よりも子どもの心身の発達に即した学制であるということにおいて、誰にも誇っていいことだと思いますが、個別教科研究一本の時点では、4・4・4制の基礎理論そのものが忘却され、形骸化したことはまことに残念です。これを復活することに学園教育の回生を考えて、ぼくは、各部教育の独自性と全学園教育の一貫性を強調して来ましたが、全学園を吸引することはできないでしまいました。これについての努力はここ両三年校教務会、全園教科部会などで基礎提案をまとめるようにして来たのですが、対立は深く、果ては人生観、科学観、教育観の差異にまでおよび、統一の容易でない事を思わせるだけでした。だから理論的探求だけでなく、実践（授業）によって具体的な問題把握から進めねばなるまいという提案もして来たのであります。

ともあれ、何よりもこのような教師間の対立不統一を直接被害として受けるのは子ども達です。ひいては父母も何を信ずべきかに迷い、不安動揺します。

そういうことが学園教育への不信となり、入学生は激減し、退学生も続出する。それがさらに教師間の対立を深める原因を造るということになったのです。

教育は人なのです。「人間が人間によって人間にまで育てる」といったカントの言葉は至言です。「人間は人間を教育できない」と言う人間もありますが、そういう人間もいます。そういう人間は、即刻、教育の場から去るのが至当です。教育研究は教師たる人間を作る手段ですから、これをないがしろにして人間はあり

得ないのです。しかし、研究したことがその人間の血肉として消化されていなければ、人を育てる力にはなりません。ましてや、一教科に精通しただけでは、この複雑微妙にして壮大なオルガンたる人間＝子どもを教育する力にはなりえないのです。

要は、教師たる人間、そのものの持つ大きな深さ、そして人間としてのあたたかさ（そこに歴史人として社会人としての全てを含めての）が子どもを育てる力を持ち得るのです。

そういう資格は、絶えず勉強している教師のみが持ちうるのです。子どもと遊び、子どもと苦楽を共にし、子どもに学び、のびる教師にしてはじめて獲得できるのです。

ほくは以上のような観点から、いわゆる教育研究派といわれた人達の傲慢不遜と思われるような研究態度をきびしく戒めたいと思います。しかし、それをせめると同時に、その人達のなしとげて来た成果をも無視してはならぬことを言いたいと思います。…中略…

『にっぽんご』6巻や『自然科学の教育』、『明星の算数』で今できつつある理科教科書などは実に周知緻密立派な科学的探究の成果です。仔細な点はほくにも異論はありますが、明星学園の中でこれが本当に実践的に生かされていくべき大きな収穫だと思います。

けれども、こういうことを考えねばなりません。二宮尊徳が桶を作る譬え話を出して、桶は一枚一枚の板を組み合わせて作る。水の容量は、その板の長さできまる。けれどもそれには全体的調和が必要なので、一枚二枚だけぐんと長くしてもいや、みんな長くしても、一枚だけ短ければ、水はその深さしかはいらない、と言っています。面白い比喩ですが、人間のような複雑なオルガンは、一つや二つの教科だけで育てられるのではない。全体的調和の上で、子どもの人間的容量、その人格資質は育てられていくのです。

そういう意味で、明星学園の教育研究はまだまだうんと謙虚に誠実に、孜々として続けられねばならない全教師集団の大課題です。

しかし、教育研究は、決して研究のための研究ではなく、実践のため、一人一人の子どもを、その能力にふさわしいすばらしい人間に育てるための確かなすじ道、支えを探り求めることにあるのはいうまでもありません。

教育は、学校は、絶対に人間を傷つけるところではありません。ふとした失敗、マイナスがあっても、獣たちはどんな傷でもなめ合っていたわり癒すといわれているように、あたたかくやさしく育て合うところです。

「善人なおもて往生す。いわんや悪人をや」は『歎異抄』中のことばに終らせてはならない。教育の場こそ、皆が、教師がこの心で力を合わせ、子ども達に臨む、あたたかい、外敵不可侵の場でなければなりません。

「教育基本法」さえ、「如何なる不当なる支配にも屈することなく」あることが正常な教育としているのです。これは明星学園創学の精神でもありました。教育の真生命は自主的自律的な協働社会人を育てることにあります。子ども達をそのように育てるためには、先ず何よりも教師自身が、何物にも依りかからず、侵されぬ自主自律性を持たねばならぬこと、いうまでもないことであります。そういう意味においてほくは、明星学園教師職員が、一致協力して自主的にこの教育的原点の恢復に奮起すべき時だと思うのであります。

今日の混乱をひきおこした責任者として、ほくは既にその発言の資格は失っていますが、熱愛する学園、そして子ども達のため、あえて乞われるまま最後のことばを走り書きました。長い間、この至らぬ人間に本当に有難うございました。皆さまのあたたかい聡明なご理解とご援助に心から感謝し、それを十分に生かせなかった自分を恥じ、おわび申し上げます。ここで蟄居しながら、今まで空虚になっていた勉強をとりかえて自分を恢復していきたいと思っています。

洗心掬七泉　　こころを洗うに七泉をくみ

吟詠托白雲　　吟詠して白雲に託す

（七泉は七井の泉　井の頭の池水のこと）

この頃こんな心境であります。学園の前途はなおきびしいでしょう。しかし、発展を信じいのり、子ども達がすくすくのびるよう、また皆さまがご健康でいられるようと祈ります。なかなか捌き難いペンですが、ここで捌きます。机上の赤いバッジをこよなく愛しいものに思いながら。（2月16日夜）

(5) 9年生は中学校へ——鈴木校長の提案

1970年（昭和45）2月、寒川道夫・上川淳・恩地邦郎の小・中・高3校長の辞意表明にともない、鈴木満男高等学校長が中学校長・小学校長を兼ねることになった。3校長から1校長への移行である。鈴木校長は、全園教職員が一致協力して教育経営に尽力することを強く訴えた。

…前略 現在、明星学園がおかれている立場というものは、寸毫の感傷性も許されないきびしいものであり、要求されるものは絶えざる前向きの姿勢なのである。いたずらな回顧趣味にとらわれることなく、学園の伝統の中から、学園を46年間支えてきた価値あるものを再発掘し、再評価し、学園の教育理念を一層明確なものにしていかなければならない。教育理念の明確化は、学園の教育の独自性を明確にすることであり、そのことは同時に、教育課程そのものに具体的にあらわされなければならないものである。

ところで、教育課程の編成が上意下達というすじみちによってなされるものではないことは改めていうまでもないことである。ひとりびとりの教師が日常その職場の中で考え、創造し、実践したことを、教師集団の総力によって一つの体系にまで昇華させていかなければならないのである。

勿論このことは容易にできることではない。その過程は試行錯誤のくりかえしであるばかりではなく、また、完成という到達するあるいは永遠に得られないいとなみなのかもしれない。

そうした中でわれわれに要求されることは謙虚な姿勢であり、独善を排するきびしい態度である。いたずらな対立意識にふりまわされることなく、視線を児童生徒にすえることである。

そしてまた、教育課程の自主的編成の「自主的」の意味についても改めて考えてみる必要があるだろう。自ら考え、創造し、実践する……そこには権威主義の介入は許されない。ここでいう権威主義とは、なにも国家の文教政策のみを指しているのではない。一つの集団の中に党派が生じ、それぞれの党派が対立し、善悪という単純論理でことを処理しようとするときにも、そこに権威主義の影が射しはじめる。——教育という仕事は他の企業とちがひ、評価の基準が主観的になりがちなため、そこに一種の党派性が生じてくる余地が多分にあるように思われる——

さらに、イデオロギイ的な対立がはげしくさまざまな情報が日夜氾濫している現在、知らず知らずのうちに自己を喪失し、一種の権威主義に陥っていることもありうる。

われわれはそれらの諸点について改めて思いをいたし、児童生徒の中にわれわれの現在までの教育がどのように定着しているかを総点検し、欠落は欠落として謙虚に反省しながら、明星学園の教育課程の編成を自主的に進めて行かなければならない。

次に3部（初等部・中等部・高等部）の校長就任以来約半年間の経過について著すことにする。

前述したとおり、校長は確かに管理職ではあるが、上意下達の頂点にあつて教育内容を規定して行くといった性格のものではない。それぞれの部、また3部によって構成された全園の教師集団の自主的な教育実践を推進して行くこと、これが校長に課せられた最大の任務であろう。そのためには組織の手直しが必要であつた。そのことについては2月以降、校教務会（校長教頭会）を中心にして仕事を進めてきた。…中略…それぞれの委員会（校教務会、教科部会、行事委員会）の具体的な仕事の進み具合その内容については、必要があれば報告するが、基本的な姿勢としては、相互不信の克服の上に立つて、前述したように、学園の教育理念、学園教育の独自性を明確にし、教育課程を自主的に編成して行こうということである。後略…（1970年8月20日）※38



鈴木満男先生

2年後の1972年（昭和47）、鈴木校長は、12年一貫教育をくずすことなく、区切りの問題とし

※38）PTA会報『道』No.85（1970年10月20日）P.2

て、9年生を8年生に続くものとするという校長提案を小・中・高各部に提出した。この提案は各部ごとに検討された上で、5月31日、全園教職員会議にかけられた。全園の会議には学園教育顧問の金沢嘉市氏も出席された。

鈴木校長は二つの提案を行っている。

〔提案1〕12ヶ年一貫教育の一層の推進を計ると共に、現行4・4・4制の区切りについては、教育上、経営上の両面から検討し、既往にこだわらず常に柔軟な姿勢で対処して行く。

〔提案2〕現在の中・高の区切りについては、昭和48年度、49年度のいずれかの時期に9・10年の間に移行させる。

提案の理由は下記のとおり。

- 1) 4・4・4制の出発当初、比較的僅少であった10年の編入生数が、近年諸般の事情により増大し、それにともない8年から9年への移行によって生ずる環境変化、9年から10年への進学時におけるクラス編成替え等による環境変化が重なるため、8・9年間の区切りについて検討する必要性が生じた。
- 2) カリキュラム編成上、9年と10年以上の学年では異なった要素があり、その両面を高等部として充実させて行くことは、生徒数の増大等の理由も加わってかなり困難である。それよりむしろ9年については、学年の構成員が同じである8年の延長とし、中・高共同してカリキュラムを整備し、高等部は多くの新入生をむかえる10年をもって新たな出発点とし、10年、11年、12年の3学年の教育内容の一層の充実を計ることが急務ではなかろうか。
- 3) 高等部の近年の生徒数増大にともない、施設、設備の面でも飽和状態に近づいている。さらに、来年度の新10年を1学級40名、6学級編成とすれば、現行区切りでは収容能力が限界に達する。

以上の提案を検討した結果、〔提案1〕については全員一致で承認され、〔提案2〕については理事会の意見をも勘案した上で校長の結論に一任することが承認された。

(6)「4・4・4制」の廃止

保護者には1972年（昭和47）10月15日付けのお知らせで、上記の内容と、来年度から9年生を中等部へ移すこと、そのためのカリキュラム、人事、施設・設備を整備中であることを通知した。

移行のための準備期間を経て、1973年（昭和48）度末に「4・4・4制」は廃止された。

1974年（昭和49）4月、9年生（45回生）は中等部へ移動し、井の頭キャンパス「1年～9年」は明星学園小・中学校、牟礼キャンパス「10年～12年」は明星学園高等学校と呼ばれるようになった。

「1年～12年」という学年の呼称は、学園が目指す一貫教育の象徴といえるものである。「4・4・4」という区切りは変更されたが、呼称はそのまま残され、現在も引き継がれている。(※39)

「4・4・4制」の廃止は、生徒減という学園の財政危機を背景に、生徒募集がしやすい「6・3・3制」を選択したとも思われる。しかし、教育カリキュラムへの新しい試みが十分検討されたかという点、不十分な点が多く、志なかばでの廃止に残念な思いを持つ教員も少なくなかった。

〔※39〕『明星の年輪—明星学園60年のあゆみ』P.201～204

元高校英語科教諭 井部高志の思い（「90年史」への寄稿文より）

…前略 列車 100 本が立ち往生、乗客 15 万人が車内で越年という豪雪で明けた翌年 61 年。何の縁故もなく、やっとのことで明星学園高校に職を得た私は 22 歳の若輩でした。

明星という名は知らぬわけではない。前の年のある時、偶然ある本屋でたしか『サンデー毎日』をめぐってみると、明星「4・4・4 制」という文字が飛び込んできたのです。

さて、4 月。教師として初めての新学期。希望に胸を、などは別世界の言葉。鬱々たる気分でもこの馬の骨ともしれぬこの身を拾い上げてくれた奇特新学園とはいかなものかと臨んだ担当授業は、晴れて(?) この年高校に組み込まれることになった 9 年生（中学 3 年）と 11 年生（高校 2 年）。危惧していた通りの出来映え。気を晴らすべくアルコールやタバコに手を出したのもこの頃のことでした。生徒側に難があったわけではない。責は私の力量不足。生徒たちは状況を運命(?) と受け入れ、勉学に臨む姿勢は健気でさえありました。

それから 4・4・4 制はどうなったか。残念ながら 1972 年 10 月 15 日、翌年より 9 年生は中等部へ移す、との決定が父母にも知られることになりました。挫折といえは挫折。小・中学校対高校の間に種々軋轢があったのは厳然たる事実として認めざるを得ない。生徒に因があったわけではない。因は専ら教職員間の相互理解の欠如と相互不信に有ったと改悟すべきでしょう。言い換えれば、明星は世に先んじて困難な海に舟を乗り入れたものの、それを操縦する術を乗員全体に浸透しえなかった、と自戒すべきではないでしょうか。しかし、海は無限であり、4・4・4 制の火種は彼の世のものになったわけではない。

赤井学園長の逝去と学園葬

創立以来、学園をささえてきた首脳部の相次ぐ逝去、生徒減、「4・4・4 制」の廃止など、学園は大きな転換の渦のなかにあった。そうしたなか、体調を崩していた赤井米吉学園長は、1974 年（昭和 49）2 月 26 日、学園を案じつつその生涯を閉じた。86 歳 8 か月であった。

前年の秋から極度の貧血のため、三井記念病院に入退院を繰り返していたが、2 月 15 日、容態が急変し、自宅から近い森本病院に救急搬送され、26 日逝去した。



3 月 9 日、落成したばかりの第 2 体育館で、午前学内の追悼式、つづいて遺族によるキリスト教式の葬儀が行われ、午後には赤井学園長から「明星学園を頼む」と託された衣笠武夫理事長が決意を述べ、学園葬がしめやかに執りおこなわれた。

赤井学園長の逝去をうけて、高等学校新聞部発行の『星雲時代』復刊第 1 号（1974 年 3 月 21 日）、PTA 会報『道』No.93（1974 年 9 月 20 日）、明星会会報 No.14（1974 年秋）等、関係各機関の刊行物には相次いで赤井先生への追悼文が載せられた。ここでは PTA 会報『道』No.93 から、卒業生（4 回生）で音楽科教諭、明星会会長も務めた北川氏の追悼文を紹介する。

赤井先生のこと

北川（井野）富枝

赤井先生は、八十八才の長寿をまっとうされ、天に召されました。天上の神のみもとで心安らかに明星を見守って下さっておられることと思います。キリスト教的な言葉で申せば神に召され幸なことと申しあげるのでしょうが、誠に残念なことで、二月の御逝去以来心が沈んでなりません。老後を過ごしておられた先生に対し精神的にも、物質的にも何一つお報いすることが無かったことが悔いられます。誠に申し訳ないことでした。

赤井先生は明星学園創立以来どれだけ学園のために盡されたことか。そして先生を先頭に多くの先生方の意志と努力を集積されよい教育を学園に残されたのです。

明星学園のPTAの名簿には学園長としてお名前はのっておりますが、先生の数々の御苦勞を知る者は少ないことでしょう。このように明星学園が存在していることは先生とその御苦勞の上に立っていると申せましょう。

自由で革新的な教育を目指し、子どもは自然の中でこそ教育されるべきだとの観点に立ち、この地をえらばれたとききました。

当時の封建的な社会状況の中では並々ならぬ決意と努力がなければ出来なかったことと想像します。林と野原の真中に粗末で簡素な校舎でしたが子ども達にとっては幸福でした。運動場もその頃は広すぎると思われる位に感じました。がそのよい教育にもかかわらず経済的には多難で、創立者としてそのことに心を砕いておられたようです。

運動場の中央に立ち、しばし腕組みをして考えにふけておられる姿を度々お見かけ致し、子ども心にも「園長さん大変なんだなあ」と思ったものでした。

赤井先生はよく講堂で皆にお話をなさいました。感情の波がわりあい激しい方のように見えました。がこれも苦勞なさっておられた故かと今にして思われます。お話の途中泣き出して仕舞われた事もありました。その当時は先生にとって試練の連続で有ったことでしょう。悪い経済状態にありながらも先生は教育界において活躍なさり、世界教育会議にも出席されたり、著作も多く又先生は英語が堪能で訳本も数多く出されておられました。先生は話がうまく、私は後日子どもの親となりその講演をおきした時にはその話のうまさに驚きました。順序だててわかりやすく、その内容は豊富でした。

学生の頃聞いた話の中で感銘深い言葉が有りました。先生は英語で外国の格言を話の中でおしえて下さいました。その一つは、人は独りであることはよくないことである。その人のためになる友人がなければならない。だからよい友人になってやらなければならないし、自分もよい友人を持たなければならないという意味の言葉でした。先生は学園の教育の柱の一つとしてこの交友ということを重要視され心を配られておられました。現在の明星でもクラスの中にはかならず一人位は誰とも話をせず、一緒に遊びもせずに一人でポツネンとしている子供を見かけますが、この言葉を思い出し、胸が痛くなります。皆の力で何とかならないものかと、授業を中断し、いじめられたと涙ぐんでいる子を中心に話し合い、次からは仲間に入れるからということで解決はするのですが、またもとの状態にかえて仕舞うことがあります。自分の非力に情けなくなります。本当に何とかしなければなりません。

最後に最も印象深い言葉は、「如何なる逆境においても、口笛を吹きながら行こう」という言葉です。若く多感な年頃にきいた言葉なので今でもその言葉が焼きついて離れません。それ以来常にこの言葉を思い出し、どんな時にも悲しみに負けず生活してゆこうと思います。赤井先生からは良いものを沢山いただきました。

本当に有難いことだと感謝いたしております。今は亡き先生の霊安かれと祈ってやみません。

▶▶北川富枝先生の父御は学園草創期の功勞者・井野正次郎氏。詳しくは本誌P.93、50年史P.100参照



(7)「4・4・4制」とひとつの時代の終焉

学園創立 35 周年にあたる 1959 年から 1973 年までの 14 年間、明星で試みられた「4・4・4 制」は、その幕を閉じた。

前項でも述べてきたが、「4・4・4 制」では、12 年を通した教科の一貫性と内容の改善、児童生徒の発達段階に応じた学習形態の構築を目指していた。「生徒の個性を伸ばす高能率の学習とは何か」と、模索した結果から生まれた先進的な構想であった。▶▶詳しくは 50 年史 P.217 参照

「私立学校は常に公立に対して教育面の啓蒙をしなければいけない」

「教師という仕事は、子どもが家庭や社会から無条件に取り入れた経験を整理して一つの知識として編集し直してやるのが役目なのだ。社会はめざましい進歩をしているのに、いつまでも従来の方法で教育するのは教育者の怠慢というもののだ」

という照井猪一郎校長の信念が、「4・4・4 制」という新しい教育実践に表現されたとも言える。

成果としては、教育実践・教育研究・一貫体制推進という面で少なからず良い結果を得られはじめ、さらなる充実を図るべく研究が重ねられていた。生徒数も導入から数年は飛躍的に増加した。

一方で外部での評判が高まると、さらに教科研究の充実の面から 9 年生（中学 3 年）までをつづけて中学キャンパスにおきたいという小・中学校と、「4・4・4 制」を堅持するという意見が大半をしめる高等学校との間で論争が起きた。また教育研究をめぐる教師間の対立が感情的なものに発展し、学内は混乱状態に陥っていた。▶▶詳しくは本誌 P.190、50 年史 P.223 参照

その背景には、学園をまとめる体制が崩れていたことがあげられる。「4・4・4 制」発足数年後の 1963 年、小中高全体をまとめ、制度の推進を担っていた全園教務部長の橘正薫が会議中にたおれて間もなく死去、その翌年には照井猪一郎小・中学校長、市村寅之輔理事長、上田八一郎高等学校長が、ほとんど 6 か月おきに死去し、学園葬がつづいていた。

後継者選びにおいても学内の対立が激化し、「4・4・4 制」の根幹をなす学内一貫体制の維持そのものが困難な状況となっていたのだ。学園は保護者の信頼を失い、生徒減に拍車をかけた。

創立以来学園をささえてきた大きな柱を短期間に亡くし、学内の混乱に端を発する生徒減とそれに伴う財政難、これらの責を負うかたちで学園を去った熟練教師……。

さらに 1974 年 2 月、赤井米吉学園長が他界し、3 月、「4・4・4 制」が廃止された。

1974 年 5 月の創立 50 周年を目前にして、明星学園は多くのものを失った。

半世紀近く続いていた創立同人を核とする時代が終焉を迎えたのである。

しかし、「4・4・4 制」という画期的な試みと、その当時を改めて振り返ってみると、その後に続く「明星学園の文化」ともいえる多くの遺産を築いた時期であったのではないだろうか。

第4部 一貫教育の新たな展開

1970年代～1990年代



旧ジグザグ校舎の前で遊ぶ子どもたち（1999年撮影）。
各教室の前はクラス専用の庭でありながら、走り回れる広さと奥行きも確保されていた。

第1章 4・4・4制後の明星

1 教育をめぐる状況と明星

(1) 1970年代の風潮

明星学園が創立50周年を翌年に控えた1973年（昭和48）、日本は「オイルショック」に見舞われた。ガソリン・紙などの品不足の噂が流れ、スーパーマーケットにトイレットペーパーを買いだめする客が殺到した。オイルショック以後、日本経済は高度成長から低成長に転じ、それぞれの企業は生き残りをかけて競争の時代に移っていく。

この時期、子どもたちの間に、いじめ、不登校、自殺などがかつてなく増えた。生徒の校内暴力が教師に対する暴力へとエスカレートし、それに対抗するように教師による体罰と管理による抑圧も進んだ。苦悩する教師も多くなった。

いっぽう、1975年（昭和50）には、高校、大学への進学率はそれぞれ94%、35%に達し、受験競争が激化した。受験産業が急成長し、偏差値による高校・大学のランクづけが進んだ。受験のための競争は低年齢化し、小学生のうちから塾に通う子どもたちが増えた。東京などの大都市では、夜遅く、塾のカバンを背負った勉強帰りの小学生が電車に乗り込んでくる光景が見られた。

こういう風潮のなかで、全国の教師たちの間で、「学校は何をやる場所か」と改めて学校を問い直す営みがつづいた。

(2) 学校改革への実践

学校の再生をめざす教育実践は、全国各地で多様に展開されていた。そのひとつ、1960年代から70年代初めにかけての山梨県巨摩中学校の実践は、公立学校における創造的な学校づくりとして知られた。

生徒手帳に書いてあった56項目の「生活のきまり」を、生徒総会の議題としてとりあげ、議論をかさねて全廃する生徒たち。作文、合唱、演劇などの表現活動に主体的にとりくむ生徒たち。検定教科書におんぶしていた授業を捨て、自分たちで教材・教具を工夫し、子どもたちと苦楽をともにしながら授業を創る教師たち。12年間の学校づくりの記録は、久保島信保著『ぼくたちの学校革命——山梨県巨摩中学校の記録——』（※1）にまとめられている。

明星学園中学校の全生徒もこの巨摩中学校を訪問し、教師とともに交流を深めた。しかし、全国的に注目された巨摩中学校の公開研究会は、1974年（昭和49）、行政の方針変更により突然中止され、当時の教職員は教員異動のため、その後の3年間で巨摩中学校にはひとりもいなくなってしまった。これは公立中学校での自主的な学校改革が、この後いかに困難になっていくかを如実に示している。

明星学園は、次にみるように、小・中学校、高等学校それぞれに改革を進めながら新しい実践を積み上げていく。しかし、小・中・高全体の教職員の力で克服していかなければならない問題をもかかえていた。

〈※1〉 久保島信保『ぼくたちの学校革命——山梨県巨摩中学校の記録——』（中公新書、1974年）久保島は元巨摩中学校教師で、のちに明星学園小・中学校でも美術を教えた。

(3) 1970年代の明星

1970年（昭和45）3月、寒川・上川・恩地3校長の辞任後、鈴木満男は小学校・中学校・高等学校すべての校長を兼務していた。就任以来、学校制度や人事問題などについて対応を重ねていたが、教職員が100名をこえる体制のなか、問題解決への道のりは険しかった。

1973年（昭和48）、「4・4・4制」の廃止後は、9年生の中等部移行に伴う教育上の問題、施設の更新、小・中一体化実現へ向けた検討などが加わった。激務の続いた鈴木校長は、入院が必要な状態となり、小・中・高の校長を辞任する旨、衣笠武夫理事長宛に文書を提出した。

1974年（昭和49）、鈴木校長の辞表が理事長扱いとなるなか、小・中学校では、2月から遠藤豊が校長代行となり、小・中一体化実現の方策を検討しながら、教育活動を行っていた。

同年末、理事会は鈴木校長の小・中校長の辞任を了承し、後任には遠藤豊代行の昇任を決議。高等学校長は、退院後、高等学校の仕事に打ち込んでいた鈴木校長が留任となった。

全国教職員会の討議後、小・中部会^{（※2）}の信任を得て、遠藤豊の小・中学校校長が決定した。

1975年（昭和50）、小学校・中学校の校長は遠藤豊、教頭に無着成恭、高等学校校長は鈴木満男、教頭に加藤信夫という新体制での学校運営が始まった。▶▶詳しくは60年史^{（※3）} P.161 参照

2 創立50周年

記念式典

1974年（昭和49）5月15日、学園は創立50周年を迎えた。前年度の「4・4・4制」から「6・3・3制」への移行、2月の赤井米吉学園長の逝去など、学園にとって大きな過渡期といえる時期だった。

創立50周年記念式典は、半年後の11月3日・4日の2日間にわたり行われた。

記念式典・祝賀パーティーの開催、またこれまでに亡くなった創立同人・学園関係者を偲ぶ慰霊祭、歴史展なども行われ、記念出版として、『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』^{（※4）}が発行された。

初めての学園史『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』発行

明星学園として初めて学園史、『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』の発行が実現した。

それ以前には、明星学園文芸部（中学・高校の生徒で構成）による『25周年記念誌』、『35周年記念誌』、明星学園PTA会報『30周年記念号』などが発行されているが、学園としては30周年を機に学園史発行の準備を進めていたものの実現には至らなかった。▶▶60年史 P.107 参照

40周年に向けては、橘正薫^{まさしげ}全園教務が中心となって具体化に情熱を注いでいたが、学園の教育管理から運営・経営まで多岐にわたる重積を担っていた橘は、会議中に発病し急逝した。相次いで、照井猪一郎校長・市村寅之輔理事長も逝去し、40周年記念学園史も発行できなかった。

〈※2〉 小・中部会（部会→教職員会議の明星学園内での名称）

〈※3〉 『明星の年輪—明星学園60年のあゆみ』 = 「60年史」と略す（以下同様）

〈※4〉 『明星の年輪—明星学園70年のあゆみ』 年表 P.27

50年史の編集責任者に就任した原田満寿郎（元教諭・元理事）は、橘の思いを受け、以下の一文を書いている。

橘正薫が明星学園という湖に投げたいいくつかの石の波紋の痕跡は、あちこちの岸辺に消えずに残っている。しかし何人がそれを知っているであろうか。またそのことを語っても何人が知ろうとするであろうか。

湖の底に沈んだ故人の投げた何個かの石は時と共に砂や泥土に埋まってしまったとしても、湖底に存在しているのは確かなことだ。

原田は散逸している資料の蒐集・発掘に2カ年を費やし、その後発足した編集委員会とともに、さらに2年近くをかけて『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』を完成させた。

原田は、同誌の巻末に編集に際しての思いや「題名」に関して述べているので、一部を以下に紹介する。〈※5〉

明星学園の創立50周年にあたり、私たちは学園に対する限りない愛情と、絶えなき情熱を傾けて『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』を編集した。

50年の彼方に輝く往時を顧みて、創業の精神に思いを馳せ、過去につながる現在、現在につながる未来への前進のために、明星学園のあゆみを浮き彫りにしようと努めた。…中略…

この一巻は50年の歩みのことごとくを凝縮したものではなく、50年という時間の流れを背景に、さまざまな史料をもとに学園を多角的にとらえようとしたのである。「50年史」と銘打つよりも創立同人および創設期の後援者の伝記、旧教職員・卒業生の手記による秘話・小話などをも点描した収録的性格のものであるから『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』と題した。

表紙のいちょうは、開校の翌日、21人の子どもと4人の教師とで植えたもの。まさに50年の年輪が刻まれている。題字は創立同人の照井げん先生の筆。表紙写真…林一夫氏（9回生）

編集にあたり、赤井米吉創立者・照井げん創立同人はじめ学園内の方々はもちろん、旧教職員・同窓生など広汎な方々の労をわずらわせた…中略…

この本の上梓を一日千秋の思いをこめて待ちわび、去る2月に他界された故赤井米吉学園長、十数年前学園史の骨格を企図し具体化構想中に急逝された故橘正薫教務局長始め、旧職員・学園後援者・卒業生の霊に深く感謝申し上げるとともに、今後多くの方々のご教示をいただきたい。後略…

明星学園50年史編集委員会 編集委員代表 原田 満寿郎

50周年記念・施設整備事業計画

衣笠武夫理事長を中心とする理事会は、50周年の記念事業として、学校施設の整備拡大に着手することを決定した。これまでの数年間、学園は内外ともに多難な時期で、財政的にも苦境に立たされていた。そのため、1954年（昭和29）から30周年記念事業として進めていた校舎の増改築、敷地拡大は、中断を余儀なくされていた。

1972年（昭和47）、生徒数の回復と財政の立ち直りを認識した理事会は、1974年（昭和49）の50周年を期に事業を再開し、千倉寮、小・中音楽室の増改築を行った。

1977年（昭和53）春には、老朽化した高校の木造校舎を、鉄筋コンクリート3階建てに建て替え、特別教室の改造、運動場、校地外周の整備も行った。

〈※5〉 『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』P.384、385

3 小・中学校の実践

(1) 明星学園小・中学校の方針

4・4・4制の廃止に伴い9年生が井の頭キャンパスに移り、「明星学園小・中学校」と呼ばれるようになった。小学校と中学校の教員組織は一つとなった。遠藤豊校長、無着成恭教頭の主導のもとで、教材の精選、体系化を重視した教科カリキュラムを作成し、「人間教育の追求」というテーマが打ち出された。

「人間教育の追求」と題して掲載された論文は次のような趣旨内容を持っていた。

教育は本来、人間が長い間にわたって創り出し蓄えてきた文化や知識や技術を、創造的なしかたで学びとらせることによって、ひとりひとりの子どもを、すぐれた知性と豊かな感情と健康なからだの持ち主に育てることにある。

その目的を果たすため、授業は教師が一方的に教えこむというのではなく、教師と子どもがいっしょになって創り出すものである。子どもたちは教材を自分の課題として受けとめ、自分のことばで、自分のからだで表現する。そのことのなかで学び合う。そして、子どものなかに深くしまい込まれていた可能性が引き出され、子どもたちは自分の生き方を創っていくのである。

こうして教育方針を次のように4つ上げ、ことあるたびに具体的な事例をあげて保護者に伝えた。

明星学園小・中学校の教育方針

- ①ひとりひとりの子どもを、くっきりとした個性と自由な精神の持ち主に育てる。
- ②基本的な知識を、より発見的、より形成的に学びとることによって知性をみがく。
- ③芸術による教育を重視し、表現活動を充実させて感動を豊かにする能力を育てる。
- ④実践的・実技的な諸活動を強めて、頭とからだのはたらきを結びつけ積極的な行動への意欲や能力を育てる。

教科の編成と週当たり授業時数

小学校

学年	教科	国語	社会	算数	理科	総合	音楽	美術	工作	体育	計
1年		8		5		2	3	2		3	23
2年		8		5		2	3	2		3	23
3年		8		5		2	3	2		3	23
4年		7	3	5	4		2	2	2	3	28
5年		7	3	6	4		2	2	2	3	29
6年		7	4	6	4		2	2	2	3	30

※総合は「生活」の内容をふくむ

中学校

学年	教科	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	木工・ 工芸	保健体育		英語	特別 活動	計
									体育	保健			
7年		4	4	4	4	2	2	2	3	0	4	1	30
8年		4	4	4	4	2	2	2	2	1	4	1	30
9年		4	4	4	4	2	2	2	2	1	4	1	30

授業時数の1単位時間は、小学校 45分、中学校 50分

(2) 授業を創る

教師が説明して教える、子どもたちは覚えて、テストで確かめる。こうした授業を明星学園では「授業を創る」とは言わなかった。子どもたちの主体的な学びを保証し、共同して課題に取り組む授業を「授業を創る」と言った。明星学園の授業は、まず、子どもたちが課題に対してそれぞれ自分の言葉で意見をまとめる。そして多様な意見を出し合い、議論をする。自分の意見は共感されたり批判を受けたりする。どの考えが正しいか実験や資料で確かめ、わかったことを整理する。こうした授業を「課題授業」と呼び、明星学園の授業スタイルが確立されていった。ここではそのいくつかの授業例を紹介する。

〈三角形の面積を求める授業〉小学校の算数の授業

5年生を担当した飯田達彦は「三角形の面積を求める」授業を行った。

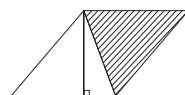
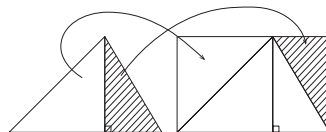
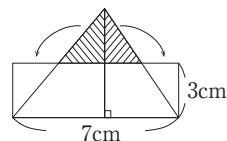
まず、子どもたちひとりひとりに1枚の三角形の紙を配り、「今日はこの三角形の面積を求めよう」と課題提示をした。さっそく子どもたちは折ったり切ったり貼ったりして、自分なりの答えを見つけ出していった。およそ15分後、個人で考えるのを中断することを宣言し、意見を出し合うことにした。意見のある子どもは黒板の前で自分の意見を説明した。こんな意見が出てきた。

ここをこっちに持ってきて…と説明。

「あ！おんなじ」と声を出す子、「似てるんだけど違う」と言って手を上げる子がいた。その子の意見を、またみんなで聞いた。

「2枚の三角形の一つを二つに分けて、ならべたらこうなった。2枚分だから後で2で割った。」「こうやってもできるよ。」「2枚のうち1枚を裏返にしてくっつけるの。そうしたら平行四辺形になったよ。平行四辺形は底辺×高さだからその半分。」

こうして三角形の面積は底辺×高さ割る2であると納得のいく結論に達した。子どもたちは共感したり、工夫したりするなかで、考えを深めていったのである。「発見する」、「学び合う」このことを大切にする授業であった。



〈見出しづけの授業〉中学校の国語の授業

中学校国語科の池田修次から、文学作品の読み方の一つの方法が提起された。この方法はその後の国語の授業を大きく変えた。それまで文学作品の読みは、教師と子どもとの一問一答形式が多かった。この形式では、教師の読み取りに、子どもがついていくことになりがちであった。子どもが積極的に読みに向かい、教師はその援助にまわれないかという授業が模索されているなかで、池田は文学作品を、あるひとまとまり（エレメントという）に区切り、そこにみんなで小見出しをつけていくという方法を考えた。新聞の見出しのように、言わんとすることを短い一文に表すのだ。小見出しをつけるということは、子どもたちにとって、明確な目標があり、だれでも意見を持つことが可能である。「この部分では何が一番大事なことから」と読み取って、見出しをつけるのである。出された小見出しは当然ながら、友達の小見出しとは違う。それぞれがどこに重点を置いて読んだのか、文章に立ちもどって議論していく。授業では、必ずしも一つの見出しに集約できないことも

あるが、議論の過程で読み違いや浅い読みはどんどん修正を余儀なくされていくのである。エレメントは相互に関係を持っているので、読み進むごとに作品の全体像・主題に迫っていくことになる。

「子どもが積極的に読む」といっても、教師の側が教材分析を深めておかないと、授業でよいリードができない。そこで土曜日ともなれば教師が寄り集まって読書会をもち、互いに議論を通して作品の読みを深める作業を行った。

池田はまた、9年生で、大佛次郎の『詩人』という作品を教材とし、見出しづけの授業を展開した。1977年2月、読みを深めた子どもたちの間に、劇にしたいという機運が高まった。卒業制作として『詩人』を劇にすることにし、希望者を募ったところ、なんと80人を超える生徒が手を挙げた。そこで、劇づくりでの役割（シナリオ、演出、音楽、美術、照明、衣装、大道具、小道具）をすべて子どもたちで分担し、劇に取り組んだ。この演劇は嵐のような拍手を受け、子どもたちは深い感動に浸ったのだった。

〈マット運動・側転の授業〉小学校の体育の授業

明星学園の体育は、「からだを動かすことで自分のからだを知る」という大きな目標がある。からだを動かす喜びとは、できる喜びである。「できる」とは、自分のからだを自分の意志で動かせることである。授業では、友達の動きを見ながら、できない原因を探す。できるようになりたいという意思が、意識的にからだを動かすことを導き出すのだ。こうした目標を達成させる教材として、「マット運動」に多くの時間を割いた。技の習得だけでなく、音楽を背景にして連続技を行う表現活動へと進んだ。

体育科の依田節夫は、マット運動「側転の授業」を次のように展開した。

彼は側転ができるまでのステップを綿密に立てる。マット運動の基本は倒立にあるという。逆立ちすることで、自分の体重を腕で支える感覚をつかむことができるし、自分の体重がどのように移動していくのか感じるからである。

側転を始めるとき、マットに手の位置を赤いチョークで描く。練習をするとき、目に見える目標になる。早くできる子どもが必ずいる。また、重要な点を見落としているために、できない子どももいる。子どもたちの様子を見ながら、1時間、1時間、目標を定める。そして、その目標に関わった動きをしている子どもを見つけ出す。側転の場合、手のつき方がわかったら、次は最初につく足の着地が問題である。できない子どもは足が腰を受け止められなくて、倒れてしまうのだ。

子どもたちを集める。そしてできない子どもを指名する。依田は言う「わたしは平気でできない子どもをみんなの前にひっぱりだす。しかし、そのとき必ずみんなの見ている前で、できるようにさせる。そのことによって、できていく過程を知り、みんなが課題を持って、意識的に練習するからだ」と。こうして、できる子どもを次々と増やしていく。

自分の言葉で、自分の体で表現すること、友だちと学び合うことを大事にする授業が展開された。授業は子どもを変える。そのためには、技の本質を理解し、がんばる子どもたちをよく見る目をもつことが必要である。教師もまた1対1で格闘しているのだ。



マット運動

児童・生徒たちはどのように受け止めていたのか、当時の様子を卒業生（49 回生）で現小学校校長・照井伸也は、次のように書いている。

合唱

私が小学校の頃の音楽というと、当時の低学年ではリトミック的な内容が多かったのではないだろうか。特に「ロンドンばし」を歩きながら歌っていた記憶が残っている。逆に小学校時代は合唱もしていたのだろうが、あまり記憶には残っていない。

しかし中学校からの音楽の授業はよく覚えている。どこまでいっても合唱オンリーで、3 年間よく歌っていたし、みんなで声を合わせ一つの歌を歌い上げることは充実感や達成感もあった。いや、それよりも何よりも歌うことが楽しかったのだろう。大友昭先生の指導のもと、私たちはとにかく歌った。楽典なんてわからなくても、大きな声を出し、みんなで歌うことが楽しかったのだろう。そして合唱は私たちの生活の一部となった。

当時私のいたクラスは担任の依田節夫先生の声かけで、朝のホームルーム前に集まって、いろいろな歌を歌っていた。もちろんそんな練習には参加しなかった輩もいたし、渋々と参加していた人もいただろう。中学校では合唱祭があり、その練習も兼ねていたので、参加しない人にも朝練に出るよう声をかけたが、そのせいでクラスの人間関係が悪くなったりすることもあった。

それでも歌った。先輩たちの歌っている曲に憧れ、その曲の伴奏をした先輩に憧れ、自分たちもいつかは…と思ったのである。

また合唱に使われた曲の伝えたいことも自分の心に入ってきた。これは国語の授業で作品の言わんとしていることを考えたり、体育の授業で「ソーラン節」の背景や所作の意味について考えたりしてきたせいかもしれない、合唱曲の作られた背景や、何を大事に歌えばいいのかが理解できたのである。

8 年生になり、それまで明星では扱ったことのない歌劇「沖縄」の中の「プロローグの大合唱」を歌うこととなった。楽譜が 16 ページにもなる合唱曲である。通して歌うことなど大変ではあったが、この曲は私たちの学年の大切な一曲となった。そして思い描いていた沖縄に修学旅行で行くことができるようになり、私たちは現地の中学校との交流の際、自信を持って「沖縄」を歌ったのだ。



中学生の合唱

民族舞踊

7 年生の 2 学期。最初に依田節夫先生の踊る「ソーラン節」を見たときにはいろいろな意味で唖然とした。思春期を迎えている私たちにとって、民謡とか踊りとか、それはどちらかといえば「カッコ悪い」部類に属すからだ。折しもサザンオールスターズが流行り始めた頃で、その対極にあるのが「ソーラン節」とさえ思えた。と同時に、依田先生の真剣で必死な踊りを見て、「大人が必死に頑張っているまぶしさ」も感じ、その踊りに釘付けになっている自分もいた。そしてその日

から明星学園で初めての「民舞」の授業が開始されたのである。

ただ踊りを覚えるだけならそれほど難しいものではないのかもしれないし、体育の授業で何時間もかけて組む単位ではないのかもしれない。その頃の体育は、マット運動が中心となっていて、早くマット運動に切り替わってほしいという気持ちも若干あった。

しかし「民舞」の授業は「立つ」ことから始まった。少なくとも授業に参加している生徒は誰だって「立つ」ことはできる。それなのに体育館ばきも靴下もぬいで素足で「立つ」ことから始まったのである。確かに海上に漕ぎ出した小さな船は、波の影響を受けて大きく揺れるのだろう。そんな船上で安定した作業を行なっていくためにはしっかりと「立つ」ことが必要だということは理解できる。とはいえ、そのような船上の経験が乏しく、また日常生活でそれほど「立つ」ことを意識してこなかった自分たちにとって、しっかりと「立つ」ことすら難しかった。

そのような授業から始まった「ソーラン節」の所作（動作）には一つ一つ意味がある。「櫓をこぐ」「タモですくう」「カゴを背負う」といった実際の動作をイメージさせながら進めていった授業はわかりやすく、本当の意味で「ソーラン節」と向き合っている気持ちになることができた。計画された授業だったからこそ、運動会という大きな舞台上で踊ることに抵抗はなかったし、満足できたのであろう。

その後、自分が教員となり、何年か前の公開研究会で「民舞」の授業を提案した。自分が教わったことと、自分が教えることでは大きな開きがあるし、どのような提案にすべきか大いに悩んだ。そんな時、相談したかった依田節夫先生がすでに他界されていたことが、残念でならない。

(3) 公開研究会

「教育は公開を原則とする」と考えていた明星の教師たちは、日常的には保護者に授業を公開したが、年に一度全国の教師・研究者を対象に公開研究会を続けていた。▶▶本誌 P.175 参照

第1回から第13回までは教材の内容構成と授業の方法を中心に研究会を持っていた。しかし、第14回公開研究会から、その内容は一新される。



中学生の民舞



マット運動



民舞

1976年3月に「点数をつけない教育」を打ち出した遠藤校長は同年11月、第14回公開研究会のあいさつ文で次のように書いている。

明星学園はテストや競争で子どもたちを追いたて、できる子とできない子に選りわけていたり、序列をつくりだしたりする教育を否定します。…中略… わたしたちは合唱や体操、美術や工作、技術や工芸、行事などあらゆる分野での表現活動を大切にします。そして、子どもたちの表現力をまし、表現によって感動を豊かにする能力を育てようとしているのです。後略…(※6)

授業公開とともに朗読、合唱、民舞など、児童・生徒たちの表現活動を公開した。グラウンドでは「ソーラン節」「さんさ踊り」「春駒」などの民舞が発表され、体育館では中学生女子による平安時代の発音による「竹取物語」が朗読された。中学生全員460人による大合唱も披露された。

そして翌1977年、第15回は、生徒たちが主体的にかかわる公開研究会になった。表現活動に参加することにとどまらず、生徒の実行委員会を結成し、役割分担をして教師とともに公開研究会に臨んだのであった。

翌1978年、第16回では、1日目に授業公開・分科会があり、2日目は生徒主体で行う表現活動の発表があった。体育館では理科の授業「運動力学」をどう学んだかの発表があり、体育の授業「マット運動」の発表もあった。午後は「ソーラン節」「さんさ踊り」「越中おわら」「春駒」の躍動感ある民舞が校庭で行われ、のち会場を体育館にうつして、学年合唱、全校合唱が披露された。音楽教師・大友昭の指揮による「グローリア」「沖縄」などの大合唱には、驚きと感動の大拍手がわきあがった。北は北海道、南は沖縄からも教師が参加し、その数約1,600人、体育館に入りきれないほどだった。感動の余韻で参加者は立ち去りがたく、生徒たちは達成感に沸いた。教師と子どもたちに一体感が生まれた日でもあった。第16回公開研究会の要綱の冒頭文を紹介する。



全国から参加した人たち

第16回……1978年11月11日～12日 テーマ 「人間の教育」の追求

明星の公開研究会も16回を迎えることになりました。

わたしどもは科学と芸術とを教育のなかでしっかりと結びつけることによって、すぐれた教材を開拓し、より高い授業や行事をつくりだすようにとめてきました。そして、知性と表現力の豊かな子ども、学ぶことの喜びやすばらしさを感じとれる子どもを育てようと力をつくしてきました。また、実践的・実技的な諸活動を強めて、手と頭のはたらきを結びつけ、積極的な行動の意欲や意志の力をのばしていくようにとめてきました。そのことによって、真の意味の「人間教育」を、この地上に表現したいと希っているのです。

わたしどもの実践はまだまだ不十分なのですが、ことしもつぎのようなやり方で実践を公開し、みなさんの批判と検討をうけることにしました。どうぞ多数ご来会くださいますようご案内申し上げます。

〔※6〕 『明星の年輪—明星学園60年のあゆみ』 P.215

(4) 評価のあり方を変える

1976年3月、教職員の合宿研究会で、遠藤校長は評価の在り方を変えるという提案をした。それから2年の時が流れ、1978年3月、学期末に出していた5段階の成績表を変更するというのが運営委員会より提案され、了承、実施されることとなった。

子どもの成績を点数で評価することは、子どもを点数で序列化し選別することにつながると遠藤は考えた。段階評価の成績表は「学習の記録」にとって代わった。各教科での子どもたちの自己評価に、教師は時間をかけて文章評価をし、それを合わせて綴じて表紙をつけ、「学習の記録」したのである。日常的には「学習ノート」を教師と子どもの交流の場とし、学習状況を知る資料として位置付けた。以来、親や教師の間で異論もあり、形式の変遷はあったものの、「学習の記録」という評価方法は長く続いていくこととなった。

(5) 『明星の教育』

明星学園の小・中学校の教育実践は、1年に1冊刊行される『明星の教育』として、多くの人に報告された。

第1号の「刊行のことば」を『明星の年輪—明星学園60年のあゆみ』P.230から引用する。

今日の教育は、わずか3、40年まえのそれとは全くちがった課題のまゝに立たされているといえます。高度に発達した産業社会がつくりだした文明汚染と環境の汚染とが、子どもの内的な諸力を侵してしまってきています。くわえて、競争と序列づけによる選別の教育が、子どもの人間的な成長を低い段階におしとどめてしまっています。現代の子どもの無気力、神経症、積極的な意欲や集中力の衰弱などの徴候は、このような害悪のもたらしたものだといってよいでしょう。

これからの教育は、ほんものの科学と芸術的達成とをしっかりと学びとらせることと、積極的な行動の意欲や能力を育てることを統一してすすめるしごとを実現していかなければなりません。そのことによって、教育のなかに人間性、全体性を回復することが急務になってきています。

既にそのような教育改革の動きは現実のものとしてあらわれてきていますが、教育の向きを変えるほどの潮流にはなっていません。

わたしたち明星の教師は、このたび『明星の教育—人間教育の追求—』を創刊することにしました。ひきつづいて年に1～2冊ずつ刊行していく予定です。わたしどもは現代の状況のなかで、生きて動いている子どもを目の前にして教育のしごとにとりくんでいる実践家の集まりです。自分たちが生みだした教材、授業、表現活動、物づくりなどの実践をこの誌上に公開し、みなさんの検討と批判をうけ、交流を深めたいと考えているのです。そして、それが日本の教育に人間性をとりもどすための一助になればとねがっているのです。

このしごとの発展のため、全国の教育実践者、研究者、教育に関心をもつ父母のみなさんのご援助をおねがい申し上げます。

1978年8月

遠藤 豊（明星学園小・中学校長）

遠藤校長を中心に製作された『明星の教育』は、1978年の創刊号から1981年の第4号まで発行された。以下に1号から4号までの表紙写真と目次を転載する。

『明星の教育』創刊号 1978年秋 目次



人間教育の追求……………	遠藤 豊
くずさないといひけないよ……………	佐藤 文夫
チョッキづくり……………	柳沢 茂美
一年生と体育……………	依田 節夫
マット運動……………	根本 美愛
「みて描く」授業から「自由表現」への実践……………	太田 幸雄
合唱をつくる―音楽教師としての二年間―……………	大友 昭
音楽と私と明星と……………	植原美枝子
身体表現の教科としての体育……………	依田 節夫
「詩人」の授業と演劇……………	池田 修次
書くこと・綴ることをめぐって……………	玉田泰太郎
玉田さんの実験室をたずねて……………	和田 武久
原子記号・分子式・化学反応式の指導……………	三井 澄雄
かけ算のイメージとシェーマ……………	松井 幹夫
旅は道づれ世は情（木工の教育）……………	山内 国任
織物の授業……………	井上 紀子
詩の授業……………	無着 成恭
フランス革命を教えて……………	川手 晴雄
オーケストラとあわせて……………	遠藤 春幸
検流計をつくる……………	和田 武久
生徒の作品・科学の家族……………	生徒

『明星の教育』第2号 1979年秋 目次



「明星の教育 2号」のはじめに……………	遠藤 豊
教科の可能性・授業の可能性……………	遠藤 豊
英語ぎらいをつくらない授業を……………	塚本 ふさ
動物とたまご―分類の授業―……………	和田 武久
立体づくり……………	一瀬 清
図形教材の新しい構成……………	野沢 茂
「ものづくり」の授業……………	佐藤 文夫
世界地理をどう教えるか……………	川手 晴雄
運動量で動力学を教える……………	遠藤 豊
算数 算数マラソンの苦しさと楽しさ……………	松井 幹夫
国語 一、二年生のための文法の授業……………	須田 清
技術 木工の授業……………	山内 国任
一年生のよみ・かき……………	柳沢 茂美
音読から朗読へ―「あか」の授業から―……………	杉谷 繕子
学級づくりの記録……………	一瀬 清
ドキュメント「第十六回公開研究会」……………	依田 節夫
詩の授業（2）草野心平の「春の歌」……………	無着 成恭
口絵の解説……………	太田 幸雄

『明星の教育』第3号 1980年秋 目次



豊かな体験と感覚の中の論理を……	遠藤 豊
総合的な教育を実践する……	横森サチ子
「コイ」の教材づくりと指導計画……	辻木猪 郎
「面構」をこう教えた……	柳 沢 茂美
M君の絵について……	鈴木 五郎
対談「うたと一年生」……	秋野憲治・柳沢茂美・横森サチ子
物語『モチモチの木』の絵について……	吉田 登
にっぽんこ(1)「もじのほん」と検定教科書……	須田 清
通分と最小公倍数……	松井 幹夫
木工の授業……	山内 国任
単語から句そして文へ……	江本 清弘
子どもと教師と教材のであい……	太田 幸雄
「ぼくは報道する」をこう読ませた……	古川 博資
七年生の音楽と教材……	佐藤 春幸
「省エネのり」デンプンの授業から……	木幡 文夫
授業と表現……	木幡 寛
生徒作品・三編……	生徒
学級通信から……	一瀬 清
みどりがめはどこにいるのがしあわせか……	横森サチ子
温度と熱……	和田 武久
側転の授業……	依田 節夫
発音とローマ字を教えて……	無着 成恭
運動力学をこう教えた……	山本 豊
詩の授業(3)……	無着 成恭
今授業をつくるとは……	遠藤 豊
口絵の解説……	太田 幸雄

『明星の教育』第4号 1981年秋 目次



授業の可能性について……	遠藤 豊
よろこびのある授業をめざして……	横森サチ子
授業における課題と自由表現……	太田 幸雄
木を彫る―実材ととりくんで―……	重吉起左子
「正負の数」の授業……	大友 裕市
「圧力と分子運動」の授業……	山本 豊
「コイ」の授業……	辻木猪一郎
失敗した授業に学ぶ……	一瀬 清
国語 品詞の指導について……	須田 清
算数 倍数メガネの活用……	松井 幹夫
理科 バランスボールをつかった実験……	和田 武久
体育 マット運動……	人見進夫・依田節夫
九年生と組曲へのとりくみ……	遠藤 春幸
理科のノート「金属の酸化」……	6年生徒
合唱をつくる……	源田 俊一郎
生徒の感想を大切にする授業づくり……	古川ひろし
大小数物語……	木幡 寛
生物のレポート「さかなの食事」……	7年生徒
作文集から……	3年生徒
「わらび座」体験旅行……	9年生部会
「課題」の適確な設定と「授業」……	佐藤 文夫
よしのずいから―木工の授業―……	山内 国任
「課題」としての「自分の名前」……	無着 成恭

4 高等学校の実践——高校の改革

(1) 新教育課程 1973 年（昭和 48）の編成

1970 年（昭和 45）、安保条約自動延長に反対する運動が学生中心に広がり、明星の高校生も参加していた。同年 6 月、全中闘と呼ばれる学生運動の一派閥（革マル派）が、明星学園高校内での集会開催を要望してきた。

学校側はこれを拒否し、自治会とも協議した結果、「集会延期」を要請したが、全共闘側の一部学生が鈴木満男校長の制止を振り切り学内に乱入した（全中闘事件）。この時行われた全校的なクラス討論において、教師らは生徒からの教育内容に対する批判や提起を受けとめ、この事件をきっかけに教員側の意識は質的変化を遂げた。

生徒の興味や関心とは無関係な画一的な授業を変えていく努力が始まった。先進的な都立上野高校での改革から学びつつ、3 か年の検討の末、明星独自の教育課程編成表（次ページ）として結実した。このカリキュラムは、以下の 3 項目を原則とした。

学習課程一覧表（1984・昭和 60 年度実施）

- ①必修授業の削減、教科内容の精選
- ②選択授業の維持・強化
- ③10 年生ではクラス授業を中心に、学年が進むにつれて漸次選択授業を多くしていく
(講座については次ページに記載)

	高 1		高 2 (予定)				高 3 (予定)			
	必修 科目	単位	必修 科目	単位	選択 科目	単位	必修 科目	単位	選択 科目	単位
国語	現代国語	2	現代国語	2			現代国語	3	現代国語	1
	古文	2	古文	3					古文	3
									文学史	1
社会									漢文	1
	日本史		日本史				日本史		日本史	
	世界史	4	世界史	3			世界史	3	世界史	3~4
数学			地理				地理		地理	
			政治・経済	2			倫理・社会	2		
	数学Ⅰ	6	数学Ⅱ	5	数学	2			数学Ⅲ	6
理科	物理Ⅰ		物理Ⅰ		物理Ⅱ				数学Ⅳ	4
	化学Ⅰ	3	化学Ⅰ	3	化学Ⅱ	3			理科Ⅱ	3~6
	生物Ⅰ		生物Ⅰ		生物Ⅱ				物理	2
保・体			地学Ⅰ						生物	2
	保健	1	保健	1					化学	2
	体育男女	4	体育男女	4			体育男女	3		
芸術		2		2				3		
	美術Ⅰ	1	美術Ⅰ 絵画		美術Ⅱ 絵画	2			美術Ⅲ 絵画	4
			デザイン	2	デザイン	2			デザイン	4
外国語	音楽	1	音楽		音楽Ⅱ 歌唱	2			音楽Ⅲ 歌唱	4
					理論	2			理論	4
	英語	2	購読	2			購読	2	購読	2~4
家庭	文法	2	文法	2			文法	2	文法	2~4
	作文	2	作文	1						
	一般家庭 (女子のみ)	2	一般家庭 (女子のみ)	2					食物	2
単位計									被服	2
	ホーム・ルーム	1	ホーム・ルーム	1			ホーム・ルーム	1		
	単	31		31	2~3		16		8~15	
総単位数（必修クラブを除く）										88 ~ 96

さらに選択授業もその内容と形態から必修選択、演習、講座の 3 種類を設置した。演習や講座についてはその後、学年の枠を取り払った複数学年制（ノングレード）を取り入れた授業も生まれた。

(2) 独自の選択授業「講座」

カリキュラム改訂は、必修の削減・内容の精選、選択の維持強化を柱に取り組みましたが、選択授業は、「必修選択」「演習」「講座」の3種類から成り立っていた。これらの選択授業の違いについて、当時の教務担当佐藤嗣男教諭は次のように述べている。

必修選択は理科や芸術教科の場合です。演習は学年制を維持しながら直接必修授業の線上で構成されたものです。講座というのは、学年制を取っ払ったもので、10年から12年まで一堂に会して授業をします。そしてまた、既成の教科ジャンルにはこだわらず生徒の個性をのびのびと伸ばしてやれる、そんな時間として構想されています。
(佐藤嗣男『PTA 研究』1975.12)

「講座」には多様な性格の科目が設置されたが、次第に整理され、実習や校外学習なども含む明星学園高校の特色ある授業となっていくた。

1973 年度、「講座」開始年の科目一覧

講座科目名一覧表			
屋 内 球 技	囲 碁	近代日本文学	児童文学（英）
屋 外 球 技	将 棋	中世日本文学	英 文 購 読
軟 式 テ ニ ス	連 珠	兄 童 文 学	音 楽 の 世 界
硬 式 テ ニ ス	落 語	地 域 史 研 究	バ ロ ッ ク 音 楽
卓 球	自 動 車	社 会 科 学	美 術 講 座
ゴ ル フ	手 芸	教 育	デ ザ イン
剣 道	華 道	地 域 史	哲 学
器 械 体 操	料 理	学校周辺の自然	日 常 の 経 済
	園 芸	PSSC 物 理	
		C B A 化 学	

必修クラブ活動（本校では従来のクラブ活動との混乱をさけるため講座と呼ぶ）
本年度は高1のみ必修、高2・高3は希望者だけ

その後も以下のような独自色のある科目が設置された。

〈スポーツ・ゲーム〉 なわとび、レクリエーション、百人一首

〈芸術系〉 鑑賞（ポピュラーからオペラまで）、聴音、音楽史、発声法研究、版画、油絵

〈手工芸〉 編み物、染色

〈理科〉 化学基礎論、実験科学、郷土の地学、天文、植物、匂いの科学

〈数学系〉 電子卓上計算機（コンピューター）

〈語学〉 THE HISTORY OF ENGLISH、マザー・グース、時事英語、ヨーロッパの言語、中国語、スウェーデン語入門、ドイツ語

〈国語・古典〉 古事記購読、近世日本文学、西鶴ゼミ、近代文学（漱石）、文章講座、漢文講座、漢文講読・詩と史話

〈社会科系〉 女性史、児童文化、民俗学、中国現代史、ルネッサンス史、東南アジア研究、原住民の文化、地中海世界史、自由民権、社会科学ゼミ、哲学入門、仏教思想と古典

これらの「講座」は10年生から選択できたため、高校生になった実感を得る効果もあったようだ。高校進学前の9年生にも「講座一覧」は配付され、「10年生になったら何を選択するか、高校の授業を楽しみに友人と話し合った」と、ある卒業生は話してくれた。多様な選択授業が、中・高を繋げる役割も果たしていたと言える。

(3) 運営委員会体制と教育研究部の新設

1974（昭和49）年度3学期に、カリキュラムを実践し発展させていく上でも不可欠な新たな学校運営の改革が提案され、実施された。それまで数人のみで担当していた学校運営の各分野に、全員が所属する専門部体制が生まれた。

教務・総務・生徒指導・募集対策・進路指導部に加えて教育研究部が新設された。専任教員は各教科とともにいずれかの専門部に所属することとなり、これにより一人一人が授業と学校運営の両方に責任を持つ組織とした。専門部の各部長＝運営委員が選挙で選出され、校長・教頭の下で運営委員会を週1回定例化して方針を作成し、高校部会に諮って教育実践を進める、民主的な学校運営をめざした。

明星のみならず、総じて高校では教師の専門分野が細分化され、いわば「一国一城の主」として共同での教育研究が成立しにくい状況があった。教育研究部の新設はそれを克服するべく「教育研究の組織・推進」を掲げて活動を展開した。

教育研究部での検討を基に、学内研究会が1975（昭和50）年度から1980（昭和55）年度にわたり計12回開催された。

5年間の研究会テーマ

1975年度（昭和50）	(1) 7月	明星の高校教育について
	(2) 9月	私たちの目ざす生徒像
1976年度（昭和51）	(1) 6月	明星高校におけるカリキュラムの問題点
	(2) 6月	生徒の置かれている現状に教師はどう対応しているか
	(3) 9月	カリキュラムの自主編成をどうすすめるか
1977年度（昭和52）	(1) 6月	①第1回基礎テストのまとめ ②教育総点検運動について
	(2) 9月	教育総点検運動中間報告
	(3) 11月	生徒の学習習慣をいかにつけるか
1978年度（昭和53）	(1) 4月	①明星学園創立の精神（理念）とその現代における役割 ②評価の問題 ③上川、堀両先生のお話
	(1) 9月	各教科、各科目の年間計画と授業実践の検討
1980年度（昭和55）	(1) 4月	①行事について ②カリキュラム問題について
	(2) 7月	カリキュラム再編成について

研究会準備のための「討議資料」や研究紀要『明星の高校教育』も発刊され、一定の教育研究のスタイルが定着した時期であった。

(4)『明星の高校教育』

1960年代に発刊された高等部（高等学校）紀要は不定期刊であったが、1975年（創刊号）～91年（第11号）にわたって発刊された『明星の高校教育』は、新設された教育研究部が編集主体となり、教科・授業研究のみならず、専門から離れた一人一研究的な幅広い原稿が収録されたところが特徴的であった。教職員の研究を緩やかに交流するスタイルが確立された時期であった。

『明星の高校教育』創刊号1975年（昭和50）12月に、鈴木満男校長は次のような「発刊の辞」を載せている。

教員生活もすでに30年になんなんとするが、いまもって、教育とは一体何であるのか、よくわからないところがある。…中略… 往々世上でいわれる「教育の、あるいは教師の力で更生」なぞという美談…あれは自らの力で更生（？）した時期と、説教の時期との偶然の一致か、当人が人間臭く生きることより、社会の慣習に屈服して生きた方が得だと判断し、知恵をはたらかせて教師の前で仮面をかぶってみせたかのどちらかであろう。

ところで、教育なるものの内容について古風ないい方をすれば、「学芸」をさずけることであり、「学」の本来の内容が人間の生き方をさすものであってみれば、前述のように、ほくはまず、教育の中身のうち、「学芸」の「学」に対するいささかの無力感を抱かずにはいられないのである。

次に残された「芸」。これは技芸。つまり英文法も国文法も、芸術教科の基本的知識も、その他もろもろのカリキュラムの内容の大部分がこの「芸」の中身に該当するわけである。

しかし、この「芸」とても、現在の教育システム（渺たる一私学の明星学園が、完全にその中から抜け出すことは、非常に困難なことである）からいえば、個々の生徒の能力と、教師の力量とのバランスの上に立ってはじめてその習慣の「可能性」の限度が論じられてしかるべきことであり、現在のように教育界において、そのシステムは温存されながら、様々なタブー、一例をあげれば人間の能力差（能力差と個々の人間の価値の問題とは別である）ということに対する考え方のタブー等々が横行している時代には、本音抜きの建前論に終始した方が無難であり、（特に理想教育の旗じるしを高々と掲げているかみえる当学園にあっては）、本音を吐くにはかなりの勇気が必要とするわけである。

他の人は別としても、ほくなぞは、特に校長就任以来の約六年間というものの、その時々それぞれの事情もあるにはあったが、ずいぶんとこの本音抜きの建前論をぶちあげてきたものである。しかし、ほくは一見鉄面皮にみえても、実は心弱い人間であり、この本音抜きの建前論が夜ごとのねぎめの自己嫌悪となってストレートにはねかえてくる始末で、昨今少々気鬱が昂じ気味である。

では一体どうしたらよいのか？ 「もの言はざるは腹ふくるるわざ」という至極平凡な教訓をいま一度思いかえし、「本音を吐くにしかず」である。これはほくだけの皮相の見かもしれないが、どうやら気鬱の気味なのはほくひとりではないのではあるまいか。

「後期中等教育の諸問題」「受験戦争と個性教育」等々、それらの問題について深く研究し、堂々の論陣をはることも勿論必要欠くべからざることではあるが、同時に、ごく素朴に「本音を吐く」ことも大必要なことにちがいないのである。その本音がどこからかの反発を招くことがあったにしても、教師がおのれの本心を謙虚に披瀝し、凡愚の凡愚たる所以を層一層あきらかにすることは、生徒にとってけしてマイナスの働きをするものではあるまい。

時あたかもよし！『明星の高校教育』—— 実に堂々たる誌名である—— が発行されるはこびとなった。で、我人共に大いに本音を吐いて、気鬱の人は気鬱から脱し、明朗闊達に生きたいものである

そして、ほく自身についていえば、そのことによって、冒頭に述べた「いまもってよくわからないところのある教育のこと」が、少しでもわかるようになれば、望外の幸だと思っている。1975年10月17日

明星の高校教育 創刊号 明星学園高等学校	『明星の高校教育』創刊号 目次 1975年12月 発刊の辞……………鈴木 満男 高校教育の志向するもの……………佐藤嗣男・生徒 対談・明星の高校教育を語る……………高橋 昭八 生徒指導の来し方行く末……………井部 高志 進路指導をめぐって……………上田 八郎 教育社会……………恩地 邦郎 募集対策をめぐって……………恩地 邦郎 授業・H・R・クラブ……………鈴木 雅子 数学は何故必修なのか？……………岸 すみれ H・Rの年間計画がほしい……………上川 淳 バスケット部の内側から―自由と規律―……………上川 淳 私の研究……………上川 淳 科学史点描―寛文の円周率―……………たさきとおる 第五次野尻湖底発掘調査について……………村崎 洋 国府施政下の台湾……………渡邊 伸之 随想 ヨーロッパ・トイレット談……………恩地 邦郎 短信……………野口 淳
--	--

この『明星の高校教育』には、高校教育のありかた、授業・生活指導・クラブ活動・個人研究等、さまざまなジャンルに亘って「本音を吐く」(創刊の辞より)投稿が載せられている。

創刊号には、できたばかりの「専門部」(教務・生徒指導・進路指導・募集対策各部)が各部運営の基本方針・姿勢を述べ、上川淳教諭が「バスケット部の内側から 自由と規律」を載せている。

『教育研究部ニュース』

教育活動の任務分担と同時に、各部・各教員の情報共有も課題になった。これに対応して高校教育研究部では1975年(昭和50)6月から、『教育研究部ニュース』と題する手書きの刊行物を発行した。原本は残っていないが、『明星の高校教育』第2号に「資料・教育研究部ニュースの歩み」として、第1号から第10号(1976年6月20日発行)までが転載されており、序文としてこのニュース発行の主旨が述べられている。

多かれ少なかれどこでも現代の教育状況の波にもまれている中で、この明星学園高校にも運営委員会が設立され、組織的・構造的にこれに対処していく方向をとり、何とかやって来て、1年たちました。様々な成果があげられていますが、多様化した学校運営の中で、各部組織間の風通し、全体にゆきわたるコミュニケーションが問題ではなかったろうか、という反省がなされ、現在どの部においても活動の側面でその補強を重視しています。ニュースの氾濫めく発行がその端的な現れですが、情報とその必要性の間で、常に、何をやって来たのか、いま何をやっているのか、何をやろうとしているのか、という大筋を把みつつ進むことが課せられていると言えましょう。後略…

創刊後、第2号の発行までしばらく間が空くが、翌1976年3月からは精力的に発行され、さまざまな問題提起がなされている。

例えば第3号に掲載された清水万知子教諭の「補講の記録」には、体育授業の欠席オーバー生徒を補講するなかで、体育授業を休みがち・見学が多い生徒らと向き合ったことから教師が感じ

た、体育以外の日常生活全体の問題解決の必要性について述べている。

補講の記録		明星学園高校 教育研究部 ニュース
補講者	清水乃知子	第3号 1976.4.26 部長 野口
補習 体育女子	期 間 三月十一日―十三日、三日間 対 象 1、欠席が多い者 2、欠席が多い者(10年30時間以上、11年20時間以上) 3、欠席と見逃が多い者(10年30時間以上、11年25時間以上)	
補習内容	4、全部受業者 5、欠席が多い者は、レポート提出、テーマは、体育・スポーツに關したこと。 それ以外の者、体育館において実技、一日約二時間。 実技内容 マット運動、とび箱、なめとび、バドミントン、バスケ、ソフトボール。	
補習を終って生徒の感想	1、まず、とても楽しかった。一日目ほどは、日増しに体が痛くなって、少しやせろかと思つたけど、お腹が空いて太ってしまった。楽しかったけれど、この三日間の体育のおかげで、三日間ずっと眠らなくては何もないのが嬉しい。是非、またバドミントンをやってほしい。そして「明星」のチームを作りたい。 2、朝から運動三日間やったが、とても見守りがいい。足がつったり、頭にホールドがついたり、痛いこともあったが、面白く、楽しい授業だった。 3、身体が動くことが、こんなに楽しいものだとは、今まで知らなかった。かなり疲れたけれども、それは快いものだ。とび箱も怖くて全然できなかつたと思つていたり、ほんの少し出来るまづに留つたのが、とてもうれしい。これから頑張ろう。	
昭和51年度 活動方針	4、みんな同じ環境の人達なので、大変楽しかった。バスケの試合、バドミントンの試合、大変楽しかった。とび箱が、学校の授業だと、みんなまいり、ひくめを感じながら、気楽にできようか。 教師側からの印象 今回の補習は、欠席、見逃が多い生徒に対して行なつたもので、いわゆる学習能力の劣っている生徒に対してのものではなかった。従つて、何故こういう結果になつたのか、ということこそ、体育の授業だけではなく、彼女らの日常生活全般の問題で考えなければならぬ。彼女らの生活についていかなければならぬ。 因に、彼女らの言分によると、朝はついても起きられない。朝は胃が具合が悪い。風邪をひきやすい。クラスの中に入りきれない、などが挙げられていた。そういう点では、生徒は個人的に都合が悪い出来事。日増しクラスの中に入りきれない生徒が、同じ仲間が来るということで、気楽に授業の中に入れたこと、また、生徒の感想にもあるように、疲れて夜遅くまで起てられなかったというように、今回補習をやつた中から一つでも、今後の生活を改善するきっかけのようなものを見出し、出来れば、と思つていきます。 なにして、やれば出来るんで、それをやらなかつた、やらないうえだ、ということとは、生徒側だけの問題ではなくて、それと単位を出さると思えないようなシステムを作っている規定にも問題があるのではないだろうか。 今後の教員の針としては、体育の教科のせいで欠席、見逃のとり扱い、単位を出さず、学習能力の劣っている生徒への授業など、もう一度じっくり検討していきたいと思つていきます。	
メンバー	(野口 鶴 尤平、荒川、鈴木他)	

教育研究部ニュースは1976年の第10号で途絶えていたが、その後、1984年5月16日に「復活教育研究部ニュース」第11号として再発行され、第17号(6月27日)まで毎週発行された。

第11号では、「哲学」や「自動車講座」などの自主選択講座を中心に、担当者が報告している。第13号では、高校全体や各教科で、外部講師を招く場合の講師料の助成金についても紹介されており、外部講師を招いた研究会も積極的に行われた。第14号には、「学級通信騒乱」とし、各学年の学級通信が載せられている。

当時、教育研究部が、実践の交流や自主的研究会を進める役割を果たしていたといえよう。

学 級 通 信 療 乱

(養利のことば 特集)

クラスのお友達は今も手紙でPTAなどの通達のアリ、やはりみなが目を通すよう、重宝づくからかな... 村田先生様

58年11の5(村田先生)

発行というだけさなもんではないが、ときどき気が向いたら出すことにした。というのも、最近、物覚えが悪くて、皆に連絡しなくちゃならない事とか、言っておきたい事、など教室内に入って教室の前に立つと一瞬のうちに忘れてしまうので、まあ、いってみれば、物忘れ防止対策のつもりで出すので大したもんじゃありません。よろしく。

58年11の2(高橋孝俊先生)

秋の足音がうきうきしてきました。高校生生活もすでに折り返し点を過ぎて、今も割と地点を通過しようとしています。「あ」という間の高校生活ですが、ゴール地点で「は自分の人生観、世界観の形成をかんて、それぞれの進路に向かって行きたいもの。と、ここで自分なりの観をもつには、他者との交わりが不可欠です。と、この塾や家庭教師とは違った学校生活の意義があるように思われます。この観点での11年2組も総括してみると、担任がまず自己批判しなければならぬ点々々あります。「他者との交わり」ということに阻まれた五戸ノートのいくつかは、今、自分の今とにどきどきしています。ローテーションの悪いいくつかの班ノートも放置してきたように思われます。また、セリフの大部分は、今に面接がとまるとなっています。その討論は、討論にならないままに終わります。そこで「交わりを通した自己の発見」という考えを再確認するとともに、埋めていた班ノートと面接と再開したいと思ひます。同様の観点から不定期発行ということになるでしょうがクラス通信を出したいと思ひます。また、その観点から特に、今週のテーマ「明察と鋭く行なう」にクラス全員の積極的参加を訴えます。

58年10の1(安部先生)

これから週一回、土曜日の定期発行をめぐりして頑張ります。充分内容のあるものになるかどうかわかりませんが、少しでも学校に、クラスのこと、子どもたちの生活について理解してもらうために工夫してみようと思います。学校や教育をとりまく状況も非常に複雑で、生徒、父母、教師それぞれ毎日、必死の闘戦だと思ひます。一人でも多くの話のできる友達が必要で、その輪をあとと大きくしていくことも必要だと思ひます。その一つの材料にでもなればと。読んでいただいて御意見でもお寄せ下さい。クラスより、のつたに原稿はせうね。

59年10の4(西田隆生先生)

4月も半ばには、やっばり花の咲き始めて梅の香と、桜の花を同時にたのしめるという、気象的にはいいって、異常ともいえる春ではありますが、私にとっては二年振りの担任ということで、充実した気持ちで迎えた春はあります。生徒達も一週間を経て、新しい環境になれず、なびんぐ来ている様子です。その生徒達の様子、学校の様子、家庭での様子を伝えようとして、10-NEWSを発行することにしました。毎週月曜を予定しています。

59年10の5(豊田先生)

いよいよ高校生活がスタートしました。まだまだ不安と緊張でいっぱいだと思います。これからホームルームや授業やクラブなどを通じて様々な新しい出会いを体験し、ゆくゆくは、マイペースで一日、充実した高校生活を送ってほしいと期待します。この「オーパ」には10年5組の生活ぶりを書きとめていきたいと担任は考えています。意見などもどんどん載せていければいいですね。5組の仲間だけでなく、父母の声もどんどん書きたいと思ひます。最後に、何事でもあれ10年5組では驚いた、感動した、うれしかった、頭にきたり悲しかったり、泣いたりしたとき「オーパ」に投書しよう。おそまつ。

59年10の1(黒川先生)

入学式以後、続いた「だ」だがやっばり連休で切り替わった感じが、以後「週刊」を目標に努力します。次号では男子の「初心」も紹介、映画「空海」は、どうだったか、難しいというも、ききながら感想を出してね。

58年11の1(渡辺寛先生)

新しい学年、新しいクラスがスタートしました。今日の授業はどうだったか。人生の中で、多分最も印象の深い高校時代のまんぞく！昨年一年間、自分の通った車、反省をふまえて、思いやり、通す一年間で、あつてほしいと思ひます。クラス目標は、生きた生きた、意欲的なクラスにしたいと思ひます。そのために私も努力しますが、47人1人1人が努力、協力して下さい。この「クラス通信」は、時々出します。進捗の集計もこの版上では「発表」します。がんばろうね。

59年10の1(黒川先生)

新しい学年、新しいクラスがスタートしました。今日の授業はどうだったか。人生の中で、多分最も印象の深い高校時代のまんぞく！昨年一年間、自分の通った車、反省をふまえて、思いやり、通す一年間で、あつてほしいと思ひます。クラス目標は、生きた生きた、意欲的なクラスにしたいと思ひます。そのために私も努力しますが、47人1人1人が努力、協力して下さい。この「クラス通信」は、時々出します。進捗の集計もこの版上では「発表」します。がんばろうね。

59年10の5(豊田先生)

いよいよ高校生活がスタートしました。まだまだ不安と緊張でいっぱいだと思います。これからホームルームや授業やクラブなどを通じて様々な新しい出会いを体験し、ゆくゆくは、マイペースで一日、充実した高校生活を送ってほしいと期待します。この「オーパ」には10年5組の生活ぶりを書きとめていきたいと担任は考えています。意見などもどんどん載せていければいいですね。5組の仲間だけでなく、父母の声もどんどん書きたいと思ひます。最後に、何事でもあれ10年5組では驚いた、感動した、うれしかった、頭にきたり悲しかったり、泣いたりしたとき「オーパ」に投書しよう。おそまつ。

59年11の6(生達行)

これから週一回、土曜日の定期発行をめぐりして頑張ります。充分内容のあるものになるかどうかわかりませんが、少しでも学校に、クラスのこと、子どもたちの生活について理解してもらうために工夫してみようと思います。学校や教育をとりまく状況も非常に複雑で、生徒、父母、教師それぞれ毎日、必死の闘戦だと思ひます。一人でも多くの話のできる友達が必要で、その輪をあとと大きくしていくことも必要だと思ひます。その一つの材料にでもなればと。読んでいただいて御意見でもお寄せ下さい。クラスより、のつたに原稿はせうね。

58年11の3(村田先生)

これから週一回、土曜日の定期発行をめぐりして頑張ります。充分内容のあるものになるかどうかわかりませんが、少しでも学校に、クラスのこと、子どもたちの生活について理解してもらうために工夫してみようと思います。学校や教育をとりまく状況も非常に複雑で、生徒、父母、教師それぞれ毎日、必死の闘戦だと思ひます。一人でも多くの話のできる友達が必要で、その輪をあとと大きくしていくことも必要だと思ひます。その一つの材料にでもなればと。読んでいただいて御意見でもお寄せ下さい。クラスより、のつたに原稿はせうね。

59年11の1(渡辺寛先生)

新しい学年、新しいクラスがスタートしました。今日の授業はどうだったか。人生の中で、多分最も印象の深い高校時代のまんぞく！昨年一年間、自分の通った車、反省をふまえて、思いやり、通す一年間で、あつてほしいと思ひます。クラス目標は、生きた生きた、意欲的なクラスにしたいと思ひます。そのために私も努力しますが、47人1人1人が努力、協力して下さい。この「クラス通信」は、時々出します。進捗の集計もこの版上では「発表」します。がんばろうね。

59年10の1(黒川先生)

新しい学年、新しいクラスがスタートしました。今日の授業はどうだったか。人生の中で、多分最も印象の深い高校時代のまんぞく！昨年一年間、自分の通った車、反省をふまえて、思いやり、通す一年間で、あつてほしいと思ひます。クラス目標は、生きた生きた、意欲的なクラスにしたいと思ひます。そのために私も努力しますが、47人1人1人が努力、協力して下さい。この「クラス通信」は、時々出します。進捗の集計もこの版上では「発表」します。がんばろうね。

59年12の1(津浦京先生)

これから週一回、土曜日の定期発行をめぐりして頑張ります。充分内容のあるものになるかどうかわかりませんが、少しでも学校に、クラスのこと、子どもたちの生活について理解してもらうために工夫してみようと思います。学校や教育をとりまく状況も非常に複雑で、生徒、父母、教師それぞれ毎日、必死の闘戦だと思ひます。一人でも多くの話のできる友達が必要で、その輪をあとと大きくしていくことも必要だと思ひます。その一つの材料にでもなればと。読んでいただいて御意見でもお寄せ下さい。クラスより、のつたに原稿はせうね。

58年11の2(高橋孝俊先生)

秋の足音がうきうきしてきました。高校生生活もすでに折り返し点を過ぎて、今も割と地点を通過しようとしています。「あ」という間の高校生活ですが、ゴール地点で「は自分の人生観、世界観の形成をかんて、それぞれの進路に向かって行きたいもの。と、ここで自分なりの観をもつには、他者との交わりが不可欠です。と、この塾や家庭教師とは違った学校生活の意義があるように思われます。この観点での11年2組も総括してみると、担任がまず自己批判しなければならぬ点々々あります。「他者との交わり」ということに阻まれた五戸ノートのいくつかは、今、自分の今とにどきどきしています。ローテーションの悪いいくつかの班ノートも放置してきたように思われます。また、セリフの大部分は、今に面接がとまるとなっています。その討論は、討論にならないままに終わります。そこで「交わりを通した自己の発見」という考えを再確認するとともに、埋めていた班ノートと面接と再開したいと思ひます。同様の観点から不定期発行ということになるでしょうがクラス通信を出したいと思ひます。また、その観点から特に、今週のテーマ「明察と鋭く行なう」にクラス全員の積極的参加を訴えます。

59年10の1(安部先生)

これから週一回、土曜日の定期発行をめぐりして頑張ります。充分内容のあるものになるかどうかわかりませんが、少しでも学校に、クラスのこと、子どもたちの生活について理解してもらうために工夫してみようと思います。学校や教育をとりまく状況も非常に複雑で、生徒、父母、教師それぞれ毎日、必死の闘戦だと思ひます。一人でも多くの話のできる友達が必要で、その輪をあとと大きくしていくことも必要だと思ひます。その一つの材料にでもなればと。読んでいただいて御意見でもお寄せ下さい。クラスより、のつたに原稿はせうね。

59年10の5(豊田先生)

いよいよ高校生活がスタートしました。まだまだ不安と緊張でいっぱいだと思います。これからホームルームや授業やクラブなどを通じて様々な新しい出会いを体験し、ゆくゆくは、マイペースで一日、充実した高校生活を送ってほしいと期待します。この「オーパ」には10年5組の生活ぶりを書きとめていきたいと担任は考えています。意見などもどんどん載せていければいいですね。5組の仲間だけでなく、父母の声もどんどん書きたいと思ひます。最後に、何事でもあれ10年5組では驚いた、感動した、うれしかった、頭にきたり悲しかったり、泣いたりしたとき「オーパ」に投書しよう。おそまつ。

教育研究ニョイス

第14号
1984.6.5
明星学園
教務部
(教育研究)

(5) 生徒指導と教科外カリキュラム検討

研究会の中でも生徒の学習意欲の低さ、遅刻や怠学、生活指導上の問題（飲酒・喫煙）等の克服が何度も取り上げられた。特に、教師によって指導や対応がばらばらで生徒からの不信感が強いことが指摘された。こうした検討の最中、1975年（昭和50）5月、一人の女子生徒を学校近くの森へ呼び出し、同学年の女子数人が集団でランチを加えるという教師・生徒とも大きな衝撃を受ける陰惨な事件が起きた。加害生徒には厳しい指導が行われた一方、教師は自らの反省点も含め深夜まで及ぶ長時間の緊急部会を行い、検討内容を一斉ホームルーム等で全生徒に説明することとなった。

生徒に配付された当時の生徒指導部長であった高橋昭八起草の文章は、全教師の討議を踏まえ、暴力を許さない決意を示すとともに、管理強化でない指導を進めようとした明星教育の原点を示すともいべき一文であった。

真の自由を保障するために

明星学園高校生徒指導部

今回の事件をふりかえりながら、将来有為な生徒諸君を多数事件にまきこませてしまったことについて、教師一同、深刻な反省をしています。それは、この学園で、自由で安全な生活を、といて生徒諸君をおあずかりしたのに、これを全く逆の結果に導き、生徒・父母を裏切ることになってしまったからです。

いわゆる明星の自由が一部放縦に流れ、人間の自由や尊厳とは正反対の種類の事件を生み、しかもそれに関係した諸君は、一人ひとりすばらしい未来をもつ青年であることが苦痛に耐えない点なのです。

一人ひとりとはすばらしい生徒であり教師である明星という一つの集団が、このような事態を生み出した原因は何なのでしょう。それぞれ個としてはすぐれていても、組織・集団として自由を保障していく力が弱かったといわざるをえない状況がそこにあったに違いないのです。

われわれは自由を保障するためのルールを持たなかったわけではありません。「よりよい学園生活のために」というルールを持っていました。誠実にして力あふれる若者の、学園生活に参加する全員が、それぞれの全力量をかけた生活をするために、集団として守らねばならぬルールだったのです。

このルールが、あってなきが如き様相が部分的に生ずると、次第に方向は見失われ、学問・精進の生活とは無縁な光景が生まれました。遅刻、服装、上ばき等、一見ちっぽけに見えるルール無視が、次第に他人の迷惑になり、他人の自由を奪う、いろいろな暴力となりました。明星の自由のすすり泣きが聞こえるようです。

しかし今、明星の生徒と教師にとって、大切なことは落胆ではありません。今手にしている明星の自由を守っていく仕掛けをフルに発動させることです。

毎朝、遅刻なしにさわやかに登校する。このスタートから、最後の授業、クラブ活動まで、自律的な集団のルールで一貫させる。他人の迷惑になる、あらゆる形の暴力を一掃する。これはいわば心の革命であり、日常生活のすばらしい変革を生み出す力をもつはずです。

教師一同は、事件→なおどりの注意→また事件、の逃げ道のない循環を断つ決意をしました。

さあ、生徒諸君。ともに起ってあられ、暴力から真の自由の満ちあふれる明星を作り出す努力を、今日から始めようではないか。

一方、教科外カリキュラムとしての行事（修学旅行、体育祭、明星祭、音楽祭など）についても生徒指導部を中心に検討が加えられて、1977年（昭和52）の総点検運動において、新たな構想を作成していった。

(6) 教育総点検運動

1) 新校舎建築と基礎学力問題

老朽化した木造校舎に代わる念願の新校舎は、1976年（昭和51）着工、翌年の春に完成した。先進的な教科型を構想して設計しつつ、完成間近の部会討論で従来型のホームルーム教室も残すこととなった。新たにLL教室と、選択授業（演習・講座）のための各ゼミ室がつくられ、新しい語学授業や少人数選択授業などが可能になった。これらの新しい形式の授業展開が、高校の特色を作り出していった。

一方では4・4・4制廃止後、高校では内部進学生と高校からの入学生との基礎学力の大きな差が問題となった。背景として4・4・4制時代には、9年生の1年間を高校の学習に取り組むための準備期間とし、10年生からの入学生との学力差を縮小させ、高校の授業形態に慣れることができたが、4・4・4制廃止と私学ブームによって受験者数が急激に増えた時期とが重なったこともあり、内部生と外部生の学力差がより顕著になったことがあげられる。高校から中学校側へ「内部進学テスト」の提案がなされた時期でもあった。

2) 授業・カリキュラムの見直し

前述した1975年5月のリンチ事件をきっかけに、生徒の日常生活の状態・抱えている問題と授業や教育とは切り離せない課題であるという認識が深まり、授業・学力・生徒指導・自治など、高校教育の全般にわたる改革の必要性を問われることとなった。

授業・学力面では1977年（昭和52）、英・数・国・理・社5教科の基礎学力テストを実施した。これは大学側で共通1次試験（センター試験の前身）が実施されようとしていた前年度のことだった。その結果、各教科で改めて予想以上に基礎学力がない現状が明らかになり、日常の学習・家庭学習の習慣を身につけさせる必要ありとの報告がなされた。

同年10月、この報告をもとに、全専門部・教科での現状分析と改革方向を検討すべく、運営委員会から「教育総点検運動」が提案され、精力的なスケジュールをたてて実施された。

各教科は、必修・演習・講座それぞれの目標と年間計画をたて、10月末には中間報告をもちより研究会が開かれた。当時の高校教育の課題を、鈴木満男校長は次のように書いている。

現在高校教育が抱えている最も大きな問題点は、約96%というほぼ全入に近い高校進学率にともなう、学力その他にわたって多様な生徒を抱えている現状と、それが年々一部改善されつつあるとはいえ、かなり高度な知的要求にもとづき組立てられている教科内容とのアンバランス、さらにその教科内容を歪曲していく圧力となっている大学の入試の一層の激化にある。…中略…

結局、受験教育の問題も、社会構造との中で生きるひとりひとりの人間の意識のあり方とかかわってくる問題であり、抜本的な解決策としては、それがいかに迂遠なことに思われようが、ひとりひとりの意識改革なしにはありえないことである。

意識改革、そのことはたしかに至難のことではあるが、時あたかも、経済の高度成長にともなうひたすらな利潤追及、そこから招来された物質偏重の幸福感が大きな曲がり角にさしかかっている現在、われわれは改めて社会全体の潮の流れから個の立場にたちかえって心の問題を追求してみなければならないのであり、それは当然のことながら、教師として生徒に要求する以前の問題として追求していかなくてはならないことである。後略… ▶▶鈴木満男「論」『明星の高校教育』No.3（1978年3月）P.2

1980年7月、新カリキュラムについて、2日間にわたり合宿研究会が行われ、全員協議を経て、

カリキュラム委員会・研究部・教務を中心に案が作成された。その間に、中野光氏（和光大学教授）・田代三良氏（元戸山高校教諭・教育評論家）など外部講師を招いた研究会が行われ、玉川学園高等部など、他校訪問をして交流も行った。

新カリキュラムは、さまざまな議論を経て、生徒の実態や要求を積極的に取り入れ、必修を減らし選択を強化する方向が定まり、後述するように▶▶本誌 P.248 参照、4年後の1984年から実施された。これは、現在の高校カリキュラムの原型となった。

3) 自治活動・行事の再検討

自治活動や生徒指導については、1981年保健体育科・生活科・養護教諭による「明星生の意識調査」が実施され、行事の検討も進められた。これらは、正・副担任12人によって構成される「学年会」を中心に精力的に行われた。

1975年から始まった「修学旅行」の検討は、生徒指導部提案により、「合宿旅行」と名称を変更し、行き先や形態に生徒の意見を取り入れる等の試みも行われた。テーマ（例えば「生き甲斐とは何か」）を設定し地方の学校との交流を図る「テーマ型」、生徒の希望を募り目的地を設定（例えば京都・奈良）する「学習型」「教科型」、HR単位で独自の計画で行う「HR型」などが実験的に行われるようになった。教師の事前調査や生徒の旅行委員・HR討議などが積極的に行われ、年々魅力ある内容となっていった。



1980年9月11年生（49回生）
明治村見学



1980年9月11年生（49回生）
雨の焼岳登山



1981年9月10年生（51回生）
伊豆富士見ランド



1981年9月10年生（51回生）
伊豆富士見ランド野外炊飯



1983年9月11年生（52回生）
佐渡島フィールドワーク



1983年9月11年生（52回生）
佐渡おけさを体験

高校合宿旅行一覧

年度	10 年生				11 年生		
	入学時 オリエンテーション	担当・引率	秋合宿	引率	夏・秋合宿	引率	備考
1974 (昭和49)	全体または各ホーム ルームにて、高校集 団生活の規律、教科 概要等について	各担任 学年主任			(7/17-28) 43 回生 ホームルーム別 ①能登・金沢 ②四国 ③東北 ④上高地 ⑤佐渡 ⑥上高地・高山	堀 / 加賀谷 / 鈴木(雅) / 安部 / 土屋 / 山田 / 井部 / 斉藤 / 工藤 / 上川 / 松本 / 清水	
1975 (昭和50)					(7/21-26) 44 回生 ホームルーム別 ①能登・金沢 ②館山黒部・飛騨 ③四国 ④津和野・萩 ⑤能登・高山 ⑥高山 費用¥20,000	高橋(昭) / 松本 / 鈴木校長 / 井口 / 木原 / 加賀谷 / 溝口 / 葛城 / 清水 / 黒川 / 高橋(幸) / 大平 / 斉藤 / 内藤 / 吉川 / 竹内	
1976 (昭和51)					(9/1-9) 45 回生 2 班編成 飛騨高山合宿 ・地域学習 ・全員が係・仕事を 分担 費用¥35,000 (内¥10,000は積立)	野口 / 武者小路 / 黒 川 / 鈴木校長 / 上田 八郎 / 大伴 / 山田 / 加藤教頭 / 岸 / 高橋 (幸) / 椎名 / 土屋 / 加賀谷 / 清水 / 渡辺 京 / 松本 / 木原 / 柳 沢 / 角谷	1976 年 新合宿旅行発 足
1977 (昭和52)			(9/2-8) 47 回生 千倉 3 班編成 (各班千倉寮に 2 泊 3 日)、アスレチック・ フィールド、 シーワールド行、海 水浴 費用約¥10,000	井部 / 高橋(幸) / 角谷 / 上川 / 武者小 路 / 葛城 / 土屋 / 加 賀谷 / 大平 / 田崎 / 佐藤(教務) / 看護 婦 / 内藤(生指)	(9/2-9) 46 回生 2 班編成 能登・金沢 費用約¥40,000 (内¥10,000は積立)	安部 / 木原 / 渡辺(信) / 松本 / 鈴木(雅) / 大伴 / 山田 / 田中 / 西島 / 黒川 / 清水 / 吉川 / 井口 / 加藤 / 教頭 / 原田 / 工藤 / 荒川	1977 年 高校総点検運 動
1978 (昭和53)		各担任副担任 (2 人制) 学年主任	(9/3-9) 48 回生 千倉 3 班編成 (ホテル望洋宿泊、 各班 2 泊 3 日) オリエンテーリング 行川アイランド行	内藤 / 清水 / 柳沢 / 松本 / 田中 / 丸 / 野口 / 竹内 / 椎名 / 荒川 / 木原 / 横田 / 田崎 / 岸	(9/2-9) 47 回生 2 班編成 八幡平・十和田湖	井部 / 加賀谷 / 角谷 / 佐藤 / 土屋 / 葛城 / 大伴 / 西島 / 斉藤 / 吉見 / 武者小路 / 桜井 / 加藤教頭 / 山田	
1979 (昭和54)			(9/2-8) 49 回生 千倉 3 班編成 (各班千倉寮に 2 泊 3 日) クラス毎テーマ討論 会 費用約¥15,000	井口 / 桜井 / 安部 / 松本 / 黒川 / 吉見 / 大伴 / 工藤 / 横田 / 竹内 / 清水 / 上田	(9/2-8) 48 回生 7 クラス、2 班編成 三重県合歓の郷 フィールド・ワーク (各種スポーツ) 費用¥42,840	内藤 / 谷口 / 田中 / 瀬野 / 野口 / 丸 / 椎名 / 荒川 / 木原 / 渡辺(京) / 田崎 / 岸 / 柳沢 / 加賀谷 / 加藤教頭 / 武者小路 / 山田 / 土橋 / 間宮	
1980 (昭和55)			(9/2-8) 50 回生 班別で千倉寮宿泊 グループ毎テーマ討 論会 オリエンテーリング 行川アイランド行	丸 / 大平 / 鈴木(雅) / 加藤教頭 / 角谷 / 桜井 / 高橋(幸) / 竹内 / 坂本 / 椎名 / 長田 / 斉藤 / 渡辺(信) / 溝口 / 西島	(9/1-8) 49 回生 2 班編成 飛騨・高山 明治村見学 高山→フィールド・ ワーク(各種) 街並・寺・円空・焼 きもの・焼岳登山	武者小路 / 高橋(龍) / 黒川 / 瀬野 / 大伴 / 上田 / 横田 / 松本 / 清水 / 土屋 / 安部 / 土橋 / 恩地校長 / 山田	
1981 (昭和56)	(4/10-11) 51 回生 高尾山薬王院 全員参加 1 泊合宿開 始、各教科説明と学 習法、生活の基本に ついて HR ノートまとめ 費用(約) ¥10,000	椎名 / 土橋 / 野口 / 大平 / 内藤 / 谷口 / 柳沢 / 大橋 / 工藤 / 岸 / 瀬野 / 田崎	(9/7-9) 51 回生 伊豆富士見ランド 全員オリエンテーリ ング 野外炊飯 HR ノートまとめ 費用(約) ¥17,000	左記に同じ	(9/2-9) 50 回生 2 班編成十和田 サイクリング、焼岳 登山、ハイキング (奥入瀬、八甲田山 麓) 登山(八甲田 山)、弘前行、等	渡辺(信) / 高橋(幸) / 鈴木(雅) / 村田 / 角谷 / 土屋 / 竹内 / 高橋(龍) / 長田 / 溝口 / 丸 / 斉藤 / 加藤教頭 / 森田(養護)	1981 年新 10 年 入学時 1 泊オリエン テーション開始
1982 (昭和57)	(4/9-10) 52 回生 高尾山薬王院 全員参加 1 泊合宿 費用(約) ¥10,000	高橋(幸) / 土橋 / 田中 / 東川 / 溝口 / 井部 / 渡辺(京) / 横田 / 村田 / 清水 / 田崎 / 井口	(9/4-9) 52 回生 群馬県嬬恋村 国民休暇村鹿沼高原 キャンプと自炊 費用(約) ¥12,000	左記に同じ	(9/5-8) 51 回生 全クラス 近江八幡フィールド ワーク(テーマによ り 30～40 班) 費用¥57,400	椎名 / 大伴 / 野口 / 加賀谷 / 内藤 / 庄 / 柳沢 / 大橋 / 工藤 / 諏訪 / 瀬野 / 高橋(龍) / 上田校長	
1983 (昭和58)	(4/10-11) 53 回生 八王子サマーランド 1 泊(現地集合) 漱石「創造と模倣」 読んで感想文まとめ 費用(約) ¥7,000	安部 / 武者小路 / 大伴 / 長田 / 大橋 / 東川 / 斉藤 / 丸 / 井部 / 松尾 / 鈴木 / 奥西 / 森田	(9/5-7) 53 回生 群馬県六村野反湖 キャンプと自炊 オリエンテーリング キャンプファイヤー 登山 費用(約) ¥14,500	左記に同じ	(9/5-8) 52 回生 全クラス 佐渡島フィールド ワーク(コース・グ ループ毎に島の生 活、地域の特色等) 鬼太鼓・人形芝居 能楽「奏上」 費用¥40,000	渡辺(京) / 井口 / 高橋(幸) / 田崎 / 村田 / 土屋 / 横田 / 清水 / 溝口 / 角谷 / 田中 / 高橋(龍) / 恩地校長	

4) 歴史と共に生きる共修生活科

明星学園高等学校で男女共修の「生活科」が始まったのは1975年。国際連合（United Nations）が1979年に「女性差別撤廃条約」を採択するより4年早く、日本が同条約に批准する1985年に十年先駆ける試みだった。

1948年、明星学園高等学校が発足し男女共学でスタートした年に、保健科（男子）・家庭科（女子）の教師として教壇に立った大平初枝（旧姓坂本）教諭は、共学校となったにもかかわらず、戦後も女子のみの教科として存在していた「家庭科」に疑問を持っていた。

「戦後の教育改革で、旧制中学校・高等女学校が新制高等学校として発足し、時代の流れ、世の中の推移とともに男子、女子の生き方も変わっていくはずなのに、女性を日本独特の家族制度に適應させようとする旧態依然とした考えをもとにして、女子のみの教科・家庭科が置かれているのはなぜなのか」。大平は女子生徒が裁縫、料理、手芸、道徳などを学び、良妻賢母として男性に従う女性を育てることを目的とする「家庭科」に、大きな疑問を持ちつづける。と同時に、「新しい家庭科」そして、男女が共修する新しい教科の立案作成へ取り組んでいく。

大平はまず、女子の家庭科の授業内容を見直し、日本の女性史、服装史、妊娠・出産・保育、婚姻の歴史など、女性の社会的立場の変遷をテーマにしたグループ学習を行い、生徒からの手ごたえを得る。

1972年（昭和47）に女子のみの家庭科を「男女共学生活科」とする設定案を職員会議に提出した。その提案資料の骨子を要約すると、次のようなものだった。

1. 戦後の教育改革は、新しい視点に立って男女が同等の教育を受けることから出発したが、長い間の封建諸制度を背景に「家」中心の良妻賢母育成を目的とした「家事、裁縫」教育が脈々と続いてきた日本では、家庭科は男女別学という矛盾した形でしか実践できなかった。しかし家庭は生命を維持するための営みや、新しい世代を生み育てるためのさまざまな機能を担い、人間の存在を支える根幹であり、文化や思想、行動の原点でもある。衣食住についての単なる家事処理技能を柱とした従来の家庭科教育では、社会、政治、経済、世界、国家観を基にした生活力は育めない。「家」への奉仕を教える家庭科ではなく、男女がともに平等な人間としてのあり方を学ぶ教科としたい。明星の生徒たちが陥りがちな現実認識の甘さ、観念的思考から脱皮するためにも、現実生活から題材を取り上げ、現実には則した社会認識を発展させることが重要であり、このような視点に立つ新教科として「生活科」の創造が明星教育にとって有意義だと考える。
2. 具体的な現実の家庭、家族問題を取り上げるが、時事問題に限定しない。日常の社会生活（家族生活も含む）を見つめさせ、その実態認識から問題の矛盾や、その原因などについて考えながら、生徒ひとりひとりの生活に対する主体性を回復させることが必要である。

新設教科「生活科」への職員会議での反応はさまざまで、殊に男性教師のなかには反対意見や無関心、「女子だけの良妻賢母教育でいいのでは」……などの意見を出す者もあった。

しかし女性教師からは「女子のみの家庭科の差別は男子への差別でもある」という心強い発言もあり、他の実践校の先生方からのアドバイスや、明星の父母の理解と支えなど、運動への力強い後押しもあった。

このようななかで大平は信念を貫き、努力を重ね、ついに1975年、待望の「男女共学生活科」が2単位必修で実現した。

1994年に退職した大平は、晩年に生活科の歴史を振り返り、次のように語っている。

「封建的な色彩の中で女子だけが学んだ家庭科から、自主性、主体性に富んだ共学『生活科』への変革が、明星教育の中で重要な役割を果たしたことは間違いない。私の教師生活の縮図ともいえるこの『生活科』を振り返るとき、学園の歴史の素晴らしさに触れずにはいられない。大正デモクラシーの波の中で『個性尊重 自主自立 自由平等』の教育理念を掲げ、戦中・戦後と貫いた創立者の精神が卒業生たちに培われ、教師や父母たちへ脈々と受け継がれてきたのだろう。学園の教壇に立った一人として、この私学としてのあり方を誇りたい」。

大平は学園創立90周年を目前にした2014年1月、逝去した。

大平が実践した生活科（2単位必修）の内容

1学期 家族史

- 1 生活科を男女共学で学ぶ意義と、その内容
- 2 私たちをとりまく諸問題・現在の家庭生活に見るさまざまな問題点について、具体的な事実を通して認識させる。
- 3 民主的な家庭
 - ①家族の移り変わり
 - ・ 原始社会、古代社会、封建社会、近代社会の形態、構造、機能の推移と、それぞれの社会における生産様式との関係。今後の展望。
 - ・ 歴史の流れの中で、社会の変遷が「家」と女性に及ぼしてきた影響。
 - ・ 女大学の女性観、結婚観、性愛観など。
 - ・ 日本の近代史に見られる家庭生活の特異性（戦前、戦後の相違に重点をおく）
 - ②家庭生活と法律
 - ・ 新憲法、新民法制定の意義（男女差別撤廃を眼目とした教育基本法と学校教育）、旧法との比較。
 - ・ 法律是不変のものではなく、国民の力で前進させることもできるという認識。
- 4 夏休みの課題（二学期の保育学習に備えて、各自が「生育史」を書く）

2学期 保育・教育

- 5 保育教育
 - （法的に婚姻年齢に達していない生徒たちに、子育てではなく、自分自身の問題としてとらえさせる）
- ①性愛の現状と問題点
 - ・ 性愛の歪みの現状と実態の理解。
 - ・ 男女差別、性の商品化の背景。
 - ・ 資料などを与え、生徒に自分の意識についての感想を書かせる。

- ②母性保健と胎児の発育
 - ・ 母体の変化、発育上の傷害。
 - ・ 妊娠の生理的しくみ。
 - ・ 分娩と、それに伴う異状など。
- ③母性保健
 - ・ その現状と問題点。
 - ・ 原理と方法。
- ④発育の原理
 - ・ 保育とは、教育とは。
 - ・ 心身の発達法則。
 - ・ 脳の進化と発達。
 - ・ 発達の歪み。
- ⑤保育問題と、今後の課題

3学期 家庭経済

- 6 家庭経済と国民経済
 - ①家計の現状
 - ・ 家計調査（5段階階層別の統計）などから、実態の把握。
 - ・ 家計不安の実態。賃金、収入の現状と低賃金のしくみ。
 - ②国の財政（三学期は国家予算が発表される）
 - ・ 国家予算の中で特に身近な教育、住宅、福祉など、生活関連の予算について考える。
 - ③貯蓄
 - ・ なぜ、日本は貯蓄率が高いのか。
 - ・ 国家財政や社会保障制度との関係。
 - ④社会保障の現状
 - ⑤消費者問題
 - ・ 有害商品、不当表示、不当価格の事例と、暮らしを守るための消費者運動。なぜ、そのような商品が生産されるのか。

第2章 新体制下の明星

1 新体制の発足

(1) 学園の危機的状況

1970年代の学園の教育と経営の状況は、『明星の年輪—明星学園60年のあゆみ』と『同一70年のあゆみ』に詳しく記述されている。この時期、小・中・高一貫教育の進め方や教育観の相違にもとづく教職員間の対立、遠山啓氏を学園長兼高等学校長に招聘する問題をめぐる理事会と教職員との対立、さらに学園経営の在り方をめぐる理事会と評議員会との対立など、さまざまな問題が噴出していった。また、そういう混乱した内部事情のため、学園は明星会（同窓会）や後援会からも積極的な支持を得られない有様であった。

この時期の学園の財務状況に目を転ずれば、1973年（昭和48）から1980年（昭和55）までに積もりに積もった累積赤字は、3億9,000万円に達していた。学園の財政は破綻状態に陥っていたのである。▶▶詳しくは本誌P.230～234、70年史P.202～203参照

(2) 新理事会の発足と松井理事長

1979年（昭和54）11月、経営責任をとって遠藤豊校長を除く全理事が総辞職し、板橋宗市^{としのり}理事長代行（学園元保護者）らの下で人選が進められ、12月、松井憲紀氏を理事長とする新理事会が発足した。新理事会では常務理事は理事長以下、恩地邦郎高等学校長、遠藤豊小・中学校長、手塚光雄氏（財務担当兼法人事務局長）の4名に限られた。総辞職前は常務理事の比率が全理事の過半数を超えており、正常な理事会として機能していなかったからだ。

松井憲紀氏は1909年（明治42）の東京生まれ。中学時代、物理の先生の授業にひかれ、技術で身を立てようと決心し、山梨高等工業学校電気工学科（現山梨大学工学部）で学んだ。卒業後、横河電機製作所（現横河電機株式会社）に入社し、やがて同社の社長、会長、常任監査役を歴任した。

松井氏の長女が通った三鷹の小学校は、戦後の校舎不足の時代のため、2部、3部授業が普通で、落ち着いて学業に専念できる環境ではなかった。松井氏はその頃明星学園を知り、照井校長の教育観に共感し、やがて4人の子どもたちをつぎつぎと明星に通わせる。のちに「サラリーマンの家庭から私立へ通わせる経済的負担は並たいていではありませんでしたが、子供たちのかけがえのない1年1年を悔やむことなく成長させるためにふんばったわけです」と振り返っている。松井氏はまた多忙な会社員生活の傍ら明星のPTA活動にも積極的に参加し、PTA会長や文化部長などの役職も務めた。〈※7〉

四女の卒業した1964年（昭和39）9月から1967年（昭和42）11月までの3年余、松井氏は衣笠武夫理事長と原田満寿郎全園主事、寒川・上川・恩地3校長を援け、学園理事として尽力して



松井憲紀理事長

〈※7〉 『明星学園報』No.19（1986年4月）

いる。

そして今回は、莫大な累積赤字の解消、不信と不和の渦巻く学園の正常化という大きな課題に向かった挑戦であった。70歳を超えた松井理事長の胸中には、余人の想像も及ばない、なみなみならぬ決意と覚悟があったはずである。

松井氏は、理事長を引き受けるにあたって、二つの条件を示した。一つは、無報酬であること。もうひとつは、建学の精神に基づいて経営を行うこと。したがって、学園に建学の精神から逸脱するようなことがあれば直ちに辞める、というものであった。

新理事会は、松井理事長の方針のもとに、焦眉の財政危機の回避、「和」の拡大、良識の回復を訴え、精力的に活動を開始した。松井理事長は教職員組合、明星会（同窓会）、評議員会、PTA、後援会、千倉明星村、教職員有志等と積極的に会談を行い、行動を通じて現実的な指導方針の理解を深めてもらうよう務めた。

また、対話をもって全園の力を結集するためには、情報の共有が不可欠であると考え、恩地校長の発案により1979年（昭和54）12月、『明星学園報』を発刊し、毎年3回発行することとした。

（3）「明星学園・建学の原点を求め明日への出発」

1981年（昭和56）8月、理事会は学園運営の基本方針として「明星学園・建学の原点を求め明日への出発」と題する方針を確定し、松井理事長名で『明星学園報』第4号（1981年10月）に発表した。この文書は、過去の学園史にも掲載されているが、重要な記録と思われるので、全文を本誌にも転載する。

明星学園・建学の原点を求め明日への出発

昭和56年8月18日

理事長 松井憲紀

学校法人「明星学園」は建学以来57年の年輪を重ね、亭々とした大樹となり、一つの校風を確立し、社会からも評価をうけております。

数年来、学園はいくつかのトラブルを経験してまいりましたが、今日こそ、全学園が建学の精神に立ち戻り、小学校・中学校・高等学校が一つの路線に合一して、明星教育を実践していかなければなりません。そして、児童生徒のかけがえのない一年一年を実りあるものとして父母の付託に応え、あわせて、学園の充実・発展をはかり、社会に寄与すべき大切な時期であると思います。

学園が建学の目的に専念し、明日へ向って一体となって進むため、次の考えを申し述べます。

〔1〕建学の原点よりの発展

1. 学園は四人（赤井・照井夫妻・山本の各先生）の同人によって創立され、その後、幾多の先輩の方々の方々の努力によって築き上げ、受け継がれてきた「個性尊重」・「自主自立」・「自由平等」の教育方針を正しく捉え、「強く・正しく・朗らかに」の校風を明日へ継承し、さらにこれを発展させるために学園の総力を結集する。
2. 学園に入学する児童生徒は本学園の教育に耐えうるものとし知・徳・体のバランスのとれた教育を実践するために、一貫したカリキュラムを再構築する。児童生徒がその学齢に応じた力を持ち、望む道を選べられる実力をつけるようにする。
3. 「テスト・評点」はあるが、これによって児童生徒の人間としての価値に差別をつけないことも建学以来の校風であり、これを受け継いでいく。

4. 学習態度の確立と習熟による理解の徹底をはかるため、計画——実施——点検を実施していく。
5. 建学の精神は常に変わることはないが、これを実践するための手段・方法・技術については時代に応じ、創意工夫して按配されることは当然である。これを学園の外に求めることも時として必要であろうが、明星学園の教育として着実に消化し、かつ発展させるもの以外であってはならない。（教育理論というものは実践の結果から検証されなければならないことは当然である。）

〔Ⅱ〕 明星に働く人

1. 二人以上の人がある一つの目的に向って協力するための前提条件は信頼関係の厚薄・有無であり、信頼の基礎となるものは相互信頼と人格である。学園に働く人々は一層、人格と信頼を高め、学園機能の高度化をはかり、学園の付託に応えてほしい。
2. 建学精神をふまえ、教育について教師間で活発な議論が行われ、相互理解・相互信頼が高まることは望ましいことである。近時、議論や相互理解不十分から合一した結果が得られないまま、これを教師間以外の者の前に露呈し、あたかも二つの流れが存在しているかの如きことがあった。こうしたことは学園の信頼関係を失うものであるから今後あってはならない。
3. 教育技術あるいは教育論に優れている人でも実践者としての人格、品位を高めることに努力され、公人としての自覚をもち学園内部の諸問題に対しては一致して解決に当たるべきである。
4. 意志疎通をはかり、相互信頼を高めるために、例えば、
 - イ) 小中高教師の相互間の授業や行事などの見学・参加および討議。
 - ロ) 父母を対象とした教育の研究会などの設置による父母と学園との意思疎通。
 - ハ) 小中高全園一丸となった明星祭等の実施。
 などの実現を期待したい。
5. また、一貫教育の徹底と学園の持てる人材の一層の活性化をはかるため定期的な人事の交流・異動を行いたい。

〔Ⅲ〕 財政

1. 現在の学園の財政は健全であるとはいえない。将来、学園が何かを決定し、資金が必要になった時、最も大切なものは学園の「信用」と健全な財政（学園の体力）基盤である。このため、学園の消費支出においてそのバランスを採りつつ、逐次、財政基盤の強化をはかり、信用を高め、将来の発展に寄与できるよう努力する。すなわち、現在の累積赤字は過去10年くらいの結果であるので、これを短期間に解消することはむずかしいが、1980年代中に正常化するように努力する。
2. 学園の将来のため中・長期の計画を策定する必要がある。経済情勢の動向、就学人口の推移、立地条件などをふまえ、また学園の社会的評価を更に高める努力とあわせて、明日にそなえる計画をたてる。
3. 創立60周年を数年後にひかえ、これを実施することを含めた中期計画（1985年＝昭和60年くらいまでの）を本年度中に毎年見直すローリング・プランとして弾力的なものを策定する。

（4）「学園のお金は父母と都民からいただいている」

新体制となった小・中学校の立て直しにあたり、松井体制をささえた依田好照小・中学校長は当時の様子を次のように回顧する。

松井理事長は、1995年（平成7）11月、86歳で亡くなるまで16年ものあいだ、学園にひたすら献身された。悲願だった累積赤字の解消は、教職員の人件費や施設設備費を抑えることなく、懸命な経営努

力によって9年間で達成した。また、その間、いつもの温顔で「和」の拡大に努め、PTA、明星会、後援会からも強い支持を得られようになった。その蔭には、発足時の理事会メンバーのほか、漸次交代した理事たちの尽力が大きく貢献したことも特筆に値する。

いわゆる“松井体制”の理事のなかには、善方国男氏、加藤信夫氏のように学園の古くからの教師で、学園の歴史をよく知っている人もいた。企業人や弁護士でわが子を明星に学ばせた保護者の津田謙二・石原憲一・伊藤哲郎・安藤道久の諸氏。また、企業人や弁護士・大学教授で卒業生の佐藤雄二（16回生）・松本唯史（16回生）・井上隆（35回生）・渡邊実（35回生）の各氏など多士済済であった。

定例理事会は初期の頃は年に20回前後開催されたが、その後はほぼ毎月1回を原則とした。夕食は各自済ませて出校し、真摯な論議は時に深夜に及ぶこともあった。

この項の筆者として、個人的なエピソードをひとつだけ記しておきたい。

大企業の役員だった頃の松井さんは車で送り迎えだったろうが、明星の理事長になってからは定期券を買い、小田急線の向ヶ丘遊園駅から電車で通勤した。歩いた方が健康にいいからと言われたが、それは表向きの理由だったろう。毎週もたれる常務理事会のあとは、たいいてい常務理事で事務局長の手塚さんが車で送った。定例理事会、評議員会や、組合との交渉などで夜おそくなるときは、自宅に電話しておよその時刻を指定し、一番下のお嬢さん（美樹さん）に車で迎えに来させた。私は帰る方角が同じなので、便乗させてもらったが、仕事をもつ美樹さんにしても、同じ道を引き返して練馬まで帰る手塚さんにしても、たいへんだらうと思った。

そこである日、帰りはタクシーを使ったらどうですかと進言したところ、「今はそんな贅沢が言えるときではない。学園のお金は父母のみなさんと、都民のみなさんからいただいているんですよ」と厳しい口調でたしなめられた。

往復にタクシーを利用するようになったのは、86歳の1995年（平成7年）4月、高等学校長を兼任してからのものであり、その7か月後に急逝されたのであった。

12月16日、第3体育館（高等学校）で、学園葬がしめやかに執り行われた。（※8）

（5）遠藤校長、無着教頭の辞任

1974年から始まった遠藤豊校長・無着成恭教頭による小・中学校の体制も、1983年に終わりを迎える。両氏は明星学園に着任以来、教育研究の分野においては、民間教育団体との強い繋がりによって明星の教育を全国区に押し上げていった一方で、彼らの影響力のもと、学園内において保護者を巻き込んだ対立構造を生んでいった。

両氏の在任中に起こった「教育研究・教育観の対立」や「内部進学に関する対立」は、その後の「自分たちの教育観にそった新しい高校をつくる」という問題を引き起していく結果となった。

【全国的な教育研究の展開に潜む光と影】

1960年代から1980年代初頭まで、明星学園では教育研究をめぐって教師間の対立が続いた。

戦後、敗戦国である日本の教育は当然のごとくGHQの民主化政策の影響を受けた。これまでの国家主義・全体主義の教育に変わって、子どもたちの個性や主体性といった人間力の育成を大切にしたい教育にシフトしていったのである。日本の教育は、戦前戦中の「教え込み・画一的な教育」から、デューイに代表されるアメリカプラグマティズムの影響を受け、「経験や活動を大切にする教育、問題を主体的に解決していく教育」へと変革していった。学習内容としては、身近な生活に直結した課題として「生活単元学習」を採用し、学習方法としてはグループごとに調査したり発表し

〔※8〕 『明星の年輪—明星学園90年のあゆみ』 P.297

たりする「問題解決学習（経験主義教育）」が主流となっていった。

創立以来、児童中心主義を唱え、学習内容と学習方法を研究してきた明星学園にとって、戦後の「個性を尊重する教育」「児童生徒の主体性を大切にする教育」への教育改革は追い風となった。

明星学園の教育をさらに深化発展させようと考えた照井猪一郎校長は、東北で自分たちの生活を見つめ、社会を見つめ、自分を表現する方法としての作文（＝綴り方）を指導してきた「東北生活綴り方教育」に着目していた。

このような背景のなか、東北生活綴り方教育の代表的な実践者であった、寒川道夫（『山芋』の実践者）・無着成恭（『山びこ学校』の実践者）の両氏が相次いで明星学園に就任することとなった。

一方、戦後アメリカの教育の影響を受け、学習内容の基本を「生活单元」においた日本の教育に対して、教育研究者・実践者からは「生活单元学習では基礎学力がつかない」「何を学んでいるかわからない経験主義の教育」と、少なからず批判の声が当初から上がっていた。明治期以降の画一的な教育を反省し、人間教育を目的に戦後はじまった生活单元学習・経験主義教育への批判がおこるなか、世界を揺るがす大きな出来事が起きた。

「スプートニク・ショック」と「教科内容の現代化運動」

1957年10月4日、ソ連（現ロシア）によって人類初の人工衛星「スプートニク1号」が打ち上げられ、米国など西側諸国は大きな衝撃を受けた。世にいう「スプートニク・ショック」は、アメリカの科学者だけでなく教育者をも困惑させた。そして、1959年9月、アメリカ、ウッズ・ホールにて全米科学アカデミーの呼びかけで34人の科学者、教育者などが集まり「ウッズ・ホール会議」が行われた。討議内容は、アメリカの自然科学教育の改善が主たるテーマであったが、大胆な教育改革の議論が行われた。それは「これまでの教育現場は生活单元学習、経験主義教育が中心的な考え方であったが、科学の系統性を重視した、知的生産性の高い教育に変革していこう」というものであった。

この会議の中心者であった認知心理学者として知られるハーバード大学のブルーナー氏は、ウッズ・ホール会議の討議内容を『教育の過程』という書物にまとめ、この本は全世界で読まれるようになっていった。

この「生活单元学習・経験主義教育」から「科学的系統主義教育」への教育改革の提唱は、日本にも大きな影響を与えた。スプートニク・ショックに先立つ1950年代前半に、生活单元学習に批判的だった大学の教員・研究者を中心に相次いで民間教育研究団体が設立されていった。

1951年には東京工業大学の遠山啓氏を中心に「数学教育協議会（数教協）」が、1952年には、奥田靖雄氏を中心に「教育科学研究会・国語部会（教科研国語部会）」が、1954年には東京工業大学の田中実氏・東京学芸大学の真船和夫氏を中心に「科学教育協議会（科教協）」が設立された。

これらの民間教育研究団体を中心に、ウッズ・ホール会議以後の『教育の過程』の反響も相まって、日本では「生活单元学習」から「科学的系統学習」へと教育改革の流れができていった。この教育改革のなかで、教科内容を科学的・系統的に配置していこうとする運動は「教科内容の現代化運動」と呼ばれた。

輝かしい成果とは裏腹に、教育研究本来の純粋さが失われていった

明星学園は1960年代から70年代にかけて、数教協、科教協などの民間教育研究団体とともに教科内容の現代化運動を展開し、科学的系統学習を研究していく全国の拠点のような存在になっていた。

1961年（昭和36）、明星学園は「教科内容の現代化」をテーマとして、第1回公開研究会を開催した。この公開研究会以降、明星学園はますます民間教育研究の本拠地としての地位を確立し、全国に「科学的系統学習による体系的な知識の獲得」の重要性を発信していった。

前述のように▶▶本誌P.177参照、民間教育研究団体と協力し合いながら、『にっぽんご』『わかるさんすう』『自然科学』といった自主編成の教科書を世に送り出し、輝かしい成果を上げていった時期であった。

しかしその一方で、生活単元学習・経験主義教育の良いところを大事にしてきた教師たちからは、「体系的な知識を獲得させるのは良いことだが、それで子どもたちの人間力は育っているのか」という疑問がおこってきた。

教育研究には多様な考え方が存在するのは当たり前のことだが、相手の話をよく聞き、理解した上で、自分たちの教育理論に反映させ、深化発展させていくこそが純粋な教育研究のあり方だと言える。しかし、当時の明星学園の教育研究は、民間教育研究の中心地であったこともあり、「科学的系統主義教育」こそが最も優れた教育だと考え、教育研究本来のもつ純粋性・謙虚さが失われていた。経験主義教育や他の教育方針を寄せ付けない排他性が生まれていたのだった。

明星学園は創立以来、赤井米吉先生が成城小学校の創立者である澤柳政太郎先生の教えから引き継いだ「科学的研究を基とする教育」を大切に、「学習内容」と「学習方法」の両者を研究してきた研究校である。

教育研究とは、「純粋なもの」であり「謙虚なもの」でなければ、深化発展することができない。本来、子どもたちの人間力の育成と、科学的系統的な学習による体系的な知識の獲得は、対立するものではない。両者は謙虚にお互いの考えの違いと共通点を理解し合い、それぞれの実践に足りない部分を取り入れ、吸収し合うべきだろう。

1960年代から遠藤豊・無着成恭を中心に展開された「科学的系統主義教育」は、1976年の第14回公開研究会において突如「人間教育」をテーマにおき、科学と芸術の二本柱による人間教育を打ち出し、方向転換をおこなった。しかし、教育研究や教育観に関する相違は、教職員間の対立を生み、あたかも二つの流れが存在しているがごとき状態となっていた。

学園の運営においては、これまで伝統的に行われてきた全校的な集団登山・夏季行事・見学や遠足は姿を消した。

教育研究や会議において、本来の「自由にものが言い合える職場」、「遠慮することなく伸び伸びと実践ができる職場」に戻すことができなかった無念の思いが、前述の▶▶本誌P.193参照 寒川道夫小学校長「星章をはずして」、上川淳中学校長「中等部夏季行事の中止について」の文中に表現されている。1960年代から1980年代にかけ、対外的には輝かしい実績を残してきた一方で、内部的には抑圧され、つらい思いをしていた教師たちもいたことを示す貴重な資料である。

【遠山啓氏 学園長兼高等学校長への招聘問題】

1977年（昭和52）7月25日、健康上の理由で辞意を表明した鈴木満男高等学校長の後任として、理事会は遠山啓氏を学園長兼高等学校長に迎え入れることを決定した。遠山氏は前述のように数教協の創始者であり、「水道方式」を考案し、明星学園の遠藤校長・無着教頭や算数部の教師たちとともに『わかる さんすう』を共同執筆した人だった。

理事会の遠山氏学園長兼高等学校長決定の判断を受け、高等学校教職員は遠山啓氏を招いて話し合いをおこなった。その結果、遠山氏本人も前提としていた「高校教職員全員との教育観の一致」を見ることができなかった。高校教職員は遠山氏の校長就任に反対し、次期校長に恩地邦郎を推薦した。

創立者の赤井米吉先生以外に例のなかった「学園長」職として遠山啓氏を候補とする件についても、遠藤・無着常務理事を中心とする理事会と、教職員との間で議論が対立し紛糾を重ねた。

これらの議論を経て、1978年（昭和53）4月、恩地邦郎は正式に高等学校長に就任。遠山氏は学園長には就任せず、1978年11月に理事に就任したが、翌1979年9月に逝去された。

【「点数のない教育」という教育観と内部進学問題】

遠山啓氏高等学校長招聘問題以前から、高校では、これまでの教育実践を改めて見直す「内部教育総点検運動」を実施していた。「4・4・4制」廃止後の生徒の状況調査、カリキュラムの再検討などに取り組み、教育の重点方針をかけた。その過程で、問題になったことの一つは、内部進学の生徒と、高校から入学してくる生徒との基礎学力の差が大きいということだった。

そこで、高校側から中学校に対して、「高校の教育に耐え得る基礎学力と生活習慣を身につけさせてほしい」という要望を出した。さらに、中学から進学する生徒について、高校の主体性において「内部進学テスト」の実施を提案したが、中学校側の合意を得ることはできず、保護者からの反発も大きかった。

1978年、高校は総点検運動の続きとして、「明星学園高校の教育課程を履修可能、または困難と思われる生徒を早期に発見し、適切な進路指導（内部進学も含めて）の判断資料とする」という趣旨で、予備テストの実施を提唱した。この予備テストは、英語・数学・国語の3教科の問題を、高校の教師と中学校の教師が合同で作成し、11月に実施された。

翌1979年には「内部進学協議会」が発足し、高校でおこなってきた基礎学力調査や予備テストの資料に基づいて、中学校への教育に関する要望を出した。それを受け、小・中では「内部進学に関する問題」を協議したが、合一した結果は得られない状態が続いていた。

そのころ理事会は、1977年の衣笠武夫理事長逝去後、内部不統一や不祥事が続き、評議員会との対立など、機能不全に陥っていた。▶▶本誌P.192参照 1979年12月、遠藤校長をのぞき、1971年（昭和46）から続いていた理事会は総辞職。松井憲紀理事長による新理事会が誕生した。

【混乱のなかでの内部進学テストの開始】

翌1980年3月の新理事会において、遠藤豊中学校長と恩地邦郎高等学校長の間で「内部進学に関する合意」が取り決められた。その中の一つに「昭和55（1980）年から内部進学予備テストを12月1日から10日までの間に高等学校が行い、進学の適否を判断し、適当と認められたものを中学校長が推薦する」という条項があった。

もともと、遠山啓氏が提唱していた「点数のない教育」に賛同していた遠藤校長や無着教頭は、いったん合意したものの、「内部進学予備テスト」を受け入れられるはずもなく、その後PTAを誘導する形で大きな反対運動が巻き起こっていった。

本来、教師間でよく話し合いながらさまざまな課題を解決していくことが、創立以来明星学園が大切にしてきた職場の民主主義であったが、遠藤豊校長・無着成恭教頭が自分の教育観を実現するために保護者を誘引する傾向があったため、中学校・高等学校の教師間の正常な話し合いが疎外されるようになっていた。

【新高校建設と遠藤豊校長、無着成恭教頭の辞任】

このようなPTAを巻き込んだ内部進学テストに対する反対運動が展開されるなか、「埼玉に新高校を建設しようとしている」という噂が持ち上がるようになった。1981年10月に発行された『明星学園報』第4号には次のように記されている。

- 1980年（昭和55）年10月、「明星学園が埼玉に新高校を作る」ということがいわれているがどうなのかと多方面から問い合わせがありました。
- 1981年（昭和56）年5月、明星学園教職員組合より理事会宛てに公開質問状が提出されました。

この件に関して理事会は、

- ①いかなる計画で何故に明星学園の名前が出るのか、
- ②学園の関係者がどのように関与しているのか、客観的調査を行いました。

その結果

- ①明星自由学園設立準備委員会を発展的解消した学校法人遠山塾設立準備委員会が、埼玉県日高町に、学校法人篠井学園（長野県）の名のもとで、「遠山塾高等学校」を設立する計画であったこと。
- ②1977年（昭和52）と1979年（昭和54）総辞職した当学園の元理事数名と当学園の現職の校長と教頭の2名が主要な立場で参加していることが明らかになりました。

理事会は、上記の内容を報告した上で、高等学校を別途に設立する意図はないことを明言。準備委員会に参画していた現職の遠藤校長と無着教頭に対し訓戒し、遠藤校長は遺憾の意を表明、明星学園の教育に献身することを約した。

この計画は、資金問題によって篠井学園が手を引いたため計画は立ち消えとなった。

しかし翌1982（昭和57）年6月、遠藤豊校長は「啓学園（遠山啓氏の名にちなんだものと考えられる—後の「自由の森学園」）設立準備委員会代表より校長就任の要請を受けたので、3月の時点で明星学園の校長の職を退きたい」という主旨の辞表を提出し、理事会はこれを受理した。

1983年3月、無着成恭教頭も辞職を申し出て、これをもって遠藤豊校長・無着成恭教頭の体制は終わった。

1983年（昭和58）4月、明星学園は依田好照小・中学校校長、恩地邦郎高等学校校長の両校長による新しい体制でスタートを切った。

(6) 恩地・依田両校長の就任

前年の1982年（昭和57）6月、遠藤豊校長が辞意を表明した際、上田八郎高等学校長も同時期（1983年3月末）に任期満了となるので辞意を表明していた。上田校長は、「この際、教職員一人ひとりが全園的立場に立って学園の教育・運営をどうすべきかを考え、意思統一をはかることが肝要。理事会は教職員とも十分に時間をとって、小・中・高の新校長を決めてほしい」と述べた。その後の経緯は、手塚光雄事務局長の筆により、『明星学園報』第8号（1983年1月）に詳しく報告されているのでここに抄録する。

さきの上田校長の意見を受けて、松井憲紀理事長は7月初旬、全園職員会議に出席し、さらに文書をもって教職員に対し「多くの問題をかかえ、さらに数年後に迫りくる私学の危機に対応し、全学園がひとつの方向で協力していくために、いま為すべきことは何か、校長の分担はどうあるべきかを含めて、夏休み中に一人ひとりが考えてください」と問題提起した。

2学期早々、理事長は問題をより明確にするために、試案として小学校長1人、中・高校長1人制を教職員に問うた。端的に言えば、「中・高間の内部進学問題に見られるように中学と高校との間にギャップがあり、校長が別であることがひとつの要因をなしている。中・高ひとりの校長として解決に努力してもらいたい」というものであった。

これに対して、教職員からは、「校長の分担の変更よりも、教育と信頼の内実を高めることを実践を通じて行うことにより、理事長の意図も自ずから達成されるので、理事長提案は今後も検討するが、当面、現行の体制で努力させてほしい」という答申があった。

理事長は、この間、教職員有志との懇談会、運営委員会との話し合いなどと幾度も会談を重ね、教職員の意図するところについて直接把握した。そして、校長の分担は教職員の考えでよいが、校長候補者の推薦については、現状の諸問題を解決するにふさわしい人を推薦してほしい旨、10月4日改めて要請した。

- ①私学の校長は、学校教育法上の公的地位を有すると共に、学園の経営に当たる人であること
- ②100パーセント明星に尽力できる人
- ③過去将来を通じて小・中・高の信頼関係樹立に積極的な人であること
- ④理事会との信頼関係に立ち得る人

その結果、小・中学校職員会からは中堅世代の依田好照が推薦され、高校職員会からは元校長の恩地邦郎が推薦された。高等学校長について理事長は、それまでの経過から見て、学園での経験が長く学園の過去・現在をよく知る恩地にお願いするのがよいと考え、すでに別の生活設計を考えていた恩地を説得して三度目の校長を引き受けてもらった。

以上の経過をふまえて、11月25日、理事会で正式に両校長の選任が決定した。

就任に際し、依田校長は次のような文章を『明星学園報』第9号（1983年4月）に寄稿している。

あたりまえなこと

小・中学校校長 依田 好照

校長になることなど考えてもみなかった私ですが、運命というのか、宿命というのか、昨年11月、次期の小・中学校長に推薦されました。信任投票に先立つ職員会議で、私は日頃考えていることの一端を、次の三点にしばって述べました。

1. たゆまざる実践を通じて教育の質を高める

創立以来の教育目標は明らかなです。今、私たちに課されている現実的な課題は、

①確かな学ぶ力を育てていく

②基本的な生活・学習習慣を育てていく

ことだと思います。つまり、一人ひとりの子どもたちが、高い知性を身につけることができるように育てていくことです。

そのためには、明星学園の良き伝統である自由なる精神を基に、教師が自主的に、集团的に、創造的な実践をつみ重ねていくしかありません。

2. 小・中・高の教職員間の相互信頼を深める

小学校、中学校、高校にはそれぞれ、教育内容の独自性があります。しかし、それぞれの独自性を尊重しつつ、全学園が一体となって子どもたちを育てていくという観点が今こそ重要です。そして、その機は熟しつつあると思います。

日常的な、地道な研究・実践のつみ重ねを通じて、相互の理解と信頼を深め、教育内容の質を高めていくことが、子どもたちを育て、伸ばしていく道であり、父母の信頼と期待に応えていく道だと信じます。

3. 多くの人々の信頼を得る学園づくりを

私たちの実践を発表し、全国各地の実践家から学ぶことはとても大切なことです。と同時に、私たちは現父母はもとより、卒業生・旧父母、そして地域の人たちの信頼を得るべく努めなくてはなりません。謙虚に、地道に、着実に実践をつづけ、足もとをかためていかねばなりません。

以上、ごくあたりまえなことを述べたにすぎません。そして、校長となった今も、私はあたりまえなことを、あたりまえにやっていくことが最も大切だと信じています。

明星学園は来年、創立60周年を迎えます。いっそう学園を発展させていくために、高等学校長の恩地先生と共に力を尽くす所存です。



依田好照 小・中学校長

2 教育現場の運営

(1) 全園校教務会

1983年（昭和58）4月、小・中学校、高等学校それぞれにおいて、新校長を中心とする学校運営が始まった。

小・中・高教職員の相互理解、相互信頼を高めるために、組織運営上のさまざまな改革・実践がなされたが、全園校教務会の活動もそのひとつであった。当初のメンバーは、高校の恩地校長、加藤信夫教頭、田崎中教務部長、井口芳雄生徒指導部長、小・中学校の依田校長、佐藤文夫教務。〈※9〉学校運営の中核に位置するこの種の会は、名称は異なってもどこの学校にもあり、明星にも組織としてあったが、不幸にも前校長の頃はほとんど機能していなかった。これを反省して、原則として毎月1回開催、小・中・高各部の情報交換、実践報告、協議事項の検討が行われた。

第1回（4月27日）の概要は、

- ①内部進学問題を解決するために何が必要かを協議。継続協議となる。
- ②児童・生徒募集は従来のように小・中・高別々に行うのではなく、全園的観点で一体化して進めること。
- ③教科によっては久しく途絶えていた全園教科部会を復活する。6月1日午後2時から高校で行う。今回は目標を親睦程度とし、ざくばらんに実践の交流を行うことにする。なお、英語・数学・国語の三教科部会には、内部進学問題をも話題にすることを要望すること。

第2回（5月18日）。高校からの報告は、生徒指導部による生徒への呼びかけ文「授業を充実させよう」。自治会入会費・年会費の増額。体操部優勝（都大会）。小・中からは、募集の一環としての「就学前教育研究会」（近隣幼稚園の教師によびかけての研究会）実施計画の報告。予算措置の要望。

協議事項は、

- ①6月1日の全園教科部会の会場（部屋割り）、運営、部会報告提出の件。内部進学問題についても話し合うこと。終了後の親睦の深め方は各教科部会に任せること、など。
- ②内部進学テストについて。

この日の話し合いで、内部進学問題はこれからも続く問題であることが再認識された。中・高各部での責任を明確にさせ、それを互いにわかり合えるようにしていくこと、内部進学問題は「教育」の問題であることを確認し合った。

〈※9〉 小・中学校では当初、「教頭」は置かず、運営委員会を中核とする「各種委員会」による集团的運営を実施した。（各種委員会には、教育研究・行事・自治的活動・施設設備・予算・防災・募集・人事があった。）

(2)「内部進学テスト」の廃止

1980年（昭和55）、恩地邦郎高等学校長と遠藤豊小・中学校長の合意により実施された「内部進学予備テスト」（その後「内部進学テスト」）は、PTA等の反対運動を引き起こしたこともあり、教職員の間でも廃止か存続かの論争が続き、相互の不信、対立を増長させ、一貫教育体制の着実な進展を阻害する要因にもなっていた。

これらのいわゆる内部進学問題の収拾策は、1995年（平成7）4月、加藤信夫高等学校長のあとを承けた松井憲紀理事長が高等学校長を兼務するに至って、松井高等学校長と依田小・中学校長に一任された。両校長は時間をかけて慎重に協議を重ね、合意確認の上、同年9月20日付の文書「内部進学について」を全園の教職員に発表した。

内部進学について

明星学園高等学校長 松井 憲紀
明星学園小・中学校長 依田 好照

小・中学校長と高等学校長に一任された標記の件について、両校長は検討協議を重ねてきた。両校長は、従来の内部進学制度を改め、下記のように合意決定したので知らせる。

1. 総合学力テストについて
 - ①本年度をふくめて当面3年間実施する。
 - ②当面、国語・数学・英語の3教科とし、11月中に実施する。
 - ③テスト問題は、一貫カリキュラム（とくに中・高の接続）の完成をめざしながら、中・高で十分に検討して作成する。
 - ④テストの結果は直ちに内部進学の適否を判断する材料とはせず、個々の生徒および全般的な学力を把握し、さらに学力向上をはかるためのデータとして活用し、蓄積していく。
2. 小・中学校は、基礎学力の充実と向上、学習・生活習慣の定着に一層努力し、その実績を示していく。
3. 中学校長は、生徒一人ひとりの学習および生活の状況を総合的に判断し、適切な進路指導を行い、内部進学の生徒を高等学校長に推薦する。
4. 高等学校長は、中学校長の推薦する生徒を全員受け入れる。
5. 高等学校は、生徒が持てる能力を将来に亘って伸ばしていけるよう、教育面、生活面を通じて援助していく。
6. 小・中・高は一貫教育の実をあげるために一致協力して研究・実践を進め、向こう3年間で一貫したシラバスを完了し、父母はもちろん生徒にも説明し、理解を得ることとする。

また、依田中学校長は9年保護者に対して、お知らせ「明星学園高等学校への内部進学について」を通知した。こうして、内部進学テストは廃止された。

3 小・中学校の実践

実践記録の発刊

依田好照小・中学校校長のもと運営委員会が構成され、各種委員会が持たれた。その一つ、教育研究委員会を中心に3年間休刊していた『明星の教育』を1984年11月、『明星の教育』5号として再出発させた。この年以降特集号を組む形で『明星の教育』を発行するようになった。

『都市を描く子どもたち』と『みる つくる かんがえる』は出版社の求めに応じて作成された。また教師仲間でも自主的に編集された『授業をつくる』という冊子（創刊号から4号）もつくられた。

このころの実践の多くは「課題授業」と呼ばれるもので、理科教師・佐藤文夫の論文がベースとなっていた。その趣旨は、「授業は1時間、1時間ひとつの課題をもってつくられる。それが順序良くつながって認識を深めていく。子どもたちは課題を主体的に受け止め、討議することで学び合っていく」というものだった。

80年代～90年代にかけての実践記録を一覧にすると次のようになる。

	発行年月	書 名	編 者	発行元
〈1〉	1984. 11	明星の教育 5号	『明星の教育』編集委員会	明星学園小・中学校
〈2〉	1986. 11	都市を描く子どもたち	太田幸雄	現代美術社
〈3〉	1989. 3	画集 みつめる目	太田幸雄 倉橋正美 鈴木五郎 重吉起佐子 柳沢茂美 横森サチ子	明星学園小学校
〈4〉	1991. 4	みる つくる かんがえる	一瀬清 辻木猪一郎 横森サチ子	ぎょうせい
〈5〉	1991. 10	明星の教育 一時間の授業 中学校編	飯田達彦 平山勲 柳沢茂美 大草繁 平野康弘 和田武久	明星学園小・中学校
〈6〉	1992. 10	明星の教育 一時間の授業 小学校編	飯田達彦 平山勲 柳沢茂美 大草繁 河住貴夫 和田武久	明星学園小・中学校
〈7〉	1994. 10	明星の教育 保健体育編	河住貴夫 剛力正和 根本美愛 森村卓	明星学園小・中学校
〈8〉	1996 春	明星の教育 中学校の幾何教育	山口一郎 中西正一 平野康弘	明星学園小・中学校
〈9〉	1996 秋	明星の教育 理科の授業 自然現象の粒子論的な理解	岡本博行 和田武久 福田純一 江頭有子 山本豊 平山勲	明星学園小・中学校

(1)『明星の教育』

小・中の教員らによる実践記録『明星の教育』のなかから、表紙写真と目次を抄録する。

『明星の教育』5 1984 秋 目次



小学校の実践記録	低学年での文学教育	横森サチ子
カタツムリ	大野 映子	
アリの観察	江頭 有子	
とうふつくり	一瀬清・柳沢茂美	
小学校の指導プラン	文学作品の読み方指導	内藤 哲彦
中学校の実践記録	美術 子どもの表現と課題	太田 幸雄
中学校の指導プラン	理科 運動力学	山本 豊
数学 数学における文字の指導について	英語 中学一年の構文論	百瀬 弘
		大草 繁



『明星の教育』一時間の授業 1991 秋 中学校篇 目次

9 年生の授業	8 年生の授業	7 年生の授業
ダイナマイトの番人 第4段落の見出しつけ	「詩人」の授業	豊かな国、貧しい国
ルートの数	オランダの東インド会社	遺伝のしくみー分離の法則
「聖者の行進」を笛で、歌で	変換と図形の幾何的性質	点対称からなる模様
対称からなる模様	イオンと化学変化ーイオンの導入	ハードル走ーF走とH走の足跡から
新しい商品を開発しよう	「こわれたもの、つぶれたものたち」から	主語と述語ー述語の種類
座標幾何ーデカルト座標の導入	呼吸と血液循環のしくみ	
モルと化学変化ー気体反応の法則	型染め	
バレエボールー守備フォーメーション	家具をつくるー斧・金矢・ナタと製材	
織りの授業ーすかし織り	受動態	
準動詞(6不定詞)		
井上 成雄	大草 繁	姫野 英二
堀内 雅人	山内 国任	根本 美愛
古川 博資	倉橋 正美	吉村 直樹
百瀬 弘	河住 貴夫	根本 美愛
岡本 博行	熊坂 衛	重吉起佐子
岡本 紀子		遠藤 春幸
		和田 武久
		山口 一郎
		川手 晴雄
		亀山平九郎

『明星の教育』 保健体育の授業 ■理論と実践 1994 秋 中学校篇 目次



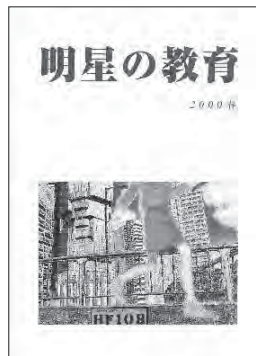
Ⅰ	体育科教育総論……………根本美愛・河住貴夫
1	球技運動
	球技の技術構造……………剛力 正和
	ハンドボール……………河住 貴夫
	バスケットボールの実践……………剛力 正和
	サッカー……………根本 美愛
2	器械運動
	器械運動の技術体系……………根本 美愛
	マット運動……………森村 卓
Ⅱ	保健
	人体の機能と構造……………河住 貴夫
	生殖……………河住 貴夫
	身体を守るしくみ―免疫―……………森村 卓
	スキーの技術構造……………河住 貴夫
Ⅲ	スキー

『明星の教育』
1999 春 目次



「空気さがし」の授業……………一瀬 清
「分数の指導」……………福田 純一
「国語で何を教えるか」……………照井 伸也
「縄文時代の授業」……………江口 聡江
「小学校後期図書指導について」……………江頭 有子
「日本近現代史学習の視点」……………川手 晴雄
「詩の授業」……………亀山平九郎

『明星の教育』
2000 春 目次



「式の展開・因数分解」……………中西 正一
「二次方程式の解法」の授業……………中西 正一
理科における
「課題形式」の授業について……………平山 勲
「文の二次的成分」……………姫野 英二
「スキーの指導」……………河住 貴夫
―スキー教室の実践を通して―……………河住 貴夫
「国語で教えること」……………亀山平九郎

(2)『都市を描く子どもたち

—— 明星学園中学校、生活の絵・10年間の記録』(1986年 現代美術社)

明星学園中学校の美術の授業は一つ一つの課題に明確な意図をもたせている。例えば「ビンの写生」や「皿の写生」では透明感や質感のある描き方を学び、ケストナーの『最初の絶望』という詩を絵にする課題では、具体的な形象と心理とのかかわりを学び、有名な絵画の模写では、画家の描いた絵を仔細に観察して忠実に再現することで構図や色づかいを学ぶというように。そして9年生ではその集大成として卒業制作に取り組む。自分のテーマを持って絵を仕上げていくのである。

「都市の絵」を指導した中学校美術科教諭・太田幸雄は次のようにその意図を考えた。

子どもの表現にとって日常的な生活の中から、自らの感性を通して、感じ、思い、考えたことを一枚の絵に凝縮していくことは大事な仕事である。人間と人間、人間と自然、人間とものという関わりの中で、都市の断面を切り取ることによって、自分のみつめる「都会」の実態を表すことができるのではないかと考え、このテーマに取り組み指導してきた。しかし「都会」というものの実像は抽象的で、まるごと全てを内包できる言葉の説明や視点を集約させることは極めて困難で、子どもたちがはたして自分のイメージを具体化できるのかどうか、自分の力量にかなうものかどうかという試行錯誤もあった。この授業の中で、子どもたちに最も意欲と勇気をもたせてくれたものは、毎年描き残していった先輩たちの優れた作品に触れることだった。※『都市を描く子どもたち』(1986年、現代美術社)序文からの抄録

太田の指導のもと、中学生が描いた作品の一部を、作品集『都市を描く子どもたち』から紹介する。どれも後輩たちに影響を与えた、印象深い作品である。



「地下道風景」1982年 52回生 浦野克人



「上水路」1979年 49回生 郡司直樹



「夏の午後」1984年 54回生 磯貝純子



「都会」1978年 54回生 小林修士



「歩行者天国」1980年 48回生 成谷由香



「ルーペ」1985年 55回生 井上彩



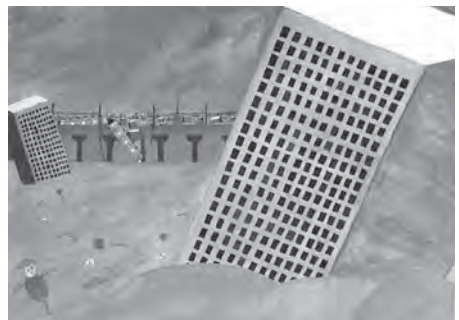
「夕陽」1979年 49回生 大久保草子



「灰色の街」1982年 52回生 志村由紀



「人間が造ったもの」1979年 55回生 村松詩絵



「案山子」1979年 55回生 大野希一

(3)『画集 みつめる目——明星学園小学校の実践』(1989年 明星学園小・中学校)

明星学園小学校の絵の指導は、おおまかに三つの領域に分けられる。

一つ目は自然・人物・物などを観察して描く絵。それぞれの物の概念を掴み、空間の広がり、一般的な特徴などを理解させる。

二つ目は物語の絵。文章の一場面を絵として再現することは、現実の事象の規制を受けず、子どもたちの想像力を刺激することができる。

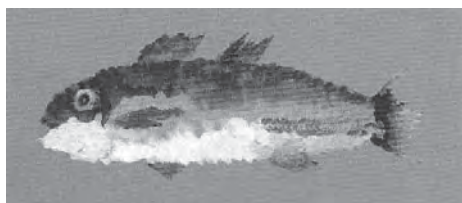
三つ目は生活を題材とした絵。自身が体験した事柄を記憶や想像力を総動員して描く課題は、子ども自身の表現として最も創造的なものである。

これらの三つの領域は個々に区切られるのではなく、互いに絡み合いながら、子どもの表現を支える基礎的な力を育てる。さまざまな事象を見つめる力と、想像の世界を造り出す力を結び付け、日常の小さな出来事にも深い視点と想像力をはたらかせる目を持ってほしいと願って授業をつくり上げている。

日々の美術授業のなかで生まれた子どもたちの作品と実践を記録としてまとめたのが、この画集『みつめる目』である。いくつかの作品を紹介する。



5年「校庭の木」



2年「アジ」



1年「すいか」



5年「友だちの顔」



3年「ユリの花」



6年「電信柱」



2年「百羽のつる」



3年「モチモチの木」



5年「よだかの星」



5年「寒い冬の日」



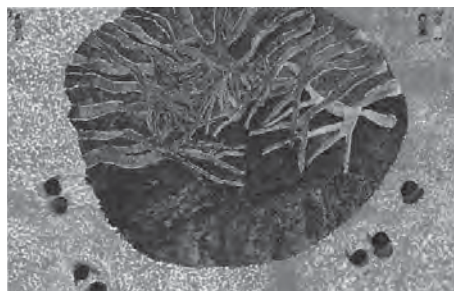
6年「注文の多い料理店」



5年「公園駅」



4年「陣馬山登山」



5年「三原山の火口」

(4)『みる つくる かんがえる ― 明星学園小学校の総合学習』

(1991年 ぎょうせい)

明星学園小学校では創立以来、教育の内容と方法について研究を積み重ねてきた。低学年の子どもたちを自然とどう向き合わせるか、というテーマは重要なものであった。自然を対象にしたとき、子どもが自ら興味を持ち、それを膨らませ、科学的思考にまで発展させる主体的学びが成立するからである。創立者の一人、照井猪一郎は『自然科の究明』という冊子を著わし、子どもと自然とのかかわり方の基本をまとめた。以来明星では、自然認識を育てる方法として個別的な物事を文章として読み取ったり、ものをつくることを通して自然を能動的に認識していくことを「総合学習」と位置づけ、実践を積み重ねてきた。

1989年、国の施策として、学習指導要領の改訂で低学年の理科・社会科が廃止され、「生活科」を新設するということになった。「生活科」の狙うところは、花や木や動物に人間の視点で働きかけられるというもので、明星学園が開発してきた「総合学習」とは似て非なるものであった。明星学園では、事実を知らないで環境に働きかけることはできないと考え、個別的事実認識という目的を持った「総合学習」の必要性を主張した。

私学といえども公教育と無縁なものではない。公教育に携わる全国各地の教師たちと共に研究していきたいと願い、10年間の実践を『みる つくる かんがえる』(ぎょうせい)という本にして世に問うことにした。

『みる つくる かんがえる』は次のような構成になっている

1章 総合学習

学習の方法と教材

2章 自然をみつめる

散歩(定点観察)……同じところを見ることによって生き物の変化を知る。

「自然のたより」……発見したことを綴る。

3章 文章を手がかりに

コイ、カタツムリ、ドングリなど、生きものを文を手がかりにひとまとまりとして認識する。

4章 ものづくり

糸つむぎ、織り、染め、和紙づくり、ナイフづくり、パンづくり、豆腐づくり

本文の一例を紹介する。

和紙づくり(3年生2学期 14時間)

1. 教材について

紙に焦点を当て、紙をつくることを通して、原料(コウゾの特性)やつくり方を知り、紙に対する関心を深め、紙がつくれたという喜びを知る。紙の大切さを身をもって知る。

紙は植物の繊維が絡まりあってできていることを知る。

和紙の里として知られる埼玉県小川町の和紙農家からいただいたコウゾの若木を学校の庭で育て、枝の皮をはいで毎年作ることができた。

2. 目標

- ①紙は植物の繊維が絡まりあってできている
- ②和紙の原料や性質について知る
- ③和紙のつくり方を理解する
- ④和紙をつくる

3. 指導計画（省略）

4. 実践の記録

- (1) 紙はなにからできている？
- (2) 和紙と洋紙……和紙は木の枝の皮を使っている
洋紙は幹を細かいチップにして固めている
- (3) 和紙の作り方……絵本『山のかあさんと16ぴきのねずみ』（大川悦生著）を読む
- (4) 和紙作り
 - ①コウゾの枝から表面の皮をはぐ。さらに黒皮を取る
 - ②木づちで叩いて、こまかく砕き、繊維をつくる
 - ③水に浮かべて梳く
 - ④新聞紙の上に梳いた和紙を置き乾かす
 - ⑤やったことを順番に文章にまとめる

「紙づくりで一ばん心にのこったこと」

…前略　さいしょはこのまえに　木づちでたたいた　こうぞを　ほぐし　水に　いれました。
それから　とろろあおいを　すこしずつ　いれました。
そうして　ゆっくりかきまぜました。
すると　手がつめたくなってきて　さむけが　しました。
だから　手をあげると　すこしとろとろとしたので　びっくりしました。
それからなによりも楽しみに　してたのは　紙すきです。
そして「す」を　せんの　中に入れて　そっとうごかしました。
「す」のうへは　すこしずつせんいが　たまりました。
しんぶんしの　うへに　せんいを「ピシャッ」と　おきました。
すると水が　はねかえりました。
きれいな紙を　かけるとすてきになるかとおもって　きれいな紙を　かけました。すると　さっきの
よりもっとすてきになりました。
だから2まいめのにもかけました。
3まいめはおしな　4まいめはなにもつけませんでした。
5まいめは　せんいがたりなかったので　はんぶん　しました。
5まいめは　とてもあつい紙に　なりました。
月よう日　せんいはかちかちに　なりました。
みんなに　きにいった紙を　みせるのも楽しかったです。

※作文中の「とろろあおいの根」は実際には使わず、合成のりで代用した。

4 高等学校の実践

(1) 新教育課程（1984 年度実施）

新教科カリキュラム

学園内部は、「内部進学問題」その他で混乱した時期であったが、指導要領改訂にともなうカリキュラムの検討は4年間に及んだ。中野光氏（和光大学教授）、田代三良氏（元都立戸山高校教諭、岩波新書『高校生』1970年刊著者）を講師に招くなど、学力向上の課題と明星の特色をどうカリキュラム上で結合させていくかを主題に検討された。その結果、1973（昭和48）年度の選択制を発展させた新カリキュラムが、1984（昭和59）年度から実施された。

明星学園高校の教育課程について（1984年度「明星学園入学案内」より）

本校の教育課程は、生徒が自主的に勉強していくにはどうしたらよいか、という考えが基本になっています。自主性の育成が、同時に教育の目標にもなるわけですが、生徒諸君が積極的に進んで勉強するというを中心にして、必修と選択の授業でそれを追求しよう、というのがこの課程の大きな構造です。ですから、諸君は、必修と選択の授業を取得して、11年（高2）、12年と進む課程で、どんどん成長してほしいと思っています。以下高校の授業とはどういうものなのかを、順を追って説明します。

《授業の形態について》

1 必修授業

これは、ある教科の基礎になる内容で組み立てられる授業です。例えば、国語なら、教科の内容として、文章表現・現代文・古文・漢文等がありますが、本校の必修国語では、それらの分野の基礎になっているものがすべて含まれて構成されています。ですから、必修国語は、11年・12年と進むに従って、国語の選択科目としてある文章表現・現代文その他のすべての選択教科の基礎になっているので、必修国語でしっかりと、文章の読み方や理解のしかた、あるいは表現のしかたやところを養っておかないと、のちのち支障をきたすことになりますから、きちんと取り組みましょう。

こういうことは、すべての教科にあてはまることです。必修の授業とは、明星の高校に入学したすべての生徒がクラス全員で学習に取り組んで、将来自分で発展させるように必ずものにしていく授業と考えて下さい。

2 選択授業

ある教科の基礎が固まったら、その基礎のうえに、どんどん発展しなければなりません。教科の内容は、幅広く深いもので、段階をふんで、系統的にやってゆかなければならないからです。これも例を挙げて説明します。

社会科では、現代社会を必修としています。現代社会の内容は地理と近現代史で組み立てられ、この世界の社会が、空間と時間から成り立っていることを学習したあとこんどは、専門的に、いわゆる世界の歴史や日本の歴史、社会そのものを対象とした社会学や、人間の考え方を学ぶ哲学などに発展させて学習します。それらを各自が選択して、系統的に学習していく科目が、選択授業です。

3 自主選択

この選択は、教師の指導もありますが、基本的には、生徒が自主性をもって授業を形成することを、大きな特色としています。生徒も自主的、教師も自主的に取り組む授業、これはどんな授業でもそうで当たり前ですが、それを強く自覚して進取する姿勢が望まれるのがこの選択です。

内容は、教科の発展したもので、必修や選択では触れられないもの、範囲の特殊なもの、興味のあるもの、専門的なもの……等々、深く自主的に追求する授業です。

このように、広く深く様々な形で、“学習”を形成してゆけるのが、わたしたちの私立の高校のよさでもあります。学習を通して、教材をなかだちとして、教師と生徒との関わりが生まれ、ともに学習に対して自立した姿勢を確立してゆこうとするのが、その目指すところです。

学習課程一覧表（1984・昭和60年度実施）

学年	10年（高校1年）		11年（高校2年）		12年（高校3年）		自主選択
	必修	選択	必修	選択	必修	選択	
国語	国語Ⅰ 4		国語Ⅱ 2	国語表現 2		国語表現 2	現国講座 2
				現代文 2		現代文 2	古典講座 2
				古文 2		古文 2	基礎国語 2
						漢文 2	受験現国 2
社会	現代社会 2		日本史 2	世界史 2	政経 2	世界史演習Ⅰ 2	哲学 2
	世界史 2			日本史 2		日本史演習Ⅰ 2	地域史 2
				倫社 4		倫社演習 4	
				地理 2		地理 2	
						日本史演習Ⅱ 4	
数学	基礎分析 3		基礎分析	代数幾何 4		微分積分 2	基礎数学 2
	数Ⅰ 2		及び数Ⅰ 3			数学演習 2	数学演習 2
						(理系)	確率数Ⅰ 2
						数学演習 2	
理科	理科Ⅰ 3		理科Ⅰ 3	化学 4		物理 4	物理実験 2
				地学 4		化学 4	化学実験 2
						生物 4	生化学実験 2
						地学 4	天文 2
体育	体育 3		体育 3		体育 3		生物 2
	保健 1		保健 1				バスケット(男・女) 2
							ソフトボール 2
							ソフトボール 2
芸術	美術史 1			デザイン 2		デザイン 2	美術一般 2
				絵画 2		絵画 2	油絵 2
						美学技術 2	版画 2
						美術一般 2	オペラ 2
	合唱 1			歌唱 2		歌唱 2	鑑賞 2
				器楽 2		器楽 2	合唱 2
				音楽一般 2		音楽一般 2	音楽史 2
生活	生活 2			被服 2		被服 2	華道 2
				食物 2		食物 2	染色 2
				家庭一般 2		家庭一般 2	女性史 2
							手芸 2
外国語	英語文法 3		英語文法 3	英語演習 2	英語文法 3	英語演習 2	英作文演習 2
	英文購読 2		英文購読 2		英文購読 2		英会話 2
							国際英語 2
							基礎英語 2
							スウェーデン語 2
HR	1		1		1		中国語 2
学年計	30		20	$2 \times a$	11	$2 \times a$	$2 \times a$
計	30		$20 + 2a$		$11 + 2a$		
	80単位以上						

 a は選択科目時間数

(2) 高等学校研究紀要を『明星』と改題して復刊

1970年代に発行された高等学校紀要『明星の高校教育』▶▶本誌P.218参照 は、1980年（昭和55）7月発行の第6号以後、発行がしばらく途絶えていたが、3年後の1983年（昭和58）に第7号が『明星—明星学園高校紀要』として発行された。その間の事情について第7号編集後記には以下のように記されている。

前6号の後、原稿が集まらないまま3年の空白を成して、漸くのことで繋ぐことができました。日々の仕事は際限もなく私たちを忙殺し余裕を与えてくれませんが、どうか、筆を持つひとときを得ることを、自己とわが明星学園の発展のために、みなさん、試みてください。

なお、`教育。という文字が制約して書き難いと言う奥床しい声を入れて、今号から『明星の高校教育』改め『明星』となります。明治の与謝野鉄幹の「明星」に張り合うわけではありませんが、そのロマンと革新の精神は戴いて、何でも自由に書いて発表する場として、愛されますように。（1983年9月）

その後、高橋幸悦教諭が、「明星生の健康度・生活意識・生活状態」として、アンケートなどの調査結果や（第8号）、第9号には、斉藤顕隆教諭の脚本「国定忠治 一幕四場」が掲載されている。これは、1986年度の10年（56回生）学年会が、明星祭で公演した教師演劇のために書かれたものである。もちろん、授業や個人研究の記録も掲載されているが、いわゆる実践記録にとどまらない幅の広さを感じさせるものとなった。



『明星』明星学園高校紀要 第8号 目次 1986年3月	
現代を生きる人間の課題……………	田崎 中
明星生の健康度・生活意識・生活実態について……………	高橋 幸悦
男女共学「生活科」への実現に至る経過……………	大平 初枝
中国語研修台湾旅行報告……………	渡辺 信一
詩集 塔……………	井部 高志
明星の思い出……………	土屋 浩
給料と教育……………	葛城 八十雄
時事英語二年目のイメージ……………	吉沢 真人
これでもいいのかしらん？……………	森田 小夜子
開高健「裸の王様」論……………	生徒
「行列」を一次変換で……………	鈴木 雅子
教育研究ニュース第11号～17号……………	西島 直紀
表紙……………	

5 創立 60 周年

(1) 記念式典・祝賀会

1984 年（昭和 59）5 月 13 日、創立 60 周年の記念式典と祝賀会が催された。

小・中・高の児童生徒と関係者すべてが同じ会場に入りきれなかったため、時間と場所をずらしながら多くの人々が参加できるように配慮し、慎ましくも温かみのある明星学園らしい記念日であった。

人間でいえば“還暦”にあたるこの 60 年は、明星学園にとって平坦な年月ではなかった。創業の苦労に続く戦争の影響、その後に続いた創立者らの逝去、教育をめぐる教師間の対立と制度の変更による混乱など、次々と襲う大きな波を乗り越えた後に迎えた 60 年目の日ただだけに、関係者らの感慨もまたひとしおであった。

式典に先立ち、小・中学生は依田好照校長からの講話を聞き、高校では卒業生で東京大学名誉教授の物理学者・霜田光一氏（6 回生）と、シルクロードの紹介者としても著名な写真家・並河萬里氏（17 回生）の講演があった。生徒たちは講演の後も両氏を囲んで懇談した。

その後、小・中学校体育館で記念式典が執り行われた。物故者への黙祷、中・高アンサンブル部と高校合唱団による演奏、松井憲紀理事長の式辞、来賓からの祝辞、永年勤続表彰、永年にわたって学園の教諭・理事として尽力され、とくに学園資料の収集と 50・60 周年の記念誌の編纂に尽くされた原田満寿郎先生への感謝状の贈呈と続いた。式典のあとは会場を高校体育館に移して祝賀会が持たれた。

記念式典に列席された立教大学教授中野^{あきら}光氏の感想を紹介する。中野氏は大正自由教育の研究者として知られ、また晩年の赤井米吉先生とも交流の深かった教育学者である。

明星学園の創立 60 周年の記念式に参席させていただき、深い感銘をおぼえました。

1924 年（大正 13）という年は、いわゆる大正デモクラシーの歴史潮流がひき潮にむかった時でした。それだけに赤井米吉先生をはじめとする教職員の方々のご苦労は大変なものだったと思います。明星と同じ時期に誕生した池袋児童の村小学校は 1936 年にわずか 12 年の存続がゆるぎただけでしたし、赤井先生の同志でもあった手塚岸衛氏の自由ヶ丘学園も 1937 年に廃校を余儀なくされ、小林宗作氏のトモエ学園にひきつがれたとはいえ、戦火のなかに焼失していったのです。

そんなことを想うと、明星学園が今日存続発展をとげてきたことは、本当に貴重なことだと思います。関係者のご努力に心から敬意を感じております。

今朝、学園の入口に立ったとき、赤井先生の像が、いかにも満足気にほほえんでおられるように私には感じられました。同時に私は、最近亡くなった赤井つる夫人のことを想い出します。今日いただいた『明星の年輪—明星学園 60 年のあゆみ』51 ページにも学園の苦難を支えたのはこのような人もあったことを想わせる証言が掲載されておりますが、赤井夫人も今日の式典に出席されることができたとしたらさぞかしお喜びだったにちがいないと思います。いま、赤井先生をはじめとする創設期の先生方がこの学園の未来にかけられた願いは、今日の私たちが教育荒廃を克服しようとするさいに、言いしれぬはげましと示唆を与えてくださっているように思います。

60 周年のこの日が学園だけでなく、日本の教育を改革していくための創造的実践の新たな出発の日になることを心から期待しております。

1984 年 5 月 13 日 中野 光

(2) 美術展と協賛展

創立60周年記念行事のひとつとして、5月11日から15日まで、東急百貨店吉祥寺店で児童生徒による美術作品展と、卒業生・元保護者など学園に関係の深い美術家による作品の協賛展が開かれた。東急百貨店の全館あげての協力に加え、新聞報道の影響もあって入場者は予想をはるかに超え、大きな好評を得た。

美術展には児童生徒の絵画・デザイン作品150点、木工・工芸作品9点、協賛展には棟方志功氏の版画（志功氏は“版画”のことをこう書かれた）、加藤清美氏の油絵と版画、恩地孝四郎氏の版画、佐藤多持氏の日本画、清水多嘉示氏の彫刻、渡辺豊重氏の油絵、四田昌二氏の彫刻、横田善夫氏の油絵、正木隆氏の彫刻、西島直紀氏の油絵、田中岑氏の油絵が出展された。

『明星学園報』第13号（60周年記念特集号1984年6月発行）には、この美術展と協賛展に出会った人々の感動が綴られている。そのなかから創立期の保護者であり、元成蹊学園教諭、美術教育家の藤浦敏雄氏の感想を紹介する。

明星学園創立60周年の記念式典に参列させてもらって深い感銘を受けた。その盛大さではなく、今なお創立者の心が生き続けているのを見たからである。戦後、時代の推移とともに多くの私学はそれぞれに変貌を余儀なくされた。あるものは規模の拡大を遂げ、またあるものは父兄の要望を安易に受け入れて公立化し、進学率の向上に浮き身をやつし、建学の心もいつしか希薄になっている現況のなかで、ひとり明星学園は今なお、赤井米吉氏の建学の心を失わず、受け継がれているのを感じたからである。

私は戦前から深い御厚誼を受け、特別の関係で私の娘たちはもちろん、親戚、知友の子弟も多くお世話になり、時には無理なお願ひまで聞いていただいたことも多かった。

特に今回の記念美術展を見て一層その感を深くした。以前から明星学園の美術指導について授業も参観し、多くの作品も見てきたのであるが、それは一般の美術指導の考え方とも異なり、作品も一般の児童生徒の作品ともちがっているの、それを充分理解することも出来なかった。一般の美術指導は児童生徒の個性を尊重し、自由な創造、表現活動を発展させることに唯一の目標を置いているが、私はそれを否定するものではない。しかし、明星学園のそれはかなり異なるもののように思われる。近頃、私は一般美術教育の理念としての個性の尊重、自由な表現活動一辺倒の行き方にも一種の疑問を持ち始めていたのであるが、今回の60周年記念美術展を見て、一つの問題解決の手係りを与えられたように感じた。私はここで面倒な理論の説明をしようとは思わないが、見事に明星教育の神髄が堅持されていたように思うのである。それは私の勝手な独断に過ぎないかもしれないが、私たちの学ぶべき教師は、目に見えるものであり、風景であり、社会そのものであるから、自由な創造、表現の前に、ものをよく見るという事からはじめなければならない。このことが今度の展覧会に於いて明確に実現されている。小学校の1年生から高校生の作品に至るまで一貫しているこのような美術教育は他に例を見ない。

なお、また特筆すべきことは、数点にしかすぎなかったが展示されている生徒の家具（木工）作品に注目したい。圧迫感をさ感ずるその力強い作品はもちろん、個人の作品ではなく共同製作によるものである。私はその製作過程を数年にわたって見学している。それは一般の学校で思いつきで行われる共同製作というようなものではない。数えられないくらい多くの生徒の血と汗と涙のしみこんだ協同の結晶である。数年にわたる生徒全体の労作である。この労作を長い年月に亘って終始一貫、黙々と指導してきた人の情熱と真心とに限りない尊敬と感謝を捧げるものである。文部省の仔細らしい指導要領からはこんな教育は絶対に生まれない。これこそ真の教育というものであると私は確信する。

一見、明星の生徒は弱々しく見える面があるが、一度協力すればこれほど力強い作品を生み出すことができるのである。口先だけで個性尊重、創造論を振りまわすだけの美術教育者たちにはこれほどの教育はできない。

（元成蹊学園教諭、美術教育家）

(3) 60 周年記念学園史の発行

創立 50 周年を迎えた 1974 年に、学園としてはじめて発行が実現した『明星の年輪—明星学園 50 年のあゆみ』につづき、60 周年に際しても学園史を発行した。題名は 50 周年記念誌を踏襲し、『明星の年輪—明星学園 60 年のあゆみ』と付けられた。

60 周年史の内容は 2 部構成で、第 1 部として創立から 50 周年（1974 年）までを、『50 年のあゆみ』の編纂責任者であった原田満寿郎が中心となって再検証し、『50 年のあゆみ』に載せきれなかったことも、より充実した内容でまとめられた。

第 2 部は、小・中学校校長の依田好照が中心となり、50 周年以降のできごとを多角的に取り上げ、自己批判的な事柄であっても敢えて触れられている。

表紙は旧制中学校開校間もない時期に当時の父母たちによって植えられた桜の木（現高等学校正門）の写真で、撮影は卒業生の村上清英（34 回生）。

明星学園の歴史を調べるために不可欠な参考書である『明星の年輪—明星学園 50 年のあゆみ』『同一—60 年のあゆみ』の 2 冊は、創立同人を長年にわたって傍らで支えた原田満寿郎による証言録でもある。原田の他にも、恩地邦郎（高校校長・5 回生）、上田八郎（前高校校長・7 回生、上田八一郎新制高校初代校長の長男）、谷井精之助（学園理事・明星会会長・7 回生）、岸すみれ（高校国語科教諭・10 回生）、田中一水（高校理科科教諭・16 回生）ら、学園に深く関わった卒業生の教師や、現役教師たちが尽力し、より正確な記録となるよう資料を掘り起こした。

50 周年・60 周年の 2 回、学園史を発行したことにより、これ以降も十年ごとに学園史を刊行することが学園として意識づけられるようになった。



〈上〉 これまでに発行した学園史。左から 50 周年、60 周年、70 周年、90 周年の年に発行

〈下〉 学園の節目に発行された「記念誌」。左から 25 周年、30 周年、35 周年、40 周年、80 周年



中・高文芸部発行



PTA 発行



中・高文芸部発行



学校法人明星学園発行



学校法人明星学園発行

第4章 「学校週5日制」

1 学校週5日制

明星学園では小学校・中学校において「学校週5日制」を1997（平成9）年度から実施した。「明星らしい学校週5日制」をめざし、教職員、理事会、保護者で6年かけて検討した結果、実施に至ったのである。その考え方、その過程を追う。

公立学校ではすでに2年後の1999年、完全週5日制を実施することが決まっており、それまで隔週5日制となっていた。社会的には、労働条件改善の社会的・国際的な要請として、官庁・企業では週休2日制が実施に移っていた。

教育の問題としては文科省の方針「ゆとり教育」をめざし、指導要領も教育内容の削減の方向性であった。私学においても、公立に合わせて週5日制にするよう、行政からは強い要請があった。当時、高等学校は週6日制であって、教師は日曜日以外に1日の研究日があった。授業時数の確保、選択授業の維持は重要な問題であったので、週5日制には移行できないと考えていた。

一方、小・中学校では、土曜日は休みという保護者が増えたこともあり、土曜の休みは可能と考えていた。理事会は学園内での統一を考えていたが、小・中学校での週5日制を認める判断に達した。こうして、小・中学校は、「明星らしい週5日制」を目指したのであった。

1996年（平成8）4月17日、明星学園小・中学校週5日制委員会は、1997（平成9）年度からの学校週5日制実施に向けて、保護者あてに、次のような主旨の手紙を配付した。（※10）

学校週5日制の主旨——学校・家庭・地域の分担

子どもたちの成長にとって、家庭・地域・学校のはたす教育力は、それぞれが質の違いを持っています。

明星学園では、独自に編成した教科課程にのっとり、文化の諸分野における体系的な知識を、子どもたちの認識のレベルに合わせて伝えることを目標としてきました。そのことが学校というものの基本的な役割であると考えからです。そしてそういう学習の中で、自ら考え、発見していく能力をも身に着けてほしいと願っているのです。

しかし子どもたちが真の意味で生きる力を身に着けるには、それだけで十分とは言えません。学校・家庭・地域それぞれが持つ教育力が発揮されることが重要であると考えます。今何よりも問題なのは、今日の子どもたちには、遊び、自然体験、社会体験、生活体験が著しく不足していることです。またかつてのように働く親の後ろ姿から人間の生き方を学びとり、生活の範囲内ではほぼ社会の原型をつかむことができた時代とちがい、今日の子どもたちの学校を中心とする生活の範囲内では、社会を構成する諸分野にどんなものがあり、またその諸分野の有機的な関連がどのようなものであるかをイメージすることはできなくなっています。

もちろん学校には、見学、遠足、修学旅行などの行事もあります。しかし、時間と空間が限定された学校行事でそれを補うことは非常に困難です。

週5日制によって生まれる時間的余裕を子どもたちが主体的に活用し、自己の世界を広げていくために役立ててほしいのです。家庭とともに、または友人や地域の人たちと一緒にあるいは自分一人で、ふだん学校の授業や学校生活ではできない体験を積んでいくことを期待しています。

一方で、週5日制を実施するということになれば、学校では、各教科のなかでいかに教育していくかという本来の学校のあり方が、これまで以上に問われることになります。後略…（※10）

〈※10〉 週5日制委員会1996年4月17日 保護者への手紙

こうした基本的な考えのもと、課題を整理し、具体的なことを検討していくことになった。

1. 時間数が減少する教科の対応について

教育内容の再編成と教材の精選、授業の方法の工夫を行うことで対応していく。学ぶべき教材の内容変更は行わない。習熟は日常的な活動として組織していく。教材の構造的な理解（「わかる」ということ）によってその習熟は高まる。これまでの教材研究、授業研究の積み重ねがそれを可能にする。

2. 授業時数の確保について

- ① 6時間目の授業を行う日を増やす。
- ② 1学期、2学期、3学期の始業日はやめる。
- ③ 始業式、終業式、卒業式、父母参観日、運動会、公開研究会、発表会などの行事を土曜日に行うこともある。その場合、代休日を設けない。

3. 土曜日の取り扱いについて

- ① 原則としてクラブ活動は行わないが、公式戦や発表会等の活動を認める。
- ② 教師の自発的な活動、父母やPTAの自発的な活動を保証する。申し出があれば学校施設を開放する。具体的には、登山、ものづくり、サッカー、釣り、キャンプ、鑑賞会、講演会、読書会などの企画が検討されている。

4. 教師の労働について

教師は土曜日、日曜日を休日とする。

上記の考えのもと、小・中学校では1996年7月に保護者に対して週5日制に関するアンケート調査を行った。アンケートを集約した結果、「子どもにゆとりがあることは賛成。子どもたちは通学、人間関係で疲れている。好きなことをやる時間、家族と一緒に過ごす時間があるほうがいい」など、おおむね賛成の結果が得られた。

こうして1997年（平成9）4月より、小・中学校は週5日制となった。週5日制は「試行」であり、年ごとに見直していくこととなった。

2年目の総括の主な内容は以下のようになり、「明星らしい週5日制」が少しずつ形になっていった。

- ① 週5日制にともない始業日を早めた結果、授業時数に変化が生じた教科もあった。授業時間数減の変更のあった教科では、カリキュラムの変更はせず、教材の精選、授業方法の改善が進んでいる。
- ② 土曜日の活動がいくつも具体的に展開され始めた。PTAや父母有志、教師と父母が主催する、在校生・卒業生対象のサークル活動が盛んになってきた。ものづくり教室、読み聞かせの会、朗読クラブ、親と教師のドル平水泳教室、親のバレーボール、近郊の山に登る会、明星フットボールクラブ、ファミリースキー教室、学級親子お楽しみ会、理科教室、楽器の練習
- ③ 学校の施設、グラウンドはフル稼働状態である。
- ④ PTAの活動は土曜日に集中して実施された。

土曜日、小・中学校の学校施設は生徒、保護者、学校関係者に解放された。地域社会では、有料の習い事が増えたものの、期待していたほど土曜日の子どもの活動を保障するような企画や行事

は生まれなかった。

明星ではPTAや父母有志、教師と父母が主催するサークル活動が盛んになり、学校のホール・教室・グラウンドはフルに使われる状況であった。ものづくり、サッカー、読書会など、長く続くサークル活動も生まれた。

その後、小学校は週5日制を継続しているが、中学校は中・高等学校一貫化に伴い、2006年（平成18）度から高等学校に合わせて週6日制となっている。

2 小学校校舎建築

（1）新校舎建築

小・中学校校舎及び特別教室棟の改築は、創立70周年（1994年）記念事業の一環として計画されたが、学園を取り巻く社会状況や学園内部の情勢の変化により実施は大幅に遅れていた。

1995年11月に松井憲紀理事長兼高等学校長が逝去し、新理事長の就任にともなって新たに「21世紀構想委員会」が招集された。この委員会が1998年にまとめた答申により、当初の計画を変更し、小学校校舎建て替えを優先して進めることになった。▶▶90年史P.327～参照

シックハウス症候群対策

1999年（平成11）の1学期が終了するとすぐに、旧ジグザグ校舎と特別教室棟の取り壊し工事が始まった。解体工事とあわせて、2学期からの授業に向けて、小学校高学年の仮設校舎をグラウンド内に、低学年の仮設校舎を小学校から西に150mほど離れた場所に敷地を借りて建設した。

この校舎建築計画に際して、シックハウス症候群に苦しむ児童の保護者から、新校舎と仮設校舎の化学物質対策について懸念する声があげられた。シックハウス症候群をはじめとする化学物質過敏症は、旧来の建築基準で使われてきた建材や工法が身体に影響を及ぼしておこる疾患だが、当時まだ国内での認知度は低く、世間の理解を十分に得られていない時期だった。明星学園でも保護者の訴えを受けた当初、建築担当者はその重要性を十分認識できなかった。

それでも子どもへの影響を懸念した保護者は熱心に働きかけを続けた。計画では打ち放しコンクリート素地仕上げとされていた教室の内装を、天然木に変更するよう提案した。さらに建築費用を抑えるため杉と檜の間伐材を入手するルートを開拓し、調達価格まで調べた現実的な提案だった。

この保護者の熱心な働きかけは、やがてPTA、卒業生、評議員らも巻き込み、この問題への関心と理解を深める人の輪が徐々に広がっていった。多くの人たちの関心を高めながら、シックハウス症候群・化学物質過敏症対策の重要性に学園内での理解が広まった結果、建築担当者もようやくこの問題を重く受け止め、新校舎の教室や廊下など、児童が直接触れる部分の内装材に天然木材を張り巡らせ、シックハウス症候群の原因物質であるホルムアルデヒドの影響をできるだけ抑えるように対応した。

またプレハブの仮設校舎には化学物質を多く含む合板が使用されていたため、各教室に空気清浄機を設置し、空気を浄化する効果があるとされる観葉植物ポトスを置いた。（空気清浄機とホル

ムアルデヒドの濃度測定器は保護者から寄付された)

結果として、天然木を多用した教室は新校舎の特徴の一つとなった。

一人の保護者による熱心な訴えが、その後の児童の学校生活に大きな影響を与えた例である。^(※11)

2000年に完成した小学校校舎の主な特徴

1. 旧校舎のジグザグの形を残した。これによって南東向きの敷地でもすべての教室が南向きとなり、かつ隣室の音が影響しにくく独立性を持った教室の特徴が継承された。
2. 教室の壁には杉のムク材、教室の床と廊下には桧のムク材を使用し、ホルムアルデヒドの影響を極力抑えた。木のぬくもりのある内装となった。
3. 教室前にウッドデッキを設置、子どもたちが外に出やすい工夫を行った。
4. 1時間に3回半、外気と入れ替える能力を持つ空調換気システムを取り入れた。
5. 1、2年生の教室は平屋とし、3、4年生の教室の上に5、6年生の教室を配置し、2階は回廊とした。
6. いちょうのホールをつくり、小集会、小公演が可能となった。

(2) 旧校舎お別れ会

明星学園小学校のジグザグ校舎。一つずつ独立した教室、教室から飛び出して遊べる専用の庭、隣の教室の音が聞こえにくい隔壁……現校舎にも引き継がれているこれらの特徴を創り出したのは、学園保護者の建築家・清田文永氏である。

初代のジグザグ校舎は1956～58年に掛けて、創立30周年記念事業のひとつとして二期に分けて建築された。清田氏は画期的なデザインに加え、財政的に苦しかった学園のために極力お金の掛からない材料と工法を選び、かつ長く使える頑丈な建物を設計してくださった。その後40年以上使われたこの校舎は、解体工事にあたった作業員たちが驚くほど土台がしっかりしていたという。

多くの人に親しまれたジグザグ校舎。この校舎が気に入って「明星学園に通いたい」「通わせたい」と思った人も多く、ここで過ごした者たちの記憶に残る名建築だった。

解体工事に先立ち、1学期終了後間もない1999年7月17日、明星会（同窓会）主催のお別れイベント「さよなら校舎」が開かれた。思い出深い校舎との別れに、在校生、卒業生、その家族、歴代の教職員、小さな子どもからご老人までじつに多くの関係者が訪れた。小学校のジグザグ12教室と大・小音楽室、そして三鷹市内でも屈指の古さを誇る旧高等女学校校舎（1928年建築、戦後も中学校のホームルームや美術・工作・木工・工芸教室として使われていた）をフルに使い、下記のような催しを行った。

- ・新校舎計画の説明……手塚光雄理事長・和田武久小・中学校長（音楽室）
- ・フリーマーケット（駐車場）
- ・原田満寿郎先生の講演会（美術室＝高等女学校の教室）

〈※11〉 詳しくは「シックスクール対策への道 親の立場から関わった新校舎建設」岡崎明子（4年保護者）PTA会報『道』No.123（2001年3月）、「校舎改築にかんする二つのこと」安藤道久（学園理事・全国建築委員）『明星学園報』No.63（2000年4月）を参照。

- ・清田文永氏の設計思想とジグザグ校舎の説明……上田八郎先生（音楽室）
- ・懐かしの校舎写真展……岸すみれ先生と卒業生（美術室＝高等女学校の教室）
- ・VENUS コンサート……間宮かおる先生と高校音楽部関係者（音楽室）
- ・アンサンブル部の演奏が聴ける音楽喫茶……中・高アンサンブル部（4年教室）
- ・並河万里氏撮影の校舎写真集「Myojo」完成披露（木工室）
- ・串田妙子氏（36回生）「楽しい暮らしのヒント」講演会（2年教室）
- ・和太鼓演奏……PTA 和太鼓サークル（グラウンド）
- ・景品争奪フットサル大会（グラウンド）
- ・各教室にて居酒屋、喫茶店、模擬店（焼きそば、お弁当、お餅、唐揚げ、フランクフルトソーセージ、フライドポテト、コロケ、焼き鳥、かき氷、わたあめ、ポップコーン、手づくりケーキ、あんみつ、ところてん、ほか……）

この他にも教室で同窓会を開いたグループ、教室の前庭に巨大な穴を掘って昔埋めたタイムカプセルを探すグループ（56回生、58回生の2学年）もあり、どの教室も庭もグラウンドも、終始大勢の人であふれていた。17時の終了後、各教室の黒板には参加した人たちからのメッセージがびっしりと書き込まれていた。教室の壁の一部や下駄箱の^{すのこ}簀子、廊下から外した始業ベルを記念に持ち帰った卒業生もいたようだ。▶▶ 90年史 P.321 参照

終わりに、この日参加した卒業生で元教員・元保護者でもある田中祥子さんの感想を紹介する。〈※12〉

「さよなら校舎」に出席して

田中（迫水）祥子・21回生

ほんとうに楽しい一日でした。「此れぞ明星」と言っても過言ではありません。PTA のみなさんの和太鼓、原田先生の明星昔話、ナウいスポーツ競技、蚤の市、おふくろの味のレストランなどなど。

私の一日は奉仕から始まりました。先輩の岸すみれ先生（10回生）命令一下、昔の写真を展示しました。たまたま早く来た卒業生をまじえて、仕事をしながら思い出話に花を咲かせた、ただただ楽しいひとときでした。50年以上も前、あの教室で岸先生に国語を習いました。若い颯爽とした先生に褒められたいばかりに、詩を作り挿絵を描き詩集を作ったり、感想文提出のときには綴じたこよりの先に勿忘草の造花を一本挿したり、楽しく勉強したものです。今思うとあの明星の誉めて育てる教育が良かったのでしょう。

私も3年ばかりこの中高の教師をしていたことがありますが、その時の教え子・串田妙子さんの講演も圧巻でした。彼女は夢のある生活を演出し、豊かに生きるコツをしっかりと身につけている明星っ子。その話を聞きながら、私の担任だった木村鐵雄先生が面白いと言ってメモをお取りになっていたのにも感激。

明星関係者にとっては人生は常に青春です。なぜかといえば、仕事や勉強を遊びに変える魔法の杖を、明星教育が私たちにくれたからに違いありません。

〈※12〉『明星会会報』2000年初夏 第2部より

第5部 原点をみつめ未来をひらく

2000年～100周年（2024年）



中学校校舎の屋上で哲学対話の授業（総合探究）を受ける7年生。
2021年、コロナ禍の授業はマスク着用で行われた。

第1章 6・6制への道のり

1 「6・6制」の構想

(1) 1994年「中長期の運営方針」

1994年10月12日、学園理事会（松井憲紀理事長）は、「一貫教育達成のため6・6制を3年かけて実施していく」を主内容とする「中長期の運営方針」を教職員に提示した。

その柱は、

1. 小学校は現地点に建設する
2. 小学校は3クラス制とする
3. 中学校は高校キャンパスに併設することを目標とする
4. 全体のクラス数、学内定数の検討をする

の4本であった。

時代は少子化の流れが加速していた。学園が生き残るためには小・中・高12年の教育の強みを生かす必要がある。小学校でできるだけ多く児童を確保することは学園の安定した経営のためにも、明星教育の発展のためにも実現したいところであった。また、歴史的に小・中学校と高等学校の教育観の隔たりの大きさは物理的なキャンパスの距離以上のものがあり、実質的な中・高一貫を達成することが学園の命運を握っているとも言えた。

この運営方針により、理事代表と教職員代表による「6・6制検討委員会」が設置された。

(2) 「6・6制検討委員会」(1995年6月～1996年1月)

1996年1月16日に提出された答申は以下のとおりである。

- ①「明星学園の教育の目指すもの」では、社会に期待される「明星生像」を明らかにするべきこと。
- ②「定員確保と質の向上」では、教育の質の向上と全学園的な募集態勢が必要であること。
- ③「6・6制について」では、生徒の幸せは小・中・高のベクトルを一つにしなければならぬこと。まずは、合同教科研究会などのできることから始めてギャップを埋めていく。
- ④6・6制を推進するために「6・6制推進委員会」を設置する。

しかし、6・6制検討委員会の答申を迎える前に松井理事長兼高校長が逝去し、理事会・高等学校の運営体制は変更を余儀なくされた。「6・6制推進委員会」を設置する答申も実行されず、1997年を迎えた。

(3) 「21世紀学園構想委員会」(1997年9月～1998年9月)

手塚光雄新理事長（高等学校校長との兼任）の就任にともない、「中長期の運営方針」(1994年)は、構成メンバーを改め、再検討されることになる。PTA代表、評議員代表が新たに加わった。新理事長は「この委員会は、理事会の『中長期の運営方針』を原案として検討するため、理事会が提案し教職員の賛同を得て、評議員会・PTAの代表をも含めて発足した、まさに全学園的な委員

会でした」と述べた。

この委員会は1997年9月12日に第1回目の会議を持ち、以後、16回の会議を経て、全国教職員会議に5項目の提案を含む「学園構想」を提案、そこでの採決を得て、1998年9月11日に理事長に答申した。この年、小・中学校校長は依田から和田武久へ、高等学校校長は手塚から黒川実へと体制が大きく変わった。

答 申

- I. 校舎建築について
 - ①当面、小学校2クラス体制を基本として、現小学校校舎と現木造の特別教室の建築に着手する
 - ②現高等学校敷地に10年次の学力充実を目的とした8クラス編成のための教室増設を必要に応じて行うことができる
- II. 近い将来中・高を同一キャンパスとし6・6制を実現する
そのため2003年（平成15）3月までに具体的な案を作成する
- III. 12年一貫教育の実現に向けて
 - ①人事交流の実施
 - ②系統的なカリキュラムの作成を行う
 - ③合同の教科会、委員会、校教務会を定期的に行う
- IV. 学園の教育運営体制については当面2校長2教頭制とする
- V. 6・6制を目指し中・高建築委員会（仮称）を新たに設置し準備する

答申は中間報告を経て、最終的に全国教職員会議で採決され、6・6制が採択された。以後、大きな改革に向け、少しずつ動き始める。

2 「6・6制」開始へ向けて

（1）6・6制開始年度の決定

2003年6月、黒川（高校）・和田（小中）両校長は全国教職員会議を開催、その場で三つの方針を提案した。

1. ①2005年度より6・6制に移行する
 - ②中学校校舎を高校敷地に建設し、中学校を全面移転（2005年度着手、2006年度完成）
2. 明星学園6・6制と「新しい魅力」を持つ中・高一貫校の迅速な実現
3. 組織・体制の迅速な統一

21世紀学園構想委員会の答申から5年が経過するが、明星学園の6・6制検討は停滞していた。生徒募集に強い危機感を持った両校長はこの方針を不退転の決意の下、提案したのである。その一方、特に校舎建築問題は行き詰っていた。しかし、両校長にとっては、6・6制は中・高同一キャンパス以外考えられなかった。キャンパスの狭さと過密は当面、しのいでもらう以外にない。それより早い実施が焦眉の課題であり、すでに時期を失いかけているとすら感じていた。

2003年11月に方針1.をめぐる全園教職員会議が開かれ、以下のように決定された。

- 1 2006年度より6・6制へ移行

2 中学校校舎の高校への全面移転は当面凍結

3 理事会は①の進行状況をみて責任を持って建設について判断する

2005年開始はなかったが、6・6制の開始を2006年とすることを、教職員全体が確認した意義は大きかった。

ここから先は2006年からの開始に向け、新たに組織され発足した6・6制推進委員会が推進母体となり、残った課題を整理していくことになった。それらは教育理念・教育目標、教科カリキュラム、5日制・6日制、週授業時間数など学校カリキュラム、組織運営体制、行事・自治的活動、入試と進路指導、入学広報などであった。

(2)「6・6制推進委員会」

6・6制開始年度の決定を受けて、2004年2月、校長・教頭会は新たに「6・6制推進委員会」(村田修二委員長)の設置を提案した。短期間に課題を解決するためにこの委員会では検討した事項に最終的な決定権が与えられることとなり、6・6制の骨格となる事項の検討はスピーディに進められた。まず取り組んだのは、教育理念、教育目標、教育方針の策定であった。すでに校長・教頭会から出された原案があり、それを練って文章化した。それは以下のような内容であった。

明星学園の学校像

- 1) 建学の教育理念「個性尊重・自主自立・自由平等」
- 2) これからの明星学園の教育のめざす人間像
未来に夢と希望を持ち、主体的・創造的に力強く生きる人間
- 3) 明星学園の教育目標
 - ① 基礎的・本質的な知識・技能を教え、教養として育む
 - ② 自ら考え、判断し、行動する力を育む
 - ③ 豊かな感性を育み、自ら表現する力を育む
 - ④ 自分と他者を大切にし、協同できる社会性を育む
 - ⑤ 将来の夢を持ち、その実現に向けて努力する意欲を育む
- 4) 教育目標を実現するための教育指針
 - ① 生徒一人ひとりを大切にする
 - ② 授業を大切にする
 - ③ 生徒の自主的な活動を大切にする
 - ④ 進路を選択し、それを実現していくための援助をする

6・6制推進委員会では、全園的な「教務関連部会」、「行事・生徒指導関連作業部会」、「入試と進路指導部会」の三作業部会を設け、そこに委員を割り振った。6・6制推進委員は、両校長、両教頭、小2名、中2名、高3名、それに新たに決まる中学校の教頭で構成されることになった。会議は平均週1回の割合で開かれた。

《教務関連部会》(部会長：村田修二)

教科のカリキュラム検討作業

推進委員会の決定を受けて発足した教務関連部会、略称「学習に関する作業部会」は学校カリ

キュラム、教科カリキュラムなどを検討した。

小・中と高の間で、「いわゆる学力観の違い」がこれまで取りざたされてきたが、6・6制推進に当たって、学園を代表する推進委員会の教務関連部会がはっきりと、「学力」を規定したのは画期的なことであった。

学力とはなにか

《一般的に述べれば、それは、教科内容を「理解」した上で「習熟」することであるといえる。「理解」とは、知識を単なる「暗記」とせず、その知識が意味づけられ、関連づけられたものとして認識されることである。そして、その知識が子ども・生徒の身につくことが必要である。またここでの「習熟」とは、さまざまな場面において理解した内容が適用できることや、表現できることを指す。

この「学力」に加えて、「読み書きそろばん」の能力（国語・算数・数学のような基礎言語能力）の養成と学習の仕方（学習方略）を獲得させることが必要である。》

また、学習指導要領との関係についても、従来、ともすれば対立の種であったものを明確にしたことも重要である。

学習指導要領について

《学習指導要領が提示している単位数や内容に迎合することなく、明星学園として価値ある教育内容を作り上げていくべきだと考える。ただし、教科内容の独自性が「独善」とならないよう内部で検討すると同時に、内外に対して、学習指導要領と本学園のカリキュラム内容の対比が示され、本学園のカリキュラムの持つ内的な論理が説明されなければならない。》（略称：学習に関する作業部会、2004年12月13日）

5日制・6日制問題と学校カリキュラム

2004年4月2日、30日の両日にわたり、標記の問題についての全園教職員会議が持たれ、両校長は最終判断を以下のように報告した。

- 小は学校週5日制、中・高は学校週6日制とする。
- 小学校は現行の維持であるが、基礎学力の定着、中学へのステップのため、高学年を中心に時間数増の方向で検討する。
- 中学校は学校週6日制に変更し、積み重ねが大切な教科の時間数増、5日制実施にあたり削減した教科の時間数増、LHR（ロングホームルーム）の新設、実技科目は現状を下回らない時間数とする、総合的な学習の時間はグループ研究、体験旅行等で代替する。
- 高校は学校週6日制を維持し、10年生までは基礎教養として大部分の教科時間数を必修科目とする、11・12年はコース制を基本とし、必修とコース選択、自由選択で構成する。

かつて、大論争の渦の中で始まった小・中学校の学校週完全5日制だったが、9年を経て、中学校は再び週6日制に変わるようになった。

教科時間数の決定

推進委員会の教務関連部会は教科時間数について各教科会、各部会に検討をゆだね、その結果を推進委員会でお検討、決定し、2004年10月全国教職員会議で以下のように発表した。

小学校の週当たり時間数

	国語	算数	社会	理科	総合	英語	音楽	美術	工作	体育	計
1年	7	4			2	2	3	2		2	22
2年	7	4			2	2	3	2		2	22
3年	7	5			2	2	3	2		3	24
4年	6	5	3.5	3.5		2	2	2		3	27
5年	6	5	3.5	3.5		2	2	2	2	3	29
6年	6	5	3.5	3.5		2	2	2	2	3	29
2004年度との変更点：算数と社会が4・5年で0.5ずつ増、体育が3・6年で1ずつ増。社会科は日本史通史の学習の完成、算数では各学年で習熟を図る。小学校段階での身体活動の大切さを考え体育は時間増。											

中・高等学校の教科時間数

● 7・8年

	国語	数学	社会	理科	英語 (OC含む)	体育	音楽	木工・工芸	美術	特活	計
7年	5	4	4	4	5	3	2	2	2	1	32
8年	5	4	4	4	5	体育2 保健1	2	2	2	1	32
2004年度との変更点：国語 3.5⇒5、社会 3⇒4、理科 3.5⇒4、英語 4⇒5 と合計4時間の増。											

● 9・10年

	国語	数学	社会	理科	英語 (OC含む)	体育	保健	音楽	美術	木工・工芸	特活	計
9年	5	5	4	4	5	2	1	2	2	2	1	33
2004年度との変更点：国語 3.5⇒5、数学 4⇒5、社会 3⇒4、理科 3.5⇒4、英語 4⇒5 と合計5時間の増。												
	国語	数学	社会	理科	英語 (OC含む)	体育	保健	音楽	美術	木工・工芸	特活	計
10年	6	5	4	4	6	3	1	2		2	1	34
2004年度との変更点：国語 5⇒6、保健 0⇒1 と合計2時間の増。音楽・美術はどちらかを選択して2。												

● 11・12年

	国 (古)	数Ⅱ	英	日史	体	理	保健	情報	HR	計
11 年	2	5	4	2	3	2	1	2	1	22
2004 年度との変更点：国語選択必修から必修、理科選択必修から必修、保健 2⇒1、総合 1⇒0										
文・理・実技系のコース選択／コース選択の例										
文系	現代文 4	歴史 4 または 数学 B 4+ 必修 + 自由選択 (0～4)								
理系	理科 6～8、数学 B 4+ 必修 + 自由選択 (0～2)									
実技系	実技 4+ 必修 + 自由選択 (0～8)									
12 年必修	英	体	HR	総合						
	4	2	2	1						
必修選択 国・数・理・社から 4 以上／コース制を基盤にした自由選択										

教育研究体制

6・6制移行後の教育研究・授業研究の重要性を確認、各教科での授業研究・テキストづくり・シラバスの作成研究のほか、学校全体での研究活動を検討していく必要があるとされた。小・中の教員と高校の教員が互いの授業を見合うという取り組みも行われた。しかし、従来小・中で行われてきた公開研究会については、中・高体制の下では一旦凍結とし、公開研究会のあり方を検討した後、決定することとした。（その後、2006年度は小学校のみで実施、中学校は翌年より独自に『公開授業と検討会』として実質的に再開、2012年度以降はキャンパスが同じ小学校とともに共同で「公開研究会」を実施するようになった。）

《入試と進路指導部会》（部会長：河住貴夫）

小学校・高等学校においてはこれまでの制度を踏襲する形となったが、中学校では従来2月1日、1回のみだった受験日程を複数回にし、どちらも受験できるようにすること、受験科目から描画を除くこと、出願書類から報告書をなくし、通知表のコピーでよいとする変更を行った。いずれも、受験をしやすくするためである。

＊中学校の入試科目はそれまで国語・算数・描画・面接であった。

《行事・生徒指導関連作業部会》（部会長：安部喜史郎）

検討を進めている課題は、生徒組織と自治的・自主的な活動、宿泊を伴う学習旅行、オリエンテーション合宿（7年・10年）の実施、職場体験（8年）、インターンシップ（11年）、自分史（6年）、卒業研究（9年）、卒業論文（12年）など総合学習関連、海外留学やインターナショナル・デイなど国際交流、生活指導、年間日程表である。

《広報プロジェクト関連部会》（部会長：渡辺京）

学校説明会や体験入学、入試制度など、学内における広報活動の検討を進め、2006年、6・6制開始に向けた2005年度の活動計画を練る学内企画部門と、6・6制実施に向けたパンフレット、ウェブサイト制作など対外広報活動部門に分かれて仕事を進める。2005年春の完成をめざして、教務関連や行事・生徒指導関連と緊密に連携しながら作業を進めた。明星学園のロゴやフォントを統一するなど一体感ある広報活動を目指した。

この後も、6・6制推進委員会はいくつもの作業部会を設置し、2006年4月の6・6制実施に向け、新体制の準備を一つ一つ積み重ねていった。6・6制推進委員会は2005年8月をもって活動を終了し、2006年度の中・高の校務分掌、担任、運営委員などの決定は校長・教頭会に委ねられた。

(3) 6・6制スタート

2006年4月、12年一貫6・6制が始まった。まだ入学式を終えていない7年生を除き、8年生から12年生までが一堂に会して、中学・高校の始業式が牟礼キャンパスで行われ、初代中・高の校長となった黒川実が挨拶を行った。

この4月、中・高間の人事交流が実現し、高校から体育の安部喜四郎、社会科の渡辺京が中へ、

中学から体育科の根本美愛、社会科の川手晴雄、英語科の井上成雄が高校へ異動した。それ以前にも小学校の英語の授業を中学と高校の教員が教える交流は始まっていたが、職場を異動しての交流は6・3・3制に変わって以来、この時初めて実現したのであった。人事交流はその後も継続し、特に中・高の実践をつなげる上で大きな意味を持った。

2007年度には黒川・和田が任期を終え退職。小は一瀬清校長、中・高は渡辺京校長が6・6制を引き継ぐこととなった。

3 6・6制中高一貫教育の推進

(1) 内部進学制度

中・高一貫体制実施後、中学から高校への内部進学については、6・6制推進委員会の最終報告で「両校長が2006年度中に決定する」としていたが、2007年3月、全国教職員会議で、和田・黒川両校長から次のような決定が報告された。

決定内容

「対立の内部進学から信頼・協力の内部進学へ」という基本姿勢の下、以下のように決定する。2007年度7年生以降の内部進学については、本人（保護者）が高校への内部進学を希望するものは全員入学を認める（いわゆる全入制）こととする。ただし

- (1) 原則として授業日数の1/3以上の欠席がある場合は入学を認めない。〈注1〉
- (2) 全入制をより良いものにするために環境を整える。

〈注1〉欠席日数1/3前後の生徒については、中学校で本人の状況を分析し慎重に検討すること。

この決定を受け、中学校ではさまざまな検討が独自に行われた。これまでの授業研究会に加え、中間試験や学年による成績会議、補習の実施、生徒指導の経験を共有するデータづくりなどである。また、評価と報告書について熱く議論されるなど、「信頼・協力の内部進学」の質を高める努力が続けられ、高校での内部生の評価は大きく変化した。

当時、中学校教務部長であった堀内は2012年7月、中学校での評価・報告書に関する議論を踏まえ、以下のような文書「学期末の報告書、評価の問題について」をまとめ、教員間で共有、その年以降、毎年保護者に向け丁寧に説明するとともに、教員自身が立ち返る場所とするようになった。

かねてより明星学園中学校では、学期末の評価を単なる数字として表すのではなく、各教科それぞれがその学期の学習内容、評価の観点などとともにB5の用紙にまとめ、それらを一冊に綴じて終業の日にお渡ししています。また、それに加え今年度より全教科の5段階評価（A～E）をあわせて添付することとしました。

一学期が終わり、報告書をお渡しするにあたって、なぜ本校においてこのような報告書をつくってきたのか、また、なぜ5段階評価を添付することにしたのかということについてご説明したいと思います。そのことで、学園の目指す教育について、またそれを通して学校でのお子様の様子について、より

ていねいにお伝えできると思うからです。

I. 各教科の報告書について

期末テストの点数や完成した作品が、個々の生徒を評価する上で大きな意味を持つことは異論のないところでしょう。しかし、それがすべてではありません。そこに至るプロセスを見なければいけません。プロセスを見ながら個々の生徒がどこでつまづき、どこが足りないのかが見えてきます。一人ひとり、何ができるようになり、何が不十分なのかがわかる報告書が望ましいのです。平均より上か下か、全体の中で自分がどの位置にいるかといったことはけして一義的なものではありません。

一時間一時間の授業をしっかりと受けているかどうかはノートの評価から見えてきます。学んだことが定着しているかどうかは、小テストや宿題の提出状況と大きな相関があるでしょう。仲間と協力できるかどうかの評価の一つになる教科もあるはずです。ノートがしっかりと取れているのにテストの点数がよくないなら、そこにはどんな原因があるのでしょうか。同じ80点でもA君の80点とB君の80点とは全く違う意味を持っている可能性も十分あるわけです。

そのようなプロセスの見える報告書にするためには授業者の評価の観点が述べられていなければなりません。当然教科によって、あるいは授業者によって細かい部分での評価の形式の違いが生まれてきます。これは教科の特殊性や授業者の評価に対する哲学の表れでもあります。もしこれを、上から与えられた画一的な形式の中に押し込んでしまうならば、それがいかに多くの観点が書きならべられているものであったとしても、生きた評価とはいえないのではないのでしょうか。そのような思いを生かす形でこのような形の明星の報告書が生まれ、現在にいたっているわけです。

II. 報告書を意味のあるものにするために

報告書とは、報告して終わりというものではありません。その後につながるものでなければなりません。各教科にはそれぞれ越えなければならないハードルがあります。教科にもよりますが、日常的にも補習や追試、個別の指導などは随時行われています。いろいろな方法を使いながらハードルを越えさせるのが我々の仕事です。

一学期の終りには、補習日を当初より年間予定に組み込んでいます。また二学期には全学年とも中間報告書をお渡しします。これは、2学期前半の学習について不十分なところをチェックし補いをすることで、後半の学習に向け、再スタートを切れるようにすることと同時に、学習のリズムをつくるためのものです。

さて、明星学園は自由な学校、個性を尊重する学校であるとよく言われます。そのとおりです。しかし、誤解してはいけません。誰にでも苦手なものはあります。と同時に誰にでも長所があるはずです。しかし、個性を尊重するということは、苦手だと思っているものから逃げる自由を認めるということではありません。好き嫌いにこだわり、あるいは苦手だと自分で決めつけてしまうことは、これから新たな可能性を切り拓くはずの大切な芽を摘んでしまうことにもなりかねません。

そもそも自由というのは、はじめからあるものではありません。自由とは獲得するものです。中学生段階では何よりも自由を獲得するための知恵と知識を身につけなければなりません。自分の頭で考えることです。人の話を聞けることです。自分の間違いを認められることです。他者の痛みを想像できることです。嫌いなこと、苦手なことから逃げていては、けしてそれらは身につきません。きちんと向き合わなければ、はたして本当に嫌いなのか、苦手なのかさえ分からないはずなのです。

逃げる自由を明星らしさと勘違いしてはいけません。もちろん、自分に厳しすぎる生徒には逃げ道の重要性を伝えてあげないといけません。ケースバイケースではあります。ただ、困難なことから逃げていては達成感も、本当の意味の悔しさも喜びも味わえません。これでは明星に入学した意味がなくなってしまいます。この点に関しては、学校と家庭とで協力しながら子どもたちを見守っていければと考えています。

学期末の報告書には自分のがんばったこと、不十分だったことがたくさん詰まっています。そこからこの後どうすればよいのかを是非読み取ってほしいと思います。

Ⅲ. 5段階評価について

中高一貫体制となって7年目に入りました。過去をさかのほれば、高校へ内部進学したにもかかわらず、高等学校を卒業することなく、途中退学者の多く出てしまったこともありました。しかし近年、中学校からの内部生は自信を持って進学し、高等学校の中心になって授業にクラブに行事にと活躍しています。そんな充実した高校生活を送っている生徒が多い中、中には成績がなかなか上らず、苦勞している生徒のいることも確かです。

このような中で昨年度、高等学校の職員会議において、きちんと学習に向かっている生徒については、卒業まで最大限の指導を尽くすということが確認されました。高等学校は義務教育ではありません。もちろん、これはだれでも卒業させるということを意味するものではありません。きちんと補習、レポート等の提出物を出す生徒であれば、一人ひとりの生徒に応じて、より丁寧に指導を行い、またより柔軟なハードルを用意し、しっかりそれを超えるようにさせるという覚悟もあります。

それを受け、中学校でも高校までの6年間を見通した上での評価、報告書の在り方について議論がなされました。Ⅰ.で述べたような今まで中学校として考えてきた報告書のあり方については変更ありません。むしろ、その意味をよりはっきりと伝えなければならない必要性を感じています。と同時に、不十分な項目について、とりあえずそのままでよいもの、すぐに補いをしておかなければならないものの腑わけ、補いをするためには中学校段階では生徒によってはご家庭の協力が何よりも必要であること、必要な生徒については二者面談、三者面談を学期末に必ず行うことが確認されました。

そのためには、各教科の評価を学年スタッフ全員で共有し、適切な指導を授業者個人としてだけではなく、学年スタッフ全員が了解していることが必要です。そこで今年度、Ⅰ.で述べた報告書に加え5段階の評価（もちろん絶対評価です）を添付することにしました。Ⅰ.の報告書は自分自身を振り返るものであり、他者と比較する性質のものではありません。そのような細かな評価を他の教科を含めた全員の教師が把握するというのは現実的ではありません。また、テストの点数といったわかりやすい数字は一部の教科に限られたものです。5段階（A～E）といったおおまかな評価をつけ、それをもとに特にDとEの評価の生徒を中心に、一人ひとりの生徒についてどのような問題があるのか、今どのような手を打つべきかといった意見交換をし、今後の指導に生かしていこうというわけです。

また、ご家庭においても二つの方向から報告書をご覧いただき、学期ごとの評価の推移、教科間の評価のばらつき等、参考にしていただければと思います。ただ、ここでくれぐれもお願いしたいのは、5段階評価をそれだけで見るのではなく、各教科の詳しい報告書とつなげてご覧いただきたいということです。そのことで、明星の授業についてより深くご理解いただけるのではないかと思います。

Ⅳ. おわりに

明星学園では創立以来、評価の問題については試行錯誤を続けてきました。「点数をつけない教育」、またある時は逆に「授業者の主観を排した客観的な評価」…。評価とは教育そのものです。世間の学校であれば、当然のことながら形式も観点も上から与えられたものに縛られます。教育の現場において何の必然もなく、急に変更になることもあります。この本質的な問題について試行錯誤できる自由は何よりもかけがえのないものです。

ただし、これも独善になることを戒めなければなりません。目の前にいる子どもたちの姿が見える中で試行錯誤でなくてはなりません。また、教育とは常に理想と現実との間に実像を結びます。現実には不十分な点も多々あるかと思います。父母の皆さま方にはこの点、ご理解ご協力をいただければ幸いです。

今日、分厚い報告書をみながら、それぞれのご家庭でどのような会話がなされるのでしょうか。「今学期、さぼった結果ね!」「提出物くらいしっかり出しなさい!」。もちろんそれが必要かもしれませんが。ただ、それだけではもったいない気がします。「これ、面白そうね! どんな授業だったの?」「この教科、がんばったわね。どんなことがあったの?」そんな会話が生まれてくれれば、この上ない喜びです。

(2) 人事交流

2006年の6・6制開始より、中・高の所属を超えた人事交流が行われはじめた。中・高の教育実践上の「違い」は、それまでスムーズな人事交流を阻害してきたし、6・6制実施後もなお多くの困難をともなった。しかし、次第に人事交流の成果と意味を多くの教員が実感するようになり、授業の持ち合いも含め大きく前進した。2010年6月に渡辺校長より各部職員会議に出された人事交流・一貫教育の「総括」には次のように述べられている。

2006年以降、特に中・高のつながりを重視する体制（6・6制）が始まり、授業時間数や運営体制（中・高1校長、小・中・高の専門部体制、運営委員体制の共通化など）を整えてきた。また、「6・6制推進委員会」が整理した創立理念に基づく教育目標（「教養・自己表現・社会性」をつけるべき学力とした）を確認してきた。後は、目標を確認しつつ、各部が教科・教科外で実践的に何をどのようにすれば目標が実現できるか具体化していくことである。そのためには教科・教科外のカリキュラムの整備が必要だが、カリキュラムができたとしても、それは日々の実践の中で何年かごとに検討し続けなければならない。

いま、一貫教育を進めるために明星学園の教職員に必要なことは、「小・中・高各部が抱えている問題を教職員が共同して実践的に取り組みつつ、目の前の入学してきた子どもたちをどう育てるか」であり、各部の実践を基本的には信頼し、内部進学してきた子どもを中心に実践を組み立てることであろう。そのためにさまざまな違いを超えて共同して仕事をするのが出来なければ、信頼には繋がらない。

校舎の位置や体制の違いは共同して仕事をする上で障害にはなるかもしれないが、工夫できないことではない。小・中・高が同一キャンパスにはできない以上、教員が移動し、共同して授業や行事に取り組む仕事をやり続けなければならない。

小・中の現状を見ると、同一キャンパスにあっても共通理解を深める努力が必要である。人事交流や授業の持ち合いはカリキュラムを検討する前提としての共通認識・信頼関係を深めるために必要なことだと考える。

「カリキュラムが一貫しなければ人事交流すべきでない」との意見があるが、それは結局「人事交流はしない」と言うことと等しい。「カリキュラムの一貫」は単に課題項目の整理や発達段階に沿って並べることだけでなく、実際に子どもたちを教え、課題を共有し合い、検討し続けることで初めて一貫の内実をつくることになる。(※1)

(※1) 中・高部会資料「人事交流・一貫教育の総括」(2010年)

4 中学校校舎建築問題

(1) 全園建築委員会の発足

2006年、6・6制はスタートしたが、中学校校舎の高校牟礼キャンパスへの移転については、2003年の全園会議決議によって「当面凍結」とされていた。2006年6月、理事会は全園建築委員会（正式名称：「中高一貫化に伴う中学校校舎建築委員会」）を発足、2009年度、現高校敷地に建設着工、2010年3月完工、予算7億9千万円を目標とすることにした。

2007年4月、全園建築委員会の下部組織として中・高建築小委員会を発足、中・高の意見を取りまとめ図面化することなど中学校校舎建築に向けての具体的作業に入った。

(2) 難航する建設計画

小委員会（村田晴海委員長）ではさまざまな観点から検討が重ねられた。しかし、2008年10月、建築小委員会としては、与えられた枠の中で校舎建築を進めることは難しいと判断、以下のような見解と共に校舎建築問題は理事会に預けることとした。

建築小委員会の見解

- ① 過密問題：建築可能延べ床面積を限度とする高さ制限により過密緩和の方法として考えていた校舎づくりが難しくなった。過密による避難経路の危険性も指摘されている。
- ② 施設利用の問題：井の頭キャンパスの施設を使わざるを得ない。中学校校舎と高校校舎を廊下などでつなげることができない。
- ③ 予算の問題：一貫のための高校校舎改修に加え、建築資材の高騰、地代の値上げ、耐震工事が緊急課題として挙がってきたことにより、当初予算を大幅に超過している。（7.9億円→14億円）

それを受け、理事会は2009年10月の全園会議において「新提案」を行った。「2006年、学園教職員会議の決議を経て、理事会で決定した中学校校舎の牟礼キャンパスへの移転建て替え計画は、いわゆる過密問題が移転後の生徒の学習・生活環境を著しく損なう恐れがあること等からここに白紙に戻し、改めて対案として現位置、井の頭キャンパスにおいて建て替えを目指すことに切り替え、2014年度の完成を目指す」とした。

しかし、翌11月に開かれた全園会議では、更なる対案が出され、以下のような案が決議された。

12年一貫教育を推進するために、小・中・高各部から選出された委員による委員会を立ち上げ、現状の明星学園の問題点・教育の方向性とその実現への具体的な方略を検討し、それにともなっているいわゆる「キャンパス問題」についても検討を行う。したがって「キャンパス問題」についての決定は保留する。

2010年3月、全園の意向を受け理事会は「中学校建て替え・12年一貫教育推進検討特別委員会」（以後「特別委員会」と略）の設置を決定、特別委員会では「中学建て替えキャンパス問題」・教科カリキュラムの一貫等の「教育ソフト問題」の検討を託された。しかし、中学校校舎をどちらのキャンパスに建設するかについての議論は平行線をたどり、結局結論には至らなかった。最終的に、各委員が意見書を提出するということで「最終答申」とした。

その後、理事会では「特別委員会」の報告および各委員の意見書を検討、2011年11月、全園会議で出口一彦理事長は次のような報告を行った。

建て替え場所については

「高校牟礼敷地への移転はこれまで指摘されてきた数々の過密問題のほかにも、現井の頭敷地の特別教室の利用ができなくなること、加えて近い将来狭い牟礼敷地での高校校舎の難しい建て替えに大きな制約を与えることを考えたとき、さらには今後憂慮される直下型地震等の防災面をも考えるならば、分散配置としての井の頭敷地での建て替え案が妥当であると考えざるを得ない」

規模・敷地内位置については

「井の頭敷地内での建て替え位置は、当初考えていた現位置でのそのままの建て替えでは、現在の日影制限等の新しい規制下（既存不適格）にあって、2階建てしか許可されないことから、今回改めて総合的に検討を行い、日影規制をクリアしやすく4階建てでも可能でグラウンド等も広くとれる敷地南側の現管理棟、体育館側に建設する別案についても併せて検討した。その結果、体育館、管理棟を含めた一括建て替え案が理想的ではあるが、当然のことながら建設費が多額になるため、そのステップ案として、体育館を除いて中学校舎と同じく老朽化が進んでいる管理棟までの南側一帯建て替え案を選択する方向で成案を得た」。(※2)

当初、目標完成時期は、平成30年（95周年の前年）とされ、中学校舎建て替え積立金・大規模修繕費、さらには全園的な募金運動を実施、借入金を最小限に抑える資金計画も報告された。また、一貫教育の「現状と課題」については「寸胴型」でなく、7年・10年で外部生を導入する明星学園固有の条件を踏まえて「小・中は明星固有の初等・中等教育の伝統にたち、なおかつその土台の上に高ではその先の進路教育の徹底も図り、その中で明星固有の開放的な一貫教育を完成させる」ことを課題とした。

中学校舎建築の具体的な工期はさらに遅れることになるが、100周年を迎える2024年度には具体案が示され、2026年着工に向け現在建築委員会が検討を進めている。

〈※2〉 「中学校舎建て替え問題の最終決着について～特別委員会答申を受けて」

第2章 新たに動き出す明星学園

1 教科教育の継続と発展

教科教育は学園の柱である。そこにこそ学園の理念が反映されていなければならない。ただし、それを個々に具体化するとき、小・中・高の在り方は自ずから異なる。その発達段階において強調するところが変化するためである。しかし、小中高12年一貫という長いスパンで見たとき、はっきりとその精神と流れ、目的が見えていなければいけない。

この章は、教科ごとに小・中・高のこれまでの実践と現在を並べる形で編集した。何を過去から受け継ぎ、現在に活かし、どこに向かっていくかを可視化するためである。もちろん、教科の中での揺れ、模索している部分も多々あるだろう。そのため、今回は編集委員会より各教科の先生に直接依頼し、その人の視点で、ある程度自由に執筆してもらった。思いのあるところからしか、議論や研究は始まらない。12年一貫の次のステージへ向けての一步としたい。

国語科	小学校	国語科	伊野 文子 ……………	273
	中学校	国語科	堀内 雅人 ……………	276
	高等学校	国語科	西崎 美登利 ……………	279
理科	小・中学校	理科	平山 勲 ……………	281
	高等学校	地学	堀口 隆士 ……………	283
算数・数学科	小学校	算数科	河住 由美 ……………	284
	中学校	数学科	平野 康弘 ……………	288
	高等学校	数学科	土屋 和臣 ……………	292
社会科	小学校	社会科	江口 聡江 ……………	293
	中学校	社会科	小畑 典子 ……………	296
	高等学校	社会科	築 賢治 ……………	297
英語科	小学校	英語科	秋枝 美佐 ……………	298
	中学校	英語科	姫野 英二 ……………	300
	〃	〃	工藤 圭輔 ……………	301
生活科	高等学校	英語科	大石 晶子 ……………	304
	高等学校	生活科	鈴木 侑希 ……………	306
体育科			……………	309
	小学校	体育科	剛力 正和 ……………	312
	中学校	体育科	石井 三絵 ……………	313
音楽科	高等学校	体育科	有馬 良亮 ……………	314
	小学校	音楽科	秋野 憲治 ……………	315
	〃	〃	長澤 俊介 ……………	317
美術科	中学校	音楽科	天野 茜 ……………	318
	高等学校	音楽科	間宮 かおる ……………	320
	小学校	美術科	坂本 直穂枝 ……………	322
工作科・木工芸科	中学校	美術科	吉野 明日香 ……………	323
	高等学校	美術科	山領 直人 ……………	324
	小学校	工作科／中学校木工芸Ⅰ	佐藤 晃 ……………	325
	中学校	木工Ⅱ／木工Ⅲ	青柳 勝利 ……………	326
	〃	工芸Ⅱ／工芸Ⅲ	河野 尚子 ……………	328

国語科

〈小学校 国語科〉 伊野 文子

明星学園小学校は検定教科書を使用せず、自主教材で授業をしている。国語科も同様である。1980年代は教育科学研究会国語部会や文学教育研究者集団に学びながら、2012年頃からは小学校国語の研究会で文芸教育研究協議会の上西信夫氏に学びながら授業づくりや教材選びを行ってきた。どの時代も研究会を重ね、自己満足に陥らないように公開研究会で授業を提案し、実践を重ねてきた結果が「教科課程」「カリキュラム」に反映されている。

私たちが所属する研究会は変化しているが、これまでの実践に敬意を表しながら研究を重ね、国語で教えるべき内容と教材について、時代が変わっても変わらない核となることと時代に合わせて変わっていくことを吟味してきた歴史がある。以下、1980年度・1993年度発行教科課程につづく、1999年度以降の「教科課程」「教科カリキュラム」を確認しながら近年の小学校国語科の足跡をたどってみる。

1) 教科カリキュラム（1999年度発行）

1999年度『カリキュラム集』は、小・中・高等学校の教科課程が1冊にまとめた画期的な冊子である。1998年度の教職員全国会議で小・中・高一貫教育についての理事会への答申案が決議され、具体的な方針の中で「第1段階として、小中高における現状のカリキュラムを一冊の本として作成し、現状のカリキュラム案の問題点を明らかにする。合同教科会の仕事とする」に従って編集された。

小学校の国語科においては、これまでの教科課程との違いは、「言語活動」の「表現」に「みいつけた」(1年～3年生までの総合科で、口頭発表から絵や文で書き綴る取り組み)や「作文」「詩づくり」「川柳・俳句づくり」「紙芝居づくり」が入ったことである。以前の教科課程には、文法はあるが書き綴るという具体的な内容が記されていなかった。これらの内容が入ったことは、日々の授業の積み重ねによるものである。

小・中・高のつながりという視点から高等学校の現代文の方針を読むと、小学校の国語科の目標と通底していることが分かった。と同時に「評論的なものが苦手な生徒が多いので、多くそれらを取り入れている」と書かれてあることから、小学校段階で、評論的な文章が学習内容として位置付けられているか、ということを検証することが、課題であると感じた。

小・中・高のカリキュラムを1冊にまとめ、比較することにより共通点や相違点が明らかになり、それぞれの教科目標や学習内容を検討する視点になる。そして、国語科において12年間でどのような人間を育てたいのか、ということを描くことができる。このような取り組みは、定期的実施する必要がある。

2) 教科カリキュラム（2015年度発行）

2015年度『教科カリキュラム』は、小学校独自のカリキュラム集である。2006年度より6・6制12年一貫教育が始まり、学校体制が「小学校」と「中・高等学校」になった。そのことにより、研究体制も変わり小学校独自の研究会になった。1994年から2005年までの11年間は体制づくりの期間になり、教科の研究は続けてきていたものの『教科課程』(カリキュラム)としてまと

められなかった。2013年度頃から、教員一人ひとりが実践している成果をみんなのものにするために、2年間かけて『教科カリキュラム』が作成された。

国語科において改めて注目し、力を入れたのが、「綴る」ということであった。明星学園小学校には、日々の授業で一人ひとりの教員が、「子どもたちが自分の感じていることや思ったことを書くことができたなら、こんな素敵なことはない」という思いから、各教科で授業のまとめを自分の言葉で書かせる文化があった。そのような中、国語科としての「綴る」ことの実践を意識的に働き掛けることはできないかということになり、「綴る」ことのカリキュラム作りに着手した。「今日の目玉」(学校であつたいちばん心に残っていることを家の人に伝える文)や「日記」「意見文」などの実践が行われ、6年生では「12歳の主張～卒業論文～」を書くという取り組みが行われた。

公開研においても、2017年「豊かに読むことを豊かに書くことにつなげるために」、その後も2021年、「子どもの文章表現をどう読むか」、2022年には再度「豊かに読むことを豊かに書くことにつなげるためには」というテーマを立て、研究課題とした。

それらが、新たに加わったことであり、1年生から6年生まで、どのような教材配列で学習を進めるかという1年間を見通したモデルを入れ、教員の参考になるように新カリキュラムを編集した。

3) 教科カリキュラム (2020年度発行)

2015年度にまとめた『教科カリキュラム』を土台に、2017年度から2019年度の3年間、教科会で話し合いながら、使えるカリキュラム集を目指して、ミニ指導案や単元指導計画などを入れて作成した。

国語科においては、その特質や目標は1993年度『教科課程』を踏襲している。研究会では、これまで取り組んできた文学作品、例えば『かばくん』や『スーホの白い馬』『ごんぎつね』『大造じいさんとガン』『川とノリオ』などの教材研究に取り組み、子どもたちに文章表現から人間の真実に迫る内容を、どのようにつかませていくか、ということ学び合い、その一部をカリキュラム集のミニ指導案に反映させた。また、文学作品や説明文で学んだことが書き綴ることに活きるように、「題名と本文の関係」「書き出しの工夫」「情景描写の工夫」「段落の構成」などを意識的に指導することも、カリキュラム集に加えた。

さらに、各学年でつけさせたい「言語活動」と「言語」の力をまとめたことも特筆すべきことである。これまで、経験的に一人ひとりの教師が持っていた「力をつけさせる」ということを評価項目と評価基準に分けて、どの教師も共通に「こういう内容で、ここまでの力をつけさせよう」という理解を図ることになった。

2023年の今、国語科に求められている課題は何か。21世紀を生きる人間に求められる知性とは何かということを考えながら、小学校段階でどのような文学作品、説明文、評論的な文章などに出会わせれば、人間の真実を見つめ、人間に対して信頼をもつことができるようになるのか、新たな教材開発が求められているように思う。

また、『につぼんご』(第3部参照)が作成されてから、明星学園において文法を学ぶ研究会が十分に開かれてこなかった。これまでの研究の成果に学びながら、どのように継承発展させていくかということも課題である。

4) 絵本を用いた指導

ここでは、近年検討された1年生対象の絵本『いろいろへんないろのはじまり』（アーノルド・ローベル作絵）の教材発掘について記したい。

明星学園小学校国語科（1・2年）において、児童一人ひとりが絵本を手にし、そこに描かれている絵と言葉から想像力をふくらませ、多くの気づきとそこから生まれる対話を中心に進められる授業は、大きな意味を持っている。

しかし、それはどのような絵本であってもいいわけではない。小学校国語科の研究会は、絵本教材発掘の歴史でもある。なお、2023年時点で定番として実際に一人一冊の絵本を手にし、授業をしている作品は以下の3作品である。

1年：『かばくん』（岸田衿子／作 中谷千代子／絵）福音館書店

『ピーターのいす』（エズラ・ジャック・キーツ／作）偕成社

2年：『スーホの白い馬』（大塚勇三／再話 赤羽末吉／画）福音館書店

『かばくん』は、小学校に入学して初めての文学教材である。教室での絵本との出会いともなる。3年以降は言葉からイメージを膨らませ、絵は補助的なものになっていくが、1・2年生は机の上にある自分の絵本を穴のあくほど見ながら、驚くほどたくさんの気づきを発表していく。

『スーホの白い馬』で描かれる広大なモンゴルの大草原は、この横長で大判の絵本でなければ描き切ることはできないだろう。

絵本教材の発掘

1年生の新しい教材として、「多様性」や「みんなちがってみんないい」ということを伝えることができる絵本はないかを探しているとき、『いろいろへんないろのはじまり』に出会った。

「魔法使いが、『はいいろのときは、よのなか なにかまちがとる』と思い、魔法で色を作りますが、単色しかできない。単色の世界は、最初は良いのだが時間が経つと困ったことが起きてしまう。魔法使いは新しい色を作りだそうとするが、自分の力ではどうすることもできない。すると、これまで作った色があふれ出し、偶然それらの色が混ざり合い、いろいろな色ができあがっていく。そのいろいろな色を町の人が、どこに何色を塗るか上手に決め、幸せに暮らしました」という話である。

この物語を1年生の子どもたちと読むことによって、①人間は現実を変えるための行動力をもっている。②人間は、同じ色・傾向の人間だけでなく、いろいろな個性をもつ人間がいる。だから、世界は豊かになるし、面白い。ということ伝えたいと考えた。

また、ものの見方・考え方という視点から、この絵本を分析すると「単色の世界が色を変えて繰り返される面白さ」（類比）や「青と黄色を比較すると世界が違う」（対比）ということが分かる。さらに、「魔法使いと町の人の行動」（対比）という見方をすることもできる。そのようなことも学習内容として捉えたいと考えた。

学内や学外の国語の研究会で、教材分析を報告し、意見をいただきながら授業化を試みた。2022年1月下旬から、一人1冊この絵本を手にして授業を開始。新型コロナウイルス感染症

(COVID-19)の拡大で、2週間の自宅学習になり、その期間は自宅で保護者と一緒に、この絵本を読む課題を出した。保護者からは「アーノルド・ローベルさんの絵が細かく描かれていて、絵を見ているだけで面白かったです」とか「深い内容ですね」という感想をいただいた。学校が再開し授業時間数10時間の単元を構成し、実践した。最後の授業で子どもたちが書いた感想を紹介する。

- ・まほうつかいが あきらめないで がんばったから いっぱいいろができた。まほうつかいが いっぱいいろをつくったから おれもまほうつかいみたいになりたい。(Y)
- ・まず、わたしが一ばんここにのこったことは、まほうつかいは、みんなが そのいろをいやがったとしても、また あたらしいいろを つくったことがころづよいとおもいます。あと まほうつかいが でてきた はいいろのばめん、まほうつかいは、「よの中なにかまちがとる」といって、きづけたことも、すごいいとおもいます。ぜんぶ、うまうまはいかなかったけど、でも、さいご からふるなときに みんながにこにこしていたから、とてもうれしいです。まほうつかいも うれしいとおもいます。(K)

子どもたちは、単色の世界ではなく、多色の世界が幸せなのだということや、「世の中何か間違っ」とる」という怒りが、現実を変える原動力になることを、この絵本と出会って、感じたり考えたりしたのではないか。子どもに何を差し出すか。これからは私たち教師が学び、研究していきたい。

〈中学校 国語科〉 堀内 雅人

1) 1980年代後半

1985年、自由の森学園の開校と共に、教員も大きく入れ替わり、国語科も新体制で新たなスタートを切ることになった。この年、中学校の国語科は教科主任の時任重孝に加え、“ギンベイ”という愛称で知られる佐伯昭定、新任の堀内雅人の3名、毎週決まった曜日に教科研究会が行われていた。小学校で国語科の責任者であった内藤哲彦、大野映子、また他の教科の教員も飛び入りで参加することもしばしばあった。

内藤哲彦は教科研国語部会に所属、“ガッパ”という愛称で知られる。作品を単語単位まで分析し、綿密な教材研究で小学生を文学の世界に引き込んでいた。漱石の『坊ちゃん』、芥川の『河童』の読み聞かせを後期の小学生対象に必ず行い、そこから「河童⇒かっぱ⇒ガッパ」というあだ名がついたという。漢字・文法の研究はライフワークでもあり、その実践は、早稲田大学国語教育学会の大会でも報告された。『早稲田大学国語教育研究』には、「体系的な漢字指導の一試案—漢字教科書・案」(1984.6)、「読み書きに生きる文法を—小学生を対象に」(2004.3)を寄稿している。また、1990年4月から発行を開始した日々の児童の姿をつづった「ガッパ通信」(クラス通信)は、退職する1996年3月19日の最終号まで一日も休まず続き、総計1,246号に達した。

佐伯昭定は、文学教育研究者集団に所属、副委員長を長年にわたり務め、文学教育の研究に尽力した。太宰・芥川・鴎外の作品研究、『空気がなくなる日』(岩倉政治)、『山椒大夫』・『最後の一句』(森鴎外)等の実践を残した。著作に『ジャン・ヴァルジャン物語』(「中学校の文学教材と授業過程」1966)、『社会現象としての「一寸法師」物語』(「文学と教育」1995.3)、共同執筆に『文学の教授過程』・『文学教育の構造化』他がある。

時任重孝は学園内の研究会で開発された「見出しづけの授業」を中心に中学校3年間の国語科

カリキュラムを構想していた。文学教育においても科学的な、つまり感性に頼った鑑賞や授業者の語りによって成立する授業とは違う、テキストから根拠を見つけながら自分の読みを主張する授業にこだわった。

「明星の国語教育」と一口にいっても三者三様であり、それぞれが精力的な授業研究で実践を磨き上げていたといえる。堀内は、これら三人の先達の影響を大きく受けながら、明星学園中学校の国語科を引き継いでいくことになる。

2) 見出しづけの授業

「見出しづけの授業」は、1970年代後半、国語科の池田修司、当時社会科の非常勤講師であった（後に専任教諭）飯田啓介によって開発され、後に着任した時任とともに実践を重ね、洗練させていったものである。

「見出しづけ」とは、その段落の内容をできるだけ短い言葉で正確に表すということである。要約とは全く異なる。一つの表現である。生徒は自分たちの予想である「見出し」を説明、質問しあう中でいくつかの対立点を発見する。その中から最もふさわしい「見出し」を選ぶには、文章をじっくり読み、根拠を自分で見つけ出さなくてはならない。自分勝手な読み、思い先行の読みは否定される。また、「見出し」の成分である主体と属性は単独でその段落に存在しているわけではない。当然それを説明するためには、そこにつながる一つ一つの文や、個々の句に注目せざるを得なくなる。第一段階の、筋を追うだけの読みから、何がどのように書かれているかを探る読みへ発展するのではないかと期待するのである。

この授業方法は時任・堀内、亀山平九郎へと引き継がれていくことになる。堀内は1991年早稲田大学教育学会例会において、「見出しづけ」での実践「メリメ『マテオ・ファルコネ』を読む」を発表、1993年発行の「早稲田大学国語教育研究第13集」に『見出しづけの授業—生徒主体の授業への試み—』を寄稿した。

「見出しづけ」の方法での授業研究は、この授業方法が有効な作品発掘の歴史でもあった。定番となった作品は、以下のとおりである。

7年：『形』（菊池寛）、『ダイナマイトの番人』（ヤン・ドルタ）

8年：『マテオ・ファルコネ』（メリメ）、『三本足のディンゴ』（アラン・マーシャル）

9年：『詩人』（大佛次郎）

授業では活発な討議が行われ、授業が終わってもなお教卓の周りで生徒同士が意見を交わしている光景がしばしば見られた。しかし、この方法が有効なのは、叙事的な文学作品に限られた。時系列で出来事が展開していく作品である。文学の授業における「語り・視点」の問題、「心理・情景描写」等については、別の方法が求められた。

3) さまざまな実践

「見出しづけの授業」を中心に据えつつも、各教員によるさまざまな実践が行われた。文庫本を丸ごと一冊使った授業としては、『四万十川』（笹山久三）・『夏の庭』（湯本香樹実）・『坊ちゃん』（漱石）・『晩年の子供』（山田詠美）・『きみの友だち』（重松清）等がある。「読むこと」と「書くこと」を往還させる『カメレオン』（チェーホフ）の授業では、登場人物を分析的に批評することを求めた。随筆三篇を続けて読むことを通してその構造を発見、自らエッセイを書く実践。俳句や短歌

の創作、句会の開催。また、『読書記録』を通して、文学作品に親しむ習慣をつけることを求めた。

これとは別に亀山は古典の授業における『義経記』を用いた「和綴じ本制作」、コラージュの手法をとった詩の創作等の実践を、長谷川元子は公開研において『山椒魚』（井伏）・『高瀬舟』（鷗外）、さらに石川信行も『山椒魚』の実践を残した。

4) 2000 年代以降

2006 年、6・6 制の開始とともに中・高間での人事交流が始まり、国語科のカリキュラムが改編された。各学年週 4 コマだった国語の授業が週 5 コマとなり、7・8 年は週 3 コマの「国語 A」、週 2 コマの「国語 B」、9 年は週 4 コマの「現代文」と週 1 コマの「古典」（その後、変更）という形となった。それにともない、一つの学年を非常勤講師を含め二人以上の教員で担当する体制となった。そのため学園独自の「国語教科書」（教材作品集）を作る必要性に迫られることとなる。これは国語科として共通で扱う教材を選定する作業であり、一方で教員個々の教材発掘等の余地を残すこととした。

逆に、国語 B の学習内容は明確とはいえなかった。主に非常勤講師が専任教員と協力しながら担うこととなったが、国語科における未開拓の分野に挑戦してくれた。表現に着目した今井清光の実践、文学的な文章創作・書道の分野に挑戦した山口千絵（後に専任）、新しい時代に必要とされるコミュニケーションを大切にする活動に取り組んでくれた吉川友悟の実践は学園に新しい風を吹き込んでくれるものであり、その功績は大きかった。

5) 文学の「学習用語」を定着させる指導

7 年の国語教科書は、宮沢賢治の『オツベルと象』から始まる。文学の授業の導入の位置づけである。ここでは、オツベルと白象の心理を追いかけつつ、次のような学習用語を教える。具体と抽象／登場人物／語り手／対比／オノマトペ（擬声語・擬態語）／比喩（直喩・隠喩）／寓話／物語世界と現実をつなげる／朗読・群読。たった数ページの短編の中にこれだけの学習内容がつまっている。これらの「学習用語」を自分のものにしていったとき、自分の読みを、そして感動をより自由に他者に伝えることができるようになるだろう。

ちなみに、8 年の教材であるチェーホフの『カメレオン』では、風刺小説／象徴／登場人物を批評する（根拠）／場面／典型／描写／構造といった用語を教える。できれば中学校で扱っている全ての作品について、このような観点から整理することが期待される。

6) 語り・視点・再話

国語教科書の完成、さらに 2007 年に人事交流として高校から村田修二が加わることにより、教科内の研究が大きく活発化することになった。7 年『オツベルと象』の朗読発表の実践は新たな試みであり、教員同士の学びあいも行われた。また、『少年の日の思い出』（ヘルマン・ヘッセ）における少年「エーミール」の立場からの再話を書くという実践は、物語における「語り・視点」の大切さを考える上で重要なポイントとなる経験であった。この実践は、8 年『走れメロス』（太宰）における王様の立場からの再話づくりへとつながり、9 年『藪の中』（芥川）・『千羽鶴』（重松）の実践へと結びついていく。この「視点」の問題は、現代社会を切り取る時のキーワードともなり、メディアリテラシーを考える上でも不可欠な観点である。評論『視点をずらす思考術』（森達也）

の実践は、文学作品と評論文とを結びつけて読んでいく、明星学園における国語科カリキュラムの新たな展開ともいえた。

7) 今後に向けて

2023 年度公開研究会のテーマは「対話を生む発問とは？」とした。授業の形態は作品によってさまざまであるが、常に中学校国語科として追求してきたテーマである。分科会では堀内が明星学園国語科の実践の歴史とこれからの国語教育にとって大切なものは何かを語った。その具体的な実践として山口が「見出しづけ」による『形』（菊池寛）の授業に挑戦、長谷川が『猿ヶ島』（太宰治）の対話を生む授業プランを提案した。中学校所属となって3年目となる佐藤翔哉と共に新たな時代に向けての国語科がスタートする公開研究会となった。

〈高等学校 国語科〉 西崎 美登利

私は今から約 20 年近く前に明星学園高等学校に就職し、以来現代文の授業を担当してきた。当時の国語科に対する印象は、「自由」を謳いながら、私たちがいかに「自由」でないかをメッセージとして伝えることから始めようとしている学校だ、というものだった。言い換えると、私たちは「自由」に生きているように見えて、実は生まれた時から知らずに時代や社会のなかに存在する無数の規範や価値観を内面化した存在だということを、様々なジャンルやテーマの内に書かれた文章を通じて理解することが、高等学校段階における国語教育の始まりと考えている学校なのだ、というものだった。

明星学園の、特に現代文の教科書は多くの時期において自主編成のものをを用いていたが、そこで必ずというほど掲載された丸山眞男の『日本の思想』（昭和 36 年 岩波新書）という書物のなかに、次のような記述がある。

自由人という言葉がしばしば用いられています。しかし自分は自由であると信じている人間はかえって、不断に自分の思考や行動を点検したり吟味したりすることを怠りがちになるために、実は自分自身のなかに巣食う偏見からもっとも自由でないことがまれではないのです。逆に、自分が「捉われている」ことを痛切に意識し、自分の「偏向」性をいつも見つめている者は、何とかして、より自由に物事を認識し判断したいという努力をすることによって、相対的に自由になり得るチャンスに恵まれていることとなります。

自分の思考や行動は中立的で何の偏りもない、もしくは周囲の人と同じように考え振る舞っている限り偏るはずがないと思っていたのに、生活環境が変わり自分を取り巻く状況が一変した途端、そう思えなくなったという経験を持つ人にはすぐ合点がいく文章だろう。こうした思い込みを知らず抱え続けることから生まれる問題は実に様々あるだろうが、その内の一つに、自分がある一定の考えに捉われて（縛られて）いるがために、現在の自分には見えないだけで実は持っている別の生き方の選択肢や、他者の在り方、生き方に対する想像力が持てなくなることがあるのだろう。現在の自分を俯瞰的かつ相対的に捉えることによって、自らの選択肢を自ら増やすこともできるし、社会を構成する一員として他者の在り方、生き方を理解し、共生の道を探ることもできる。

そのためには、まずは言葉で、そしてなるべくならある特定の場面のもとに生まれた具体的な

言葉を、時空間の影響をある一定程度逃れた抽象度の高い、それがために多くの人と共有可能な言葉で捉え直し、「私」という一個人とそれが抱えた問題を、より大きな文脈の中に位置づけていく。つまり、自分や自分を取り巻く社会の現実を、より広く共時的にも、通時的にも捉え返していく試みこそが、私から見た高等学校の現代文の核だった。

この核は早 20 年近く経った今も変わっていないと思っているが、時代は変わり、その波を受けるように生徒も、私も変わった。今の時代に、様々な価値観を持ち合わせた生徒が集う教室という場で、どういう文章をどのような方法で読んでいくのが望ましいのか、常に、毎年のように試行錯誤する日々である。時代の中で新たに生まれつつある問題を一足先に言語化したような先見の明のある、そして生徒からすれば読みやすい現代的文章を扱うことにも勿論価値はあるが、なかなか生徒自身の興味や関心からは手に入る機会が少ないだろう古い時代の、今と異なる価値観の中で書かれた文章を読むことにも意義がある。現代に至る価値観の変遷やその変化の速度を実感し得るし、なにより現代にある価値観を絶対視することのない、一段高い視座の獲得にもつながるからだ。

たとえば、明星学園創立の十年前に書かれた夏目漱石の小説『こころ』には、「立身出世」や「良妻賢母」を美德とする時代の登場人物たちが様々描かれている。中には、時代の波から距離を置こうとして、避けがたく吞まれ迷う者も描かれ、時代を覆うものの根強さを考えさせられる。一体それらの価値観が力を持った背景には何があるのか。同時に、百年前には強固に存在したものが、なぜ今は強調されなくなったのかという疑問も湧く。今は一体どういう時代なのか。このように、小説に描かれたものを鏡にして、移ろいやすい我々や我々を取り巻く社会の姿を浮かび上がらせていくことができる。

繰り返しになるが、今の価値観を相対的に捉えうる視座の獲得は、今後の自分が生きていくための拠り所となる価値観を自ら増やし選び取ることにつながり、また、今の時代に必要な価値観は何かという創造的認識や協同への想いにつながっていくはずだ。

こうした理由から、実学志向の強い現代の流れに逆行するようではあるが、今となっては直接声を聴くことのできない、書物の中に生きる他者とじっくり向き合い丁寧に対話することは今を生きる者にとって有意義であり、そうした文章を授業で扱い続けることに意味を感じている。

一方で、教員が扱うと決めた文章を読むのは教室という空間であり、そこは生徒にとって書物を編んだ者との丁寧な対話とともに、一緒に学ぶ友人たちとの対話も可能な場だ。同じ文章を同じ場所で読んでいながら、その解釈や想像力をふくらます方向性が異なる事実は、やはり自分の考えや想像を絶対視することを回避し、常に相対的に物事を捉えることの意義を、教員が多くを語らずとも生徒にもたすだろう。

丁寧に書物の書き手と対話すること、その上で、同じものを読んでいる友人たちとも対話すること、このバランスを定められた授業時間のなかで如何にしてとるかということが、近年の私の最も大きな関心事である。書物の書き手の声に耳を傾けるという静かで奥行のある沈思黙考の試み、その高等学校現代文の伝統を基盤にして、どんな授業を作っていくのか、今後も変わらず試行錯誤の日々は続きそうだ。

理科

〈小・中学校 理科〉 平山 勲

1) 研究と実践に明け暮れてきた日々

私が初めて明星学園を訪れた日のことは鮮明に記憶している。もちろん、採用試験のために来校したのが初めてではあるのだが、その後、事前の打ち合わせということで理科準備室を訪問し、挨拶に伺ったのが1988年の冬のことだったと思う。当時の中学校理科のメンバーは和田武久、山本豊、岡本博行の3名で、小学校の理科を担当していたのが江頭（大沼）有子、そして私の前任者となる佐藤文夫である。

今でも古さを感じさせる管理棟、その中の理科準備室はその当時から十分古めかしく雑然としており、教師用の図書で壁面は埋め尽くされていた。中学校のメンバーの中で最も年少の岡本さんでも私より10歳以上年上で、私は自分が何か場違いな空間にいるような感覚に陥った。そこで渡された、学園の紀要である『明星の教育』や自主的な実践記録集である『授業を創る』のバックナンバーを見て、これからの自分が取り組むことに対しての不安が急速に膨らんでいったのを覚えている。

とはいえ、この人たちは一体何だろうと私は思った。豪放磊落だが知性を感じさせる。今まであまり出会ったことのない人たちだと感じた。と同時に、ほぼ初対面の私に対しても「遠慮なく、ズケズケとものを言う人たちだな」とも思ったのであるが。

こうした知的な側面は、その後もいっそう強い印象となって表れた。着任前に理科部の主催で行われた佐藤七郎氏の講演と研究の会に招かれたのであるが、佐藤七郎さんといえば、当時生物学を学んだ者なら知らない者はいない、細胞生物学の大家である。そのような方を招くような活動にも取り組んでいるのかと非常に興味深かったのだが、それ以上に、多くの教員が参加しており、熱気を感じさせるものがあった。特に「テトラヒメナが……」などと積極的に質問する青年がいて、てっきり学外の大学院生かなにかかと思っていたのは体育科の河住貴夫だった。他教科の教員がこのような形で積極的に参加することに驚くとともにいたく感心した覚えがある。

そのようにして始まった私の教員生活であったが、当然のことながら授業は全くうまくいかなかった。今から考えても、学習内容や授業方法についての認識は極めて不十分であったのだが、授業の成否を決めるものは、毎時間子どもたちに対して提示される課題の妥当性にあると痛感し始めるのはもう少し時間が経ってからであった。

理科部の研究会は、毎週水曜日、会議が終わる夕刻から夜まで延々と続いた。たった1時間の授業をめぐってでも、よりよい課題にするための議論が長時間徹底して行われる。気がつくと退勤時刻となっていて、その後も吉祥寺の街に繰り出して、さらに延々とその続きをやるのである。水曜日の帰宅はいつも深夜で、日をまたぐこともザラだった。しかしこのような状況でも、理科部の面々の口癖は、「かつては水曜・土曜の週2回態勢で研究会をやっていたね。土曜日の夜など、保健室に寝泊まりしたりして……」などというような、にわかには信じがたいことであった。つまりは私のような若輩者に「あんたはまだ甘いんだよ」と言外に言っていたのであろう。

そのような私を、何とか一人前に授業ができるようにするため、みな真剣に議論に関わってくれた。特に佐藤文夫さんは前任者であるにもかかわらず、最初の2年間、毎週参加してアドバイスをくれた。そのような中で少しずつではあるが、教育実践の核となることについて学んでいくこ

とができた。それは与えられたことの軌道に乗ることだけからの脱却であり、「あなたならどう教えるのか」と突きつけられることへの自分なりの回答であったと思う。

2) 新たな実践を切り拓く

理科は自然科学の概念や法則を教える教科である。私たちはこの当たり前すぎることを真正面から愚直に、真摯に追求し続けてきたのだと自負している。それは自然科学の重要な概念や法則を選び出し、子どもたちが真に学ぶに値する内容を選択すること。そして、子どもたちの知的好奇心を満足させられるような形で認識の順序性を考慮しつつ個々の課題やその系列を設定するという一連の教育活動である。そのため、これでよいのか、という視点に立った内容の検討と議論は日常的に欠かすことができない。

ただ、そのような内容も独善に陥ってはいけない。そのため、私たちの実践は常に公開され、批判を受けなければならない。その典型が公開研究会での提案と分科会における検討である。

私の明星での2年目である1990年に、公開研究会で提案をすることになった。単元は「動物と食べ物」。動物が食べるということの意味を体温維持の観点から、恒温動物と変温動物の違いに焦点を当てることを主眼としたプランの提案であった。自らが提案者となってプランをつくり、課題で提示する読み物の一つ一つを作成する。まずそれを夏休みに合宿を行い、検討するのである。非常に大変な作業であったが、手厳しい意見・批判に対して私自身の意図を説明する過程を通じて、私自身が非常に多くのことを学ぶことができた。そして授業後の検討の場ではさらに鋭い指摘と容赦ない批判が待ち受けている。こうしたことの一つ一つが、自立した教育実践者としての階梯を少しずつではあるが登らせていくこととなった。

公開研究会での提案は、その後も毎年、精力的に行われてきた。90年代中頃は、小学校で着手した光の学習プランを受け、中学校での発展としての「光と色」を中心とした光の学習プラン、90年代の後半は無脊椎動物の分類・系統関係を中心にした「動物の系統」のプランを、さらに「生物の代謝」のプラン検討を通じ、代謝におけるエネルギーの学習の重要性がクローズアップされたことを受け、代謝に先立つエネルギーの単元として「仕事とエネルギー」の単元についてのプランを提案してきた。

さらに2000年代からはマクロな生物学として「生物界のつながり」に取り組み始め、中頃からは、現代の生物学を視野に入れた「遺伝」のプランや地学分野である「天気とその変化」を、さらに2010年代には「音」の学習プランに着手した。このように、公開研究会での提案というかたちで、常に私たちの実践がこれでよいのか、という視点を持ち続け、新たな検討や修正を加えながら研究活動を継続してきた。

2019年度から中学校に上田源也、福元翔輝の2名が加わり、さらに2021年度から小学校に是恒鴻太が加わって、研究体制を構築し、維持し続けている。特にここ数年は物理分野から「温度と熱」「電磁気」の分野について、授業プランの見直しと検討・修正を加え、新たな提案としている。こうした一連の研究活動は私たちの実践にとってのいわば生命線であり続けているのである。

3) 人との出会いとつながり

公開研究会という形で、学外に向け私たちの実践を発信し、常に批判的検討を受ける機会をもってきた私たちにとって、学外の人達との交流は非常に大切なことの一つであった。特に、教育

観の近い民間教育研究団体である科学教育研究協議会（科教協）の人々とは、実践の交流を通じて密接な関わりをもってきた。

科教協の研究サークルの場では、私たちの授業プランや実践報告をレポートし、問題提起を行った。当時のサークルは、非常に優れた実践者であり、古くから明星の教育と縁のある方々が参加しており、討議の中での彼らの指摘から多くの示唆を得ることとなった。彼らの姿勢を追いながら私自身も成長していったように思う。また、明星は20年以上の長きにわたり生物学教育研究サークルの会場校として、実践の交流に寄与してきた。私自身もこうした実践の交流を通じて、さまざまなことを学ぶ機会となってきた。

一方で、公開研究会では、提案内容に関わる分野を専門領域とする研究者の方々に講師として来て頂いた。卒業した縁で、教員の出身大学の教授において頂くこともあったが、提案の内容に沿う形で、その分野の専門の研究者の方にお声がけさせて頂き依頼をするのである。しかし、どこの馬の骨かも知れぬ教員からの依頼であっても研究の世界で真摯に対象に向き合っておられる方々は、都合さえ合えば快く引き受けて下さる。

一例をあげるなら、「遺伝」のプラン研究に来ていただいたのは、東京医科歯科大学難治疾患研究所にいた池内達郎氏である。私は大学在学中、池内氏の研究業績をよく知っており、いわば憧れの存在だった。その池内氏に講師として来ていただけたことは私にとって大変な喜びであった。

また、2018年の「細胞」のプラン研究では、東京大学医科学研究所の中西真氏に来ていただいた。中西氏は老化研究の最先端をいく研究者であり、マスコミへの露出も多い。そのような方に来ていただき、貴重な話を伺うことができたのも私たちの実践への大きな寄与であった。

研究の最前線にいるこのような研究者の方々からの視点は非常に貴重なものである。すなわち自然科学のプロフェッショナルである彼らが、自然科学教育はどうあるべきかを提言してくださる貴重な機会となっているということである。そして、研究者の皆さんは、異口同音に、私たちの内容と方法が、自然科学を教える理にかなったものであると評価し、共感してくださっている。

私たちはこのような外部からの叱咤を自らのこととして受け止め、さらなる実践の向上へとつなげていく責務を負っていると考えているのである。

〈高等学校 地学〉 堀口 隆士

皆さんは「地学」にどのようなイメージをお持ちだろうか？

地学は高等学校の理科の一つの分野である。他の多くの高等学校で地学を学ぶ機会が少ない中、明星学園高等学校では幸せなことに11年生の必修科目・12年生の選択科目として開講している。その内容は「地球システム」を意識し、「相互作用」をキーワードに地球や宇宙の成り立ち、自然に備わっているさまざまな仕組みを学んでいる。例えば「地下深くまで掘れば、どこにでもマグマがある」とか「雲＝水蒸気である」「太陽は水素が燃えて輝き続けている」という、なんとなく正しそうなことがすべて間違っているということを学んでいる。これらの例は、地学を暗記科目ととらえると起こりがちな間違いで、自然の仕組みを理解できれば、「マグマは発生すると上昇し火山を作る」⇒「マグマの上には火山ができる」＝「火山がない場所の地下にはマグマはない」、「水蒸気は水の気体状態で無色透明である」⇒「水蒸気（気体）が凝結・凝華し水滴（液体）・氷晶（固体）になると見える」＝「水滴・氷晶の集合体が雲である」、「燃える（燃焼）＝酸化」⇒「水素が

燃えるには酸素が必要」＝「酸素が無い宇宙空間で水素は燃えていない」＊太陽は中心部での水素の核融合反応で効率良く長期間安定して輝き続けている。このように地学は理科の他の分野の知識も使い、身近な自然現象や自然環境、資源やエネルギーなどを含め地球や宇宙の過去から現在、そして未来を考える科目なのだ。

私が初めて明星学園で地学を担当したのは1994年度だった。当時の理科には工藤一義先生（化学）、村田晴海先生（生物）、小林英一先生（物理）がおられた。工藤先生は気相合成法によるダイヤモンド作りへの挑戦、村田先生は尾瀬へのフィールドワークやウミホタル採取、小林先生は常にさまざまな疑問を実験や観測、議論で理解を深めるなど、新人の私にいろいろとお話しくださり、また誘っていただき、そして私の話を聞いてくださった。明星学園高校の理科には自由な雰囲気の中、楽しい実験のアイデアを話したり、一緒に出かけたり、直接授業とは関連が無くとも理科に関する話題で盛り上がる空気があった。そのような経験が遠回りしながらも、結果として自分の授業にも活かされていたように感じている。

また、この二十数年間にはたくさんの講師の皆さんと一緒に地学の授業を作ってくださいました。地学を担当していただいた順にお名前を挙げると、浜島尚先生、薬師大五郎先生、今橋健彦先生、淡路動太先生、安原健雄先生、相川充弘先生、宮本光一郎先生、三浦将先生、後藤紀子先生、宮川尚士先生。それぞれの先生との「相互作用」で明星学園の地学は進化してきた。また、この中には今でも情報交換が続いている方もおり、地学の話題で困った時には助けていただいている。

明星学園は武蔵野台地上に立地し屋上からの見晴らしも良く、空や天体の観測が学校で行える。また、付近に湧水も多く水循環や地層を直に観察でき、敷地内には現在までにハンドボーリングで8m超えの孔を掘り、地下水や地層を構成する鉱物の測定・観察も行えている。また、古いながらもさまざまな観測機器や測定装置も揃っている。その点からも明星学園は地学を学ぶ環境として良い環境だと思う。なお、屋上の天体観測ドームは黎明棟建設時に撤去することとなり、現在まで再建されていない。今後、「明星」学園に天体望遠鏡が常設されるよう期待したい。

地球環境も人の成長も「相互作用」で進んでいく。学ぶ環境を整え、さまざまな出会いを準備して教員同士や生徒との相互作用を通じ、地学の授業を進化させていきたいと思う。そして、生徒一人ひとりが各自の「地球観」「宇宙観」を持ち、お互いに地球や宇宙の話題で楽しい時間を過ごせるようになれば理想的である……。

算数・数学科

〈小学校 算数科〉 河住 由美

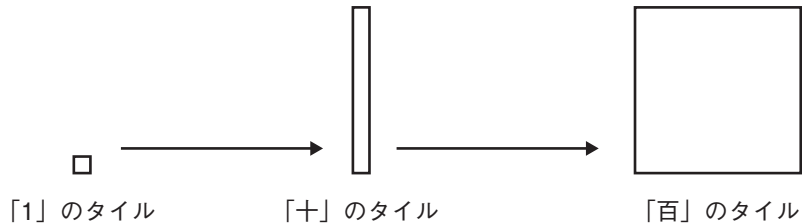
タイルの有効性について

すでに第3部で述べてきたように、明星学園小学校では1950年代後半から1960年代にかけて遠山啓氏らによって結成された数学教育協議会（数教協）の研究の成果を、実践的に裏づけ、『わかるさんすう』という教科書の作成に参加してきた。

創立当初から明星学園の中心は、学習内容と学習方法の両方を研究していく研究校であったため、遠山啓氏が開発したタイル図を使った「水道方式」を、当時から現在に至るまで、研究し進化発展させてきた。

ここでは、私たちが量の概念やしくみを理解していくときに、今日までなぜタイル図を使うべきだと考えてきたのか。「タイルの有効性について」、述べていきたいと思う。

1) タイルの1が正方形であることが、視覚化しやすく、イメージしやすい。



一のタイルが10集まると、十のタイル1本（長方形）。十のタイルが10集まると、百のタイル1枚（正方形）。

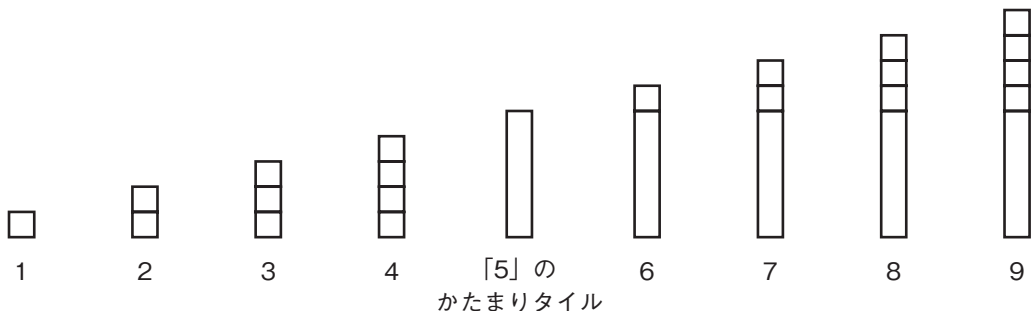
このように、タイルの1が正方形のため十進構造を視覚化しやすく、頭の中でイメージしやすい。正方形⇒長方形⇒正方形⇒長方形の繰り返しになっている。

これは、整数の世界だけでなく小数の世界でも、「1を10等分した1つ分が0.1」⇒「0.1を10等分した1つ分が0.01」と、タイルの1を基本として正方形⇒長方形⇒正方形となっていく、十進構造を捉えやすいのである。

2) 5のまとまりの直感的シェーマとなる

視覚化しやすく、頭の中でイメージしやすいタイルであるが、その数が5を超えると直感的にいくつであるか認識しにくい。人間が直感的に把握できる数は4までと考えられる。

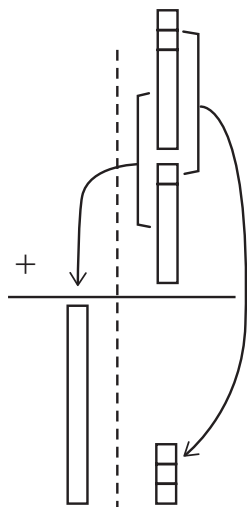
そこで、5より大きい数（5～9までの数）では、5をひとまとまりとして、「5のかたまりタイル」と「バラタイル1こ」で6、「5のかたまりタイル」と「バラタイル2こ」で7……と表していく。このことにより、9までの数も直感的に捉えられる数となっていくのである。



3) くり上がり・くり下がりのしくみが理解しやすい。

「5のかたまりタイル」を使うことによって、くり上がり・くり下がりのしくみの理解が容易となる。

例) $7 + 6$ の場合



「5のかたまりタイル」2つで「十のかたまりタイル」が1本。
バラタイル2こと1こで3こ。

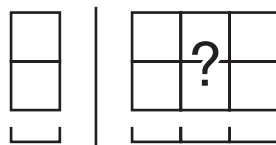
「十のかたまりタイル」1本と
バラタイル3こで「13」
と、タイルの操作により、思考が容易となるのである。

4) かけ算・わり算にも応用ができる

タイル図は、わり算・かけ算にも応用することができる。次の課題を見てみよう。

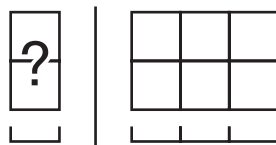
【課題】 1人2このあめを3人に配りました。あめは全部でいくつでしょうか。

$$2 \text{ こ} / \text{人} \times 3 \text{ 人} = 6 \text{ こ}$$



【課題A】 あめが6こあります。3人でわけると1人分はいくつになるでしょうか。

$$6 \text{ こ} \div 3 \text{ 人} = 2 \text{ こ} / \text{人}$$

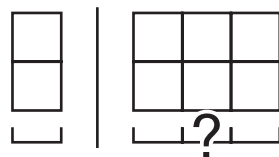


同じ図になるけれど、求めている所が違う。近年、タイルマシーンなる教具を作り、実際にタイルを手で操作して考えることから始めて、それをタイル図へ描き表していくことへの移行を行っていくことで、子どもたちはスムーズにかけ算・わり算の演算を捉えることができるようになってきている。

さらに、

【課題 B】 あめが6こあります。あめを1人に2こずつ配ります。何人に配れるでしょうか。

$$6 \text{ こ} \div 2 \text{ こ} = 3 \text{ 人}$$



わり算では、上記【課題 A】のような等分除（1あたり量を求める場面）と【課題 B】のような包含除（いくつ分を求める場面）の違いも、このタイルマシーンを使うことにより、子どもたちの中にその意味が明確になっていっている。

5) 整数以外的小数や分数にも適応できる。

(1) で、整数だけでなく小数も同様にタイルを使用して考え進められることを述べた。ここでは分数でのタイルの活用について述べたいと思う。

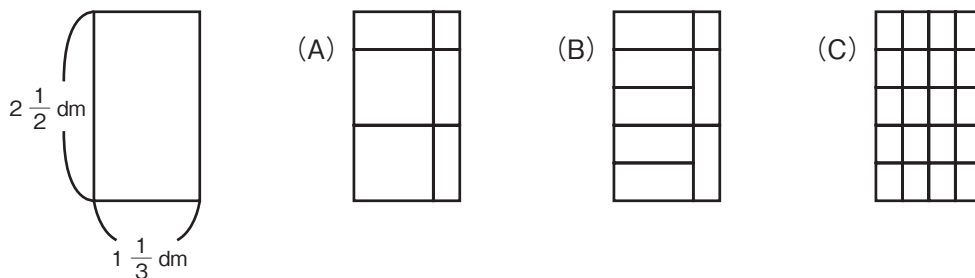
分数は、整数や小数とは根本的に異なる数である。それは、十進構造が成立しない数だからである。同じ $\frac{1}{4}$ という量を表すにもいろいろな表し方がある。



分数タイルを自分の手で実際に使い、量感をつかむことにより、分数の演算の繋がりも見えてくる。

例えば、分数のかけ算で、

【課題】「たて $2\frac{1}{2}$ dm 横 $1\frac{1}{3}$ dm の面積を求めましょう。」という課題を考える。※ 1dm=10cm



(A) (B) のように、分数タイルを敷き詰め、答えが $3\frac{2}{6} (\frac{20}{6})$ dm になる考えもあれば、(C) のように、タイル 1 種類だけで構成されているパターンが出され、タイルが 20 こあるのだから $\frac{20}{6}$ dm。

$\frac{1}{6}$ が縦に 5 こ、横に 4 こあるのだから $\frac{20}{6}$ dm というパターンも子どもたちが見つけていく。

このことが、 $2 \frac{1}{2} \text{ dm} \times 1 \frac{1}{3} \text{ dm} = \frac{5}{2} \text{ dm} \times \frac{4}{3} \text{ dm} = \frac{20}{6} \text{ dm}^2$

という、分数のかけ算のアルゴリズムへと繋がっていくことができるのである。

以上が、明星学園が1960年代以降、タイル図による教育実践から得た「タイルを使うことの有効性」である。

〈中学校 数学科〉 平野 康弘

新体制以降の明星学園の教育実践 —1983年以降の各教科の歴史—

1982年に遠藤豊校長が年度末での退任を表明し、そこから2年間にわたって何人もの小・中学校の教員が明星学園を去り、自由の森学園に移った。その空席を埋めるために新しい教員が加わり、新体制下での実践がスタートした。

1) 1980年代の中学校数学科

1983年4月、百瀬弘を教科主任とし、1年目の山口一郎、永井俊彦を迎えた三人による中学校数学科の研究体制がスタートした。毎週2回の定例研究会は、夜の10時過ぎまで行われることも多かった。研究の中心は、授業の課題づくりである。百瀬がとことんこだわった授業形態は「課題解決型授業」であり、教え込みを極力排除し、子どもたちの予想をもとに子どもたち自身の討論で数学的真実に迫っていこうという授業スタイルである。子どもたちに考えさせて意見交換させる授業は、それまでも松井幹夫、村岡篤、野沢茂らによって実践されていたが、百瀬はそれを引き継ぎつつも理科の仮説実験授業にも似た課題解決型授業を構想し、若手二人とともに共同研究が始まったのである。(翌年、永井に代わって平野康弘が着任する)

2) 数学復習用テキスト(そそくさシリーズ)・『明星の教育 中学校の幾何教育』の発刊

一方、教科書を使わない授業であるため、復習用教材の必要性があった。復習用テキストとして三人で討論を重ね、「正の数・負の数」を百瀬が、「文字・文字式」は平野が、「等式の性質と方程式」は山口がそれぞれ中心となり執筆した。この復習用教材は、先生役の“じい”と生徒役の“そそくさ・べんてん・ますらお”という三人の中学生が互いに問答・対話する形で構成された復習用テキストで、通称として『そそくさシリーズ』と名付けられた。

この頃の実践は数学科の三人が加盟していた民間教育団体の数教協(数学教育協議会)の研究集会でもたびたび紹介、報告を行っていたが、特に議論を呼んだのは、正負の数の授業に関して百瀬が主張した「言葉の一元化」という考え方だった。「正反対の意味を持つ言葉を一元化することによってプラス・マイナスが生じる。言葉を一元化するからこそ演算が足し算に一元化される」という主張である。例を挙げると、財産3万円と負債3万円という2元の言葉で区別された正反対の量を財産だけに統一して、財産+3万円、財産-3万円と考えるのである。財産5万円と負債3万円を手持ちとして持っている人の全財産を求めるには、 $5 - 3 = 2$ となり全財産は2万円となる。なぜ引き算なのか? それは財産から負債を引くからである。これが算数の世界である。

ところが、言葉が財産に一元化された正負の数の世界では全財産を求める式は $(+5) + (-3) = +2$ となる。なぜ足し算になるのか？ それは財産+財産だからである。もうひとつ例を挙げよう。室内の気温が 20°C だったが暖房を切るとたちまち 7°C も温度が下がった。今の気温は $20 - 7 = 13$ で 13°C である。なぜ引き算なのか？ 温度が下がったからである。上がれば足し算、下がれば引き算、これが算数の常識である。ところが、正負の数の世界では、下がるという言葉を追放して上がるに統一するのだ。 $+20^{\circ}\text{C}$ から -7°C 上がったと考える。だから今の気温を求める式は $(+20) + (-7) = +13$ となる。なぜ足し算になったのか？ 温度が「上がった」から足し算なのである。検定教科書では、この重要な概念を説明抜きで済ませている。なぜ足し算に統一されるのか？ という重要な理由が説明されていないのだ。言葉が一元化されるからこそ足し算に統一される。言葉が一元化されるからこそ正反対の量を区別する為に $+$ ・ $-$ が必要となる。この「言葉の一元化」の考え方は現在に至るまで明星学園中学校数学科の正負の数の指導法として定着している。

また、「関数」のテキストは、公開研究会を契機として大学の研究者との共同研究が行われ、多くの授業実践の積み重ねと修正を経た後によりよく完成した。さらに、次の大きな研究課題は図形指導であった。この分野に関しては、公開研究会の講師としてお招きした学芸大学の関沢正躬先生、群馬大学の瀬山史郎先生からの助言をもとに「アフィン変換」を中心に置いた授業プランを開発していった。1991年、百瀬の小学校への異動のため新たに加わった中西正一と共に、図形教材を精力的に開拓、明星学園独自の「変換の系列」が完成、『明星の教育』1996年春版の『中学校の幾何教育』の発行に結実した。

3) 6・6制以降の数学科

2007年、中高一貫体制が始まり、中学校は週5日制から週6日制へと移行する。それに伴い、9年生の数学は4単位から5単位へと変更された。これまで各学年4単位を一人の教員が担当していたが、この変更により9年数学は3単位の数学Aと演習を中心とする2単位の数学Bが置かれ、数学Bは高校の教員が担当、それまであった中高の溝を埋める試みが行われた。また、数学科における中高の人事交流も盛んにおこなわれた。それは、相互理解のために一定の役割を果たすことになる。しかし一方、カリキュラムを安定させることが急務となった。

2009年度、数学Aを再び4単位とし、数学Bは1単位となった。数学における学習内容と演習とは中学生にとって切り離すことが困難であったためである。さらに数学Bは、その翌年から新たに「現実と数学とのつながりを学ぶ授業」として位置づけなおし、小寺孝幸、増島高敬^{たかよし}、市橋公生、名雪順一という著名な数学教育協議会の実践者を非常勤講師として招き、探究を基本とする授業を実践した。どの先生の授業も子どもたちの探究心を刺激し、楽しく、数学が現実役に役立つことを伝えてくれた。現在の数学科は、百瀬が提唱した生徒主体の「課題解決型の授業」を数学Aとして引き継ぎ発展させつつ演習的な時間を確保、さらに現実とのつながりを探究的に考えさせる数学Bを9年時に配置することで、中学校3年間の教科カリキュラムが形成されている。

＊数学Bの主な単元例

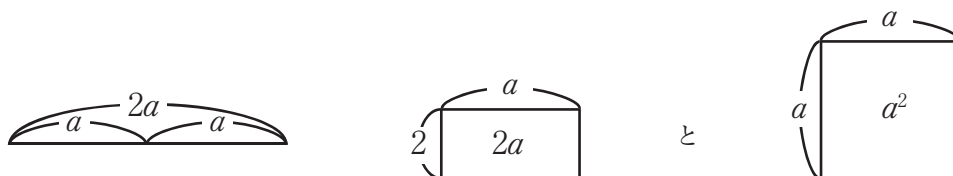
- 「不思議な数あて 《発見から新しい数学の世界へ》」
- 「起こりやすさを探求する 《現実の世界と確率》」
- 「地球温暖化と水不足の危機 《現実の変化を2変数関数で考える》」
- 「二酸化炭素濃度の推移の分析と将来予測 《1次・2次・指数関数的変化》」

4) 具体的な実践例「文字式」

ここでは中学校数学科の独自カリキュラムの特徴を示す一例として「文字式の扱い方」について紹介しておこう。中学生にとって抽象度の高い文字式を少しでも実感しながら学べるように、明星学園中学校ではシェーマを重視している。文字式を表す実体として、線分図シェーマと面積図シェーマを使う。

＊シェーマ：共同で思考する際に共通の武器となる「構造を内在した図式」

例えば、子どもたちがよく間違える $2a$ と a^2 の違いは、下図のような「線分図」と「面積図」の違いとして強固なイメージを作る。



これらの図をシェーマ図と呼んでいて、これを通して $a + a = a \times 2 = 2a$ や $2 \times a = 2a$ であることも明確になり、 $a \times a = a^2$ との違いも、しっかりと認識されるようになる。

このように、文字式との出会いを、その意味合いを示してくれる線分図や面積図と常に対応させて指導すれば、中学生の子どもたちにとって少々よそよそしくもある抽象度の高い文字式が、身近な存在として認識してもらえるようになる。また、式の展開・因数分解も面積図シェーマを使うことで、抽象的な式操作も実体化ができるようになる。同じように2次方程式も面積図で扱えば、解法の基本である平方完成法は、「正方形の面積等式を作ること」に他ならないということになるのである。

(例) $x^2 + 6x = 5$ を面積図で解きなさい。

1次の項の係数の半分を2乗して両辺に足せば、左辺が平方式になって、数の式ができるので、両辺の平方根をとれば解ける、というのが平方完成法である。検定教科書の説明は次のようになっている。

$x^2 + 6x = 5$ 1次の項の係数6を半分にすると3となる。その3を二乗した9を両辺に加える。

$x^2 + 6x + 9 = 5 + 9$ そうすると、左辺は平方式になるので、因数分解して平方の式で表す。

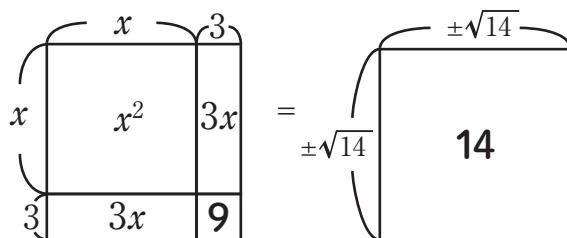
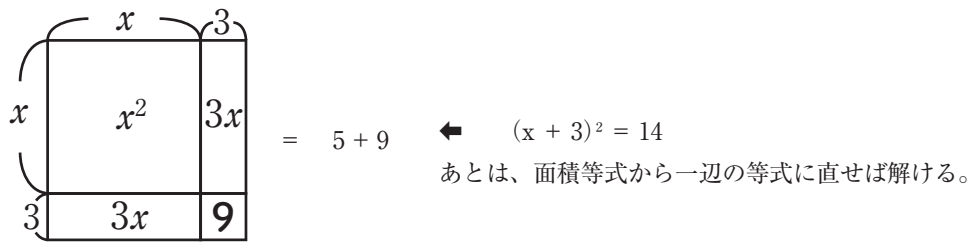
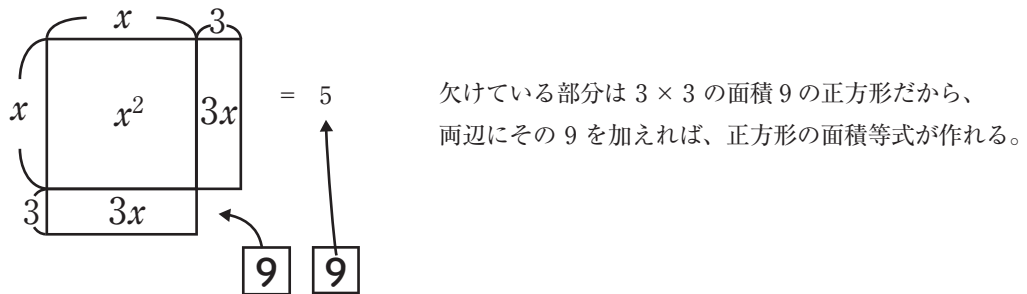
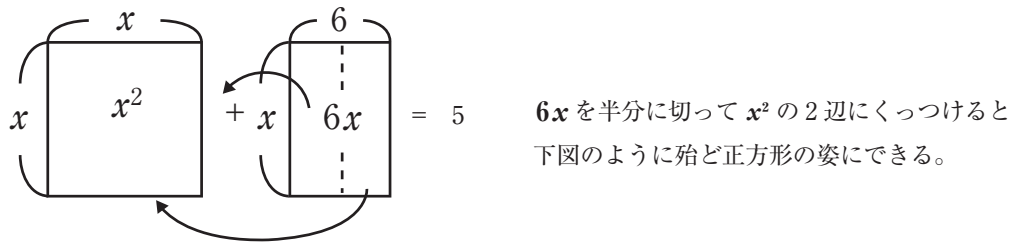
$(x + 3)^2 = 14$ 両辺の平方根をとる。

$x + 3 = \pm\sqrt{14}$ 3を移項すれば解が出る。

$x = -3 \pm\sqrt{14}$

要するにやり方を解説しているのである。

この過程を図としてイメージ化すると以下ようになる。



このようにして、平方完成法で解く過程を図の操作と対応させて理解することができる。

$$\begin{array}{llll}
 x^2 + 6x = 5 & \text{正方形+長方形の等式} & & \\
 +) \quad \quad \quad 9 & 9 & \text{欠けている部分を補う} & \leftarrow 6x \text{ の } 6 \text{ を半分にした } 3 \text{ の二乗} \\
 \hline
 x^2 + 6x + 9 = 14 & \text{正方形の面積等式} & & \\
 (x+3)^2 = 14 & & & \\
 x+3 = \pm\sqrt{14} & \text{正方形の一辺の等式} & & \\
 x = -3 \pm\sqrt{14} & & &
 \end{array}$$

このようにして2次方程式の平方完成法が実体化される。

数式でやっている過程が図によって実体化されることによって、「なぜ？」が理解できるのである。

この面積図シェーマによって解く手順は、一般の2次方程式になっても変わらない。

$ax^2 + bx + c = 0$ という一般の2次方程式についても、文字係数のまま面積図シェーマを使って解いていくと、『解の公式』も導くことが出来る。ここでは詳細を述べることは控えるが、誰もが苦勞して覚えさせられた解の公式（下記）でさえ、きちんと図形的な意味を持って理解することができるのである。

$$\text{2次方程式の解の公式} \quad ax^2 + bx + c = 0 \quad \Rightarrow \quad x = \frac{-b \pm \sqrt{b^2 - 4ac}}{2a}$$

〈高校 数学科〉 土屋 和臣

私は数学を教えることにおいて、言語化することを大事にしている。子どもたち自身が自分の考えを言語化することが、きちんとした理解へ繋がっていくと考えるからだ。

“数学”は高校で全く新しく出会う教科ではない。“算数”から始まった積み重ねであり、通算すると小中の9年間を経て10年目である。高校での数学の授業のスタートは、内部生・外部生に関わらず、得意不得意の差が大きいのが現状だ。そうした中での目標として、1コマ50分間の授業時間の中で、自分で何かを考えることを目指している。高校での学びは出口を自分で探していく出発点であると私は思っている。「必要な学力はこうである」といったように目指すべきものを示してあげること。あとは示された一つの指標に対してどのようにするのかを選んでいくのは本人たちだ。それが高校生の学びだと考えている。

授業実践としては二つのことを意識して行っている。一つ目は50分の中で全員が考えること。そのためにそれぞれの生徒とは、例え分からなかったとしても分からないままでは終わらせず、その子の「分かった」があるまで、何が分からないのかをみんなの前でやりとりする。なぜそのようなやりとりをするのかというと、それは本人だけではなく周りにも影響があるからだ。正解でも間違ってもいい。分かるまで教えてくれる安心感、それが全員で考える授業に繋がると考えている。

2つ目は必要な学力を知ること。10、11年の授業では、時々演習として、大学入試の問題を取り入れている。「こういうことを聞かれるんだ。」「すごく難しいな。」「面白いな。」「チャレンジしてみたいな。」さまざまな生徒の反応があるが、一人ひとりが出口として大学を進路に選びたいと考えたときに、自分に必要なことを感じられる授業にしたいと思っている。もちろん、単に大学入試だけではなく、純粋な学問への興味や熱意などにも繋がってほしい。

最後に、その演習の時間が私の大事にしている“言語化をする時間”だと思っている。演習の時間は一人で考える時間と、みんなと考えてよい時間に分けているが、みんなと考えてよい時間には生徒同士が教え合う様子がみられる。分かる生徒は、分からない生徒に自分なりの言葉で説明し、分からない生徒は分からないことを説明する。お互いに説明し合うことは、考えを言語化することとなり、曖昧な理解をこえて、きちんとした理解に繋がると考えている。

社会科

〈小学校 社会科〉 江口 聡江

1) 「石の上にも三年」

この言葉は私がこの仕事についてから数年、常に頭の上から降ってきた言葉だ。小学校での社会科専科は他の学校では当時ほとんどなかったが、私が赴任する数年前に担任から社会科専科になられた辻木猪一郎先生からその役割を引き継ぐことになった。

引き継いだものは4年の「水の学習の羽村見学」、5年の「伊豆大島」と「縄文の加曽利貝塚見学」、そして「土器づくり」と「土器焼き」である。土器づくりのための粘土は大変貴重なものになっていたが、何十年と毎年続けている明星の5年生のために「加曽利貝塚土器づくり同好会」のメンバーの方に準備していただき、購入している。土器焼きは野焼き（窯ではない）で行うが、毎年燃やす木材（いらなくて譲り受けた材木）が違う。そのため、必ず手に入った木材を見ながら授業の実習前にシミュレーションをする。土器焼きの前日に急に予想外の雨が降った時には、セコムの機械警備がかかった学校に侵入して材木にシートをかけたこともあった（校舎内ではないのでセコムには引っかけらずに済んだ……）。初年度は子どもには危険かと一人頑張って子どもたちの作った土器を火の中に入れて、髪を焼いてしまい櫛が通らなくなったことも……その時に小学校高学年の担任で社会科を教えていらした飯田達彦氏が、子どもたちに自分で火の中へ土器を置かせていて、「子どもがやれることは子どもがやる」を見せてくださった。それ以降、子どもたちは自分で火をおこし、木材も運び、楽しく自分の土器を焼いている。

社会科の研究会は、中学校の社会科の先生や飯田達彦氏など50代前後の個性あふれる先生たちとともに行われたが、そのような中で20代の私は模索し、第一人者と言われる人の講義があれば聴きに行き、自分の学びの確認をし、博物館にも積極的に行き、私自身が本物に触れる機会を作るようにしていった。

3年後には毎年行われていた小・中社会科公開研で提案するようになり、大切な本も見つけられるようになっていった。今では鉄づくりも炉づくりや炉炊きも毎年行っているが、かなりの労力と時間を要するせいか、それまでは毎年はやってはいなかったようだ。

当時は、小・中や教科の枠を超えて面白い取り組みには一役買うという文化があった。というより、楽しい授業を一緒に作ろう、自ら楽しもうとする機運が学園全体にあったのかもしれない。飯田達彦氏に加え、中学校の国語科の时任重孝先生や社会科の飯田啓介先生などからは、「鉄づくり」をやっていたことを伝授していただいた。鉄づくりのための炉づくり（耐火煉瓦と耐火モルタルを使った簡易的な炉）、さらに炉に風を送るための鉄パイプの設置までを学んだ。鉄づくりは、砂鉄（酸化鉄）から木炭で酸素を取り除く作業である。毎年色々と砂鉄の量を試しながら、同僚たちの協力も得て続けている。

しかし、このようなことを普通の授業をしながら行わなければならない。後片づけで水洗いする時は、セメントがはりついているようなものなのでなかなか終わらなかったり、ヘロヘロなのに明日の授業準備がまだだったりして20時過ぎの暗がり疲れ過ぎて泣きそうになったことも……。

今ではそんな大変な炉づくりも土器焼きも子どもたちと一緒に楽しめるようになった。はじめの数年は毎年薪割りもしていて、体力が必要なため、10年、いやこれが毎年もつかなとずっと思っていた……「石の上にも三年」ということわざは知っていたが、初任の頃はこの言葉が頭の上に落

ちてきた日々だった。教師も楽しまないと、子どもも楽しめないと言い聞かせる日々だった。今は簡単な論理を子どもたちが間違えると楽しんだり、子どもたちの意見からこちらが学んだり、感心することもあり面白い。ただ昔の同僚が言っていたようにベテランになったからといって楽になるわけではないし、子どもたちにエネルギーを吸い取られもするが、きっと元気をもらっているのでしょうね……

2)「新たな授業づくり」

まず社会科という教科では小学校高学年で何を教えるのか。多くのものがある中で何を大切にしていくのか。例えば縄文時代なら「土器」という具体的でその時代の代表的なものからその時代の背景や人々の暮らしを教えていくのがいいのではないかな。そこでは学者と同じように本物の土器のかげらに触り、疑問を抱いたり使い途を考えたり時代順に並べたりして、土器の特徴の変化から何が言えるのかを考えていく。遺跡の発掘状態からも何が言えるのかを考えたり、出てきた疑問に予想を立て、具体的な発掘記録や発掘現場の見学から仮説を立てたり、検証したりをする。

縄文人のすごい土器もカラーパネルで見ただけでは、そのすごさは伝わらない。自分にもつくれると思ってしまう子も多い。たった1kgの粘土を使ってつくってみるだけでもその印象は変わる。土器によってどう生活が変わったのかを考えていくことは今につながる文化を考えていくことにもなる。本物に触れ、自ら手を動かすことで思考が深まっていく。

歴史がどのようにわかるのか。その根本を学ぶことは新たなことを探求していく上で必要なことだ。なかなか遺跡を自由に発掘することはできないが、化石採集ならできる。化石採集の場所を探しに飯田達彦氏と、中学校の数学科から小学校へ異動した百瀬弘氏と共に奥多摩の武蔵五日市に行ってはハンマーでたたきながら探し回った。行くたびに状態が変化するため、児童を連れていく前の下見は欠かせない。台風がきて河原が氾濫した年は化石は豊作になる。他の場所も検討したが適当な場所は見つからず、現在に至るまで武蔵五日市近辺を転々としながらかうじて続けている。

時にはホームセンターでたがね鑿やハンマーなどの道具を大量に買うあやしい人になったりもする。化石展や博物館から安くてもいい化石をいろいろ集めたりもする。以前小学校校長もされていた一瀬清氏がヒマラヤ山脈の麓から買って持ってきてくれたアンモナイトの化石は、4年生だけでなく、5年生の「地球の謎の学習」でも活用している。ヒマラヤ山脈からアンモナイトの海の化石が出土するのはなぜかを考えさせる授業である。化石からわかった生物を地球に現れた順に並べる授業も土器から縄文を学ぶ実践から思いついた授業である。地球史を学ぶことは、自分自身を学ぶことにもなり、地球環境や多様性を道徳的でなく自然に大切だと思うことにつながっていく。

矢じりづくりは今から20数年前に黒曜石探しから始まった。長野県の和田峠の黒曜石の産地に行けば黒曜石が手に入る(拾える)と思ったのだが、そんな簡単ではなく、困ったなと思っていたところ、ある業者が掘り起こし、積み上げたグレーの石の山の中に黒く光るものが……縄文最大の黒曜石産地も今では何十mも掘らないと取れないらしく、黒曜石を掘り出す業者さんから何とか安く手に入れることにした。その後、「三鷹遺跡調査会」に北海道の十勝山地で個人で掘り出しを行っているおばあちゃんを紹介していただいて、長野とは違う色の黒曜石を手に入れることができた。またそこも厳しくなり、現在は黒曜石を扱っている山梨の業者から取り寄せている。

黒曜石だけでは矢じりづくりはできない。鹿の角も必要なのだ。角先で矢じりの形を整え、角

の太い部分はハンマーとして黒曜石をたたき剥片^{はくへん}を取るために用いる。動物園で譲ってもらえるのではないかと思ったができず、修学旅行の下見の際土産物店で購入し、自分の荷物よりかさばる状態で何回か持ち帰ってきては、工作の佐藤晃氏の協力を得て鹿の角を角先とハンマーとして用いる太い部分に切り分けたりもした。そのようにして何年かかけて子どもたち一人一つの角先をそろえていった。

鹿角のハンマーや4年の化石採集の時に拾ってきた河原の石で黒曜石から剥片をとり、鶏の皮や肉をきって切れ味を確かめてみる。実際に切ってみて初めて驚く。その大きくて薄い剥片が取れれば、鹿の角先を使って矢じりの形をつくっていくことができる。ただ、どのようにして矢じりをつくっていくかは試行錯誤の作業だ。そのような過程をとおして石のどこをたたけば薄く大きな剥片がとれるか、鋭く切れるガラスのような石を素手で持っても怪我しないですむかを経験する。もちろん子どもたちは気を抜くと指を切るが、上手くコツをつかむ子もいれば、ただたたいているだけで大変となる子どももいる。やってみて初めて縄文人って……となるのだ。どんなに文章を書くのが苦手な子どもも、イラストなどをいれながら1枚に感想やまとめを書くことができるのだ。

最後にたたら製鉄（日本において古代から近世にかけて発展した製鉄法。砂鉄や鉄鉱石を粘土製の炉で木炭を用いて比較的低温で還元し、純度の高い鉄を生産できることを特徴とする）について述べたい。小学校では4～6年生が夏に千倉の海に行くが、そこで6年生は砂鉄（酸化鉄）を採取、炉も耐火煉瓦と耐火モルタルでつくり、運がよければ土器焼きの跡片づけと共に炉たきをする。そこに選別した砂鉄と木炭を早朝から昼位までいれて、15時頃炉を壊し、玉鋼^{たまはがね}を取り出すということをやっている。

「鉄を制するものが国を制す」というのは世界共通の国の成り立ちだが、日本にも渡来人によって青銅と同時に鉄がもたらされた。古代国家統一を果たしたヤマト政権も他の豪族よりいち早く朝鮮半島から鉄の延べ棒を手に入れていた。その後、日本に砂鉄があり鉄がつかれることを知ること、朝鮮との間で鉄の奪い合いの戦いが避けられたことも最近わかってきている。近代製鉄高炉が日本に入るまでたたら製鉄は、農具をはじめ世界に誇る日本刀など、日本のくらしや経済発展を支えていたのだ。しかも、たたら製鉄でできる玉鋼は高炉ではつくりえない純度の高い鉄で、今でも日本の伝統を支え、私たちの現代生活には欠かせないものとなっている。

このように小学校社会科は、単なる知識を教え覚えさせるのではなく、「縄文土器」を通して縄文時代を、「鉄づくり」を通して国の成り立ちや経済、人々のくらしをというように、具体的な「もの」に出会わせ、それを作るプロセスを体験しながら、問いを発見、仮説を立て、検証することを大切にしてきた。単なる頭でっかちな人間を作るのではなく、具体的な「もの」を通して自分の頭で考え、歴史を読み解く眼を育てるためである。小学校時代にこのような土台を作っておくことで、中高での社会科の学びへとつながってほしいと願っている。

ただ、学習内容の上で小学校ではどの分野まで扱い、中学校に送り出すかということについては今後、さらに検討していかなければならない。以前のカリキュラムでは江戸時代以降は、世界と関わっていく分野に入るため、中学校での学習内容としていたが、現在では、明治から太平洋戦争、日本国憲法や戦後、現代の問題点までを扱うようにした。しかしそのために、人口が倍増することによって必要になった江戸時代の農民の木綿の衣服をどのように補ったかについて、家内制

手工業の登場から特産物の誕生、大量生産へとつながる具体的で面白い授業（小学校前期の「総合」の授業、中学校における「工芸」の授業とのつながりという観点からも面白い）が数年行えていない。限られた中で何を学ぶかということも今後の課題である。

〈中学校 社会科〉 小畑 典子

私が明星学園中学校の社会科の教員として加わったのは、2009年からだ。その年の中学校の社会科は、比嘉ちひろさん、瓦田^{ひさし}尚さんと私の三人だった。当時は毎週、高校所属だった川手晴雄さん、土器屋真理子さんも加わって、比嘉さんの授業を中心に授業検討する教科会が開かれていた。この教科会を通して、授業の作り方を学ばせてもらった。

中学校の社会科は大まかなカリキュラムは共有されているが、何をとりあげ、どんなことに力点を置くかは、三者三様となっている。定期的に教科会ができない状況の中、できるだけ毎年、公開研究会で提案授業を行うことを意識してやってきた。小学校の江口聡江さんも一緒に、小中社会科合同で順番に提案授業者となり、その年の提案授業者を中心に、講師や司会を引き受けてくれた方も交えて一緒に授業をつくることを続けてきた。それが三者三様の授業であっても、大事にしたことを共有するための欠かせない機会となってきたと感じている。

特に、2012年度からの6年間は、繁田真爾さん、高橋珠州彦さん、小畑の三人体制が続く中で、中学校で当初予定していた学習内容がなかなか3年間で終わらないこと、具体的には、近現代史の学習が駆け足で終わってしまい、十分に近現代史の学びを深めることができない現状を、何とか改善したいと考えるようになった。公開研究会の社会科の講師として出会った三橋^{みつはし}広夫さん（日本福祉大学元教授、千葉市公立中学校教員、早稲田大学教育学部非常勤講師）との出会いが大きな転機となり、中学校社会科では、「東アジアと日本」という視座でのカリキュラム作りに取り組むことになった時期の学びが大きな財産となっている。

- 2013年度 「遣唐使の派遣～阿倍仲麻呂と鑑真から考える～」(提案授業者：小畑)
- 2015年度 「日清戦争～「牙山大捷図」・「倭奴佔踞韓京図」を使って～」(提案授業者：繁田)
- 2017年度 「朝鮮人から見た浅川巧」(提案授業者：高橋)
- 2018年度 「モンゴル襲来」(提案授業者：小畑)

阿倍仲麻呂の実践では、「阿倍仲麻呂と鑑真の年表」から子どもたちに「何か変だなあ」と思うものを挙げてもらい、そこから授業で考える問いを子どもたちと一緒に決めて授業をつくっていくことを試みた。

日清戦争の実践では、授業者が「日本はなぜ朝鮮の王宮を攻撃しているのだろうか？」という問いを設定したが、その後の検討会で、三橋さんから絵画資料の絵解き中に、ある生徒がつぶやいた「清が朝鮮を攻めていたのを日本が助けている」という発言を取り上げ、本当にそうか考えてみようという課題にするとよかったのではないかという指摘を受け、その重要性が共有された。

浅川巧の実践では、「浅川巧の周りの朝鮮人は彼をどう思っていたのか」という問いから始まるものだったが、議論の中で、「日本人とか朝鮮人とか考えていなかったのではないか」「そこまで朝鮮人に受け入れられ、朝鮮人に寄り添った浅川巧の態度を日本側は許すのか」という子どもたちの

つぶやきから、議論が大きく動き、深められていったことが印象深かった。

モンゴル襲来の実践は、2度の戦いの合間に、お互いに交易をしていたことへの子どもたちの驚きを課題にした。授業者がさばき切れないほど活発に意見が交換された。やはり、この時も三橋さんから、「どんな子どものつぶやきを取り上げるかは、その授業者の勘に頼るしかないが、それを支えるのは教材研究をいかにできているかに尽きる」というエールをもらい、教材研究の大切さが改めて共有された。

以上のことを通して、子どもたちの「なんか変だなあ」探しから始める授業のもつ意義とともに、教材研究を通して、子どもたちが本当に考えたいことは何かを追究すること、子どもたちから発せられる何気ない一言（つぶやき）こそ、子どもたちの「当たり前」や歴史認識を揺さぶる可能性が秘められていることを学んできた。この気づきと学びを受け継ぎ、2019年度から新しく加わった山田崇文さんとも一緒に中学校の社会科の授業を考え続けていきたい。

そして、2018年度は繁田さん、高橋さんと沖繩へ、2019年度は山田さんと陸前高田への社会科有志学習旅行を企画、実施した。同じ教科の教員と一緒に同じ行事に参加する機会はなかなかなく、私たち教員にとってもとても有意義な時間となった。コロナ禍をはさみ中断されているが、学校の外に出て、実際に自分の目で見て、耳で聞いて、感じる機会を、教科で主体的につくることも大切にしていきたいと思っている。

〈高等学校 社会科〉 築 賢治

今から約20年前、私が明星学園高校に勤め始めたとき、高校社会科はいわゆる団塊の世代の大ベテランの教師陣が占めていた。

私はその中で、10年生必修授業である「現代社会」をゼロから作りあげる役割を担うことになった。

「現代社会」の授業を作り上げる上でいちばん大切にしたのは、授業の中で学ぶ知識を単なる机上の知識で終わらせずに、できる限りそこに実感や体感を持たせるように努めたことである。

例えば、一学期には裁判について扱っている。裁判に関わる事柄について単なる知識を提供するだけでなく、弁護士を招いて授業をしてもらい試みを行なっている。担当の弁護士の方とは2～3カ月間の打ち合わせを重ねて、実際の裁判例をもとに、明星学園高校の授業で扱う事例を毎年作成してもらい。つまり、この明星学園オリジナルの事例を用いて本物の弁護士に授業をもらうことで、直接裁判の現場に行くような実感を生徒たちに感じ取ってもらえることを期待している。さらに、必ずしも毎年実施できているわけではないが、希望者対象の裁判傍聴の企画も行ない、実際の裁判に触れる機会も設けている。

二学期には、吉祥寺にある「レモンドロップ」というケーキ屋さんに商品提案をするという授業を、10年以上行ってきた。生徒が3～4名のグループを作り、高校生にアンケートをとったりしながら提案すべき商品を考え、実際に「レモンドロップ」へプレゼンテーションするのである。レモンドロップの担当の方は、毎年数十チームの商品提案を受け取ってくださり、限定販売という形ではあるが、実際にクッキーやケーキの商品化にも至った。これは、まさに「働く」ことの体感である。つまり、どうやったら売れる商品ができるかという正解がない中で、生徒たちにはそこに悩み苦しみを考えながら向き合い、「働く」という世界に触れて欲しいのである。

これらの授業を作り上げていくことを、社会科の諸先輩方は何も言わずに見守ってくれた。これが、まさに明星学園高校のよさだと私は思っている。入ったばかりの私に、一つの科目を自由に築かせてくれる。そこでは社会科の先輩方は何も言わないが、折に触れてさまざまな背中を見せて学ばせてくれた。ある先輩教員は当時10年生にあった自由選択科目の授業に同行させてくれ、学校外の世界に生徒を連れ出すことの意義を肌で感じられた。ある先輩は、ものすごい知識量・深い洞察の中で授業を行っており、一時間の授業に対してどれだけ教員としての深みが必要かを痛感した。また別のある先輩は、当時毎年行っていた社会科企画の奈良京都旅行において、やはり社会科で学ぶ知識には本物に触れることが必要だという実感を持たせてくれた。

繰り返しになるが、懐深く見守りながら私の成長を促してくれた諸先輩方のおかげで、10年必修「現代社会」という授業を作り上げることができた。今では、各学期に「現代社会ノート」という明星学園オリジナルの副教材を作成するに至っている。

そして、学習指導要領改訂により2022年度から科目名が「公共」と変わったが、授業の中身は変えずに続けている。文部科学省が「公共」へ変更した趣旨は、単に知識を得るだけでなく、知識を用いて主体的・対話的で深い学びを実現することにあるという。これはまさに「現代社会」の授業で私がずっと追い求めてきたものである。傲慢な言い方をすれば、ようやく時代が明星学園の授業に追いついてきたのだと感じている。そのため、「公共」へ移行しても、そのために特別な対応をする必要はなく、これまでやってきたことをバージョンアップするだけで充分という状況である。

改めて、これまでの高校社会科の先達に感謝するとともに、今度は私自身、自分の後の世代が同じように新しい授業を築いていかれるような環境をつくり、明星学園高校社会科のよさを継承してほしいと思っている。

ちなみに、上に挙げた「レモンドロップ」は2023年7月末にお店を閉じることになったため、本校近隣の「フランス菓子 ルリス」へと提案相手を変えて、続けることになった。地元・地域とのつながりということも大切にしながら、さらに「公共」の授業、そして明星学園高校社会科授業を発展させていきたいと考えている。

ここでは私が担当する授業にしか触れられなかったが、明星学園高校社会科は他の科目もさまざまなチャレンジをしながら授業を作り上げていることを、どこかで紹介する機会があることを願う。

英語科

〈小学校 英語科〉 秋枝 美佐

1) 英語教育のスタート

小学校英語科は2002年に設立された。公立では2011年度（平成23）に5、6年生の外国語活動が始まり、それが2020年度に教科化され3、4年生の外国語活動が始まったことをふまえると、本校は世の中の動きを一足も二足も先取りしていたと言えるだろう。

英語科設立の目的は、急速に発展する国際化に備え、子どもたちの人生の選択肢を広げることであった。そのためにはコミュニケーションツールとしての英語の習得が必須と考え、全学年週2時間の授業時間を確保した。言語習得においてはできるだけ高い頻度でその言語に触れることが

大切であり、週1回の設定では休日や行事と重なり授業の間隔が2週間空くこともあるため、それでは困る、とはじめから週2回の設定とした。他教科の授業数との調整は容易ではなかっただろうと想像する。

2) 小学校英語科カリキュラム

授業が開始されて以降、小学生に適したカリキュラムや指導法はどのようなものか、日々試行錯誤し続けている。低学年では新しい言葉との出会いは必ず音からとすることを大切に、自然な英語にたっぷり触れながら、とにかく子どもたちが英語の世界を楽しむことを大切にしている。身ぶり手ぶりを付けながら英語の歌を楽しんだり、授業の終わりにはネイティブスピーカーの教師が絵本を読む「ストーリータイム」を設けている。子どもたちは、教師の表情、ジェスチャー、絵本のイラストを頼りに英語だけで読まれるストーリーを全身で聞き、大意を理解する。そのような経験を通して子どもたちは、少しずつ、なんとなく英語がわかるようになり、英語は楽しいと感じ、英語が好きになり、いつの間にか英語が身近なものになっている。3年生になると、2000年（平成12）にNHKで放映されていた『えいごリアン』を活用し、1、2年生では教室内の教師との「今、ここ」のコミュニケーションでしかなかった英語の世界が、画面を通してグッと広がる。子どもたちは皆『えいごリアン』が大好きである。4年生になると、文字を介して英語に触れる学習が始まる。ここで子どもたちは、今まで音で一つのかたまりとしてとらえていた、例えば「I don't know.」という表現が、「I」と「don't」と「know」という3つの語で構成されていることに気付いたり、英語の語にはそれぞれ役割があり、それらがいくつか並んで文が作られていることを知る。そして自分でもその仕組みやパターンをもとに、文を組み立てることができることを知る。これが中学校の英語学習への架け橋になる。

3) コミュニケーションとしての英語教育

言語学習において、その言語を使って他者とやりとりをする実践の場を持つことは不可欠である。本校では英語科設立当初から4～6年生を対象に「イングリッシュキャンプ」を実施している。そして2006年度からは、海外の姉妹校との交流が始まった。日本以外の国で暮らす同じ年代の子どもたちとコミュニケーションをとることは、英語科設置の目的であった、子どもたちが国際社会で生きていくための国際感覚を養うこと、そしてそのツールである英語を身に付ける上で欠かすことのできない、最も貴重な体験の一つと言える。本校にはそのような機会が豊富に用意されている。

ところが新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により2020年3月のオーストラリア短期留学以降すべての国際交流活動が中止になった。そこで、どうにかして別の方法で実践の場を作れないかと考え、思いついたのが、英語の授業内で海外の姉妹校とZoomで教室同士をつないで交流を行うことだった。早速、2020年度2学期にはじめてオーストラリアのウッドエンド小学校と行った。当時はネット環境や通信機器が十分に備わっておらずスムーズにいかない部分もあったが、希望者のみが参加する国際交流活動とは異なり、クラス全員が参加できるという点において、これは非常に意義があると感じた。一方で、その場に全員の子どもたちがいるとはいえ、実際に英語を話す子どもはごく一部に限られた。両校の教員が間に立って、子どもたち同士のやりとりを中継するという形だったため、その場にいた子どもたちは英語でコミュニケーションをしている雰囲気は味わえたが、実際に自分が英語を使ってやり取りをしたかということ、そうとは言い難かつ

た。そのため、その場にいる全ての子どもたちが言語活動に参加し、「自分の英語が通じた！」と感じられる場を作りたいと考え、それを実現する一つのツールとして、2021年度にiPadを導入した。

初年度は2人に1台とし、まずは授業でiPadを使うことに子どもたちが慣れることを目標にした。子どもたちは自分の発話を録音して発音をチェックしたり、新しく学んだ表現を使ってペアで動画を撮影するなど、とても意欲的そして協働的にiPadを活用した。それをふまえ、2年目の2022年度には更に18台を購入し、1人1台のiPadを実現した。これにより子どもたちは各自で辞書機能も使えるようになった。子どもたちは紙媒体の辞書は使っていたが、デジタル辞書を使えることの利点は多岐に渡り、自律した学習者となるためには不可欠である。

2022年度には、iPad導入時にイメージしていた海外姉妹校との個々のやりとりが実現した。子どもたちはペアになり、学習していた表現を使って海外にいる友達と英語でやりとりを行う。普段の授業ではなかなか発話しない子どもも、その機会になると、自分が知っている言葉、練習した表現を使って海外の友だちとの会話を楽しむのである。ふりかえりシートにはほぼ全員の子どもが「楽しかった」「言えた」「伝わった」「またやりたい!」と書いている。「自分の英語が伝わった」と感じる、これこそが、言語学習の原動力となる貴重な経験だと私は考える。

4) 12年一貫としての英語教育を目指して

英語学習は小学校6年間で完結するものではない。小学校は、その後も長く続くであろう学習の強固な基盤を整えるための重要な時期であり、その大切な入口である。2021年度から小・中・高の英語科教員は定期的に集まり、それぞれのカリキュラムやフィロソフィーを共有し合い、連携をはかっている。当然ながら3校の英語科には共通した柱となるものがあり、一方でそれぞれの発達段階に応じた学習や、言語学習における段階が存在する。それを共有、可視化することは非常に意義深いものである。英語科にとって2022年度は、小学校英語科設立以来の20年間を振り返るとともに今後のさらなる発展を目指す上での大切な通過点となる1年であった。

〈中学校 英語科〉

1) 中学校英語科が大切にしてきたこと 姫野 英二

「習うより慣れよ」。英語の学習や習得ではよく強調されている言葉であるが、学校教育における英語の授業は「習う」と「慣れる」はどちらも等値であり、特に中学校で行われる教科としての英語においては「習う」が重要と考える。それは学校教育における教科教育はどの教科もその学習内容に含まれる「法則」や「しくみ」を科学的に学習・習得することが求められるべきであり、そのことを授業の本質にすることですべての生徒が授業に参加できるからである。英語の授業では、「なんとなく学習する」「いつしか文のしくみがわかる」ことで理解を深めることができる生徒は優秀な一部の者たちであり、苦手な生徒ほど「分析的」で「意識的」な学習のプロセスが用意されるべきである。

明星学園中学校の英語の授業は、4技能の習得を目指す前提として、英語の「しくみ」を対象化して学習する。英語の文字と発音のしくみ、形容詞述語（名詞述語）・動詞述語、語順、時制、アスペクト（進行形・完了形・普通形）、受動態、複文、準動詞、談話のしくみ、といった単元を意

識的に学習しながら4技能の習得に落とし込んでいく。教師は生徒たちに自ら学習することができる「武器」を与える必要があり、上記の「しくみ」を授業の中で意識化していくことで、活動が止まってしまう生徒がその武器によって動き出す促しが可能になり、生徒同士でも教え合うことができるようになる。

語学の習得はその言語の「自動化」を最終的に目指すのであるが、自動化に至るには多くの時間と個人の努力が必要となる。学校教育が目指すものは自動化よりも自動化できるための素地づくりであり、発話したことばの確認（モニター）ができる技術づくりなのである。

2) 中学校英語教科教科研究の歴史

1972年頃から2005年頃まで、上記の英語の授業の中心は大草繁であり、1980年代に井上成雄と姫野英二が加わる。その実践は東北外国語サークル協議会の研究に依拠する部分が多い。この民間教育団体サークルの屋台骨は、元明星学園教師であり後に宮城教育大学で若い教員を育成した渡辺慎晤と仙台の中学校教師でサークルの重鎮菅野富士雄である。この研究団体は毎夏「東北民間教育研究会」（東北民教研）集会の中心となり、若い教員からベテランの教員まで英語の教授＝学習のやり方を研究していったのであるが、明星の英語科三人もここから学ばせてもらい、毎年の公開研究会で提案を報告してきた。

ところで、言語（文法）と言語活動によって英語の授業は構成されるのだが、音声による言語活動が弱いという指摘は公開研究会でも何度かあり、中学校の実践課題であった。

2002年から小学校で外国人講師も加えた教科として英語の授業がはじまり、中学校でもオーラルコミュニケーションの授業（外国人講師とTeamTeaching）が2006年にスタートした。児童英語の実践に明るい入江潤が小学校の英語を創成発展させ、新たに加わった工藤圭輔が中学校でオールイングリッシュの授業を導入して、音声重視の授業が始まった。中学校の実践で言えば、これまでの明星の文法を土台にするも、英語の「しくみ」への気づきを音声活動で導入・展開し、「わかったこと」としてまとめる一連の流れを作る方向へと改革が進んだ。

3) 新たな時代に向けての英語教育改革 工藤 圭輔

私が明星学園中学校に着任したのは2005年、今から20年近くも前になる。この間、明星学園中学校の英語教育は大きく変容してきた。ここでは、自分が見てきた、あるいは関わってきたその英語教育の変容について書いていきたい。

2005年当時、中学校の英語教育は宮城教育大学の文法教育の影響を色濃く受けていた。そこでは一般的な公教育で使われているものとは違う考え方・視点・用語が用いられ、生徒たちに英語という言語の「仕組み」を構造的に教えることに主眼が置かれていた。「なんとなく学んだ」ではなく、自分たちで考え「なぜそうなるのか」ということをきちんと学び教えあう、明星の教育の根幹に当たる部分である。しかしながら、視点や用語が違うということが明星の高校への進学も含め外の世界に出た際の生徒たちの学びの足かせになってしまうという問題点があるのも事実であった。また当時の中学校の英語の授業ではいわゆる「音声活動」や「コミュニケーション活動」というものが不足しているという問題点もあった。この2つの問題点を解決していきつつも、それまでに行っていた英語教育の良さも残していきたい。その思いから徐々に中学校英語教育の改革が始まった。

改革を進めていく中で幾度となく行った教科会。その中でまず確認したのは、「何を一番大事な中心の部分に位置づけるか」ということだった。答えは明確だった。「生徒たちに英語の仕組みを教える」ことだ。そのことを根幹に置きつつ、それ以外のことは柔軟に変えていくことで問題点を解決していこうとした。

まずは「授業の中で教員が英語を話す機会を増やす」ということと、「生徒たちが英語を発話する機会を増やす」という2つのことから始まった。必ずしも授業のすべてを英語で行う必要はないが、教員がほとんど英語を話さなければ必然的に生徒たちはほとんど英語を聞くこともなく、結果として英語を話す機会も持たないことになってしまう。だからこそスタッフで知恵を出し合いながら、授業の中で「どのような」英語を「どのように」話していくかということ、そしてどのような活動を通して生徒たちに英語を発話させるかということについての研究を進め実践へと繋げていった。

次に着手したのはカリキュラムの見直しだった。前述のように、それまでの明星の中学校英語教育では、一般的な公教育とは少し違う視点、切り取り方や用語を用いている部分があった。そしてその点が生徒たちを混乱させたり、あるいは明星の高校も含め外部から批判を受けてしまったりする要因にもなっていた。その点を改善しなくてはと検討を進めていたタイミングで中高の間での人事交流が発表された。

2007年度に行われた人事交流において中学校から1名高校へ、高校から1名中学へと異動をすることになり、当然中学校に異動してきた教員からすればそれまでの中学校の教え方については深い知識がある訳ではなかった。ではその教員はどのように授業を展開すべきなのだろうか。ある意味では問題が起きかねない状況である。仮に中学校に異動をしてきた教員が公立学校で使われている検定教科書を使い、授業を行っていけばどうなるだろう。明星学園という学校に小学校や中学校から子どもを入学させた保護者からすれば、「公立学校と同じ授業をされるのであれば、明星学園に入れた意味は何なのか」という気持ちが強くある。それは保護者の方々と話をしている中でも常に強く感じてきたことだ。たんに「公立学校と違うこと」をすればいいという訳ではない。しかしほぼ同じことをしてしまっただけでは批判は避けられない。仕方がない、それが私立学校というものだ。ではどうするべきか。自分たちは逆にこの状況を好機と捉え、急ピッチでカリキュラムの見直しを進めることにした。前述のように、一番大事な中心の部分はぶれていかないようにしつつ、変えてもその根幹を維持できるものについては積極的に変更をしていった。そうすることで「明星学園中学校英語科が大事にしたいこと」は変えることなく、用語等を一般的なものと共通のものへと変更をし、すり合わせを行うことができた。もちろんそれは異動してきた教員だけでなく、中学校の英語科全体での変更を持っていくことが主眼である。結果として、徐々に高校に進学した生徒や塾など外部で勉強をする生徒たちが「用語や教え方が全然違う」という問題に直面することを減らすことに向けて大きな一歩を踏み出すことができた。

4) 独自教科書の発行

このようにカリキュラムの見直しを行っていく中で、さらに大きな変革を行う可能性が見えてきた。それは「明星学園中学校独自教科書」の作成である。それまでの中学校英語科では、各教員が自作のプリント教材で授業を展開していた。しかし、多くの生徒たちはプリントを管理できずなくしてしまったり、欠席した際のプリントをもらわないまま終わってしまったりと、問題点も

あった。もちろんそれぞれの教員の負担も大きく、結果としてさらに生徒たちの力をつけるため練習問題を増やしていくということもなかなか難しい状況が続いていた。かと言って一般的に使われている問題集等の教材を使おうにも、カリキュラム変更前は学んでいる事柄や順序も違ったため、なかなか活用できずにいた。そこでそういった問題を解決するためにも明星学園中学校独自の教科書を作成することにしたのだ。2007年度、それまで作成していたプリント教材を基盤に、教科書作成を開始し、2008年度から『Myojo English Textbook』の使用を開始した。決して簡単な作業ではなかったが、その成果は大きく、前述の問題のほとんどは解決することができた。

こうしていくつかの改革を進めていく中で、私立学校である以上当然のことながらその是非を世に問うていく必要性が出てくる。しかもその「世に問う」というのは、同じ方向性の考え方をしている人間が集まって行うという性質のものではなく、多種多様な意見が聞ける場でなくてはならない。そこで公開研究会という場を使い、世の英語教育界の中で活躍をされている先生方を講師に招き、自分たちの授業や考え方に対し忌憚のない意見を頂く。これを毎年行うことで「世に問う」ていくことにした。違う方面で活躍されている先生方に毎年授業を見て頂くというのは、非常にエキサイティングな経験であり、その中で本当に多くのことを学ぶことができた。特に上智大学の吉田研作先生、和泉伸一先生にご教授頂いたCLIL（Content and Language Integrated Learning＝内容言語統合型学習）の考え方は、中学校の英語の授業の在り方を大きく変えたと言っても過言ではない。それまでの授業でも前述のように「教員が英語を話す」「生徒たちにも英語を発話させる」という流れはあったが、それでは単に「話している」だけになってしまう可能性もある。しかし従来の「英語を学ぶ」授業ではなく、CLILを取り入れた「英語で学ぶ」ことを通して「英語を学ぶ」という考え方の導入により、いわゆる4技能（聞く、話す、読む、書く）を相互にリンクさせながら学習を進めることができるようになった。

5) 2010年代半ば以降の中学校英語科

このような変遷を経て、2010年代半ば頃から、中学校の英語科では以下の流れを作って授業を行い始めた。

① ティーチャートークによる新しい文法・表現の導入

……教員は英語で生徒とコミュニケーションを取りながら、新しい文法・表現を使い提示していく

② なんとなくの理解

……生徒たちはこの時点では教員の話している英語を「なんとなく分かるだけでよい

③ 新しい文法・表現の口頭での実践

……生徒たちが実際に新しい文法・表現を使って英語を発話する場を持つ

④ 新しい文法・表現の気づき

……自分たちが聞いた・発話した英語の中に新しい文法・表現があることに気づかせる

⑤ 考える・議論する

……新しい文法・表現がどういった意味で、どのように使われているのかを考えさせ、生徒同士で話し合わせる

⑥ 仕組みの理解

……考えることや議論することを経て気づいたことを踏まえて、新しい文法・表現の仕組みを確認し理解させる

⑦ 習熟と定着

……練習問題や宿題を課し、「学んで分かった」ことを「できる」ことに繋げていく

もちろんこういった流れで授業を行っていく上でもさまざまな課題に直面してきた。教員が英語を実際に使って生徒たちに提示していくためには、当然「どのような英語」を「どのように提示」するかを追求していかななくてはならない。生徒たちに考えさせ議論させていくためには、単に新しい文法・表現を見せて「考えてごらん」と言っても上手くは進まない。そこをどう工夫して提示していくかも大切なのだ。そしてどのように練習させるかということも、生徒たちに実際に力をつけさせていく上では重要な要素なのである。中学校英語科では教科会を持ちながら、そして小学校や高校の教員たちともコミュニケーションを取りながらこういった課題に対して研究を重ねてきた。そして小中高で学んだ生徒たちが力をつけ、自信を育んでいくことができるよう、当然これからも同様に研究を重ね研鑽を積みながらより良い英語教育を作り上げていきたいと考えている。

〈高等学校 英語科〉 大石 晶子

1) 私と明星学園の出会い

私は2006年に明星学園に入職した。国際基督教大学（ICU）高校を卒業し「将来は英語教師になりたい、できるならICUのような自由な校風の学校で教えたい」という希望を持っていた私は、大学在学中の2003年に初めて明星学園を知り、自分の思い描いていた理想の学校がこんなに身近にあったことに驚いた。絶対に受かりたい、その一心で臨んだ大学4年生の時の採用試験では、惜しくも不合格。後に聞いたところによると最後の候補2名までに残っていたそうだが、その時はもう一人（偶然にもICU高校卒）の方が選ばれた。

当時は就職氷河期とも評されていた時代で、今と違って求職者が多く、大学卒業間際まで就職先が決まらないということもよくあった。教員になりたいという気持ちを抱きつつも、私は一般企業も受けることにし、幼い頃から身近であった空港での仕事に興味を持ち、JALの地上係員（グランドスタッフ）としての内定を得た。明星学園からの不採用の通知にはたいへん落胆したが、「将来の生徒のために遠回りして、いつかは教員になるぞ」と心に決めた。そして教員になる夢を一旦置き、JALの地上係員として成田空港で働くことになった。

地上係員として働く日々はとても楽しく、一本の飛行機が無事に出発するまでにどれだけ多くの人の努力とチームワークの上に成り立っているかを学ぶことができた。上司からは「このまま将来へ向けて頑張ってほしい」とも期待されたのだが、私の中では明星学園の教員になるという夢も抱き続けていた。しかし私立学校では毎年採用があるわけではない。日々の業務も充実感を持って働きながら「このままJALで働いていくことになるのかな……」と思っていたある日、明星学園で英語科教諭の採用があるというニュースが！この機会を絶対に逃してはならないと奮起し、その年の採用試験に無事に合格することができた。

前置きがだいぶ長くなってしまったが、私は長年の英語教員になりたいという夢を叶えただけでなく、自分がいちばん入りたいと思っていた学校で教員になることができたのだ。そしてこの気持ちは、18年目を迎えた今でも変わることなく続いている。

2) 高校の授業についてご紹介

高校の授業を語る上でまず外すことができないのは、授業の種類の豊富さであろう。

まず10年生では必修の「英語コミュニケーションⅠ」と「論理表現Ⅰ」のみだが、11年生では必

修の「英語コミュニケーションⅡ」に加えて、必修選択として「論理表現Ⅱ」を置き、自由選択授業として長文理解を重点的に学ぶ「読解演習Ⅰ」、英文法の理解を深め演習を重ねる「文法演習Ⅰ」がある。12年生になると必修の「英語コミュニケーションⅢ」に加え、選択授業はさらに幅が広がる。大学受験へ向けての演習科目として、「読解演習Ⅱ」と「文法演習Ⅱ」に加え、英語の基礎を学び直しつつ表現活動やリーディングをカバーする英語学習へのリベンジ学習的位置づけの「論理表現Ⅲ」、世界の旬のテーマを扱いながら必修とはまた違った角度で英語に向き合うことのできる「時事英語」、ネイティブの教員によるオールイングリッシュで日常会話だけでなくさまざまな場面での言い回しを学びながらスピーキング能力を鍛え、またリーディング力とライティング力をも育成する「英会話」の授業がある。また11年生と12年生が共に学ぶ、ノングレードの「リスニング」という授業もある。

3) なぜこんなに授業の種類が多いのか

こうした説明をすると、明星学園では高校生になるとずいぶん英語の授業の種類が多いと思われるのではないだろうか？ 全ての必修・選択を合わせて全13種類も授業が設定されている。さらには複数のコースが展開されている授業も多く、高校の英語科全体では教員が14名も所属している（2023年度）。もし、この文章を読んだ方に「この授業を選択したら楽しそうだ」と思ってもらえたなら、それはとても嬉しいことだ。私たち高校英語科では、生徒にとってニーズのある授業を提供したい、と日々話し合っている。

明星学園は多様な生徒が集まる学校で、またその生徒たち一人ひとりが独立した個性を持つ人間であり、ゆえに将来の目標がさまざまであり、得たい英語の技能が異なると理解しているからこそ、このように授業科目が増えていったのだ。大学受験を目指したい生徒、英語が得意ではないけれど使えるようになりたい生徒、将来海外へ留学したい生徒、読解力／文法力／リスニング力を強めたい生徒……生徒それぞれの興味・関心が異なるのは明星学園だからこそ、よりはっきりしているのかもしれない。さらに各授業において、生徒のレベルにマッチしているか？ 近年の生徒の求めるニーズに合っているか？ ということを高校英語科では毎年話し合っている。英語科として付けさせたい力の到達目標を設定しつつも、それが実際の生徒たちとの間で乖離が起きていないかを定例の教科会で報告し合い、授業の中で気づいた点についても共有し合っている。毎年同じ科目の授業であっても、実は水面下では微細な更新やその年のニーズに合わせた形への修正を行っている。議論し、必要であれば新しい授業科目が誕生することもある。このように教員同士がフラットに話し合い、お互いの実践についてシェアしながら英語科全体で前進できることも明星学園の校風ならではの感じている。

4) 教室と社会を繋げる

私自身は英語科の選択授業の中では「リスニング」を長年担当している。海外で出版されたテキストブックを用いて、日本の教科書ではなかなか出会わない表現を多く学びながら、リスニング力を付けられるように授業を展開している。その中で、私が毎年行っている特別授業を、一つ紹介したい。

日々の授業ではリスニング力の育成に重きを置いているが、その教科書の中で“Airport”というレッスンがあり、その時には前述した私の前職のJALグランドスタッフ時代の経験を存分に活

かした特別授業を行っている。

教科書に出てくる空港で使われるフレージングを解説したり、実際の空港での搭乗手続きをシミュレートしたり。ハイライトは実際のJALの空港アナウンスをもじった「Myojo Airlines」という架空の航空会社の英語の搭乗手続きご案内アナウンスを練習して読み上げるアクティビティである。本物の元JALグランドスタッフ（＝私）からリアルで本気のアナウンスを聞き指導を受け、生徒たちは毎年楽しそうに練習をして発表をしてくれる。教室の中が一気に空港ターミナルに早変わりする瞬間だ。それぞれ声のトーン、間の開け方、スピード、イントネーションの付け方に細心の注意を傾けながら丁寧にアナウンスをしていく。良いアナウンスをするには適切に読解する力、文章全体を見通す力、そしてもちろん聞く力が必要である。全ての学びが発表に繋がっているのだ。発表を通して、生徒たちは英語という他言語を通して自分の持ち得る力を外に伝える機会を得る。それは社会でも必要なスキルであると考えている。このように、生徒たちの教室と社会を繋げる機会をどれだけ多く持てるか、それは生徒の学ぶ意味にも繋がると信じている。

5) 最後に

ここで紹介したように、高校英語科では生徒たちの多様な進路に向けて、生徒に寄り添いながら各授業を設定し、実施している。数多くの種類の授業があり、その数だけ授業者や英語科としてのねらい、付けさせたい英語の技能、意図や思いがある。

この次の10年、50年、100年後には、またその時の生徒に合わせて授業が展開されていくのだろう。それは私たち明星学園の高校英語科としての共有した思いであり、目標である。私自身も未来になったその時に、どのような授業科目が設定されているのかを見るのを楽しみにしている。

生活科（高等学校）

明星学園高等学校の「生活科」は、一般的に実践されている「家庭科」とは一線を画す独自の教科として1975年（昭和50）に開始された。明星学園でもそれ以前は男女別の家庭科・技術科の授業が行われていたが、教科担当の大平初枝教諭は、女子のみが裁縫・料理・手芸・道徳などを学ぶ家庭科の授業に疑問を抱き、より社会的な問題を男女共修で学ぶ教科として「生活科」を立ち上げた。全国的には、1993年（平成5）に中学校で、1994年（平成6）に高校で家庭科の男女必修化が実施された。明星学園では全国に先駆け男女共修を実現し、10年生（高校1年生）の必修教科として週2時間の枠で、家族史、家庭に関する法律、保育・教育に関する諸問題、家庭経済・消費者問題など、性別にかかわらず社会の中で生きていくために必要な事柄を、歴史を踏まえて学ぶ教科として実践してきた。大平の実践を中谷ゆう子が繋ぎ、現在に引き継がれている。

▶▶本誌P.225 参照

「生活科」とは 鈴木 侑希^{ゆうき}

本校の「生活科」は一般にいう「家庭科」であるが、内容には本校の独自性を持たせている。

一般的に「家庭科」と聞いてイメージされるのは料理・裁縫であろうが、それ以外にも衣・食・住・消費・環境・家族・家庭生活など、生活全般に関するさまざまな領域を扱う。現在、10年生

の必修授業では、ライフコース、相続、リベンジポルノやデートDVなどの性被害、キャッシュレス決済、ひとり暮らしの家探し、インテリアコーディネートなどの内容も取り扱っている。

◆自分らしく生き抜く

現在の日本では単身世帯がいちばん多い。その要因は多岐にわたるが、それぞれが自分ひとりで生活していける力を身につけることは大切である。そのうえで家族とは、結婚とは何かということも授業のなかで生徒に問いかけ、事実婚や無国籍児の問題などにも触れている。生活の中で問題や課題にぶつかったとき、正しい一つの答えが出ない場合の方が多い。最適な答えを見つけるためにはどのような知識や技術を身につけたらよいのか。困難に立ち向かい自分らしく生き抜くために、個が自立し、生活力や生きる力を共にシェアし、互いの関係性を築く努力が求められる。

生活科は「家の中のこと」だけでなく、生活とそれを取り巻く社会をつなげて、今の生活の自立から将来の生活へとつなげる教科である。生徒にとって人生の基盤は家庭にあり、自分の家庭、育ってきた環境が「普通」だと思いがちだ。自分の経験とは異なるさまざまな生き方、家族、子育て、家庭生活のあり方を知り、共有する機会はなかなかない。家庭という『私的な領域』を教育で学ぶことには大きな意義がある。

◆10年生必修授業「生活（家庭基礎）」

10年生の「生活」では、自立して生活するために必要な基礎的な技術・知識を学び、主体的に生活を楽しみ、人と関わり合いながら共に生きる力を身につけることを目的としている。

【1学期】家族・家庭生活（家族）、衣生活

青年期を生きる、現代の家族、家庭生活の成り立ち、家族と法律、エプロン製作、衣服の手入れ・管理、自分に似合う色探し、食中毒予防、調理実習（とうふ白玉）、結婚相手（パートナー）はどんな人？ 人生すごろく ★夏休みの課題…「ホームプロジェクト」

【2学期】食生活、家族・家庭生活（子ども・高齢者・共生社会）

ホームプロジェクト発表会、食品と栄養素、調理の基礎、食品の選択、献立作成、調理実習（ピザ、タコライス、みそ玉）、赤ちゃん人形を抱く体験、子どもの発達、子どもの遊び、子どもの生活、子育て環境、絵本の読み聞かせ体験、高齢期の生活、支え合う社会 ★冬休みの課題…「生命の誕生インタビュー」または「幼児の観察」

【3学期】消費生活・環境、住生活

冬休みの課題の共有、調理実習（和食献立）、18歳成人、消費者トラブル（クレジットカード、多重債務、悪質商法）、ライフプラン、資産形成、一人暮らしの家探し、インテリアコーディネート

週1回（2時間続き）、1年間の授業でさまざまな領域を扱うため、試行錯誤しながら実習、座学、体験学習、グループワークを取り入れている。授業の一部を紹介する。

「結婚相手（パートナー）はどんな人？」は、「性格」「顔、スタイル」「収入」など、パートナーに求める条件を出し合って投票し、自分やクラスメイトの考えを共有する授業である。人気項目はクラスによってさまざま。パートナーとなる人の選択は、人生に対する考え方と関連している。

「人生すごろく」は、大学合格、留年、就職、リストラ、結婚、離婚などさまざまなライフイベ

ントを盛り込んだすごろくをグループごとに作り、実際に遊ぶ。人生には自力で達成したいこと、自分の力では避けられないこと、自然、偶然に起こることなどがあり、分岐点もある。ゲームを通じて、人生に対する自分自身の能動的視点や受動的視点、生活設計の多様性に気づいてほしい。

「食品表示」の授業では、グループ対抗で食品表示から食品を当てる、“食品当てゲーム”を行っている。普段の生活で食品表示をじっくりと見る機会はなかなかない。改めて食品表示を知るきっかけとなり、食品を選択する際の助けになればと思う。

「子ども」の授業では新生児の赤ちゃん人形（約3kg）を抱く体験を行っている。本当の赤ちゃんを抱いたことのない生徒も多く、重さや首がすわっていないことに驚く。またグループ毎に絵本の読み聞かせ体験も行っている。

エプロン製作

1学期の調理実習の前に手縫いでエプロン作りを行う（半縫製済みエプロンを使用）。自分で選んだ生地を使い、ポケット付け、裾縫いの体験を通して手縫いの基礎（ボタン付け、なみ縫い、本返し縫い、まつり縫い）を学ぶ。裁縫は苦手だという生徒もいるが、完成したときには嬉しそうな顔を見せてくれる。被服製作は達成感も大切だ。一人暮らしの学生や社会人の中にはシャツのボタンが取れたら捨てる人もいう。服を家庭で作っていた時代から、既製品を購入する時代へと移り変わり、家庭科の授業で扱う被服製作の内容も変わってきた。ボタンが取れたとき、スカートやズボンの裾がほつれた時、自分で縫うことができる基礎的な技術を身につけてほしい、縫うことへの苦手意識を少しでも無くして欲しい、という思いで手縫いを授業に取り入れている。

調理実習

調理実習は現在年4回行っているが、毎年もっと増やしてほしいと熱望される。できるだけ全員が調理に携われ、難易度が徐々に増すよう試行錯誤しながらメニューを考えている。

1回目、「とうふ白玉（1時間）」は前の時間に食中毒の動画を見てから作るの、生徒たちは自主的にしっかりとハンドソープで手を洗い、実習が始まる。計量した白玉粉と豆腐をこねて茹で、黒蜜ときな粉で食べる包丁を使わない簡単なメニューだが、調理の楽しさを感じてもらえらるとともに、食品衛生についても学ぶ内容である。

2回目、「ピザ（2時間）」。一人1枚、材料をこねて発酵させて伸ばし、オーブンで焼く。

3回目、「タコライスとみそ玉のみそ汁（2時間）」では材料のみじん切り、千切り、角切りを体験する。五大栄養素（炭水化物、脂質、たんぱく質、無機質、ビタミン）が取れるメニューであり、食事の栄養バランスを意識することも学ぶ。

4回目、「魚の照り焼き、ほうれん草のおひたし、すまし汁（1時間）」。数品目のメニューを手際よくつくるために班員の協力が必要であり、和食の良さを知る機会でもある。

一人暮らしをした時にも役立つ、「自分でも作れそう」「家でも作ってみよう」と思われるような調理実習にしたいと考えている。今後も生徒の様子を観察しながら、メニューを試行していきたい。

長期休みの課題

夏休みの課題「ホームプロジェクト」、冬休みの課題「生命の誕生インタビュー」「幼児の観察」は、生活科の発展的学習である。『ホームプロジェクト』のポイントは、「See → Plan → Do → See」。

自分の家庭の家事分担に問題があれば（See）、誰に負担が偏っているのか、何が問題なのか考え、調べ、原因を探り、改善するための計画を立てて（Plan）、実践する（Do）。そして、その後の経過観察を経て（See）、また改善する。これがホームプロジェクトである。夏休み明け最初の授業で、一人2分間の発表会を行なう。「ピーマン人気者計画」「スマホを5日間使わない生活」「猫の避難訓練」などテーマはさまざま。発表はどのクラスでも真剣に聞かれ、生徒たちにとって生活をより良くする新たな発見の機会となっている。

『生命の誕生インタビュー』『幼児の観察』は、どちらかを選択して行う。『生命の誕生インタビュー』は子どもを持つ親に生命の誕生前後の気持ちや様子をインタビューしてまとめ、『幼児の観察』は就学前の子どもを客観的に観察してまとめる。冬休み明け最初の授業で内容を共有し合っている。自分の親や親戚にインタビューを行う生徒、初詣に行った際に親子に声をかけ、インタビューを行った生徒もいる。出産にまつわるエピソードや、子育て中の事件などさまざまなエピソードが集まる。「命は大切」とただ言われるよりも、さまざまな人の生命の誕生エピソードを知ること、生命の尊さ、自分自身も沢山の愛情で育ててもらってきたことを改めて感じるができる。

◆終わりに

自分次第で生活はもっと豊かになる。授業を通し自分の生活に関心をもち、学んだことを実生活に取り入れて欲しいと思っている。生活科は、教師も生徒も今の生活と将来の生活を見つめる姿勢が常に問われ、一緒に「生活をつくる」教科である。今後も生徒と共に学び続け、先生方、助手の方たちと共に明星学園の生活科を継承していきたい。

体育科

本校元体育科教諭の根本美愛は、戦後から現在に至る明星学園の体育科教育を次のように振り返る。

明星学園の体育科は、1950年代後半にはじまった「教育内容の現代化運動」の中で、民間教育団体と手を組み、さまざまな科学的系統的な授業の研究を行ってきた。

1970年代に入ると遠藤豊校長・無着成恭教頭体制のもと「科学と芸術」の2本柱が強調され、音楽における合唱や体育における民舞といった表現活動の指導は明星学園の柱のような存在となっていた。

しかし、1984年遠藤・無着体制が終わり、依田好照校長の新体制に変わったのを境に研究方法が変わっていった。遠藤・無着体制の後期では、民舞やマット運動などの表現活動が中心であったが、当時の明星学園では公開研究会に多くの参加者が集まり盛大に研究会を行ってきたものの、民舞は限りなく模倣に近い点や、工夫して表現を変えにくい点、学んだことを次に発展させていくことがなかなか難しい点、などから次第に指導上の行き詰まりを感じるようになっていた。

その反省から、84年以降の小・中学校の体育の授業は、表現活動を主流にしたものから科学的系統的な学習へと再び大きく変化していった。民舞やマット運動という表現教材だけでなく、球技や陸上といったスポーツ教材が導入されるようになっていった。スポーツを教材として取り入れた

のは、根本美愛・河住貴夫・剛力正和・熊坂衛の4名で、現在の明星の体育科教育の基盤作りがこのとき始まった。

そこへ荒木豊氏（元・山梨大学教授）を招聘し、「技術をどう教えていくのか」「科学的系統主義の考えを教育の中でどう推進していくのか」を教科の中心に置いて体育の研究が開始された。その約10年後に森村卓、さらに翌年石井三絵が加わり、現在の研究体制となった。

1984年以降の明星学園の教科教育は、科学的系統主義教育の流れを組み、各教科「学問や芸術など諸文化の科学的な概念や法則を教える」ことを中核に置いてきた。教科教育の一つである体育においても伝統的な「習うより慣れろ」といった鍛錬主義ではなく、「スポーツの持つ科学」をどう伝えていくのか？それが体育科教育の中核になっていった。

そして「スポーツの持つ科学」をそのまま教えるのではなく、子どもたちが「わかり」「できる」「わかち合って伝える」ことができるような順番（系統性）を考えていくこと、つまり科学的系統的指導を考えていくこと、これが研究の中心になっていった。

さらには、それをお互いにわかち合って伝え合い、相互に伸びていく集団作りとして、「グループ学習」を学習方法の中核におき、「わかり・できる・わかち合って伝える」集団作りを目指していった。

1984年以降、週1回の教科会では毎回夜の10時過ぎまで、夏季の教科合宿では毎日夜を徹して、「科学的系統的指導」と「グループ学習の指導」の2つを徹底的に研究していった。

このような体育科教育の研究が始まったきっかけは、当時理科教諭であった山本豊の「体育の授業は、授業になっていない」という一言からであった。純粋に体育科教員は大きな衝撃と同時に刺激をもらったのだ。「理科の授業と体育の授業の違い」は何か？理科で言う「科学の体系をベースに子どもたちがわかりやすいように学習の順次性を作っていく」という、この時の「科学の体系」とは、「体育ではそれが何にあたるのか？」ということを考えることから出発しなければならなかった。自然科学と違い、スポーツの世界の科学性ははるかに遅れをとっていた。我々は、日本のスポーツ界の先陣を進むつもりで、「スポーツのもつ科学性」を明らかにしようと試みていった。その柱となったのが以下の2つの考え方である。

1つは、2001年の研究会において、当時武蔵野美術大学教授であった伊藤高弘氏の「運動文化の時空間論の概念」を導入し、スポーツのもつ科学性の解明へと向かった。スポーツや運動文化のもつ時空間論を明らかにしていく作業が始まったのだ。

2つめは、この「時空間論」と共に、明星学園の体育の指導の中核を成した「技術論」であった。「技術とは何か？」に対して明確な回答をもっていなければ技術のもつ科学性を伝えていくことができない。当時技術論は、マルクス主義の技術論や現象学の技術論など複数語られていたが、明星学園では物理学者武谷三男^{たけやにみつお}氏の説く技術論を技術指導の根幹に置いた。武谷氏のいう技術論とは「技術とは、人間実践における客観的法則性の目的意識的適用」(弁証法の諸問題)というものであった。「客観的法則性の目的意識的適応」ということを重点課題として、学校教育の対象は「習うより慣れろ」の精神主義ではなく、科学的概念や法則を伝えていくことと捉える、つまりは技能のような個人の能力ではなく、「再現性を持ち、誰もがそれに近い結果をもたらすことができること」を目指すことだと捉えると、明星学園の教科教育にみごとに合致したのである。

この武谷氏の「客観的法則性の目的意識的適応」という技術論は、「こうしたらこうなるだろう・こうすればこうなるだろうということ（客観的法則性）」を個人の技能レベルから、誰でも伝達可

能な技術へと発展させるものであり、これこそ体育の授業で教えていく中身であろうと捉えた。

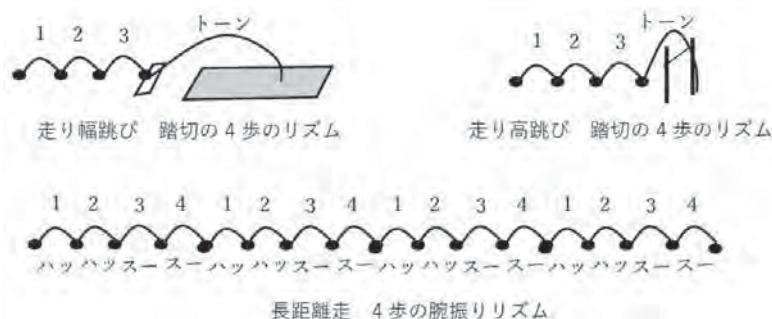
以後、明星学園体育科は、伊藤高弘氏の「時空間論」と武谷三男氏の「技術論」を基に、まず理科で言う「科学の体系」にあたる、各スポーツの「技術の体系」を明らかにし、次に子どもたちが「わかり・できる・わかち合って伝える」ことができるような系統性を明らかにしていくことが課題となった。

スポーツ教材として、まず研究を始めたのは、球技と陸上（ハンドボールとハードル走）。特に、ハードル走の歩幅と制御に関わる研究で、体育科の研究体制は大幅に飛躍していった。

例えば、陸上競技では最初の教材をハードル走におく。これは、1・2・3・トーン（跳ねる・跳ぶ）の4歩のリズムを一定に繰り返すことを最初に学んでいくのである。



1・2・3・トーンのリズムを繰り返す間に、腰の回転が左右交互に2回転おき、左右交互のキックによって4つのストライド（歩幅）が生まれる。実は、左右交互のキックによって4つストライドが生まれることが、陸上運動のすべての基本なのである。



走り幅跳び・走り高跳び・長距離走、すべて最後に現れる1・2・3・トーンの身体制御によって、遠くへ跳ぶ、高く跳ぶ、遠くへ投げる、早く走る、つまり「より速く、より高く、より遠くへ」という制御は、すべてハードルで学習する1・2・3・トーンの4歩のリズムからはじまる。

同様に球技では、「コンビネーションからのシュート」という技術を教えていくのだが、授業では最初に日常使っている空間に近いハンドボールから学習する。ついで、頭より上の時空間が問題になるバスケットボールを扱い、さらに「はじく」や「ける」という日常生活に無い動作が入るバレーボールやサッカーは、ハンドボールで「コンビネーションからのシュート」を学んだ後に学習する。

このように、明星学園のいう「子ども中心主義」とは、子どもたちにとってどんな教材をどんな順に、どんな方法で学ばせるのがいいか、常に子どもたちに寄り添って考えていくことを意味している。

〈小学校 体育科〉 剛力 正和

遠藤豊校長から依田好照校長になった3年目、私は小学校の体育専科として採用された。その私が4年生に3回目のハンドボールの授業をした時のことである。授業が終わると3人の女子から次の質問を受けた。「先生、なぜ体育の授業を受けなければならないのですか」。

体育はいちばん人気の教科である。3人も体育の授業を楽しみにしていた。しかし私が用意したハンドボールのゲームは、「正式ルールに基づいた7人対7人のゲーム」であり、3人は1回目も2回目も、そして3回目もボールに触れることなく授業を終えていたのである。

当時、ハンドボールなので7人対7人のゲームが当たり前と思い込んでいた。

ゲームの人数をフィールド上3人対3人にし、基礎から系統的に指導すれば、全ての子どもが確実に技術を習得し、各種目の持つ本当の面白さを味わうことができるということを知ったのは、この3人から質問を受けた後のことであった。

体育科だけに限らず、教科教育全体が長い間問題にしてきた「教材を（wo）教えるのか」「教材で（de）教えるのか」という課題がある。つまり、「ハンドボールを（wo）教えるのか」「ハンドボールで（de）教えるのか」という、「学習内容」と「教材」が一致してしまう現象に、我々も長い間苦しめられてきた。「を（wo）」と「で（de）」で一字違いであるが、授業にすると180度違ってくる。

例えば、「ハンドボールを（wo）教える」となると、小学校4年生だろうと、高校生だろうと、キーパー1人に対してフィールドに6人がいて、決められたフィールドの中で6人対6人で得点を争うスポーツを教えていくことになる。つまり、「学習内容＝ハンドボール 教材＝ハンドボール」である。

これでは、運動が得意な子とそうでない子では差がついてしまうため、一度もボールに触れない子が出てしまう。

それに対して、「ハンドボールで（de）教える」となると、「2人のコンビネーションからのシュート」という学習内容を、ハンドボールという教材で教えていくことになる。つまり、「学習内容＝2人のコンビネーションからのシュート 教材＝ハンドボール」となるのである。

この場合、2人でコンビネーションを組むので、必ずボールに触ってシュートまでもっていく技術を全員が習得することができる。

私自身体育専科にはなったものの、何をどう教えれば良いかわからなかった。そこで中学の体育科と一緒に研究に参加するなかで、カリキュラムの整備を行った。カリキュラムを整備する上で必要とされたのがこの「学習内容」と「教材」の区別である。それまでは、最初の女子に質問される事態になってしまったように「学習内容＝ハンドボール、教材＝ハンドボール」という混同をしていたのだ。

学習内容と教材を区別すると、子どもたちの発達・認識に応じて教材を精選し体系的に指導することができるようになっていった。それぞれのスポーツのもつ「文化特質」を「教材で」教えるようになったのである。

陸上なら陸上のもつ特質を、ハードルや走り高跳びという教材で教えていく。球技なら球技のもつ特質をハンドボールやバスケットボールという教材を使って教えていく。このように、学習内容と教材を区別することによって、何年生でどの教材を扱うかを考えることが飛躍的に進化していった。

教材を精選・体系化する上では、「技術」の捉え方も重要であった。技術を「身体の制御・表現」という側面に着目して捉えた場合、「個々の種目は異なる技術で成り立っている」ことになる。それに対し「技術」の捉え方を前述のように「時空間論」に置けば、「同一領域（球技という領域、陸上という領域）は同じ技術で成り立っている」となる。この二つの捉え方はとても重要で、同じ陸上や球技の中では、大きな時空間論で言えば一緒になる。だから陸上運動、球技運動という同じ領域で捉えられるのだ。同じ領域でも、種目の違いによって、時空間の使い方、身体の制御に特性が表れてくる。だからこそ、同じ領域の技術をもつ、陸上運動、球技運動でも多様な種目を教材として学ばせることで、さまざまな時空間の使い方、身体制御の仕方を学び、より自由な存在になっていくのである。

例えば、4年生では2人のコンビネーションからのシュートという学習内容をハンドボールで学び、5年生で同じ2人のコンビネーションからのシュートをサッカーで学ぶ、6年生では3人のコンビネーションからのシュートを、バスケットとハンドボールで学ぶというように、どの学年でどの教材を使って学習内容を教えていくかが子どもたちの発達段階に即して幅広く考えられるようになったのである。

さらに、「客観的法則性の意識的適用」という立場で技術を捉えれば、「ボール運動固有の時空間（コンビネーションからのシュート）は『おとり』による『場所と場所の使い分け』といった法則性の上に成り立ち、その適用の違いが技術の質的違いとして表れる」ことが「わかり」「できる」ようになり、「わかち合って伝える」こともできるようになる。適用の違いによる技術の質的高まりは、2人のコンビネーションからのシュート＝「二つの場所の使い分け（2人の攻め）」→3人のコンビネーションからのシュート＝「三つの場所の使い分け、時間差」→4人のコンビネーションからのシュート＝「面と面の使い分け」と技術を構造化することができ、基礎（球技では2人のコンビネーションからのシュート）から系統的に学習を進める中で、認識と身体表現の質が高められていくのである。

陸上運動・球技運動に始まった研究は、器械運動等にも広がり、統一した視点で全体カリキュラムを整備することができた。子どもたちの「わかり」「できる」「わかち合って伝える」を保障したことで、「なぜ体育の授業を受けなければならないのか」という質問にも答えられるものになったと自負しているが、本当にそうになっているかどうかを今後も常に検証し、より確かで豊かなものに高めてもらいたい。

〈中学校 体育科〉 石井 三絵

現在、明星学園中学校では、大きな単位として、1.陸上運動、2.球技運動、3.器械運動の三つの柱で授業を構成している。本校の確立期にあたる7・8年次に何をどう教えていくかは、スポーツや運動文化の特質を伝えていく上で、かなり重要な2年間であると捉えている。

授業形態としては、「異質の個が集団を形成する・同じ目標・目的を持って成長していく」ために、グループを中心に課題を解決していくグループ学習を行っていて、特に7・8年次には積極的に取り入れている。それは、確立期の7・8年次は、子どもたちの学習が人間関係に多分に左右されてしまうことがあり、授業というものが主観的・感情的なものになりやすくなってしまうことが多々あるからだ。クラスの全ての子どもたちに、諸文化の概念や法則を伝えていくのに、客観性・

論理性が失われることがあってはならないのである。体育の教材を通して、お互いに意見を出し合って、課題を超えてお互いを変化させていく。中学時代の難しい友だち関係をも乗り越え、課題という対象にグループで向かうことで新しい世界の広がりを感じ、達成感を一人ひとりの自信に変え、今までの自分が変わっていくことを楽しみ、自己肯定感を持てるようにしたい。そんな成長を促していきたいと考えている。

教材の配置としては、7年次は、平面的な構成を学ぶことに主眼を置いている。8年次では平面から立体的な構成をどう学習していくかを中核に置き、9年次では7・8年で学んだことを基礎としてさらに専門的な世界への一步を踏み出すと同時に、高校生活への接続も視野に入れて配置している。

例えば、球技ではより日常の空間に近いハンドボールから入り、より立体的になっていくバスケットボール→バレーボール→サッカーといった順次性となる。陸上ではハードル走・短距離走→ペース走→走り幅跳び・走り高跳び→投てき種目という順次性となっていく。

次に学習形態としてのグループ学習の意義は、ものの見方の多様性を認め合うこと、つまりは他者の考え方を認め、自分の考えを再構成していくということにある。そして、体育の課題を通して主観的な見方を客観的に、そしてひとまとまりの世界として捉えていけるようになることが大切だと考えている。グループ学習とは、集団の力を借りて、子どもたち一人ひとりが自立して課題を乗り越えるためのツールと言えるだろう。具体的には、その運動を仲間に見てもらったりアドバイスをもらうことにより、自分自身で分析統合できるようにしていく。グループ内の学び合いの結果、個々の技術が発展していく過程と、実際にパフォーマンスが向上していく結果が見えていくことで、グループ学習の有効性を生徒自身にも感じ取ってもらいたいと考えている。

荒木豊先生への追悼とたくさんの感謝を込めて

〈高等学校 体育科〉 有馬 良亮

私は明星学園高等学校に勤めはじめてまだ8年程だが、その中でもさまざまなことが変化してきている。

保健では、今までは体育科で引き継がれてきたオリジナルの授業を11年生で2単位行ってきたが、数年前から10年生で1単位、11年生で1単位の授業を行うようになり、今年度からは教科書も導入し、多様化する生活様式にも対応できるよう取り組んでいる。

実技授業では、カリキュラムには大きな変化はないが、指定の体育着が導入されたことは大きな変化である。指定の体育着の導入には「明星学園らしくない」と考える方も正直少なくないと思う。また体育の授業の始まりと終わりにしっかり整列することもいわゆる「明星学園らしくない」と考える方がいることも耳にすることがある。ただ、一人ひとりの個性を尊重し、伸ばしていく明星学園の教育の中でも、学校という集団生活の中での最低限の決まりを守って生活するということを、社会に出ていこうとする高校生が身に付けることも必要だと考えている。体育の授業で扱うさまざまなスポーツにも「決まり（ルール）」があり、その「決まり（ルール）」の中でお互い切磋琢磨してプレーすることが求められる。高等学校の体育科でも最低限のルールを守ることは大切に行っていることの一つである。

授業の中でのルールや、施設使用のルールも生徒それぞれが気持ちよく過ごすために最低限は守ってほしいという思いで日々指導に当たっている。

体育の授業でも、体育が好きな生徒、苦手な生徒や、走るのが得意だけど球技が苦手な生徒、球技は得意だけど器械体操が苦手な生徒、そもそも運動が嫌いな生徒などさまざまな生徒がいる。現在のカリキュラムでは10年生は「陸上・バスケットボール・器械体操」、11年生は男子が「サッカー・バレーボール・ハンドボール」、女子は「ダンス・バレーボール・ハンドボール」、12年生は「球技・アスレチック・卓球」から1種目を選択する形になっていて、それぞれ1年間を通して専門的に学んでいる。

私もさまざまな授業を担当してきたが、共通しているのが、得意な生徒が苦手な生徒に教える場面やみんなで楽しめるように工夫する場面が多く見られることだ。私が担当していたバレーボールの授業でも試合をしている中で、なかなかサーブが入らない生徒がいた時に、ある生徒が「〇〇君は前の線から打っていいんじゃない？」と生徒同士でルールを改善して、みんなで楽しく取り組めるように工夫している姿を見て、『スポーツ』という観点では良いのかはわからないが、『体育』という観点では素晴らしいと思った。得意な生徒だけで盛り上がるのではなく、全員が周りを尊重し、お互いの良さ、強みを出して、苦手な生徒も含めて全員で楽しんで取り組めるようになることが『体育』の授業に求められることだろう。全てがそのようになるのは難しいと思うが、そのような場面が増えるように生徒の発想も吸い上げながら工夫をして取り組むことが必要だと思っている。

私自身はとても規則の厳しい学校で育ってきたので最初に明星学園に来たときは驚くことがたくさんあったが、授業の中でも、それ以外の部分でもいわゆる本当の「明星学園らしさ」を大事にして最低限のルールを守っていくことの大切さを大事にしながら、今後、さらに明星学園高等学校体育科の授業を生徒たちにとってより良いものにしていきたいと考えている。

音楽科

小・中学校の音楽科は、原則三人の専任教員と非常勤講師でスタッフを組んできた。専任のうち少なくとも一人は小学校と中学校の授業を並行して受け持つ。1980年代以降、秋野憲治と遠藤春幸を中心として、1990年代以降は面木悠梨子が加わり、この三人の時代が続いた。その後、教員の入れ替わりもあり、時代と共に新たな実践も生まれている。

ここでは、2000年代以前の音楽科について秋野に、また現在の小学校については長澤俊介、中学校は天野茜に寄稿してもらった。

〈小学校 音楽科〉(1980年代～2011年度) 秋野 憲治

1) 子どもたちの歌声を求めて

多くの小学校の音楽教育は、音符の勉強、リコーダー、ピアノ、歌唱、音楽鑑賞……と、とにかく内容が多岐にわたっている。それなのに6年間を終えたとき、子どもたちは何ひとつ満足に習得していない。その結果、音楽嫌いな子どもができてしまう。

40数年前に明星学園に来たとき、「とにかく任せるので、元気に歌う子どもたちにしたい」と、当時の遠藤豊校長に頼まれた。その頃は、明星でもリトミックや楽典などの勉強ばかりをやっていて、子どもたちにとっては音楽の授業は「苦痛」でしかないという状況だったのだ。

2) 楽譜が読めなくても合唱は楽しめる

音楽の授業を「苦痛」と感じている子どもたちを、いかに「元気に歌う子ども」にするか、これは大きな課題だった。

そんなあるとき、「ママさんコーラス」のことに気が付いた。当時、急激に増え始めていた「ママさんコーラス」から、明星っ子を「元気に歌う子ども」にする大きなきっかけを見つけた。ママさんたちのなかには、意外にも楽譜が読めない人が多いのだ。それでもちゃんとコーラスになっている。「楽譜が読めなくても音楽は楽しめる」。それなら、明星でもできるのではないか。

3) 音楽教育の難しさ

専門教育を受けてきた音楽の教師は、専門すぎて子どもの目線に降りられない傾向がある。専門的なことをしないのは、音楽の教師からすれば辛いことではあるが、音楽を専門に勉強すればするほど、わからない子どもをこちらに向かせる工夫が必要となる。ここに音楽教育の難しさがある。

音楽の授業では、音色をそろえることが要求される。そのためにはいろいろと技術的なことを学習する必要があるが、そればかりを要求すると子どもにとっては音楽ではなくなってしまう。ハーモニーが決まったときにすべての子どもが感動を味わえるようにすることは至難の業であるが、その内容と方法を教育音楽の教師は確立しなければならない。だから音楽の教師は苦勞するのである。

4) 技術上の留意点

音楽の授業では、ただ楽しませるだけでなく、音色をそろえることが必要である。そのためには「口の開け方」「フレーズの作り方」「わめき声と大きな声との違い」「小さい声と弱々しい声の違い」といったことを指導者側が敏感に察知しなければならない。指導者側に、ある目標があり、「この世界までつれていこう」としているかどうかも大切である。音楽は「ハーモニーが決まったときの快感」が大切で、その快感が「感動」を生むからだ。決まる世界がないと、快感を味わうことができない。歌わせてはいるが、子どもが「つまらない」「いやだ」という反応を示すようになる。だからこそ“つれていく目標”を教師が明確に持つことが必要なのだ。

聞く耳、表現する力……子どもにとっては音楽の教師が絶対的存在となる。教わる方は、いい悪いの判断をすることができないから、いい音楽と出会えない場合、音楽嫌いになってしまう。伝導役としての教師の役割は重要である。

主体はあくまで指導者であり、そこでは主体の経験に基づく価値が生徒へ提示されることになる。

その意味でも指導者は、多様な経験をし、そのなかで自分自身が「これだ!」という価値を見出しておくことが必要である。「一流を知れ」というが、一流を知ることは表現に携わる者として欠かすことのできないことであり、その一流から学んだことを、我がものとし、子どもたちに責任をもって伝えることが、表現教科の教師には求められる。

合唱は指揮者（指導者）が全権をにぎる特性を持つが、指揮者も歌唱者（子ども）も表現主体であるから、そこでは心と心が響き合うことが必要である。

5) 学年ごとに明確な到達目標を持つ

1年生 音程などはあまり考えずに元気に歌う。

2年生 音色を考えた歌づくり。いちばんストレスがかかる。

これを通り過ぎないと高学年までいい響きがつくれない。

3年生 声の出し方が身に付いてくる。表現性を追求する。

4年生 表現性の幅を広げる。三部合唱に取り組む。

5年生 自分の声をききながら、ハーモニーを意識して歌う。

6年生 表現を豊かに、安定した三部合唱の世界をつくる。

以上のことを探求（追求）しながら実践してきた。

これがベストだと思ったことは一度もない。理想を言えばきりがない。明星の子どもたちはみんな「とにかく楽しんで、積極的に歌う」、それで良いのではないだろうか。

〈小学校 音楽科〉(2020年代) 長澤 俊介

1) 音楽の持つ美しさに触れ、共感と自己表現を育む

小学校が目指す音楽教育は生き生きした「感動」や人間的な共感と共同による「人間的真實」を根底に考える。すべての子どもが自分の手で真實の音楽美に触れ、ゆたかに自己を「表現」できる力をつけることを目標とする。

2) 音楽科の学力・子どもたちにつけさせたい力

子どもたちとともに過ごすなかで、常に目の前にいる子どもたちの姿を見極めていくこと、生活や学習の積み重ねのなかでの育ちを見通して日頃から教材研究を行い、新しい子どもたちが生き生きした「感動」を味わうことが大切ではないかと考える。

「表現」の根底に「感動」があると考え。例えば合唱において考えてみると、それは歌詞の内容のみならず、音程や音価、調性、リズムなど子どもが本能的に「楽しい」「心地よい」と思えることに裏付けられるものだと思う。そのために子どもたちにとって必要なのは、子どもの内面をゆたかにする教材なのだ。

実例を紹介すると、1・2・3年生においては自己編纂している歌集を使用している。そのなかには音域が広く、子どもが歌唱するには難しい曲もある。しかし、高い音を発するとある種の興奮を覚えたり、離れた音程を歌う時に心地よさを感じたりするのではないだろうか。「正しい音程で歌う」ことが最終的な目的ではなく、曲を通してさまざまなリズム、音程、和声進行に触れ、歌を歌うこと、そして「音楽そのものへの興味がより高まってくること」を目標としている。例えば、ミュージカルなどで使用される劇中歌や身近にあることをテーマにした教材曲を取り上げると、ストーリーの世界観や登場人物になりきり、その曲のイメージを明確に歌うことができるので楽しめる。また「ことば」のリズムがより意識された旋律にも魅力が隠されていると考えられる。

では、学習教材をどう選ぶかということは、その教材の魅力を何と見るか、またそれをどう読むかということとは、切り離せないと思う。楽曲にどのような思いを込めさせるか、何を感じさせ、何を味わわせるのか、そして子どもの育ちとどのようにつながるのか、十分に検討して選択する必要がある、子どもが「表現できる喜び」を感じられるような教材の研究が求められてくる。目の前にいる子どもたちと教材曲がよりよく合致した時にこそ、学びの意欲が高まり、子どもたちと授業者の間にかけがえのない「感動」が生まれてくるのではないかと考えている。

〈中学校 音楽科〉 天野 茜

1) ミニキーボードの導入

小学校と高等学校を繋ぐ立ち位置でもある中学校。小学校でやっていることから発展的に、そして高等学校ではさらに教科としての奥深さが広がっていくようカリキュラムを組む必要がある。

本校の音楽教育は、長らく「歌（合唱）」を中心に据えてきた。「歌声が響く学校に」というのが創立時からのテーマでもある。合唱をより良いものにしていくための知識づけ（音符の種類やさまざまな記号の意味などを知る）という観点で、器楽を取り入れてきたようだ。

中学生は発達の段階として、変声期（特に男子）、自我が確立し始める時期、歌うことへの恥じらいを大きく感じ始める時期でもある。一つのことを深めていくというのは大切だと思う反面、歌中心でのカリキュラム構成は、生徒たちにとって良いことなのか、歌える生徒とそうでない生徒の温度差が生まれないか、考える日々であった。そんな中で話を聞いていると、「歌うのが苦手、嫌い」という生徒がいても、「音楽そのものが苦手、嫌い」という話はあまり聞くことはない。だとすると、歌中心のカリキュラムというより、生徒たち自身がさまざまな音楽の形に触れる方が、より興味を持って取り組んでもらえるのではないかと考えた。

そこで、長らく取り組んでいたアルトリコーダーを、2014年度よりミニキーボードに切り替えた。リコーダーは、息の入れ方や運指（どの指でどこをおさえるのか）に気が取られてしまい、音符など音楽の中身の部分まで気を配りながら演奏するのは非常に難しい。一方、ミニキーボードは電池を入れて、鍵盤を押せば綺麗な音を鳴らすことができる。まずは音を出す、という第一関門を簡単に突破することができる。こちらの方が、音を出すまでの苦労は圧倒的に少なく済む。リコーダーのように強弱をつけられないという難点はあるが、気軽に楽しく演奏できるのはキーボードの良さである。また、リコーダーでは一人で和音（複数の音）を演奏することはできないが、キーボードはそれができる。このことで、扱うことができる曲の幅は圧倒的に広がった。

7年生のはじめは、「よろこびの歌」からスタート。すぐ隣の鍵盤に指渡しをする（跳躍が一切ない）曲から取り組み始める。ピアノを習っている生徒は、すぐ弾けてしまうような曲なので、和音をつけて難易度を上げたり、助手となって、他生徒に教える役割を与えている。

また、毎時間最初に「指の体操」を行なっている。これは、体育の授業でいうところの準備体操。そして、毎時間ルーティーンとして行うことによって、授業の始まりを自然と認識し、しっかりと授業をスタートすることができる。

また、このキーボードの良いところとしてさまざまな音色が出せることが挙げられる。その曲にふさわしい音色は何か？生徒たちに考えてもらい、音色を決めることもある。中学校で初めて鍵盤に触れた生徒も、コツコツと練習を積み重ね、7年生のうちに小曲を両手で演奏ができるようになる。

7年生では基本的に一人で完結するスタイル（全員で同じメロディを演奏する）だが、8年生に上がると二人以上でのアンサンブルへと発展する。アンサンブル発表会を行い、お互いの演奏を聴き合う活動も行う。一人で演奏する時には感じなかった、人とテンポを合わせる難しさ、合わさった時の達成感を得ることができる。キーボードでは、扱う曲もさまざまで、クラシックはもちろん、J-POP、民謡、映画音楽、ディズニーなど。さまざまな音楽に出会うきっかけにしてほしいと考えている。

〈キーボードで扱う曲の一例〉

7 年次	8 年次	9 年次
『よろこびの歌』『聖者の行進』『木星』『オー・シャンゼリゼ』『さくらさくら』『ふるさと』『四季より「春」』など	『Lemon』『パッヘルベルの「カノン」』（グループ発表会）など	『打上花火』『20th century fox fanfare』『スターウォーズメインテーマ』『パイレーツオブカリビアンより「彼こそが海賊」』『美女と野獣』（グループ発表会）など

2) 合唱の授業

一方合唱では、伝統的に取り組んできた楽曲の継承、そして時代や生徒たちの状況に則して柔軟に変えることを意識している。9年生で扱う曲に関しては、長らく歌われてきているものが多い。7年生ではまだ変声期を迎えていない生徒も多くいるため、音域的にも比較的歌いやすい曲、そしてハーモニーをつくりやすい曲を取り入れている。

合唱で特に大切に考えているのが、いかに生徒たち自身の手でつくっていけるか、ということである。生徒の中からパートリーダーを決め、各パートに分かれてパート練習を行う。最初は大きくうまくいかない。うまくいかない中で、パートリーダーだけの力では練習を進めることはできない、協力体制が何より大切なのだということを全員に伝える。特定の誰かだけが頑張ったところで、良い合唱にはならない。一人ひとりの力が必要なのだということを気づかせたい。

毎年、学外の大きなホールで開催する合唱コンクールでは各クラス、課題曲とクラス曲を演奏する。クラス曲は、各学年候補曲を6曲ほど用意し、その中から選んでもらう。高校では、自由に選べる形になっている。その前段階の中学校では、各学年の曲の難易度を揃える意味でも、候補曲は教員で指定している。

パートごとの音程が掴めてきたら、いよいよ合わせとなる。ここでも、指揮者とピアニスト（伴奏者）の生徒に活躍してもらう。パートごとに一名ずつ前に出てきてもらい、合唱を聴いて感じたこと、もっとこうした方が良いということ意見をもらう。自分たちの合唱を録音して、意見を出す。他クラスの合唱を聴いて、自分たちの合唱を再考するきっかけとする。このようなことを積み重ね、クラスの合唱が形になっていく。そのクラスや学年のカラーがよく表れるのが、合唱の面白さでもある。

〈合唱で扱う楽曲の一例〉

7 年次	8 年次	9 年次
『Let's search for Tomorrow』『絆』『夢の世界を』『大切なもの』『変わらないもの』『道』『空は今』など	『チェリー』『あなたへ』『僕のこと』『マイパラード』『地球の詩』『時を越えて』『輝くために』など	『いのちの歌』『手紙』『Climb Ev'ry Mountain』『栄光の架橋』『信じる』『群青』『虹』『名づけられた葉』『聞こえる』など

現段階の中学校音楽科の課題として、音楽の三要素である「リズム」「メロディ」「ハーモニー」のうち、リズム部分の弱さを感じている。創立同人の照井げん（音楽科）が音楽教育において焦点をあてたのがまさにこのリズム教育であった。ボディーパーカッションなど、リズム活動の可能性も今後積極的に探っていきたい。

〈高等学校 音楽科〉 間宮 かおる

明星学園の音楽は1年生から10年生まで一貫して、「楽しく歌うこと」で繋がってきた。

1) 高校音楽授業の今

10年生では週2時間1コマの音楽・美術どちらかを選択する。

10年音楽では良い姿勢で良い耳を育て、良い響きを持った声で歌うために発声練習をする。

1学期最初に英語歌詞の合唱曲を生徒と決め、曲と言葉の持つリズムやハーモニーを作る喜びを覚え、3学期の音楽祭では10年音楽選択者全員で発表し感動を得ている。また、1学期の独唱ではイタリア歌曲の「Caro mio ben」に挑戦、2学期のなんでもコンサートでは個人でもグループでも、和洋いろいろ、ダンスまで、多彩な演目を練習し、発表し、お互いに鑑賞しあう。

11年生になると音楽コースが置かれ、「歌唱」「アンサンブル（器楽）」「ソルフェージュ（フランス語：solfège＝基礎読譜訓練）」を学ぶ。12年生では「音楽史」が追加される。

その他、11年12年共通選択科目として「オペラ・ミュージカル」「ボーカル・トレーニング」があり、12年自由選択科目として「キーボード」「音楽鑑賞」「アンサンブル（器楽）」「ボーカル」が置かれている。

2) 現在に至るまで

昔、10年生は、音楽（1）と美術史（1）が必修だった。

音楽は1学期独唱曲、2・3学期は合唱曲を取り上げていた。また、このほかに10年で2～4単位のノングレードの科目があり、11年で8～18単位、12年で16～26単位を選択可能だった。

11・12年の選択授業では、音楽大学などに進学したい生徒のための授業として歌唱、ソルフェージュ、楽典、器楽などがあった。また、オペラや音楽鑑賞、音楽一般などは誰でも履修可能で、歌唱やソルフェージュなど音大希望以外の生徒も履修することができた。そのためか11年の途中で音大に進学したくなる生徒もかなりいた。

1988年の変更で、芸術科目（音楽・美術）を10年で2単位、必ず履修することになった。また、10年で2～6単位、11年で12～20単位、12年で16～26単位が選択可能だった。この時期、明星の高校では音大よりも多くの時間、音楽の授業を履修している生徒もいた。

しかし、1995年には10～12年のノングレードがなくなってしまった。

そして2014年にはコース制に変わり、10年の2学期には進路別のコースを選ばなくてはならなくなった。

3) 選択科目について

歌唱Aは“歌唱”へ

発声練習をしながらクラシック音楽の原点であるイタリア歌曲をイタリア語で歌うことを中心とする。またさまざまな曲を原語で歌っていく。

歌唱Bは“ボーカル”、そして“ボーカル・トレーニング”へ

自分自身の声を見つけ、歌で自分の思いを伝えていく。基礎的な発声や技術を探究し、ソロ歌唱を中心に表現の幅を広げる。

器楽は“アンサンブル”へ

楽器で表現する力を習得するため、個々の技術をあげていながら演奏する。コース制になってから楽器や声楽のアンサンブルを学び発表している。

ソルフェージュ

音楽を演奏する上での基礎知識と読譜力を培う。調音、新曲視唱、リズム打ち、楽典など、生徒それぞれ自分のレベルに合わせて学んでいく。

音楽史

クラシック音楽の源流であるグレゴリア聖歌から20世紀以降の現代、ポピュラーまでの音楽の歴史を、映像資料や音源を用いながら辿る。

音楽一般は“キーボード”へ

基礎的なコード理論と鍵盤楽器における演奏技術を学び、発表する。

音楽鑑賞

クラシックやジャズ、ミュージカルなどさまざまなジャンルの音楽作品を比較し考察し、幅広く音楽を聴く耳を育てる。

オペラは“オペラ・ミュージカル”へ

講座（ノングレード選択授業）があった時からオペラがあり、明星祭で発表してきた。歌い演じる楽しさ、仲間との協力などを体験できる。最も多く公演したオペラはモーツァルト作曲『フィガロの結婚』である。ミュージカルの流行もあり、オペラ・ミュージカルに変更した。

ボーカル・アンサンブル

重唱や合唱を軸により自然な発声を目指している。

4) 高校の音楽教員

専任は一人である。授業科目が多岐にわたっているので、それぞれの専門分野の講師とともに授業を行っている。10年音楽はずっと専任と歌唱担当の二人が全クラスを教えていたが、選択授業が増え、時間割の都合で、近年はパートナーが違うことが多く苦勞している。オペラ・ミュージカルもTT（Team Teaching）である。

高校音楽科教員の変遷

〈専任〉 木原光男～土橋光彦～松尾健市～藤川泰彰～間宮かおる～安田夏来

〈講師〉【歌 唱】間宮かおる、小島聖史、岡戸淳、服部裕樹、福田有紗

【器 楽】土橋光彦、田中隆英、合田香、山崎聡、岩村茜

【solfège】小笠原良一、合田香、間宮かおる、蓮沼知子

【音楽史】田中隆英、天野茜、蓮沼知子

美術科

〈小学校 美術科〉 坂本 直穂枝

明星学園の子どもたちは、美術の授業が大好きだ。それは、表現する喜びを知っているからだろう。

明星学園の美術科は、他の教科と同様に、子どもたちの気付きを大切に、興味を引き出すカリキュラムを考案してきた。今日のカリキュラムは、歴代の美術科の教師（太田幸雄、鈴木五郎、重吉起左子）や担任の教師（大野映子、阿子島茂美、他）が日夜共同研究を重ね、礎を築いてきた。

私が明星学園の美術を受け持つことになったのは1993年4月からであるが、明星の美術に初めて触れたときの子ども一人ひとりの美術に対する好奇心や眼差しに感動したことを憶えている。それから数十年、カリキュラムは改良を加え今日に至っているが、真髄は変わってはいない。

子どもは本来創作活動が好きであるが、成長と共に周りの目が気になり始め、自己評価を下すようになる。そして、課題としての評価を重要視する一般的傾向により、いつしか表現活動から離れるようになる。

明星学園では昔から子どもたちの作品に優劣をつけない。現在の成績評価も、本人がどれくらい作品に真摯に向き合うことができたのかを自己評価することを目的としている。

明星学園の美術は子どもたちが興味を持ち、前向きに取り組むことができるカリキュラムをわかりやすく系統立て、「みて描く」「生活を描く」「もよう」「物語を描く」「工作・造形・その他」という5本の柱で進めている。

学年が上がるごとに少しずつ積み上がっていく表現力、思考力を大切に見据えた教材となっているので、毎年子どもたちは違っても興味、関心、反応は何十年経っても変わっていないことを実感する。

1年生から、旬の食材をモチーフに描いたり、季節感を肌で感じたり、五感を働かせて創作する。時には学外に出かけることもある。井の頭恩賜公園や自然文化園、上水の散歩道など、明星学園は環境に恵まれている。折に触れ自然に親しみ、自然から学ぶ。本物と出会う喜びを味わう。

自然ばかりではなく、自分にとって身近なものをモチーフにすることもある。5年生になると「自分の靴」「マフラー」という自分が普段使っているものを題材にして長い時間をかけ、集中して描く。また、『うみのがくたい』（大塚雄三作）、『手ぶくろを買いに』（新美南吉作）など、物語を読んで自分なりに受け止め、選んだ一場面を絵に表現する課題にも取り組んでいる。

自分を見つめ、自分の感じたものを色と形で表現する課題などを経て、小学校の美術教科の集大成として卒業制作に取り組む。これまでの学習を踏まえ、内面を見つめ、表現技法を駆使して自分の描きたい世界を表現するのである。このように、12年一貫教育である最初の6年間を終えて、中学へと進学していく。

明星学園の美術科の歴史は、永遠に色褪せることなくこれからも継承発展していくことと思う。

時代は目まぐるしい変化と共に、子どもたちの思考や興味も変化していくが、明星学園の美術で伝えてきた“個々の多様性を大切に表現する喜び”が、未来に生きる子どもたちにとって糧となっていくことを切に願ってやまない。

〈中学校 美術科〉 吉野 明日香

中学校美術科ではこの23年間で美術科の専任教諭が重吉起左子から吉野明日香（2012年着任）に代わり、吉野の2回の産休・育休期間は高等学校美術科教諭や講師が関わる体制で教育実践を行ってきた。多くの教員が中学校の美術の授業に携わることにより、課題の位置付けや問題点が明確になり、担当者同士で問題を共有しながらカリキュラムを継承・発展（アレンジ）してきた。

とはいえ実際には、試行錯誤を繰り返しながらも、主課題の流れは重吉の時代から大きくは変わっていない。それは入学から卒業制作までの3年間のカリキュラムの文脈がすでにしっかりと作られているからである。カリキュラムは小学校の流れを受けて「見て描く」「場面を演出する」「模様・デザイン」の三つの領域の課題を3年間で繰り返して、少しずつステップアップしていく作りとなっている。「見て描く」で基本的な技術や観察力、表現力を身につけ、「場面を演出する」で自分の頭に浮かべたイメージが具現化するように、今まで学んだ技術や表現を活用する。「模様・デザイン」ではコンセプト（テーマ）や構成について学んでいく。

一つの学期に1課題という、ゆったりとした流れで課題に取り組みながら、最終的には卒業制作で自分が思い描くまま自由に描けるようになることを目標とする。生徒たちには自分の目で見たもの、自分の心で感じたことを、自分の手で表現できるようになって欲しいと思い、そのための技術や視点、構成などを3年間かけて身につけていく。

長年「都市を描く」を主題としていた卒業制作は、近年では「都市の現実」「人の暮らし」をテーマにしている。「描くこと＝知ること」であるという考えのもと、じっくりと自分の周りに広がる世界を観察し、9年生の「今」の感性で、自分らしい視点で描いて欲しいと願っている。都市＝新宿の高層ビル群、渋谷の109ビルだけではない。リアル＝写真だけではない。日々の暮らしの中で本当に自分が感じていることをどのように表すことがリアルなのか……敢えて今まで学習した表現の型を壊すような表現も期待する。

2012年に現在の吉野・雨宮一郎体制になってからは、主課題への導入となる小課題の整理に力を入れている。新課題で必要な技術やものの見方を小課題にて学習し、そこでの学習内容を応用、活用しながら本課題に取り組む流れである。例えば、「一本のピン」では長い透明パイプに均等間隔にはめられた輪ゴムを生徒が視点を固定した状態で観察し、高さによる円の形の変化に気づかせる。「ジーンズ」では絵の具を自由に用いた「ジーンズそっくりの紙片作り」を通して質感を再現する方法を自分で探し当てる。「窓」では絵の具で偶然できた抽象的な模様から連想した感情を言語化し、色と形と感情（イメージ）の関係について考える。このような小課題を通して、生徒たちはこの後の主課題で大切なことは何なのかを理解し、小課題で学んだ視点や技法を活用すれば自分でもできそう、やってみたい！とモチベーションを高めることができる。

2011年の東日本大震災、2020年からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミック。この23年間に、私たちの生活や価値観が大きく変わる歴史的な出来事を経験し、芸術がその都度、人々の心を活気づけ、癒し、勇気を与えてくれることを再認識させられた。2020年度はCOVID-19感染拡大予防のため4～6月まではオンラインでの学習となった。美術科では「マンガ塗り絵」「コラージュ」「キャラクターの拡大トレース」「影文字」「名画で大喜利」など楽しんで取り組める課題を郵送して自宅で取り組んでもらった。新しい課題にチャレンジしたり、課題の順序を入れ変えたりと試験的な試みができた貴重な機会だった。

2021年度は公開研究会の全体会講師として『13歳からのアート思考』の著者で美術教師の末永

幸歩氏をお迎えし、「自分だけの答え」を作り上げる授業手法に大いに刺激を受けた。美術の前提を疑うためにはまずその前提を教えることが必要だ。3年間で前提としての技術や視点を教え、それをどう自分流に壊しながらアレンジしていくか……。これからも基礎力を大切にしながら、生徒が自分らしい表現を主体的に模索する仕掛けづくりに力を入れていきたい。

〈高等学校 美術科〉 山領 直人

私と明星学園の美術の授業との最初の出会いは、メイン校舎が完成したばかりの1977年。入学した明星学園高校の10年生の必修芸術科目「美術史」の授業だった。

担当の恩地邦郎先生は、アルタミラ洞窟の壁画から始まりさまざまな芸術文化を、毎回図版のプリントを用意して紹介してくれた。それを各自がノートに貼りながら解説を加え、1年をかけて完成する「美術史ノート」は、いまだに鮮明な記憶として私の中に刻まれている。恩地先生の美術教育への意欲と高い見識があったからこそ成立し得たこの美術史の授業は、高校美術教育の貴重な実践であり、私にとっては豊かな美術との新しい出会いだった。その後、1985年に美術科の教育実習生として再び明星学園の魅力に改めて触れた私は、翌年1986年に非常勤講師、翌87年から美術科専任教諭となり、2023年の現在に至る36年間学園に勤務してきた。

* * *

現在の美術科には、芸術必修科目として10年生美術（音楽又は美術）があり、11年生からは、美術コース選択の中に、クリエイティブ系として絵画Ⅰ・素描Ⅰ・作品鑑賞、デザイン系には、デザイン・素描・CGデザイン（主にAdobe Illustratorを使用）、そして自由選択枠には、素材技法Ⅰという授業が配置されている。12年生になるとデザイン系には11年次からの授業に表現演習が加わり、絵画系には作品鑑賞に替えて美術史が置かれ、こちらにも表現演習が加わる。自由選択枠には素材技法Ⅱと立体表現が配置されている。更に総合科目の授業群の中には、美術科教員による「美術と社会」、「映像表現」という授業が開かれている。このような明星学園高校の美術授業の充実は、1970年代には既に行われていた10年次必修授業の「美術史」に加え、11年、12年次の「絵画」と「デザイン」という三つの柱の軸を失う事なく、授業を担当する各教員の持つ得意な領域を、年間を通じた一つの授業として成立させ新しく設置する事によって授業のバリエーションを増やし、2023年の今日に至るまで、それぞれの内容を更新、充実させる努力を重ねてきた。現在、普通高校でありながらも、他の高校にはない美術授業の充実した内容に惹かれて明星学園に入学する生徒が増え、各学年50名近くの生徒が美術コースを選択履修している。種類も豊富なそれぞれの授業の一つ一つの内容が、生徒にとって新しい表現と思考の源泉となっている。興味を持って取り組む経験を大切に、そして、それぞれの生徒の将来に資する事を目標に、私を含む6名の教員それぞれが、日々の授業を行なっている。

* * *

この約半世紀の間、私が学園の美術教育の継続と発展の営みの中に身を置くことができたのは、生徒と教員が美術の授業に真摯に向き合い、制作を重ね、個人の狭い価値観や方法に囚われる事なく、お互いを励まし、尊重し活動する事で、常に開かれた美術の世界の入り口として存在してきたからこそだと思っている。100周年記念誌に掲載されるこの短い記録が、学園の美術教育を担う次世代の人々の足元を、僅かでも照らす事ができるものとなることを願う。

工作科・木工工芸科

〈小学校 工作科／中学校 木工工芸Ⅰ（7年生）〉 佐藤 晃

明星学園の芸術教育は創立以来、先達によりその内容を吟味しながら、美術・自然科・図画・手工などさまざまな区分けや呼称の変遷を経て実践されてきた歴史がある。資料によると1960年代頃からは、美術教育と工作・技術・工芸教育を現在のように独立した教科として位置づけ、歴代の担当教諭の岸 巖・木村 鉄雄・鈴木 五郎・太田 幸雄・安野 光雅・山内 國任・岩井 喜一・重吉（大山）起佐子・岡本（井上）紀子・石井 隆至・吉村 直樹・倉橋 正美 他の諸氏によって、主に自己表現的領域を扱う「美術科」とは区別して、機能表現的領域を扱う教科として「工作・木工工芸科」の授業内容が、連綿と培われてきた。

現在、小学校の1年生から4年生までは工作的分野を週2時間の「美術科」の課程の中に含み込み、5・6年生から「美術科」と「工作科」を二つの教科として、それぞれ独自の課程を週2時間の枠組みで実践している。また、中学校では「美術科」と「木工工芸科」が同様に週2時間ずつの授業を実践している。

小学校「工作科」の教科課程は、子どもたちの発達段階と1年生から3年生までの「総合科」で扱っている「ものづくり」の基礎的な経験とを踏まえ、素材別に〔紙工作〕〔木工作〕〔金属工作〕〔織〕〔その他〕の分野に分けて、使い道や目的が明確な、生活に結びついた形の表現を扱って編成している。主な教材は、具体的には入れ子の紙箱作り、木箱作り、模様彫刻、木のバターナイフやスプーン作り、銅の器作り、カゴ編み、フェルトのクッション作り、石を磨く……などがある。つくったものを使ったり、遊んだり、身につけたりできることは、子どもたちの中に、はっきりとした目的意識とイメージをつくり出すことになる。授業においてさまざまな素材に触れながら加工技術を学ぶ中で、頭と手の働きを統合し、素材を通して自然やものを考える姿勢を育むことを目指し、生活空間における工夫や自由に表現する力を育成することを、教科の大きな目標としている。

中学校「木工工芸科」では、私たちを取り巻くものの在り方と「ものづくり」について「木工」と「工芸（染織）」の世界を通じて学んでいく。中学7年生課程の「木工工芸Ⅰ」では、8年生から少人数制で専門的に木工と工芸を学ぶ前段階として、測る、切る、彫るなど加工技術の基礎的な内容を授業で扱っている。主な教材として、具体的には石の印章作り、鑿^{のみ}で穴を彫って作る印章用の木箱、鋸や鉋で木材を加工して作る織機、平織り……などがある。

8・9年生課程の「木工」の授業では、原木の製材から家具などの製作まで、一連の過程を実際に体験し、「工芸（染織）」の授業では、糸を染めるところから始まり、織りの技法による作品づくりまで行う。それぞれの授業ではさまざまな加工技術を学びながら、同時に自然の材料を生活空間に取り入れる「ものづくり」の在り方について考える機会にもしている。教科では、思い描くイメージを形にする柔軟な発想力や多様な価値観を身につけることを大切な目標にしている。

製作を通して子どもたちは立体的に空間を捉え、構造上のしくみや作業の手順を見通して考える。時に協力し合いながら安全な道具の扱いを心がけ、自らの感覚を総動員して複合的に学んでいく。こうした製作の過程にともなう試行錯誤の中で、技術的にも知的にも発達していくことになる。創造的な生産活動のもつ教育的な内容は、手の働きだけではなく、精神的な感覚や社会的な認識にまで及んでいくのである。主体的で能動的な生産労働体験は人間形成の根本と深くかかわっていると言える。

〈中学校 木工Ⅱ（8年生）・木工Ⅲ（9年生）〉 青柳 勝利

明星教育の芸術教科の根幹には、授業の芸術的形成がある。それは、子どもたちが、自らの力で対象の構造を発見できる状態をつくり出すには、絵画、造形物などの芸術の所産をもとに学習内容を組織することが重要であり、また、教育的な意味においては「創造的なものづくり」の要諦であると考えてきたからである。

木工の授業の芸術的形成については、開校以来、自然を着想源に自由な発想でものをつくる芸術的手工教育から始まり、子どもの関心や感動を中心に授業を展開することで実践してきた。授業を構成する際は、発達段階に応じた「手仕事」が心身の発達を促し、ものづくりを通して思考力、行動力、社会性を身につけられるように、特色のある教育活動の充実を図ってきた。具体的には、小学校の工作科と連携し、早期から素材の持つ力を感じ自然との共生を学ぶ機会を作ることで、子ども自身が持つ知恵や感性を長期的な視点で鍛え、「人間性」を育む教科としての役割を担ってきた。



スケルトン天井で開放感のある
室内空間

現行のような木工の授業は、1960年代以降、山内国任教諭の思索のなかで生まれた。昭和の高度経済成長期のなかで大量生産、大量消費が広がった時代に、近隣で伐採された樹木や解体された家屋の古材をもとに「協働で家具を製作する授業実践」が始まった。昭和から平成の時代にかけて、高度な文明の発達によって地球環境問題が深刻化するなかで、長年にわたってさまざまな試行錯誤を繰り返し、独自なカリキュラムを構成して授業研究を継続的に行ってきた。なぜなら、生活環境を見つめ直すことは、自ずと自然の持つ多様性、普遍性に目を向けることにつながると考えたからである。原木の製材や井の頭公園の樹木の観察など、人間の本性である五感を働かせる活動を取り入れながら、ダイナミックでプリミティブな自然体験学習を中心に授業づくりを展開してきた。その目的は、混沌とした素材や空間を肌感覚で感じ取り、その経験から表現の動機をつくり、イメージを広げることにある。これまでの半世紀の中で、「人と自然の共生」をテーマとし、「森の思想」に主眼を置いた教育観を形成してきた。

そして、教師と子どもたち、環境との響き合いで創り出してきた体系が独自な文化的伝統を創成し、世代を超えて現在まで継承されてきた。

2000年以降の教科の学習方針については、従来からの「創造的に学び共創力を育む探究的な学び」について、授業展開や指導形態の見直しを図ってきた。その要は、授業を「個人探究」と「協働探究」の二種類の課題に分け、それぞれに取得すべき目標を設けたことにある。個人探究の課題では、単に技術訓練や系統的な教育的な見地ではなく、素材や対象と向き合うことのなかに、自分で問いを持つ事と、一人でじっくり考える時間を確保することで新たな気づきや発見ができる授業実践の充実を図った。協働探究の課題では、ものづくりの集団を活性化させるために集団的創造の場を見直し、「コミュニティの場」の充実を図った。また、全ての作業工程では、造形的視点で問題を捉えて問い続ける「哲学的思考」を導入し、思考を深掘りし可視化できるような課題設定を行ってきた。今後、21世紀社会のなかで求められる力を育むためには、引き続き本校の建学の精神を踏襲し教科として具現化することが重要である。授業を創る上で大切なことは、「わかること」

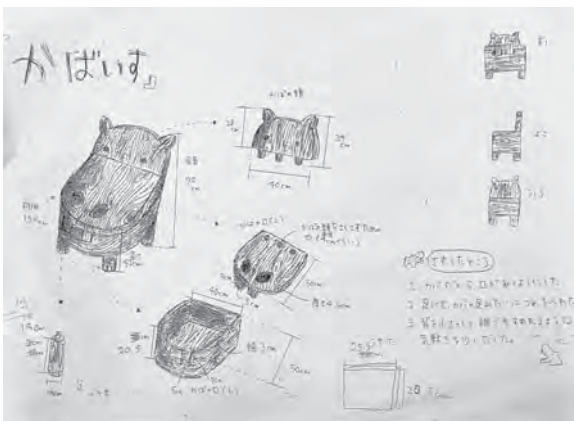
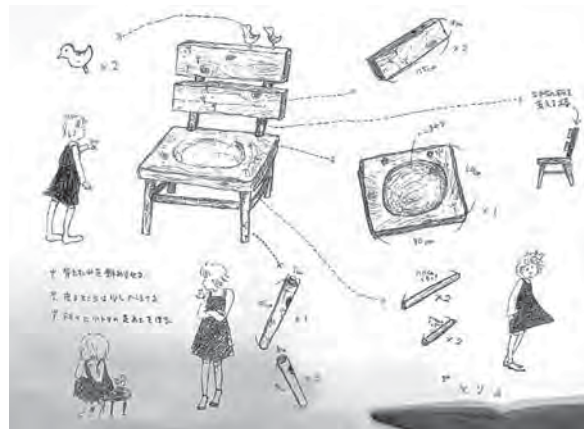
と「できること」を相互に関連させ、螺旋状に発展させるための場づくりであり、「対話的な学び」を「深い学び」へ止揚することである。新しい時代の学びを実現するためには、その時代に応じて「芸術を通した教育」の意味を再考し、教育実践の改善と努力をしていく必要がある。

制作プロセス

1. 家具のデザイン（構想図 制作図 プレゼンテーション）
2. 制作準備（作業工程 模型制作 チームロゴデザイン）
3. 部品加工（木材の切削加工）
4. 組み立て（接合法）
5. 表面加工（塗装）



協働を通して課題の発見と解決をする
チームプロジェクト



〈中学校 工芸Ⅱ（8年生）・工芸Ⅲ（9年生）〉 河野 尚子

4・4・4制時代（1959～1973）、「科学主義教育の拠点」といわれるようになった明星学園では、学内研究会で「考えながら物をつくる」「物をつくりながら考える」という教育を充実させる必要があると話し合われていた。▶▶1965年度末の学内研究会（1966年3月23～25日、於・千倉寮）の記録

また中等部（4～8年生）では家庭科・技術科の内容と位置づけについてたびたび議論されていた。1967年（昭和42）に山内国任が着任し、翌年から7・8年生の「技術科」の授業では7年生は製図、8年生は木工技術を学んだ。これが現在も続く「木工」の授業の始まりだった。山内が受け持ったのは男子生徒だけで、女子は従前どりの家庭科（内容は裁縫と調理）が続けられ、この年から7年間、明星中等部の技術・家庭科は男女別で行われた。

山内の授業が生徒の自由な発想を引き出し、手を使って物をつくり出す創造的で芸術的な内容へと進化していく一方で、生活に根ざした昔ながらの“家庭科”を続けなければならない女子のなかには不満を持つ生徒も多かった。1973年に4・4・4制が終わり、9年生は井の頭キャンパスに移る。その翌年の1974年、9年3組の女子が家庭科の授業をボイコットするという事態が起きた。当時9年生だった45回生から下記の証言をもらった。

女子は家庭科で裁縫、調理。男子は木工で原木からベンチ等を作って、その背のところに美術で全員が作った木の人形をはめ込んだ記憶があります。木工が羨ましくて、やりたくて、「なぜ、女子は技術の授業を受けられないのか」「自由、平等を掲げる明星でおかしい」と9年の時、クラス的女子ほぼ全員で家庭科の授業をボイコットして、担当の先生（芹沢先生だったと思います）を泣かせてしまったことがあります。ただ、先生も「まさか明星で、普通に家庭科をやるとは思っていなかった」と話してましたと思います。

この事件の翌年、1975年度から中等部では家庭科に変えて「工芸」の授業を開始した。担当として井上（後に岡本）紀子教諭が着任し、8・9年女子を対象に週2時間の授業がはじまった。

初年度は織物の道具（木杵と板杼^{いたひ}）を自作し、平織り、ノッティング（毛足の長い織物）、たたみ織り（つづれ織り）などの課題に取り組んだ。

この年以降、男子は木工・女子は工芸を基本とし、特に希望すれば女子が木工、男子が工芸を履修することも認められた（途中での変更はできなかった）。「手から頭へ」「物を作りながら考える」教育が、木工・工芸を通じて行われるようになった。（ちなみに同じ1975年4月、高校でも女子のみの「家庭科」から男女共修「生活科」に変わった。▶▶本誌P225参照）

担当の井上は、工芸の授業の意義について以下のように述べている。

工芸は、ものをつくる教科です。頭の中で考えるのはもちろん大切なことですが、ものに直接触れて、ものをつくるというしごとは、それ以上に意味があるように思われます。直接体験することは精神の集中をもたらし、意思の力を育てます。また、ものの本質などを、手を通して具体的に理解したり、感じ取ったりすることができます。さらに、ものをつくることは手と頭のはたらきを結びつけ、子どもたちの人間的な発達を助けます。現代は機械文明の発達により、ものをつくるという行為がほとんど失われています。そうであるからこそ、授業をとおして、子どもたちに「自分で計画し、自分で制作する」というしごとを体験させて、それによって頭と手の発達をうながし、ものをつくるよろこびを味わわせたいと思います。そして作品完成の充実感が、子どもたちの表現の豊かさを育てるのに役立ってくれることを願っているのです。

工芸では、自分で作ったものを使うことにより、使いやすさと、美しさに対する認識が深められます。「頭で考える→手で作る→使う」この一連のつながりによって、もの与人との関係が密接になり、身のまわりのものの価値を見出し、それを大切にすることになってきます。「頭で考える→手で作る」の過程の中で、自分の手が思うように動かなかったり、材料が自分の思い通りにならなかったり、あるいは、はじめの計画を全く変更せざるを得なくなったりすることがあります。そしてその過程で、自己のイメージを誠実に表現しようとして努力するなかで、自由な自己をつくり出していきます。ひとつのものをつくるといことは、それがどんなに小さなものであっても、思考の集中や、意思の力を必要とします。そしてそれが、より広い人間的な能力の基礎をつくると考えているのです。

▶▶PTA会報『道』100号（1978年3月10日）

井上は実践を積み上げる中で、織物以外にも藍を使ったろうけつ染め、柿渋紙を使った型染め、マクラメ編み、糸紡ぎ……など扱う分野を広げていった。9年生は2年間の集大成として卒業制作の織物に取り組む。大型家具を協同で製作する木工の授業に対して、工芸は個人作品であることが特徴だ。それぞれの生徒が自分のイメージした織物作品を、自分の技量と相談しながら製作する。

1994年、河野尚子が着任し、2年間の引継ぎ期間を経て、岡本（井上）は1996年に退任。岡本の実践は河野に継承された。

1999年（平成11）から、木工・工芸は男女共修授業を開始した。これは前年度、生徒から男女共修に関して意見があり、教科内で検討後、中部会（中学校の職員会議）で決定した経緯がある。授業はクラスの半数で行い、前期・後期入れ替え制で、2年間でクラス全員が木工・工芸両方履修できるようにした。それぞれの授業時間が半分に減るため、工芸は織り分野に限定して扱うこととした。

7年	木工・工芸Ⅰ	工作の授業の中で工芸に使用する道具（織機）作り	★佐藤晃教諭	クラス単位
8年	木工・工芸Ⅱ	平織り、つづれ織り（糸染め）	クラス半数ずつに分かれて	前期・後期入れ替え制
9年	木工・工芸Ⅱ	つづれ織り（8年からの続き）、卒業制作	〃	

織り分野に限定したのは、「共通の道具を使って基本的な技法から応用させたものまで幅広く制作できること」「短い時間の中でも、基本を活かして次々に積み重ねていくことで作業を習得しやすく、卒業制作につなげていきやすいこと」「作業の過程を見やすい（生徒自身も確認できる）こと」「基本が同じなのでお互いの作品を評価できること」などの理由からだ。

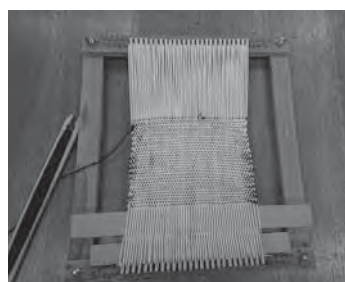
授業の中心である「織り」自体は、現代の生徒にとってはあまり馴染みのない世界と思うかもしれない。しかし頭で考えたイメージを、素材を選び、自分の手と道具を使って実際に形にする事は、幼い頃から日常生活の中でも繰り返しているものづくりと同じだ。織り上げることでつくられる布製品は、衣類として毎日必ず身につけ、生活の中で使っているものである。ぜひ身近な世界だと思ってほしい。

織られた布である「衣」は本来、人の体を守る大切な役割があって、生きていく上で必要なものとして発展や進化を遂げてきた。それだけなら皆同じ色や無地でも良いところだが、「機能性」だけでなく色・柄・形・などの「装飾性」がその人らしさを表現する大きな粹割りも果たしている。織りの世界の中で表現の自由を広げることは、日常生活を楽しむ、また豊かにすることの一つ

に繋がるのではないだろうか。

「ものづくり」は、まずは自分で「こんなものがあったら良いな」「つくってみたいな」と考える事から始まる。どの素材を使うか、どの技法が必要か等具体的に考えたら、自分の手を使って、時間をかけて形にしてく。現代は、様々なものをできあがった状態で手にすることが多く、時間のかかる細かいことは省略されて扱い易くなっている便利なものが多い。当然、工芸の授業では初めて触れる技法ばかりで、慣れないと手間がかかったり、素材の良さを生かす前に上手いかず、投げ出したくなることもあるだろう。そんな時にも諦めずに、少しずつ積み重ねて形にしてほしい。時間がかかることも大切で、じっくり素材や自分と向き合ってほしいと考えている。自分のイメージに近づけるためには、試行錯誤もするし、臨機応変に考えを変更する自由さがあっても良い。

自分の手でものをつくり出す苦労や楽しさ、そして完成したときの喜びを含めた達成感を感じられるよう、授業を作っ
ていきたいと考えている。



四隅をボルトにし、作りたい丈の長さに応じて枠の長さを調節できるようにした2代目の木枠 (50 × 45cm)



現在7年生で製作している織機 (50 × 42cm)

さらに改良を重ね、本格的な織機に近づけた。ローラー部分に経糸を巻くことができ、かなりの丈の長さの作品が織れる。全てのパーツを手づくりしている。

工芸室には染色で使用するコンロも備えられ、生徒たちは使いたい色に合わせて自分たちで糸を染めている。



2 教科外の取り組み

(1) 小学校の教科外活動

1) 小学校の特別活動 伊野 文子

2015年度から学級活動的な内容を「特別活動」と名付けて、全学年に位置づけ、水曜日の5時間目に実施するという画期的なカリキュラムの見直しを行った。「特別活動」のねらいは、次の通りである。

- ◇一人ひとりが担う役割を考え実行する力をつける。
- ◇一人ひとりが異なる考えをもつ個人であることを尊重し、一人ひとりの良さを認め合い、友達の気持ちを想像しながら話し合ったり、共同生活をしたりする力をつける。
- ◇お互いの要求実現のために、根気強く話し合う力をつける。

具体的な活動は、

- ①学級や学年、学校に対する所属意識を高めるための活動を行ったり話し合ったりする
- ②学級や学年、異学年などの行事づくりに主体的にかかわる
- ③魅力的な大人に出会う

である。

この見直しが実を結ぶまでに10年の月日を費やした。カリキュラムを見直す契機になったのは、2005年8月29日に出された「12年一貫6・6制検討委員会最終報告（推進委員会）」である。その報告に、小学校に学級活動や児童会が無いことが課題として挙げられ、小学校でも自治的な力をつける活動に取り組んでほしいということが話題になった。既に、中学校や高校には、生徒が自治的に活動する組織や場、時間が設けられていた。小学校は、教科の中で自治的な力や社会性を育てる、というねらいで実践されていたため、課題として挙げられたが必要性を感じずに、数年保留されていた。

2007年度頃から「カリキュラム検討プロジェクト」が立ち上がり、本格的に小学校での自治的な活動について、調査研究が始まった。自治的な力をつける特別な時間を設定したいという思いで、私もこのプロジェクトに参加し、他校の実践や年間活動計画の作成などに関わった。職員会議では、目的や内容、時間数など、他校の状況を報告し、明星学園の子どもたちに必要な力として特別な時間を設定したいということを提案した。教科の中で育てることを実践してきた教員は「特別な時間を設ける必要は無い。必要に応じて教科の中で臨機応変に取り上げ、話し合えば良い。」と主張。特別な時間を設けたい教員は「年間35時間、お楽しみ会や係活動、遠足や行事の事前学習など、特別な時間があれば計画的に実践できる」と主張。数年にわたる話し合いを重ね、「特別な時間を設ける」ことを決定し、2015年度から導入の運びになった。

各クラスの取り組みはユニークで「係活動」や「お楽しみ会の企画実施」、「作って遊ぼう」や「朗読発表会を聞き合おう」など、いろいろなことが行われている。

特筆すべきは、2017・2018年度の公開研究会で「自分たちの学校、自分たちでどうする」というテーマで実践的な研究を行ったことである。2017年度は金森俊朗先生（教育者、小学校教師、北陸学院大学教授、2020年3月ご逝去）をお招きして、1年生「みんなが楽しいクラス～相手の気持ち考えた言葉かけ～」、4年生「これまでの行事をふり振り返り、学年行事を考えよう」、6年生

「自分たちの学校、自分たちでどうする」というテーマで研究を行った。そこから導き出されたのは、「要求実現のためには、クラスの意見をまとめる役割が必要となる。その役割を担う者を“クラスリーダー”と呼び、話し合いの司会や書記をすることにしよう」ということであった。また、4年生から6年生までの“クラスリーダー”が集まり（明星リーダーズミーティング〈仮称〉）、クラスの要求だけでなく、学校全体の要求を実現するための話し合いをしていこう、最終的には職員会議に参加して意見表明するしくみを作りたいという壮大な計画が持ち上がった。また、各学年の話し合いやお楽しみ会で目指す子ども像について、次のように話し合った。

（1 学年及び 2 学年）

学級の中で一人ひとりが担う役割を考え、なかよく助け合い、学級生活を楽しくする活動を行う。

（3 学年及び 4 学年）

学級の中で話し合って楽しい学級生活を送る活動を行うとともに、下学年との 2 学年行事及び学年を意識した活動を行う。

（5 学年及び 6 学年）

学年のつながりを強め、自分たちの学校生活をどのようにつくっていくかということを考えながら、学校全体の生活のリーダーとして活躍する。

この時、講師の金森先生から「特別活動など、つまらない名前をつけるのではなくて、子どもたちに名付けさせたらいいのではないか」とアドバイスいただき、「なかよし」「みんなの時間」など、担任が変わる度に特別活動の呼び名は変わるが、子どもたちは呼び名にとらわれず、自分たちでいろいろなことを決められる時間として定着している。

2018 年度は制野^{せい の としひろ}俊弘先生（和光大学教授）をお招きして、4・5・6 年生のリーダーが、明星リーダーズミーティングで縦割り活動について話し合う様子と、5 年生が「人とのつながり方〜クラスづくりから学校づくりへ〜」というテーマで「つながり方」「見通しをもつ」「交渉する」ということを意識して研究を行った。今後の活動に向けて、次のような成果と課題があることをまとめた。

- ①リーダーズミーティングは、原則月 2 回昼休み（12 時 45 分～13 時 25 分）に実施。
- ②リーダーズミーティングの議題選びについては、教師の指導性を発揮し、子どもたちの切実な困り感を引き出して原案作りをする。
- ③1 年生から 6 年生までの縦割り活動は年間計画の中に入れて実施。
- ④特別活動の年間実践例作成。
- ⑤特別活動における教師の役割として、教師は子どもに対して「本当にその要求が必要なのか」と問い続け子どもに考えさせることが大事。

この時、制野先生が繰り返し話されたこと、「子どもに問い続けること。子どもが要求してきたからと言って、すぐに OK を出さず、なぜ、どうして、どんなふうになればできると思う、などと問うこと。それが、教師の指導性であり役割だと思う。」は、時代が変わっても大事な教師としての姿勢であるだろう。

研究会後、6 年生のリーダーを中心に、明星学園小学校において初の縦割り活動を行い、それぞれの場所に分かれて、自分たちで決めた遊びを 6 年生のリードのもと実行することができた。リーダーだけでなく 6 年生全体に、最高学年としてどのように行動したらいいのか、ということを考えさせることができる取り組みになった。

2019年度末から2022年度まで世界的に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックに襲われ、休校を余儀なくされ、「三密はダメ」（密閉空間・密集場所・密接場面）ということで教育現場は混乱した。このようなことから、リーダーズミーティングや縦割り活動は中断。しかし、特別活動の時間は継続しているので、これまでの取り組みを基に、建学の精神「個性尊重」「自主自立」「自由平等」を体现する自治活動の発展を期待したい。

2) 小学校の宿泊行事

小学校では、教育の柱の一つとして教科外活動の中に宿泊行事を位置付けている。

宿泊行事は創立直後から続く伝統的な行事で、現在も4年生から6年生までが、学年ごとに千葉県南房総市千倉の瀬戸浜海岸で実施している。現在、千倉の寮は老朽化で使用することができなくなり、近くの宿泊施設にお世話になっている。戦前から実施されてきた「伊豆大島見学旅行」は、5年生で実施する名物行事である。30年以上継続する「奈良修学旅行」は、6年生にとって小学校最後の行事である。どの行事も現在は2泊3日で行い、子どもたちと教員が良く遊び、学び、親交を深める大事な行事になっている。さらに、教科外活動ではあるが、教科とのつながりや発展という視点をもって設定されている。

「千倉夏季行事」は、4年生にとって、小学校に入って初めての宿泊学習であり且つ海の行事である。友達や先生との絆を深め、海の活動の作法を身につける第一歩。5年生は、2回目の千倉なので心身共に余裕をもって活動。6年生は、小学校最後の千倉ということで、磯の活動やコース別活動（釣り・写真撮影・貝や流木を使ってアート作品を作成）などを行い、海や千倉の町を満喫する。社会科の授業で行う鉄づくりのための砂鉄採りは、6年生の千倉ならではの内容となっている。

5年生の「伊豆大島見学旅行」は、社会科の授業の一環として行っている。4年生で地球史を学び、5年生で「私たちが住んでいる地球」を学ぶ。そこで地球内部やプレートの動きと火山活動について学び、その實際を体感するために伊豆大島に行く。そこでは、三原山の噴火口やカルデラ、溶岩流の様子や噴出物、地層切断面などを見学して、火山活動のさまをつかみ、そこで生活する人々に出会い、郷土芸能に触れている。地球は生きている、ということを実感する活動になっている。

6年生の「奈良修学旅行」も、社会科の授業の一環として行っている。日本の古代国家発祥の地である飛鳥路（甘樫丘から飛鳥寺、石舞台古墳やキトラ古墳など）を散策し、古の人々に思いを馳せている。平城宮跡や東大寺、興福寺、法隆寺などを見学し、出土物から分かることや渡来人のかかわりや仏教伝来について、目で見て心で感じる活動である。奈良の工芸である「鬼瓦づくり」と「赤膚焼き」も体験し、充実した行事となっている。

「伊豆大島見学旅行」と「奈良修学旅行」後、子どもたちは見学したことを、自分の言葉や絵で新聞にまとめ、発表している。新聞としてまとめるために、子どもたちは見学に訪れた先で熱心にメモを取り、博物館でもただ眺めるのではなく長時間にわたって丁寧に見学している。

宿泊行事については、社会の変化や課題などを考慮しながら、子どもたちにどのような体験や学びをさせたいかという「ねがい」や「おもい」を小学校の教員で共有しながら、更に発展させていきたいと考える。

(2) 中学校の教科外活動

行事・生徒指導関連作業部会は、2006年度からの6・6制、12年一貫教育をスタートさせるにあたり、教科教育を土台にしながらも、教科外活動をどう位置づけていくのかということについて検討した。卒業論文については1996年度から実施されているが、その実施形態や目的については当該学年に任されている。また、9年の修学旅行における民泊の実施は2005年、一つのコースとして始まったが、教員の中にも賛否両論がある。職場体験については、さまざまな地域・学校での実践を比較研究しながら、明星らしい、明星でなければできない、そんな活動を模索していた。以下、2005年1月19日の全園会議に提出された試案である。その後、中学校ではこの方向に沿って一つ一つの教科外活動に意味が与えられ、7年生から9年生までつながりをもった活動として位置づくことになる。

「職場体験」「民泊」「卒業論文」(中学校を中心に)

一中・高一貫の中で、生徒全員に課す教科外の活動―

行事・生徒指導関連作業部会 堀内 雅人

子どもの成長にとって何より大切なことは、学校教育・家庭教育・社会教育（地域の教育）がバランスよく、また互いに補完しあう形で機能していることだ。そのためにはそれぞれの立場にある人間が明確に自らの役割を認識し、そのことに責任を持っていなければならない。〈学校教育〉が目指すものとは、とりもおさず教科教育である。教科教育を通して子どもたちの成長にかかわることにおいてこそ、我々は専門性を有し、存在意義を持つ。もちろん、そのことがうまくいくようなハード・ソフト両面における校内の環境づくりは不可欠である。しかし、何が幹で、何が枝かの区別を忘れてはならない。

小・中学校の週5日制における理念は、まさに今述べてきたようなところにあった。つまり〈学校〉が担うべき役割を明確にし、責任を持って指導する一方、土曜・日曜を家庭や地域に返そうということである。学校と家庭とがそれぞれ自立し、違う立場から一人ひとりの子どもを見守り、育てていこうということである。

しかし、当然のことながら地域の教育力にはほとんど期待できない。おとなにとって特に中学生は「わからない存在」「こわい存在」である。多くの大人は子どもたちのふるまいに見て見ぬふりをするか、うわべのみの理解を示そうとする。家庭教育を本来、補完すべき地域による教育がうまく機能しないとき、困難な問題を家庭（核家族化の進んだ現在は親個人）が背負うことになってしまう。

理念的には学校週5日制を理解したとしても、現実の問題として子どもの成長に不安を覚えてしまうのは、特に中学校においてはこのことが大きく作用していると私は考えている。事態が深刻になれば皮肉にも、家庭は学校に一方的に多くのことを望むようになる。必然である。しかもその要求は、不安が感情となって現れた形で出されるため、おうおうにして具体性の欠けた本来だれにどのような形で求めるべきものなのかがはっきりとしていない場合が多い。たとえとても大切な問題意識を含んだものであったとしても、両者がうまくそれを共有することは難しい。

学校と家庭との間に、ある距離を置いた上での信頼関係というものがなければ、きしみはさらに広がる。やはり〈学校〉〈家庭〉〈地域社会〉というトライアングルは今のところ最も安定した形

なのだろう。ここで改めて、学校教育が本来担うべき教科教育での力をいかにつけさせ、信頼を獲得していくかということを確認すると同時に、本来地域が担うはずの役割を当面は学校がその拠点となり、各方面の力を結集する場とする試みの必要性を述べたい。子どもたちの成長において、教科教育がそのみで存在できると考えるには、あまりにも現実には複雑すぎる。以下、本稿では後者についてのみ記述を進める。

そもそも地域社会教育とは何か。何を我々はそこに求めているのか。さまざまな定義が専門家によってなされているかもしれない。しかし、一言で言うならば「親でも教師でもない、魅力ある大人との出会い」であると私は考える。かつては、地域社会教育などと取り立てて言うまでもなく、あたりまえのこととしてあったものだろう。「魅力ある」とは「学校的」価値や「経済的」価値における魅力とは必ずしも一致しない。むしろ、それらと相反することもあるだろう。親の代わりでもない、一生懸命生活している大人である。

今、子どもたちはそんな大人たちと切り離され、〈家庭〉〈学校〉〈塾〉〈小グループの仲間〉といった閉塞的な「安全」(本当の意味の「安全」ではない)という名の檻の中に閉じ込められているような気がする。もし、魅力ある大人との出会いが子どもたちのそれぞれに現実のこととして起きたとき、逆に学校は今以上に学校らしく存在できるだろうし、親の知らないうちに成長している子どもの姿に突然気づかされ、不安が喜びへと変わる瞬間を味わえる家庭が多少なりとも増えるのではないかと期待するのである。

以上、〈地域社会〉による教育力の必要性と未熟なコミュニティの中におかれた子どもたちについて述べてきた。もし本校が大学進学者の人数のみで学校としての価値をアピールし、そのような視点に立って子どもたちを育てていこうとするのであれば、これらはさしたる障害ではないのかもしれない。しかし、一人ひとりの子どもを見守り、彼らの持っている可能性の実現に少しでも寄与しようとするなら、我々は教師(授業者)の顔とは別に、父母とともに一人の大人として果たす役割、子どもたちと社会をつなぐコーディネーターの役割もまた当面は担う必要があるのではないか。

ただし、これは一人ひとりの心がけや情熱といったものに帰すべきではない。組織として動くことができるよう、一人ひとりの小さな力を結集させるための体制を整えることだ。幸い、明星学園には長い歴史があり、多くの校友に恵まれている。もしそのような場があれば学校の力になりたいと言ってくれる人も大勢いらっしゃる。そんな彼らの協力を仰ぎながら、いわゆる「明星ネットワーク」なるものを築き上げ、「学校教育」とはまた別の視点から子どもたちにかかわってもらえるとしたなら、学校総体としての力も格段に大きなものとなるだろう。

中・高において学校6日制が決定した今、授業日数、授業時間数の増加分の一部を以上述べてきた趣旨に基づく教科外の活動にあてることに大きな無理があるとは思えない。

以下、紙面の都合で項目だけにする。

- I. 8年時において生徒全員に5日間の職場体験を課す。〈魅力ある大人との出会い〉
〈社会との出会い〉〈自分自身との出会い〉
- II. 学年宿泊旅行―他者との出会いから自己の発見へ―
 - ① 7年赤岳登山〈大いなる自然との出会い〉
 - ② 8・9年民家泊〈魅力ある大人との出会い〉〈異文化との出会い〉〈歴史との出会い〉
- III. 9年時の卒業研究・論文〈自分を他者に伝える〉

1) 卒業研究

1996年3月、大月の嵯峨塩鉱泉に新9年スタッフが集まった。中学校の最終学年をどう過ごさせるか、泊まりがけで学年の構想を練るためである。前年度学年主任であった飯田啓介が退職したために、急遽学年主任となった堀内の呼びかけで、姫野・重吉・石井・岡本・古川・中西の七人が参加した。そこで話し合われたテーマの一本の柱が『卒業論文』への取り組みであった。

明星の授業は一時間の授業を大切にする。しかし、目指すものは一時間の中で完結するわけではない。それぞれの教科の授業実践の先にある子どもたちの姿について語り合った。自分の興味あること、疑問に思うことを他者に語りかけ、さらに自分の考えを文章にまとめる。そうすることで他者と深くつながってほしい。本当の意味の「自由」というものはこのようなプロセスをとおして獲得できるのではないか。学年全員の賛同を得て、この取り組みは始まった。

1997年2月3日、ついに9年生全員の論文が載った『卒業論文集』ができあがった。クラスごとに4分冊、総計2,630ページ、厚さにすると13cmを超える大作となった。

翌1997年度は、森村が卒業論文の責任者となる。学年の中でもその実施に当たっては賛否が半ばした。「卒業論文の前にやらなければならないことがある」「指導の方法がない」「論文という名称がおかしい」「趣旨は分かるが、論文にこだわることはないのではないか」。しかし、森村の熱意もあり前年度と同様の取り組みを行うことになった。

以後、9年生では実施形態は当該学年に任されているものの、「卒業研究」とおして中学校の教員全員がそこにかかわることが確認された。ただし、年により目標、ねらい、形態はまちまちであった。模索の時期である。その間の経緯については『明星の教育 2013』に詳しく記されている。

2011年度、新たな展開が生まれた。全員が論文を執筆。今まで卒業研究の中でもう一つの柱であった作品制作・身体パフォーマンスについては明星祭で発表することにし、卒業研究では全員が論文を書くというように整理を行った。全員の論文の載った論文集を刊行。同時に各自一冊の本を製本する。また、12月には全員が9つのブースに分かれ、一人ひとりお客さんを前にプレゼンテーションを行った。この成功の陰には河住教頭によるパソコン（特に発表に向けてのパワーポイント）の指導があった。この年の研究発表会は7・8年生向けだけではなく、新たに父母・一般の方に見ていただく日を設け、小学校や学外を含め広く広報をした。卒業研究が学年としてではなく、中学校全体として生徒の姿を見ていただくための取り組みとなった最初の年となった。

この年の3月、今回の実践をふまえ、運営委員会より「卒業研究では全員に論文を課し、発表会において全員が一人ひとりプレゼンテーションを行う。発表会では父母・一般の方を対象とする日を設け、学年ではなく中学校全体としてその運営にあたる」という提案がなされ、中学校部会において賛成多数で可決された。

2018年度、「総合探究科」の創設とともに、授業としての「卒業研究」が9年時間割の中に週1コマ導入され、授業担当者が置かれた。それは、中学校の学びをつなげ発展させる取り組みとして位置づけられたことを意味し、「テーマ相談会」「してみる相談会」「中間報告」等、論文執筆と卒研発表会に向けてのプロセスが安定して企画されることとなった。ただ、中学校の教員が全員でかわること、生徒にとっては自分の担当教員とのやりとりが最も大切であることには変わらない。

2) 宿泊行事

① 修学旅行（伊江島民家泊）

2004 年、修学旅行責任者の石井三絵は学年で決定した沖縄旅行の行程の中に初めて民家泊を提案、コース別の中に伊江島と東村の民家泊を入れた。彼女は後日この修学旅行について「沖縄の豊かな自然や文化に触れてきました。見学というより体験することがメインで、民泊して農家の手伝いをしたり、沖縄料理を作ったり、エイサーを踊ったり、海でシュノーケリングをしたり、川をさかのぼったり、自分でしたいことを選ぶことができる旅でした」と記している。

▶▶『明星学園報』No.76（2004 年 10 月）

2005 年、責任者の堀内雅人は前年度を参考に 4 泊の修学旅行のうち 2 泊を 9 年生全員に民泊経験させることを提案し決定した。民泊場所については慎重を期すために伊江島と東村との 2 つに分けることにした。

2007 年度、沖縄での民家泊（生徒全員）が始まって 3 年目、教員のほとんどがこの行事を経験したことを期に、それまで修学旅行については行き先、内容を含め学年が各決定していたが、当面「伊江島での民家泊 2 泊を含む沖縄旅行」と、中学校部会において決定された。

〈2008 年度 日程〉

【第 1 日目】 羽田—那覇—首里城—ひめゆり平和祈念館—ホテル泊（地元子どもたちとの交流会）

【第 2 日目】 文化体験（シーカヤック・シュノーケリング・サンシン・エイサー・琉球舞踊・サトウキビ収穫と黒糖づくり・紅型・ガラス細工等）—美ら海水族館—伊江島に渡る（民家泊）

【第 3 日目】 伊江島各家庭での作業・レクリエーション（民家泊）

【第 4 日目】 伊江島—平和祈念資料館—ホテル泊（花火）

【第 5 日目】 糸数壕—国際通り（昼食・おみやげ）—羽田

以後、ほぼこの行程で修学旅行が企画されるが、一方で台風のために予定を一部変更せざるを得ない事態がしばしばあった。また、伊江島での民家泊は安定しつつも、マンネリになっているのではないかという指摘もあり、2017 年度は北海道十勝地区、2018 年度は震災被災地である陸前高田での民家泊（2 泊）を含む修学旅行が学年決定として実施された。

いずれも中身が濃く、有意義な修学旅行となったが、再び、中学校としての民家泊先を決定するにあたり、結果として沖縄に落ち着いた。ただし、民家泊先は伊江島ではなく、観光地化されておらず、琉球文化の香りが残る伊平屋島に、台風の影響の可能性の低い 7 月の第 1 週に旅行が終わるよう確認された。

② 8 年奥阿賀民家泊

8 年夏の宿泊行事は長く北アルプス登山（燕岳等）が定番となっていたが、1995 年度より登山行事を含むコース制へと切り替えられた。少人数で行くことにより体験のバリエーションを広げるとともに、コース企画の段階から教員・生徒ともに主体的に取り組めるだろうことが期待された。毎年担当学年からはさまざまなコースが提案された。穂高・秋田駒・甲斐駒千丈・鹿島槍等の登山コース、式根島・伊豆戸田での海の生活、裏磐梯や富士五湖でのキャンプ、熊野古道や白神山地での体験など小グループだからこそ可能な宿泊行事が企画された。

その多くは生徒にとって満足度の高いものであったが、どうしてもコースによる格差は出てしまう。また、教員にとって大きな負担になる一方、学年としての一体感にかけける面があった。それを補うために、夏休み明けにさまざまな形での行事報告会を行うようになった。これが現在中学校で盛んにおこなわれているプレゼンテーションの走りであったように思う。

学年全員がまとまりをもって行う取り組みとしたい。それでいて全員同じ行動をするのではなく、個別の自由度を持たせたい。そんな中、前に述べたように2004年度、初めて9年修学旅行において民家泊が一部実施され、2007年度中学校としての民家泊を含む修学旅行（4泊5日）が可決された。

ちょうどその年、8年は初めて新潟奥阿賀地域において2泊の民家泊を含む3泊の夏季行事を実施した。会津文化を引き継ぐ奥阿賀の純朴で真面目なお人柄に触れることは、思春期真っ只中の8年生にとっては大変大きな刺激となった。また学年全体でのキャンプ泊やレクリエーション、田植え体験等はまさに学年やクラスの一体感を深めてくれた。

この経験によって学んだことは9年での伊江島民家泊をより意味のあるものにしてくれた。以後、8年「新潟奥阿賀」、9年「沖縄伊江島」民家泊の流れは定番となった。

ただ、8年は2学期に実施する職場体験など、行事に向けての準備の負担が大きいこともあり、2018年、いったん学年行事から夏季有志行事への変更という苦渋の決断を行った。しかし、生徒の希望者が多いこと、また保護者の皆さんの要望も大きく、2021年度より再び学年行事として復活させることにした。ただ、2021年度は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）蔓延のため中止、その後も受け入れ態勢が整わず、代替の地域での実施となっている。

奥阿賀からは、受け入れのできないお詫びということで7、8年生全員に阿賀町の特産が贈られた。また、学校には新潟県の県木である「ユキツバキ」の苗木2本が次のようなメッセージと共に贈られ、現在中学校校舎前の花壇に植樹されている。

ゆきつばきは雪国新潟の厳しい雪の下で耐えられるしなやかな丈夫で強い枝が特徴であり、貴校の生徒さまにもゆきつばきのような強さで日々学校生活を送って欲しいという願いも込めて送らせていただきました。

③ 7年八ヶ岳登山

「明星学園は遠足学校」と言われたほど、明星学園は創立当初から海へ、山へと出かけていた。それは教室での授業だけでは得られない、自然の中での体験に真剣に取り組んできた歴史でもあった。

中学校ではかつて9年の修学旅行を含め、すべての学年の夏季行事は山小屋泊を含む登山であった。修学旅行での登山は1988年度の白馬岳（猿倉・白馬尻・大雪溪・白馬岳・清水岳・白馬大池・梅池）が最後となった。また、8年での学年登山も1994年度をもって新たな展開を見せたことは前に述べた。

そのような意味で登山行事の伝統を残しているのは7年の八ヶ岳行事のみとなった。7月の終業式の後、赤岳鉱泉小屋に2泊し、赤岳または硫黄岳を目指す。基本的に学年担当を超え、中学校の教員全員で引率する。まさに、教員も生徒も同じ釜の飯を食べ、濃密な時間を過ごす。

毎年作られる「八ヶ岳登山のしおり」には、以下のような文章が掲載されている。

…かつて、ある先輩の言った「明星学園は『柔らかな鍛錬主義』の学校だ」という言葉が、なぜか今でも私の心に強く残っています。「明星学園」と「鍛錬」という一見不似合いなつながりが、「柔らかな」という言葉をつけた瞬間、私の中でしっくりおさまりました。その当時の私は、明星のいう「個性尊重・自由・平等」が「鍛錬主義」と相反するものだといった常識に、ある違和感を持っていました。本当に「鍛錬」は「個性」をつぶすものだろうか？「個性」をみがくためにこそ「鍛錬」が必要な時もあるのではないかと？

しかし、その違和感について語る言葉を当時の私は持っていませんでした。ただ、感覚として感じていただけです。「言葉」は、使われていくうちに手垢がついていきます。「善・悪」「右・左」「新・旧」といったように単純な二項に分類され、与えられたイメージと引き換えに、その言葉が本来持つ大切な何かが失われていきます。言葉から意味が失われた時、それを使う人間の心もまた単純化されていきます。「鍛錬」という言葉には「根性」「管理」「苦しい」といったイメージがつきまといます。そのイメージと明星学園とは結びつきません。しかし、「個」を伸ばすために必要な「鍛錬」も絶対にあるはずで、柔らかな鍛錬主義の学校。——この言葉は、私の明星学園に対するイメージを最も端的に表す言葉となり、試行錯誤を続けていた私が、先輩教員たちとこの感覚を共有しているのだという安心感を得たときでもありました。

一部の学校では、今でも登山行事や遠泳、歩行大会などを実施しているところがあります。本校においても7年生（中学校1年生）による八ヶ岳登山は、伝統的な行事です。中学1年生全員が八ヶ岳最高峰の赤岳（2,899m）に登るなどという学校はそうはありません。長野県の地元の中学校でも多くは硫黄岳登山です。「鍛錬主義」はここでも生きています。高山では自分の足しか頼るものはありません。もちろん、車もコンビニもあります。立ち止まれば自分が遅れるだけです。ではなぜ「柔らかな」なのか？明星学園の登山が、山ですれ違う他の学校と異なるところがあります。他のほとんどの学校は、全員が1列になって歩いています。引率の先生はトランシーバーを手にし、集団が離れないよう連絡を取り合っています。それに比べて明星は、全員を登らせることは同じであっても、全体を九人グループ16班に分け、グループごとに教員がつきます。子どもたちの体力はさまざまです。足の強さも一樣ではありません。足の速い子に合わせるとグループは崩壊してしまいます。弱い子を先頭にし、体力のある子には全体を見る役割を与えます。たった2泊3日であっても、そのグループの中では大きなドラマがあったり、成長があったりします。明星の教育・授業を象徴しているとも言えます。グループを引率する教員の力量も問われます。力量とは体力ということではありません。子どもたちの様子を観察する力、疲労の度合い、わがままの見極め、グループを「同質の個」の集団としてまとめるのではなく、「異質の個」を互いに認め合えるようにまとめようとする志向性。

昔から山で生徒を引率するとき、教師がやってはいけないことをいくつか言われてきました。一つは、疲れ切った子どものリュックを教員が一人で背負わないこと。その教員に体力的な余裕があるかないかは関係ありません。その子のリュックの中身は、グループの生徒みんなで分担する。もう一つは、生徒を背負うこと。本当にそうしなければならない非常事態の時は、小屋に何とか連絡を入れ、助けを求める。今になってやっとその意味が分かるようになってきました。山は非日常です。日常の常識が山では非常識であることも多々あります。大人だろうと子どもだろうと自分のことは自分で守らなければなりません。自分を守れない人間が他の人を守ろうとしたとき悲劇が生まれます。もちろん、「本格登山」と「学校登山」はちがいます。でも、自然の厳しさを忘れてはいけません。自然の厳しさの前では、謙虚さが求められます。

3) 職場体験

2006年、6・6制が始まり中・高の間の人事交流もおこなわれた。また、これを機に2007年度より8年生における5日間の職場体験の実施が決定された（正確には3年間実施したのち、改めて存続させるか決定）。責任者になったのは進路指導部の安部喜史郎であった。安部はそれまで高等学校において「インターンシップ（職業体験）」の運営、実施の経験があった。2006年7年生の

学年主任となった堀内と安部は父母から協力委員を募り、精力的に職場の提供を求めた。父母・卒業生を含めできるだけ明星の関係者のいる職場にお願いしたかった。とはいえ、大きな理想はあったがそれを形にするには暗中模索であった。安部はそのほとんどすべての職場をまわり、職場と学校との関係を築いていった。その際、問題となったのは父母や職場の方々に何を語るかであった。なぜ8年生に5日間の職場体験を課すのか？ 高等学校における「インターンシップ（職業体験）」と中学校における「職場体験」とではおのずからその目的は異なる。生徒指導部ではその目的を「出会い」と位置づけ、①人との出会い ②現実の社会との出会い ③働くこととの出会い ④自分自身との出会いという4項目を挙げ、「職場体験ハンドブック」を作成した。ここでは、そのハンドブックの巻頭に書かれた堀内の生徒へのメッセージを記す。

自分の将来について考えたことがあるだろうか。漠然としたものであっても、目標やあこがれというものを持っているだろうか。現代社会は膨大な量の情報にあふれ、それでいて大切なものが見えにくくなっている。14歳の君たちにとって“大人”になるということがどういうことなのか、非常にわかりづらいはずだ。子どもより子どもっぽい大人はいくらでもいる。年齢や経済力だけで大人と呼ぶのだとすれば、あまりにさみしすぎる。この問題は、大人であるはずの私たちの側に痛烈な問題提起として跳ね返ってくる。一方、君たちはそんな中、実際に現実を経験することなく頭だけでこの世の中を分かった気になってはいしないか。細切れの情報が、安物の物語のように次々と垂れ流されてくる。また、自分のことを簡単に決めつけ、それにとらわれてしまっていないか。それでいて不安感はずっと大きくなっていく。それは実は社会のことを、自分のことを本当の意味で実感できていないからだ。失敗するのが怖い。ますます自分の世界から出られなくなってしまう。自分のやりたいようにやるという“自由”からは“不自由”という結果が生まれるだけだ。そもそもこの世の中はわからないことだらけだ。簡単にわかるなどということはないし、わかったふりをするともないのだ。しかし、この世の中はそんなに捨てたものではない。素敵な“大人”はたくさんいる。家庭や学校とはまた別の場所で、そんな一人の“大人”に出会い、真剣に向き合うということこそが社会を知り、自分を知る上で今大切なのではないだろうか。そして、大人が大人として生きている場所の一つが仕事場であると私たちは考えた。ある人にとってそこは、たった一度の判断ミスや、たった一回の失言で自分だけではなく、従業員の運命をも変えてしまう可能性を常にはらんでいる場かもしれない。一円の利益をあげるために私たちの想像もつかない苦勞をされているかもしれない。多くの利益を上げることよりも、その人にとって大切な何かを持ち続けて働いている人がいる。人間の力ではどうにもならない一回の台風の被害でその年の収穫を失おうとも、変わることなく日々を生きている人がいる。私たちの世の中はそういう人たちのつながりで成り立っているし、私たちはそういうつながりの中に生きているのだと思う。14歳の君たちを職場に5日間送るということは、仕事をおぼえてきてほしいということではない。ましてや、たんなる社会科見学などではない。実際の職場を見せていただき、多少の仕事のお手伝いをさせてもらうことをとおして、“本当の大人”と出会ってほしいがためのことである。そのような意味で、関心のあふれる仕事が見つからないということは心配にあたらない。ある有名なコメディアンが言っていた。「過去を振り返り、自分を成長させてくれたのは常にそのとき自分にはむいていない、いやだなと思う仕事の中にあった」。むしろ、自分にとって意外だと思うことの中にこそ新たな突破口があるのかもしれない。“本当の大人”とは外見のうすっぺらなかつこよさとは必ずしも一致しない。つらくても、よごれても自分の責任で行動し、だからこそプライドを持って生きている人のことである。ただ、職場に行きさえすればそういう人に会えると思ったら大間違いである。“本物の大人”に出会うためには、出会うための流儀がある。自分の身の丈に合わなくなったココロのカラを脱ぎ捨て、素直に、真剣にその人と向き合うことだ。初めての体験、わからないのはあたりまえだ。むしろわからないことはわからないと言い、素直に教えてもらうことから全ては始まる。そして最も大切なことは、相手の話をしっかり聞くということだ。人の話を聞けない人に、だれも本当に大切なことなど語ってはくれない。そんな単純

なことができさえすれば、きっといい経験となって自分に返ってくるだろう。職場体験の実施にあたっては、父母の皆さんを中心に、卒業生、広く学校関係者の皆さんのお力をいただいた。感謝をするとともに、今の学園がさまざまな形で、多くの方々によって支えられているのを感じる。君たちは、その中に生き、それぞれの職場にでかけていくのだ。本気でしかられることもあるかもしれない。しかし、それらのことを肝に銘じ、たくさんのことを発見、吸収してきて欲しい。すばらしい出会いがあることを願っている。（「2007 年度職場体験ハンドブック」より）

1997 年 11 月 5 日から 10 日の間のうちの 5 日間、大きなトラブルもなく無事、第 1 回の職場体験は成功のうちに終わった。心なしか子どもたちの姿がたくましく見えた。

2009 年度、第 3 回の職場体験が終わり、ほぼ全員の教員がこの取り組みを経験したことになった。翌年度以降の実施について、議論が行われた。当然、賛否両方の意見が出された。生徒を職場に送り出すまでの準備は教員にとって非常に大きな負担となる。にもかかわらず結果は賛成多数であった。それは父母の期待の大きさと、何より生徒の成長を肌で感じることでできた結果ではなかったかと思われる。また、この年 1 月 16 日、「職場体験報告会」が保護者だけでなく初めて 7 年生対象におこなわれた。学年間のつながりが生まれる大きな一歩となった。2010 年度は父母による単年度の職場体験ボランティアの会が生まれた。それまで滞っていた資料の整理が進み、また職場にも実習の後、挨拶にうかがっていただいた。生徒は第 1 回目から実習の後、「体験文集」を作成し、また職場ごとにパネルを作り、明星祭で展示することが定例となった。2011 年度は、それまでいちょうのホールに 7 年生を集め、選ばれたグループによっておこなわれていた報告会を、全ての 8 年生が 7 年生のいずれかの教室に出向き、報告会を行った。これにより、8 年生全員が職場体験の報告をし、9 年生ではやはり全員がお客さんの前で卒業研究のプレゼンテーションを行うという流れが確立した。▶▶職場一覧、体験の流れの詳細は 90 年史 P.395 ～ 400 参照

その後、職場体験の実施母体は学年から進路部へと移り、受け入れ職場のデータ管理や事前・事後の学習が積み上げられていくようになった。その成果は大変大きく、子どもたちの成長を直接感じることでできる通過儀礼的な側面も持っていた。しかし、中学生の生徒数の増加、職場の確保や一軒一軒へのご挨拶など、そこにかかる負担は大変大きなものになっていた。体験期間の短縮や職場の皆さんとのやり取りの簡略化は、私たちが本当にやりたいことと逆行することになってしまった。

一方で中学校「総合探究科」の取り組みは、この年 4 年目を迎え、授業カリキュラムも整理されてきていた。8 年の「探究実践」ではプロジェクト型学習として、グループによるフィールドワークが構想されていた。インタビューや取材などの活動を通して、主体的に大人に出会う機会が想定されている。また、9 年の「卒業研究」、そのプロセスとしての「してみる計画」では、自ら決めたテーマ（問い）を解決するために、大学の研究室を始め、さまざまな職場に出向き、質問をしたり、見学をさせていただいたりという経験をさせていただいている。

2020 年度から翌年度にかけ、コロナ禍の中、生徒を職場にお預けすることが現実的にできないという事情もあったが、これを機に 2021 年度より「職場体験」の取り組みを前向きに解消し、「総合探究科」において積極的に大人にかかわることができる活動へと一本化する判断を行った。

4) 特別講座「この人に会いたい」

中学校では、社会の一線で活躍する「おとな」を招き、特別講座「この人に会いたい」を実施している。学校カリキュラムとして決めている企画ではない。学年の教員や生徒から出てきた声の実現していく。このような形で定着したのは2013年度のことだった。

「一般の講演会依頼ならお断りしているんです。でも、中学生に求められたのではお断りできません」。笑顔でそう言ってくださった方がいた。「大人相手の講演なら慣れているのですが、中学生に話をするのは初めてなんです」。不安そうな面持ちで来校された方もいらっしゃった。そこでは、講師の先生の人生が、貴重な経験が、ご専門の学問が語られる。その方にしかできない話である。生徒は夢中になって聞いている。どこまで理解できているのかは正直分らない。しかし、何かが伝わっているのを感じる。

講師の先生に共通しているのは、自分にできることを見つけ、自分の個性を誰かのために活かそうとしている姿である。ただ、ご自身のやるべきことを見つめるきっかけは、けっして幸福な出来事だったとは限らない。広島で被爆したこと。中学校時代に立て続けに家族を失ったこと。チェルノブイリの原発事故の影響で甲状腺がんに苦しんでいる子どもたちの映像を見たこと。

生徒たちには、自分の夢を見つけてほしいと思っている。自分の人生を歩んでほしいと願っている。しかし、自分の思い通りにすべてがいくことなどありえない。この先大きな挫折も経験するだろう。その挫折からどう立ち直るか、いや挫折をバネにどう前へ進むことができるか。それが生きる力だと思うのだ。だからこそ、中学生時代にたくさんの本物の大人に出会ってほしいのだ。

講師の先生のお話からは常に中学生への温かなメッセージを感じる。

「自分自身で感じ、自分の頭で考えてみよう」。人生に正解などないことを知らされる。

「考えているだけではなく、行動してみよう」。「たとえ当初の思い通りにはいかなかったとしても、行動してみることで思いもしなかった展開が生まれてくる、思いもしなかった宝を発見することができる」。結果を求めるからこそ行動することに躊躇してしまうのだろう。失敗を恐れない勇氣。そして、プロセスの大切さ。

授業の後、しばしば講師の先生からこんな感想をいただく。「生徒の質問にドキッとさせられました。一見素朴そうに見えて本質的なことを聞きますね。大人の講演会や他の中学校では、どのような質問が出るのかだいたい想定できるんです。明星学園の中学生はちがいますね。とても面白かったです」。明星学園の教師冥利に尽きる瞬間である。

現在、中学校ではこの特別授業以外にも、「総合探究科」のカリキュラムの一環として、大学等の研究者をはじめ、社会で活躍されている方々と出会い、相談できる環境が整っている。これらを含めて中学校における「進路指導」と呼ぶことができるだろう。

〈これまでのおもな講座〉

- ・ 安田葉津紀氏（フォトジャーナリスト）『写真で伝える仕事～カンボジア・東北の被災地から～』
- ・ 菅谷昭氏（元医師・松本市長）『21世紀を生きる君たちへの期待』
- ・ ダグラス・ラミス氏（政治学者）『世界で今起きていること』
- ・ 沙央くらま氏（元宝塚歌劇団・卒業生）『夢を叶える』
- ・ 柳亭小痴楽氏（落語家・卒業生）『落語の授業』

- 田島夏子氏（京都大学野生動物センター・卒業生）『私のイルカ研究』
- 佐藤和孝氏（ジャーナリスト）『信念をもって仕事をするということ』
- 保立道久氏（元東京大学史料編纂所教授）『地震火山列島の歴史を考える』
- 畑口勇人氏（浅川伯教・巧兄弟資料館学芸員）『浅川巧の生き方～「共に生きる感覚」とは何か～』
- 高橋佑磨氏（千葉大助教・卒業生）『明星とわたし～何がどうなって、いま研究者になっているのか』
- 河野ルル氏（絵描き）『絵を描くことに恋をして』
- 室井舞花氏（『恋の相手は女の子』著者）『恋の相手は女の子』
- 郡司芽久氏（『キリン解剖記』著者）『キリン研究との出会い』
- 小松由佳氏（登山家・ドキュメンタリー写真家）『見えない山を登り続ける～K2 登頂からシリア難民取材へ』
- 繁田真爾氏（元本校教諭・現大学教員）『「罰」から考える社会』

5) 中学校自治会

①自治会設立の目的

2009 年、中学生の自治の意識を高め、自分たちで自分たちの学校生活をより良いものにしていくことを目的に中学校自治会が設立された。メンバー構成は生徒全員で、その中から選出された会長（1 名）・副会長（2 名）・書記（2 名）・クラス代表（各 2 名）、そしてクラブ委員会の議長（1 名）・副議長（1 名）・書記（1 名）で中央委員会を組織している。

中央委員会は毎週 1 回、昼休みの時間を使って開催している。また、役員会（会長・副会長・書記の 5 名）は中央委員会の議題等について検討している。

②心地よい学校環境を作るために

中央委員会では日常生活における課題の検討を行う。それらの課題は不満を言っているだけでは解決できない。心地よい学校環境にするために自由な発想で解決策・改善策を探っていくことが求められる。そのために中央委員会・役員会を定例化（毎週 1 回）、また、多くの声に耳を傾けようと 2010 年から「意見箱」を設置、小さな声も大切にしている。

ここ数年で取り組んだことを挙げてみる。

- 昼休みのグラウンド・体育館の利用について
- 小学生とのグラウンド・体育館の住み分け、ボールの貸し出しと管理など
- 教室にグラウンドの砂を持ち込まない対策
- 昼休みの屋上使用について
- 昼休みのトランプ & UNO 使用について
- 階段の左側通行

③地域とのかかわり

地域とのかかわりも自治会の大切な役割である。2010 年より、地域清掃を各クラス 1 回（12 クラス）行うことを決定、学園の名前の入ったビブスを身につけ、清掃に出かける。清掃地域は、学校から井の頭公園方面、黒門方面、明星学園入口のバス乗り場方面、西園方面、黒門から井の頭公園方面の 5 コースである。

また、登下校時のマナー、スポ GOMI 大会（スポーツごみ拾い大会）への参加の呼びかけも行っている。

④楽しい学校生活をつくるために

毎年4月に行われる新入生対象のオリエンテーションでは、スライドを用いて学校生活を紹介している。入学間もない新入生が新しい学校になじめるよう、さまざまな声掛けが行われている。

また、2015年、自治会を中心に、内容をすべて生徒の手で作り上げる「タテワリ交流会」が年間行事となり、生徒主体の取り組みがさらに充実することとなった。「タテワリ交流会」とは、6月に行われる学年を越えた交流を図るための、一日をかけたイベントである。各学年のクラス代表が中心となり、縦割りクラスごとに打ち合わせを重ね、種目を決定する。「どろ刑（ドロケイ）」「増え鬼（フエオニ）」「だるまさんがころんだ」「明星ドッジボール」「明星なんでもフルーツバスケット」。明星らしく臨機応変にルールを考えていく。「いすとりゲーム」「人狼^{じんろう}」、雨天でもできる室内用のゲームも用意される。

この経験は、下級生にとっても9年生にとっても大きな意味を持つ。日常の学校生活の風通しをよくするために、また秋の運動会ではクラスを挙げての合同応援合戦の盛り上がりへとつながっていく。

現在、タテワリ交流会だけではなく、昼休みや放課後を利用した活動についても検討している。

(3) 高等学校の教科外活動

1) 自治会

高校の自治活動は自治会を中心に行われる。自治会はここ5～6年にいくつかの大きな改革を行った。

その一つはクラブの予算についてである。以前は自治会の生徒がクラブの予算を決めてきた。しかし、問題点として、

- ①約400万円の予算を10人程度の自治会役員が決める。金額が大きすぎて役員の負担が大きい。
- ②前年度のクラブ予算を元に、役員の判断で前年度に対して1、2万円動かすが、そこに客観性はない。また、各クラブの要望を長期にわたり客観的に判断することができない。役員の中にクラブに入っている生徒も多く、公平性という観点から難しい。
- ③複数のクラブで、一人当たり、年度当初に支払っている自治会費（5,000円）を超えて支給されている。

などが問題点として挙げられた。改善策として、クラブ予算は学校側（教師）が組み、自治会費は行事・委員会活動のみに充てるようになった。

もう一つは、自治会役員の任期延長である。自治会役員の任期は12年生の明星祭後までとなった。そのため、自治会に10年生からいる生徒は、体育祭、明星祭を3回経験することになる。例年、明星祭などの行事は、11年生が中心となっておこない（体育祭は12年）、12年では行事運営に携わらないため、その経験を次の年に引き継ぐことが難しかった。これでは生徒にノウハウが蓄積しにくく、行事の充実・発展も困難であった。自治活動に12年生まで関わることで、経験が生き、自分たちで動かせる範囲が多くなる。このように制度を整え、多くの経験を蓄積することで、生徒の自治活動が充実したものとなってきた。

自治会は行事を含め、多くの仕事に携わるようになってきた。以前は、行事にほとんど関わるものがなく、外から見ている生徒にとって、自治会が何をしている組織か分からなかった。そのた

め、自治会役員に立候補する生徒は少なかった。各行事の委員には行動力を持つ生徒が集まるが、これは、各行事自体が面白く、やりがいのあるものだからだと考えられる。このような生徒に自治会役員への立候補を促せるように、自治会役員が各行事の運営に携わっているということを生徒全体に見える形にする必要がある。各行事の運営を自治会役員と各委員会の連携を行うことで、自治会役員に行事運営の経験を積ませ、その経験を次に生かせる。また、自治会の魅力を高め、より意欲的で実行力のある生徒が自治会に集まり、生徒たちによる自治を推進させることができるようになった。

2) 行事

学校で行事が行われる理由はいろいろあるが、最大の理由は「みんなが協力して一つのことを作りあげること」にある。仮に学校が勉強だけの場であれば、高校段階で、今は通信制高校や高等学校卒業程度認定試験（旧大検）があり、学校に行かなくても大学進学への道は開かれている。それでも、学校が存在している理由は、学校でしか出来ないことかあるからで、その一つが行事だろう。行事によりクラス集団をつくり、クラスにまとまりが生まれれば、クラス、学校への所属意識も高まり、学校生活の充実へとつながって行くだろう。また社会に出れば集団で作業することがほとんどで、ある目的のために集団の中で、個人がどのような役割を担い、どのようにふるまうのか、体験的に学習することは重要である。クラブは、サッカー部であればサッカーに興味のある人、音楽部であれば音楽が好きな人という、ある目的を持った集団である。クラスはこれらとは異なり、特定の方向性を持っていない。偶然集まった人たちからなる集団である。行事の成功に向けて協同することを通して、学習していくのである。

高校では、1学期に体育祭、2学期に明星祭、3学期に音楽祭という3つの大きな行事がある。

1年かけてこれらの行事を中心にクラスのまとまりを作っていく。

三大祭 ①体育祭（1学期）

2013年度の体育祭は例年から大きく変わった。2012年度の全校生徒からのアンケートや自治会での話合いで、体育祭に球技だけでなく運動会的要素を取り入れたいとの希望があった。今までの体育祭の問題点として、「10年生の試合数が少なく、時間を持て余してしまう」、「体育が苦手な人も含めてみんなが楽しめるものになっていない」、「クラスで一つになる機会がない」というような点があがった。

そこで、クラス全員で出来るものと、今までの球技大会とを両方併せ持った形を提案した。

1日目の午前はクラス全員で出来るもの、午後は学年ごとにクラス対抗でできるもの、2日目の午前は選抜のもの（これは従来の球技大会と同じ形）、午後は、再びクラスでできるもの、最後に縦割りの選拔リレーとした。

1日目の午前はクラス全員ができるものとして大縄、全員リレーとした。大縄は、クラスで息を合わせなければいけないもので、ウォーミングアップにもなるものを選んだ。運動が苦手な子が縄にかかっても、やり直して、3分間で一番多く飛べた回数を採用することとした。

全員リレーは、大縄同様にみんなで出来るものとして選んだ。全員リレーは名列順とし、名列を背番号としたが、理由は次のようなものである。好きなように走ると審判が順番をチェックするのが煩雑で、見ている人が今どの順番で走っているのか分からない。休みが多いクラスは、足の速

い人を補充するため、有利になるというようなものである。また、Tシャツに名列番号をアイロンでつけた。

1日目の午後は学年ごとに競技を行った。これは、例年、3学年で試合をすると10年生はすぐ負けて、暇な人が多数出ることを防ぐためである。また予選リーグはクラス全員が必ず1回試合に出るようにして、午前中の全員で行うという流れを継続させた。決勝トーナメントは代表選手が出ることで、競技性を高めた。競技の選定は以下のように行った。10年はまだ知り合っていないから、みんなが出来るドッジボール、11年は10年の時に体育で経験したバスケットボール、12年は11年の時に経験したハンドボールにした。学年ごとに運営したことにより、通常10年の体育祭委員は上級生の言うことを聞いているだけだが、学年を動かしていく難しさを学べたのではないと思う。

2日目の午前は今までの体育祭と同様に3学年で競技を行った。初めは男女混合バレーとしたが、生徒のアンケートから男子サッカーの声が強く、女子バレー、男子サッカーとした。

午後の「しっぽとり」は、オリジナル競技である。これは体育祭に激しいものを持ちこみたいという狙いがあり、騎馬戦や棒倒しが候補に挙がったが、危険があるということで、新しく自分たちで競技を生み出した。いくつかの試行錯誤を重ねてルール化したが、約15人×6クラスという多人数でゲームをしたことがないという状況だったが、うまく出来たのではないと思う。ただのしっぽとりではなく、ボールを入れることで、チームとしての作戦が必要となるように工夫した。選拔リレーは予想通り盛り上がった。最後に3学年の縦割りチームで写真を撮った。

生徒側から変えることができるという経験は、「自主自立」を促す強力な仕組みである。

三大祭 ②明星祭 (2学期)

明星祭は、クラスとしてのまとまりをつくる場、クラブ・委員会・授業など日常の活動を報告する場、高校への進学を考えている中学生へ向けて魅力を発信する場、などさまざまな目的を持っている。

ここ数年、10・11年の各クラスが取り組むことになっている企画を映画制作とし、全クラスに学校からビデオカメラを貸与した。映画にした理由は次の通りである。ステージ企画でもよかったが、ステージ企画はクラスの全員参加のために、全ての企画をその時間止めなければいけなくなり、全体の運営が難しいと判断した。映画であれば、事前に完成させてしまうため、当日がフリーになり、タイムスケジュールが組みやすい。以前のクラスごとの教室を使った企画では、12クラスそれぞれの個性が出る企画を出すのが難しく、企画が重複することが多かった。一部のクラスでは、明星祭の間際になって企画を決めて、やっつけで行うことも散見された。またクラブや有志、バンドなどに参加する生徒がいて、クラス企画から抜けてしまうため、当日のクラス企画を充実したものにすることも難しい。これらの点を考えて、じっくりと準備をして取り組める映画製作とした。クラス企画を映画にすれば、明星祭の前に完成でき、当日、生徒は個々の取り組みに力を注ぐことが可能になる。映画は、脚本、音楽、演技、演出、衣装、編集など多岐にわたる役割分担があり、総合芸術としてクラス全員で取り組むことができる。クラスのメンバーがお互いの長所を知り、適切な役割分担をすることで、質の高い映画の完成を目指した。ロングホームルーム（LHR）の年間計画を整備し、じっくりと時間をかけてクラス全員を巻き込む形で映画を作ることにした。

中学生が明星祭に参加するようになって数年になる。学年ごとの企画、卒業研究、ステージの

有志企画、バンドなどのかたちで参加している。また、中学生にお化け屋敷のスタッフや、当日のボランティアを募り運営を手伝ってもらった。中庭の巨大パネル製作では夏休みに中学生が来て手伝う場面もあった。中学の自治会役員が明星祭委員会に参加し、中学とのパイプ役を担うなどの動きができてきた。中学の自治会で活躍した生徒は、高校に進学後、自治会役員に立候補するなど、自治活動に中・高通じて参加する流れができつつある。

明星祭にOBが集まる場を作りたいと考え、今年度はグラウンドにテントを用意した。OB、退職した教員などの関係者が集まるホームカミングデイとしての機能を持った場にしたいと考えている。また、明星祭を通じて、地域とともにある学校と感じられる場にすることができればいいと考えている。「夏の学校」や「秋の学校」の開催で、学校が地域に開かれた取り組みが行われている。自治会では、保健委員会とクラブで土曜日に地域の清掃に取り組むようになった。このように少しずつ地域貢献しながら、交流を図っていきたい。外部模擬店は三鷹台商店街を始め、近隣のお店に来て頂くことができた。地域の方々も参加して明星祭が開かれれば、明星学園の地域での役割も広がっていくだろう。

三大祭 ③音楽祭 (3学期)

音楽祭は、体育祭、明星祭のクラスでの活動を通じてできた関係を生かす集大成の行事である。2部構成になっていて、1部は、音楽選択者の合唱、クラスの課題曲・自由曲の合唱、2部は9年生の学年合唱、音楽部、有志等の発表が行われている。2部の内容は年度によって少しずつ変化している。自由曲は必ずしも合唱曲ではなく、選曲にクラスの個性がでる。11月ぐらいから練習が始まって1月末の発表まで、徐々に雰囲気が高まってくる。歌を歌うというシンプルな行動の中に、選曲や衣装などの舞台演出を含めたクラスの個性をどう盛り込めるかが見どころであり、1年間の成果を発揮できる場となっている。

3) 二者協議会

①二者協議会発足の経緯

2012年から2013年にかけて、生徒指導部長を務めた薬師大五郎（理科教諭）は、自治会や委員会の仕事の整理を試みた。

例えば、三大祭委員会とクラス委員会の場合では、三大祭委員はクラスでの行事に関する仕事（体育祭での選手選び、明星祭でのクラスの出し物決め、音楽祭での練習など）はしないで、行事全体の仕事をする事とした。クラスからの選出人数制限もなくし、行事が終わったら、すぐに次年度の委員を選出し、年間を通じて仕事をするような形に変えた。委員会は年間を通じて活動することで、集団として少しずつ力を出せるようになった。また、先輩を見て後輩が集まってくるという良い変化がおきた。

一方で、自治会の大きな役割としてきたクラブの予算配分については、分配した金額に対する責任を持つ主体は自治会ではないと教師側が判断し、これを取りやめた。予算の決定が自治会の役割ではなくなると、クラス委員会や三大祭委員会とは違い、自治会がどういう役割を担う組織なのか、外から見て分かりにくくなった。同時に、各委員会を総括する立場として、自治会自体が取り組める内容に欠けていたこともわかった。

そこで自治会の役割を再検討した結果、二者協議会を立ち上げようということになった。生徒

私たちは学校に対してさまざまな期待や思いを持っている。生徒と教員の二者が対話することで、学校生活を自分事として考えられるようになることを期待した。自治会、委員会といった自治活動を通じて、自分たちで考え行動する機会を作ることが生徒指導部の仕事であり、生徒をサポートする形で並走することで、生徒全体が「個性尊重、自主自立、自由平等」という教育理念に近づいていければと考え、この「二者協議会」実現に向けて活動してきた。

②二者協議会実施までの流れ

2014/2/8 (土)	自治会・中央委員会 二者協議会設置の要望とアンケートの要望	2015/1/31 (土)	二者協議会準備会 二者協議会に向けての試行
4/23 (水)	高校部会 二者協議会設置の要望と準備委員会について	5/13 (水)	生徒総会、規約承認
6/25 (水)	高校部会 二者協議準備会の開催について	6/3 (水)	高校部会 教員内での授業についてのグループワーク
11/1 (土)	法政大学中学高等学校 法政の三者協議会を見学	6/10・17 (水)	LHR ⑥「授業」についてグループワークを行う
11/26 (水)	高校部会 LHRをつかってクラスでグループワークを行うにあたっての LHR 授業案 今後の予定と LHR で使用するワークシート	7/8 (水)	本番

③第2回二者協議会事前学習 活動報告書（2015年6月21日）自治会長：朝海^{あさかい} 清史

1. 活動内容

明星学園生徒自治会は、先生方と生徒の理想の違いを明確にすることによって、双方納得のいく理想の授業をつくるため、生徒の考える授業の理想を知ることが目的として2015年6月10日（水）に11年生、6月17日（水）に10年生・12年生を対象に二者協議会に向けた事前調査活動を行った。

調査の内容は目的にもあるように、「授業をどのような目的で受けているか」と「その目的に対する現状はどのようなものであるか」を質問する形であった。

2. 授業の目的

今回行った活動において、生徒一人ひとりが授業に対してどのような目的をもっているか、またその目的に対して現状はどのようなになっているかを問うた。

結果から多くの生徒は受験のため評定がほしいといったことや、一般教養を身に付けたいといったことを目的として授業にのぞんでいると読み取れた。人によって答えはさまざまで、授業をそれらすべての目的に合わせるのには難しいと思われる。

3. 目的に対する現状

生徒一人ひとりの目的に合わせることは難しいかもしれない。「受験に対応した授業」と「考えたり話し合いながら答えを導き出す授業」とでは相反するとまではいかないが共存するのが困難であるからだ。

しかしながら、生徒の多くはさまざまな目的を持っているのと別にある疑問をいだいていた。それは「2014年度生からの選択授業カリキュラムの大幅な変更について」と「明星学園小学校・中学校との学びの違いについて」である。

また今回行った調査において、口では歩みよるべきだと言いつつも「学校のカリキュラムをもとに戻してほしい」や「授業がつまらないからわかりやすく教えてほしい」などという意見から、生徒たちの半数近くは自分たちで現状を改善しようとするというより、先生方に解決を委ねているように見受け

られた。一方で「自分たちがしゃべっておきながら文句を言うのはおかしい」といった、生徒に対して批判的な意見も半数近くあったことから、双方が自らの落ち度を把握することが、お互いの理想に近づくための手段であるとも考えられる。

4. 生徒自治会からの要望

生徒の意見を集め自治会で生徒に何がフィードバックできるかを考えたところ、「カリキュラムを元に戻す」ことよりも、それなりの理由をもって決断した「カリキュラム変更の意図を教えてもらう」ことの方がお互いを理解するというに近づくと考えた。生徒の多くは以前のようにコースにしばられることなく授業を選択できることこそが明星学園の「自由」かつ「自主自立」であると考えているため、変更後のカリキュラムに含まれる明星学園の自由かつ主体的な学びというのはどのような点であるのかを教えていただきたい。

また、ほとんどの明星学園の小学校・中学校からの内部進学生には授業における考える時間や、ディスカッションの時間というものは授業の核であるという考えがあるようであるため、高校の授業にはやや違和感があるとの意見があがった。自治会は、なぜ同じ明星学園なのに高校になって突然そのような違和感が生じるのか、小学校・中学校の明星の教育に対して高校の明星の教育というのはどのような理念があるのかをフィードバックすることがこの違和感を減らすことにつながると考えた。先生方には明星学園内での「学びの違い」について教えていただきたい。

加えて、前回の二者協議会において要望した先生向けのアンケートの内容を確認していただきたい。質問の内容、意図は以下の通りである。

〈質問内容〉

- 1 あなたの考える明星学園の「自由」で「主体的」な学びとはどのようなものですか？
 - 明星学園の自由な教育の定義は誰が決めるのか？
 - 明星学園に関わる人はそれを理解しているのか？
 - 先生によって生徒に教える「自由」が異なることがあるのではないかと？
- 2 あなたは高校という場において生徒たちにどのようなようになってほしいですか？
 - 生徒たちはさまざまな目的で授業を受けるが、先生方の求める「明星生」になれているのか？
 - なにが評価されるのか？
 - そのために先生方はどのような教育をしているのか？
- 3 あなたのかかげる理想の授業に対して現状はそれと合致していますか？
 - 生徒たちの半数近くは理想の授業を受けられないのを先生方の問題だと考えています。
 - それに対して先生方は何が問題であると考えますか？
 - 問題がないと考える場合は「理想的である」ということですか？

④コロナ禍での二者協議会（2021年度）

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行の渦中、教員も生徒も手探りで活動となった。特に、「三大祭」と呼ばれる体育祭・明星祭・音楽祭の開催可否、準備期間中の活動制限などについては、その時の感染状況に応じて情報が更新されていくという流動的な対応となり、前もって準備をしてきた実行委員の生徒たちは半ば振り回されたような感覚を覚えた。

その経験から、年度末の二者協議会にて代表生徒たちは、学校管理職に対して次年度以降の活動に関する明確な指針と基準の開示を求めた。ただ指示を仰ぐのではなく、社会的感染状況をステージ1～5に分けて、各ステージにおける制限を明確化した「ステージ設定」を提案し、開催

1か月前の情勢から実施の可否と条件を確定するように求めた。管理職からの承諾を得て、全校生徒でその「ステージ設定」を共有、見通しの持てる活動を実現した。

新しい三大祭について考える（2022年度）

新型コロナウイルスによる制約が緩和しはじめ、2022年度には久しぶりに三大祭を開催することができた。前2年間、通常開催を経験していない中で、活動の形を工夫した1年間だった。二者協議会では、それを踏まえての反省と今後の対策について話し合った。

本年度の明星祭では、部活発表の際に座席数を超える観覧希望者が集まり、観覧をお断りしなければいけないという事態がおきた。この反省から明星祭委員は、事前予約に使用するWebサイト開設の許可を要望した。事前に調査した費用や運用方法を資料にまとめて提案し、学校長からの承認を受け、2023年度の明星祭から運営が開始されることとなった。

音楽祭については、3年ぶりの開催となり、反省点が多く出された。クラス練習の充実度を上げるためにはどうしたらよいか。そもそも音楽祭の趣旨は合唱なのか、それともパフォーマンスなのか。今後の活動の活性化に向けて、原点に立ち返って意見を出し合った。

各行事における教員の協力についても意見が出された。生徒主体の活動と言えど、担任の支援は不可欠であり、クラスとのかかわりのあり方を考えさせられる機会となった。（大友 日向子）



3 公開研究会と春の全園研究会

(1) 小・中学校公開研究会

自ら教科カリキュラムを考え、授業方法の開発に力を注ぐ自由を持つ本学園において、その授業を広く教育関係者に公開、多様な視点からの指摘を受け、謙虚に学ぶことは、常に肝に銘じておかなければならないことである。独りよがりの実践は厳に戒めねばならない。教育において、無自覚な正義ほど恐ろしいものはない。

そのような観点から1961年、第1回の「小中学校公開研究会」が開催され、それは半世紀の時を超え、現在に至っている。

照井猪一郎小・中学校長は、第1回の「公開研究会」開催に際し、次のように語っている。

教科の研究・授業のくふうは教壇に立つものの当然の任務であり、責任であります。特に私立学校の場合にあっては、それぞれ建学の理念に基づく信条のもとに、それらが進められるものであります。しかし、その教育が単なる特殊であるならば、それは論外であります。窮極において一般に通用しない“特殊”は、それは特殊でもなんでもなく、奇型と言うべきでしょう。わたしたちが求めてきた教育は、まさに、人間がする教育として最も正しく、最も豊かなものを目指してのものであります。

2006年、学校の体制が大きく変わった。6・6制12年一貫がスタートし、教員組織は「小学校」と、「中・高等学校」という形になった。「6・6制推進委員会」の最終報告では、今まで開催していた小・中合同の公開研究会はいったん凍結とし、その後の議論に任せることになった。

そこで小学校は、2006年度から独自に「小学校公開研究会」として開催を継続させた。一方、中・高での開催は見送られることになった。単元の指導計画のみならず、一時間の授業に焦点を当てる研究会の在り方は、高校現場には簡単になじむものではなかった。結論が先送りされるなか、中学校は2007年度から独自に「公開授業と研究会」という名称で開催することとした。

ただ、小・中別開催ということは、必然的に別日での開催にせざるを得ないということである。本校は理科をはじめ、いくつかの教科において伝統的に小・中合同で日常的な研究会を組織している。世の中において、公立においても小・中の連携の大切さが叫ばれるようになっていた時期でもある。小・中間の授業研究の分断は、学園において大きな痛手となる。むしろ、いかに連携させていくかが重要な課題でもあった。

そこで、中学校の新校舎を井の頭キャンパスに建築することが決定されたのを機に、小・中合同での公開研を2014年度から復活させることとなった。

以下、2014年度以降の「小・中公開研究会」の提案教科と内容を示す。

* 2006～2013年度については、『明星学園90年のあゆみ』に掲載済みである。

■ 2014 年度 テーマ「本物の賢さを育てる学びを目指して」

教科	内容	授業
国語	本質を深くとらえる力をどうつけるか～語り合う文学の授業を通して～	提案：山本幸子（4 年） 関連：川松泰美（1 年） 石川信行（9 年）
算数数学	小・中の図形教育～感覚から論理へ～	提案：中西正一（7 年） 関連：河住由美（3 年）
理科	小学校の動物学習で何を教えたらいのか	提案：照井伸也（6 年） 関連：大沼有子（5 年）
社会	中学で東アジアと日本という視点でのカリキュラムをつくる～小中の歴史学習の違いに注目して～	提案：小畑典子（9 年） 関連：江口聡江（6 年）
英語	小・中の接続と連携～子どもたちの力をどこまで伸ばせるか～	提案：工藤圭輔（7 年） 関連：入江潤（4 年）
音楽	豊かな頭声の歌声を目指して	提案：町田健児（3 年）

講演：アーサー・ビナード氏（詩人・俳人・随筆家・翻訳家）「なにを勉強したら生きのこれるのか」

■ 2015 年度 テーマ「意欲を引き出す授業とは」

小・算数	子どものつまずきから学ぶ～分数のわり算～	提案：福田純一（5 年） 関連：山本幸子（4 年）
中・数学	3 種類の文字の意味を明確に区別して教える重要性について	提案：平野康弘（7 年）
小／中・社会	東アジアの視点を入れた日本近代史の授業をどのように作るか？	提案：繁田真爾（9 年）
小／中・体育	低学年への側転指導	提案：剛力正和（2 年） 関連：高橋三絵（7 年）

講演：佐久間亜紀氏（慶應義塾大学）「子どもの視点から学力を問い直す」

■ 2016 年度 テーマ「意欲を引き出す授業とは」

総合	巧みな手を育てる	提案：根岸あずさ（2 年） 関連：井上良江（1 年）
小・算数	多様な子どもの考え方を活かして	提案：大野健太（4 年） 関連：河住由美（4 年）
理科	中学校での細胞学習はどうあるべきか	提案：加藤彩愛（7 年） 関連：淘江正二（6 年）
社会	人物に焦点をあてて、より興味をもちやすい歴史をつくる	提案：江口聡江（6 年） 関連：小畑典子（8 年）
体育	マット運動の面白さの追求	提案：富田秀和（5 年） 関連：森村卓（7 年）
中・数学	身の回りにある数学を～学校選択授業～	授業：名雪順一（9 年）

講演：中村桂子氏（J T 生命誌研究館）「子どもの生きる力を信じて」

■ 2017 年度 テーマ「学びの共同性づくりを考える」

小・数学	友達とわかり合う授業作り～タイルの有効性を活かして～	提案：岩橋恒平（4 年） 関連：河住由美（1 年）
小・国語	豊かに読むことを豊かに書くことにつなげるために	提案：淘江正仁（5 年） 関連：根岸あずさ（2 年）
小・特別活動	自分たちの学校 自分たちでどうする	提案：小関大輔（6 年） 関連：入野美沙 伊野文子
小／中・理科	音の学習をどうするか	提案：平山勲（7 年）
小／中・社会	草の根の人物から考える東アジアの近代	提案：高橋珠州彦（9 年）
中・英語	「モチベーション」を引き出す授業を考える	提案：高山瑤子（7 年）
中・数学	関数を幾何的扱いと切り離して指導する	提案：平野康弘（9 年）

講演：金森俊朗氏（北陸学院大学）「子どもと世界を読み解く」

■ 2018 年度 テーマ「学びの共同性づくりを考える」

小・算数	感覚の世界から論理の世界へ～図形教育～	提案：岩橋恒平（4 年） 関連：河住由美（1 年）
小・特別活動	自分たちの学校、自分たちでどうする	提案：小関大輔（6 年） 関連：入野美沙（5 年）
小／中・美術・工作・木工・工芸	集団的創造から見えるもの	提案：青柳勝利（9 年） 関連：佐藤晃（小学校）
小／中・社会	中世・近世の日本と東アジア世界	提案：小畑典子（8 年）
小／中・英語	あなたの授業で「英語のコミュニケーション力」は育てられていますか？	提案：入江潤（6 年） 工藤圭輔（9 年）
小／中・理科	温度と熱	提案：平山勲（8 年） 関連：加藤彩愛（小学校）
中・国語	視点の広がりを求めて	提案：長谷川元子（9 年） 関連：山口千絵（8 年）

講演：梅原利夫氏（民主教育研究所）「教科教育と教科外との関連と統合」

■ 2019 年度 テーマ「共に学び合う授業」

小・算数	小学校段階の数の指導におけるタイルの有用性について考える	提案：淘江正仁（5 年） 関連：永瀬晃子（1 年） 福田純一（3 年）
中・数学	公式の対象化には、法則見つけが不可欠	提案：平野康弘（9 年）
小／中・社会	フィールドと教室をつなぐ～地理的分野の手法を社会認識に生かす～	提案：土器屋真理子（7 年）
中・理科	温度と熱	提案：福元翔輝（8 年）

講演：松下佳代氏（京都大学高等教育研究開発推進センター）「子どもたちが対話的に深く学ぶための仕掛け」

■ 2020 年度 *新型コロナウイルス感染症の影響により中止

■ 2021 年度 テーマ「授業づくりの根幹」(オンラインによる開催)

小・国語	子どもの文章表現をどう読むか 講師：上西信夫（文芸教育研究協議会）	提案：伊野文子（1年） 北村菜穂（4年） 伊藤駿（5年）
中・数学	考える授業を作る（ピックの定理を見出すまで） 講師：瀬山士郎（群馬大学名誉教授）	提案：小寺隆幸（9年）
小／中・理科	磁力線を中心に考える電磁気学 講師：田中篤司（東京都立大学）	提案：平山勲（9年） 提案：上田源也（8年）
小・美術	小学校6年間のまとめとしての卒業制作について	提案：坂本直穂枝（6年）
小／中・体育	体育科表現活動の現状と課題 講師：沼倉学（宮城教育大学）	提案：富田秀和（小学校） 関連：高橋三絵（7年）

講演：末永幸歩氏（美術教師・アーティスト）「自分だけの『問い』や『答え』が生まれる場」

■ 2022 年度 テーマ：私たちが目指す授業とは（オンラインによる開催）

小・国語	豊かに読むことを豊かに書くことにつなげるためには 講師：上西信夫（文芸教育研究協議会）	提案：菅野将希（1年） 北村奈穂（3年） 岡祐輔（5年）
小／中・社会	「沖縄」の視点を入れた近現代史の授業をどのように作るか 講師：三橋広夫（淑徳大学非常勤講師） 司会：繁田真爾（東北大学研究員）	提案：小畑典子（9年）
小／中・理科	磁力線で考える電磁気 講師：田中篤司（東京都立大学理学部物理学助教授） 司会：栗田克弘（山口大学教育学部理科教育准教授）	提案：上田源也（9年）
中・保健体育	体のつくりとしくみ・生殖のしくみ・免疫のしくみ 講師：高橋幸悦（元本校教諭）	提案：森村卓（7年）
中・数学	ピタゴラスの定理～シュエマの活用が革命を起こす！？ 講師：瀬山士郎（群馬大学名誉教授） 司会：小寺隆幸	提案：中西正一（7年）

講演：西谷修氏（東京外国語大学）「教育の基本に立ちもどる」

■ 2023 年度 テーマ：教科教育が担うものとは

小・総合	低学年教育におけるものづくり 共同研究者：伊藤廣子・高橋真由美	全体提案：根岸あずさ 授業提案：北村奈穂（1年） 菅野将希（2年）
小・算数	生活から数の世界・そして数の世界から生活へ 講師：正田良（成蹊大学非常勤講師）	全体提案：洵江正仁（6年） 授業提案：伊藤駿（6年） 福田純一（4年）
小／中・理科	運動力学をどう教えるか（単元：力と物体の運動） 講師：田中篤司（東京都立大学） 司会：阿久津嘉孝（都立拝島高等学校教諭）	授業提案：福元翔輝（9年）
中・国語	対話を生む発問とは？ 講師：佐野正俊（拓殖大学外国語学部国際日本語学科教授） 司会：堀内雅人（本校元教諭・東京女子大学非常勤講師）	全体提案：堀内雅人 授業提案：山口千絵（7年） 授業提案：長谷川元子（9年）
中・保健体育	基礎体力の低下とジャベボールの記録の推移（陸上競技：投擲種目） 講師：田島直樹（東京都立芦花高等学校保健体育科教員）	授業提案：比留間修吾（9年）

講演：内田樹氏（武道家、思想家、神戸女学院大学名誉教授）

(2) 春の全園研究会

小・中・高の課題共有に向けて、2007年度（2008年3月）より、毎年度末の3月に「全園研究会」を実施している。本学園が目指すものは、キャンパスの違いを超えて「12年一貫」であり、1年に1回ではあっても全園の教職員が集い、学園の課題を確認、情報や意見を交換する場として、その役割は大きい。

初年度は、大正自由教育の研究家であり、明星教育の良き理解者でもある中野光氏に「明星学園の原点」をテーマに講演していただき、明星学園の教育史上の位置、役割を全教職員で確認する場となった。その後、両校長による基調報告があり、午後は各部の実践報告と意見交換を行った。

以降、研究会のテーマは、管理職会（校長・副校長会）で検討、学園の課題を「基調報告」として両校長が述べ、課題に沿って担当教員による報告や外部講師を招いての講演会、必要に応じてグループに分かれての分科会が行われるようになっている。

以下、2016年度以降の研究会テーマと報告者・講演者を示す。

2016年3月19日（火）	■堀切忠和氏（弁護士）『学校の危機管理と保護者対応』
2017年3月21日（火）	■山本崇雄氏（都立両国高校 主幹教諭）『なぜ教えない授業が学力を伸ばすのか』
2018年3月21日（火）	■高橋源一郎氏（小説家・文芸評論家）『ぼくらの学校なんだぜ』
2019年3月19日（火）	■小貫悟氏（明星大学） 『発達障害への合理的配慮につながる基礎・基本』
2020年	COV-19のため中止
2021年3月19日	■新坂彩子教諭（中学校総合探究科教諭）『中学校「総合探究」実践報告』 ■井上修氏（日能研『進学レーダー』編集長） 『これからの学校の在り方／激動する入試制度改革／明星学園の課題』
2022年3月19日	■堀内雅人教諭（中学校副校長） 『9年「卒業研究」のこれまでと現在』 ■中山俊秀氏（東京外国語大学教授・副学長・元保護者） 『未来を考え生きる力をどう育てるか～明星の探究・卒業研究に期待すること』
2023年3月20日	■明星学園ゲートキーパー講習（東京多摩いのちの電話研修担当） 『生きようという思いにどう寄り添うか ～サインに気づいた時に私たちにできること～』



高橋 源一郎氏（2018年3月21日）

4 クラブ活動

(1) 小学校のクラブ活動～好きなこと得意なことを通じて

小学校では毎週火曜日の放課後にクラブや同好会でたくさんの児童がのびのびと活動している。少人数のクラブから40人以上の大規模なクラブまでそれぞれが思い思いの活動に力を注ぐ。クラブ活動の目標は、異年齢の児童同士で協力し、共通の興味・関心を追求することだ。個人の技術や技能を身につけることだけをねらうのではなく、さまざまな学年がいる集団の中で望ましい人間関係を築くことを大切にしている。

たとえばドリカムクラブでは、まず「何がやりたいのか」それぞれの個人が持つ「夢」を出し合う。話し合う時も学年間の交流が進むように各学年が交互になるように座っている。みんなで話し合い、取り組みたい活動を選び、自主的に計画を立てて夢の実現へと活動している。ドリカムクラブで実現した夢の実現例として、「みんなで流しそうめんをやってみたい」「学校に泊まってみたい」などがある。(富田 秀和)



ものづくり同好会 (2002 年)



ドリカムクラブ (2010 年)



昆虫同好会 (2017 年)

クラブ・同好会の変遷 2001 年度以降の小学校のクラブ・同好会（現在は活動していないものも含む）

〈クラブ〉

卓球クラブ、サッカークラブ、体操クラブ、釣りクラブ、昆虫クラブ、ものづくり自然クラブ、図書クラブ、野球部、鉄道研究会、ドリカムクラブ、バドミントン部、イラスト部、畑クラブ、English クラブ、日本の芸能クラブ、工作クラブ、演劇部、音楽クラブ、ダンスクラブ、美術・工作クラブ、ドラマクラブ、ボールゲームクラブ、アウトドアクラブ、ラケットクラブ、算数クラブ

〈同好会〉

演劇同好会、サンバ同好会、折り紙同好会、昆虫同好会、茶道同好会、ものづくり同好会、日本の芸能同好会、剣道同好会、ダンス同好会

(2) 中学校のクラブ活動

希望者によるクラブ活動ではあるが、多くの生徒が参加している。複数のクラブを兼部している生徒も少なくない。都大会以上を目指し練習しているクラブもあれば、同じ興味関心を持つ仲間との和気あいあいとした活動を楽しんでいるクラブもある。生徒にとってクラスとはまた別の大切

な居場所となっているようだ。

クラブ・同好会の変遷 2001 年度以降の中学校のクラブ・同好会（現在は活動していないものも含む）

〈クラブ〉 ＊は中高合同クラブ（説明は高校の欄に記す）

野球部・陸上部・バスケットボール部・サッカー部・バドミントン部・演劇部・合唱部・美術部・剣道部・山歩き部・漫画研究部・木工部・書道部

＊和太鼓部 ＊アンサンブル部 ＊弓道部 ＊鉄道研究会 ＊卓球部 ＊体操部

〈同好会〉

国際交流同好会・百人一首同好会・ディベート同好会・写真同好会・軽音楽同好会・理科同好会

近年の実績

- 弓道部 関東中学生弓道大会に 6 名が出場（2023 年）
- ディベート同好会 ディベート甲子園（全国大会）に初出場でベスト 8 入賞（2023 年）
- 美術部 キャンパスアワード 2023 に挑戦する美術部員の様子が読売中高生新聞に掲載される
- 陸上部 全日本中学陸上競技東京都大会に 9 年生 3 名が出場（2023 年）
全国大会出場（2018—22）2 名 関東大会出場（2018—22）2 名
都大会入賞（2018—22）7 名
- 和太鼓部 中学生＆OG・OB チームが井の頭公園駅前商店会の睦会発足 70 周年記念感謝祭で演奏（2023 年） その他、公立小学校等に出前公演
東京都中学和太鼓部大会発表会 最優秀賞（1 位相当）
- バドミントン部 2022 年度武蔵野・三鷹地区バドミントン冬季大会で、ダブルス 5 組 10 名、
シングル 3 名が入賞
- 書道部 第 57 回伊勢神宮奉納書道展大会委員長賞（2018 年）・第 34 回高円宮杯日本武道館書写書道大展開会日本武道館奨励賞（2018 年）



(3) 高等学校のクラブ活動

明星学園の建学の理念である「個性尊重・自主自立・自由平等」は、クラブ活動にも根付いている。多様なクラブ活動のあり方を否定することなく、それぞれのクラブ活動が独自の輝きを放って存在している。

例えば、自主自立・自治にウエイトをおき、自分たちで企画運営することを大事にしているクラブ活動もあれば、和気あいあいと自分たちのペースで楽しんでいるクラブ活動もある。さらには、都大会や全国大会への出場を目指したり、目標を全国大会優勝にしているようなクラブ活動もある。

明星学園のクラブ活動の良いところは、結果の良し悪しに関係なく、お互いのスタンスを認め合っているところにあるのではないだろうか。

そんな明星学園高校のクラブ活動の中から、いくつか特徴的なクラブ活動を紹介する。

【文化・表現・音楽系のクラブ】

○アンサンブル部

明星学園では、最も早くから中・高合同で活動してきたアンサンブルクラブ。定期演奏会は2024年3月で58回目を数える。オーケストラとはせずに、アンサンブルにこだわってきたのは、さまざまなコミュニティでさまざまな組み合わせでも音楽を楽しむことができるためである。半世紀以上にわたる、アンサンブルクラブの活動は、中・高の橋渡しとなる貴重な役割を担ってきた。

○音楽部（合唱を中心に）

2024年3月の定期演奏会で46回目となる音楽部の定期演奏会。「楽しく美しいハーモニー」をモットーに、楽しみながらも聴く人たちを感動させる、質の高い演奏を披露している。OB・OGとのつながりも強く、演奏会でもOB・OGが現役生徒と共に歌声を披露している。また、実績も積み上げており、NHKコンクールでの地区大会金賞受賞も複数回あり、都大会も経験している。

○和太鼓部

学園関係者だけでなく、地域や地元商工会等、幅広い方々に愛されている明星和太鼓部の演奏。2023年度の定期演奏会で19回目を数えた。明星で唯一、小学校（日本の芸能クラブ）・中学校・高校とすべてにつながりを持ったクラブ活動であると同時に、全国大会をめざす強豪校の一つでもある。これまでに、全国高等学校総合文化祭に11回出場し、最優秀賞（1位相当）1回、優良賞（3位相当）2回を経験している。

○ファッション部

校内外で開催されるファッションショーではデザイン画に始まり、衣装作り・ヘアメイク・音響・ライティングに至る全てを自分たちで作成する。さまざまな媒体から高い評価を受け、これまでにいくつもの雑誌に掲載されたり、テレビの取材を受けてきた。校外へ研修にも行く。三鷹市や武蔵野市、東京都のイベントにも参加し、地域活動にも貢献している。好奇心を源に、クリエイティブな世界を広げている。

○ダンス部

HIPHOP ダンスを中心に部員主体で活動をしている。部員同士の教え合いの中で、ダンススキルだけでなく、精神面での成長を目指している。全国高等学校ダンスドリル選手権大会出場を目標に、日々、練習に励んでいる。

○美術部

互いに刺激し合いながら作品制作を中心に活動している。明星祭や学内展示に向けては大作にも挑戦している。夏の合宿や展覧会などの作品鑑賞を通じて、作るだけではなく多彩な作品に触れる機会も大切にしている。

○演劇部

演技者としては演劇活動を通じて、自分の身体行為を見つめ直し、自己表現の在り方を身につけていく。また裏方としては、作品の完成や質の向上をどう追求していくかを試行錯誤し、自分の経験や発想を活用させ成長させていく。

○理科部

部員がテーマを決め、自然科学に関するさまざまな活動を行ってきた。現在は水生生物の飼育・観察を中心に日々活動している。その他にもフィールドワークや天体観察、磯観察なども定期的に行っている。

○国際交流部

来日する留学生を交え、異文化理解と外国事情を肌で体験するクラブである。世界の料理や音楽に積極的にに関わり、コミュニケーションの要であるさまざまな言語に触れる。外部団体のさまざまな国際交流イベントにも参加する。

○鉄道研究会

1990 年代初頭に同好会として設立。2007 年から部として活動し、2022 年から中学生も一緒に活動を開始した。年に 2 回、生徒が行き先を決めて旅行に出かける。また、明星祭では展示企画を行い、希望する生徒がいれば鉄道模型コンテストにも出場してきた。卒業後も JR 東日本をはじめ鉄道会社で活躍している卒業生もいて、鉄道に携わることが大好きな生徒が集まっている。

○漫画イラスト部

毎月 1 回、部員たちが個々に創作した漫画やイラストを部誌にまとめ、お互いの作品を鑑賞している。文化祭ではそうした日常的な取り組みの集大成として小冊子を発行し、来校した方に配布している。



○写真部

写真部は東京都高等学校文化連盟写真部門に所属し、東京都の夏期・冬期写真展と明星祭の写真展に向けた作品作りを中心に活動している。また、撮影会や論評会を通して撮影や展示の技術の向上を目指している。

○料理研究部

料理やお菓子のおいしさやエコクッキングなどを研究し開発している。調理の基礎練習やランチ会を実施し、明星祭での試食・喫茶も大好評である。

○サンバ部

サンバを通して世の中の国籍を問わない老若男女と交流し、人間的成長を遂げ、グローバルな社会性を身につけることを目指している。

【運動系のクラブ】

○女子バスケットボール部☆

チームの「和」を大切にしながら、全国大会優勝をめざして日々の練習を積み重ねている。創部以来、インターハイには12年連続51回出場し、準優勝4回、ベスト4は6回を数える。また、ウィンターカップには3年連続31回出場し、準優勝4回、ベスト4は4回経験している。悲願の全国制覇をめざして、日々努力を続けている。

○男子バスケットボール部

学業との「文武両道」を目指し、バスケットボールを通して、競技力だけでなく、自己に挑戦するプロセスの中で、人間力を高め、一人の大人としての「生きる力」を身につけることを目標としている。

○野球部

野球部は人数は多くないが全員で夏の大会で勝つことを目標にしている。楽しく且つ真剣に野球と向き合っている。皆さんから応援される野球部を目指している。2021年度には夏の大会ではじめて3回戦まで駒を進めた。

○剣道部

剣道部は、チームおよび個々の目標を明確にし、他校との練習試合も積極的にに行いながら、厳しくも楽しい稽古に日々励んでいる。当面の目標は都大会常連校になること。その先には関東大会出場を目指している。

○陸上部

競技者としての成長だけでなく、人としての成長もめざして日々励んでいる。以前よりインターハイに出場する選手はいたが、現在では毎年インターハイに出場する選手を輩出する陸上強豪校となっている。2019年度のインターハイでは15名の選手が活躍し、男子200m走、棒高跳、4×100Rの3種目で入賞を果たした。2023年度のインターハイでは、男子走り高跳びにおいて、悲願の全国制覇（全国1位）、女子走り高跳びにおいて（全国2位）の成績をおさめた。

○体操部

体操部は中・高校生合同で練習している。個人種目のスポーツではあるが、仲間と練習することを意識し、互いにアドバイスをしたり補助をしながら技を習得するとともに、正しい人間関係を作っていくことを目標にしている。

○卓球部

中・高合同で活動をしている。練習場所は中学校の体育館で、「仲良く、楽しい雰囲気」の中で練習している。

○バドミントン部

大会に出場し、全力を尽くして戦うことを目標に日々練習を重ねている。部員のほとんどが高校からの初心者だが、ただ先生の指示を待つのではなく、自分たちで部活をつくっていく意識をもって練習に取り組んでいる。

○サッカー部

「サッカー選手である前に人として」「不撓不屈」この二つの精神をモットーに、日々励んでいる。2016年度より人工芝に改修されたグラウンドでの練習もあってか、近年ますます結果が伸びてきている。地区大会優勝から都大会の2次予選突破もうかがえるようになってきた。2023年度は、地区大会を勝ち抜き、都大会に出場、東京都ベスト16となった。

○弓道部

2005年度に同好会としてスタートし、翌年部員24名で中・高クラブに昇格。当初は弓道場もなく巻藁^{まきわら}で練習し、毎週土曜日公設弓道場に通っていた。2007年夏、高校グラウンドの一角に手作りの弓道場が完成。日々練習を重ね、2008年に東京都大会で初入賞を果たして以降、団体戦・個人戦で次々と好成績を残してきた。クラブとしての頑張りが認められ、2016年に新弓道場が完成。現在は、中・高生合同の班に分け、上級生が下級生に教えるという形で日々練習に励んでいる。

○ハンドボール部

和気あいあいハンドボールを楽しむこと。楽しさの中核にある、技能と勝利の追求をおろそかにしないこと。これが「明星学園ハンドボール部」のモットーである。

○女子バレーボール部

毎月1回（日曜）にOG会を開き、クラブ卒業生との交流会を図り、練習試合を実施している。初心者でも、楽しく、のびのびとプレーできる明るいクラブを目指している。



5 教育相談部

教育相談部の取り組み 中学校養護教諭：卜部 三奈子

明星学園の教育相談では、小・中・高一貫を実現させるために、子どもたちの成長を12年間という長いスパンの中で見守ると同時に、発達年齢ごとの特性・年齢集団が作り出す課題を理解し、小・中・高協力して、子どもたちの充実した学園生活を手助けをするために何ができるかという観点から取り組んでいる。

もともとは高校内だけで、養護教諭・森田小夜子と国語科教諭・村田修二が「生徒のメンタルケアに関する委員会」という名称で活動していた。高校では、思春期という時期のせいもあり、いわゆる「心の病」で苦しむ生徒があり、そのケアを外部の医療機関とも連携して対応していく試みであった。

6・6制開始後の取り組み

その試みを、小・中・高全体で行うことを提案し、6・6制開始年である2006年から、全園の取り組みとして立ち上げた。

2006年 全園の「教育相談委員会」としてスタート。養護教諭が中心となり小・中・高の各部でメンバー構成。現在は「教育相談部」として継続している。

2018年 スクールカウンセラー1名配置（高校）

2019年 巡回心理士導入（小学校）

2021年 巡回心理士導入（中学校）

2022年 スクールカウンセラー2名体制に変更（高校）

学校における教育相談の位置づけ

学校での教育相談は、一人ひとりの児童・生徒の発達と、教育にかかわる諸問題をめぐって、本人及び保護者などに、必要な心理的・教育的援助を行うこと。本人及び保護者が、自分の課題をとらえ直し、主体的に解決できるよう、側面から援助することを基本としている。

よって、学校での教育相談は、一部の教師が行うものではなく、それぞれの教師が教育相談的な心構え（カウンセリング・マインド）をもって、児童・生徒それぞれに対して、あらゆる教育活動の実践の場でおこなえるようにしていく必要がある。

以上のことを踏まえて、組織的な教育相談を作っていくためには、教職員や心理士、養護教諭の専門性を活かしながら支援の方向性を共有し、具体的な役割分担を決めて支援を行っていきけるようにすることが重要である。

教育相談の組織的役割

1. 連絡や調整
2. 役割（支援チーム作成）と責任を明確にする
3. 支援チームとの相互連携と共通理解

教育相談部の活動

週1回のメンバー会議で、各学年の児童・生徒が抱える問題を共有し、早期に問題解決できるよう話し合う。必要であれば専門医・心理士と連携を取り、児童・生徒に合ったケアプランを作成し支援チームを編成。また、保護者との面談も行いながら、より児童・生徒に合ったプランニングをし、児童・生徒のケア及び保護者へのサポートを行う。専門医とのカンファレンスや、巡回心理士による教員とのディスカッションの場を設定し、教員へのフィードバックをするなど教員への対応も行っている。また、小・中学生とは発達段階が遥かに違う高校生においては、2018年に導入したスクールカウンセラーの対応案件が増加傾向であり、学校とスクールカウンセラーが協働し生徒のサポートにあたっている。

今後の教育相談

小・中・高の児童・生徒一人ひとりが抱える問題は年々多様化し、また複雑化している。2006年度に扱った相談件数に比べ、現在では数倍の相談数にもなっている。現状での課題点は、発達年齢によって抱える問題の差が大きいため、問題点の共有が難しいことがある。将来への大きな課題として、問題点の共有・早期対応の方法を確立し、児童・生徒が安心安全に学校生活を送れるように連携を図っていきたい。

6 学園の危機管理体制

明星学園の危機管理体制は、主に（1）施設設備対応（2）児童生徒の事故対応・防犯対応（3）防災対応（4）健康安全対応（新型コロナウイルス感染症等伝染病対応）の4分類で対応している。

（1）施設設備対応

1) 建物（校舎の耐震性）

明星学園の建物に関しては、すべて耐震基準を満たしている。2000年（平成12年）に完成した明星学園小学校校舎は鉄筋2階建て、新耐震基準を満たしている。

それ以前の中学校校舎・高校校舎・体育館などの建物に関しては、耐震評価をおこない、必要な耐震補強工事を2010年度までに完了した。

2) 放射性物質対応

2011年3月11日の東日本大震災以降、学校内のグラウンドや広場、壁や雨どい等はもちろんのこと、例年行事を実施していた千倉等の場所にも出向き、放射線量の測定を行った。

学園として測定器を購入し、放射線量の値を測定してきた。小・中グラウンドをグリーンサンドに入れ替えたり、小学校中庭の土も入れ替え、国や東京都・三鷹市の基準値よりも低くなるようにしている。

(2) 児童生徒の事故対応・防犯対応

1) 「安全の日」

1986年12月、高校で起きた在校生の屋上転落死亡事故への反省から、再びこのような事故を起こさないよう「決意を新たにする日」として、毎年12月1日を「安全の日」としている。

この事故を機に学園では「全園安全委員会」を設置し、年2回、学園全体の施設設備が安全かどうか、教職員と保護者が協力して点検を行っている。同時に「安全の日」には、生徒に向けて、過去に起きた事故について全校放送を行うなど、安全な日常生活への注意を喚起する取り組みを行っている。事故を直接知る職員も少なくなるなかで、事故の教訓を風化させず、後年に伝える努力が必要となっている。▶▶詳しくは90年史P.423参照

2) P T Aの協力を得て実施する校内安全点検

校舎内部の施設に危険な場所がないか、毎年1回、P T A役員とボランティアの方々が小・中・高校の校舎と体育館などの「校内安全点検」を行っている。

この校内安全点検では、ロッカーの上や危機備品の設置状況など、児童生徒の日常生活にとって危険な箇所、改善が必要な箇所を仔細に点検し、学園の管理職・総務部長で構成する全園安全対策委員会が報告を受ける。

P T Aからの「校内安全点検報告」を受けて、学園はその年度内にできるだけ改修を行う。P T Aは3学期に2回目の「校内安全点検」を行い、改修を確認する。

このようにP T Aの協力のもと、児童生徒の日常の安全を確保している。

(3) 防災対応

明星学園では保護者の防災意識が高く、1990年代からP T Aの協力により、小・中学校の校内に防災関連の備蓄品を蓄えるようになった。

そのようななか、2001年（平成13）には学園、P T A、三鷹市の協議の上、明星学園と三鷹市は「避難所等施設利用に関する協定書」を取り交わした。これによって、大災害の発生時に体育館を地域の人たちの避難所として開放すると同時に、明星学園の生徒も公的支援が受けられるようになった。

また、2023年度（令和5）には、これまで一時避難所（グラウンドが避難場所）だった高等学校も三鷹市の避難所となり、明星学園全体が地域の避難所となった。

(4) 健康安全対応

新型コロナウイルス感染症等伝染病対応

明星学園の教育理念は、「個性尊重」「自主自立」「自由平等」である。この理念を具現化すべく独自の教育課程が編成され、子どもの示す事実に基づいて、それらをより確かで豊かなものに高めてきた。コロナ禍に於いてもそれが歪められないように、コロナ禍なりの「明星の教育」が展開された。

とはいえ現実には厳しかった。政府の要請により全国の学校に2020年3月2日から春休みまでの一斉臨時休校要請が出され、児童生徒が登校できなくなったのである。

実物を通じた教育を大切に、教え込むのではなく、新たな世界を自分たちの手で発見することを目指してきた明星の教育においては、尚更であった。「登校できない」という現実、子どもたちも教職員も保護者も困惑した。未知との遭遇に答えはなく、道は自分たちで切り開くしかなかった。正に自分の頭で考え、心で感じ、判断・行動することが求められたのである。

ここからは、小・中・高各部の奮闘の一部を振り返ることにしよう。

1) 小学校での取り組み

臨時休校に入りまず取り組んだのは、不安に駆られる児童や保護者としてしっかり連絡を取る事であった。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に社会が震撼する中、社会との窓口である学校も休校となり、各家庭は孤立と不安・負担を強めていたからである。その状況は児童や家庭によって異なり、まずは一人ひとりの児童・家庭の状況を把握した上で、適切な対応をとる事が必要であった。

この時の連絡手段は電話か Web であり、返信可能な形式で Web 配信がされるようになったのもこの時からであった。職員室では朝から晩まで教員たちの声が響いていた。

小学校では、児童が登校できない中「教育課程」に関しては「家庭学習」に切り替えざるを得なかった。授業ができないことから新たな單元には進まず、これまでの復習に留めることが確認された。とはいえ、COVID-19 に震撼し、学校も休校となる中での家庭学習である。ただ単に課題を送り、あとは家庭任せにするのではなく、コロナ禍だからこそ「教育とは何か」を問い直し、「家庭学習であっても児童と教師が成長・発達を実感でき、喜びの中で安心と繋がりを実感できる教育実践」を創造する必要があった。「いつもげんきでにこにこ」である。その前提となるのが一人ひとりの児童・家庭に対する愛情であり、丁寧なコミュニケーションに基づく創造的实践であった。それができるのは担任を中心とした学年集団であり、「何を」「どう課すか」については現場の裁量に任された。この段階ではまだオンライン（Zoom など）は導入されておらず、不特定多数がコミュニケーションを交わせる手段は Web の掲示板のみであった。

友達と会えない中、児童は掲示板をフル活用し、クラスの繋がりを保っていた。中でも卒業を間近に控えた6年生のやり取りは切実で、涙なしに見守ることはできなかった。6年生が先生や友達と再会できたのは卒業式当日であり、式も卒業生と保護者・教職員のみで挙行された。

オンライン（Zoom など）の導入およびそれに伴うインフラ整備に着手したのは春休みに入ってからであった。COVID-19 が収束しなかったのである。Web の延長にある Zoom の導入を決め、オンライン飲み会を通じてホストの練習に励んだ。Zoom を使いこなせる教員は一人もいなかった。

た。教育の本質としてオンライン（Zoom など）の導入に反対する教員もいた。反対せずとも機械の操作に不安を感じる教員もいた。然しながら、児童が登校できない中で新年度を迎える上では、オンラインの導入は不可欠であり、痛みを感じつつも準備を進めざるを得なかった。事実、感染の拡大は留まるところを知らず、春休み中の職員会議も Zoom にせざるを得なかった。感染不安は教職員の間にも広がっていたのである。

Zoom と並行して導入されたのが YouTube である。紙媒体とともに手作り動画を配信することで、ホームルーム活動や新たな単元の学習（授業）を保障した。小学校の場合、児童だけで端末を操作することが出来ないため、配信された動画を見る上では保護者の手を借りる必要があった。仕事を抱えながら、御協力いただいた保護者の皆様に改めて感謝したい。

2) 中学校での取り組み

2020 年度、COVID-19 による休校が続く中、入学式も始業式も、オンラインで YouTube 動画を配信して行った。しかし、中学校でも端末を持っていない家庭が多数あったことから、オンライン授業を進めることが直ぐには出来なかった。止むを得ず、Web 通信を使って課題を配信し、その回答を Web 返信で送り返してもらうという対応が初期の取り組みだった。その後、端末の無い家庭をアンケートで調査し、PC ルームのパソコンと CCD カメラを貸し出す作業を行った。その対応後によりやうくオンラインホームルームを試験的に実施し、よりやうく顔を見ながら生徒と教師がコミュニケーションをとれるようになった。学校閉鎖中の教室から、担任とオンライン上の子どもたちの笑い声が響いていた。しかし、PC やタブレットの無い家庭も多く、スマホで参加している子も多かったため、長時間のオンラインは疲労が心配で、全面的オンライン授業には踏み切れなかった。一方で、YouTube 授業動画を作成して配信した教科もいくつもあった。教師たちは閉鎖期間でも学校に出勤し、日々授業動画の撮影に取り組んでいた。どの教師も初めての経験であり、手探り状態で頑張っていた。子どもたちも、教師の頑張りに応えて、配信される授業動画を見て学習に取り組んでくれた。しかし、小さなスマホ画面では動画を見るだけでも目が疲れてしまっているようだった。これらの経験を経て、各家庭の端末導入が急速に進んだとも言える。

3) 高等学校での取り組み

高等学校も中学校よりも早く、教師たちの YouTube 動画の作成が始まっていた。ICT 委員や、ICT に強い教師たちが先導してくれたことが大きかった。高校生ともなると、スマホも含めて端末が何も無い家庭は無く、早い段階から動画授業の配信を開始できた。毎日のオンラインホームルームも楽しく出来ていた。Web 通信の掲示板に、時間割ごとの配信 URL を載せ、生徒各自が自分の時間割に沿って URL をクリックすることによって、そのオンライン授業に入ることが出来た。一方で、もっと詳しく授業を受けたいという生徒や、オンライン授業だけで判らないところがある生徒に対しては、スタディサブリを利用して、外部講師の授業を見ることもできるようにした。これらの取り組みを通じて、閉鎖期間の授業をかなり順調に進めることができた。今後も、年度の初期にオンラインホームルームをおこなってみて、いざという時に困らないようにする取り組みは続けていきたい。

7 明星学園をとりまく団体 保護者・地域・卒業生との協力

(1) 明星学園父母と教師の会 (PTA)

1) 母の会

1927年(昭和2)1月、「明星学園P.T.A.」の前身とも言える「母の会」が正式に発足した。赤井米吉学園長は“母の力”を学園の重要な担い手と考え、創立当初から頼りにしていた。「母の会」は母親たちの自主的な会で、学園に援助もするが、講演会・音楽会・勉強会を開くなど、自分たちの文化活動をすることも主な目的であった。▶▶詳しくは本誌P.66、P.72 参照

やがて戦争が激しくなり母の会の活動は中断した。

戦後、新制中学校発足に合わせて、GHQの指導により日本全国の学校でPTAが結成された。1947年、明星学園では戦争で中断していた母の会を再始動させ神田亀代枝氏を会長としたが、混乱する社会状況の中で十分に活動できないまま数年間が過ぎた。

1951年6月、校舎建築資金確保を目指す「第二次後援会」(会長：二村鐘氏)発足に合わせ「明星学園母姉の会」(会長：神田亀代枝氏)が結成され、「母の会」は解消した。

後援会と母姉の会は共に学園の第1期事業計画を後援し、新制中学校・高等学校の校舎増築などに貢献した。そしてこの事業が一段落したのち、第2期事業計画に向けて新しい組織をつくることになり、後援会と母姉の会を一本化した新組織「明星学園父母と教師の会」(PTA)が新発足した。

戦前の「母の会」と戦後のPTAとの関係性を、PTA会長となった高田止^{しかお}戈夫氏が『PTA会報』第5号に記している。

たしかまだ戦時下だったと思いますが、私達の明星学園に『母の会』という、その名も優しい会が結成されたことがあります。勿論一般の父兄会とは別の集まりでした。子弟の教養に就いて先生方と話し合うばかりでなく、母親自身の教養を高めるために、種々な会合を催されたようでしたが、柳兼子女史(日本の声楽家〈アルト歌手〉。白樺派の柳宗悦の妻)の独唱の時には、戦時中なので特に声を低くして歌ってもらった、という私の家内の言葉がいまだに私の記憶に残っております。

この『母の会』は、その後空襲が激しくなって、疎開騒ぎや戦災や、それから終戦後の混乱期があったりしたので、何時ともなく中絶の形となりましたが、私はこの『母の会』のことを思い浮かべる度に、私達の明星学園には、今日のPTAの組織にも等しいものが、その頃既に自然発生的に結成されていたということに就いて、何時もなにかしら襟を正したい気持ちになっています。これは学園の歴史の一齣として、高く評価されていいものではないでしょうか。

終戦後の昭和22年(1947)の新学期から発足したPTAは、私が今更上げるまでもなくその前年の3月に来訪した、米国教育使節団の勧告に基づくものであります。またその後総司令部民間情報教育部や文部省社会教育局の熱心な指導で、現在は全国の小中高校の98%がこの組織を持つようになったことも、皆さん方がすでにご存じのところであります。しかし、このPTAの運営という問題に就いては、5年後の今日でもまだまだ議論の尽きない状態であります。

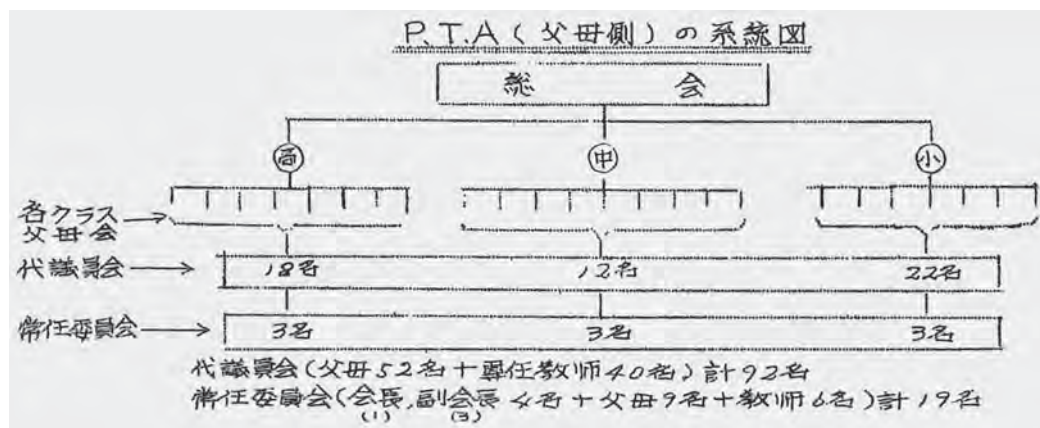
この議論の尽きないという問題に就いては、米国の教育制度をそのままに採用したという点から、まだまだ消化し切れないのだという考え方もあるようですが、これは寧ろPTAの目的そのものが、子弟の教養環境をよりよくするという、非常に立派で然も広汎な理想を持っているものだけに、その多角的な面に却って戸惑いしている形、と言った方が妥当なのではないでしょうか。全く難しく考えれば、それこそきりのないほど大きな問題だからです。

ところが、どんなに大きな問題でも、また難しい問題であっても、結局はその問題に取り組んでゆく人々の、心のあり方一つだと思われます。私心のない温かい心、この温かい心を結集して当てれば、問題は一つ宛解決してゆくのではないのでしょうか。私は曾て「人の和」ということを書きましたが、この人の和の根底に温かい心が凝縮していれば、難しいと言われるPTAの運営に就いても、決して怯む必要はないのではないかと考えております。

私はいま、私達の明星学園に、曾て『母の会』が存在していたことを回顧して、非常に大きな力強さを感じております。それは、子弟を愛し学園を愛する温かい心が、誰と言うとなく盛り上がって、自然に『母の会』を結成したものと考えてからであります。この温かい心の結集がある以上、私たちの明星学園のPTAも、すくすくと健やかに育てられてゆくのではないのでしょうか。

「『母の会』を思い出すまに」……『PTA会報』第5号1952年11月

戦後の明星学園でPTA活動が一気に始動したのは、1952年だった。6月に総会が開かれ、小・中・高の各クラスから2名ずつ選ばれた代議員と専任教師とで組織する代議員会、小・中・高各部の代議員から3名ずつ選出する常任委員に教員・会長・副会長を加えた常任委員会で運営するという体制がこのときに出来上がった。



新発足した「明星学園PTA」の組織系統図 『PTA会報』第1号1952年6月

またこの総会では新たに、編集部・文化部・厚生部の3部を設けて、それぞれ専門的に活動することも決められ、これら3部の部員は代議員とは別に各クラスから1名ずつ選ばれた。

この年度のPTAは年度末までに1～8号の会報を発行し、音楽会、講演会、懇親会などを開いたほか、小学校と高校の増改築工事費(第2期事業計画)の募金への協力、高校参観も実施している。会報は保護者それぞれが持つ学園に対する思いを出し合い、論題として共有する役割も果たした。

2) PTAの専門部と委員会

1952年に設けられたPTA専門部は編集部・文化部・厚生部の3部だった。その後厚生部の役割が拡大して「厚生通学安全対策部」(略称:厚生通安)に、編集部は「広報編集部」になり、1976年に加えられた「公費助成推進部」(略称:公費助成)を合わせた4つの部と、学年学級委員会、バザー委員会の2委員会の体制が長く続いた。

2009年度のPTA組織改革で4部が廃止され、以降は役員会と二つの委員会とで運営している。

文化部の活動内容は学園創立期の「母の会」から続いたものも多いが、年代によって時事問題に合わせた多様な企画が持たれた。PTA会報『道』にその記録が数多く残されている。またこれらの催し物とは別に文化部サークル（新聞、コーラス、文学、文法、画好会、歴史、新聞、社会科、和太鼓、サンバ……など）をつくり、PTA有志が活動してきた。

最終5年間の文化部企画

2004年	・いま無農薬から学ぶこと・響きあう身体 「気、音、響きあう身体」・サロンコンサート
2005年	・茂木ヒデキチ「ライブペインティング」／演奏：ウィンチェスター・ニテテ氏 ・第1回読書会 朗読『びらびら』長崎夏海著／合評『ダイヤモンド』長崎夏海著 ・第2回読書会 朗読『バナナパイ、すき？』長崎夏海著／合評『トゥインクル』長崎夏海著 ・読み聞かせ会『バナナパイ、すき？』長崎夏海著 児童対象 ・第3回読書会 朗読『あおいじかん』長崎夏海著／合評『マイ・ネーム・イズ』長崎夏海著 ・第4回読書会 朗読／合評『空にふく風』長崎夏海著 ・児童文学作家 長崎夏海講演会「自分が自分であること―作品でとらえた子どもたち」
2006年	・お弁当講習会・ロバの音楽座 愉快的コンサート ・夜まわり先生講演会～水谷修氏・久米さんの演劇ワークショップ
2007年	・落語上演～三遊亭楽春・講演会～森山まりこ氏・コンサート～イルカ・久米小百合
2008年	・パフォーマンス～Mr.Dai 大道芸・講演会～森山まりこ氏 ・コンサート～森安功（アイリッシュハーブ）

公費助成推進部は1976年に設置された。同年、私立学校振興助成法が施行されたが、明星学園ではそれ以前から三鷹市などへ助成金を求める運動を行い、成果を出してきた実績を持つ。公費助成推進部の設置後も熱心に活動を続けてきた。近隣の私立学校PTAとも連携し、国、都、各市町村への署名活動や請願、大会への参加など、地道な活動を続けることで助成金獲得に大きく貢献してきた。

厚生通学安全対策部は通学路の安全確保活動や、学校の危機管理への協力（防災倉庫チェックなど）のほか、2000年からはCAP（Child Assault Prevention＝子どもへの暴力防止プログラム）ワークショップを導入し、小学校と連携して実施している。

3) 広報編集部の活動——PTA会報『道』

新発足したPTAは、1952～55年度まで毎年度8冊の会報を発行した。8ページのガリ版刷りで始まったPTA会報は回を重ねるごとにページ数を増し、活動報告・学校行事の紹介・保護者や教師の投稿・特集記事など、内容も多岐にわたって充実していく。

明星学園が法人として『明星学園報』を定期刊行するようになるのは、ずっと後の1979年のことで、それまでの長期にわたりPTA会報『道』は学園唯一の定期刊行物だった。

学園の節目に行われた行事、例えば創立30周年記念式典（1954年）や、教育研究集会（1957年）、その後の第1回公開教育研究集会（1961年、現在も続く公開研究会の前身）など、さまざまな教育的な行事についても、PTA会報『道』に詳細な記録が残されている。のちに学園創立記念誌を作成する際も、PTA会報『道』が検証の頼りとなった。

第38号（1957年6月）の表紙で初めて『道』と冠し、以降この題名で発行された。

学園としてのメディアがなかった時代、『道』には教師たちの文章も多く掲載されていた。PTA

の会報であったが、父母と教師と学園とが協同して作りあげた雑誌だった。学園側も積極的に発信の場として『道』を利用し、言わば学園の広報をPTAが担った形だった。

カラーページが増えてからは児童生徒の美術・工作・木工・工芸作品などがカラー写真で紹介されるようになり、実践記録の紹介にも多くのページを充て、明星の教育実践を保護者たちに伝えることにも貢献した。

2009年度、PTA組織改定により専門部（広報・文化・公費助成・厚生通案）が解消され、2010年3月5日発行の第134号を最後にPTA会報『道』は発行を停止した。

1952年の創刊以来、休刊することなく続けられてきたPTA会報『道』は、明星学園の文化の一端であり、重要な資産である。『道』の復刊を願うばかりだ。

4) 『道』以外のPTAの広報活動

1961年、『道』に加えて『PTAニュース』が2カ月に1回程度のペースで発行されるようになった。代議員会や総会の報告等、主に事務的な報告事項を載せる役割を担う媒体として、現在（2023年度現在）もPTA役員会によって発行されている。

また、PTA通信『ぎんなん』という冊子も発行されていた。現存資料として確認できているのは116号（1981年9月24日発行）～209号だが欠号も多い。欠けている号も引き続き探していきたい。『ぎんなん』は年5、6冊発行された時期もあり、『道』と比べてより自由な内容だった。1980年代には内部進学問題を先鋭的に取り上げるなど、担当者のイデオロギーが色濃く反映された面もあった。終盤の2000年代は漫画やイラストをふんだんに取り入れ、見た目にも楽しめる内容で、子どもたちも配付を心待ちにしていた。2008年9月10日発行の209号が最終発行であった。

5) バザー等の収益事業

1931年5月17日、学園創立7周年記念事業として母の会主催のバザーが開かれた。これが明星学園の最初のバザーで、600円（現在の300万円程度に匹敵）を上回る利益が出たという。このバザーでは、照井猪一郎先生指導の学校劇「お地藏様は知ってるか」（1、2、3年）、「退屈な王様」（5年）、「壺は誰のものか」（4、5、6年）も披露された。

戦後のPTAは、1955年からバザーを開催している。初期にはバザー委員会がなく、厚生部が担当した。当時のPTAはバザーの他にも明星祭や小・中・高それぞれの運動会で売店を出店し、お弁当・菓子・飲み物・体操着・運動靴・手作り品などを販売する収益活動を行っていた。しかし厚生部員の負担が次第に大きくなったため、1960年度から各部とは別にバザー委員会が組織され、これにあわせてPTAの組織改革が行われた。以降、PTAバザー委員会が中心となり、保護者と教職員全体が協力する大規模なバザーが毎年開かれている。学園関係者にとどまらず、近隣地域の住民の方々にも親しまれる恒例行事となっている。

(2) 明星学園後援会

明星学園後援会は、学園が多く資金を必要とする事業を行うときに、保護者中心の資金集め団体として結成され、学園の事業完了にともなって解消されてきた。第一次から第三次までの後援会は明確な事業目標を掲げて積極的に活動し、概ね目標を達成してきた。

その後改組によって再発足した第四次以降の後援会は、資金集めよりは会員（おもに卒業生保護者）相互の親睦交流や学園との関係維持を目的とする側面が強くなった。生徒たちは卒業と同時に「明星会」の会員となって卒業後も学園との関係が続くが、保護者は子どもが卒業すると学園との関係が途絶えてしまう。保護者のなかには、親として関わる間に自身も明星への思い入れが強くなり、子どもの卒業後も明星と関わっていたいという想いを持つ方が多い。このような人たちが長年にわたって後援会活動を支えてきた。

	〈発足～解消年〉	〈目的〉	〈会長〉
第一次後援会	1927年10月～1943年	旧制中学校・高等女学校設立	岡崎栄松氏 赤堀郁太郎氏
第二次後援会	1947年6月～1949年9月	新制中学校校舎増築	二村鍾氏
第三次後援会	1960年9月～1965年	創立30周年記念事業校舎建築	武者小路実篤氏
第四次後援会	1965年6月～	第三次を改組して再発足	武者小路実篤氏
第五次後援会	1966年9月～2010年	活動内容と運営方針を見直して再々発足、卒業生の保護者会員が多数となる。学園寮の整備・改修工事、国際交流行事の援助、会員親睦行事などを積極的に行った。	武者小路実篤氏（～1976） 千秋実氏（～1993） 川連拡子氏（～2001） 奈良正博氏（～2006） 川連拡子氏（～2008）
第六次後援会	2017年2月～	「明星学園をささえる会」発足	加藤結花氏
〃	2020年8月～	「明星学園後援会」に改称	加藤結花氏

第一次後援会……1927年1月に発足した「母の会」が、旧制中学校と高等女学校設立の資金集めのために父親たちを動かして、何度も準備会合を行い、10月に父兄総会を開いて後援会を発足させた。学園創立時に入学した3年生の児童がこの年6年生になっていたが、卒業後に進学する中等学校が当時の明星にはまだなく、小学校のみの学校だった。日々の経常費にも苦勞していた当時の明星学園には男女二つの新しい学校を同時に開校させる余力はなく、学園の首脳陣もなかばあきらめ気味であった。▶▶詳しくは本誌P.72 そこで母の会が主導して、資金づくりを目的とする「後援会」を父親たちに発足させたのだ。この後援会の活動によって3万3千円の資金を集め、設立認可のために必要とされた“見せ金”も用立てた。この時の功労者として、母の会の山之内鈴衛氏、安田董子氏、鈴衛氏の夫の山之内兵十郎氏（最高顧問）、岡崎栄松氏（初代会長）、新締五郎氏（会計）……らの名前が語り継がれている。戦後の明星学園中学校・高等学校へと続く、明星の歴史の生みの親ともいえる方々である。

第二次後援会……第二次後援会が結成されたのは太平洋戦争終戦後の1947年6月で、この年は学制改革によって義務教育の新制中学校が発足した年であった。明星学園でも新制中学校が発足し、中学1年生男女と旧制高等女学校の2～5年生が女学部の教室（井の頭）で、中2以上の男子生徒は旧制中学校校舎（現在の高校・牟礼キャンパス）でスタートした。この時結成した後援会

の目的は新制中学校の校舎4教室の増築で、会長は二村鐘氏。この事業は1949年7月に一段落した。その後、後援会と「母姉の会」とが合流して新たに「父母と教師の会」として再始動する意見がまとまったため、1949年9月25日「父母と教師の会」の発足にあわせて後援会は解消した。

第三次後援会……第三次後援会は、学園創立30周年記念事業として老朽化した旧校舎の改築、校地拡張、生徒増加に伴う新校舎の増築を目標に、1955年9月に発足した。この年の4月から、学園は12年一貫教育の徹底を目指す新しい教育体制＝4・4・4制を開始した。世間の注目を集めるなか、校地拡張と校舎の新築など全体で2億円近い大事業への後援であった。

第四次・第五次後援会……1965年6月、第三次後援会の改組によって活動内容の見直しが行われた。主たる会員は卒業生保護者と在校生保護者であったが、運営委員（理事）は卒業生保護者と旧教職員が務めた。会報の発行や親睦行事、勉強会、PTA・明星会との交流行事などに加えて、千倉寮改築工事への協力や学校寮の備品の補充、国際交流事業への協力など、1970～1990年代の教育活動を熱心に支えた。会の運営上の問題が生じ2008年に活動を停止、2010年に解散した。

第六次後援会「明星学園をささえる会」……2014年秋、学園創立90周年記念事業を機に記念誌編集に携わった編集委員会（委員長：一瀬清 元小学校長）は、退職教員や卒業生保護者と学園との関係を保つためのネットワークづくりを計画していた。その役割を新たな「後援会」に担わせたいと考え、学園関係者に呼びかけて協力者を募った。そして出口一彦理事長と協議を重ねたうえで、2017年に新しい「後援会」を発足させた。当初「明星学園をささえる会」の名称でスタートさせたが、3年後の2020年に「明星学園後援会」に名称変更し、現在に至っている。2023年11月現在会員数は611人。さらに会員を募っている。

名称変更とあわせて、「ささえる会」時代は年1回発行していた会報の形態を変更し、年に3回発行して情報発信の機会を増やした。会報発行の他、児童生徒の美術作品を紹介するオリジナルカレンダーの作成、PTAバザーへの参加、クリスマスコンサート、講演会、ワークショップ開催など積極的に活動し、創立100周年記念事業でも学園の寄付募集に協力している。

（3）明星会（同窓会）

1) 明星会概要

明星会は明星学園卒業生の同窓会で、学園創立10周年を迎えた1935年（昭和10）1月に発足し、当時の赤井米吉学園長の提案で「明星会」と呼ぶことにした。発足時の会員は第1回生（1933年3月卒）から第3回生までの86名（旧制中学校と高等女学校の卒業生）であった。明星学園が創立100周年を迎える2024年には20,000名に迫る会員数となり、翌2025年1月に明星会は90周年を迎える。

明星会は、“会員相互の親睦を図り母校の発展に協力する”という目標を掲げ、会員情報の管理、名簿の発行、会報の発行、卒業生同窓会の開催支援、種々のイベントの開催、PTAバザーへの協賛などの活動を行ってきた。また明星会は学園の規則によって定められた評議員選出母体の一つとして卒業生から評議員を選出し、また明星会会長は理事として学園の経営にも参加している。

明星会は、学園の校舎建築、振興事業などに関する募金活動にも協力してきており、1983年（昭和58）には、老朽化して使用できなかった軽井沢沓掛寮（上野原寮）を会員からの寄付などで新築し学園に寄贈した。現在も学園の創立100周年記念事業である中学校校舎建設の募金活動に、PTA、後援会と共に協力している。

明星会の会員については、小学校、中学校、高等学校のどの学校を卒業しても明星会会員であり、さらに、転校や中退した人でも本人の申し出により会員になることができる。

明星会は会長、副会長、幹事長および常任幹事、各学年から選ばれた幹事411名（2023年度現在）で運営しており、予算／決算をはじめ会則で定められた重要事項は、常任幹事会を経て会運営の最高機関である幹事会（幹事による総会）で議決される。日常業務に関しては幹事長と数名のスタッフが担っている。これらの活動を監事2名で監査している。明星会の運営や活動の費用はすべて会員から納付された会費と寄付によって賄われている。学園からの経済的援助は受けず自主自立した組織であるが、学園とは常に連絡を密にして意思の疎通を図り、PTA、後援会とともに学園の振興発展のために協力している。

2) 会員名簿

会員情報の管理と名簿の作成は明星会の重要活動であり、会の発足直後から会員名簿（紙媒体）を数年に1回くらいの割合で発行してきた。しかし、2000年（平成12）版の発行の後には、個人情報保護の要請が厳しくなったことから、名簿の発行は媒体にかかわりなく行っていない。会員情報は明星会内のコンピュータで管理し、新規会員の追加と随時の情報更新を行っており、明星会及び学園が卒業生宛ての郵便を送る際などに利用するとともに、同窓会開催の際などには代表者に必要分を提供する形で使用している。

3) 明星会会報

明星会会報には、卒業生の活動や同窓会だより、学園と近隣の近況、イベント案内、学園の募金活動への協力願い、PTAバザーや後援会のイベント案内など、卒業生関連と学園関連の情報を幅広く掲載している。1955年発行の創刊号から2000



年（平成12）までは多くの年で年1～2回発行していたが、発行できない年もあった。2001年以降は毎年1回発行している。2007年からは全面カラー版にした。

2000年以降で特記すべき掲載内容のひとつは、2000年に掲載された岸すみれ先生（高校元教諭・10回生）による「なんで歌わないの？ “明星学園行進歌”」である。高等学校では歌われていたが、小学校と中学校ではある時期から入学式や卒業式などで歌われなくなり、岸先生の残念に思う気持ちが綴られた。その後も関連記事が掲載され、卒業生からの反響が紹介された。その後、学園内での長い内部調整を経て、明星学園行進歌は2013年（平成25）に中学校で、2014年には小学校の式典でも歌われ始め、在校生から各年代の卒業生を繋ぐ大事なものが復活した。また2003年には学園の協力を得て明星学園行進歌のCDを作成し、毎年高校の卒業生（2019年からは高校入

学生)に贈呈している。明星学園行進歌の誕生からその後の経緯に関しては、本誌の第1部 P.102 に記載がある。

4) インターネットの活用

明星会のホームページ (<https://myojo-kai.jp>) を1999年(平成11)に開設した。会員の皆様への種々のお知らせ、同窓会の開催案内や報告などを掲載するとともに、フォトギャラリーには学園関連、卒業生関連の写真などを掲載している。これに先立つ1998年5月にはEメール通信MINT(Myojokai Internet Tsushin)の配信を開始し、登録者向けに学園情報や卒業生情報などを随時お知らせしている。2013年からはMINTとはほぼ同じ内容をFacebookでも発信している。

5) P T Aバザーへの参加

毎年秋に小・中学校で開催されるP T A主催のバザーに参加している。喫茶室、焼き鳥ブースなどの出店や、お煎餅の販売をするとともに、グラウンドには大型テントを設置し、卒業生、保護者、教職員など学園関係者が親睦できる場所を提供している。当日の売り上げは全てP T Aを通じて学園へ寄付している。

6) 各種イベント

2009年(平成21)以降、種々のイベントを企画し開催しており、卒業生だけでなく、教職員、理事、P T A、後援会の方々にも参加していただいている。

①バスツアー

日帰りのバスツアーで、今は使われなくなった懐かしい寮や周辺地域への訪問、卒業生やそのご家族経営の施設の観光などを実施している。

- ・ルミエールワイナリー他(笛吹市)(2009年、2015年)
- ・千倉寮^{たかべ}+高家神社包丁式(2010年)
- ・軽井沢上野原寮+布引観音(2011年)
- ・風の丘ファーム(有機野菜農園、埼玉県小川町)(2012年)
- ・日光東照宮+金谷ホテル(2016年)
- ・数内正幸美術館+サントリー白州蒸溜所見学(北杜市)(2019年)

②講演会、演奏会、寄席

各界で活躍する卒業生を招き講演会、演奏会、落語会を実施している。

◆講演会

- ・向後元彦氏(25回生)「『冒険と人生』 マングローブ生態系再生を目指して」(2010年)
- ・森武夫氏(15回生)「神話『天の岩戸』と『日食』の関わり」(2013年)
- ・山本ゆかり氏(47回生)「春画を旅する～ 恋をめぐる江戸文化」(2019年)
- ・染谷ゆみ氏(54回生)「TOKYOを油田に! ?」(2019年)など。

◆演奏会

- ・増田太郎氏(54回生)講演ライブ(2011年)
- ・川畠成道氏(57回生)ヴァイオリンコンサート(祝明星学園創立90周年)(2014年)

◆落語会

明星寄席と名前を付け、柳亭小痴楽氏(75回生)と三遊亭楽天氏(61回生)による落語

とトークショーを2017年から2024年まで計5回実施している。

③教室

明星会部活と名付け、2018年から種々の教室を開始した。各教室それぞれ複数回開催し、参加者が楽しみつつ知識や技能を高められるよう工夫している。

- ・「大人のための朗読教室」 河原崎國太郎氏（48回生）
- ・「ハワイアンキルト教室」 高橋千春氏（47回生）
- ・「落語散歩」 三遊亭楽天氏（61回生）
- ・「リラクゼーションヴォイストレーニング」 田中博美氏（48回生）
- ・「健康のためのヨガ」 福田珠見氏（57回生）

7) 事務室

初期の明星会では、卒業生の教員と教え子がボランティアで献身的に業務を担当していた。特に上田八郎先生（7回生）、岸すみれ先生（10回生）、田中一水先生（16回生）および学園教務事務も兼任された千田和子さん（25回生）は、明星会の基盤を築き上げ、長年にわたって活動を支えられた。その後、名簿管理、会報発行、会計、交流促進に加え、イベント実施、情報発信など現在までに広げてきた業務を含め、卒業生の専任スタッフが日常業務を担っており、折々に卒業生ボランティアがサポート業務を行っている。

8) 今後の展望

明星会の今後の目標は、種々の活動にさらに多くの世代から参加いただくようにすることである。幹事会には各年代から多くの人に参加いただいて多面的な議論を活発にし、種々のイベントには多くの方が参加され楽しんでいただけるようにしていきたい。そしてインターネットを使った情報発信は、内容をより充実したものにし、即時性も高めていきたい。（文責：明星会）

（4）学童クラブ「すずかけの木」

1) 明星学園に学童クラブがほしい！

明星学園学童クラブすずかけの木は、2014年（平成26）に保護者有志が立ち上げた、自主運営の学童クラブである。設立までの準備期間は、なんとたったの1年。場所もない、お金もない、スタッフもない、しかしそこには「こういう学童がほしい！」というビジョンと「作るんだ！」という強い意志、そして実際に行動する保護者と、「やりたい」を応援する学園の文化があった。

①それは、保護者の集まりから始まった。

最初のきっかけは、2013年（平成25）3月24日、春休みに開かれた2年生最後の懇親会での雑談であった。2年の担任川松泰美を囲んで話すうち、仕事を持つ母たちから、子どもが学童に行きたがらないという嘆きの声があがった。「せっかく明星学園に通っているのに、放課後は別の文化の中で過ごしている」「明星に学童があったらいいのに！」それを聞いた川松が「職員からも学童を作ったらどうかと提案したんですよ」と話した。学校の先生も同意見なら、保護者の要望が伝われば実現するのではないかと、お願いしに行こう！と俄に盛り上がった。

そのわずか数日後、後に代表となる田口真澄は、校長の平田と校長室で向き合っていた。平田

はその4月に新しく校長に就任したばかり。公立小学校の校長を歴任する中で、学童の必要性は十分認識していた。また前校長一瀬からも申し送りを受けていた。教職員組合からの学童設立の提案に対して、理事会で費用等具体的に検討した結果、難しいと結論が出たが、なんとか道を探れないか。当時、明星学園小学校の入学募集は苦戦しており、学童は回復の一助になり得る。

初対面の平田校長に、田口は熱心に学童の必要性を訴える。その時、平田の念頭にあったのは、ちょうどその春、和光鶴川小で学童が新設され、募集が回復した例であった。和光鶴川の学童は、学園運営ではなく、保護者運営である。平田は田口の話をもっと受け止めた上で和光の例も話し、「自分たちで学童を手作りする形なら、実現できるかもしれないよ」と伝えた。お願いすれば作ってもらえるのでは、と思っていた田口だが、校長室を辞する時には「よし、作るしかない!」と決意を固めていたのである。

②やりたい! ならば、応援しようという文化

田口はすぐに懇親会で一緒だったメンバーに声をかけ、明星学園学童設置準備委員会を立ち上げた。平田の推薦もあって、教職員の窓口として伊野文子が加わり、学内での活動がしやすくなった。他学年の保護者も加わる中、まず最初につづかったのは「どんな学童クラブにするのか」という問題であった。放課後も明星学園らしく過ごせる場所を自分たちの手作りで、と考える田口らに対して、そこまでできない、業者を入れて子どもを預けられればよいという意見もあった。しかし、話し合いを重ねるうちに業者案はなくなり、メンバーも入れ替わった。この時、「放課後も明星学園らしく」という方向性が定まっていた。

6月、準備委員会は理事会の場で学童設立を訴えた。まずは夏休みに「お試し学童」を実施することが目下の目的である。理事会では「私立に学童が必要なのか」といった疑問や実際の運営を心配する声が大きかったが、伊野の熱弁もあり、後日、「そんなにやりたいというなら、試してみてもいいのではないか」ということになった。理事会の様子ではとても無理だ、と暗礁に乗り上げた気持ちでいた委員会メンバーはむしろ驚いたが、同時に「やりたいことは応援する」という明星の文化が根底にあることを強く感じたものである。その後、平田は和光小、和光鶴川小の学童を視察し、理事会に設立のメリット、課題などを報告。事態は学童設立へ具体的に動き始めた。

夏休みに3日間実施されたお試し学童は、小学校を退職した先生方、卒業生、保護者などボランティアに支えられ、1年～5年まで32名の子どもたちが参加。活動は試行錯誤だったが、好評のうちに終了し、よい流れで冬休みも実施できることが決まった。10月末には夏の報告も兼ねて、冬の参加募集、4月からの利用希望アンケートを全校配付。場所やスタッフの確保など問題は山積していたが、4月設立を目指して、勢いは止まらなかった。

③誕生! 明星学園学童クラブすずかけの木

準備委員会では、資金計画、損益計画などを含む事業計画書を作成。11月に小・中職員会議、12月には理事会でプレゼンテーションを行った。運営の見通しは立っても、最大の懸念は「場所がない」ことである。頭を悩ませていたが、高校の平野、中高校長の河住と話した際、売店（北棟1階）の後ろ（奥）のスペースはどうか、とアドバイスを受け、平田にも相談、それなら可能ということになった。大きな一歩であった。また卒業生で長く保育士を勤める須藤英津子が春から勤務することに決まった。

冬休みのお試し学童は短縮期間を含む12日間実施、子ども38名が参加。多くのボランティアに支えられた。この冬の活動が無事に終わり、年が明けた2014年（平成26）1月、ついに理事会

から「4月学童設立」にGOサインが出た。まだ早い、急ぐことはないという意見も出たが、「とにかくやってみよう」と準備が進んだ。2月、学童設置を願っていた前校長一瀬の案で、名称が「明星学園学童クラブすずかけの木」と決まった。設立時から学園を見守る大きな木から名前をいただいた。

そして4月、ついにすずかけの木がスタート。会員33名での船出であった。売店の裏の小さなスペースで、鍋釜は貰い物、柵も拾ってきて間に合わせた。子どもたちのリュックを入れるロッカーは、みんなで段ボールを貼り合わせて作った。まさに「手作り学童」のスタートであった。



2) 小さな手作り学童から、100人規模の大きな学童へ

33名（うち長期休み会員6名＝夏休み・冬休み・春休みだけ参加したい子ども）でこぢんまりと始まったが、年度途中に入会希望が次々に入り、会員数は増加の一途を辿った。それだけニーズがあり、また活動の様子が好評であったと考えられる。

すぐに場所が足りなくなった。翌2015年（平成27）夏には売店部分を移築、活動場所を広げたが、それでも足りない。2016年（平成28）には会員数は74名（うち長期休暇会員13名）となり、今後も増えることが予想された。学園と新しい建物建設を模索するという大きな話になり、場所や資金、学内の了承などさまざまな課題に直面した。ひとつひとつ進めてはいたが、日々、場所のなさに苦慮しながら活動していた。

そんな中、2018（平成30）年度の新1年生の入会希望が定員を超えたため、苦渋の決断で抽選を実施。結果、選に漏れた家庭が入学そのものを辞退する事態となってしまった。このことから、学童の必要性が改めて認識されることとなった。

2018年（平成30）2月、ついに小学校南駐車場跡に「すずかけのおうち」が完成した。（株）天然住宅が設計・施工を担当、シックハウス対策も万全な木の香り漂う建物である。新しい活動場所を得たこともあり、その後は会員間で協議しながら、常勤を増やし、新1年生全員を受け入れている。



2020年（令和2）はコロナ禍での休校に伴い、4月5月と閉所。会員間ではさまざまな意見が出たが、学童クラブながら学園と一体であり、社会インフラたり得ないことを認識する機会となった。またこれを機に、30名近くなったスタッフの雇用安定のため、就業規則等見直しが行われた。

2022年（令和4）度は継続率も高く、会員数95名の大所帯となり、常勤も3名となった。

3) 明星学園の学童クラブとして何を大切にするのか

学童設立を検討し始めた頃、和光小、和光鶴川小だけだった私学の学童は、この間雨後の筍のように増えた。実態としては、外部に活動を委託しているところも多い。「放課後も明星学園らしく」を目指した、すずかけの木はどのような活動を行ってきたのか。

①明星学園の教育方針に則った活動

設立にあたって、まず、明星学園の教育方針に則った活動をすること、そして子どもたちが安心して過ごせる、温かで楽しい居場所であることの二つを理念とした。設立を準備しながらいつもベースに考えてきたことである。また活動目標として「子どもたちがいきいきと、主体的に過ごすこと」を掲げた。

具体的には、明星学園で長く教鞭を取った一瀬清、大野映子、秋野憲治、川手晴雄、川松泰美が顧問となり、かつて授業で行った、自然の材料を使ったものづくり、みんなで大きな一枚の絵を描く活動や平和を考える活動、合唱や読み語りなどを行っている。明星学園の教育に重なる活動である。また共に取り組むイベントとして、遠足や音楽会、運動会を実施。日常の中でも異学年での関わりや教え合いがあるが、イベントを通して自ら表現し、グッと成長する様子がある。また、学内外から、書道や茶道、絵や折り紙など、教えたいと声がかかることも増えた。子どもたちのためにと、多くの大人が採算度外視で、協力してくださる有難さを噛みしめている。

日々、子ども同士のぶつかり合いは起こるが、明星学園でいつもそうしているように、すずかけの木でも、なぜそう思ったのか、今どう考えるのか、を丁寧に話し合っている。「みんな違って、みんないい」と体感できる場所が、安心な居場所になると考えている。

②保護者運営であることの意義

すずかけの木は、保護者の自主運営である。子どもたちを育む環境を整えるためにも、保護者同士コミュニケーションを大切にしていこうと、年に一度の総会と、ほぼ毎月の保護者会を実施してきた。当初、準備委員会のメンバーがそのまま運営委員を担ったが、理念や組織の説明、具体的な活動内容、防災や保険など、話し合い、決めることは山のようにあり、負担は相当なものであった。次の担い手がないのではと懸念されたが、子どもたちのためにと手を挙



げる保護者が必ずあり、仕事を分担しながら、保護者の活動は広がり、活発化してきた。組織が大きくなるにつれ、財政や雇用、ITなどの面でも、保護者が知恵を出し合い、ボランティアで尽力を重ね、改善を実現してきた。すずかけの木をよりよい場所にしたい、という会員の想いが組織を支えている。

そして、保護者同士顔を合わせ、意見を交わす中で、学びも多いことに気づき始めた。すずかけの木では、物事がトップダウンで決定されることはない。時間と手間はかかっても、話し合い、少数意見に寄り添うことを大切にする。それは明星学園で大切にしていることを体感するような機会でもあったのである。

③大きなすずかけの木のように

初代の常勤須藤英津子は、すずかけの木が大切にしたいことを体現したような存在であった。できるだけ自然に優しい生活を心がけていた。子どもをルールで縛ることを嫌い、一人ひとりの個性を愛し、主体性を引き出すチャンスを常に狙っていた。それは須藤自身が明星学園で育つ中で培われた部分でもあったであろう。須藤の後、常勤を担う大草鷹平は、卒業生らしい偏見のなさで子どもに寄り添っている。集まってくるスタッフは、「明星学園に関わりたい」という明星学園の卒業生や元保護者、教育を志し明星学園に興味を持つ学生が多い。日々、スタッフ同士で今日の子どもたちとの関わりを振り返る。正解のない中で目の前の子どもと真剣に向き合ううち、子どもたちの成長を実感し、喜び合う日が来る。面白さに目覚め、児童教育を新たに志すスタッフも複数生まれた。



2024年（令和6）、学園が100周年を迎える年に、学童クラブすずかけの木は10周年を迎える。2022年（令和4）現在、低学年は学年の半数近くがすずかけの木に所属している。子どもたちは、学校でも家でもない「すずかけのおうち」をもうひとつの居場所として、伸び伸びと過ごしている。すずかけの木を卒業した中学生や高校生がふらりと訪れ、おやつ作りを手伝ったり、おしゃべりしたりしていく。元保護者が立ち寄ることもある。子どもたち、スタッフ、保護者、みんながすずかけの木で繋がり、明星学園のよさに触れながら過ごしている。すずかけの木が、プラタナス広場の大きな木のように、今後もさらに枝を伸ばし、根を張っていくことを願う。

（文責 竹本 琴子）

（5）学校ボランティア

本校ではPTA活動とは別に、学園が保護者の皆さんに協力を求め、支援していただいているボランティア活動が複数ある。「出来る時に出来る協力をする」という精神のもと、サポートしていただきたいものを毎年見直ししながら募集している。多様な保護者の皆さんの存在は、学園にとって大きな力となっている。

以下、2023年度に募集された「学校ボランティア」を示す。

◇避難所運営近隣ボランティア

三鷹市在住の方にお願ひし、災害時における避難所の運営、地域の方・児童生徒への対応にあたっていただく役割である。年一回程度集まっていたいただき、備蓄倉庫の場所の確認やマニュアルの確認を行っている。

◇9年卒業研究サポートボランティア

9年生の「卒業研究」の実践において、①専門的な知識や技術を生徒にお話ししていただける方 ②テーマ設定、リサーチや検証方法について、生徒にアドバイスしていただく「相談会」に参加できる方 ③大学等の研究機関やしごとの現場、人とのつながりを作っていただける方—ということと協力いただいている。例年、登録者はほぼ50名に及んでいる。

生徒にとっては、自らのテーマを深く見直す視点を与えてもらったり、「してみる計画」(調査・取材・実験等)の具体的なアドバイスをいただいている。あたたかな眼差しで1月の発表会まで見守ってもらえるということは、生徒にとってどんなに恵まれていることかと思う。この経験が高校卒業後の進路の選択に生かされたり、大学入試に際し、研究活動の実績として提出したり、面接で語ったりしている生徒も多い。

教員にとっても、社会で専門的に活躍されている方々との出会いは大きな刺激となり、支えともなっている。

◇小学校入学広報ボランティア

小学校で毎月開催されている「わくわく体験広場」(小学校入学希望者向けの体験会)をサポートしていただいている。受付、活動の補助が主な仕事である。

◇図書室資料整備ボランティア

中高生用の新聞を切り抜き、テーマごとにファイルを整理、新聞切り抜きファイル資料作成をお手伝いいただいている。また、長期休暇中を利用し、書架の本の並べ替えやラベル貼り等、書架整理でお力を借りている。

◇学園資料整備ボランティア

明星学園の歴史や教育に興味を持ち、主に平日の日中、資料室(井の頭キャンパス)に定期的に来られる方にお手伝いいただいている。ある程度のPCスキルと資料を読み解く“慣れ”が必要となる作業のため、定期的かつ長期にわたって参加できる方をお願いしている。大量の古い写真のデータ化や、さまざまな紙媒体資料のデータ化とインデックス作成、それら資料のデータベース化など、これまでに資料ボランティアの皆さんが取り組んでくださった作業量は膨大である。

なお、学校ボランティアは必要な時に、保護者の皆さんに呼び掛けてお願いする。その目的が達せられた時には解散する。以下、近年に期間限定で募集したものを記しておく。

* 100周年記念出版物 編集ボランティア (2021年度～)

100周年記念出版物の編集、製本作業をお手伝いいただく。依田好照先生講演会「明星100年から学んだこと」の手作り冊子作成をはじめ、『自由教育の伝統を未来へ～明星の教育100年を語る～』『明星と私』『100周年記念エッセイ』などの編集のお手伝いが予定されている。

* 三鷹シティバスボランティア (2022年度)

三鷹シティバスを利用している小学生の保護者の方をお願いした。登校期間中の月・木・金曜

日朝7時50分から三鷹駅のバス停に立ち、乗車前の児童の安全への配慮を、さらに8時05分の明星学園行きのバスに乗車、車内でのマナーについて声掛けをするという神経を使う大変な役割を担っていただいた。一年間のみのボランティアではあったが、2023年度より登校時間帯のバスが増便となり、混雑が多少緩和されるようになった。

＊T字路の安全・旗振りボランティア（2022年度）

小中キャンパスの正門を出て東に向け歩いた突き当りにあるT字路で、月・水・金曜日朝8時から8時半まで児童生徒の横断の誘導と共に車両や自転車、バイクなどの交通整理をしていただいた。

1年間の活動により、PTA及び学園の間でこの場所の安全指導の大切さが共有され、2023年度よりシルバー人材センターに学園として人員をお願いすることになり、ボランティア募集は停止された。

（6）その他の団体

1) 明星学園史研究会

明星学園中学校の社会科教諭を26年間、その後、小・中学校校長を5期15年間務めた依田好照は、退職後、41年間の学園生活を顧みて「明星学園の歴史を正しく、もっと広く、もっと多くの人たちに伝えねばならない」という使命感を抱いていた。創立者の照井猪一郎が晩年小・中校長を務めていた時代に明星の教員となった依田は、照井に育てられた原田満寿郎（元小・中学校社会科教諭、学園理事）の後輩として明星学園中学校の社会科をささえた。校長在職中は、赤井米吉をはじめとする創立者たちの思想と実践について、また明星学園が小さな学園ながらつねに日本の教育の開拓者として大きな役割を担ってきたことについて、教職員、父母、子どもたちに繰り返し語ってきた。また、学校説明会に集まる人たちにも、この混沌とした日本の教育状況のなかで、現在の明星学園が果たすべき社会的使命について語ってきた。

しかし一歩外へ出れば、明星学園は世の中に正しく理解されているとはいいがたく、また事実とは異なる「明星神話」のたぐいが流布されていることも知った。

外へ出ずとも、学園内部で大きな変化が進行していた。創立者の警咳に接し、公立学校よりはるかに低い給料にも耐えながらふんばってきた戦中世代の教職員は退職するか物故するかして、戦後生まれの世代が多数になっていた。父母の世代や社会的基盤、ものの考え方も、家庭の状況も、時代とともに変わってきた。教職員や父母の意識のなかに、永年にわたって築き上げられてきた明星の良き伝統、良き文化の認識がしだいに薄らいできたことは憂慮すべき事態であった。

依田は「学園の現在と未来を担う人たちに、もっともっと明星の歴史を知ってもらいたい」と切実に希い、次のように言う。

歴史を知ることとは、いうまでもなく、たんに古い昔の出来事を知ることではありません。私たちはどこから来たのか、いまどこに立っているのか、そして、これからどこに行くのかを真剣に考えることです。

世を挙げて教育改革が叫ばれている今日、明星学園の歴史を研究するのはきわめて重要です。創立の昔から、児童・生徒と父母・教職員・卒業生、さらに明星学園を支援する多くの人たちが力を寄せ合っ

て築き上げてきた明星学園。そこには先人たちの「志」があり、骨身をけずりながら積み上げてきた研究・実践の蓄積があり、いますぐにでも活用できるノウハウも無数にあるはずです。

学園にはすでに『明星の年輪』という記念誌が3巻あります。そのうちの『50年のあゆみ』と『60年のあゆみ』の2巻は、学園の大先輩である原田満寿郎先生が心血を注いで編纂された労作です。（『70年のあゆみ』は実質、私が中心になって編纂しました。）また、広く日本の教育史のなかで明星の実践を位置づけた研究には、中野光先生の『大正自由教育の研究』をはじめ、すぐれた業績がいくつもあります。

私は、それらの業績に学びながら、さらに埋もれている史料を掘りおこし、誰にでも活用できるように整えておきたいと思いました。

そこで、理事会に提言し、退職後もしきおり学園に出て、この仕事に取り組むことにしたのです。

まず、原田先生が蒐集し分類された史料を確認することから作業を始めました。（史料は理事室のいくつかのロッカーに収納されていました。）

その間、成城学園教育研究所には幾度も足を運びました。ここには、成城の史料はもちろん、大正自由教育に関する史料が大量に整備されていました。これにくらべて明星には史料室も展示コーナーもなく、理事室に眠っている史料の保管も（原田先生の献身的なご努力にもかかわらず）じつに貧弱でした。このことは、明星の歴代の責任者が（私も含めて）いかに学園史の史料整備を怠ってきたかの証明です。

依田は明星会（同窓会）会報で卒業生たちに資料提供を呼びかけ、僅かだが反応を得た。さらに“生きた史料（資料）”である卒業生・新旧の父母・教職員たちからも証言を集めたいと考え、これらの人々と共に、明星学園の歴史を掘り起こし研究する会をつくりたいと思い立つ。

この思いに応えたのはPTA会長、後援会会長等を歴任した奈良正博氏だった。

奈良氏は卒業生ではないが、明星教育の理解者で、依田校長1年目に一人娘を小学校に入学させて以来、依田のよき相談相手でもあった。

依田校長が就任した年は「学園騒動」の影響で小学校応募者が激減し、入学した1年生は定員（1学級36名、2学級編成）の1クラス分にも満たない30名だった。当時の松井憲紀理事長の英断で15名ずつの2学級編成でスタートし、年々転入生をふやしていったが、文字どおり学園は危機の真只中であつた。依田は後年「私の校長1年目の小学校1年生と、奈良さんをはじめ保護者の皆様は、学園の危機を救ってくださった大恩人です。私はこの恩義を終生忘れることはありません。」とたびたび語っている。

「明星学園の歴史を掘り起こし研究する会をつくりたい」という依田の提言に賛同した奈良氏と、やはりPTA会長経験者だった富谷久子氏の協力も得て役割分担が決まり、会の名称も「明星学園史研究会」と決まった。こうして1999年4月11日（日）、第1回目の集まりが吉祥寺の永谷シティプラザでもたれることになった。

会は自由参加で固定した会員制をとらず、会則も会長も定めない。明星学園の歴史に関心のある人はみな「会員」という考えであつた。毎回、前半の第1部で講師やリポーターの話を聞き、第2部で参加者がフリーに話し合うというかたちで進行する。初参加でも気がねなく参加できるように運営された。会の記録は講師・リポーターの許可を得て録音・録画し、保存。当初は毎回録音した音声で文字起こしして印刷し、次回に配布していたが、作業量が負担となり途中からは文字起こしはできなかった。

実施された研究会のテーマと発表者は以下の通りである。

第1回	1999年4月	大正デモクラシーと教育改革者の群像	依田好照先生
第2回	1999年5月	成城・明星・玉川・和光の創立	依田好照先生
第3回	1999年6月	照井猪一郎と『新讀本』	依田好照先生
第4回	1999年9月	教科書はどう変わってきたか	依田好照先生
第5回	1999年10月	北原白秋と明星学園	依田好照先生
第6回	1999年11月	明星学園と芸術教育	恩地邦郎先生
第7回	1999年12月	海へ山へ——千倉寮と軽井沢寮の歴史	依田好照先生
第8回	2000年1月	女優志望の若い女性が見た戦中・戦後	馬場洋子さん
第9回	2000年2月	教科書『にっぽんご』	内藤哲彦先生
第10回	2000年3月	体験的 社会科	依田好照先生
第11回	2000年4月	体験的 社会科 PART II	依田好照先生
第12回	2000年5月	明星学園の教育改革 4・4・4制を考える	依田好照先生
第13回	2000年6月	明星学園PTA考	奈良正博さん
第14回	2000年9月	明星学園後援会考	川連弘子さん
第15回	2000年10月	明星学園の歴史からその特質をどう捉え、本来のイメージをどのように構想するか	杉山博さん・阿部宗子さん 柳川敬子さん
第16回	2000年11月	いま学校で・小学校国語の授業	大野映子先生
第17回	2000年12月	いま学校で・小学校総合の授業	一瀬清先生・阿子島茂美先生
第18回	2001年2月	『教育基本法と明星教育』	依田好照先生
第19回	2001年3月	なぜ学校に音楽の時間があるんだろう	奈良正博さん
第20回	2001年4月	国語の授業から見る中学生のすがた	堀内雅人先生
第21回	2001年5月	なぜ学校に音楽の時間があるんだろう II	奈良正博さん
第22回	2001年6月	もう一度『教科書』について考える	依田好照先生
第23回	2002年2月	霜田光一先生を囲んで	霜田光一先生
第24回	2002年3月	霜田光一先生を囲んで PART II	霜田光一先生
第25回	2002年4月	1930年代の明星学園	横田数弘先生
第26回	2002年5月	『さかだち学校』と明星学園	奈良正博さん
第27回	2002年6月	ことばの教育について	内藤哲彦先生
第28回	2002年9月	漢字教育への私見 I	内藤哲彦先生
第29回	2002年11月	漢字教育への私見 II	内藤哲彦先生
第30回	2003年2月	教育基本法『改正』のどこが問題なのか	依田好照先生
第31回	2003年4月	明星学園行進歌はいつからなぜ歌われなくなったのか	依田好照先生
第32回	2003年6月	明星学園国際交流活動	伊勢誠先生
第33回	2004年2月	創立80周年を迎える明星学園の過去と現在から未来を想う	フリーディスカッション
第34回	2004年6月	明星における霜田静志の教育について	霜田光一先生
第35回	2004年1月	正しておきたい明星の“神話”	依田好照先生
第36回	2005年3月	私のなかの明星学園—明星は教育の原点	久保田宏明先生
第37回	2006年2月	いま、ガッパ先生から受け継ぐもの	依田好照先生
第38回	2006年5月	私が受けた明星の教育—照井先生の思い出など	赤井英乃先生ほか3名

第1回～8回まで、及び第10、12、19、31、34回の記録は文字起こししたものが残されている。これらの資料は学園史の貴重な証言集であり、のちの研究の重要な道標となっている。

明星学園史研究会は第38回目（2006年5月）が最後になったが、この会に関わった中心メンバーの多くが、次に挙げる『輝け！明星学園』の会」に引き続き携わった。

2)「輝け！明星学園」の会

入学希望者・内部進学者の減少などで学園が苦しい状況にあった2006年、明星学園を応援したいと思う人たちが集まって立ち上げた団体。2006年5月15日の創立記念日に、教職員・保護者・卒業生など、さまざまな立場の明星関係者が集って意見を出し合った。その際の案内文を紹介する。

「明星学園よ！ もっと輝いて！」という願いをこめて、ここに「応援団」を発足させることにいたしました。

赤井米吉先生をはじめ4人の教師によって創立された明星学園。小さな学園ながら、日本の教育の開拓者、人間教育の実践者として大きな役割を担ってきた明星学園。その学園が、いま危機的な状況にあります。入学を希望する児童・生徒の減少、内部進学しない児童の増加、財務状況の悪化など。この現実、長く続いた不況や、少子化の影響もあるでしょうが、明星学園に対する社会的評価の現れではないでしょうか。

今日の混沌とした日本の教育状況のなかでこそ、真の意味での ①個性尊重 ②自主自立 ③自由平等の教育理念を具現化してきた歴史と伝統をもつ明星学園がより輝いてほしい。創立の昔から、児童・生徒と父母・教職員・卒業生、さらに明星学園を支援する多くの人たちが力を寄せ合って築き上げてきた「明星学園」という「文化」を大切にしていきたい。そんな思いをともにする人たちが、活動の第一歩として、「応援団」発足の会を兼ね、下記の要領で五月集会を開きます。時あたかも明星学園創立記念日。この4月から、中・高一貫6・6制もはじまり、新しい一歩を踏み出したところです。

集会では、明星学園をさらに輝かせるために、どんどん意見を出し合い、なによりも具体的な応援策を考えたいと思います。とりあえず、私たちが発起人になっていますが、この「応援団」は明星学園が元気に輝いてほしいと願う人なら、誰でも自由に参加できる集まりです。趣旨に賛同なさる方々、明星学園を支援してくださる方々のご参加をお待ちいたします。

その後、年に1～2回のペースで講演会を開いた。そして講演の内容は世話人会が毎回記録し、抄録を「お便り」に掲載した（第2回・中野光先生の講演記録のみ、ブックレットにまとめて発行した）。お便りは通算25号まで発行し、学園教職員と会の賛同者に郵送した。明星学園の創立理念を現在の学園関係者に伝えたいと願い、毎号欠かさずお便りの巻頭には、創立者や初期の教員たちの教育姿勢がまとめられた印象的な言葉を選んで掲載した。

2009年に学園資料整備委員会が発足すると、世話人会メンバーは無償ボランティアとして積極的に資料整備作業に参加した。倉庫の棚に詰め込まれていた資料を紐解き、手に取って検証できる状態にするまで根気よく作業を続け、その後の資料整備業務の道筋を付けた。

2019年7月、『明星学園と私』の題名で39人の学園関係者から寄稿された文集を作成し、最終号のお便り25号とともに発行、13年間の活動を終了した。

「輝け！ 明星学園」の会が実施した講演会は以下の通り

第1回	2007年2月16日(金)	「見つめ直そう明星学園の原点」	久保田宏明	頤明館中学・高等学校長
第2回	2007年6月8日(金)	「逆風の中の私学—そこに身をおいた者のひとりとして」	中野光	教育研究者
第3回	2007年11月9日(金)	「明星学園と私」	霜田光一	東京大学名誉教授
第4回	2008年5月18日(日)	「昭和10年代・女学校の5年間」	赤井英乃 岸すみれ	ふじ幼稚園園長 明星学園元中・高国語科教諭
第5回	2008年10月18日(土)	「私の旧制中学時代」	田中一水	明星学園元中・高理科教諭
第6回	2009年6月5日(金)	「明星大好き—私の原点」	田中祥子	津田塾大学教授 明星学園元中英語科教諭
第7回	2010年9月11日(土)	「明星学園の教科書の歴史」(1) 『新読本』	依田好照	明星学園元小・中学校長 元社会科教諭
第8回	2010年11月27日(土)	「明星学園の教科書の歴史」(2) 『1960～70年代の教科書づくり—その1』	依田好照	明星学園元小・中学校長 元社会科教諭
第9回	2011年4月23日(土)	「明星学園の教科書の歴史」(3) 『1960～70年代の教科書づくり—その2』	依田好照	明星学園元小・中学校長 元社会科教諭
第10回	2011年9月17日(土)	「原点をみつめ未来をひらく」	一瀬清	明星学園小学校長 元小学校教諭
第11回	2012年2月25日(土)	「明星の教育を思う —41年間で振り返って—」	渡辺京	明星学園中・高等学校長 元高校社会科教諭
第12回	2012年4月21日(土)	「明星学園小学校の算数」	福田純一	明星学園小学校教頭 小学校教諭
第13回	2012年12月15日(土)	「9・3制から12年一貫6・6制へ 私自身の実践をふりかえって～変 わらないものと変えていくもの～」	河住貴夫	明星学園中学校教頭 中学校体育科教諭
第14回	2014年2月22日(土)	「明星の教育とは何かを自問しな がら—29年間の実践を振り返る」	堀内雅人	明星学園中学校教頭 中学校国語科教諭
第15回	2014年6月28日(土)	「明星学園と私—校長2年目のお もい」	平田和孝	明星学園小学校校長
第16回	2015年2月21日(土)	「明星の教育とは何かを自問しな がら—30年間の実践を振り返る」(第2回)—国語(文学)の 授業をととして	堀内雅人	明星学園中学校副校長 中学校国語科教諭
第17回	2015年11月14日(土)	「明星学園での30数年を振り返 って」	村田修二	明星学園高等学校副校長 高校国語科教諭
第18回	2015年6月25日(土)	「明星学園の30年間、特に英語 教育と私」	姫野英二	明星学園中学校英語科教諭
第19回	2017年3月11日(土)	「明星学園に出会って—さまざ まな思いを語る」「私のなかの『明 星』」	依田好照	明星学園元小・中学校長
		「明星学園と私と三人の娘たち— 卒業してからわかる明星教育の有 難さ」	松浦恭子	元保護者
		「明星学園の初心=根っことは？」	奈良正博	元PTA・後援会会長

3) へいわのたねをさがす明星学園の会

へいわのたねをさがす明星学園の会（通称“たねの会”）は、2016年に明星学園の教員、保護者などの有志が、互いに声をかけながら集まり誕生した。この会の呼びかけ文を紹介する。

明星学園にかかわる皆さんへ

明星学園は、大正デモクラシーと新教育の中で生まれた学校です。「個性尊重」「自主自立」「自由平等」という建学の精神を掲げていたにもかかわらず、アジア太平洋戦争の大きな波に抗うことができませんでした。そして、「皇国の道」教育に協力する立場をとり、多くの卒業生を戦地に送り出しました。そのような歴史を反省し、戦後は民主主義教育を牽引する立場で教育実践を重ねてきました。その明星学園にかかわる皆さんと今こそ「へいわ」について考えたいと思い、会を立ち上げることにしました。

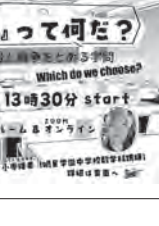
今年（2016年）は、国民主権、基本的人権の尊重、平和主義の理念をもつ日本国憲法発布70年です。今を“戦前”にしないために、日本国憲法を学び、子どもたちに「へいわってすてきだね」と語れる大人になりたい。ともに考え、語り合いましょう。

2001年のアメリカ同時多発テロ事件をひとつの起点として、世界は混乱と分断へ向かい、また、2011年の東日本大震災と原発事故は、東北地方に暮らす人々はもちろん、この国に暮らす私たちに大きな影響を与えた。政治や社会の在りようにも混乱や変化が起こってきた。

「平和」や「自由」……明星学園が大切に考えてきたこれらが、少しずつ損なわれようとする世界・社会の在りように対し、私たちの足もとである「教育」という場所で、教員・保護者・子どもたち・明星学園に関わる多くの人たちと、聴き合い、探り合い、語り合って、いま一度、「平和」「自由」をとらえなおしたい、と考える人たちが集まってこの会が生まれた。

会では、沖縄の基地問題、原発事故、広島長崎の原爆、憲法のこと、教育のこと、差別のこと、私たちの眼前に見える、あるいは未だ見えていない多様な問題について、映画の上映会や、講演会、勉強会を重ねてきた。詩人のアーサー・ビナード氏、教員・教育学者の金森俊朗氏、比嘉靖氏、福島から原発事故避難されている方をはじめ、明星学園の教員、元教員など、明星内外から多彩な顔ぶれの講師を招き、多くの保護者や子どもたち、教職員の方々と、ともに学び、考え、話し合ってきた。このほか、原発事故について考える餅つきや、東京大空襲のワークショップなど、体験型のイベントも開催してきた。これまでに実施した催しは以下の通り。

2016年 11月 5日	映画『標的の村』三上智恵監督作品	
12月 3日	渡辺京の憲法講話第1回「憲法の成立過程」＆茶話会	
2017年 1月21日	アーサー・ビナードさんの本を読む会	
2月12日	映画『小さき声のカノン—選択する人々／Little Voices from Fukushima』鎌仲ひとみ監督作品	
2月18日	繁田真爾さん「沖縄の近現代史から学ぶ……第2の加害者とは？」	
3月26日	比嘉靖さん（名桜大学講師）をお迎えして「沖縄の、この国の現実から、今！ 汲み出す“もの”は…」	
6月 4日	アーサー・ビナードがやってくる！「原爆ドームになっちゃったアメリカ人」	
9月 9日	映画『みんなの学校』真鍋俊永監督作品	
12月 2日	明星学園の先生たちが出会った金森俊朗「伊野×剛力×入野 金森教室を全力で語る！」	

2018年 2月 17日	4年生 友森奏梧君企画『君たちはどう生きるか』をみんなでようよう！ 第1回「浦川君とは何者だ？」	
3月 18日	吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』をみんなでようよう！ 第2回「仲間ってなんだ？」	
3月 24日	「学び舎の歴史教科書をめぐる奇妙な冒険」 繁田真爾さん	
4月 22日	帰ってきたアーサー・ピナード 「アメリカ人は、どこで原爆にあったか？」 ドームの目でせかいをみつめると……	
6月 16日	渡辺京の憲法講話第2弾 「五日市憲法って知ってる？～憲法の原点を考える～」	
10月 27日	映画『コスタリカの奇跡 積極的平和国家のつくり方』	
12月 1日	映画『ある精肉店のはなし』 額額あや監督作品	
12月 22日	おもちつきやろうよ！	
2019年 2月 16日	映画『60万回のトライ』 パク・サユ／パク・トンサ監督作品	
6月 22日	映画『コスタリカの奇跡 積極的平和国家のつくり方』 再上映！	
7月 6日	渡辺京の憲法講話第3弾 映画『草の乱』を見ながら「秩父事件とはなんだったのか？」	
9月 1日	映画『辺野古抄』 八島輝京（79回生）監督作品	
12月 1日	アーサー・ピナードがやって来る第3弾 「『ちっちゃいこえ』聞こえますか？」	
12月 21日	おもちつき イエイイエイ！	
2020年 1月 25日	東京大空襲 WORKSHOP……矢口直さん（66回生） 馬場洋子さん（13回生）のお話	
4月 19日	アーサー・ピナードとサクラを見る会 「闇がわきでるところ」 映画『ダークサークル』上映	
10月 25日	若い人たちとお話する会	
2021年 1月 23日	繁田真爾さん「悪」から世界と自分を考えよう～ 自著『「悪」と統治の日本近代』を語る	
3月 28日	村田修二さん「山谷のおじさんと僕」～山谷から～	
2022年 8月 7日	村田修二さん 「さんきゅうハウスで僕が出会えた人たちのこと」	
4月 3日	「すべての道は“ヒロシマ”に通じる?！」 アーサー・ピナード×田原ちひろ（89回生）	
2023年 5月 20日	小寺隆幸さん『「軍学共同」って何だ?』	
8月 7日	小寺隆幸さん「こどもと一緒に核の問題を考える。」	

この会は現在も年に数回の講演会等を実施して活動が続けている。

（文責：へいわのたねをさがす明星学園の会）

4) おやじ会

明星学園おやじ会は、学園の建学の精神に賛同し、子どもたちを愛するおやじが集まって、2009年5月に有志の会「明星中学おやじ会」として発足した。その後、小学校と高校にも範囲を拡大し、学園と子どもたちのための活動や交流イベントを行っている。

おやじ会には会則も会員制度も年会費もない。活動やイベントは、それぞれ言い出しっぺの呼びかけで始まり、参加したいおやじが手を挙げる、という形で実施している。「できる人が、できる時に、できる範囲で」が合言葉だ。

「おやじ会」と名乗ってはいるが、お父さんに限らず、お母さん、教職員や卒業生、理事を含め、明星学園に関わる方なら誰でも参加することができる。学園やP.T.A.と協力して、これまで次のようなプロジェクトを立ち上げて活動してきた。

〈明星バザー〉

餃子やコーヒーの販売と、体育館やいちょうのホールで開催するステージショーの運営

〈親子レクリエーション〉

ソフトボール大会、玉川上水ウォーキング等

〈アウトドアイベント〉

関東近郊で、小学生から楽しめる山登り等

(過去には大丹波川でキャンプをしたり、足を伸ばして箱根・明星ヶ岳登山も！)

〈校内美化活動〉

小中学校の正門付近、中学校渡り廊下屋根、特別教室の窓掃除等

プロジェクトの打合せや反省会を兼ねて、月に一度を目安に定例会を行なっている。暑気払い、忘年会など季節ごとの交流の機会も設けている。

なかでもいちばん人が集まり、賑やかになるのが「新入生ファミリー歓迎バーベキュー」。

毎年春の大型連休前に、小中学校の教室と敷地を借りて実施している。縁があって入学した明星学園、希望と不安が交錯する時期に、子どもはもちろん、お父さん、お母さんにもその楽しさを知ってほしい、これから何度も学園に足を運んでほしい、という願いを込めたイベントだ。在校生ファミリーや先生方と飲食を共にし、気楽におしゃべりしながら交流を深めてもらっている。

おやじ会のイベントには、今でも発足当時のメンバーが参加している。明星学園は12年生が最高学年。でも子どもが卒業した後も、引き続き仲間として集えるのが明星学園おやじ会の良いところ。現役おやじの活動を支えながら、多くの「13年生」おやじが楽しんでいる。

コロナ禍の3年間はほとんど活動できなかったが、学園行事の再開にあわせて、おやじ会の活動も復活。これからも「できる人が、できる時に、できる範囲で」を合言葉に、ひとりでも多くの保護者の方々に明星学園を楽しんでもらえるよう、活動していきたいと思っている。

(文責：おやじ会)

第3章 100周年、そして次の世紀へ向けて

1 「探究」を柱とする活動

(1) 小学校

1) 「みいつけた」から始まる子どもたちの学び 根岸 あずさ

1、2、3年生が学ぶ総合は「日常的な活動（みいつけた）」と「意図的・計画的な授業」の二つの柱から成っている。「みいつけた」で自然の気づきをクラスの皆と共有し、「授業」で新たな事実を認識することで、更に自然が見えてくると考えるのである。▶▶ 90年史P.371～参照

総合では、五感を使ってものごとに働きかけること、とらえたことを自分のことばで表現することによって、自然や社会の本質につながる、個別的・具体的な事実の認識を目指している。だからこのことは、豊かな感性を育て、豊かなことばを獲得するという人間形成の土台作りなのだ。

①『ナズナの体しらべ』（1年・4月）

ナズナの実を鳴らして遊んだあと、「ナズナの体しらべ」の授業をした。土から掘ったナズナを子どもたちの机の上に置いて、各部の名称を下から順に聞いていくと、子どもたちはハート型の実のことを「はっぱ」と呼んだ。しかし、目の前のナズナをじっくりと見て絵に描いているうちに、ハートのふくらみに気づき、割って中を見た子どもがいた。「ツブツブが出てきた！」ひとりの子どもの発見は、クラス中に広まった。皆がハートの実を割って中に小さな粒が入っていることを確かめ、絵に描き加えた。子どもがハート型の実に働きかけたことによって、粒が出てきたという事実に出会い認識を新たにしたのだ。

これは、ナズナの未熟な種だ。この状態で土にまいても芽は出ない。だから敢えて種とは教えなかった。子どもたちは、この未熟な種を自身の経験からそれぞれがとらえたように表現した。きとちゃんはハートのふくろの大きさの違いに気づいている。

はーとのなか
にあぶらむし
がはいってた。
ぺんぺんぐさ
のはーとのふ
くろがちよっ
としたがおお
きくてうえが
ちいさい。



②『アブラナの花と実（たねぶくろ）』（3年・5月）

4月、教室の前の花壇の黄色いアブラナの花が新3年生を迎えた。5月の連休後、そのアブラナにたくさんの実ができた。枯れた実からは茶色や黒色の粒がポロポロとたくさん出てきた。子どもたちはこれを種と認め、実を「たねぶくろ」と名付けた。

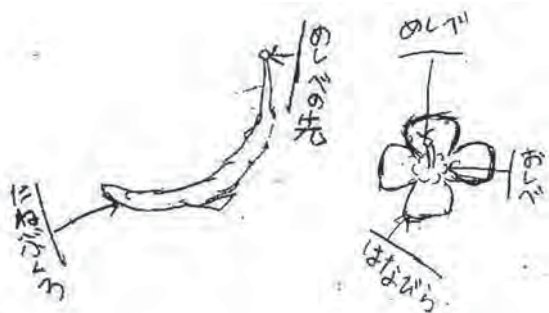
アブラナの花をたねぶくろを下から上にたどっていくと、一番上に花が咲いている。「たねぶくろはどこへいったんだろう」と課題を提示すると、子どもたちは花の中を探って、めしべと実の形が似ていることを見つけた。はるかちゃんはめしべの柱頭と実の先の部分の形が同じことに着目した。そして、めしべがふくらんでたねぶくろになるようだという考えを持った。3年生になると、時間

の経過とともにアブラナが花から実へと変化したことを認めることができるのである。

竹中 はるか 5/9

そうなってるのか

こんどは、花からどうやってたねぶくろになっていくのかをけんきゅうした。たぶん花びらがおちて、おしべも、とれてそしたら、めしべがふくらんでって、たねぶくろになるのかな〜。たねぶくろの、先っちょに、きいろのつぶみたいのがあって、たぶんそれが、めしべの先っちょにあるのだと思う。



③『鉄さがし』(1年・2月)

道具を使ってものに働きかける学習である。

糸の先に磁石を付けて、魚釣りをした。魚の口に付いているクリップに磁石がくっついて魚を釣り上げていった。ところが、釣れたのは銀色のクリップが付いた魚ばかり。赤や青のクリップの魚はどうしても釣れない。「プラスチックなんじゃない?」「じゃあ銀色のは?」子どもたちが素材に着目したところで、銀色のクリップは鉄でできていることを知らせた。こうして子どもたちは、磁石は鉄にくっつくという事実に出会った。

「教室の中の鉄さがし」

磁石は鉄にくっつくということを学んだ子どもたちは、いろいろな鉄製のものと出会って、鉄は冷たくて硬い、銀色（鉄色）をしていて、カンカンと音がすると、鉄らしさを体感した。その後、教室で鉄さがしをした時、五感を使って鉄らしいと思ったものに磁石を近づけていった。その結果、銀色をしているのに磁石がくっつかなかったり、銀色じゃないのに磁石がくっついたり、教室にはたくさんの鉄があると知ったり、心が動く新たな認識をした。

すず木 りり

わたしはじ石でいろんなものをくっつくかな? ってたしかめてみたらすいくんのすいとうがぎんいろだからくっつくかなーっておもってじ石でくっつけてみたらくっつかなかってびっくりした。金づちはぎんいろじゃなくてどいろだったのにくっついてびっくりした。せろはんでーぶのははそのときみえなかったからりりがぎづかなくってりりがあるいてきゅうにくっついたからびっくりした。

きし本 かほ

きょうそうごうできょうしつのなかのてつさがしをした。そしてわたしの水とうはくっつくとおもったのにじ石でくっつけたらくっつかなかった。はんがーをかけるパイプはさわたたらつめたいかんじでじ石でくっつけたらくっついた。わたしがみつけたてつのものは24こあったけどみんなでさがしたらもっといっぱいあった。

「かくれた鉄さがし」

鉄色（銀色）をしていなくても磁石がくっつくものがあるという事実から、子どもたちはその中に鉄が入っていると予想を立て、確かめてみた。すぐに銀色が見えなかったことにそうすけ君の心は動き、出てきた銀色は鉄と誤っていても、磁石を近づけて確かめてみた。すると新たな発見があった。

うえまつ そうすけ

きょうなかよしのじかんにてつで、できたものかしらべるとき、かみやすりではくがえらんだでんちもくっついた。しかもけずっていったらぎんいろがでてくるーとおもったのに白いこなしが出てこないからもっとけずってみたらぎんいろが出てきてじ石をちかづけてみたらくっつく力がつよくなった。

子どもたちが綴ったものはクラスで紹介し共有する。子どもたちは友だちの気づきに共感したり、自分とは違う気づきに学びを深めたりする。

私たちは継続的に集団研究をするなかで、低学年の子どもたちが五感を使ってものごとに働きかけ、とらえたことを自分の言葉で表現することの意義を学んできた。そして「授業」で綴ることについてはつぎの2点も学んだことを付け加える。

- 綴る値打ちのある授業を作ること
- 子どもたちが綴った文章から授業を評価する（振り返る）こと

2) 小学校の学びの集大成『卒業論文～12歳の主張～』 照井 伸也

小学校では毎年6年生で「卒業論文」を書いている。6年間の小学校生活で学んできた知識や技能を使い、12歳の自分が「今、何を考えているのか」を小学校生活の最後に集大成としてまとめ、表現していくことこそ、卒業を前にした子どもにとって重要な通過ポイントだと信じているからだ。

この実践は、もともと国語の授業の中で説明文のカリキュラムをどう編成するのかを問題にした時に、「卒業論文」の前身として「説明文を書く」という単元が生まれた。

国語で説明文を扱う事の目的は何か。説明文を読むことによって新しい知識を得ることができ、新しい世界を開拓していくことができる。特に低学年の子どもたちにとっては、そこに驚きや感動があり、その驚きや感動をクラス内で共有することもできる。もちろんその驚きや感動が一人で読んでいたのでは読み切れない場合もあるので、その部分を授業の中で補い、わかるようにしてあげることも、説明文を授業で扱う目的の一つだ。そのためにはより興味を持つことができる身近な動植物を扱った説明文を中心に据えることがいいのだろう。

しかし単に新しい知識を共有することだけが目的となると、数多く説明文がある中で、どの作品を選び、いつ子どもたちに差し出すのかといったことが明確にはならない。また高学年にもなれば、自分一人で興味ある本を読み進め、知識を得ることも難しくはなくなる。そこで、高学年で説明文を扱う場合、さらなる目的が必要となる。そこで国語の授業では説明文を学習する上で、「文章の構成方法」を理解することが重要だとしてきた。作者が読者に対して、どのような説明の手順をとったのか、特に科学的説明文の場合にその説明の手順を明らかにすることは、理科学的・論理的思考にもつながる大切なことだ。科学的説明文を扱う場合には、「疑問」→「仮説」→「実験・観

察」→「結果・考察」といった問題解決の流れを学ぶことができるだろうし、それ以外の説明文においても、「主張」を最初に持ってくるのか最後に持ってくるのかといった、読者を意識した構成方法を学ぶこともできる。

このように考えてきた結果、子どもたちの最終的なゴールを、「自分で説明文を書く」というところに設定した。説明文としての文章の構成方法を学んだのであるから、その学んだ力を活かす機会が必要なのである。そこで6年の卒業までに、それまで学んできた文章の構成方法を使って、自分なりの説明文を仕上げることを課題として数年続けてきた。ただ科学的説明文だけでは範囲が限定され、中にはテーマを決められない子どももいたので、その後は内容的な幅を広げ、「自分なりの主張を持つ」ことを大事にした「卒業論文～12歳の主張～」という形になって現在に至っている。

上記のように卒業論文を実践してきた中で、どうしても越えられない壁があった。それは子どもたちのテーマ設定に「どう関わるのか」という問題である。それまでは国語の授業の中だけで卒業論文を扱い、文章の構成方法や読者を意識した表現方法などは教えてきたものの、テーマを何にするのかといったことに関しては、全て子どもに預けていた状態であり、子どもたちはそれでも何とか書き綴ることができていた。しかし中にはテーマを何にしたら良いのか困惑する子どもや、一度決めたテーマに自信が無く変更せざるを得ない子どもも現実的にはいた。テーマを決めさせるには、そこに至る工夫が必要なのである。

まず大前提は「国語の授業だけではできない」し、「国語だけで担うことでもない」ということである。もちろん国語の授業に依拠することは多い。これまで述べてきたように、国語の授業で説明文を読み、文章の構成方法について学ぶことや、魅力ある文章にするための方法は、国語の授業を通して学ぶことである。と同時に国語の授業として限界もある。特に子どもたちが自分のテーマを設定していくことに関しては、国語の授業云々の話ではないのだ。どうしたら子どもたちにテーマを決めさせることができるのか、国語という狭い世界では限界があると考えた。子どもたちが何について興味を持ち、どういうことを考えているのかは多様であり、その一つ一つには子どもたちの背景もある。子どもたちに「あなたはこれをテーマにしてください」と教員側から言うことなど、到底有り得るはずもない。

そこで国語の授業以外に、子どもたちが卒業論文のテーマを決めていけるような取り組みと時間が必要だと考える。

まずその取り組みだが、大きな意味では学校全体で取り組む必要がある。日常の学校生活全てが子どもたちのテーマにつながっていく可能性がある。そのためにも学校生活全体において、「なぜ」や「どうして」が生まれるような土壌が必要である。これは6年時という単年度的に考えるのではなく、もっと以前からいろいろな場面で取り組んでいかななくてはならないと考える。その一つとして、まずは低学年のころから子どもたちに自然の現象や、社会の現象に目を向ける姿勢を培う。

小学校では朝の活動として「みいつけた」という活動をしている。登下校の途中や日常生活の中で、発見したことや気になったことを朝の会で発表する活動である。この活動によって、子どもたちは自然や季節の移り変わりといったものに敏感になり、そこから動植物の世界を広げていくことができる。そしてこの発表により、さらに疑問に思ったことを調べることに発展することもあるだろうし、他の児童がその問題意識を引き継ぐことも考えられる。ただこれは個々人の体験であり、聞いている子どもにとって身近に感じることができるものもあれば、そうではないものもある。

る。そのために子どもの発表時には質疑の時間も設け、体験していない子どもがより理解できるようにするが、それでも限界がある。ムラサキケマンが種子を散布の様子などは、口で説明してもわかりにくい。そこで百聞は一見にしかず、実際に見に行ってみようと教室を飛び出す必要もあるだろう。時にはお弁当の時間に絡め、近くの公園で遊んで帰ってくるなどの余裕も欲しい。この体験を大切にすることで、子どもたちは自然の営みや季節感に敏感になり、自ら自然に働きかけるようになるのだ。国語や生活といった既存の教科の枠を越えた活動が、低学年の時期には重要で、やがてそれは卒業論文のテーマを決める上で役立つことのひとつと考えている。

この「みいつけた」という活動における題材は、どちらかと言えば自然のものである場合が多い。子どもたちにはいろいろな世界に目を向けて欲しいと考えた時、それでは不十分さも残る。社会に対する認識や働きかけが不足するのである。とは言え、低学年の内から政治や民族問題に興味を持ってと言っているわけではない。それらを自分のこととして受けとめるには、相応しい年齢があるだろうと考える。しかし中学年から高学年にかけて、本格的な生物や人類の歴史を学習することによって、より理科や社会の現象に目を向けるようになる可能性が出てくる。もちろん理科でただ実験をしたり、社会科の中で漠然と通史を学んだりしているだけでは意識はできない。各教科が常に、「なぜ」、「どうして」といったことを大切にすることが必要なのである。例えば吉野ヶ里遺跡にはなぜ柵があったのか、考えさせるのと、教えてしまうのでは大きな違いがある。道具の発展や領土の拡大、戦争といったものがなぜ起きるのか、そこに発展していく上でも、「なぜ」と言った探究心は極めて重要なのだ。

また「ものづくり」も「卒業論文」のテーマを決める上で、重要な役割を果たすと考えている。「ものづくり」を通して先人の知恵や手法を学ぶことで、さまざまな伝統ある文化を知ることができるのである。

例えば草木染めであったり、土器づくりや鉄づくりであったりするそれらを、できるだけ昔のままの方法で、最先端の道具や材料に頼ることなく作り上げることが肝心である。ボタンを押せば誰でも確実にできあがるのではなく、そこには失敗や改良があり、先人の苦悩も含まれている。だからこそそれらの追体験は子どもたちの中に記憶として残り続け、「卒業論文」のテーマを決める上での手助けとなるのだ。

以上のように子どもたちが「卒業論文」のテーマを決めていくためには、学校生活全般において子どもたちの世界を広げることと、「なぜ」、「どうして」という探究する意識を育てることが必要で、日常生活においては、常にそのように仕掛けていかななくてはならない。

さてそこで6年生の「卒業論文」の授業である。まず大切なのは卒業論文というものを国語のカリキュラムに位置づけるのではないということ。もちろん文章の構成など国語の授業が中心になる部分もある。しかしこれまで述べてきたように、テーマを決めることは国語だけではできない活動である。そこで卒業論文に関しては、別の時間を設ける必要がある。明星学園の教育は、「教科教育」と「教科外教育」とさらに「総合探究的教育」という三つの柱で成り立っている。今後はこの「総合探究的教育」として使用できる時間も捻出していかなくてはならない。この「総合探究的教育」の時間は自分の卒業論文のテーマを決めるために必要な時間であり、それらをお互いに共有し、完成後はお互いに読み合うと言ったこともこの時間に入ってくると考える。

また、この卒業論文を書き進める上で重要な役割を持つのが、図書館（図書室）である。自分

のテーマに沿った参考図書を見つけ出すために、まずは図書館（図書室）をよく知らなくてはならない。いつでも図書館を使える環境や、可能ならば図書館で「総合探究的教育」の授業ができる環境が望ましい。常に周りに必要とする本が存在することが子どもたちにとって重要だからである。そして図書館の利用の方法や、調べ方、探し方などについて、司書教諭と協力しながら、この必要性のある子どもたちに伝えていくことも重要である。

しかしこれらの時間を経ても、なかなか自分の興味あるテーマにたどり着かない児童も存在するだろう。そこで世界を広げるためにさまざまな分野の方にゲスト講演をお願いする。最近は企業などもCSR活動としていろいろと無償で講演してくれる。例えばJAXAの出張授業や弁護士による人権の授業など、学校側にこの世界を知ってほしいという明確な目的があれば、選択肢には困らないはずであるし、実際にもお願いもしてきている。事前にどんな人が来るのか、どんな話になるのかということ伝え、そのゲストティーチャーに対して、質問なども用意しておく。これは積極的にそのテーマと関わり、自分の卒業論文のテーマを決めていく上で参考にさせたいからである。また、やがて自分の卒業論文を書く時に、誰かにインタビューすることが必要になる（そうあってほしい）こともあるだろう。その時の「質問力」も育てたい。

さらに地域社会とのつながりも大切で、とかく私立学校は地域とのつながりが薄くなりがちである。子どもたちにとって地域は通学路でしかなく、その周辺に何があるのか、歴史的にどういった場所なのかということについては、関心もなく、関わりもない。今後は地域の活動に参加することや地域を知ること、卒業論文のテーマを決定していくための経験として必要なことだと考える。

この間、実践してきていることと、これからの実践に必要なことと同時に展開しているが、上記のような過程を経て、2学期には、いよいよ下書きに入る。ここからは国語の授業も含めた形で、構成方法や原稿用紙の使い方など、綴るための具体的な話に入っていく。完成後は卒業論文集をクラスで読み進め、さらには自分の論文のテーマを「論文テーマ発表会」で1分間にまとめてプレゼンテーションする。そういった発表力・発言力を育むことも含めた「卒業論文」の実践である。

（2）中学校

「総合探究科」新設の経緯 新坂 彩子

1) 新設の背景と目的

2020年度改訂の学習指導要領および大学入試改革では、「学力の3要素」として、基礎的・基本的な知識・技能、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、主体性を持ってさまざまな人と協働する態度、これらの3点が大きく重視されている。こうした流れを受け2015年10月、明星学園においても小中高各部のカリキュラムの見直しと改定に向けた方針が河住校長より示された。

明星学園の重点課題として挙げられたのは、①主体性と協調性を育成する課題解決型学習（アクティブラーニング）の推進、②小中高を通じた「英語教育」の充実、③IT教育の充実である。その後、中学校では、①と③を教育活動の中に反映させる研究機関として「カリキュラム作成委員会」が発足された。

2)「カリキュラム作成委員会」の任期と構成員

任期は2016年4月～2018年3月の2年間である。長谷川元子（国語科）、繁田真爾（社会科兼教務部長）、新坂彩子（進路指導部長）、大作光子（司書教諭）、堀内雅人（副校長）がメンバーに選出され活動がスタートした。

3) 現状整理と課題設定

新カリキュラムを作成するにあたっては、設置目的は示されていたものの、何をどのような形で実施するのか、また、それらをどう決定していくのか、それらは委員会に委ねられていた。そのため委員会メンバーは、まず、現状の「総合的な学習の時間」と「特別活動」の活動内容に注目し、明星学園が大事にしている理念と課題の抽出を行なった。当時、「総合的な学習の時間」は7年で八ヶ岳登山、8年で職場体験、9年で卒業研究を当てており、授業枠外の活動として位置付けていた。また、「特別活動」では、各行事の事前・事後学習、卒業研究の事前準備となる研究者の講演会や、Word（文書作成ソフトウェア）、PowerPoint（プレゼンテーションソフトウェア）講習会等を行なっていた。

これらの教育活動の共通キーワードは、経験すること、自己と向き合うこと、他者と出会うこと、表現し伝えることである。そこで、委員会は、創立以来大事にしている探究的な学びの象徴ともいえる“卒業研究”に着目し、委員会の最終目標として、「卒業研究に向けた活動を7年生から9年生まで体系的に学べるようカリキュラム化し、『総合的な学習の時間』として授業内に組み込む」こととしたのである。

4) 総合探究科新設までの流れ

発足から1年の間は、現状把握と課題の洗い出し、施設環境の確認、担当教員の検討など実現に向けた土台づくりを行なった。また、研究会へ参加、他校における実践見学など情報を集め議論を重ねた。これらの活動を経て2017年3月、新設教科における設置目的を次の二点に定め、学校長へ答申を提出した。設置目的の一つ目は問題発見・情報収集・整理分析・発表の基本的手法を学ぶこと、二つ目は使用目的に応じたレポート・資料を作成するための知識と実践力を身につけることである。

これらの答申を受け学校長は、2017年4月の全園教職員会議において、「総合的な学習の時間」をカリキュラム化し授業内で行うこと、教科名を「探究科」とすること、それに伴う教員の部署移動や専任教員採用の可能性があること、以上の3点を報告した。（「探究科」はのちに『各教科で探究してきたことを総合する』という意味を含ませ「総合探究科」へと変更する）

一方で、新設科目で展開する具体的内容については、中学校教職員で意見交換を重ね合意を得ながら、より充実したカリキュラム策定を目指してほしいという要請が示された。これは、さまざまな立場や異なる経験を活かし、伝統と革新の融合を目指してほしいという学校長の強い願いの表れだったと振り返る。

こうした要請を受け委員会は、2017年の1学期に意見交換やグループディスカッションの機会を積極的に設けた。これらは時間と労力を要するやり取りではあったものの、新たに二つの視点を与える貴重な時間となった。まず、一つ目の視点は、聴く力、相手の考えを理解しようとする姿勢、質問力といった「対話」と「共同」を目的とした活動の必要性である。そして、二つ目の視点

は、伝統的な取り組みを新たな実践に反映させつつ独自性の高い教育活動へ改革していくことの必要性である。

ここで得た新たな視点は、7年生の授業を「情報教育」と「哲学対話」に分割し、異なる授業担当者が週に1時間ずつ行うこと、8年生は週2時間の授業時数を確保しグループによるプロジェクト型の学習を取り入れること、というアイデアを創出した。こうして、総合探究科の授業内に「対話」「共同」のエッセンスが加わったのである。

5) 独自性の高い教育活動

新たに得た二つ目の視点である、伝統的な取り組みを新たな実践に反映させた独自性の高い教育活動は、以下の二つの実践により実現させたいと考えた。

過程を大事にする教育

現在は、OPAC検索、インターネットで検索などほしい情報がすぐに手に入る便利な時代といえる。しかし、膨大な情報にアクセスすることが容易になったことで、その“あいだ”に存在する小さな気づきや関心に触れる経験は圧倒的に減少したように思う。これらの“あいだ”を大事にしたいという気持ちは委員会メンバーが一致した点であり、探究することに重きをおくのであれば「図書館」の存在は外せないと考えた。そこで、7年生の「情報教育」の授業に、本の流通や図書館の仕組みを理解するための内容を組み込んだ。

豊かな発想力と主体的な行動力を目指す教育

身近なところから問いが生まれ、それが自身の関心につながる、自分にとって切実な課題だからこそ真正面から学びに向かうことができる。こうした気づきと経験こそが、卒業研究の味わいである。委員会内では、彼らの主体性にどう火を灯すのか、独自性をどう創出するのかということが常に議論の中心にあった。そこで、情報収集や仮説検証のための具体的なアクションとして、“してみる”の活動を義務付けることにした。“してみる”の活動とは、インタビュー、アンケート、実験、フィールドワーク、施設訪問など実際に自分の足で集めた生のデータや資料を指している。

6) 総合探究科カリキュラム（2018年度版）

前述のように、中学校教職員から広く意見を集め、新たな視点を得る中で幾度も改善を図り、2018年1月に総合探究科のカリキュラムの報告を行なった。以下、2018年度版の総合探究科のカリキュラムである。

	学年	時間数	担当者	授業名	授業内容
総合探究 I A	7 年	1	司書教諭	図書館と情報	図書館領域と情報領域の双方を学ぶ。図書館領域では図書館の仕組みや役割について学習し、情報領域では資料をどう利用するかを学び探究するための基礎的な技能を習得する。
総合探究 I B	7 年	1	専任 1 名 講師 2 名	哲学対話	答えの出ない問題について個人の思考を深める活動を行う。また、「問いあう」活動を通して問題を共有し、相手の考えを知り、理解する中で見方や考え方をより広めていく段階を経験的に学ぶ。
総合探究 II	8 年	2	専任 1 名	探究実践	身近なテーマや学術的なことを探究する実践を通じて、「探究」の過程を学ぶ。 また、その過程・成果の記録を記述することを習慣化し、自己内省的な洞察（メタ認知）を育むことを目的とする。
総合探究 III	9 年	1	専任 2 名	卒業研究	生徒が、各々の題材に対して働きかけ続け、その成果を振り返り、記録できるようサポートを行う。また、生徒同士の意見交換によって、自分の題材について、多様な意見・切り口が得られる場として、授業時間を用いる。

2018 年 3 月、カリキュラム作成委員会は任務を終え解散となった。しかし、この大掛かりなプロジェクトは、当面、これらの実践を外側から観察し振り返りを促す機関が必要であり、むしろこれからの考察と検証こそが重要と考えた。そこで、カリキュラム作成委員会は学校長に向け「総合探究科推進委員会」の発足を要請した。2018 年 4 月に「総合探究科推進委員会」が立ち上がり現在に至っている。

哲学対話

①目的

2018 年から始まった哲学対話の授業では、いわゆる学術的な哲学の知識を学ぶことが目的の授業ではなく、不思議だと思うことについて、友達の意見を聞きながらじっくり考えることが目指されている。日常生活のなかで不思議に思っていることや、すぐには答えが見つけれなさそうな問い（探究・哲学の問い）に向き合うことで、自らの考えを深め、探究実践の基礎となる批判的思考を涵養することができるだろう。

以上の目的を達成するために、具体的に 4 つの目標を掲げている。

1. 問いを見つける：日常生活のなかで「どうして？」と思う感覚（Sense of Wonder）を大切にし、問いを見つけられるようになる。
2. 自分の考えを深め、表現する：問いを見つけたら、まずは自分なりの考えを持ち友達に伝えられるようになる。さらに、周りの人の意見を聞いて自分の考えをより深めよう。
3. 聴くことを身につける：友達の意見を深く理解するためには、能動的に「聴く」ことが求められる。ただ音が聞こえているだけの「聞く」と、相手の考えを知ろうとして「聴く」ことを区別し、対話中に「聴ける」ようになる。
4. 友達に対して尊敬の気持ちを持ち、互いの価値観を尊重しながら、問いについて共に考えよう。さらに、友達に問いかけることも大切である。質問したりされることによって、自分の考えをより深められるようになる。

さらに、これらの目標を下支えするものとして、「探究の共同体（Community of Inquiry）」の構築が重視されている。探究の共同体とは、問いに向き合い考えを深めるための共同体のことを意味している。この共同体においては、すべての人が異なる価値観を有しており、すべての人の意見に価値があることが前提とされている。異なる価値観を有しているからこそ、対話を通じて、これまでに思いもよらなかった答えを得ることができるのである。

②実践

子どもの哲学対話は1970年代にアメリカで始まり、創造的思考・批判的思考・ケア的思考を養うことを目的として世界各地で実施されてきた。日本の学校でも実践事例が積み重ねられているものの、通年のカリキュラムとして実施している学校は少なく、明星独自の取り組みであるといえる。〈※1〉

明星学園では、(1)で記述した目標を達成するため、7年生を対象とした週1コマの授業で「哲学対話」「サイレントダイアログ」などのさまざまなワークを行っている。(図1)

ここでは代表して「哲学対話」の方法について取り上げたい。「哲学対話」はカリキュラムの随所に哲学対話が入り入れられており、本授業の核となる取り組みである。明星学園中学校では、1クラスが3つのグループにわかれて対話を行う。各グループは10人前後の生徒と1人の教員（ファシリテーター）で構成される。対話の問いは、基本的には生徒が考えたものを使用しており、その日ごとに変わる。「普通とはなにか?」「なぜ親の言うことを聞かなくてはいけないの?」「自由って良いこと?」など、身近だがよく考えるとわからないことが問いとして取り上げられる。

哲学対話は、今日の問いについて現時点の自分の考えを対話シート〈※2〉に書き込むことから始まる。参加者全員が自分の考えをまとめられたら、いよいよ対話を行う。対話は必ず円形で行い、基本的にコミュニティボール〈※3〉を持っている人だけが話すことができる。(図2) 輪になって話すことによって、問いについての理解を徐々に深めていく。授業の終了時間が近づいてきたら、最後にもう一度、自分の考えを対話シートに書き込むことで、対話

授業回数	実施内容
第1回	ガイダンス
第2回	聴く練習
第3回	コミュニティボール作り
第4回	哲学対話のルールを理解する
第5回	安全について考える
第6回	哲学対話
第7回	問いの分類と問い出し
第8回	サイレントダイアログ
第9回	総合探究科の授業
第10回	一学期の振り返り

図1 2023年度1学期のカリキュラム



図2 対話の活動風景
(2022, 視聴覚室)

〈※1〉 2014年度の「明星学園秋の教室」において、講座の一つとして「哲学対話」が開催された。講師は土屋陽介氏（当時、立教大学）。翌2015年、中学校の授業研究会に土屋氏を招き、7年生を対象に模擬授業、全教員に向けて「哲学対話」の説明会を実施、2018年度からのカリキュラム化へつながった。（高校では自由選択科目として既に授業化されていた）

〈※2〉 対話の際に使うシート。「今日の問い」「自分の考え」「対話をしてみて、問いについて気づいたこと・発見したこと」「対話してみてどうだったか?」という4項目で構成されている。

〈※3〉 哲学対話で使用するボールでこれを持っている人だけが話すことができる。明星学園では、生徒たちと作った毛糸のボールを使用している。

の振り返りを行う。

哲学対話の方法はシンプルなのだが、それが故に奥深さを有している。なかでも、自分と友達の双方が居心地が良いと感じられる空間（＝安全な場）を作ることは、最も難しいことのひとつである。安全な場が欠けてしまうと、学校で自分の意見を言うということは非常に難しいことになってしまう。そのため、授業では安全に対話することを助けるためにいくつかのルールや装置を用いている。例えば、「何を言ってもいい」「相手が傷つくことは話さない」などを含んだ「哲学対話の7つのルール」を守ることが挙げられる。

③未来に向けて

哲学対話で養われる力は授業のみにとどまるものではなく、これからの不確かな世界を生きるために不可欠な力であると考えられる。哲学対話の授業も、学校のさまざまな場面で哲学対話の力を発揮することを目指して、各科目との連携を深めていきたい。

図書館と情報 司書教諭 伊藤 佐和子

①目的

この授業には、9年次の卒業研究に向けて、情報を収集するための方法や手段を体験してもらう役割がある。本が生活から切り離されている生徒も多く、図書資料を探すことへのハードルは少しでも下げておきたいところである。また、一見するとラクで早いように見えるインターネットでの情報収集も、情報の質を見極める高い力が必要とされる。

授業は知識をまとめる部分と、考えたり確認したりするためのワークで構成し、必ず自分なりに考えて書き出してもらう時間を設けている。調べるという行為には、疑問点を整理する、仮説を立てる、調べる方法を選ぶ、情報を比較・取捨選択する、結論を導き出す、など、常に“考える”という行動が伴うからである。

担当は2021（令和3）年度より、司書教諭＋情報科の教員という形をとっている。また、同年度より、東京都立高等学校学校司書会ラーニングスキルガイド プロジェクトチーム『探究に役立つ！ 学校司書と学ぶ レポート・論文作成ガイド』（ペリかん社 2019年）をテキストとして採用している。これは資料としての用途だけでなく、一冊の一般書を手元に置き、情報を参照するという活動を効果的に取り入れるための試みでもある。

毎年、初回の授業では前提として、“自立した学習者”について、この授業なりの定義づけを行ない、学園の独自科目として設定されている意義を確認している。自立した学習者の定義はつぎのようなものである。①自分で疑問や課題を見つけることができる。②自分で調べることができる。③自分で人に伝えることができる。また、“自立した学習者”は周囲の環境に左右されることなく、自分の意思で研究を進めることができる“自由な学習者”でもあるということを伝えている。

②実践

■メディアの種類と特性

自分が普段行っている、“調べる”という行為を、ワークを使って自由に振り返ってもらう。「ディズニーランドの本日の開園時間」のようにインターネットでの調査が適しているものもあれ

ば、「^{うみうそ}海嶺」の読み方のように、本の方が情報が得やすいものもある。子どもたちからは実体験に基づいて、さまざまなケースを想定した調査方法の候補が活発に出て、自分たちが日常的に、調べる方法・手段を取捨選択しているということに気づく。この単位では、メディアの特徴を整理するとともに、いくつかのメディアを組み合わせる利用することが大切であるということを確認している。

■情報を収集する

〔情報活用とマナー〕

身近にある著作権マークを探したり、著作権のクイズに取り組みながら、著作権の概要をとらえてもらう。併せて、引用のルールや、参考資料の明記の大切さについても伝えている。この単位では、子どもたちが疑問をつぎつぎと授業者に投げかける姿が見られ、授業の内容を受けて、普段の行動を振り返っていることがよく伝わってくる。また、SNSの普及などによって、著作権の保護がいかに身近な問題になっているかがよく表れている。

〔本で調べる〕

始めに、図書館で簡単な実地調査をしてもらい、図書館ガイドブックの原稿を作成してもらう。課題のために普段図書館に行きつけない生徒が地域の図書館に行き、司書に親切に対応してもらったことをうれしそうに報告してくれたことがあった。これだけで卒業研究のみならず、大学での研究にまでつながる大きな経験だろう。この単位では、図書館のサービスとそこにいる司書の役割も併せて確認し、図書館は研究の伴走者になってくれる場所であるということを伝えている。また、長い歴史の中で整えられてきた本のつくり（目次・索引・奥付）や図書館の本の分類法を知ること、ほしい情報にスムーズにたどり着く方法を伝えている。

〔インターネットで調べる〕

普段何気なく使っている検索エンジンのしくみや、効果的なキーワードの設定、AND・OR・NOT 検索による絞り込みの方法など、インターネット上にある大量の情報の中からほしい情報を絞り込むためのコツを学ぶ。また、オンラインデータベースの活用として「朝日けんさくくん」を実際に使用し、テーマに沿った記事を検索し、内容をまとめる活動も組み込んでいる。

2学期の終盤から3学期にかけては、複合的に“調べる”ことを体験してもらうための、総合課題やレファレンス演習を組み込んでいる。ここで、文書作成アプリなどの基本的な機能も確認できるようにしている。

総合課題

フェイクニュースについて、学生新聞やオンラインデータベースからの資料をもとに1,800字程度のレポートにまとめる。（文書作成はGoogle ドキュメントを使用。基本的な書式設定を体験するため、余白・フォントサイズ・配置などの条件を設定。）

レファレンス演習

図書室の参考資料（事典・辞典・年鑑など）を使って、あらかじめ用意された問題に回答する。例えば2022（令和4）年度の問題はこのようなものである。

- ・渋柿はなぜ渋い味がするのか？
- ・2022年11月8日の夜空では何が観測できることになっているか？

③未来に向けて

2023（令和5）年度の7年生からタブレット端末が導入された。疑問が生まれれば、すぐに調べられるというメリットがある一方、考えずともある程度の回答が得られてしまう環境にあるということでもある。しかし、研究とは、問題点や課題を見つけ出した後、自分なりの解が出るまで考え続けるということである。この授業の先にある研究とは何か、調べるための方法論に終始してしまっていないか、授業者は子どもたちと一緒に常に立ち返ることが必要であると考えている。

また、この授業で扱っている内容は、日々の生活での学びにも応用されることが大きく期待されるものである。授業の時間で完結することなく、子どもたちの中で、体験としてつながっていくよう、各教科とどのようにつながっていくかが次の課題である。

探究実践 新坂 彩子

①目的

「探究実践」は、7年生で学習した問いづくり、聴く姿勢、情報収集力や情報リテラシーを、探究のプロセスの第1、第2段階となる「課題の設定」「情報収集」の活動の中で実践していく。また、集めた情報を統合し、比較し、視覚化するなど情報を適切に活用する「整理・分析」を学ぶ。さらに、それらを他者に伝達するための方法と技術を「まとめと表現」で身につけていく。これらを実現するための手法として『プロジェクト学習』を採用し、年間3つのプロジェクトを実施している。『プロジェクト学習』は、自ら課題を見つけ、課題に関する情報を集めて分析し、原因となる事象を予想したり検証したりしながら成果を提示していく学習方法である。学習者自身が自ら知識を獲得する過程を踏むことで“自立した学習者”となることを目指している。

「探究実践」では、「協同活動」「対話」「振り返り」の3つを活動の柱としている。「協同活動」では、他者と学び合い・高め合い・認め合い・励まし合いながらプロジェクトを達成していく。こうした活動を通じて、それぞれに異なる役割が存在することを知り多様な価値観に触れ、自己理解・他者理解を深めていく。「対話」は、他者との対話、自己との対話を想定している。協同活動をする際に欠かせない他者との「対話」では、傾聴の仕方、質問の仕方について具体的な方法を学び、グループディスカッションや質疑応答など実践の場に活かしている。そうした中で、生徒たちは話すことよりも“聴くこと”の重要性に気づいていく。異なる視点からの考えに耳を傾け、合意形成をしながら、より最適な解決策を生み出す経験は、確実に成長を助ける活動となっている。また、自分の中に生まれた気持ちや新しい気づきを記述する「振り返り」は、曖昧な感覚を言語化して整理することで学びの意味や価値をより深化させると考えている。「振り返り」は毎時間実施し、教員が前向きなフィードバックをすることで内面の成長を意識させ、各人の意識変容、行動変容につなげる重要な活動となっている。

生徒たちは、これらのプロセスを経て自身の関心に気づき、自己の存在と社会が地続きであることを認識する。本授業で得た気づきや技術を、9年次の「卒業研究」や今後の進路選択の際に活かせるよう、主体性と行動力を高めることを最終目標としている。

②実践

■ 1年間の活動

活動タイトル	時期	形態	内容	成果物
グループワーク トレーニング	4月	協同	自分のコミュニケーションの仕方、他者との関わりの中で起こる影響関係について考える。協同活動において大事な姿勢や役割を担うことの重要性を体験から学ぶ。	なし
学校紹介&課題解決 プロジェクト	5～7月	協同	明星学園の良いところを見つけて受験生（小学生）に向けて学校紹介を行うか、または、明星学園の課題を見つけて原因を探り解決策を提示する。	企画書 スライド
マイプロジェクト	7～8月	個人	「誰かのためになること」を企画し、実行する。情報収集の過程では、本や新聞等による調査を入れる。	企画書 スライド
SDGs プロジェクト	10～12月	協同 または 個人	現在、世の中で話題になっている事象から自分の関心ごとを見つけ、SDGsの17のゴールと紐付け、課題と解決策を提示する。	ポスター
卒業研究 (課題の設定)	1～3月	個人	探究のプロセスの第一段階となる「課題の設定」のステップ。自分自身の関心ごとに目をむけ、問いを見つける活動を行う。	なし

■ 3つのプロジェクト学習

〔学校紹介&課題解決プロジェクト〕

初めてのプロジェクト学習となる本活動では、探究のプロセスである「課題の設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめと表現」を意識させ、現地点と目指すべきゴールを確認しながら進めている。「課題の設定」「情報収集」ではフィールドワーク、インタビュー調査、アンケート調査を実際に行い、それらの情報の特性と活かし方を経験から学ぶ。学校紹介または課題解決の選択は各自で行うがチームの構成員は教員が決める。プロジェクトの開始直後はアイスブレイクや対話を意識的に導入し、チームの結束力を高める働きかけをしている。「整理・分析」では、集めた情報を統合したり、アンケート結果を視覚化したりする方法を学ぶ。発表はGoogle スライドを活用し、チーム全員が前に立ち何らかの役割を担う。探究のプロセスを学ぶと同時に、自分の得意を見つけること、互いを活かし合うこと、これらも活動のねらいとしている。

〔マイプロジェクト〕

“誰かのために行動する”ことが彼らのミッションである。家族のために家事をする生徒、学校や自宅以外の場所を見つけ地域の人たちのために行動する生徒などアクションは幅広い。2022年度より「テーマについて調査しその知識をプロジェクトに組み込む」という過程を導入した。研究的な要素が加わったことで活動内容にも深みが増している。さらに、卒業研究につながる生徒が出現し始めている点も興味深い。発表は全員がスライドを作成しクラスメイトに報告する。

〔SDGs プロジェクト〕

気候変動、不平等、貧困、食糧問題などについて身近な事象からテーマを設定する。本プロジェクトは設定したテーマへの理解に重点を置いているため、活動メンバーの構成は自由であり（個人でも協同でも可）、メンバーも自分たちで決める。プロジェクトは、課題と思われるテーマについて原因を調査し、それらが続いた先に何が起きるのかを想像し、負のループを止めるための方策を考える。調査した情報は一枚のポスターにまとめ全員がクラスメイトに発表する。

③未来に向けて

「課題の設定」「情報収集」「まとめと表現」のスキルは、7年次の総合探究科のカリキュラムを下敷きに発展的な活動が展開できている。一方で、集めた情報をどう整理し分かりやすく伝えるのか、説得力のある根拠としてどう活用するのかといった、情報の扱い方に課題が残る。また、他教科の学びを深めるための仕組みづくりが肝要と考えている。現在、SDGs プロジェクトでは、近隣地域の課題に注目し、歴史調査やフィールドワークを行うことで活動の充実と他教科との連携を図りたいと考えている。

卒業研究

①目的

卒業研究は二十数年の長い歴史をもつ明星学園にとって重要な教育活動の一つである。自身の興味関心や世の中で起きている矛盾に目を向け、問いを生み出し、その問いに迫っていくことは、今後、個々人が歩んでゆく道を探るための重要な時間となるだろう。

これまで学年会を中心に運用してきた卒業研究の取り組みは、2018年度の総合探究科の設置機に総合探究科のカリキュラムの第三学年へ吸収した。現在は、総合探究科の授業と9年学年会の双方が協力し、生徒たちの研究活動を支えている。

総合探究科では、各人が自身の関心ごとに気づくための活動を取り入れ、設定した研究テーマについて適切な情報を集めまとめる技術や聞き手を意識した伝達方法を実践的に学んでいる。また、体験を通じて感じたこと考えたことを言語化し、その意味を深く思考する振り返りの活動を重視している。さらに、授業内において、相談会や中間報告会、最終発表会の目的を周知し、その準備を行う。本授業では、対話力、情報活用力、目的意識と計画性、内省力、これらを養うための活動を意識的に取り入れ、生徒自身が主体的に研究へ向かう学習者となることを目指している。

②実践

活動は、探究のプロセスとなる「課題の設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめと表現」の4段階を経ている。「課題の設定」にあたるテーマ設定は個々人の関心を見つける大事な時期である。そのため、8年生の3学期から開始し十分な時間をとり（探究実践の授業は週に2時間あり教員二人体制で実施している）、9年生の4月から基礎情報等の調査や仮説に対する検証的な調査に入れるようカリキュラムを組んでいる。以下、実施時期と探究のプロセスの各段階での活動内容である。

■1年間の活動

実施時期	活動タイトル	内容
12月 (8年)	ガイダンス	卒業研究とは何か、目的と活動内容について総合探究科の主任より説明がなされる。卒業研究ノートとガイダンスのプリントが配付され、ここからスタートとなる。
1～3月 (8年)	課題の設定	冬課題で行った「自分を見つめる」ワークシートを踏まえ、自分の関心ごとに目を向け、調査を行う。また、同級生や教員と対話することで、研究したい題材を鮮明にしていく。授業では、図書室やインターネットで調査しワークシートに落とし込む活動、また、対話を通じて気づいたことを記述する活動を中心に行なっている。
4～7月 (9年)	情報収集	文献調査、仲間や教員、ボランティアの方からのアドバイス等により、多様な方法で情報を集める。6月実施の「してみる相談会」では、問いに対する仮説を検証する具体的なアクションについてグループで検討する。
8～11月 (9年)	整理分析	集めた情報を統合し、比較し、再構築する。そのきっかけとして9月に中間報告を実施する。授業では、論文の書き方やデータのまとめ方や見方について学習する。
12～1月 (9年)	まとめと表現	全員が8,000字の文章にまとめる。また、発表スライドを作成し、後輩や保護者、協力ボランティアに発表をする。

■特徴的な活動

〔メンター制度〕

1人の生徒に1人の教員がつく「メンター制」をとっている。担当教員は、問いを深める際の対話の相手であり、情報の集め方や仮説の検証方法を共に考える伴走者であり、研究の方向性や発表資料の改善点を指摘するアドバイザーである。月に一度の定例会では担当教員を交え4～5人のメンバーと共に互いの研究について報告し合い、問いかけやアドバイスなどのやり取りをしている。

〔してみる活動〕

インターネットの普及により、情報が簡単に手に入るような社会となって久しい。動画を視聴すれば現地に行かなくても当事者の声が聞ける利便性は否定できないものの、一方で、その「あいだ」にある小さく大事な気づきは見えづらくなったと言ってもよい。そうした時代において、生徒たちには、実際に体験すること、見ること、人に触れることを大事にしてほしいと願う。その思いから生まれたのが「してみる活動」である。「してみる活動」とは仮説の検証である。インタビュー調査、アンケート調査、実験、フィールドワーク、施設・企業訪問等があげられる。「してみる活動」を導入して6年ほど経つ現在では、8割程度の生徒が「してみる活動」を実践し、オリジナリティある研究へと発展させている。

〔ボランティアとの連携〕

研究を進める上での強力なサポーターである。年に2回実施する相談会では、研究テーマを深める問いかけで「してみる活動」の可能性を広げたり、異なる視点を与えるアドバイスをしたり、生徒たちに多くの刺激を与えている。ボランティアは主に小中高の保護者、または卒業生の保護者が担っている。中には10年以上関わってくださっている方もおり、時には厳しい助言を投げかけ

る心強い応援団である。2023年度は49名の方がボランティアに登録している。

〔全員による発表〕

1月に実施する卒業研究発表会では、2日間にわたり全員が成果報告を行う。発表する対象は7・8年生、保護者、お世話になったボランティアの方である。近年では一般公開もしており、明星学園の受験を考えている方が参観するケースもある。

研究成果と言うと大それたものをイメージする。実際に、自らの問いを明らかにできない者、何となく綺麗にまとめる者もいる。しかし、1年間をかけて探究してきたその研究の過程には、問いと向きあう中で生まれた迷いや葛藤があり、そのプロセスこそが価値ある経験であると考えている。全員が発表することの意味はそこにある。

③未来に向けて

総合探究科の設立から6年目を迎え、テーマ設定から成果報告までの流れと位置付けが定着しつつある。今後は、相談会や中間報告などのイベント、メンター制度、週1時間の授業など、各々の活動の効果をより高められるよう横の連携に意識を向けたい。そのためにも、授業者、担当教員、9年学年会の役割と働きを整理していく必要がある。

(3) 高等学校の探究的な活動

高等学校での探究的な活動は、「授業での探究的な活動」と「教科外での探究的な活動」の二つの機会がある。

1999年から高等学校でおこなわれてきた「総合的な学習の時間」は、3年間で3単位を取得するものであったが、2015年を境に「主体性」と「教科を横断した視点で思考・活動する力」を育むために、12年生に2単位、明星学園高校独自の講座選択をする「総合的な学習の時間」を設置した。これは、複数の教員が教科を横断する内容の講座を用意し（8講座前後）、生徒は興味関心に応じて講座を選択していくというものである。

以下が「総合的な学習の時間」として、2015年～2021年までに設置された講座である。

2015年度	現代社会論考、映像文化論、数字で見る世界、多文化理解、人生設計をしてみよう、科学技術と自然、自然科学系フィールドワーク、社会科学系フィールドワーク
2016年度	現代社会論考、映像文化論、数字で見る世界、多文化理解、人生設計をしてみよう、異文化理解、歴史で見る音楽、三鷹・武蔵野フィールドワーク
2017年度	現代社会論考、映像文化論、数字で見る世界、多文化理解、人生設計をしてみよう、異文化理解、歴史で見る音楽、古典文化論
2018年度	現代社会論考、映像文化論、数字で見る世界、多文化理解、人生設計をしてみよう、異文化理解、音楽を科学する、古典文化論、第二外国語、美術と社会
2019年度	現代社会論考、映像文化論、数字で見る世界、多文化理解、人生設計をしてみよう、異文化理解、音楽を科学する、古典文化論、美術と社会、哲学
2020年度	現代社会論考、役に立つ数学、地理的探究、音楽を科学する、人生設計をしてみよう、異文化理解、SDGs for School、古典文化論、美術と社会、哲学
2021年度	現代社会論考、役に立つ数学、整体講座、音楽を科学する、SDGs for School、異文化理解、哲学、古典文化論、美術と社会

2022年度に「総合的な学習の時間」は、「総合的な探究の時間」と名称が変更になり、より一層探究的な活動に重きを置くように変化していった。

ここでは、高等学校の授業での探究的な活動の例として「高等学校 総合科の実践」を、教科外活動での探究的な活動の例として「進路指導部の進路講座の実践」の二つを紹介する。

1) 高等学校 総合科 松本 知広（英語科）

高等学校総合科では、12年生において「総合的な探究の時間」として、週2時間を設けている。（以降、授業名を「総合探究」とする）どのような授業を設定するのかを決めるにあたり、文部科学省が定めた学習指導要領を参考にした。

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。(2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。(3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

（高等学校学習指導要領：総合的な探究の時間編第3章から抜粋）

以上を踏まえて、高等学校の総合探究では、各教員が独自の講座を設置し、生徒たちはそれらの中から自分たちの興味関心に合った講座を選択する。2023年度に設置された講座は以下のとおりである。

「整体的文化論」	「折り紙と数学」	「古典文化論」
「現代社会論考」	「Survive!!（家庭総合）」	「環境科学」
「哲学」	「好きから始める SDGs」	「音楽を科学する」
「映像表現」	「美術と社会」	

各教員の多様性が出るようなバラエティーに富んだ講座が設置されている。講座によっては、ティームティーチング（2人制で行う授業）で行っているものがあり、教科横断型の授業を体験することもできる。生徒たちが授業を楽しむことは勿論のこと、教員たちもまた授業を楽しむことで、お互いにとってより良い時間を共有できると考えている。また、各々の講座においてどのような取り組みがされているのかを透明化する必要があると考え、文部科学省が学習指導要領に定める「知識」「技能」「思考力」「判断力」「表現力」を育むカリキュラムづくりを進めている。例として、学校外からのゲストを招いてのワークショップ型授業、文化祭における展示や授業内外での発表、成果物を提出するなどの取り組みが挙げられる。

各講座の紹介

以下では、高等学校に設置されている「整体的文化論」「哲学」「好きから始める SDGs」を紹介する。

■整体的文化論 担当：亀山 平九郎（国語科）

私は、明星学園に奉職して間もなく整体を習うようになった。よって、教職に携わるのとだいたい同じ期間、整体を学んでいる。私が教員になった頃、教育界で話題になっていたのは「アトピー性皮膚炎とぜんそくのアレルギーを持つ生徒の増加」「キレル生徒の増加」だった。アレルギー症状は、理屈抜きに起きてしまう身体的パニック状態である。キレル生徒は、本人も制御不能におちいり暴れまわる。どちらも「理屈」＝「言葉」抜きの激しい反応だ。このような生徒の増加は、「校則」＝「理屈」＝「言葉」でコントロールできない。よって、言葉で成り立つ「学校」＝「授業」は崩壊の危機に直面する。教師が理屈で説得できる相手ではない。

「アレルギー」と「キレル」に手を焼くのは教師だけではない。親もまたなすすべがない。医療機関も新たな事態にとまどっていた。しかし、このままで良いはずはない。「アレルギー」が苦しくては勉強に集中できない。ぐっすり眠れない。かゆくて落ち着いて座ってられず、行儀よくできない。人の話も聞けない。要するに社会性が育たない。「キレ」やすいと、地道に取り組めない。勉強や、部活で練習ができない。人と仲良く出来ない。話が聞けない。やはり社会性が育たない。

私もそのような生徒たちに少なからず出会うなかで、「これは生徒個人の問題ではない」と考えるようになっていた。ちょうどその時、整体師片山洋次郎氏の著書、「整体」創始者野口晴哉氏の著書に出会い、夢中で読破した。そして分かった、「アレルギーとキレル理由はこれだったのだ」。

「個性」はもともと非「社会的」なものだ。一人一人の個性を完全に尊重していたら社会は成り立たない。個性は反社会性をはらんでいる。だから社会は「教育」によって多様な個性にふたをすることを教え、均質で個性を発揮しない「社会人」へと育てる。一方、明星学園の教育は多様な個性にふたをしないで、社会的に受け入れられる新しい表現として花を咲かせ、実るように育てる。「アレルギー」と「キレル」は押しつぶされそうな個性の爆発的な自己防衛表現なのだ。とすれば、他の生徒たちもみな潜在的に「アレルギー」と「キレル」可能性をかかえているのであろう。私はすぐに片山先生に連絡を取り、毎月のグループワークのメンバーになった。

コロナ禍はすべての個性に、均一に「マスク」「黙食」「消毒」などなどを課した。と同時に不定愁訴をうったえる生徒が急増した。「自律神経」「交感神経・副交感神経」「ホルモンバランス」などという言葉に耳にすることも増え、また、駅前や商店街に「マッサージ」「鍼灸」「整体」など民間療法に分類されるような治療院が急増している。

私は、「整体的文化論」で、自分で自分の体調を体系的に理解し、いわゆる病気の症状になる前に回復できる「知識・技能」を伝えている。さらに、他人を診療し、いかなるストレスによるものかを相手に伝え、ほぐせる、そんな人になってもらえるよう取り組んでもらっている。2022～23年は、明星祭で「15分整体院」を久々に開き、生徒諸君は多くの来場者の方のお身体に触れる機会をいただいた。また、2023年は初めて片山先生の道場に生徒を引率し実習とお話をうかがった。

「今の自分の体調が自分で分かり、対処法も分かっている。そうやって、日々、自分の身体と正しく向き合っています。自分の身体の個性を知り、どんな病気になりやすく、どうすれば元気でいられるか、どんな職業、環境が向いているのか分かったのは、これからの人生の大切な財産です」。先日、成人を祝う会での受講者の言葉。

「あなたが、そうやって身体を大切にしているのは、身体の方でもちゃんと分かっています。だから、がんばらないといけないときはがんばれる、苦しいときは休みたい、とちゃんとあなたに伝えてくれる、折れそうで折れないしなやかな、最高の相棒になりますよ」。これは私の言葉。

自分の個性を社会で生かせるように、応援しています。



■哲学 担当：山本 梨紗（社会科）

総合的な探究の時間「哲学」は、生徒が同級生たちと「話したい」と思うテーマについて対話する授業である。テーマは生徒がアイディアを出し、生徒による投票によって決める。自分の意見を話したり書いたりすること、他人の話を聞き、受け止めること、それらをふまえて改めて自分のなかで考えをめぐらせること、これらのことを毎回の授業のなかで実施できるよう授業担当者として努めている。

「哲学」の授業では、授業の最初に生徒に授業を進めるうえで、「何を言ってもいい」「人の言うことに対して否定的な態度をとらない」「発言せずただ聞いているだけでもいい」「お互い問いかけのようにする」「知識ではなく自分の経験に即して話す」「話がまとまらなくてもいい」「意見が変わってもいい」「わからなくなってもいい」、これら8つの約束事を定めている。これらのルールを説明しながら、授業のなかでは「正しい答え」や「良い意見」を求めているわけではないこと、誰かの意向を気にして話さなくてよいこと、たとえ他人の意見が受け入れられないものだったとしても否定的な態度や人格を否定するようなことがないようにしてほしい、ということは都度生徒には説明している。これはどんな生徒も安心して話すことができる場でなければ、多様な意見は出てくるのが難しく、生徒たちも話しにくくなるだろうという考えに基づいてのことである。

話し合う際は1つのグループが8～10人ぐらいのグループになるように、そして毎回できるだけ違うメンバーで話すことができるように、アイスブレイクなどもはさみながらグループを作っていく。これはできるだけ多様な意見・価値観に触れてほしいとの担当者の願いが込められている。

話し合うテーマは定期的に生徒に問いを出してもらう。その際生徒には、必ず疑問形の形で書くこと、イエス・ノーで答えることができない質問のかたちにすることを求めている。そのテーマのなかから生徒が投票で選び、毎回15～20分程度話し合いを行っている。話し合いの内容は多岐にわたり、2023年度に取り上げた内容の一部を挙げると、「嘘をつくのはわるいことか?」「同調圧力はなぜ起こるのか?」「結婚の意味とは?」「偏見はなぜ生まれるのか?」「幸せとは何か?」などである。問いによってはグループの意見が完全に真っ二つに割れながら喧々諤々と意見を戦わせたり、グループの大方が一方の意見に寄りながらも、反対意見を聞いているうちに「あれ?」と思いつきながら新しい視点を発見できることなどがある。そして15分～20分という時間は問いによっては短いこともあるが、「まだ話したい」と思うことで授業外でも話題に挙がることを期待し、実際に休み時間や放課後に話している姿を見かけることもある。

授業のねらいとしては、大きく三つある。一つめは生徒が普段疑問に思っていることや同級生と話してみたいことを思う存分話してもらうことである。もちろん普段から仲の良い友達などと話し合っている生徒たちもいるが、授業という場ならば普段話しにくいことも堂々と話すことができる。二つめは、相手を理解しようと努めることである。話し合いのなかでどうしても意見が合わない、受け入れがたい、ということも生じるが、どのような意見も理解しようと努めること、尊重することは実践のなかで身につけてほしいと願っている力である。相手を理解し、尊重すること、これらは高校を卒業したあとも、様々な場で必要になる力ではないかと考えている。三つめは自ら問いを立てて考える力である。日常生活や目の前の物事に対して自分で問いを持つこと、誰かの意見に同調するのではなく、自分で考えることは、実際に自分でやってみることで磨かれ、鍛えられる力だと考えるので、授業のなかで失敗や成功を繰り返しながら身につけてほしいと期待している。

探究とは、自らの興味関心や問題意識を第一にして生徒が課題に取り組むことが理想だと考える。さりとて最初からそのようなテーマが見つかるとは限らないので、哲学では他人の興味関心をとっかかりにしながら、みんなで話中で自分の興味関心を探り、自分が何を問題だと考えているのか、自分は何に違和感を覚えているのか、などを自分のなかで深めてほしい。授業担当者としては、哲学の授業が自分を、他人を理解するための道しるべになるように今後も研鑽を重ねたい。

■好きから始める SDGs 担当：松本 知広（英語科）

みなさんの好きなことや強みは何でしょうか？ それらを理解し、活かすことで困っている人々の手助けとなり、社会貢献に繋がったら……。SDGs（持続可能な開発目標）を出発点にして、疑問や意見を共有し、「自分ごと」として行動に移すことが授業の目標です。授業では行動に移すことをPBL（プロジェクト型学習）と呼んでいます。授業の取り組みの一つとして、定期的にゲストの方を招いて、実社会で起きている問題を一緒に考え、私たちにできるアクションを考えます。



左の写真は、国際環境 NGO FoE Japan の方を招き、環境問題について考えるワークショップを実施したときのものです。生徒たちは実際に社会問題に取り組んでいる方々と接することで、新しい発見をし、自分たちにどんなことができるのか意見を出し合います。

授業では、主に ①対話、②協同活動、③振り返り の三つを大切にしています。他者との見方・考え方の違いに気づくためには、「①対話」が必要です。また自分の特性を生かし、チームの一員として役割を果たすためには、「②協同活動」が重要になります。そして、PBL を終えた後に自分自身の行動を見つめ直すうえで、「③振り返り」を行います。①②③のどれもがPBLの過程においては大切であり、活動をするたびに生徒たちにはこの三つの要素を意識するように伝えています。

結果が何よりも大切だという考え方がありますが、この授業では結果に至るまでの過程（プロセス）の方が大切だということを伝えています。プロセスを振り返ることで、次に向けて進んでいく力を身に付けて欲しいと考えています。

1 年間の主な活動

1 学期	2 学期
自己紹介・SDGs について	卒業生を招いた授業：PBL について
SDGs 新聞ワークショップ	探究テーマ設定・チーム決め
図書室で本探し	探究テーマについての情報収集
ゲスト講師の授業：自分の強みを知ろう	フィールドワーク（企業取材）
PBL 発表会①	PBL 発表会②

授業においてももうひとつ大切にしていることは、地域との関わりです。学校内だけに留まらず、学校外での取り組みを増やしていくことで、生徒たちがリアルな社会を体験できると考えています。2020 年度からこの講座を開講し、生徒たちとこれまで 10 以上の外部団体を訪れましたが、多くの大人たちが社会をより良くするための活動を行っていることを知ることができました。そんな人たちと一緒に何かできることがあるはず……。高校生の時から、大人たちと関わる機会をたくさんつくるのが学校としての使命だと感じています。

これからは、正解のない課題に取り組んでいかなければならない時代になると言われています。そのような変動的であり、不確実で、複雑な社会を生き抜くためには、高等学校の教育において、これからの社会で活躍できる人材を育てることが必要です。そのような人材を育てるために、学校では成功も失敗も経験できる場所にしたいと考えています。（私自身、学校はたくさん失敗をする場所だと信じています。また、教員たちはその失敗を認めてあげて、成功するまで彼らを応援する存在であるべきだと思っています。）生徒たちには、とにかく失敗を恐れずに様々なことにチャレンジして、自己肯定感を高めて欲しいと考えています。

2) 進路講座

2020 年度から始まった大学入試改革が一つのきっかけとなり、それにさきがける形で高校内で進路講座が設置されることとなった。それまでの 12 年生の卒業後の進路決定の方法は当時の世間とは少し異なり、AO 入試（現総合型選抜）や推薦入試（現学校推薦型選抜）が一般入試に比べて多かった。明星生らしい、その子ならではの考え方が尊重され、体験・研究成果を入試で発揮しやすかったからだと推察する。しかし、大学入試改革に伴い、各大学の推薦入試の定員が増え、他の高校や予備校等も生徒に特別な体験をさせるようになった。それに加え、指導要領改訂により、他の高校でも課程内で生徒が探究する場が増えてきた。また、当時は e ポートフォリオや新しい調査書において、高校の課程以外で何かしら生徒が体験することが必要だと言われていた。そこで高校進路指導部では、自前で何か特別な体験をさせることができないかと考え、2019 年度より高校

全教員の協力のもと、10年生全員に「進路講座」を受講させるという取り組みを始めた。

対象者は10年生全員と、希望する11年・12年生とした。内容は座学・校外フィールドワークを問わず、また回数も単発から複数まで、教員自身が講義や引率を行うもの・卒業生や大学の教授などの専門家を招いて話を聞くものなど、多岐にわたった。そのため一概には説明しにくい、それを生徒自らが自由に選び受講するというものであった。

10年生に向けて進路講座を設置したのは、高校段階の早いうちに、自分の世界にはなかった「何か」と出会い、それをきっかけに、学習に励んだり、研究したい内容を見つけたりと、自分の進路を見つける一つの材料になることを願ったからだ。また進路という大きな選択に関わらずとも、普段の学校生活では出会えない、想定外の世界に触れるきっかけ作りとしての目論見もあった。

2019年1月に高校部会へ進路講座が提案された際の要項には「生徒の主体性を育み、自らが学びに向かおうとする姿勢を作ることを目的とする。統括は進路指導部が行い、講座の設置は全教員が協力して行うものとする。フィールドワーク、座学問わず、生徒が主体的に生き生きと活動できるような内容とする。」と記載されており、これからの社会で活躍することができる、主体的で豊かな人間性の生徒を育てることにとても前向きであった。

この企画は前述したように生徒の新たな出会いの提供であったが、それは同時に個性豊かな教員たちとの出会いの場でもあった。明星学園には専門外のことであっても見識豊かで多彩な経験を持つ教員が数多くいる。教員の意外な一面を垣間見ることができたし、他校ではできないような一風変わった企画もあり、まさに明星ならではの取り組みであったと思われる。そしてこの企画を実現するためには、高校全教員の協力が欠かせなかった。

2019年度から始まり、その後すぐにコロナ禍となってしまう、継続的な取り組みとして実施できなかったことを残念に思う。コロナ禍が明けた今、そのような出会いの場や実際のふれあいを取り戻すことが求められているように思う。生徒の「個」に働きかけるこのような進路指導の形は、これからの時代ますます必要になってくるだろう。そして、高校の全教員の協力で実施することで、さらに明星らしい形に進化していくことだろう。ゆとり、幅、遊びも大切にする教科外活動という葉が陽を浴び、明星学園という木が年輪を重ねることへのささやかな力添えとなることを願う。

(栗山 万由)

〈これまでの主な講座〉

- 京都・奈良旅行 ～仏像をめぐる旅～
- 沖縄研修
- 1日 YouTuber !
- 裁判を傍聴しよう!
- 東京にある建築物の見学散策
- 太田道灌と江戸城
- 総合芸術を観よう
- 社会科見学
- プロスポーツチームの運営を学ぶ
- 英文法道場
- 整体講座
- 江戸職人体験
- 映像文化論
- 英語で読む古典・日本史
- 高校生のお金の話
- 寄席に行ってみよう
- 糸かけ曼荼羅
- 吉祥寺フリーペーパーをつくろう
- JAL 航空機整備場見学
- イケメン臨床心理士（カウンセラー）のお話を聞く会
- 神話文学
- ENGLISH MEDIA SEMINAR
- すうさんぽ ～世田谷の街歩き～
- スポーツ栄養講座
- 読書会
- 日本の伝統文化に触れる
- 自分を発見しよう! ～自己PR 記事制作～
- オーケストラ・室内楽を聴こう
- 演劇を観にいこう
- ミュージカルを観に行こう!
- 羽田空港展望デッキからの新たな発見
- 体育大学のキャンパスを見てみよう
- 象の調教とタイ料理教室
- 地域研究：玉川上水とその周辺の歴史
- 海洋生物採集活動
- 「キャリアデザイン」について考えよう
- 臨床心理士が「こころ」と「心理学」についてざっくばらんに話す会
- プロピアニストと見つける自分の音～鍵盤に触れない譜読み法～
- SDG s ワークショップ「自分のすきを探そう」
- 職業人（美容師）のプロが伝えたい「好きなことを仕事にする方法」とは
- 高校生のための創造性を生み出すアート思考講座
- 美術進学講座：実技試験のない美大進学って?
- 絵本づくり
- 合気道を入り口にして、体の使い方を研究しよう
- 文学批評入門
- 卒業生のお話を聞こう!
- 上級学校の出張講義を受けよう

※コロナ禍等で実施できなかったものも含む。

2 「国際交流」と「国際理解教育」

(1) 小学校「世界平和への第一歩」

明星学園小学校では、未来に羽ばたく子どもたち一人ひとりの人生が、より豊かで、多様性に溢れ、寛容なものであるように、国際交流活動を通してコミュニケーション力や国際感覚の向上を目指して取り組んできている。

2006年にオーストラリア・南オーストラリア州アデレードにある Woodend Primary School への短期留学ホームステイプログラム、そして2018年には、台湾・台中の東海國民小學（Dong Hai Elementary School）へのプログラムが開始された。それだけではなく明星学園小学校への留学生の受け入れも実施しており、Woodend 校と Dong Hai 校から留学生が毎年交互にホームステイにやってくる。

我々が小学校レベルで行っている国際交流のゴールは、「世界平和への第一歩」である。大袈裟な表現に聞こえるかも知れないが、この国際交流の歩みは間違いなくこのゴールへの歩みだと言える。子どもたちは我々大人と異なり、物事を何のフィルターも通さずに純粋な目で見て受け入れていく。オーストラリアってどんな国なんだろう。台湾の人ってどんな人たちなんだろう。実際に海を渡りその国に足を運び、その目で見て人々と交流し、温かい心に触れる経験を手に入れるのである。その国の人々、そして自分を家族同様に愛してくれるホストファミリーが自然と大好きになり、日本以外の国に「大切な人」ができる。そんな経験を幼少期にした者が、大人になりその国と争うことを望むだろうか。家族同様に自分に愛情をかけてくれる人がいる国と、いかなる理由があろうとも絶対に争おうとは思わない。それどころか大好きになった国のことをもっともっと知りたい！自分の国のことをもっと知りたい！そう自発的に世界に興味を持ち、探究し、自ら学んでいった先で、これまでの両国間の歴史に出会っていくのだ。実際に自分の肌で感じてきた国との間にいかなる過去の歴史があろうとも、子どもたちはその純粋な瞳で見てきた素晴らしい人々との、かけがえのない信頼と愛情の基盤の上でその歴史を受け入れ、未来に向かって前向きに歩いていくことができる。それこそが「世界平和への第一歩」だと我々は信じている。

我々のプログラムは大きく分けて、2通りある。「海外に行く」短期留学プログラムと「海外から来る」受け入れプログラムである。明星学園小学校の国際交流プログラムをもう少し具体的に紹介していく。

【オーストラリア Woodend 校への短期留学ホームステイプログラム】

交流校：南オーストラリア州・アデレード Woodend Primary School

期間：12日間（春休みに実施）

対象：4～5年生（コロナ後は、機会がなかった6年生を特別に対象とした）

定員：約20名

2006年度（2007年3月）にスタート。初回は実験的なところもあり、アデレード近郊の小学校2校に分散してホームステイを行った。その後 Woodend 校のみとし、現在に至っている。プログラムは12日間の短期留学で、小学生だが一人一家庭でのホームステイで、現地小学校での学校生活を体験する。2023年度（2024年3月）の渡豪が実に第15回目のホームステイとなる（新型コ

コロナ感染拡大のため3年間不実施)。

【台湾 東海國民小學への短期留学ホームステイプログラム】

交流校：台中・臺中市 東海國民小學 (Dong Hai Elementary School)

期間：5日間 (冬休みに実施)

対象：6年生

定員：約20名

2018年に開始されたプログラム。英語を母国語とする国(オーストラリア)への留学を4～5年生で経験し、お互い英語を第二言語とする国(台湾)への留学を小学校最高学年で経験できるようにデザインされている。6年生が卒業に向けて忙しくなる3学期の前に経験できるように、冬休みに実施。一人一家庭にホームステイ。現地での学校生活を体験するプログラム。

【オーストラリア Woodend 校からの留学生ホームステイ受け入れ】

期間：12日間 (隔年9月に実施)

【台湾 東海國民小學からの留学生ホームステイ受け入れ】

期間：6日間 (隔年10月に実施)

※上記どちらのプログラムも

留学児童：5～6年生 約20名

1年～6年までの明星学園小学校在学児童家庭に一人ずつホームステイ

4・5・6年生12学級に分散しての学校生活体験

我々が実施している海外への短期留学プログラムのユニークな点は、オーストラリアへも台湾へも旅行会社の添乗員を帯同させず、教員が全行程を引率するとともに、教員も相手校の教員宅にホームステイをする点である。他校のプログラムでは、教員はホテル滞在するところが多いようだが、明星学園小学校のプログラムは、「子どもたちと、苦楽を分かち合う」プログラムである。国際担当の教員を中心に引率教員が選ばれるが、もちろん引率教員の中には語学が不得意で、海外生活経験が全くない教員もいる。ホストしてくださる先生とのコミュニケーションに悪戦苦闘し、子どもたちと全く同じ苦楽を味わう者もいる。これがとても尊いのである。翌朝、現地の学校で再会した子どもたちが、「言葉が全然通じなかったよー。」と嘆いても、「大丈夫よ！先生も全然だめだったから！一緒にがんばろう！」と励まし合い、気持ちを共有し、共に歩むことができるのだ。子どもたちは、明星学園のキャンパスでは見られない、非日常の環境で同じようにがんばる慣れ親しんだ教員の姿を目の当たりにし、そこから勇気をもらう。教員もまた健気に頑張る子どもたちに勇気づけられ、ホームステイ生活という大冒険を共に駆け抜ける。その大冒険を交流校の先生やホストファミリーが本当に親身になり、ありとあらゆる面に配慮をしてバックアップをしてくれるのだ。これほどまでに長い期間、同じ学校との国際交流プログラムが維持されてきた理由は、構築されてきた『揺るぎない信頼関係』に他ならない。これまで参加してきた子どもたちは、事前事後の準備はもちろんのこと、現地で精一杯、留学の目的を見据えて取り組んできた。「視野を広げる」「自分を見つめる」「たくましい生き方をつかむ」この三つの大きな柱を胸に、海外でその瞳を輝か

せて生活してきたからこそ、そこに信頼が生まれ、現地の方々にも「また明星の子どもたちを受け入れてあげたい」と思っていただけの交流が続いてきたのだ。そして、それはこれからも続いていくだろう。

国際交流は、海外に行く子どもたちに注目が集まりがちだが、明星学園小学校は「受け入れ」プログラムにも力を入れている。それは一部の子どもたちだけの経験ではなく、小学校全体が国際交流プログラムに参加でき、海外からの仲間たちとの交流体験ができる、まさに国際交流の裾野を広げるプログラムと言えるからである。明星学園小学校のキャンパスでオーストラリアや台湾からの留学生と出会うのは、高学年だけではなく、低学年の子どもたちも同様である。英語の授業で習ったばかりの“Hello ～～！”や、唯一知っている“シェイシェイ”を使ってみたり、身振り手振りを交えてコミュニケーションをとったりする。そして、子どもたちならではの、言葉に依存しないコミュニケーション能力もフルに発揮して、楽しい時間を共有していく。このキャンパスで素晴らしい交流体験をした子どもたちは、確実に海外へと目が向いていく。低学年の子どもたちもやがて高学年になった時に、オーストラリアに行ってみたい！台湾に絶対に行くんだ！と、モチベーションが上がり、そこからの語学学習への意欲も変化していくのだ。

小学校レベルで行う国際交流は、まさに体験が全てだと言える。その機会を提供し続けていくことが、小学校国際担当の任務である。日々変わりゆく世界情勢。今、この瞬間も世界ではさまざまな争いが解決できずに、尊い命が失われる悲しい事態になっている。未来をどう切り開いていくのか。この子どもたちが生きていく未来をどう作り上げていくのか。世界の中の日本。その未来を背負う子どもたちが、「世界平和の第一歩」をここ明星学園小学校から踏み出していけることを誇りに、これからもより良いプログラムを作っていきたいと願っている。(小関 大輔)

(2) 中学校

1) 語学短期留学（ニュージーランド／オーストラリア）

中学校の語学研修旅行は2006年度にスタートした。8年生と9年生の希望者を対象に、ニュージーランド南島クライストチャーチ近郊のカルバーデン地区に2週間滞在し、アムリエリアスクール（小中高）に通学した。この短期留学は2006年～2012年まで7回行われ、現地校の事情により留学先の変更が余儀なくされ、2014年はイギリスロンドンの近郊、ブライトンで実施し、2015年～2019年までの5回（2020年以降は新型コロナウイルス感染症 COVID-19により中止）はオーストラリア・ブリスベンでの実施となった。

短期語学研修旅行の意義は、異文化体験、ホームステイ、海外学校生活、英語力向上、将来の夢に向けての一步などなど多岐にわたっているものの、ひと言で言えば「英語でサバイバル」に挑戦すること。未知の世界に分け入って不安一杯の自分が異文化の中で生活していくうちに徐々に自由を獲得していく経験を積むことに他ならない。

参加した生徒たちは、ステイ先の家族となって生活し、通学する学校ではさまざまな授業に参加し、日本文化のプレゼンテーションを現地の生徒たちに行い、ホストファミリーに感謝の手紙を「留学のまとめ」として読み上げた。最終日には日本に戻りたくない気持ち半分、いよいよ帰れる気持ち半分为味わう。

事前学習や説明会で担当教員が強調するのは、二週間の海外生活で味わうさまざまな気持ちは、

見方によって大きく変わる、ということ。異文化のちがいを否定的に捉えるのではなく、ちがいを楽しむこと、ちがいに感動すること、貴重な体験ができることに感謝すること。

「夢のような二週間だった」と総括して明祭で発表した生徒も数多い。

コロナ禍を経て、2023年には新たにブリスベンでの短期留学が再スタートした。(姫野 英二)

2) タイ短期留学

高校で20年以上続いてきたタイ短期留学に中学生(8・9年生対象)も加わったのは、2015年度からである。「異文化」を体験できるプログラムは、中学生にも意義があるだろうと前年度から中学生の参加の検討が始まっていた。しかし、2014年5月に起きた軍事クーデターによるタイの情勢不安を懸念し、その年の短期留学は見送られた。そのため、2015年度に9年生2名の参加から始まった。

例年、6月初旬から週に1回のペースで事前学習会が始まる。言語(タイ語・英語)、歴史、地理、風俗、習慣などを学びつつ、中高生混合のグループを作り、グループごとにタイの姉妹校での日本の文化発表(英語でプレゼンテーション)、参加者全員での合唱、パフォーマンスの準備を進めていく。この事前学習を通して参加するメンバーとも顔なじみとなり、高校生がリーダーシップをとり進めてくれるので、中学生にとって高校生と一緒に活動することも大きな安心感につながり、さまざまな点でプラスに働いている。

また、10日間の短期留学中は、姉妹校であるホアヒン・ウィッタヤライ学園での学校生活体験、5日前後のホームステイを中心に、孤児院などでのボランティア活動、エレファントライドなどのアドベンチャー体験、カンチャナブリー、アユタヤ、チェンマイ、チェンライへの観光などさまざまなプログラムが組まれてきた。姉妹校の先生やホームステイ先の生徒、家族と一緒に過ごす時間も多し。タイではタイ語がメインであり、お互い英語を学習する者同士なので電子辞書やスマートフォンの翻訳アプリに頼りつつではあるが、同じ時間を過ごすことで密な関係を築くことができ、10月末にタイから日本へ短期留学に来るタイの生徒との再会も楽しみのひとつとなっている。さらに、挨拶の仕方、食べる時の作法(ナイフではなく、スプーンとフォークを使うなど)、タイ人の王室に対する敬意の払い方(たとえば姉妹校では毎朝朝礼があり、その際は国歌を王宮がある方角を向いて歌っていること)など、日本とは「異なる」ことに何度も出会う。最初は驚きつつも、タイの人たちとの交流を通して、自然に受け入れることができていく。

以上のことから、参加した生徒からは「とても楽しかった! 良い経験ができた!」と満足感が高い。また、事後学習として明祭やバザーなどで報告プレゼンテーションや展示を行ったり、タイから短期留学生在が来校した際も交流を深める機会を設けたりすることで、中学校でもタイ短期留学が定着してきた。さらに、2016年度からは参加者の保護者と教員にも短期留学の様子をWebを使って配信、2016年度から中学所属の教員も2名で引率する体制が作られ、中学校所属の教員にもタイ短期留学がどういうものなのかが共有されていくようになっている。

このように中学校でも「異文化」を体験できる大事なプログラムとして、理解、周知されてきた。2019年度は、14名の中学生が参加するなど、年を重ねるごとに参加者が増えている。残念ながら新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大により、2020～2023年度は実施が見送られた。早く再開できることを願っている。(小畑 典子)

(3) 高等学校

1) 高校の国際交流—短期留学

高等学校の国際交流が本格的に始動したのは、1999年のことである。

それまで国際交流委員会という委員会の一つとして短期留学などを行っていたが、この年を境にして、国際交流委員会から「国際部」となり、専門部の一部門として本格的な活動が始まった。

国際部はその目的を「明星学園高校が日常的に国際的雰囲気になり、学校の全生徒がその雰囲気を享受し、国際社会の一員として生きていくための一助となることにおいた。」と、当時の国際部部長であった瀬野卓志はPTA会報誌『道』No.124の中で述べている。

1980年代・90年代から始められていた短期留学に加え、2001年より長期交換留学が始まり、明星学園高校の国際交流は、1980年代から今日にいたるまで、長期交換留学、短期留学（オーストラリア、タイ、台湾）、インターナショナル・ウィークといった活動を柱に35年もの長きにわたって活動してきた。

ここでは①オーストラリア短期留学②タイ短期留学③インターナショナル・ウィークにスポットをあて、紹介する。

①オーストラリア短期留学

オーストラリア短期留学は、1988年、オーストラリア・パース市へ生徒10数名での語学研修3週間を実験的に行ったのがはじまりであった。この実験的な3週間の語学研修は成果が見られたので翌89年から学園として旅行会社に依頼し、正式にオーストラリアへの語学研修を実施するようになった。生徒60名以上が6グループに分かれ教師も生徒もホームステイしパース市内に散らばり、午前中はコミュニティセンターのようなところで英語の授業を受け、午後は旅行会社がチャーターしたバスで観光などを行った。現地日本人のスタッフはいないのでトラブルなど引率教師が全て対応したが、当時は車もなく大変であった。

旅行会社を通さず現地高校と姉妹校提携し、「生徒を午前中授業に出させたい」という思いが英語科奥西克昌の中に生まれ、1992年に公立スワンビュー高校とイースタン高校と姉妹校提携に調印し明星学園独自の短期留学が始まった。当時、語学研修を目指す私立学校は多くあったが、旅行社任せのプランは、学校とは別の「英語教室」で研修を行う形式であった。明星独自プランでは、生徒は、ホストファミリーがつくってくれたランチを持ち、一緒に登校し、体育や音楽等も含め、午前中はホストファミリー生徒の授業に参加した。

現地の授業では、十分に言葉が分からないことも多かったが、現地の授業の雰囲気・教師や生徒の様子をじかに体験し、そこから学ぶことも多かった。宿泊行事などにも参加し、海岸のバンガローで、寝袋での宿泊体験、遊びの違いも楽しむ中で異文化を実感できた。

1996年には第5回オーストラリア短期留学が7/22～8/12、20名で行われる。生徒は全員女子で引率は井上成雄、道海澄子、奥西の3人であった。西オーストラリア・パース市郊外のSwan View Senior High School（8名）とEastern Hills High School（12名）の2校に分かれて実施。

オーストラリア短期留学では事前学習を土曜日に行い、オーストラリアの歴史や文化の学習や英会話学習、ホストファミリーに入るにあたっての注意点等を学んでいく。なかでも英語での日本

文化発表の準備を時間をかけて行なっている。現地では現地校との交流、授業への参加、英語での文化発表、毎日の英語での日記、小学校訪問、ファームステイ、ホームステイなどたくさんのプログラムが組まれている。かれこれ35年も継続されてきたオーストラリア短期留学にはこれまでたくさんの生徒が参加し、それぞれの人生において貴重な体験になっている。

3週間の引率教員の確保は難しく、10日間で交代したり、燃油サーチャージが値上がりしたり、オーストラリアドルが上がったり下がったりで一喜一憂したり、ホストファミリーが当日まで決まらなかったり、本当にいろいろなことがあった。ここまで続けてこられたことに、関係した全ての皆様に感謝を示したい。(間宮 かおる)

※ Swan View Senior High School = S.V.S.H.S Eastern Hills High School = E.H.H.S

年	期間	試験の実施 (第1回)	行き先	参加	引率
1988	7/23～8/13	試験の実施 (第1回)	Australia・Brisbane 市	14 名	武者小路知行
1989	7/31～8/23	第2回 語学研修	Australia・Perth	64 名	武者小路、角谷薫 瀬野卓志、小林英一 奥西克昌
1990	7/23～8/15	第3回 語学研修	Australia・Perth	25 名	角谷、山領直人
1991	7/28～8/14	第4回 語学研修	Australia・Perth	32 名	溝口悦子、奥西
1992	7/28～8/16	第1回 豪州短期留学	Australia・Perth S.V.S.H.S/E.H.H.S	25 名	黒川実、工藤一義 平野万知子、伊勢誠、奥西
1993	7/24～8/14	第2回 豪州短期留学	Australia・Perth S.V.S.H.S/E.H.H.S	29 名	角谷、溝口、横田数弘 井上成雄、奥西
1994	7/24～8/14	第3回 豪州短期留学	Australia・Perth S.V.S.H.S/E.H.H.S		
1995	7/24～8/13	第4回 豪州短期留学	Australia・Perth S.V.S.H.S/E.H.H.S		
1996	7/22～8/12	第5回 豪州短期留学	Australia・Perth S.V.S.H.S/E.H.H.S	20 名	井上、道海澄子、奥西
〃		ニュージーラ ンド研修	New Zealand／ハイラキ・ブレイン・ ハイスクール	15 名	山内佳子、瀬野
1997	7/19～8/6	ニュージーラ ンド研修	New Zealand 南島 Pleasant Point 高校	16 名	2 名(村田晴海他)
〃	7/22～8/11	第6回 豪州短期留学	Australia・Perth S.V.S.H.S/E.H.H.S		
1998	7/21～8/8	第7回 豪州短期留学	Australia・Perth S.V.S.H.S/E.H.H.S		
〃	7/21～8/8	ニュージーラ ンド研修	New Zealand 南島 Pleasant Point 高校		
1999	8/5～25	第8回 豪州短期留学	Australia・Gold Coast All Saint's Anglican School		
2000	7/17～8/8	第9回 豪州短期留学	Australia		
2001	7/17～8/8	第10回 豪州短期留学	Australia		
2002	7/17～8/8	第11回 豪州短期留学	Australia		
2003	7/17～?	第12回 豪州短期留学	Australia		
2004	7/15～8/4	第13回 豪州短期留学	Australia		
〃	8/19～28	中国・タイ 短期留学	中国、タイ		

年	期間		行き先	参加	引率
2005	7/14～8/3	第14回 豪州短期留学	Australia		
2006	7/18～8/8	第15回 豪州短期留学	Australia-Gold Coast Trinity College		
〃	8/22～29	タイ 短期留学	タイ Hua Hin Vitthayalai School		
2007	?～?	第16回 豪州短期留学	Australia-Gold Coast Trinity College		
2008	7/18～8/7	第17回 豪州短期留学	Australia-Gold Coast Trinity College		
〃	8/20～30	タイ 短期留学	タイ Hua Hin Vitthayalai School		
2009	【中止】	新型インフル エンザ	Australia と台湾行きは中止		
2010	7/18～8/7	第18回 豪州短期留学	Australia、Gold Coast Trinity College	27名	
〃	8/?～?	タイ 短期留学	タイ Hua Hin Vitthayalai School		
2011	7/16～8/7	第19回 豪州短期留学	Australia、Gold Coast Trinity College	25名	
〃	8/19～8/29	タイ 短期留学	タイ Hua Hin Vitthayalai School	19名	
2012	7/18～8/7	第20回 豪州短期留学	Australia、Gold Coast Trinity College		
〃	8/19～8/29	タイ 短期留学	タイ Hua Hin Vitthayalai School		
2013	【中止】	燃料費高騰 のため中止	Australia		
〃	8/18～8/28	タイ 短期留学	タイ Hua Hin Vitthayalai School		
2014	7/19～8/8	第21回 豪州短期留学	Australia、Gold Coast Trinity College		
〃	8/20～8/29	タイ 短期留学	タイ Hua Hin Vitthayalai School		
2015	7/19～8/10	第22回 豪州短期留学	Australia、Gold Coast Trinity College	20名	栗山万由・佐藤綾・赤城貴紀
〃	7/25～8/3	中・高タイ 短期留学	この年より中高合同 タイ Hua Hin Vitthayalai School		(中) 小畑典子 (高) 伊勢・河住貴夫
2016	7/19～8/10	第23回 豪州短期留学	Australia、Gold Coast Trinity College		大石晶子・栗山・松本知広
〃	7/31～8/9	中・高タイ 短期留学	中高合同 タイ Hua Hin Wittayalai School		(中) 堀内雅人・小畑 (高) 伊勢・山本梨紗
2017	7/19～8/8	第24回 豪州短期留学	Australia、Gold Coast Trinity College		千和紀子・Bradley Jones
〃	7/30～8/8	中・高タイ 短期留学	中高合同 タイ Hua Hin Vitthayalai School		(中) 成田裕・小畑 (高) 伊勢・金城ゆり
2018	7/18～8/2	第25回 豪州短期留学	Australia、Gold Coast Trinity College		山本 Andrew Welsch
〃	7/27～8/6	中・高タイ 短期留学	中高合同 タイ Hua Hin Vitthayalai School		(中) 高山瑤子・成田 (高) 伊勢・今井美菜子
2019	7/18～8/7	第26回 豪州短期留学	Australia、Gold Coast Trinity College		Andrew Welsch・長濱茜・上 村公紀
〃	7/26～8/8	中・高タイ 短期留学	中高合同 タイ Hua Hin Vitthayalai School		(中) 福本翔輝・小畑 (高) 伊勢・徳田知恵
2020	【中止】	COVID-19			
2021	【中止】	COVID-19			
2022	【中止】	COVID-19			
2023	7/20～7/31	第27回 豪州短期留学	Australia、Gold Coast Hillcrest School		Bradley Jones・長濱

②タイ短期留学

明星学園が国際理解教育の充実を目指すことになったのは35年前（1988年）のことであった。

当時、多くの私立学園が海外に姉妹校を持とうと模索し、語学短期留学と称し、海外へ生徒派遣することがブームになった。公立学校はまだ海外への渡航が禁止されていた時代である。私立高校が公立高校と差別化を図る大きな教育プロジェクトとなっていた。たくさんの私立高校がアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリスへと旅行会社や斡旋会社を通じて姉妹校提携を結んだ時代であった。きっと多くの私立学校の校長室には海外の学校との提携書が自慢げに飾られていたに違いない。

そのような時代を背景に明星学園も海外へと教育の一翼を広げていった。他校と大きく異なっていたのは、全てのプログラムを独自に企画し、アウトソーシングには頼らず、明星学園独自の視点で作り上げていったことだった。当時としては、ずいぶん我儘な無謀とも思える取り組みだった。海外研修で語学力を磨き、さまざまな異文化体験をすることは素晴らしいことだ。そのための目的地はどこがいいのだろうか。他私学の多くは上述の欧米英語圏にこだわっていた。しかし当時の明星学園には異なる視点があった。姉妹校を持つにあたり以下の3つのコンセプトがあったのだ。英語を学ぶなら時差の少ないオセアニア、歴史や芸術を学ぶならヨーロッパ（結果的には多くの国が非英語圏）、そして伝統的な独自の文化を持つアジア圏の三位一体を構想したのだ。語学教育だけを謳うのではなく、多感な一生に一度の思春期の感性に日本とは全く異なる異文化の刺激と物事の捉え方の違いを体験させること。これにより刺激を受けアーティスト分野、学術的分野の感性を磨いた卒業生たちを多々輩出している。単なる語学研修（英語学習）とは似て非なるものを目指したのだった。

他校では真似できない、追いつけないプログラムは学園の財産であり柱である。アジア圏にそれを持つ明星学園の国際理解教育は、他校より抜きん出ている教育実践だと自負している。

30年前、国際理解教育の分野で他校がまだ英語圏に焦点を合わせている時、タイ国から一人の教育者が本学園を訪ねてきた。「日本でタイの生徒と教員を数週間研修させて貰える学校を探している。画一的なタイの教育システムの中に、他国のとりわけ日本の独創的な教育感を取り入れ、タイ国の学校創りに活かしたい。」

これが30年以上に渡る明星学園高等学校の姉妹校ホアヒン学園の現総長テパラット・ピティサン氏（Fr.Dheparat Pitisan/ 呼称は神父であるためファーザー）との出会いだった。約100年前に新しい教育を目指し明星学園を設立した4人の創立同人と同じ魂を感じたのだった。

テパラット先生は物理的な距離や金銭ではなく、人の心こそが新たな教育や国際交流を発展させること。組織としてだけではなく、取り組む個々の人間の気概こそが異文化理解を深め他者へと理解の輪を広げる力になることを、身をもって証明した明星学園にとって大切な恩人である。

テパラット先生が率いるホアヒン学園はタイ全土に系列キャンパスを持ち、明星学園の生徒、卒業生、保護者に対して絶大な信頼と保護を約束してくれている。首都バンコクから南へと下ること3時間、素晴らしいビーチが続くプラチュアップキリカン県ホアヒン市にある幼稚園から高校までの一貫教育を掲げるキャンパスは、児童生徒数3,000人が学ぶ私立学園だ。明星学園の生徒

は在校中に短期留学として現地に滞在し、さまざまな異文化体験を通し、国際感覚を養うことができる。卒業後の人生の節目に訪問する卒業生も珍しくない。一過性の異文化理解教育ではなく、国際生涯教育の起点にもなりつつあると感じている。

卒業して高校生活を振り返る時、タイ短期留学は高校生活の楽しい思い出を更に色づける。タイ語教室、タイ料理実習、象乗りや筏下りなどのアドベンチャー体験、そしてなんと言っても、正規タイ中等教育学校での留学体験ができる10日間の短期留学は日本人として日本を振り返る絶好の機会ともなっている。多様性を受け入れる姿勢、共存する気持ち、協働的に交流をしていく実践力。タイ国との交流は現代教育の主流となる探求活動の礎になっていると確信している。

私たちは時代に即し変わらなければならない物事に急速に取り囲まれている。それは必要なことだと思う。しかしながら変わらないこと、変えてはいけないこともしっかり整理していくことも必要である。タイとの交流は30年以上の時間が過ぎても常に新鮮で変わらない取り組みではないだろうか。

生徒、保護者から求められるグローバルな時代に対応できる国際理解教育に、タイ国との交流は理想的な異文化体験を提供する場として今後も充実発展していくことだろう。(伊勢 誠)

テパラット先生からいただいた、明星学園創立100周年へのメッセージを紹介する。

Good will message from Hua-Hin Vitthayalai School

Warmest congratulations and fraternal greetings on the occasion of the Centenary Celebration of the founding of Myojo Gakuen School.

At this special event we join all of you in giving thanks to all those who have contributed to the animating success of Myojo Gakuen School throughout the 100 - year historical journey.

Hua-Hin Vitthayalai School teachers, students and staff are very grateful and proud of being part of your 100 - year history. The teachers and students' exchange program between Myojo Gakuen and Hua-Hin Vitthayalai Schools has firmly strengthened our bond of unity and friendship beyond so many years.

Congratulations on your success. You're an inspiration!

Fr. Dheparat Pitisan, sdb.
school rector

2) インターナショナル・ウィーク

2002年より始まったインターナショナル・ウィーク&デイは、20年以上続いている高校の行事である。毎年秋の1週間をウィークとし、そのうち1日をデイとして特別授業や留学生との交流会を行っている。

コロナ禍前までは、オーストラリアからの長期留学生に加え、この時期に合わせて姉妹校のタイ・ホアヒンにあるウィッタヤライ学園からは毎年、ドイツ・ベルリンのメンデルスゾーン・

オーバーシュール高等学校からは隔年で短期留学生を迎えていた。インターナショナル・ウィーク中のインターナショナル・デイでは、明星学園高校への長期留学生や短期留学生に加え、三鷹市近隣の留学生を迎え、国際交流・国際理解の日として盛大なイベントが行われていた。国際部が毎年興味深い企画を考えていくのだが、大枠では第一部でオーストラリア・ドイツ・タイ・韓国・中国などの留学生が、プレゼンテーションや舞踏などで、それぞれ母国の文化を紹介し交流し合う。第二部では明星学園高校の各クラスに数名ずつ留学生に入ってもらい、テーマごとにディスカッションし交流していった。

印象深いものを紹介すると、第一部で「世界の学校」というテーマでパネルディスカッションを行った年があった。ドイツ・タイ・中国・イギリス・韓国など体育館の舞台に数名の留学生が登場し、自国の学校のしくみを紹介した。各国の始業時間と終業時間を比較するだけでも、会場がどよめくくらいそれぞれに違いがある。共通しているのは、日本のようにクラブ活動がほとんどの国で行われていないこと。下校時間が早いのだが、その後の時間を何に使うかが、国によって違って面白かった。

例えば、ドイツでは学校は午前中だけで午後はフリーになるので、自分の好きなこと、例えばサッカーなどのスポーツや芸術などを学校以外の社会施設で学ぶ。韓国や中国では、全ての生徒ではないが、受験が激化していて、朝7時ぐらいに登校し、夜10時ぐらいまで学校で勉強する人もいと紹介されて、明星生はびっくりしていた。「日本の授業に参加してみて、何か特に印象に残ったことはありますか」の質問に対して、各国共通の反応があったのは面白かった。それは「授業中に眠っている人がいてビックリした。」というものだった。諸外国では「授業中に眠る」という行為は最もやってはいけない、やった場合厳しい処罰がある事柄のようだった。ドイツでは自分の胸まである高い机が教室のすみに置いてあって、眠りに落ちそうな生徒が出ると、その机に移されるという話にみんな驚いていた。「授業は大切にしないといけない」ということの表れだろう。

コロナ禍前までは、このような形でインターナショナル・ウィーク、インターナショナル・デイを行ってきた。

2020年からのコロナ禍で、海外からの留学生はゼロとなった。明星から留学に出発する生徒もない状態だ。このような状況で、どのようにインターナショナル・ウィークを行うか国際部で話し合われた。「生徒たちが主体的に関われるイベント」を目標に生徒のなかからボランティアを募り、生徒自らが異文化体験プランを考え、ワークショップ等の企画運営も生徒が行うという形になった。ボランティアには毎年約30名の応募があり、そのなかでチームを組んでそれぞれに興味深い企画を考えてくれる。2023年は、「世界のスポーツを体験しよう」、「つまみ細工の体験」、「マクラメ編み」などさまざまであった。(資料添付)

高校学生食堂とのタイアップ企画もある。ヨーロッパ、アジア、アメリカ、アフリカの地域に分け、「食べてみたい地域」に投票してもらう。投票が多かった地域の料理が、インターナショナル・ウィークの食堂メニューに日替わりで登場する。今年すぐに完売となったのは、ローストビーフ丼である。マンゴープリンやティラミス等のデザートメニューも好評であった。

2023年のインターナショナル・デイ（ウィークの最終日）は、午前中



を1部、2部、3部と分けて企画が行われた。1部では明星学園から長期留学に出ている生徒（アメリカ、コスタリカ、イギリス、フランス）とオンラインでつながり、現在の近況、困った事、みんなに伝えたい事などを語ってもらった。またドイツの姉妹校より来ている2名の留学生には、ドイツについて紹介してもらった。二人とも数カ月で日本語がとても上達していることに驚かされた。これから留学に行こうとしている生徒、そうでない生徒にも刺激となる時間になっただろう。2部は異文化観賞教室とし、新たな日本芸能の可能性に挑むNEO阿波踊り集団「寶船」にお越しいただき、講演とパフォーマンスの披露をしていただいた。寶船さんは5人中4人が明星学園の卒業生である。和太鼓部とコラボでの演技もあり、実際に見るパフォーマンスは圧巻であった。2022年度は雅楽師である東儀秀樹さんをお迎えした（2023年現在は明星学園の保護者でもある）。東儀家は、奈良時代から今日まで1,300年間雅楽を世襲してきた楽家である。雅楽の音色、ジャンルを超えたアレンジ、楽しいトークで会場は盛り上がった。2023年の話に戻ると、3部では世界クイズ大会を行った。教員に教科と世界の文化や歴史に関連したクイズを作ってもらった。クラス対抗となっていて、優勝したクラスにはお菓子がプレゼントされる。問題「オペラと同時期に生まれた日本の伝統芸能は何でしょう」（皆さんわかりますか？ けっこう難しい）。景品がかかっているとあって、クラスで大盛り上がり！

来年こそはたくさんの留学生が来校し、実際の交流ができることを期待すると共に、“世界を知り自分を再発見できる”をテーマに、今後も生徒とつくるインターナショナル・ウィークにしていきたい。（斎藤 千花）

		毎日開催のイベント	開催日限定イベント
インターナショナルウィーク スケジュール			
	10/24 (火) 昼	Dialogue for Unity ― 毎年好評のイベント。英語科教員と社会科教員がタッグを組んで、「英語での習字対決」を今年も行います。「解のない問題」を一緒に考えてみませんか？ 時間：12:55～13:25 会場：12-5	
	10/24 (火) 放	SNS 講座 ― 自分のことをどう切り取ったら世界にアピールできるでしょうか？一緒に動画を制作しよう！ Youtuberが直撃講座をしてくれます！自分のことをもっと知りたい人、自分の活動の紹介ムービーを作れるようになりたい人。お越しください！ 時間：15:45～17:20 (予定) 会場：12-5 ※事前申込制 (大石まで)	
	10/25 (水) 昼	オーストラリアの姉妹校と交流しましょう！ ― 明星学園と長年の姉妹校関係にある Trinity College とオンライン交流会を開きます。英語や日本語で話そう！ 時間：12:50～13:20 会場：12-5	
	10/25 (水) 放	200年以上の歴史を持つ「つまみ細工」を作ってみよう！ ― プローチ・ヘアピンが作れます。 時間：15:40～ (15分～30分程度で作れます) 会場：食堂	
	10/26 (木) 昼	皆さんがあまり見たことも聞いたこともないかもしれない曲を聴いて、みんな曲・みんな曲を演奏します。 時間：12:50～13:20 場所：大音楽室で待っています！	
	10/26 (木) 放	マクラメ編み ― アラブが起源とされる糸を使った小物作りを体験できます。 時間：15:50～17:00 (予定) 場所：彼服館(旧館3階)	
	10/27 (金) 昼	世界のスポーツを体験しよう(第1回) ― 「ボッチャ」 イタリア発祥のボーリングに似ている誰でも気軽参加が出来るスポーツです。参加するのが楽。上達するのが楽しい！ 時間：13:00～13:25 場所：小ホール	
	10/27 (金) 放	小学生と交流しよう ― 明星学園の小学6年生がやってくる！楽しくゲームで遊ぼう！子供と遊ぶのが大好きな人。募集です！ 時間：15:40～16:45 会場：12-5	
	10/28 (土) 放	死者の日 ― メキシコ版「お墓」！ クスカルメイク体験で異文化に触れてみよう！ 時間：13:30～15:30 (予定) 場所：第2ゼミ室	
	10/30 (月)	INTERNATIONAL DAY ― この日はメインイベントの日。インターナショナルボーイ！特別イベントの日が白押しです。今年は日本唯一の阿波踊りチーム「寶船」によるスペシャルステージも。(この日は平日の行事です)	
	10/30 (月) 放	世界のスポーツを体験しよう(第2回) ― 「キンボール」 カナダ発祥の大王戦役を楽しまよう！運動が好きな人でも苦手な人でも気軽に参加できます。 時間：12:50～13:50 場所：旧体育館	
	毎日開催	世界の料理 ― 食堂とタッグを組んで行います。生徒たちの投票によって人気のあった地域の料理が毎日替わりで世界の料理とデザートが食堂に登場します。気になるメニューは食堂でチェック！	
	毎日開催	インターナショナルウィーク 2023 公式テーマソング ― Norichika Togi(11年)が公式テーマソングを作成！ 見休みに放送されます。	
	毎日開催	いろんな国の POPS を聴いてみよう！ ― ドイツ、韓国、英語、フランスの POPS を日替わりで聴きます。お気に入りの曲を見つけてください！ 時間：12:50～13:20 (24日～27日開催) 場所：食堂	

3 未来を生き抜く力

(1) 今こそ必要とされる「明星教育」

この10年、明星学園においても学校環境は大きく変わった。どの教室にも電子黒板が設置され、Wi-Fiが使える環境が整った。生徒の1人1台端末（タブレット）が中学校では2023年度7年生より順次、高校では2024年度から実現する。また世の中に目を向ければ、児童生徒の多くは小さなころからスマホを持ち、ラインでつながり、音楽を聴き、動画を見ている。知りたい情報は、検索ですぐに手に入れることができる時代になった。さらに chatGPT に代表される生成系 AI（AI = artificial intelligence = 人工知能）の登場である。その良し悪しではない。時代は確実に変わっていく。世界はさらにその先を行っている。後戻りをするのではないだろう。2020年に発生した新型コロナによるパンデミックはその流れを完全に後押しした。

では、そのような時代にあって学校教育はどのように変わっていくのだろうか。知識の多さ、情報処理の速さを競うことの意味は格段に小さくなった。かつて経験したことのない非常事態にあって専門分野に閉じこもったままの、いわゆる専門家といわれる人の地位が失墜した。そこで求められたのは、問題点を見つけ出す力であり、さまざまな異なる専門家の意見を聴きながらある方向性を共同的に探っていく力であり、行動しながら軌道修正していく力だった。さらに、多数派の中に埋没せず違和感を感じとったり、常になぜと問うことのできる感性と知力だったように思う。

では、学校教育はそのような時代にあってどうあるべきか。コンピューター情報社会の中で、機械に支配されることなく、AIをツールとして使いこなし、自律的な人間として成長していくためには何が必要か。その根本には、土に触れ、山や海に遊び、手を動かし、美しいものに触れ、五感をいっぱいに使って感じ取り、時には気の合わない仲間ともぶつかり、常に「なぜ？」と自分の頭で考え、仲間とつながり、よりよい世界を作ろうと懸命に努力する小中学校時代が必要なのではないか。そして、その学びを自由で多様な選択肢のある高等学校で花開かせる。これこそが明星学園がこれまで大切にしてきた教育だったように思う。児童生徒の好奇心を刺激し、探究を軸とした学びはこれからの時代にさらに大きな意味を持ってくるであろう。

創立100年を機に、今一度「明星の教育」が目指してきたものをここで確認しておきたい。

1) 小学校における「総合」の授業（1～3年）と「教科内総合」

1～3年には各学年「総合」の授業が配置されている。それは、「自然のたより・みつけた」を中心とする日常活動に始まり、①「物をさぐる」（鉄さがし・空気さがし・金属さがし）②「体をさぐる」③（玉川上水の散策を含む）「生きものをさぐる」④（教室前の畑を利用した）「飼育・栽培」⑤「ものづくり」（こま・紙でっぼう・ゴムで動くおもちゃ・紙とんぼ・ナイフ作りなど）⑥「空間をさぐる」（地図作り）といった分野が用意されている。また、⑦「人と人とのつながり」では、子どもたちの社会認識を育てるために、1年では「家の仕事」（家庭）、2年では「学校で働く人」（学校）、さらに3年では「地域で働く人」というように発達段階を考慮しながら「労働」を通して人と人とのつながりを学んでいく。

これら総合の授業では、目の前に繰り広げられている自然の事象や社会を認識していくための「気づき」を経験し、「視点（なぜ）」を手に入れることになる。さらに、そこで獲得した「気づき」

や「視点（なぜ）」を駆使してものごとに働きかける力を養っていくのである。

低学年で培われたこの力はやがては高学年に受け継がれ、さまざまな教科の中で問題解決の必要な力となっていく。もちろん、この学びの方法は主体的に思考するための基盤であり、中学や高校における学びにも重要な役割を果たしている。

また、小学校では知識が単なる知識としてすり抜けていくことのないよう、教科の授業の中でも体験や対話、綴ること、表現することを通して「総合化」（授業内総合）されるよう工夫してきた。たとえば社会科では、縄文時代について学ぶために、加曾利貝塚の遺跡や出土物を見学することから始まり、火おこしの体験、自ら貝塚の粘土を持ち帰って土器を制作する。縄文時代と同じように縄で模様をつけたりして作られた土器は1か月以上自然乾燥させ、野焼きを行うまでが単元となっている。

先人の行ってきた製作過程を追体験することが大きな目的ではあるが、実際に手を動かしてみると仕上がりに差が出ることも多々ある。縄文時代においても全ての人が上手に土器を作り上げられるわけではなく、得手不得手があり、その結果として「専業」や「分業」といった仕事の形態が発生したのではないか。さらにそこに「流通」という仕組みも加わり、学習はさらに広がっていく。体験を通すことで、そういったことも腑に落ちるのである。

他にも鉄づくりや、壁新聞の制作、また、音楽会や文学という芸術を深く理解し、創造力を養うための朗読発表会や学習発表会、国語科における「綴ること」の「教科内総合」として「12歳の主張～卒業論文」が現在位置づけられている。

2) 教科の授業の中での探究

おもに小中学校においては科学的（検証可能）という視点をもって授業づくりが行われてきた。児童生徒は、提示された課題（発問）に対して自分なりの考え（仮説・読み）を立てる。意見交流する中で、自分とは異なる考えに出会い、自分の仮説は揺さぶられることになる。互いに根拠を述べあい、討論や質疑応答を行うと、さらにさまざまな角度から自らの仮説が試されていく。そのようなプロセスを通して、自分の考えを客観視し、よりしっかりと自分の考えへと深めていく。この視点は理科や数学、社会といった座学教科に限らない。体育の授業においても実践されている。教師から投げかけられる課題を常に自分事として考え、他者との意見の相違から「なぜ？」と問い直す姿勢を身につける。

児童生徒個々の意見を大切にすることというのは、失敗、間違いを認めるということでもある。そこで出された児童生徒の意見を比較検討し、対話する中で深い部分での内容を理解させたいのである。そのプロセスこそに意味がある。間違えることが怖い授業場では、探究的な活動などできるはずはない。一つの間違いの中に、探究の種が隠されているのである。したがってどんな意見であったとしても一旦は受け止めてもらうことのできる授業場が必要である。小学校段階から、教師は子どもたちのつぶやきに耳を傾け拾い上げる。子どもたちも安心して自分の意見を言うことができる。明星学園ではそこを大切にしてきた。このような日常の授業の中の活動こそが学校教育において最も基本的で本質的な「探究」とであるといえる。

3) 芸術教育における探究

本校では創立以来、「芸術教育」の可能性についても精力的に研究してきた。そこには主要三教科、主要五教科といった考え方は存在しない。美術にも木工・工芸の授業にも、あるいは音楽・体育の授業にも教科としての「文化の継承」や「哲学」が存在する。素材に触れる、ものをつくる、ものを見る、身体活動を通して何をを目指すかが語られる。小中学校においてそれは、美大や音大を目指す児童生徒に向けた教育ではない。すべての児童生徒にとって必要なことである。高校では選択授業になるが、小中学校での学びを土台に専門的な授業が用意され、自らの進路を見つけていく。「芸術」は、個性を大切にし、自己表現を可能にする一つの手段として、明星教育の大きな柱の一本になっている。

ここでは、中学校独自の授業である「木工」について紹介したい。9年の授業では、グループで家具（椅子）を制作する。まずはデッサンで作りたい椅子のイメージを描き、そのコンセプトを互いにプレゼン、二つの案（1クラスを半分にした授業）に絞っていく。デザイン案決定後はグループのロゴづくり、役割分担、具体的な目標などを決めていく。数学が得意で細かな計算をしながら図面を引いていく生徒、空間感覚に優れていてみんながイメージしやすい模型を厚紙で作ってくれる生徒、重い木材を軽々運んでくれる力持ち、地道にやすりをかけることに力を発揮する生徒、グループ内の小さなトラブルをうまく調整し、ムードメーカーになってくれる生徒。時間を経るに従い、それぞれの個性が活かされていく。同じ学習内容に全員で向き合う座学の授業における探究とは違う探究のプロセスがここにある。一つの家具を制作するという目標に向かってそれぞれの資質を生かすという協同の作業である。

時間はゆったりと流れる。相手は天然の木材である。硬い節があったり、反りがあったりする。当初の図面通りにはいかない。逆にそれを面白いデザインに変えていく。「この世の中、さじ加減が大事じゃない？」そのグループは、背もたれをスプーン型にデザインしていた。世の中のこと、将来への不安が雑談で出てくる。「将来はまだ見えていないけど、せめて上を向いて生きていきたいよな！」背もたれの角度が、そんな会話から決定した。

あるグループは、背もたれにペンギンを彫っていた。「お母さんペンギンだよな！」それぞれの母親と自分との親子関係について自然と言葉が交わされたようだ。「お母さんって重くない？ 子どものために頑張ってくれているのは分かるんだけど、たまにきついよな！」

彼らは密かに椅子の脚の部分に押しつぶされそうになっている子どもペンギンを彫った。「でも、この子どもペンギンがいつか自立できるように羽をつけておこうよ！」

こんな一見雑談ともいえる会話が作業の中で交わされているのだ。これもまた一つの探究的な活動である。このような個性を生かした協同的でアートの探究を通し、柔軟で柔らかな感性が育てられている。

明星学園においては、この第一の探究と第二の探究とが創立以来バランスよく実践されてきた。もちろん、テスト学力による評価が全盛だった時代には、芸術を主張するくらいなら勉強をさせろという外からの声もあった。しかし、明星学園はそこでぶれることはなかった。一人ひとりの児童生徒の成長にとって、何が大切であるかを常に中心に考えてきたためだろう。今になって、STEAM教育の大切さが叫ばれる時代になったが、明星学園では創立以来、それを実践してきた。単なる流行ではない本質的な授業づくりの歴史がここにあるように思う。

4) 中学校における「総合探究」

中学校では2018年度、「総合探究科」4科目（哲学対話・図書館と情報・探究実践・卒業研究）の実践がスタートした。中学生全員が履修する。時代は教科を超えた、あるいは教科を横断するような、また、正解のない課題に対しアプローチし、他者とつながりながら探究することのできる力を求めるようになっていた。もちろん、過去の経験やそこから得られた知識の大切さは変わらない。しかし、それだけでは通用しない時代になってきていた。それが「総合探究科」設立の理由である。

しかし、教員の間ではさまざまな議論があったことも確かである。「探究的な活動は、すでに教科の授業で行っている。」「時代の流行のようなものに乗ってしまうと、本来明星学園が大切にしてきたものが埋没してしまう。」「授業とは知の体系を児童生徒に伝えることであり、そこにこそ教育内容がある。理解してほしい内容がなく、ただ経験させるだけ、方法を教えるだけの内容では授業とは言えない。」

もっともな意見ではある。しかし、教科の授業を超えて、教科の授業を生かして自分の置かれている社会について、環境について、将来について、自分自身について深く向き合ってほしいという思いがあった。それは形だけの薄っぺらな「探究」ではない。検定教科書を使って、国語科や社会科がトピックのように扱うものでもない。そのような世間の「探究」とは違う、明星学園の「探究」とは何かを考える必要があった。それを単教科が担うわけにはいかない。「総合探究科」の新設は、明星の教科教育（第一の探究・第二の探究）を守るためでもあった。つまり、「総合探究科」は明星学園の教科教育という土台があって初めて成立するものなのである。そこそこが他校とは違う明星学園の「探究」の独自性だといえる。

そのような趣旨に沿って2018年6月、「明星学園をささえる会」主催の第1回「トーク&スタディ」で中学校副校長の堀内が「なぜ現在【総合探究科】か？ 明星の教育に光を当てる」と題し、講演を行った。また、2022年6月、早稲田大学国語教育学会第292回大会シンポジウム「探究教育における国語教育」のパネリストとして「学校教育における探究とは何か？」を発表、『早稲田大学国語教育研究第43集』（2023.3.30）で報告を行った。

自ら問いを見つけ（哲学対話）、さらに研究テーマを決定する（卒業研究）ことは、自分自身と向き合うことでもある。与えられたミッションにグループでどのように応えていくか（探究実践）、他者との関係性が試される。自ら調べる方法と同時に、ICTリテラシーを学ぶ（図書館と情報）。大小さまざまな機会を利用しての発表（プレゼン）とレスポンス。それらは各教科の授業における探究的な活動にも大きく寄与していくに違いない。

5) 高等学校で花開く「個性尊重・自主自立・自由平等」の理念

小・中学校で養われてきた、“なぜ？”を出発点にした「自分の頭で考える力」「仲間を認め合い、つながり合う力」「自ら判断し選択し、行動していく力」は、高等学校での学びによって発展し、実を結び、花開いていく。

大正新教育運動の時代、多くの新学校が生まれては消えていった。その中で、成蹊・成城・玉川・和光など、現在まで生き残ってきた学校はどこも「大学がある」が、明星学園は大学を持たずに100年の長きにわたって続いてきた。「大学があれば」と考える向きもあろうが、明星学園は大学

がないからこそ、「個性尊重・自主自立・自由平等」という建学の理念を小学校・中学校・高等学校の12年間の教育によって伸ばして来られたと考えている。

高校生活の中では、「授業」や「教科外活動」を通して「自分の頭で考える力」「仲間を認め合い、つながり合う力」「自ら判断し選択し、行動していく力」を育む。悩みながらも自らの進路を考えていくなかで、これらの力はより一層強固なものとなり「個性尊重・自主自立・自由平等」の建学の理念を生徒一人ひとりが身につけていく。

授業では、10年生で学問や芸術・スポーツの基礎・基本を学んだあと、11年生・12年生では、進路に合わせたコースを選択し、授業を自ら選んでいくという特徴がある。特に、音楽・美術・生活といった実技教科は大学の講座を彷彿とさせるような、専門的な授業がラインアップされている。自分の進路を考え授業を選択していくとき、これほどの授業が用意されている学校はあまり例をみない。

また「総合的な探究の時間」は、明星学園高校の特色ある科目の一つである。毎年、いくつかの授業^(※1)が用意され、生徒は各自の興味関心に応じて授業を選択する。「学際性」^(※2)「能動性」という二つのキーワードをもとに、既存の教科教育とは異なる教科横断的な学習内容に取り組み、生徒一人ひとりが調査・議論・発表をしながら、積極的に活動できる場を創りだしている。

このように、高等学校の授業の特徴は10年生での必修をベースに、11年生・12年生では進路や興味関心によって「授業を選択できる幅が広がる」ところにある。

教科外活動においては「自分の頭で考え、仲間と創造していく」機会が目白押しだ。自治会が企画する春・秋・冬の「三大祭」と「二者協議会」は、まさに自分たちの学校を自分たちで創っていく主体的で共同的な活動である。

春の体育祭では、委員を中心に「どうすれば運動が得意な子だけでなく、苦手な子も含めて全員が楽しめるのか」を考え、生徒たちが企画をつくる。秋の明星祭ではテーマから企画の募集・運営管理までをすべて生徒たちが行い、まさに自治的活動の中心的存在となっている。冬の音楽祭では、これまで小・中・高と学んできた合唱のスキルを活かしながら、各クラスそれぞれの個性を自由に表現していく。「うけねらい」だけでは決して評価されない。しっかりとした合唱のスキルに裏付けされた上での自由な表現になっていないと、人々を感動させることはできないのである。

また、自治会と学校共催の二者協議会では、毎年学校の抱えている様々な課題に対して「生徒」と「教師」が同じ席に着き、協議する。より良い学校づくりに生徒側も参画している。これが将来「保護者」を含めた三者協議会、さらに「地域の方々」を巻き込んだ四者協議会まで発展していけたらどんなに素晴らしいかと期待がふくらむ。

小・中学校でも自分たちで考えた企画を実行する機会はあるが、高校ではそれがより大規模になり、それにともなって任される責任もより大きくなる。

〈※1〉 2023年度例「整体的文化論」「現代社会論考」「哲学」「映像表現」「折り紙と数学」「Survive!! (家庭総合)」「好きから始めるSDGs」「美術と社会」「古典文化論」「環境科学」「音楽を科学する」

〈※2〉 学際性……一つの目的や関心のもと、多くの隣接する学問領域を横断する形で研究する方向性

これは明星学園の考える自由の考え方をよく表している。これまで知らなかったことがわかるようになり、これまでできなかったことができるようになることで、私たちはより自由になれる。自由に判断し選択し決定していく幅は、小・中学校よりも高等学校では格段に広がる。高校生がつくる合唱は同じ合唱の範疇でも、小・中学生よりもより自由だ。明星祭は扱う規模も予算も小・中学校とは比較にならないほど大きく、自分たちで選択し判断する自由は大きい。しかし、同時に高校生は「自由の拡大が責任の拡大」とセットであることを知るのである。「ひとりよがり・自分勝手を乗り越え、どうすれば全体がより幸せになるか」。将来にわたるテーマと、高校時代に向き合うのである。

進路を選択し決定していく過程では、自分自身と向き合うことになる。

10年生では、1年後に11年生で文系・理系・実技系（音楽、美術、体育、家政）のコースを選ぶことを見据えて、「自分のやりたいこと、好きなこと」と向き合う。あくまで、偏差値という基準だけで大学を絞り込むようなことはしない。「自分は何がやりたいのか？ 自分は何が好きなのか？」という最もシンプルなことから出発する。

10年生ではまだまだ特定の大学名は上げられないことが多い。自分のやりたいこと、好きなことから学部や学科を考え、11年生でのコース選択につなげていく。

一方で「進路講座」という取り組みが2019年から始まった。単に学力をつける講座としてではなく、生徒が新たな世界と出会い、「自分がやりたい、勉強してみたい」ことを見つけるための活動として始まったのである。教員がたくさんの講座を用意して、生徒が主体的にそれを選ぶというものである。▶詳しくは本誌P.410参照

11年生になると「自分のやりたいこと、好きなこと」から出発した学部・学科選び、進路のコース選びは、より具体的な大学・専門学校等へと絞られていく。

10年生の夏休みには「いくつかの大学のオープンキャンパスに行くように」という指導があり、11年生の夏休みにはオープンキャンパスへの参加が全員必須の課題となる。進路選びは、11年の後半にはより具体的な学校の選択へと移行していく。

こうして小・中・高の12年間、高校生活の3年間で「個性尊重・自主自立・自由平等」の理念を身につけた子どもたちは、明星学園という学校の枠を超え、社会へと飛び出して行く。100年前の開校式で赤井先生が「明星学園の建学の理念は社会の理想でもある。言ってみれば明星学園は社会立の学校なのです」と話されたように、明星学園で培った「個性尊重・自主自立・自由平等」の理念を身につけた卒業生が、社会で活躍することを期待している。

6) 開かれた学校へ

SNSの発達、瞬時に世界の裏側とつながることを可能にした。それは同時にフェイクをどう見抜くかということでもある。そのためには自分と同質のグループの中に安住してはいけいない。多様な価値観と出会う必要がある。異文化と出会い、自らの内なる多様性に気づき、複数の視点を持てるようにならないといけない。学ぶ場は閉じられた教室の中だけではない。

現在、小中高を通し、短期留学を含む国際交流が盛んにおこなわれるようになっている。狭い世界の中で生きている子どもたちにとって新しい世界を知ることは、自らの自由を獲得することに

もつながる。未知の世界で過ごすことのできた経験は、新たなことにチャレンジしようとする勇気へとつながる。高等学校における「インターナショナル・ウィーク」は重要な行事として位置づけ、今後ますます充実したものになっていくことだろう。

小・中学校では、体験を含む行事が日帰り、宿泊を伴うものを含め数多く用意されている。小学校では総合の授業の中で子どもたちの社会認識を育てるために、「仕事」や「労働」といったものを教科の内容に位置づける。それは単に「栽培」や「生産」という手順だけではなく、農業に従事する「人」に出会わせたいという思いからでもある。また、中学校8・9年と2年続けて体験する「民家泊」では、まさに親や教員のいない中で初めて出会う人たちと2泊3日を過ごす。「総合探究」では、研究・調査・インタビューを含むフィールドワークのために街へ出かけ、「社会」や「大人」と出会う。特別授業「この人に会いたい」でも心を揺さぶられ、自分の将来を考えるきっかけにもなるだろう。小・中学校時代にそのような経験をシャワーのように浴びておくことが、高校でのギアを変えた成長へと繋がっていく。

7) 高大連携

現在、高等学校において「探究」のカリキュラムが検討されている。アウトプットを含む探究活動が始まるとき、大学の施設や研究者とのつながりが不可欠となってくる。そのような活動は生徒にとって自らの進路を考える際の大きな道しるべとなり、その大学の本当の姿を知る絶好の機会ともなる。また、そのような探究活動の実績が大学入試において大きな意味を持つようになってきている。生徒を評価する基準が単なるテストの点数ではなく、基礎学力がしっかり身についたうえでの探究する力を見ようとする動きへと大きく変わってきている。それこそが明星教育が得意とするところである。これまで「見えない学力」としか名づけられなかった力が、「非認知能力」・「社会情動的スキル」という名でこれからの時代に必要とされる力として大きく取り上げられるようになってきた。このような観点からも改めて「明星教育」をとらえなおす必要があるだろう。

2023年1月30日、明星学園は成城大学との間で初めての高大連携協定を締結した。今後、さらに協定大学を増やしていく予定でいる。初年度は、まず冬期講習の一部として成城大学の先生による特別講座が開催された。大学がどんなことを学ぶ場なのか、学問の入口を案内してもらいたい。高大連携の第一歩としての取組みである。このような取り組みの延長線上に高等学校の将来構想が語られるだろう。高等学校の将来構想とは、とりもなおさず明星学園小中高12年間一貫の将来構想である。創立100周年を機にそのことを確認し、次の時代への一步を期待したい。

(照井 伸也・平野 康弘・堀内 雅人・河住 貴夫)

(2) ICT に向けた取り組み

1) 小学校

ここでは小学校のICT教育に関して簡単に現状をまとめる。

最初にICT教育とは何かということだが、世の中で言われているICT教育とはPCやタブレット端末、インターネットなどの情報通信技術を活用した教育手法のことである。ICT教育の「ICT」は、Information and Communication Technologyの頭文字をとった言葉で、日本語の意味は「情報通信技術」。一時期は同義語としてIT (Information Technology) を使っていたが、現在の教育の世界ではICTが使われることがほとんどである。

文部科学省は「もはや学校のICT環境は、その導入が学習に効果的であるかどうかを議論する段階ではなく、鉛筆やノート等の文房具と同様に教育現場において不可欠なものとなっていることを強く認識する必要がある」と述べていて、実際にコロナ禍以降に公立校に無償でタブレットを配付するなど、急速にその環境を整えつつある。

では本校のICT教育はどうなっているだろうか。文科省の言う「文房具と同様に」という点で言えば、小学校段階で1人1台個人所有の端末を持ち、授業で使用する場面は、この原稿を書いている2022年（令和4）段階ではまだない。

この時点までに学校が整えた環境として、まずは教室にPCやタブレットを繋ぐことのできるプロジェクターとスクリーンを順次配置してきた。初期的には授業で必要なDVDの映像を観せる場面に使用してきたが、教員によってはPC内の画像やデータを拡大して見せたり、YouTubeなどの動画を観せたりすることにも使用してきた。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行が始まった2020年（令和2）の4月から6月途中までは学校が休校になったため、その間の学びを止めないために、さまざまな形でICTの活用を模索した時期でもある。教員はそれぞれ動画や課題プリントの配信や、Zoomによるホームルームなど、それぞれの可能な範囲で子どもたちと繋がり、学びを進めていった。この段階でPCなりタブレットなりの端末を使用することが前提となってきたので、一度学校でもそれらの端末やインターネット環境が各家庭にあるかどうかのアンケートを取ったが、どの家庭も環境は整っていて、整っていない数家庭に関しては学校の端末を貸与するなどして対応した。

その後、ICTの将来的な活用を念頭に置き、小学校の普通教室といくつかの特別教室に関して、有線・無線LANの環境を整え今に至っている。このLANの設置に関しては、将来的に教室内で36台のタブレットなりPCなりをインターネットにつなげることができるよう、アクセスポイントに関してもそれに耐えうる機器を選んでいる。

また2021年（令和3）度に入ると、小学校英語科が独自にiPadを18台導入し、授業で使用することを模索し始めた。これは2020年（令和2）度にCOVID-19によって行くことのできなかったオーストラリアのWoodend校と明星をZoomで繋ぎ交流を図ったのだが、教員のPCによってクラス全体は繋がるものの、目的としていた各自のコミュニケーションという点では十分とは言えなかったこともきっかけの一つとなっている。この導入によって明星の児童（2人1組）とWoodend校の児童がお互いに直接自己紹介をしたり、クイズを出し合ったりする活動が始まる。その後、英語科は2人に1台のiPadではまだ活動が不十分であると考え、2022年（令和4）度の途中からさらに18台を購入し、1人に1台のiPadで授業ができるように拡張している。

教員側はまずはICT機器で何ができるのかをいろいろと試してもらう意味で、2021年度（令和3）中に学年に1台ずつiPadを貸与し、いろいろな場面で使用してもらっている。今後教員にとって、文科省の言う「文房具と同様に」という道具になっていくのか、模索中である。また児童が個人持ちの端末を持ち、授業の中で活用していくような場面を含めたカリキュラムに変更していくかどうかについても、2022年（令和4）度はまだ検討されていない段階である。

もちろんこれらの機器を使うことは、児童によっては「合理的配慮」になる可能性も含まれている。また作図などの場面でより正確な描写ができることもあるだろう。「ICT機器ありき」として使用していくのではなく、今までできなかったことが可能になるとか、より良いものを創り上げることができるといった必要性から具体的な使用を考える時期に来ているのであろう。

その際、もう一つ話題に上がるのが、プログラミング教育としての使用である。2022年（令和4）度から必修化されたプログラミング教育のポイントは三つある。一つ目は複雑なプログラミング言語の習得が目的ではないこと。二つ目は独立した教科として扱うのではなく、算数や理科、総合的な学習の時間などの中で学習することになっていること。三つ目はPCを使用せずに学ぶ場合があること。つまりPCの使用が前提ではなく、「物事を順序立てして、結論を出すプログラミング的思考（論理的な思考）を培うこと」が、主な目的であり、「PCの可能性を理解し」、「いろいろな見方・考え方」ができるようにするとされている。これは必ずしもPCを操作しなくてはならないわけではなく、上記のような思考を育むことが重要であると考ええる。そう考えた時、改めてプログラミング教育を導入するのではなく、今まで実践してきた授業の中で上記のポイントを意識すればよいし、実際の授業ではそれがずっと大切にされてきている。またPCやタブレットに関しては、家庭での所持率も高く、操作にも慣れている。現状では操作自体を授業の中で教えてはならず、英語科がiPadを使用する際も、それほどそこには時間がかからなかったようである。

いずれにしても、社会のニーズという点でICT教育を推進するのではなく、あくまでも明星学園小学校らしい必要性和導入を模索して行く必要がある。（照井 伸也）

2) 中学校

2020年3月、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による一斉休校が要請され、賑やかだった学校は突如として静寂に包まれた。突然絶たれた生徒とのつながりをどう取り戻すのか、教員たちは悩み、そして考え続けた。「離れていても生徒とつながりたい」と願う教員の思いは、明星学園中学校のその後のICT教育を支える小さなきっかけであり、かつ、大きな力となったのである。

①体制とICT導入に向けて

2020年度、コンピューター委員会は四人のメンバーでスタートした。任命当初の主な仕事内容は、教員用のリースPC管理、生徒用Win PCの管理であった。しかし、COVID-19感染拡大による一斉休校により、状況は大きく一転し、臨時休校時の対応策の検討を担うこととなった。そこで、委員会メンバーは、6月より生徒一人ひとりにGoogleアカウントを付与し、Googleアプリを活用した双方向でのコミュニケーションを実施できるよう準備を進めた。

2021年度は、コンピューター委員会の名称を改め「ICT委員会」として活動した。さらに、全

園ICT委員会の組織体制に変更が加わり、“学園として” ICT機器の導入やインターネット環境の整備に注力していくとの意向が示された。

2022年度は、小中高のICT機器やインターネット環境を管理する「情報センター」が設置され、生徒1人1台端末導入に向けた準備も加速することとなった。2023年現在、情報センターと中学校ICT委員会が連携しながら、中学校におけるICT教育の土台を支えている。

② 2020年～2023年におけるICT機器と環境整備

時 期	内 容
2020年 7月	職員室・視聴覚室のみスペック高めのルーターを完備
2021年 3月	視聴覚室に生徒用 Chromebook 設置、総合探究科のプリンターと接続完了
10月	ポケット Wi-Fi 6 台レンタル開始（中学校校舎 Wi-Fi 設置までのつなぎとして）
11月	iPad 6 台、三脚 6 台購入（臨時休校に備え各学年に 2 台ずつ揃える）
2022年 8月	中学校校舎 Wi-Fi およびネットワーク工事完了
2023年 2月	中学校校舎プロジェクター無線化
3月	体育館にルーター設置、モニター購入
4月	視聴覚室にレーザープリンター完備
5月	新校舎・管理棟 Wi-Fi 設置工事完了
8月	iPad 保管庫設置の環境完備（コンセントの設置）
11月	視聴覚室に Apple TV 設置（Mac の無線化）

③ 生徒1人1台端末導入

2020年12月に生徒1人1台端末導入に向けて検討が開始された。さらに、2021年4月には、全国ICT委員会より「2022年度から中学校が高等学校に先行して生徒1人1台端末の体制を敷く」という指針が示された。しかし、中学校ICT委員会は、十分な準備期間を確保したいという考えのもと、全国ICT委員会に向け「2023年度からの導入」を希望し、最終的にその方向で進むこととなった。

同年7月には、生徒が所持する端末の通信規格についての議論がなされ、生徒が所持する端末はLTEでなく校内のWi-Fiを使用することが決定した。そのため2022～2023年にかけては、中学校校舎、新校舎、管理棟のネットワーク工事が急ピッチで実施された。また、生徒が所持する端末については、小中高ICT委員メンバーを含む全国ICT委員会において、2022年度5月の段階で「iPad」の方向で進んでいた。ただし、グレード（機種）については、各部会の決定に委ねられたため、2022年11月の中学校部会にて賛否を取り、「iPad Air 64GB」に決定した。機器の管理体制やインターネット環境の整備、現場から挙げられる意見の交通整理等、さまざまな困難を乗り越え、2023年度入学生より生徒1人1台の端末導入が実現した。

④ ICTを活用した教育活動

2020年のコロナ禍以前にも、デジタル機器を活用した教育活動は存在した。例えば、8年の職

場体験での感想文を Word 文書で作成する、9 年の卒業研究の発表を PowerPoint で行うなどが挙げられる。視聴覚室には Win PC が設置され、特別活動や放課後の時間を利用して生徒が作業できる環境を整えていた。また授業では、教員が PC やタブレットを持ち、教室のプロジェクターで学習内容や生徒の意見を投影し、やり取りを重ねる光景はすでに日常のものとなっていた。

そうした中でも、2020 年以降のデジタル機器の活用方法は大きく変化したといえる。その変化とは、資料作成、情報発信のツールとして活用していたこれまでの役割を超えて、生徒と教師、あるいは生徒同士のコミュニケーションツールとして、確実に活用範囲を広げた点である。その転換点は、Google アカウントを付与し、Google のアプリケーションを活用し始めた時期（2020 年 6 月）にあったと考えられる。教師が Google のアプリケーションを利用し、デジタルの課題を配信したり、掲示板にメッセージを投稿したりする。生徒は、課題の内容を直接入力して課題を提出したり、教師に質問を送ったりする。課題が発表スライドであれば、そのスライドを発表の場面で活かすことも可能であり、環境さえ整えばいつでもクラウド上のデータにアクセスし発表の準備ができるのだ。

このように、2020 年からの 3 年間は、コロナ禍以前に実践してきた、“道具として活用するデジタル機器の有用性”を生かしつつ、相互交流としての活用を定着させた期間でもあったといえる。

Google のアプリケーションの活用については、教師同士で教え合ったり、ICT 委員のメンバーが研修をしたりすることを通じて、少しずつ活用スキルを高めた。決して、エキスパートが存在したわけではない。分からないことは気軽に聞き、新しい発見があれば共有できる雰囲気が教師集団にあっただけである。

2023 年度からは 1 人 1 台の iPad 端末をもち、学習ツールとして MetaMoJi アプリを導入した。現在は、英語科、数学科、社会科、美術科、総合探究科が中心となり、MetaMoJi アプリや Google クラスルームを活用し、デジタル機器による相互交流の場を展開している。中学校の ICT 委員会は月毎に定例会を実施し、各学年における ICT 機器や実践について情報共有を行っている。縦と横のつながりを大事にしながら、更なる発展を目指しているところである。（新坂 彩子）

3) 高等学校

高等学校では、2012 年度に一部の教員の希望により 2 教室にプロジェクター型のタッチセンサー機能がある電子黒板が導入された。当時は、利用に対して理解も進まず一部の教員の利用にとどまり、利用方法も広がることもなかった。2015 年度に校長より 1 人 1 台の端末を生徒が利用し、教育活動をより充実したものにするを目標に ICT 教育について推進する方針が出され、2016 年度より副校長を中心に ICT 推進委員会を組織し、段階的に環境を整えることとなった。

生徒が端末を利用するには、大きく二つの環境をまずは整える必要がある。一つ目は、生徒、教員が互いに端末にある情報を共有するための投影機を必要な教室すべてに配置すること、もうひとつは、いわゆるインターネットへの接続環境を整えることだ。インターネットへの接続環境がなくても授業を進めることは可能だが、インターネットが利用できることにより、調べ学習など端末の利用範囲は数段大きく広がる。

まず、投影機については、プロジェクター型のものにするか、ディスプレイ型のものにするから検討を始め、盤面での操作を可能にするためタッチセンサー機能を必須と考えた。当時は、プロジェクター型が価格格的にも一般的だったが、表示画面が非常に鮮明で画角等の調整の必要がな

く、だれでも利用がしやすいディスプレイ 65 型を選択した。2016 年度より年度ごとに 1 学年分ずつの普通教室に電子黒板を設置し、2018 年度までに全普通教室に配置が完了した。その後、教室の広さや授業での利用方法を考慮しながら、プロジェクター型やモニター機能のみのディスプレイ機を混ぜながらゼミ室など多くの授業環境に導入を進めてきた。2022 年度より ICT 推進委員会は教務部、総務部の中に担当を置く形となり、ICT 情報センターと連携し、電子黒板のさらなる配置、障害対応を実施してきている。

インターネット環境については、2016 年当時、教員が利用する職員室、教科準備室に wi-fi 環境が整備されているにすぎず、授業での利用は不可能だった。しかしながら電子黒板の普及が進むにつれ、生徒にインターネットにある情報を共有できるなら授業で教員側だけでもインターネット環境を利用したいという声があがり、それに応えるために、まずは教員利用、その後、生徒・教員利用を可能とする 2 段階での整備を行うこととした。2018 年度より準備を進め、2019 年度末に新棟れいめいホールを含め、校内全教室で wi-fi によるインターネットの利用が可能となる環境を整えた。その後、2022 年度より生徒が端末を利用するために ICT 情報センターを中心に計画を進め、ラウンジや保健室など授業を行わない場も含め校内に wi-fi 環境を、アクセスポイントを 2 倍以上に増やし、より細部にわたり整えた。また、セキュリティ確保のため、教員用ネットワーク、生徒用ネットワーク、PC ルーム用ネットワークを分離し、それぞれに必要なセキュリティ等の設定を可能にした。また、ネットワーク内の機器についてもこれまで、教員の 200 台程度を想定した機器台数から、生徒を含めた 1,000 台以上に耐えうるものへと更新を行った。

生徒端末については、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）への対応のためのオンライン授業環境を整える過程の中で、Google Meet など会議用アプリを利用できる環境をご家庭にお願いしてきた。もちろんご家庭によりスマートフォンからパソコンまでさまざまな状況があり、学校の授業での利用には難しい状況ではあるが、オンライン授業についての環境は、ご家庭のご協力を得て整えることができた。しかしながら、オンライン授業を発信する側の環境が授業者それぞれで安定感を欠いていたため、オンライン授業用にパソコン 35 台を用意し、休校中でもほぼすべての授業が、同じ環境で 1 日 6 時間配信することを可能にした。これにより生徒は、授業ごとに設定や環境が変わることなく休校中も授業を受けられることになった。COVID-19 も新たなステージに入り、長期の休校の想定も必要なくなってきたり、あらたなオンライン授業の形も検討が必要になってきていると考えている。

生徒が授業で端末を所持する環境は、当初 2023 年度より開始することを目標に準備を進めてきた。2022 年度に 1 年の延期を決定し、2024 年度 10 年生より年次を追いながら、2026 年度に高等学校全生徒が授業で利用できるように準備を進めることとした。

端末については、生徒がすでに利用している端末を校内に持ち込む BYOD と呼ばれる形式から学校からの貸与、ご家庭で学校指定の端末を購入していく形までさまざまな形を検討してきた。すでに導入済みの学校の状況を見に行き、他校へも端末を納入している業者の方からも情報を集め検討を進めた。その結果、生徒の端末への対応力は非常に高く、どの端末にしても問題はない。設定や操作が複雑な端末は先生方が使いにくく普及しにくい。生徒それぞれが違う種類の端末を持つと教室内にいろいろな端末が混在し、障害が起きたとき、その場で授業者が解決しにくくなり、問題が複雑化する。どうしても必要な利用方法が提示できるならば別だが、利用実績などがない場合は、高額になることはできるだけ避ける。学校貸与の場合、破損等があると問題が解決しにくくな

り購入をお願いするのが現実的である、ということがわかってきた。

それをもとに2023年度11月現在、2024年度に向け入学時にApple社iPadを購入してもらうことに決定し準備を進めている。もちろん授業での利用に支障が出るような設定変更や使い方を防ぐために利用環境を学校側で管理できるようにしていくが、高校生ということもあり、できるだけ自由にさまざまな場面で利用できるような設定を検討していきたいと考えて準備を進めている。さらに授業で生徒、教員間のやり取りを円滑に進めるためにLoiLo社のロイロノートを導入し、GoogleClassroomと合わせて授業での利用環境を整えようと考えている。

電子黒板もそうだったが、使ったこともない中で何に使うかを延々議論するのではなく、まずは使ってみることが第一歩で、現状、電子黒板は校内で必要不可欠のものとなっている。これにならって、生徒端末も、まずは使って授業を行ってみるというところからICT機器を利用した授業が大きく普及、発展してくれることを願いつつ、導入してからの研修、環境整備の対応が重要と考えながら準備を進めている状況である。(石井 孝)

4 学校図書館・学園資料室の役割とその展望

(1) 学校図書館

1) 照井文庫に託されたこと

照井文庫は1964年(昭和39)4月に誕生した。照井猪一郎小・中学校校長が2月に逝去の後、夫人の照井げん(創立同人、小中学校音楽教諭)から、照井校長の蔵書すべてが学園に寄贈され、誕生した。その後もげん先生からは、図書を購入するための寄付が長い間続けられた。

照井文庫誕生を機に1965年6月、現在の場所(管理棟2階)に図書室が開設され、1968年、明星学園は専任司書として野口保子を採用した。

創立当初から各教室には、各学年の子どもたちに合うものを選び抜かれた本が「学級文庫」として置かれていた。その充実ぶりは、戦前に明星学園に講演にみえた石井桃子さん(児童文学者)が教室の本棚を見て感心された、という話が語り継がれていることからわかる。

野口は、「子どもたちに何が必要か」「どういう子どもに育てたいか」「常に最上のものを子どもたちに」という、創立以来明星の教師たちが大切にしてきた思いを引き継ぎ、図書室づくりを進めていった。▶▶詳しくは90年史P.378参照

2) ストーリーテリング

一方で、選び抜かれた作品を読み語るという実践も創立当初より続けられていた。野口はさらに、小学校の授業での「ストーリーテリング」導入を、他校に先駆けて実現させた。1985年頃のことである。「ストーリーテリング」とはストーリーテラーという専門家が物語やお話を覚えて語って聞かせることで、「素話」とか「語り」とも言われている。図書室の一角で子どもたちはストーリーテラーの語る話を聞く。絵はもちろん文字もない。ストーリーテラーが語る言葉だけだから、登場人物や情景や出来事のすべてを想像し、次の展開を予想しながら物語を純粋に楽しむ。

研究授業を通して多くの教員の理解を得ながら、この取り組みが国語の授業の中に位置づけられるようになった。現在でも1～4年生が毎月1時間ずつ、「ストーリーテリング」の時間を楽しんでいる。

3) 継承と発展

その後、図書室の運営は吉田美智子、富永綾、大作光子が継いでいく。時代は学校図書館に多くの役割を持たせつつあった。子どもたちに応じた選書をし、一人ひとりの児童生徒に届けるという役割と同時に、児童生徒自らが本と出会い、主体的に調べる力を身につけさせることが求められるようになっていった。

コンピューターの急速な発展は、子どもたち自身が検索サイトで容易に情報を手に入れることを可能にした。しかし、そのような時代だからこそ図書室の持つ豊かさ、書物との出会いの大切さを伝えなければならぬと司書教諭である大作は考えた。中学校での「総合探究科」の新設に際し、「図書館と情報」という科目を7年生で週1時間配置することを提案、図書室での授業を開始した。図書室が各教科とつながり、学校の中心ともいえる学習・情報センターの側面を担うことは、中学校新校舎建築構想の一つの柱ともなった。

2020年に着任した伊藤佐和子は、その思いを継承していくことになる。

4) 現在の図書室 伊藤 佐和子

本学園は、1年生から3年生が利用する1階図書室と4年生から9年生が利用する2階図書室の2部屋からなる小学校・中学校図書室と、高等学校図書室を擁している。

図書館はまず、子どもたちの創造力を培い、学習に対する興味・関心等と呼び起こし、豊かな心をはぐくむ、自由な読書活動や読書指導の場である。小学校では特にこの「読書センター」としての役割が重要になってくる。絵本から文学に移行していく時期に、本・お話を聞くことの楽しみを存分に味わい、その世界を楽しみ、豊かな感情と創造力を育むことができるよう支援が必要である。1～4年では、その実践として、国語の時間内に週1時間の「図書」の時間が設定され、読み聞かせやストーリーテリングの取り組みが行なわれている。中学生や高校生になると、共感したり感動したりできる本を選んで読むようになることから、読書の量だけでなくその質を高めることが大切である。今後、自立した読書家への移行のために、読書習慣の定着を図るとともに、各教科との連携や、日々の展示などを通じて読書意欲を喚起し、その後の人生での読書生活につなげていきたい。また、運営にあたってはあたたかで安心できる空間づくりが大切である。手入れの行き届いた書架や明るい室内、静かに本を読みふけることのできる雰囲気は、明星学園の図書室として欠かせないところである。

また、「学習・情報センター」として、子どもたちの主体的な学習（調べたいこと）の手助けができるように、資料の選定・整備・提供を行なっている。同時に、時代に合わせて発展してきたさまざまなメディアや、学外の資料へのアクセスも可能にするため、図書室スタッフが日々レファレンス（必要な情報・資料を探す手助け）にあたっている。小中学校2階図書室では、2018年の中学校「総合探究科」の立ち上げに合わせ、インターネットメディアにアクセスするためのPC端末や、図書室での授業に対応するための学習席の整備などが行なわれた。以降、自主的な学習に取り組むための情報の取り扱い方やマナー、効果的な情報の検索の仕方などを、プロジェクト学習や卒業

研究など実体験を通して学ぶ場所となっている。情報の新鮮さを保つための資料の更新など基本的な運営のほか、OPAC（オンライン蔵書目録検索システム）の活用や、相互貸借の円滑化、教育カリキュラムとの連携などの展開を見込んでおり、今後、情報リテラシー教育の核となる場所でもある。

図書室は有機体である。そこにある一冊の本がどのように書架に収められ、その本と利用者とがどのように出会うかで、図書室の構成要素や性格は流動的に変化する。小中高すべて合わせると蔵書はおよそ7万冊ほど、その資源の有効活用によりたくさんの本との出会いが生まれ、子どもたちの学びがより豊かで深いものになることが期待される。

（2）学園資料室・資料整備委員会の活動

2006年当時、明星学園の貴重な教育資料の多くは倉庫に眠っていた。なかには劣化が進むものもあり、資料の整備は急務であった。

元小・中学校校長の依田好照をはじめとする旧教職員・卒業生・元保護者らのグループ、なかでも特に「輝け！ 明星学園」の会の世話人たちはこの問題への関心が高かった。同会では学園の歴史を掘り起こす活動が続けるなかで、貴重な学園史資料が学園内のあちこちに散らばったままになっており、他の私立学校と比べるとひじょうに整備が遅れた状況にあることを知った。彼等は大正期の新教育運動を伝える貴重な資料が散逸・破損・廃棄されることを危惧し、学園史資料を整備する専門部を設けるよう、学園理事会に対して熱心に働きかけを続けた。

2008年に着任した出口一彦理事長がこの訴えを受け入れ、塚田勝俊常務理事を担当として資料整備の専門部を立ち上げた。塚田常務理事と同会世話人たちは成城学園・自由学園・攻玉社・東海大学など、他校の資料室を尋ねて資料の整備状況や仕組みなどを視察した。そして明星学園にも資料担当の専属職員が必須であるという結論に至り、資料整備委員の人選を開始した。

こうした経緯を経て創立85周年にあたる2009年4月、「学園資料整備委員会」が発足した。

塚田氏を担当常務理事とし、専属の職員1名を置き、保護者・卒業生ボランティアの協力も得て、学園史に関する資料の整理、蒐集、分類、補修、保存などの作業を開始した。専属職員にはさまざまな年代の教職員・卒業生・保護者にネットワークを持つ大草美紀（51回生）を採用した。

学園創立90周年以降、資料のデジタルデータ化を目標にしている。2021年度からはスタッフを1名増員し、大橋弘忠教諭（高校）の協力も得て、資料データベースの構築にも取り組み始めている。

資料整備委員の大草は学園史編纂にも関わっており、これに関連して学園の正確な歴史的事実を確認するために旧教職員や卒業生などへの聞き取り調査も続けている。

広報活動としては、法人が定期発行する『明星学園報』に「資料整備委員会だより・みちくさ」を連載し、学園の歴史に興味をもたれるようなテーマを選び、エピソードを交えて紹介している。また最近ではSNSで学園にまつわる新旧の情報発信を行っている。これによって在校生や保護者、卒業生など、さまざまな学園関係者との接点が増え、SNSが情報収集にも役立てられている。

資料整備委員会は15年間の活動を通して、明星学園史に関する情報窓口的な存在として育ってきた。現在は中学校の総合探究科の授業への協力や、PTA、後援会、明星会から依頼される仕事も増えている。

2009年の開始時は小学校の社会科資料室に机一つと棚一つを置かせてもらい、ボランティアが集まる日だけパーパスルームを借りて作業していたが、仕事の特性上占有できる場所が必要不可欠だったことから、2013年7月、新たに設置した作業部屋に移動した。後にこの場所に「学童クラブすずかけの木」の建物の新設が決まり、2018年7月、「すずかけの木」と入れ替わりで小学校北棟1階の部屋を資料室として整備して移動した。このとき外廊下に面して、手づくりの展示スペースも設けた。小規模ながら展示場所ができたことで、小・中学生や来校する人々が明星学園の歴史に接する機会を増やすことができたと感じている。現在も創立期の写真や校章などを解説付きで展示している。子どもたちや教職員にも学園史を身近に感じ、大切なことだと考えるきっかけになってほしいと願っている。今後は資料データベースの整備に力を入れ、学園関係者や教育研究者に活用されるようなデジタル資料室が実現することを夢見ている。

現在建築計画が進められている中学校新校舎には、ぜひとも資料展示スペースを充実させ、見て楽しむつ、誰もが気軽に明星学園の歴史に触れられる場所として実現させてほしい。

(資料整備委員会 大草 美紀)

みちくさ

■明星学園が生まれた時代
明治以降の日本の教育は、天皇中心主義、国家主義に育った国民を育成することを目的として、文部省が中心となり、国家を愛し、文部を尊ぶという「モットー」を掲げることが教育の目的で、大人中心・教員中心の画一的な知識注入の教育が行われていた。

大正時代に入ると、そのような教育の他に対抗するように、児童中心で自発的な学びを尊重する「新教育」が目立ち始めるようになった。「新教育」とは、子どもの自主・自覚・自学を大切に、個性を尊重する子ども中心主義である。この時期は、第一次世界大戦の好景況を背景に大都市に人が集まり、人々の考え方や価値観にも大きな変化が起きている時代である。多くの学校ではまだ明治以来の画一的な教育が行われていたが、一方で新しい考え方を持った人たちは自身の子どもを育てるために新教育を行っている学校を運営し始めた。成城小学校(1907年)、自由小学校(1921年)、海軍東京の村小(1924年)、海軍東京の村小(1924年)など、新教育の新しい手となった私立学校がこの時期に誕生した。

明星学園はその中のひとつで、資料館設立した津波義太郎氏が作った成城小学校に勤めていた津波義太郎、海軍部一歩の教師が成城を辞めて創立した学校で、「我が成城小学校をより新しい学校をつくるに努むる」という「明星の誓い」(明星学園50年あゆみ)の誓いに伴って記述している。

資料整備委員会だより⑤

■創立時の後援者 津波義太郎
大正デモクラシーの機運が昂然に向かい、商業大衆を相手に営業も下り坂になった時期に設立した明星学園の創立は、津波義太郎から経済的な援助を受けていた。それまで創立に賛同していたのは、赤松元吉と岡田石川兵衛で、創立に当たっては、津波義太郎の多額の援助があったからで、津波義太郎は創立者の一人として創立に賛同していた。津波義太郎は創立者の一人として創立に賛同していた。津波義太郎は創立者の一人として創立に賛同していた。

■初期の保護者たち
創立時にあった3年(1期生)は小学校卒業時には20人ほどであった。これらの保護者はどのような人々であったのでしょうか。創立期の資料から1期生の保護者の職業を調べてみると、いづれも専業主婦は1人、会社員は1人、学校の教員(明星の教員も含む)は1人、その他は、その子が軍人という時代を背景にしている。津波義太郎の交友関係とも関連があるのかもしれない。

近況に当り、1907年12月まで務めた。出来を鑑み、成城教育大学の開設に努力している。明星学園後援会の代表者。

1期生保護者 山之内兵衛・津波義太郎
津波義太郎は創立者の一人として創立に賛同していた。津波義太郎は創立者の一人として創立に賛同していた。津波義太郎は創立者の一人として創立に賛同していた。

2期生保護者 加藤義典
成城小学校の創立者。津波義太郎は創立者の一人として創立に賛同していた。津波義太郎は創立者の一人として創立に賛同していた。津波義太郎は創立者の一人として創立に賛同していた。

3期生保護者 津波義太郎
成城小学校の創立者。津波義太郎は創立者の一人として創立に賛同していた。津波義太郎は創立者の一人として創立に賛同していた。津波義太郎は創立者の一人として創立に賛同していた。

4期生保護者 津波義太郎
成城小学校の創立者。津波義太郎は創立者の一人として創立に賛同していた。津波義太郎は創立者の一人として創立に賛同していた。津波義太郎は創立者の一人として創立に賛同していた。



〈上〉『明星学園報』100号(2013年1月)から連載している資料整備委員会だより「みちくさ」。2024年3月で連載18回を数えた。

〈左〉2018年に小学校北棟1階に作業室を移転し、手づくりの小さな展示コーナーも設けた。資料室が開室している日は誰でも自由に閲覧できる。

5 「明星教育」を具現化するための中学校新校舎建築構想

(1) 新たな中学校校舎建築「建築委員会」の発足

2006年6・6制に移行して以来、中学校新校舎建築は「どちらのキャンパスに建築するのか」というキャンパス問題を含めて難航していった。▶詳しくは本誌P.270参照

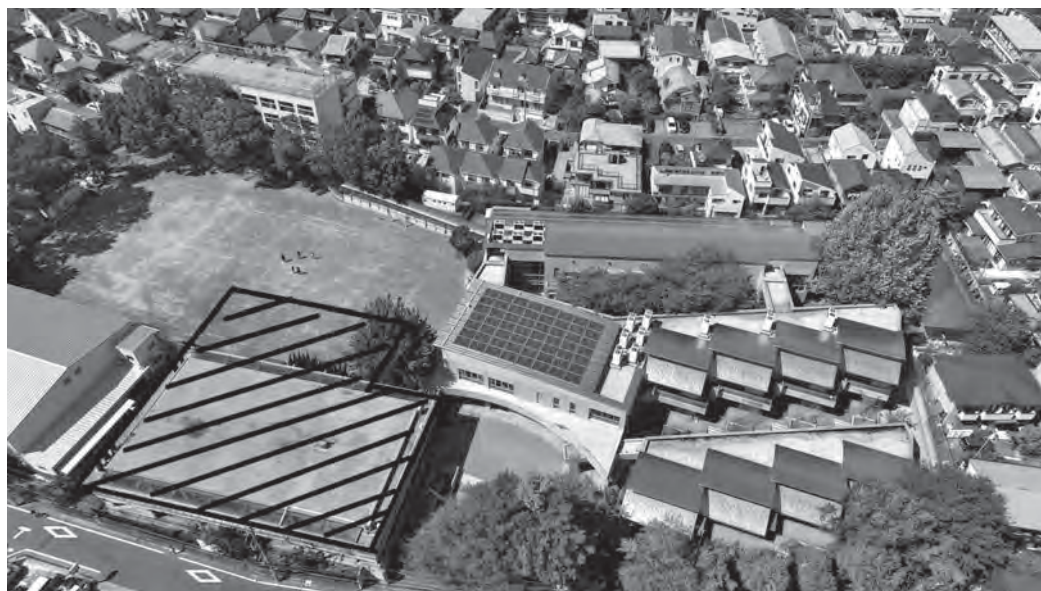
ようやくその結論が出たのは、2011年11月の全園会議においてであった。出口一彦理事長は、これまでの議論をふまえ、「井の頭キャンパス内に中学校校舎を建築する」ことを決定し、2018年（創立95周年の前年）に新校舎の完成を目指すことを宣言した。

しかしながら、募集状況の低迷や建築資材の高騰により資金計画が見直され、2018年を目指した建築計画は延期されることとなった。

出口理事長の後を引き継いだ平田和孝理事長は、募集状況が回復しようやく資金計画の目処がついたことを受けて、中学校新校舎建築計画を再開することを全職員に宣言し、2021年4月に「中学校新校舎建築委員会」を発足させた。

中学校新校舎建築委員会のメンバーは、2023年の時点で原田茂副理事長を委員長とし・河住貴夫常務理事・杉本直樹事務長・照井伸也小学校長・平野康弘中学校高等学校長・伊野文子小学校副校長・石井三絵中学校副校長・鈴木貴之高等学校副校長・是恒鴻太小学校教諭・工藤圭介中学校教諭・大石晶子高等学校教諭の11名で検討を進めていった。

【中学校新校舎が建つ場所】



(2) 中学校新校舎建築の基本コンセプト

新しく発足した中学校新校舎建築委員会では2021年4月より数十回にわたって議論を重ねてきたが、最も重視したことは、設計が先にありきではなく「まずはどんな生徒を育てていくのかという教育コンセプトがあり、その基本となるコンセプトにそって設計していく」ことであった。

建築委員会がまず取り組んだのは、設計の話ではなく「どんな子どもたちを育てていくのか」という教育コンセプトと、それを実現するためにどのような校舎が必要かという基本コンセプトを考えていくことであった。

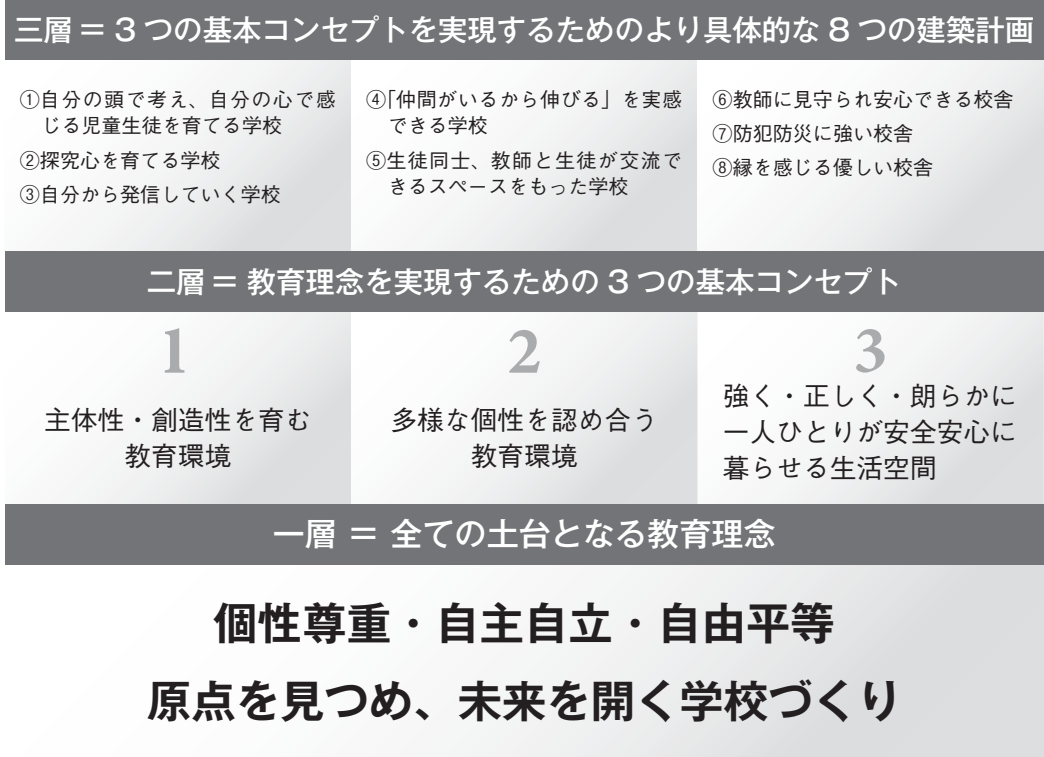
建築委員会は、中学校新校舎建築の基本コンセプトを、三層構造で捉えていった。

一層＝すべての土台となる教育理念

二層＝教育理念を実現するための3つの基本コンセプト

三層＝3つの基本コンセプトを実現するためのより具体的な8つの建築計画

【中学校新校舎建築の基本コンセプト】



【8つの基本コンセプトを具体化する建築計画】

〈1〉主体性・創造性を育む教育環境

- ①自分の頭で考え・自分の心で感じる児童生徒を育てる学校
- さまざまな方法で課題解決学習が行えるゆとりある教室。
 - 豊かな感性を育む芸術スペース。

②探究心を育てる学校

- プロジェクト学習・卒業研究といった「総合探究」を行うメディアセンター。
- あらゆる分野に対応し、合理的な検索システムをもった図書館。

③自分から発信していく力を育てる学校。

- 各教室に電子黒板およびインターネットを完備し、プレゼンテーション能力を高めていく環境。

〈2〉多様な個性を認め合う教育環境

④「仲間がいるから伸びる」を実感できる学校

- 一斉授業・ペア学習・グループ学習等、あらゆる学習形態に対応できるゆとりをもった広さの教室。
- 学習形態に合わせて机の形が多様に変えられるメディアセンター。

⑤交流できるスペースをもった学校

- ゆとりあるオープンスペース。
- 交流できるオープンデッキ。

〈3〉強く・正しく・朗らかに ～一人ひとりが安全安心に暮らせる生活空間～

⑥教師に見守られ安心できる校舎

- 下からも上からも見通せる吹き抜け。

⑦防犯防災に強い校舎

- 三鷹市の避難所として防犯・防災に強い校舎、充実した備蓄をもった学校。

⑧緑を感じる優しい校舎

- 緑を感じられるテラススペース。

これらの基本コンセプト・建築計画を元にコーディネーターにアドバイスをもらいながら基本設計をつくっていった。

現在、以下の2点が決定し、これから施工業者を決め、2029年の完成を目指し進めていく。

①中学校新校舎は井の頭小・中キャンパスの現管理棟のある位置に4階建て約3,800㎡の建物を建てる。

②1階を「校務とコミュニケーションのゾーン」、2階を「メディアセンターゾーン」、3階を「科学のゾーン」、4階を「芸術のゾーン」と名称化することで、基本コンセプトの具現化を促進する。

【中学校新校舎のイメージ図】



いちょう広場から見たイメージ図



体育館側から見たイメージ図

中学校新校舎建築、その後に続く「高等学校新校舎建築」は、次の100年あるいは200年へと続く明星学園の夢であり、希望である。

100年前、4人の創立同人がともした「理想の灯」を、私たちは決して消すことなく未来へと引き継いでいくことを、この新校舎の建築とともに深く刻み込んでいかなくてはならない。

6 創立 100 周年、その先の 100 年に向けて

創立同人の赤井米吉は、明星学園を表し、「本学園は社会立の学校である」と述べた。学園は単独で存在するのではない。社会の中の一教育機関を創るのだという強い意志がそこにはあった。

わたくし共には一個の教育上の理想があります。この理想を実現するために新しい学園を建てることが必要であると思って、ここに建てたのであります。しかしわたくし共の理想はわたくし共の私かな考えではありません。わたくし共はこの理想はわが国社会の理想であると信じています。この理想によってわが国社会の必要とする人物を養成しようと思うのであります。

かく経営においても、教育においても、ここはわれわれのわが^{ママ}が優勝をするところではなく、わが国社会の一教育機関で、わたくし共は^{しばら}暫くここに働くものであります。だから、「私立」といわれますが——むろん「公立」ではありません——いわば「社会立」であります……この意味において、御来会の各位に将来この学園の成長発達に対して深い御関心を持たれんことを^{こいねが}希うのは、^{あえ}敢てわたくし共への御援助を希う私的な希いではなく、わが国社会の発展を助ける「公」の義務であることを訴えたいのであります。▶▶赤井米吉「お礼に代えて」『明星学園 P T A 会報』30 周年記念号、1954 年 6 月

赤井の考える「社会の理想」とは何だろう。私は「一人ひとりが尊重され、そんな自律した人間によって構成された社会」であるように思う。それが「個性尊重・自主自立・自由平等」という教育理念へとつながっていく。しかし、理念というものは具体的な行動を伴っていなければ、すぐに単なるお題目へと化してしまう。ただ、具体的な行動を求めるとき、そこでは往々にして対立が生まれる。解釈の違いが生まれる。当然のことだ。意味のある対立は熱いエネルギーとなって、新たな価値観を生んでいく。明星学園 100 年の歴史を顧みるとき、そんな試行錯誤と一つ一つのその時点での判断が見えてくる。100 周年とは、取りも直さず立ち止まり、その歴史に思いをはせる時だ。

しかし、我々は過去を振り返るのが苦手なようだ。夏目漱石は、日露戦争後しばらくたった 1911 年、^{がいたん}こう慨嘆している。

歴史は過去を振り返った時始めて生まれるものである。悲しいかな今の吾等は刻々に押し流されて、瞬時も（中略）吾等が歩んで来た道を顧みる暇を有たない。吾等の過去は存在せざる過去の如くに、未来の為に蹂躪せられつゝある。吾等は歴史を有せざる成り上りものゝ如くに、たゞ前へ前へと押されて行く（『定本 漱石全集』第 16 巻 岩波書店）

大正から昭和、平成、令和の時代へと世の中は大きく変わった。しかし、人間の本質、社会的な課題はそれほど変わってはいない。教育界においても、さまざまな政策が発せられるが、教育現場に混乱を生むだけで、大きな改革には至っていない。漱石の言葉を待つまでもなく、目の前の対応に忙しく、過去を振り返る余裕がない。終わったことはすぐに忘れていく。形式だけが残し、思考停止に陥る。生まれた対立は表面的なものにとどまり、本質的に深まっていくことはない。豊かな対話は生まれず、多数派の論理、排除の構図が進んでいく。創立から 100 年が過ぎた現在、社会は依然としてこのような状況に見える。

そのような社会にあって、明星学園は何を主張していくのか。創立時の先人たちの思いに返らな

ければならない。そこから次の100年が生まれてくる。現代における「社会の理想」とは何か。少なくとも、細かな規定を作り、それをチェックしあうというような本末転倒な形にしてはいけない。一人ひとりの生徒に神経が届かなくなってしまう。楽なことを最優先にはしない。楽なこととは考えなくても済む方向、悩まなくても済む方向へと向かう志向性だ。合理的・働き方改革といった言葉の表面的な意味に惑わされてはいけない。教員も生徒も楽しむということを最優先にしたい。

明星教育の根本にあるのは、一人ひとりの子どもを尊重するということだ。ひとりの人格として敬意を以て接することだ。信頼関係でつながっていなければならない。そして、教育研究においては謙虚であること。多様な価値観を受け入れつつ、その場その場での自分の意見を持つこと。意見を変えることは恐れず、自らの過ちは素直に認め、次にどうすればいいかを考えること。自らの不十分さを受け入れ、協同で事に当たること。感謝する気持ちを忘れない。この世界は「多数派」と「少数派」に二分されているのではなく、多数の魅力ある「少数派」から成り立っていることに気づきたい。人に合わせるのではなく一人ひとりの意見が尊重されなければならないのだ。

まさにそれは、子どもたちに求めていることでもある。それぞれの考えを自由に、しかも余裕をもって述べられる空気。小さな失敗をカバーしあい、その結果として個人を孤立させない、致命的な失敗とはならない集団作り。教員こそが自戒しなければならないことだ。それが自律した教員であり、そこにこそ、明星学園の教師としての矜持が無ければならない。

創立同人の一人、照井猪一郎は「歩みをすすむれば^{ごんのん}近遠にあらず」(出典→参同契:曹洞宗の経典・詩)を引用し研究集会で次のように語っている。

おい！！ ちょっと。みんな聞けよ。いい言葉じゃないか。

理想に向かって歩みつけることが問題なんだよ。

理想が遠いか近いか、そんなことあ、問題じゃないんだ。

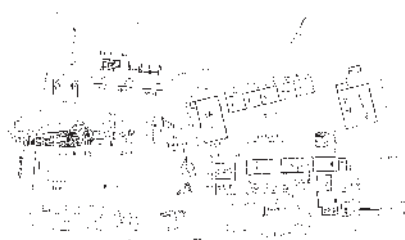
なあ、みんな。あゆみはじめることが大切なんだよ。

あるきつけることが大切なんだよ。

現実には常に理想の手前にある。それでも理想を持ち続ける。大切なのは、理想とは何かを一人ひとりの教員が考え、時に議論しながら自分の足で歩み続けること、そこにこそ次の100年への道が拓かれてくるのだろう。(編集委員会 堀内 雅人)

明星学園・校地の今昔

井の頭……明星学園発祥の地、
小学校・高等女学校⇒小学校・新制中学校



右は『明星学園報』27号（1989年1月）に載った「45年前の学び舎」。
17回生の小学校卒業生が描いた1940年代の小学校の配置図。



1935年撮影 小学校・女学校（現井の頭キャンパス）当時の住所は「東京府北多摩郡三鷹町牟礼482」だった。



2023年9月撮影 小・中学校（井の頭キャンパス）後方に井の頭の森と三鷹・武蔵野市の街並みが広がる。

牟礼……旧制中学校⇒新制高等学校



1936年1月14日、卒業生の林原基雄氏（1回生）が熊本からの帰途、機上から撮影した旧制中学校（現牟礼キャンパス）。



2023年9月撮影 高等学校（牟礼キャンパス）玉川上水と井の頭公園西園の森が続く。

略年表

修学旅行・運動会一覧表

2024 年 3 月 30 日現在

略年表 凡例

- 運動会・修学旅行に関しては巻末の一覧表を参照。
- 宿泊行事は(2泊)のように記し、宿泊を伴わず連続して行った行事は(3日間)のように記した。
- 日帰り遠足は数が多く、正確に記録が残っていないものも多いため、一部のわかるものだけを記した。
- 小学校(1～6年生)を[小]、旧制中学校(1～5年生)を[旧]、女学校(1～5年生)を[女]、新制中学校(1～3年生・7～9年生)を[中]、新制高等学校(1～3年生・10～12年生)を[高]と表記した。
- ただし1954～1973年の4・4・4制時代は、低学年部1～4年生を[低]、中学年部5～8年生を[中]、高学年部9～12年生を[高]と表記した。1966年度からは1～4年を「初等部」と変更したため表記も[初]とした。

1923 (大正 12) 年度**< 創立前年 >****<1924 年>**

- 2月26日 千駄ヶ谷の赤井邸で創立の会談（赤井米吉・照井猪一郎・山本徳行・結城捨次郎）
- 2月27日 赤井は国分寺の茶郷基邸を訪問。学校設立について援助を請い快諾される
- 2月29日 校地（現在の小学校敷地）1,000坪を大盛寺より借地
- 3月16日 創立同人4人（赤井米吉・照井猪一郎・照井げん・山本徳行）が井の頭の麦畑（現在の小学校の場所）に集まり、照井げん直筆の「明星学園建設地」の標木を立てる。まわりの民家は3軒ほどだった。（照井著『明星誕生ものがたり』では「2月29日」とあるが正しくはこの日付だった）
- 3月24日 「学園設立趣意書」と児童募集のチラシを新聞折込として配布

1924 (大正 13) 年度**< 創立年 >**

- 5月5日 校舎上棟式
- 5月9日 明星尋常小学校設立認可が下りる。赤井米吉、学園長・校長に就任
- 5月15日 **開校式・入学式**。児童は1年生（7名）2年生（5名）3年生（9名）の21名。教師は4名。校舎は未完成。悪天候の中での開校式は、雨がもり、風が吹き込む野天とかわらない新校舎で行われた
- 5月16日 前日できなかった記念撮影と記念植樹。このとき職員・児童が一本ずつ植えた公孫樹（イチヨウ）の木は今も小学校に残されている
- 6月21日 開校披露式・校舎落成式。ようやく校舎が完成し、児童数は30名に
- 7月26日 児童夏季学校を10日間開催。学園内で芸術教育会を催す
- 夏 赤井米吉学園長は講演のため渡鮮。朝鮮で上田八一郎に会い、中・女学校併設について助力を求む
- 10月29日 3年生（1回生）日光へ旅行、降雪に遭う
- <1925 年>**
- 1月 児童数は1年生（22名）2年生（16名）3年生（19名）の計57名となる

1925 (大正 14) 年度**< 1 周年 >**

- 4月6日 第2回入学式、新入生15名（4回生）入学。

児童総数は98名（1～4年生）

- 5月15日 創立記念日（1周年）
- 5月18日 3年生（2回生）4年生（1回生）箱根へ旅行（1泊）
- 7月21日 児童有志30名が三浦半島の三戸海岸で臨海生活（9泊）。夏季生活開始
- 10月21日 第1回運動会を開催
- 11月 創立時1,000坪だった土地にさらに800坪借り増ししてグラウンドとし、103坪だった教室も手狭になったため2教室の増築を決定

<1926 年>

- 3月21日 教室の増築（2教室、38.25坪、総面積141.25坪）完成

1926 (大正 15/ 昭和 1) 年度 < 2 周年 >

- 4月5日 第3回入学式、新入生27名（5回生）。児童総数は130名（1～5年生）
- 5月15日 『新読本』巻一（照井猪一郎編、集成社刊、35銭）刊行
- 5月20日 明星学園中学校・明星高等女学校併設の討議第1回目
- 5月28日 5年生（1回生）松島へ旅行（2泊）
- 6月4日 3年生（3回生）4年生（2回生）日光へ旅行（1泊）
- 7月21日 児童有志40名が三浦半島の三戸海岸で夏季生活（9泊）
- 10月21日 第2回運動会開催
- <1927 年>**
- 1月 母の会結成
- * 山之内鈴衛氏・安田童子氏らが中核となり結成された母親たちの自主的な会で、学園を援助するだけでなく、自分たちの文化活動を行うことが主目的であった

1927 (昭和 2) 年度**< 3 周年 >**

- 4月5日 第4回入学式、新入生24名（6回生）入学、1年生から6年生まで6学年が揃う。児童総数は161名
- 4月 音楽室・美術室（50坪）完成
- 5月24日 6年生（1回生）関西へ修学旅行（3泊＋車中1泊）
- 5月27日 4年生（3回生）箱根へ旅行（1泊）
- 6月10日 5年生（2回生）伊豆へ旅行（1泊）
- 7月21日 5・6年生（2・1回生）39名、富士登山と富士五湖めぐり（7泊）
- 10月2日 後援会（第1次）結成

10月30日 第3回運動会

12月24日 澤柳政太郎先生逝去（62歳）

* この年1月に発足した母の会が父親たちを動かして、中・女学校設置の資金集めのために後援会を発足させる。山之内氏が最高顧問、会長は岡崎栄松氏、会計は新綿五郎氏

* 後援会はこの後も必要に応じて解消・発足を繰り返す

〈1928年〉

1月 保護者の役員会が連日開かれ、中学校・高等女学校の創設について論議

1月 N H K（愛宕山）から照井猪一郎原作の学校劇「夜明けまで」を放送、5・6年生（2・1回生）が出演。日本における学校放送の草分けとなる

3月21日 小学校第1回卒業式（1回生）27名

3月 財団法人明星学園中学校・同女学校設立許可認可願提出

3月 中学校校舎として、京橋区所有の林間学校（三鷹村）101坪を公買入札のうえ540円で落札し移築する

1928（昭和3）年度

＜4周年＞

入学：[小]第5回（7回生）、[女・旧]第1回（1回生）

4月 明星学園中学校・女学校を小学校に併設する

* 小学校を[小]、旧制中学校を[旧]、女学校を[女]と表記する

4月1日 照井猪一郎が小学校校長、赤井米吉学園長が女学校校長を兼任、上田八一郎が中学（旧制）校長に就任

4月5日 女学校校舎（現在の小学校校舎北棟あたり）125坪、中学校校舎（現在の牟礼・高校校舎）101坪が完成

4月5日 [小]第5回入学式（7回生）

4月9日 [女]開校式、第1回入学式（14名）、始業式

4月10日 [旧]開校式、第1回入学式（16名）、始業式

4月20日 中学校・女学校設立が認可される

4月24日 全園職員会開催

5月15日 [小・女・旧]3部合同運動会

6月13日 小学校・中学校・女学校教師が成城学園参観

7月13日 [小・女・旧]3部合同同学芸会

7月21日 [小・女・旧]三浦半島の鴨居で、3部合同臨海生活（9泊）

11月3日 [小・女・旧]明治節（明治天皇誕生日）、3部代表者が明治神宮参拝

〈1929年〉

1月24日 中学校の制服・制帽を定める

3月4日 [女]第1回音楽会

3月21日 [小]第2回卒業式（2回生）

1929（昭和4）年度

＜5周年＞

入学：[小]第6回（8回生）、[女・旧]第2回（2回生）

6月10日 小学校・中学校・女学校共用の講堂（70坪）が完成

6月 [小・女・旧]講堂開きとして3部合同劇の会

6月10日 中学校4教室、渡り廊下増築完成

7月21日 [小・旧]有志50名が房総の勝山で臨海生活（9泊）

9月1日 [小・女・旧]講堂で3部合同の始業式

10月27日 [小・女・旧]3部合同の運動会

10月29日 [小]第6年生（3回生）関西へ旅行

11月 学園要覧配付

12月27日 全園職員会（会計取扱・出版部・中学校増築の件）

〈1930年〉

3月9日 [女]地久節（皇后誕生日）学会会

3月20日 [小・女・旧]3部合同美術展

3月21日 [小]第3回卒業式（3回生）

この年度のできごと

★財団法人明星学園理事長に赤井米吉就任。理事に岡崎栄松氏、内藤幸三郎氏就任

1930（昭和5）年度

＜6周年＞

入学：[小]第7回（9回生）、[女・旧]第3回（3回生）

春 軽井沢の大地主、市村今朝蔵氏から3,000坪の土地を寄贈される。また坪2円で分譲し、収益を上げるよう、3万坪の土地を後援会に委託される

5月 [小]5年生（5回生）箱根旅行（1泊）

6月19日 軽井沢の寮と林間学校について全園で討議

7月 市村氏から寄贈された軽井沢の土地に70坪の寮を建築。上野原寮と称する

* 軽井沢の学園寮は「上野原寮」のほか、年代によっては「沓掛寮」「軽井沢寮」とも呼ばれていた

7月25日 [小・女・旧]小24名、旧23名、女13名計60名が軽井沢で合宿（7泊）

* 軽井沢の寮はこの合宿に完成が間に合わず、子どもたちは合宿前半2日ほどを旅館で過ごした

9月30日 [小]6年生（4回生）関西へ修学旅行（3泊）

11月2日 [小]銀座伊東屋で学園児童生徒作品展

覧会開催（5日間）

11月 『新読本』照井猪一郎編、巻五まで完成

11月 学園の将来について全園で討論会

〈1931年〉

1月 『明星の教育』（明星学園初めての教育誌）
創刊

* 表紙の題字は茶郷基氏、目次頁の図案は恩地孝四郎氏（と
もに保護者）による

2月 学園顧問の長田新教授（広島高等師範）
が学園参観、のち懇談会を開く

3月21日 [小]第4回卒業式（4回生）

1931（昭和6）年度

〈7周年〉

入学：[小]第8回（10回生）、[女・旧]第4回（4回生）

4月30日 女学校の特別教室（割烹室・裁縫室・理
科室・校長室・職員室）完成

* この特別教室は三菱銀行深川支店の建物で、保護者の川
井源八氏（三菱電機会社社長）から移築費とともに寄付
された

* この時代は男女共学が認められておらず、女子の校舎と
男子の校舎は数百メートル離して設置しなければならな
かった（共学にしている各種学校には大学受験資格が与
えられなかったといわれる。また小学校では男女別学の
運用は緩やかだった）。明星学園も井の頭（小・女）と牟
礼（旧制中）の校舎は500メートルほど離れている

5月15日 開校7周年記念として母の会主催のバ
ザーと小学校の劇の会を開催

5月20日 [旧]軍事教練（学校教練）開始

6月 [小・女]著名な舞踊家・宮操子氏を講師
として招き、毎週水曜日に女子児童生徒
60名が指導を受ける

7月 [小]2～6年生が交替で女学校裁縫室で夏
季生活。
2年生（9回生、20日～3泊）、3年生（8回
生、23日～4泊）、4年生（7回生、27日～
4泊）、5年生（6回生、31日～6泊）、6年生
（5回生、8月6日～6泊）

10月14日 府中一中で特高課長の講演に上田八郎
中学校長出席

10月20日 『自然科の究明』をパンフレットにして発行

12月18日 宮操子氏ドイツ留学のため、石井小浪氏
が舞踊教師として就任

〈1932年〉

2月6日 [旧]第1回教練査閲

3月21日 [小]第5回卒業式（5回生）

1932（昭和7）年度

〈8周年〉

入学：[小]第9回（11回生）、[女・旧]第5回（5回生）

5月15日 創立記念日（8周年）、中学校舎（45坪）
完成の記念式典を開催

5月 [女]『明星時報』（女学校校友会機関紙）
を創刊

6月 [旧]剣道を随意科（選択科）として開始

7月14日 [旧]軽井沢で野外演習

7月 [旧]房総勝山で臨海生活（4泊）

[女]三浦半島の三戸で臨海生活

7月19日 [小]2～4年生（10～8回生）裁縫室で夏
季生活、

5・6年生（7・6回生）軽井沢林間生活

9月 小学校教師が他校（自由学園小、お茶の
水付属小、女子学習院）参観

10月23日 [小・女・旧]全園運動会と母の会バザー
が行われる

10月25日 [小]6年生（6回生）が関西へ修学旅行（6
泊）

11月4日 [女]4・5年生（北陸へ修学旅行（5泊）

11月 [旧]『星雲時代』を創刊（中学校新聞係
発行の新聞としてスタート。のちに新制
高校に受け継がれ、『青雲時代』『青雲』
と称された時期もある）

11月26日 [小・旧]野球大会 中学1年生（5回生）
対小学6年生（6回生）で試合

11月30日 [旧]庭球大会

12月5日 満州の日本軍駐留軍へ、女学校は慰問
袋、中学校は慰問金を送る

〈1933年〉

1月8日 中学校校舎増築（45坪）

1月26日 [旧]2・3年生（10・9回生）野外教練

1月28日 [女・旧]第2回レコードコンサート

3月5日 [女・旧]合同第1回卒業式（1回生・旧18
名、女10名）、第1回卒業送別演奏会

卒業：[小]第6回（6回生）、[女・旧]第1回（1回生）

1933（昭和8）年度

〈9周年〉

入学：[小]第10回（12回生）、[女・旧]第6回（6回生）

4月16日 財団法人評議員会を開催

4月24日 学園創立時の後援者、茶郷基氏逝去

5月4日 赤井米吉学園長、朝鮮・満州の教育視察
を行う（30日まで）

6月15日 小学部教育月報『はしかげ』を創刊

7月14日 [旧]4・5年生（3・2回生）軽井沢で4日
間野外演習

7月17日 [小]4年生(9回生) 軽井沢林間生活(6泊)、
5・6年生(8・7回生) 三浦半島三戸臨海生活(9泊)

7月21日 [小]3年生(10回生) 21日～(4泊)
2年生(11回生) 25日～(3泊) 裁縫室で夏季生活

7月21日 [女]軽井沢上野原森林間生活

9月 [旧]東京府視学の視察が行われる

〈1934年〉

1月 創立10周年記念式典・記念事業について全園会議

3月2日 [女]学芸会。小学生が見学

3月 [小]1・2・3年生ひな祭り

3月9日 [女・旧]地久節を祝い女学校は休校、中学校は国旗掲揚平常授業

3月17日 [小]卒業生送別学芸会

3月 東京府視学3人、突然女学校の帳簿等視察に訪れる

卒業：[小]第7回(7回生)、[女・旧]第2回(2回生)

1934(昭和9)年度 <10周年>

入学：[小]第11回(13回生)、[女・旧]第7回(7回生)

5月15日 学園創立10周年。記念式典を行う

5月19日 [小・女・旧]3部合同で創立10周年記念学芸会を開催(日本青年館)

5月27日 第1回同窓会開催

6月23日 母の会・後援会が10周年記念事業について協議

7月16日 [小]4・5年生(10・9回生) 伊豆伊東(7泊)
6年生(8回生) 軽井沢林間生活(9泊)

7月21日 [小]3年生(11回生) 21日～(4泊)、2年生(12回生) 25日～(3泊) 裁縫室で夏季生活

7月23日 [女]三浦半島三戸で臨海生活(9泊)

7月23日 [旧]房州館山で臨海生活

9月11日 [旧]軽井沢で4日間の野外演習

9月 小学校教師が他校(誠之小、川村女学院小、豊明小、竹早小、御田小)参観

9月 [女]5年生(3回生) 奥日光旅行(2泊)

10月 「明星学園行進歌」が誕生、北原白秋氏(保護者)作詞

10月 部落会(地域集団を単位とした学校と家庭の懇談会)の提唱

12月30日 女学校校舎(22.5坪)増築

〈1935年〉

1月19日 第1回部落会開催

卒業：[小]第8回(8回生)、[女・旧]第3回(3回生)

1935(昭和10)年度 <11周年>

入学：[小]第12回(14回生)、[女・旧]第8回(8回生)

5月15日 中学校に屋内体操場(70坪)が完成

6月15日 [旧]4・5年生(5・4回生) 房州一の宮で野外演習(4泊)

7月21日 [小]2・3年生(13・12回生) (3泊/4泊)
女学校裁縫室で夏季生活

[小]4・5年生(11・10回生) 三浦半島三戸浜で臨海生活(9泊)

[小]6年生(9回生) 軽井沢林間生活(9泊)

7月23日 [旧]房州勝山で臨海生活(7泊)

7月30日 [女]軽井沢林間生活(9泊)

10月3日 [小]5年生(10回生) 大島旅行(1泊)

10月13日 [女]5年生(4回生) 上高地へ修学旅行(3泊)

12月14日 [旧]第5回教練の査閲

12月 各部落会の開催

12月 低学年の教授法について、小学校総父母会開催

12月 [小]リトミックによる感覚教育導入

〈1936年〉

3月 [小]6年生卒業餅つきの会

3月 新1年生入学勧誘のため教師全員で幼稚園めぐり

卒業：[小]第9回(9回生)、[女・旧]第4回(4回生)

1936(昭和11)年度 <12周年>

入学：[小]第13回(15回生)、[女・旧]第9回(9回生)

4月 小学校で学科担任制と、学科研究主任制とを定める

4月 小学校教師が玉川学園参観

5月 中学校の校名を「明星学園中学校」、女学校の校名を「明星学園高等女学校」と改称

5月2日 母の会総会を開く

6月9日 赤井米吉学園長は第7回世界新教育会議出席のため英国チェルトナムへ向けて鹿島丸で横浜港を出航

7月 [小]2年生(14回生)～6年生(10回生)は昨年に準じ夏季生活を行う

7月29日 赤井学園長、英国チェルトナムに到着。世界新教育会議に出席の後、11月29日の帰国まで欧米諸国の教育を視察

秋 照井小学校校長ほか数名の教師と卒業生が

房総半島沿岸を歩いて、「海の家」候補地を探し、千葉県安房郡健田村、のちの千倉町にめぐり会う

〈1937年〉

1月 小学校教科研究会（社会・体育・算術・生活・遊戯について）開催

卒業：[小]第10回（10回生）、[女・旧]第5回（5回生）

1937（昭和12）年度 < 13周年 >

入学：[小]第14回（16回生）、[女・旧]第10回（10回生）

4月13日 [女・旧] 全生徒および全教職員、講堂で須磨弥吉前南京総領事の話聞く

5月17日 ドルトン・プラン提唱者ヘレン・パーカー・スト氏来校、小・女・中学校全員が講堂で話を聞く

6月3日 全園職員会

6月8日 [女] 5年生（6回生）東北へ旅行

6月 千葉県健田村瀬戸（千倉）に生徒の臨海生活場と、保護者の別荘村“明星村”の建設を決定

7月7日 [旧] 富士演習場で軍事訓練

7月20日 [小] 2・3年生（15・14回生）学園内夏季生活、4・5年生（13・12回生）千葉県健田村の農家（青木さん）と朝日屋に分宿して夏季生活（千倉での臨海生活の始まり）、6年生（11回生）軽井沢林間生活（10日間）

7月 [旧] 明星科学会が創設される。6名参加

7月29日 [女] 軽井沢上野原寮で林間生活（6泊）

9月28日 全園職員会議

11月10日 神宮外苑の競技場で5万人の大合唱開催。明星からは学園長と生徒96名が参加

11月15日 第6回校内音楽会、講堂で開かれる

11月19日 中学校で国語科研究指導授業があり、東京府の長倉視学ほか2名来校

11月24日 [女] 3年の教室で第1回絵画展開催（26日まで）、20数名出品

11月26日 [女] バスケットボール競技会

12月8日 [女] 女学校に傷病兵用被服300組の調整依頼があり、9日から縫い始め、20日中野授産場へ届ける

12月15日 [女・旧] 南京陥落祝賀行列に参加

12月17日 [旧] 中学校は代々木練兵場で教練・査閲を受ける

〈1938年〉

1月10日 [女] 女学校で第2回傷病兵用被服400着を調整

2月7日 [女] 牛込の陸軍病院慰問

3月11日 [小] 4年生（13回生）東京市内見学（江戸城を中心とした史跡巡り）

卒業：[小]第11回（11回生）、[女・旧]第6回（6回生）

1938（昭和13）年度 < 14周年 >

入学：[小]第15回（17回生）、[女・旧]第11回（11回生）

4月 [小] 連絡速報網を作成

5月13日 [女・旧] 創立10周年記念「劇・音楽・舞踊の会」開催

5月14日 中等部創設10周年記念祭

6月26日 [小] 第1回体操会

7月26日 [小] 5・6年生（13・12回生）富士登山

9月3日 小学校の千倉生活、女学校の軽井沢生活などについて、海外放送が行われる

10月8日 [女] 第6回レコードコンサート

11月29日 [女] 第3回演劇発表会、トルストイの「最初の酒づくり」を演じる

12月 [女] ヴァイオリン課外授業始まる

〈1939年〉

卒業：[小]第12回（12回生）、[女・旧]第7回（7回生）

1939（昭和14）年度 < 15周年 >

入学：[小]第16回（18回生）、[女・旧]第12回（12回生）

5月29日 [女] 第4回演劇発表会

6月4日 [小] 第2回体操会

6月5日 [女] 5年生（8回生）上高地・天竜峡旅行

6月6日 [女] 1～4年生（12～9回生）伊豆大島旅行

6月12日 全園職員会議の席上、東京府学務部長が時局に関する指示・報告を行う。集団労働奉仕作業開始

7月15日 [小] 2・3年生（17・16回生）学園内夏季生活

4・5年生（15・14回生）健田村瀬戸（千倉）夏季生活、青木さんと朝日屋に分宿、食事は漁業組合にて

7月19日 [小] 6年生（13回生）軽井沢林間生活（9泊）

7月28日 [女] 軽井沢上野原寮で林間生活（9泊）

10月6日 [小] 5年生（14回生）伊豆大島旅行（1泊）

11月11日 [女] 第8回音楽会

11月18日 [女] 第5回演劇発表会

11月 [小] 展覧会と学校劇の会が行われる

〈1940年〉

3月2日 [女] 送別演奏会、送別劇と茶話会

3月9日 [小] 工作展覧会（10日まで）

3月11日 [小] 劇の会、蚕糸会館にて開催

卒業：[小]第13回（13回生）、[女・旧]第8回（8回生）

この年度のできごと

★小学校の教育に関し、照井猪一郎小学校長が「私立学校の生命とするところ」について述べている

1940（昭和15）年度

< 16周年 >

入学：[小]第17回（19回生）、[女・旧]第13回（13回生）

4月29日 [小]第3回体操会
 5月14日 [旧]陣馬山ハイキング
 5月21日 [旧]4・5年生（10・9回生）滝ヶ原廠舎（御殿場市）で野外演習（4泊5日）
 6月1日 [小]4年生（16回生）日光旅行
 6月7日 [小]5年生（15回生）箱根・清水旅行
 6月10日 [女]5年生（9回生）上高地・天竜峡地方へ修学旅行
 7月14日 [小]4・5年生（16・15回生）が千葉県健田村瀬戸（千倉）で夏季生活（8泊）
 7月18日 [小]6年生が軽井沢上野原寮で林間生活（9泊）
 7月21日 [女]軽井沢上野原寮で林間生活（10日間）
 7月22日 [旧]茨城県磯崎海岸で水泳訓練（7泊）
 7月27日 [小]2・3年生（18・17回生）女学部裁縫室で4日間の夏季生活
 9月 [小]集団で歩行訓練、避難演習
 10月8日 全園職員会
 10月10日 全園で紀元2600年式典を挙行
 11月7日 小学校教師が成城学園小学校の国民学校案研究会の現地授業参観
 11月30日 [旧]第10回学校教練の査閲を受ける
 12月24日 橋田邦彦文部大臣が「私立小学校は国民学校と認めない」とラジオ放送

<1941年>

2月 [旧]演劇会「コッペル君とその仲間」を上演

卒業：[小]第14回（14回生）、[女・旧]第9回（9回生）

この年度のできごと

★中学校理科室（52坪）増築

★戦時体制に向かいつつあるこの年、学校から保護者に対するお知らせが2通出される

1941（昭和16）年度

< 17周年 >

入学：[小]第18回（20回生）、[女・旧]第14回（14回生）

4月 明星学園小学校を「明星学園初等部」と改称（国民学校令施行により、各小学校の名称が廃止される）
 4月19日 [女]北京大学総長永井潜博士講演会

4月28日 [小]多摩御陵、学園間の集団継歩
 5月 [小]電話連絡網による早期帰宅の演習と、全体行動訓練を行う
 6月2日 [旧]鷹取山へハイキング
 6月4日 [女]新入生歓迎バスケットボール大会
 6月12日 [女]第15回音楽会
 6月23日 小学校の保護者に対し、照井猪一郎初等部長が「時局に対する考え方」を呼びかける
 6月29日 小学校教師に対し、国民学校に関する講習が、青山師範学校で7月6日まで行われる
 7月15日 [小]4・5年生（17・16回生）千倉で夏季生活（7泊）
 6年生（15回生）軽井沢上野原寮で林間生活（9泊）
 7月 健田村で2階建ての売家を400円で購入
 7月17日 [女]高良富子氏の講演会
 7月21日 [女]時局下の軽井沢夏季生活について中止を決定するが、当月いっぱいには遊行継続とする
 7月 [女]軽井沢上野原寮で集団生活訓練（9泊）
 9月26日 [女]高井戸水道道路から吉祥寺まで強行徒歩
 10月 [小]父母参加のうえ、非常帰宅演習を行う
 10月 [女]科学博物館見学
 10月9日 [女]1～4年生（14～11回生）鎌倉旅行
 10月23日 [女]防空演習（25日まで）
 11月23日 [女]宮城（皇居）外苑勤労奉仕参加
 12月8日 日本海軍の真珠湾攻撃により太平洋戦争開戦

<1942年>

1月3日 末綱卓一教諭（中・女学部、音楽）逝去
 3月3日 [女]送別音楽会
 3月5日 [女]美術展覧会（5日間）
 3月14日 [小]工作展覧会（2日間）

卒業：[小]第15回（15回生）、[女・旧]第10回（10回生）

1942（昭和17）年度

< 18周年 >

入学：[小]第19回（21回生）、[女・旧]第15回（15回生）

4月18日 東京が初めて空襲を受ける
 4月29日 [小]天長節にあたり「ももたろう」の劇を上演
 4月27日 [小]多摩御陵～学園間の集団継歩を行うにあたり、詳細な案内状が保護者宛てに出される

- 4月30日 [小]多摩御陵～学園間の集団継歩
4月 青山方面が空襲を受けたため、小学校教師は生徒の各部隊を引率して帰宅する
5月7日 小学校では空襲警報発令時の対応について保護者に連絡文書を出す。
5月12日 [小]6年生(16回生)北伊豆学習旅行(2泊)
6月 [小]5年生(17回生)箱根清水旅行(1泊)
7月7日 [小]学期末美術小展覧会・音楽の会
7月8日 興亜奉公日につき「宮城遥拝」を行う
7月20日 [小]2～6年生(20～16回生)夏季鍛錬行事を実施。例年の海・山の生活は中止。前年健田村で買った家を漁業組合事務所に移築したが戦後まで使えなかった
9月15日 [小]5年生(17回生)富士岳麓1泊学習(1泊)
9月25日 [小]城山を中心に強歩訓練を行う
10月7日 [小]4年生(18回生)足尾銅山方面1泊学習(1泊)
11月7日 [小]井の頭映画館で「空の神兵」を鑑賞
11月18日 小学校から20日に行う学園～多摩川河原間の重量負担訓練実施について、保護者にお知らせを配布
11月22日 戦時教育協会が私立小学校廃止の提案をする
11月29日 照井猪一郎初等部長は、戦時教育協会に出席して反対意見を述べる
12月8日 [小・女]大詔奉戴式後、大宮八幡宮・氷川神社・大国魂神社を徒歩で参拝する

〈1943年〉

- 1月 [旧]中学校5年生(11回生)5名が、米英撃滅射撃大会に出席
1月 [小]小学校では西荻映画館で「ハワイ・マレー沖海戦」を鑑賞
2月23日 小学校で保護者宛てに非常保有米1人2合宛て供出の依頼状を出す
3月13日 [小]児童工作展覧会(2日間)
3月20日 [小]卒業生送別学会、茶話会

卒業：[小]第16回(16回生)、[女・旧]第11回(11回生)

1943(昭和18)年度 <19周年>

入学：[小]第20回(22回生)、[女・旧]第16回(16回生)

- 4月13日 小学校で保護者宛てにランドセルを廃止しリュックサック使用、常時携帯品、始業時間等について連絡
4月21日 上田八一郎中学校長が士官学校で一泊見学

- 4月 [小]集団継歩を行う
5月14日 [中]宮城(皇居)外苑整備や、小金井国民練成所での勤労奉仕を行う
5月22日 小学校で保護者宛てに「翌23日は日曜であるが前週に続き4・5・6年生(19・18・17回生)の算数学習の実際を行うので必ず参加するよう」呼びかける
5月23日 初等部授業公開、小・中・女3部合同父母総会。照井初等部長が時局の話をする。出席率は82%。学園創立20周年記念事業講演会、学園設備拡充の醸金を保護者に呼びかけ
6月10日 [小]6年生(17回生)水戸・日立へ修学旅行(日帰り)
7月24日 [小]5・6年生が八王子～学園間を夜間行軍
9月30日 [旧]全校生徒が小金井国民練成所で勤労奉仕
9月30日 [女]生徒防空心得を作成
9月 小学校で戦時下児童防護に関する父母総会
9月 [女]1学期の生物発表会
10月7日 [小]詳細なプランを立てたが悪天候のため中止となっていた学園～甲府間の長距離部隊伝継歩を8日に実施すると保護者にお知らせ
10月8日 [小]学園～甲府間の長距離部隊伝継歩
11月2日 [旧]2年生、拝島農園へ農作業に行く
11月16日 小学校教師全員が暁星小学校で催された私立学校研究会に出席

〈1944年〉

- 2月24日 [女]第12回卒業生を送る集い
3月26日 小学校では教職員の人手不足について保護者に通知

卒業：[小]第17回(17回生)、[女・旧]第12回(12回生)

1944(昭和19)年度 <20周年>

入学：[小]第21回(23回生)、[女・旧]第17回(17回生)

- 4月 [女]勤労動員が発令され女学部生徒は立川の昭和飛行機(株)へ出勤。また中・女学校の校舎が三鷹航空会社の工場として接収される
5月4日 [小]高尾山・城山・景信山の強歩訓練計画を立てる
5月4日 [旧]5年生(13回生)25名に豊和重工業(株)から出勤内定書が来て、5月25日から出勤

5月6日	小学校ではこの年の生徒運送区間および受継地時刻の表と非常帰宅班別表を作成し保護者に配布
5月15日	創立記念日（20周年）
5月18日	学園創立20周年記念式典
5月8日	[小・女・旧]3部合同で、電車班と徒歩班に分かれ、非常帰宅訓練が行われる
6月18日	警戒警報が発令され、小学校では教室・防空壕で初の実戦避難を行う
6月	[旧]4年生（14回生）が掩蓋のある退避壕をつくる
7月21日	[旧]3・4年生（15・14回生）が豊和重工業へ動員
7月22日	小学校で戦時非常措置法案に対する対策について保護者説明会を開催する
8月7日	小学校が夏季指導の予定表を保護者に配布
8月10日	[小]4・5・6年生（20・19・18回生）の夜行軍を行う
9月22日	[小]全員が4班に分かれ、奥多摩山岳訓練を行う
9月29日	[旧]1・2年生（17・16回生）が景信山に登山
10月10日	小学校でこの冬の暖房装置抜きの学習について保護者に説明
11月	[小]5・6年生（19・18回生）、教師とともに運動場に防空壕作り
11月24日	動員されている豊和重工業が空襲を受けるが生徒は無事
11月24日	小学校で第一次待避壕掩蓋用材供出計画を保護者に連絡
11月29日	小学校で学園隣組名簿を作成
11月	小学校母の会が布片・古綿を持ち寄り先生の宿直用夜具を作るよう呼びかける
12月1日	[旧]中学校生徒が船舶無線に勤労働員
12月3日	[小]5・6年生（19・18回生）が日曜日に出校し防空壕を整備する
12月4日	[小]中島飛行機工場空襲のため電車不通、児童たちは徒歩で登下校
12月20日	[小]小学校の防空壕10箇所が完成、さつま芋でお祝い
〈1945年〉	
1月1日	このころ、連日B29の空襲あり
1月28日	小学校第3学期の教育について父母総会を開く
2月13日	[旧]中学校舎は三鷹航空の学校工場となり作業開始
2月22日	[旧]荻窪以西停電のため、生徒は豊和工

	業工場から徒歩で帰宅
3月10日	東京大空襲
3月14日	小学校で授業の終始と4月までの予定について保護者に連絡
3月17日	[小]6年生（18回生）卒業餅つき会
3月28日	[女][旧]戦時下の非常体制（中等学校令修業年限短縮）により5年生（13回生）と同時に4年生（14回生）も卒業させられた
卒業：[小]第18回（18回生）	
[女・旧]第13回（13・14回生）	

1945（昭和20）年度

< 21 周年 >

入学：[小]第22回（24回生）、[女・旧]第18回（18回生）	
4月13日	東京・城北（豊島区）大空襲
4月14日	[小]全父兄会開催（本年度の教育施設大綱と当分の緊急事項）
5月28日	空襲あり。28日は阿佐ヶ谷地区、29日は永福町地区。焼夷弾で被爆のため児童生徒の家多く焼失。また、教師たちの身辺整理のためこの2日間臨時休校
7月18日	小学校校庭付近をグラマン艦載戦闘機が空襲、全員学校の防空壕に避難
8月15日	敗戦の日。在京教職員は各部職員室でラジオの玉音放送を聞く
8月20日	この週より授業開始
8月22日	小・中学校の校舎・講堂に厚木の陸軍撤収部隊（百数十名）が31日まで駐留。この間5・6年生（20・19回生）が学校菜園で作ったカボチャを提供
9月	[小]疎開した小学校児童の帰校が始まる
9月4日	[小]本格的授業を開始
9月	三鷹航空の工場となっていた中学校・女学校の校舎、教室に復する
10月23日	[小]靖国神社例大祭に勅使参拝の儀があり休校
11月3日	[女・旧]第1回明星祭を開催
11月8日	[旧]相模川河原へ遠足
12月1日	[女・旧]合同学芸会（劇と音楽と展覧会）
12月5日	戦時下の体制を改め、8:40始業・15:00終業と定める

〈1946年〉

1月31日	[小]食糧難のため昼食帰宅と昼食弁当について保護者に連絡
2月	小学校父母との教育懇談会で、闇市をめぐる子どもの問題をテーマとする
2月	[小]6年生と全教師が宮城（皇居）の清掃奉仕

- 3月 [女・旧]GHQの指令により、修身・日本歴史・地理の教科書を回収させられる
- 3月 [小]卒業餅つき会。塩餡の御汁粉にして食べる
- 3月5日 [旧]戦時体制につき、5年生（14回生・25名）と4年生（15回生10名）同時に卒業
[女]4年生（15回生・34名）卒業式
- 3月21日 [小]第19回（19回生・59名）卒業式
卒業：[小]第19回（19回生）
[女・旧]第14回（14・15回生）

1946（昭和21）年度

< 22周年 >

- 入学：[小]第23回（25回生）、[女・旧]第19回（19回生）
- 4月 [小]第23回（25回生）、[女・旧]第19回（19回生）入学
- 4月 小学校の教科書は新聞紙大の紙に印刷されたものが1枚50銭で配給され、それを折りたたんで暫定教科書にする
- 4月 食糧の遅配・欠配で小学校の授業継続が困難となり、昆布・食用油などの取り次ぎをすることが授業より急務とされる
- 4月 小学校では学用品も共同購入をして、各学年の備品として教室に保管する
- 5月18日 [女・旧]合同で文化祭開催、劇と音楽の会（第2回明星祭）
- 5月20日 [旧]食料事情悪化のため、この日から授業は午前中だけとする
- 5月27日 [小]食糧事情危機突破対策の父母会を開催
- 5月 [小]疎開帰りや他校からの転入生に対して午後補習学習を始める
- 5月 小学校で各家庭へサツマイモ1貫目、大麦の胚芽粉1貫目120円で配給する（1貫目＝3.75kg）
- 5月 赤井米吉学園長は、石川県に金沢女子専門学園を設立し園長となる
- 8月23日 [旧]1～4年生（19～16回生）用地理教科書と、1年生用歴史教科書が配給される
- 9月19日 全国私立中学校職員大会が、暁星中学校で開かれる
- 9月 [小]多摩川沿岸強歩行（16km）
- 10月1日 男女共学に関して全国職員会議開催
- 10月27日 [女・旧]音楽コンクールの本選に、女・旧混声で出場する
- 11月7日 東京都私立中学校協会の発会式が暁星中学校で行われる
- 11月 小・女・旧3部合同で、憲法発布祝典の儀

- 式を奉祝し、体育祭を催す
- 11月 赤井米吉学園長は教育職員適格審査委員会で「不適格と判定され、教職追放となる

< 1947年 >

- 1月 学制改革により新制中学校が発足
- 1月 小学校で学童用白飴を26匁^{もんめ}3円90銭で配給（1匁＝3.75g）。各家庭への物資取り次ぎも一段落する
- 3月13日 赤井米吉学園長・理事長は、学園長・理事長職を辞任。新理事長は市村今朝蔵氏。学園長は置かず、小・新制中学校校長に照井猪一郎、旧中学校・女学校校長に上田八一郎が就任

- 3月21日 [小]第20回卒業式（20回生・55名）

卒業：[小]第20回（20回生）、[旧]第15回（15回生）

この年度のできごと

- ★5月と10月に女・旧が演劇の会を催している
- ★東京都学事部から食糧事情の対策として夏季休暇を7月11日に繰り上げるよう通達があったのに対し、女・旧は7月6日から8月31日まで夏休みとし、小学校は学力低下防止策と社会情勢の学童への悪影響を考慮して、7月26日から8月10日を休暇、8月11日から8月20日を授業、8月21日から8月31までを休暇とする

1947（昭和22）年度

< 23周年 >

- 4月 新制中学校が男女共学2クラスで発足
*新制中学校を[中]と表記する
- 入学：[小]第24回（26回生）、[中]第1回（20回生）
- 4月14日 [中]新制中学第1回（20回生）入学式
- 4月19日 [女・旧]高尾山へ遠足
- 4月29日 [小・中・女]合同で体育会
- 5月5日 [小・中]体育会
- 5月 [小・中・女]小学校5・6年（22・21回生）、新制中学1年（20回生）、女学校2～5年（19～16回生）が合同で高尾山登山後援会（第2次）と母姉の会が発足
- 11月1日 第3回明星祭（3日まで）開催、1日目展覧会、2日目演劇と音楽の会、3日目運動会
- 11月17日 [小]6年生（21回生）日光旅行（1泊）
- 11月21日 [小]5年生（22回生）箱根旅行（1泊）
- < 1948年 >
- 2月28日 6・3・3制度への移行による生徒増に対応するため校舎増築。新制中学校教室（150坪・井の頭）および新制高等学校2教室（牟礼）が完成
- 卒業：[小]第21回（21回生）、[中]第1回（18回生）
[女]第15回（16回生）、[旧]第16回（16回生）

- * 18回生と19回生は旧制学校の在学中に制度切換えとなった。18回生は旧制中学校・女学校3年生まで過ごした後、この年3月に新制中学校の第1回卒業生として扱われ（卒業式は行われず）、新年度から新制高校1年生となった。19回生は2年生終了時まで男女別学の旧制度で過ごした後、3年生からは男女共学の新制中学校生徒となった。
- * 16回生・17回生は旧制度のまま5年生終了時で卒業するか、新制高等学校に移って更に1年間に在学するかを選択しなければならなかった。このため16回生・17回生に限り、旧制中学校・女学校・新制高等学校の3種類の学校の卒業生が生じた。

この年度のできごと

- ★新年祝賀会を行い、式後10時30分から劇・音楽・福引・会食の会を催す。
- ★旧制中学校・高等女学校・新制中学校によって3月・6月・11月に演劇の会が催される

1948（昭和23）年度

< 24 周年 >

4月1日 新制高等学校が発足

* 新制高等学校を[高]と表記する

入学：[小]第25回（27回生）、[中]第2回（21回生）

[高]第1回（18回生）

- 4月 高等女学校の校舎（井の頭）を新制中学校の教室に専用し、旧制中学校の校舎（牟礼）を新制高等学校の校舎に当て、完全男女共学制となる。旧制中・女学校の生徒（19回生）は共学の新制中学3年生となる
- 5月 [高]GHQから図書を整備その他の指令が出される
- 5月18日 [小]5班編成で高尾山登山
- 5月 新しい校章が完成。美術科・横川武教諭がデザイン。明星学園の「明」の字をモチーフとした
- * 小学校〈赤〉・中学校〈緑〉・高等学校〈黒〉色違いの七宝焼きに「明」の字と金の星をデザインした校章は、現在も引き継がれている
- 7月21日 [小]千倉で戦後初めての夏季生活。小学6年生（22回生）20名ずつ、2班編成で行う（6泊）
- 9月 高等学校では、生徒・教師たちの靴修理のため火・木・土曜日に靴職人が来校
- 10月12日 高等学校新校舎のガラス54枚が盗まれる
- 10月19日 [小]多摩川へ遠足
- 10月29日 第4回明星祭。本格的に復活開催（3日間）、第1回目の仮装大会が行われる
- 11月9日 [小]5班編成で御岳登山を行う。

11月13日 [高]全員で国立博物館の近代日本美術展を見学

<1949 年>

- 3月5日 [高]新制高等学校第1回卒業式（16回生）
- 3月 [女・旧]第17回卒業式（17回生）
- 3月21日 [小]第22回（22回生）、
[中]第2回（19回生）卒業式
- 卒業：[小]第22回（22回生）、[中]第2回（19回生）
[高]第1回（16回生）、
[女]第16回（17回生）[旧]第17回（17回生）

この年度のできごと

- ★旧制中学校・高等女学校の生徒はこの年度が最後の卒業生となる
- ★全園の会議が開けるようになり、新憲法や教育基本法と照合しながら、教育方針を再検討し、私立学校法案の検討も行う
- ★小・中・高一貫化の声が高まり、3部機構改革準備委員会が発足
- ★教職員組合が結成され、橘正薫が委員長となる
- ★[高]高校3年生（16回生）箱根へ修学旅行（日程不明）

1949（昭和24）年度

< 25 周年 >

入学：[小]第26回（28回生）、[中]第3回（22回生）

[高]第2回（19回生）

- 5月2日 [高]御岳と滝山城址へ全校遠足
- 5月15日 創立記念日（25周年）
- 5月18日 創立25周年記念明星祭について職員会を開催
- 5月23日 母姉の会と教育研究所の件について、職員会を開催
- 5月30日 [高]生徒自治会総会
- 7月21日 [小]5・6年生（24・23回生）千倉で夏季生活（各1週間ずつ）、往復に船を利用
- 7月 中学校理科室を新築
- 8月27日 [高]この日から東伏見プールで水泳指導を行う
- 9月25日 「母姉の会」と「後援会（第2次）」を解体し、「明星学園父母教師の会」結成
- 9月30日 [小]多摩川に遠足
- 10月22日 [小・中]合同の体育会
- 10月30日 [小・中・高]創立25周年記念明星祭を開催（11月6日まで）、中・高文芸部が記念誌『明星—25周年記念』を発行。[小]展覧会、[中]展覧会、[高]展覧会、運動会、音楽会
- 11月1日 [小・中・高]25周年記念明星祭の一環として3部合同音楽会

11月 [中・高]文芸部が創立25周年記念『明星』発行

12月3日 高校で平安美術展を開催
〈1950年〉

卒業：[小]第23回（23回生）、[中]第3回（20回生）
[高]第2回（17回生）

1950（昭和25）年度 <26周年>

入学：[小]第27回（29回生）、[中]第4回（23回生）
[高]第3回（20回生）

4月 小・中・高3部連絡委員会が発足
5月3日 [小・中・高]小・中・高で、新1年生歓迎・激励の催しとして集団競歩を行う
5月5日 [小]体育会・展覧会
5月13日 [小]全校で高尾山・城山・景信山・陣馬山へ団体強歩
5月27日 第1回明星学園父母教師の会総会（神田五雄会長）開催
6月5日 『黎明』創刊（中学校自治会の機関紙）
6月6日 [中]川乗山登山
6月9日 市村今朝蔵理事長逝去、上田八郎理事が理事長事務取扱となる
6月9日 前年度に発効された私立学校法により、財団法人から学校法人に変更
6月12日 市村今朝蔵氏の早稲田大学経済学部葬に、学園全職員が参列
6月29日 [中]音楽鑑賞会
7月19日 [中]軽井沢上野原寮にて夏季生活（3班に分かれて各6泊7日、8月6日まで）
7月21日 [小]5・6年生（25・24回生）千倉で夏季生活（各1週間）、往復に船を利用（帰路船が来ず館山に1泊ののち鉄道で帰る）
9月30日 [小]全校で、御岳・日の出山・大岳・鋸山登山
10月10日 [中]2・3年生（22・21回生）伊豆大島見学旅行、1年生（23回生）箱根見学旅行
10月15日 [小・中・高]明星祭（11月3日まで）。第一部の体育会「運動の日」
11月1日 [小・中・高]明星祭第二部の文化祭（3日まで）

〈1951年〉

2月27日 神田五雄氏が理事長就任

卒業：[小]第24回（24回生）、[中]第4回（21回生）
[高]第3回（18回生）

1951（昭和26）年度 <27周年>

入学：[小]第28回（30回生）、[中]第5回（24回生）
[高]第4回（21回生）

5月2日 [中]玉川上水沿いで集団ウォーキングレース
5月21日 小・中一貫の校外学習プランについて父母に通知
5月25日 [中]1年生（24回生）が箱根外輪山歩き
5月 小学校で2週制時間割の吟味やカリキュラム研究会
5月 [小]御岳・高尾登山を復活。10月にも行う
5月 [中]1年生箱根外輪山縦走
5月 [中]2年生伊豆大島見学旅行
5月 [中]3年生北伊豆史跡巡り
6月14日 [中]音楽鑑賞会
6月25日 [中]体育会
6月 [小]『明星タイムス』創刊（小学校自治会機関紙）
7月21日 [小]5・6年生（26・25回生）千倉で夏季生活（1週間）
7月 [中]川苔山・丹沢山登山
7月 [中]軽井沢上野原寮で夏季生活
7月 [高]上高地・伊東・軽井沢で夏季行事
7月 [小]地域別グループ学習を行う
9月26日 [中]7年生奥多摩登山
9月 [小]1～6年生（30～25回生）御岳山登山復活
10月3日 赤井米吉元学園長の教職追放が解除
11月1日 [小・中・高]全園で明星祭開催、音楽・劇・展覧会美術展・染色展等発表が行われる（4日間）。演劇の日
11月3日 音楽の日・文化の日
12月7日 全園職員会開催、赤井米吉元学園長の追放解除に伴う学園顧問・理事に復帰の件

〈1952年〉

卒業：[小]第25回（25回生）、[中]第5回（22回生）
[高]第4回（19回生）

1952（昭和27）年度 <28周年>

入学：[小]第29回（31回生）、[中]第6回（25回生）
[高]第5回（22回生）

5月16日 高校では昼食のパン販売を業者に委託する
5月18日 [小・中・高]学校劇「杜子春」公演（小・中・高児童生徒合同出演劇）

5月30日 [高] 河口湖・西湖へ遠足
 6月 明星学園PTA（会長は高田止戈^{しかを}氏）が新発足。機関紙『明星学園PTA会報』を創刊（PTA会報『道』の前身）
 6月 [高] 甘利山へ登山
 6月19日 学内進学問題検討のため全園職員会開催。この後は定期的に全園職員会が開かれるようになる
 6月25日 [小・中・高] 音楽会
 7月1日 [小] 7月18日までの間に、水泳指導・水辺学習・緑陰学習を行う
 7月 [中] 夏の学級編成をし、1・2年生（25・24回生）は9泊、3年生（23回生）は6泊、順々に軽井沢で林間生活
 7月 [高] 1・2年生（22・21回生）有志、上高地・軽井沢・伊東で夏季行事
 7月 [高] 3年生（20回生）志賀高原熊の湯へ修学旅行（2泊）
 7月22日 [小] 5・6年生（31・30回生）は3班に分かれて千倉で夏季生活
 9月25日 [中] 2・3年生これまでの登山経験を踏まえて、丹沢山・塔ヶ岳への本格的登山に挑戦
 10月10日 [高] 運動会
 11月1日 [小・中・高] 明星祭（3日間）。1日目/球技とダンス、2日目/音楽の会・展覧会、3日目/演劇の会・展覧会
 〈1953年〉
 2月20日 [小] 小学校6年生が中学校で外部の応募者と同時・同条件で入試を受ける
 2月27日 [中] 中学3年生が高校で入試および一日入学を体験する
 3月16日 小・中学校の父母が、高校を参観
 3月20日 [小] 卒業生送別学芸会と、餅つきの会
 卒業：[小] 第26回（26回生）、[中] 第6回（23回生）
[高] 第5回（20回生）

1953（昭和28）年度 < 29周年 >

入学：[小] 第30回（32回生）、[中] 第7回（26回生）
[高] 第6回（23回生）
 4月29日 [中] ウォーキングレース
 5月 [中] 1年生（26回生）北伊豆、2年生（25回生）日光奥湯元、3年生（24回生）三浦半島旅行
 6月7日 赤井米吉元学園長が理事長に就任
 7月8日 [中] サマースクール学習実施（16日まで）
 7月10日 [小] 17日まで夏季学校を行う

7月20日 [中] 軽井沢上野原寮生活（7泊）
 7月21日 [小] 5・6年生（28・27回生）3班編成で、各班1週間ずつ千倉で夏季生活
 7月下旬 [高] 1・2年生（22・23回生）1週間軽井沢上野原寮で林間生活
 7月 [高] 3年生（21回生）上高地へ修学旅行
 8月 小・中・高校の校舎増改築に関し、意見まとまらず、本年は見送りとなる

<1954年>

3月3日 [小] 1・2・3年生がひな祭りを行う
 卒業：[小] 第27回（27回生）、[中] 第7回（24回生）
[高] 第6回（21回生）

この年度のできごと

★9月に照井げんが学制発布80周年を記念して、文部省から教育功労者として表彰される。

1954（昭和29）年度 < 30周年 >

入学：[小] 第31回（33回生）、[中] 第8回（27回生）
[高] 第7回（24回生）
 4月 小学校2・3年生教室増築
 4月7日 [中] 中学校で新3年生と職員の懇談会開催
 4月27日 [中] 中学校で生徒自治会の総会開催
 4月 高校に校長室を新設
 5月15日 創立記念日（30周年）。記念式典・祝賀会、物故功労者・物故職員・戦病死卒業生慰霊祭を挙行
 5月 教育研究推進委員会が発足し、明星学園指導要領編成、校外見学・旅行系統再編成を行う。また全園統一カリキュラムを編成し、実施段階に入る
 5月 [小] 高尾山・城山・小仏峠・景信山登山
 6月6日 PTA主催の運動会開催
 7月19日 [中] 1・2年生（27・26回生）多摩川の河原で1泊キャンプ、3年生（25回生）軽井沢上野原寮で林間生活
 7月21日 [小] 5・6年生（29・28回生）3班に分れて千倉で夏季生活（各班7泊8日）
 7月28日 [高] 軽井沢上野原寮で林間生活（8月4日まで）
 8月15日 [中] 中学校全員が中間登校
 9月15日 [中] 中学校で川苔山登山
 10月17日 [小・中] 合同体育会
 10月28日 [高] 音楽会と人形劇
 10月30日 [小・中] 明星祭（2日間）。音楽会・展覧会
 10月31日 [高] 展覧会
 11月23日 小学校で音楽部の合奏会が行われる

- 11月 全園合同教育研究会開催
 11月 小学校6年生の父母と中学校職員との懇談会開催

〈1955年〉

- 1月21日 中学3年生の保護者が高校を参観する
 1月23日 [中]読書鑑賞会
 3月 [中]3年生が都内見学を行う

卒業：[小]第28回（28回生）、[中]第8回（25回生）

[高]第7回（22回生）

この年度のできごと

- ★教育研究推進委員会が発足し、カリキュラムの編成、明星の指導要領の編成、校外見学、旅行系統の再編成等を検討するが、この会がのちの4・4・4制への糸口となったと思われる
 ★全園を縦に通したカリキュラム編成が実施段階に入る
 ★創立30周年記念事業として振興事業が発足する
 ★私学共済組合に加入する。

1955（昭和30）年度

< 31周年 >

入学：[小]第32回（34回生）、[中]第9回（28回生）

[高]第8回（25回生）

- 4月 [高]高校自治会総会
 5月2日 [中]ウォーキングレース
 5月11日 [高]高校生徒が親睦球技大会開催（18日まで）
 5月22日 [小・中・高]合同の演劇が行われる
 5月 上田八一郎校長が藍綬褒章を受章
 7月15日 [小]5・6年生（30・29回生）3班に分れて千倉で夏季生活（8月4日まで）
 7月 [中]3年生（26回生）軽井沢上野原寮で林間生活
 7月 [中]2年生（27回生）14日から、1年生（28回生）15日から大丹波夏季郊外生活（1泊）
 7月20日 [高]2・1年生（24・25回生）上高地キャンプ、軽井沢上野原寮で林間生活
 7月 [高]高校で染色、木彫の講習会実施
 8月26日 [高]各学年で補習授業を行う（31日まで）
 8月 [小]小学校グループ学習
 9月 [中]2年生（27回生）日光湯元へ見学旅行
 10月4日 [中]川苔山塊、入川谷で遡行訓練を行う
 10月29日 [小・中・高]展覧会、音楽会

〈1956年〉

- 2月 千葉県千倉町の青木太一郎氏の庭に学校寮を建設（80余坪、125万円）、「千倉寮」と命名。千倉寮は、「瀬戸寮」とも呼ばれる
 2月26日 中学校で小学校6年生（29回生）が内部進

学テストを受ける

- 3月2日 高校で中学3年生（26回生）が学内進学テストを受ける

3月3日 [小]3年生主催で雛祭り

3月9日 [中]学園会（生徒会）総会、卒業生送別会開催

3月 小学校研究会を開催（以降毎年）

3月 [高]高校で学園会（生徒会）の常任委員が、靴の泥ぬぐいをつくる

3月 [高]生徒が遠足と球技の親睦行事を実施

卒業：[小]第29回（29回生）、[中]第9回（26回生）

[高]第8回（23回生）

この年度のできごと

- ★高校校地拡張（振興事業計画のひとつとして）3,670㎡を拡張
 ★創立30周年記念事業推進のため振興会から第1回500万円の借入をする
 ★第2回教育研究会が行われる
 ★創立30周年記念・振興事業について複数案が出され、父母に協力を依頼する文書が出される（12月）

1956（昭和31）年度

< 32周年 >

入学：[小]第33回（35回生）、[中]第10回（29回生）

[高]第9回（26回生）

- 7月 [高]軽井沢の寮で英・数・国の学習（2週間）
 7月13日 [中]2年生（28回生）軽井沢で夏季生活（2班に分かれて4泊、21日まで）
 7月14日 [小]千倉寮で5・6年生（31・30回生）が交替で3週間の夏季生活（8月4日まで）
 7月18日 [小]1学期学習納涼会
 7月19日 [中]軽井沢で夏季生活（9泊）
 7月22日 [高]上高地キャンプ（8泊）
 8月 [中]1年生（29回生）小学生と入れ替わりに千倉寮で臨海生活。

*この年PTAから大量の布団・毛布が千倉・軽井沢の寮へ寄付される

8月6日 [高]2・3年（25・24回生）軽井沢で夏季生活（7泊）

8月15日 [小]小学校全校召集

8月 小学校は例年通りグループ別地域学習を行う

8月 小学校校舎、鉄筋コンクリートブロック平屋建6教室（ジグザグ校舎後列）と便所870㎡が完成

10月 中学校木造校舎2階建9教室と便所を新築、講堂を移築

- 10月14日 明星祭（11月18日まで）
 10月27日 [小・中・高] 明星祭展覧会、スライドの会および演劇会（2日間）
 10月28日 [中] 外部中学生向け展覧会
 10月30日 [小・中・高] 文芸春秋社画廊にて明星学園美術展覧会（11月2日まで）
 11月18日 [小・中・高] 明星祭音楽会（於東京女子大講堂）
 11月 [中] 中学3年生（27回生）が関西へ修学旅行

〈1957年〉

- 3月2日 [小] 3年生（33回生）主催の雛祭り
 3月20日 [小] 在学生による卒業式送別会で餅つき
 3月22日 [中] 新校舎へ移転

卒業：[小]第30回（30回生）、[中]第10回（27回生）
 [高]第9回（24回生）

1957（昭和32）年度 < 33周年 >

入学：[小]第34回（36回生）、[中]第11回（30回生）
 [高]第10回（27回生）

- 4月 [中] 校舎建築のため中学生は牟礼の高校キャンパスに移り授業を受け始める
 4月 [中] ウォーキングレース
 6月 高校校舎木造2階建て9教室・便所980㎡が竣工
 5月 [小・中・高] 明星祭春の部、全校共催劇の会を開催
 6月20日 P T A 会報No.38が『道』として内容を充実して刊行される（会長・宮地良三）
 7月10日 [小] 5・6年生（32・31回生）が3班に分かれ千倉寮で夏季生活（30日まで）
 7月15日 [中] 2年生（29回生）軽井沢上野原寮で夏季生活（2班に分かれて25日まで、5泊）
 7月22日 [高] 上高地キャンプ（6泊）
 7月25日 [高] 軽井沢上野原寮、神津牧場へ旅行（31日まで）
 7月31日 [高] 千倉で夏季生活（6泊）
 7月31日 [中] 3年生（28回生）軽井沢上野原寮で夏季生活（2班に分かれて8月15日まで）
 8月7日 [中] 1年生（30回生）千倉・瀬戸寮で夏季生活（2班に分かれて（6泊）
 10月 [中] 学習整理考査と知能検査を実施
 11月25日 第1回教育研究集会開催（小・中・高）
 12月23日 スキー合宿（中・高希望者）（7泊※車中泊含む）

〈1958年〉

- 2月 高校職員室を改造して、受付窓口を新設
 3月 小学校教師が中心となり、明星学園教育研究所が発足。所長は照井猪一郎校長

卒業：[小]第31回（31回生）、[中]第11回（28回生）
 [高]第10回（25回生）

この年度のできごと

- ★小学校の放送施設が改善
 ★高校で教養講座が開かれ、手芸、染色、工芸、華道、英文タイプ、音楽鑑賞が行われる
 ★全国会議で生徒募集、明星祭の件等が検討される
 ★私立中・高助成金倍額運動が起こり、明星学園 P T A も参加

1958（昭和33）年度 < 34周年 >

入学：[小]第35回（37回生）、[中]第12回（31回生）
 [高]第11回（28回生）

- 5月 市村寅之助氏が理事長就任
 5月2日 [中] ウォーキングレースが行われ、秋留台地にコースを設定し、五日市一東秋留間で実施
 5月16日 [中] 学園会の予算会を自主的に実施
 5月28日 [中] アジア競技大会を見学
 6月 高校運動場隣接地495㎡を買収
 7月10日 千倉寮に毛布80枚購入、シャワー完成
 7月15日 [小] 5・6年生（33・32回生）千倉寮生活（3班に分かれて6泊、8月4日まで）
 7月 [中] 夏季行事を実施。学園会（生徒会）の部活動・ハケ岳登山・伊豆伊東での海洋訓練・船舶見学などが行われる
 7月21日 [高] 自治会総会
 夏 [高] 1・2年生（28・27回生）上高地、軽井沢、千倉で希望制夏季生活（6、7泊）
 8月 [中] 1年生（31回生）千倉夏季生活（2班に分かれて5泊）、3年生（29回生）軽井沢夏季生活（2班に分かれて6泊）
 10月11日 小学校校舎鉄筋コンクリートブロック平屋建6教室（ジグザグ校舎前列）750㎡完成
 10月26日 [小・中・高] 明星祭展覧会・演劇会
 10月30日 明星学園美術展開催（於銀座文芸春秋画廊）
 11月22日 [中・高] 明星祭展覧会・合同音楽会
 11月 この頃「明星教育研究所」案として「4・4・4制」が提案され、頻繁に研究会がもたれた
 11月30日 [高] 卒業生を招き受験生に向けて話をしてもらう

〈1959年〉

- 1月 4・4・4制の検討（相当な問題を含むとされたが承認の方向へ傾く）
- 2月20日 **[高]**第11回卒業式（26回生）は市ヶ谷の私学会館講堂で行った
- 3月 全園会議で4・4・4制が承認される
- 3月8日 **[小]**小学校だけの演劇会開催
- 卒業：**[小]**第32回（32回生）、**[中]**第12回（29回生）

[高]第11回（26回生）

この年度のできごと

- ★小学校は年度末1度の通知表をやめ、個別面談で懇談することにした
- ★従来の「教育研究推進委員会」は「教育研究運営委員会」に、「教科代表者会」は「明星教育推進委員会」となる

1959（昭和34）年度

< 35周年 >

入学：**[小]**第36回（38回生）、**[中]**第13回（32回生）**[高]**第12回（29回生）

- 4月 4・4・4制を実施
- *小・中・高12学年を4学年ずつに分け、一貫して1年生から12年生と呼ぶ
- *1～4年生〔低学年部〕を**[低]**、5～8年生〔中学年部〕を**[中]**、9～12年生〔高学年部〕を**[高]**と表記し、さらにそれぞれを2年ずつ前期・後期に分ける
- *4・4・4制実施後も中学校（7年生）、高校（10年生）では従来通り外部から入学する生徒があり、実際には6・3・3制の区分で入学・卒業式が行われた
- *ここからは6・3・3制区分で実施されたものは**[小]****[中]****[高]**と表記し、4・4・4制区分で実施されたものは**[低]****[中]****[高]**と表記する。

- 4月 **[中]**建物の都合で、前期（5・6年生）は小学校校地（井の頭）で、後期（7・8年生）は高学年部の校地（牟礼）で授業を行う
- 4月 **[高]**4・4・4制の実施に伴い、施設設備の合理化、2学期制の採用、行事の整理等を実施
- 5月15日 創立記念日（35周年）
- 7月15日 **[低]**5・6年生（34・33回生）千倉寮生活
- 7月15日 **[中]**7年生（32回生）軽井沢で夏季生活（3班に分かれて4泊、27日まで）
- 7月27日 **[中]**8年生（31回生）軽井沢上野原寮にて夏季生活（2班に分かれて6泊）
- 8月 **[高]**10・11年生（29・28回生）任意参加で上高地・軽井沢寮夏季生活（それぞれ5泊）
- 9月 **[中]**秋の行事を実施
- 9月 **[高]**自転車置き場・放送室・パン売場が

完成

- 9月 4・4・4制実施に伴い、振興事業計画の変更決定
- 10月25日 **[高]**明星祭の一環として、仮装大会
- 10月31日 **[低・中・高]**明星祭PTA展覧会
- 11月1日 **[低・中・高]**明星祭スライドと8mmの会
- 11月8日 **[高]**明星祭演劇会
- 11月22日 **[低・中・高]**明星祭全校音楽会
- 11月29日 **[低]**父親参観日、全園総父母
- 12月9日 **[中・高]**中間テスト（12日まで）
- 12月15日 **[中・高]**文芸部が創立35周年記念誌『明星』発行
- 12月 **[中・高]**スキー行事。この年から中・高校生の希望者を対象に冬休みに実施

〈1960年〉

- 3月5日 小学校の演劇会開催（2日間）
- 3月14日 **[低]**この日から小学校各クラスで個人別懇談会が開かれる
- 3月18日 **[中]**中学校全校で都内見学を行う
- 3月 **[中]**研究集会開催
- 卒業：**[小]**第33回（33回生）、**[中]**第13回（30回生）

[高]第12回（27回生）

この年度のできごと

- ★小・中・高合同職員研修会（年6回）を実施
- ★全園研究集会が開かれる
- ★全園父母会開催、新体制と事業計画への理解を求める
- ★学園の全面的な推進のために「企画推進委員会」が設けられ、翌年まで続く
- ★校内評議員会を強化、校内理事会を定期的に開催
- ★照井猪一郎校長から1億円の資金造成の必要が発表される
- ★赤井米吉理事が藍綬褒章を受章

1960（昭和35）年度

< 36周年 >

入学：**[小]**第37回（39回生）、**[中]**第14回（33回生）**[高]**第13回（30回生）

- 4月8日 学校の第37回（39回生）入学式に全学園の教師・児童・生徒代表が参列。4・4・4制一貫教育により、入学は1年、卒業は12年の時をたてまえるとする
- 4月19日 「明星学園教育のあゆみ」の試案を発表
- 5月12日 **[低]**1～4年生（39～36回生）が高尾・城山・景信山へ登山
- 5月14日 **[高]**ホーム・ルームの日
- 5月18日 **[高]**富士五湖周辺遠足
- 5月 明星学園教育研究所編『親と子どもの幼稚園、保育園』を門書房から刊行
- 5月29日 全園総父母会開催

- 6月22日 安保問題に関する声明文を保護者宛に配布
 6月 軽井沢上野原寮と千倉寮の施設を増強する
 6月 振興事業推進のため、事務局臨時部に担当理事を置く
 7月18日 **[高]**上高地生活（6泊）
 7月19日 **[中]**5・6年生（35・34回生）千倉寮生活（3班に分かれて8月8日まで）
 7月19日 **[中]**7・8年生（33・32回生）軽井沢上野原寮生活（5班に分かれて8月13日まで）
 7月25日 **[高]**裏磐梯高原生活（5泊）
 8月7日 **[高]**三浦臨海生活（5泊）
 8月13日 **[高]**軽井沢上野原寮生活（5泊）
 9月 後援会（第3次）結成。学園創立30周年記念事業として計画された校舎の増改築などを進めるために発足。会長は武者小路実篤氏
 9月 管理棟、低・中特別教室1棟着工
 10月9日 **[低・中・高]**明星祭。体育会、仮装大会、展覧会、演劇会、スライド会、音楽会などを11月20日までの土日ごとに開催
 10月30日 明星祭の一環として「第一回幼児の作品展」
 10月 後援会が振興事業後援のための寄付金募集
 11月22日 **[高]**明星祭の一環として音楽の会
 12月26日 高校旧校舎の一部を取り壊し、体育館の新築に着手
 12月 **[中・高]**スキー行事
〈1961年〉
 1月15日 管理棟・小・中学校の特別教室棟（鉄筋コンクリート2階建7教室）が完成
 2月 **[中]**中学校後期7・8年生（33・32回生）の教室を新たに完成した特別教室に移し、前期5・6年生（35・34回生）と同じ井の頭校地で生活開始
 3月中旬 **[低]**演劇の会。流感と特別教室建築のため遅れて開催
 3月 高校の第13回卒業式（28回生）に全園児童・生徒の代表が参列
 3月 千倉寮で全園研修会を開催（2泊3日、小は1956年から、中は1960年から催していた研究集会をこの年から全園で開催）

卒業：**[小]**第34回（34回生）、**[中]**第14回（31回生）

[高]第13回（28回生）

この年度のできごと

★照井猪一郎校長が藍綬褒章を受章

1961（昭和36）年度

< 37周年 >

入学：**[小]**第38回（40回生）、**[中]**第15回（34回生）

[高]第14回（31回生）

- 5月 全園保護者会で本年度教育方針を説明
 5月23日 **[中]**6年生（35回生）北関東・南奥羽方面見学旅行（2泊）
 7月10日 **[低]**4年生（37回生）千倉移動教室（2班に分かれて2泊）
 7月16日 **[中]**7・8年生（34・33回生）軽井沢の寮と浅間連峰高峰高原で夏季生活（3班に分かれて各6泊）
 7月18日 **[中]**5・6年生（36・35回生）千倉寮夏季生活（3班に分かれて各6泊）
 8月27日 全園研究集会—みたけ会場（2泊3日）
 9月 文部省による全国一斉学力調査には全園不参加と決定
 9月 **[中]**夏休みの作品展・生活発表会
 9月 教育研究会企画委員会発足
 10月22日 **[高]**仮装大会
 10月28日 **[高]**展覧会・劇の会・音楽の会（2日間）
 11月 高校に第1体育館（965㎡）完成
 11月21日 第1回公開研究会を開催（火・水曜日2日間）。各地から参加者が多数来校
 12月 **[中・高]**スキー行事

〈1962年〉

- 2月 全園会議に於いて昨年12月決議（第1回公開研究会の件）の確認
 3月25日 全園研究集会を校内で開催。教科構造、授業の研究、生活指導について討議。第2回公開研究会開催について（2日間）

卒業：**[小]**第35回（35回生）、**[中]**第15回（32回生）

[高]第14回（29回生）

この年度のできごと

★始業と下校および通学路を変更

★第1回公開研究会の反省会が開かれ議論が沸騰

★玉川上水南側に用地購入、高校校地拡張（三鷹市牟礼高山、2,640㎡）

1962（昭和37）年度

< 38周年 >

入学：**[小]**第39回（41回生）、**[中]**第16回（35回生）

[高]第15回（32回生）

- 7月 大学設置問題が起こる
 7月 中学年部敷地拡張（284㎡）
 7月17日 **[中]**5・6年生千倉夏季生活（班別、2週間）
 8月 小・中学校の教師多数が各地の民間教育団体の研究集会に参加

- 9月 [中] 9年生 (33回生) 関西へ修学旅行 (この翌年から1966年まで中等部の修学旅行は8年生で行った。試行錯誤の期間だった)
- 10月 [高] 明星祭。高校ではクラブ活動・自治会活動により明星祭を行う
- 10月21日 [高] 明星祭の一環として仮装大会
- 10月27日 明星祭の一環として上演と展示 (28日まで)
- 10月 高校で生活態度の指導方策について公開研究会開催
- 11月22日 第2回公開研究会開催 (2日間)
- 12月 小学校新1年生と高校新10年生の募集数について、学園経営上と38年度の生徒数急増の实情に立って、10年生は増募せずとの決定の再考を希望する教職員と、少数精鋭の運営により2学級に限定する主張とがあったが、理事会は従来の方針で進めることを決定する

〈1963年〉

- 1月6日 [中・高] 志賀高原スキー行事 (5泊6日)
- 2月 1929年完成の講堂 (井の頭) を老朽化のため取り壊し
- 2月 P T A、活動の能率化・機構化を目指し規約改定案が立案
- 3月19日 P T A 規約改定案、否決される
- 3月21日 全園卒業式。卒業式の開き方も毎年模索されていた
- 3月 千倉寮で研究集会開催。小・中は全教師、高校は代表が参加。昨年の授業研究をもとに討議を進め、全員で分担し全教科に当り授業のパターンについて究明
- 3月 学校内で研究集会。高校1年生用の改定指導要領と学園の教科課程との関係を教科別に吟味。統一テスト対策、授業の研究等が行われる

卒業：[小] 第36回 (36回生)、[中] 第16回 (33回生)

[高] 第15回 (30回生)

この年度のできごと

★第2回全国一斉学力調査は不参加

★校内理事任期満了につき後任対策——校内評議員会を推薦委員会とし、推薦答申、校長はこれを吟味の上、承認。理事長認証決定の手続きを決める

1963 (昭和 38) 年度

< 39 周年 >

入学：[小] 第40回 (42回生)、[中] 第17回 (36回生)

[高] 第16回 (33回生)

- 4月 [高] 10年生が5クラスになる

- 4月21日 多磨霊園にて学園功労者・茶郷基氏の30年祭
- 4月 事務局に P T A 専任事務、伊東欣一氏就任
- 5月 創立40周年記念行事と、記念事業企画の構想立案
- 6月14日 橘正^{まさしげ} 全園教務 (58歳) 逝去。同月4日に開かれた P T A 会議の半ばに倒れ、14日に逝去
- 7月17日 [高] 10・11年生 (33・32回生) 上高地で林間生活 (5泊)
- 7月17日 [中] 5・6年生 (38・37回生) 千倉寮夏季生活 (6泊/2班に分かれて7月30日まで)、7・8年生 (36・35回生) は軽井沢夏季生活 (5泊/4班に分かれて8月6日まで)
- 7月 生徒募集問題は、新10年生の質向上、男女均衡等の理由から増募し、5学級編成とすることに決定。新7年生は1学級減らすことに決定、小・中・高の児童生徒の募集推進主任を原田満寿郎に決定
- 8月1日 [高] 10・11年生 (33・32回生) の有志が千倉寮生活 (5泊)
- 8月6日 [高] クラブ単位で軽井沢上野原寮生活 (14日まで)
- 8月7日 P T A が千倉寮生活 (6泊)
- 8月17日 P T A が軽井沢上野原寮生活 (6泊)
- 9月 理事会開催。東京神学大学校地買収、中学校校地 (荻野邸1,122㎡) 買収について
- 10月13日 井の頭校地に第2体育館落成
- 10月13日 明星祭、体育会、仮装大会開催 (20日まで)
- 11月22日 第3回公開研究会開催 (2日間) 各教科教育の徹底
- 11月 P T A 主催・父母のための1日教室開催 (国語・理科・歴史)
- 11月 [高] 演劇の会「ひとりっ子」(武蔵野公会堂)、2月11日にも再演
- 12月 P T A 文化部主催で公開教育研究集会の反省会

〈1964年〉

- 1月 [中・高] スキー行事
- 1月13日 市ヶ谷の私学会館で P T A 主催の私学助成金増額要求集会が行われ、高校生1人最低3,000円補助するよう東京都へ陳情
- 1月 中学校校舎建設中間報告、日照権問題で北側住民が反対
- 2月25日 創立同人照井猪一郎小・中学校長逝去 (76歳)

2月 P T A会費、教師からの徴収をP T A総会で決定

2月 理事会開催。神学大学校地買収の件、中学校校舎建築反対陳情について、清里学園寮建設について

3月2日 照井猪一郎小・中学校長学園葬。
小・中学校長は上田八郎高校長が兼務

卒業：[小]第37回（37回生）、[中]第17回（34回生）
[高]第16回（31回生）

この年度のできごと

- ★教育研究の方針を、①前年度の方向を発展させる形で「教科の理論と授業」を明確にすること、②授業研究を整理して授業のパターンをはっきりさせること、③教科論と教科の構造をはっきりさせること、とした
- ★父母対象の教科別講座（保健体育、美術、国語、理科、社会、数学）を開催。

1964（昭和39）年度 < 40周年 >

入学：[小]第41回（43回生）、[中]第18回（37回生）
[高]第17回（34回生）

4月 照井猪一郎先生の蔵書をもとに「照井文庫」が誕生

5月15日 創立記念日。40周年記念式典を挙げる。P T Aから祝菓子が贈呈される

7月17日 [中]5・6年生（39・38回生）千倉寮夏季生活（6泊/2班に分かれて7月30日まで）

7月24日 市村寅之輔理事長逝去
新理事長に衣笠武夫氏が就任

7月 [高]合唱コンクール

7月22日 [高]12年生（32回生）、東北へ修学旅行（5泊）

9月 市村寅之輔理事長の追悼式

9月 赤井米吉著『愛と理性の教育』刊行（平凡社）

10月4日 [低・中]明星祭合同運動会

10月24日 [高]明星祭仮装大会

11月20日 [高]明星祭演劇の会

11月21日 第4回公開研究会開催（2日間）

11月 赤井米吉理事が勲4等瑞宝章を受章

12月5日 新校舎参観

12月8日 中学校校舎鉄筋コンクリート4階建16教室が完成

< 1965年 >

1月 東京都庁へ私学助成金増額の陳情

1月 [中・高]スキー行事

2月26日 [高]演劇の会「島」（武蔵野公会堂）

2月 高校特別教室1棟増築の資金8,000万円の

対策を練る

2月 事務局移転、旧初等部より管理棟へ移す

3月 高校特別教室棟完成

3月31日 創立同人照井げん退職

卒業：[小]第38回（38回生）、[中]第18回（35回生）
[高]第17回（32回生）

この年度のできごと

- ★明星教育の未来像について、教育研究企画委員会案で立案される

1965（昭和40）年度 < 41周年 >

入学：[小]第42回（44回生）、[中]第19回（38回生）
[高]第18回（35回生）

4月1日 上田八郎小・中・高校長、長期病気のため小・中学校長問題がおこり、その結果「全園主事」の職制を設け原田満寿郎が就任

5月9日 [低・中・高]全園父親参観日

5月15日 創立同人照井げんが名誉教諭となる

5月19日 [中]5年生（40回生）伊豆大島、6年生（39回生）霞ヶ浦、7年生（38回生）日光湯元旅行

5月 [低]全校で御岳山へ登山

6月1日 小・中学校に図書室開設

6月 [高]仮装大会

7月10日 [高]合唱コンクール

7月16日 上田八郎小・中・高校長逝去（75歳）、勲6等瑞宝章授章

7月18日 上田八郎小・中・高校長学園葬

7月19日 [中]5・6年生（40・39回生）が千倉寮で夏季生活（31日まで）、壁新聞「赤帽タイムス」を発行

7月19日 [中]軽井沢上野原寮で夏季生活（8月3日まで）

8月1日 赤井米吉理事が学園長就任

9月 [低]全校（1～4年生、44～41回生）高尾・景信山登山

10月 高校教師が公立中学教師と教育問題懇談会をもつ

10月5日 来年度の児童・生徒募集を全園で呼び掛け

10月10日 [低・中]合同運動会

10月17日 [高]明星祭（24日まで）

11月20日 第5回公開研究会開催（2日間）

11月 卒業生に募金趣意書を配付（同窓会館建設と学園後援のため）、目標金額7,500万円

12月24日 [高]武蔵野公会堂にて音楽会

12月27日 小学校長に寒川道夫、中学校長に上川淳、高等学校長に恩地邦郎が就任

〈1966年〉

1月 小冊子「経営面から見た明星学園」を保護者宛に配付
2月12日 全園父母会開催、学園の教育と運営問題の説明
2月 立野梅夫校医逝去
3月 高校特別教室（鉄筋コンクリート陸屋根地下1階付4階建て1,735㎡）完成

卒業：[小]第39回（39回生）、[中]第19回（36回生）
[高]第18回（33回生）

1966（昭和41）年度 < 42周年 >

入学：[小]第43回（45回生）、[中]第20回（39回生）
[高]第19回（36回生）

5月15日 創立記念日（42周年）記念式典挙行。上田八一郎校長のレリーフ除幕式、高等部新校舎披露、串田孫一氏講演会、明星会主催のアトラクションなど

5月 1～4年生を初等部、5～8年生を中等部、9～12年生を高等部と名称変更

*以降、初等部1～4年を[初]、中等部5～8年を[中]、高等部9～12年を[高]と表記する。6・3・3制区分で実施されたものは[小][中][高]と表記する

6月2日 [初]工作研究会開催、幼稚園の教師も参加
6月8日 月刊誌『日本』7月号に、「愛の明星が誇りの麻布か」という評論が掲載される

6月26日 [高]仮装大会
7月5日 幼年教育研究会主催の第2回紙工作講習会開催

7月14日 [初]京王プールで水泳教室（2日間）
7月19日 [中]5・6年生（41・40回生）千倉寮で夏季生活（31日まで）

7月23日 清里寮が完成、落成式
7月 [初・中]例年通りの夏季行事
7月16日 [高]12年生（34回生/5泊）と11年生（35回生/4泊）が東北へ修学旅行。翌年から高校修学旅行は11年時に変更するため、この年は2学年同時に実施した

9月21日 [初]1～4年生（45～42回生）を4コースに分け景信山登山

10月9日 [初・中]合同運動会

10月15日 [高]明星祭（2日間）

10月30日 [高]体育祭

11月22日 第6回公開研究会開催（2日間）

12月24日 [中]音楽会（武蔵野公会堂）

〈1967年〉

1月28日 [高]音楽会

3月1日 [初]音楽と劇の発表会

3月23日 千倉寮で小・中学校合同合宿研究会開催、高校は学校で研究会開催（3日間）

卒業：[小]第40回（40回生）、[中]第20回（37回生）
[高]第19回（34回生）

1967（昭和42）年度 < 43周年 >

入学：[小]第44回（46回生）、[中]第21回（40回生）
[高]第20回（37回生）

5月14日 [初・中・高]創立43周年祝賀行事として、小・中学校は体育会を、高校は音楽会を、同窓会はアトラクションを行う。

5月21日 [初・中]合同運動会

6月1日 [初]伊豆大島三原山登山

6月11日 [高]仮装大会

6月16日 [高]演劇教室

7月10日 [初]三鷹台プールで小学校水泳指導（14日まで）

7月17日 [中]7・8年生（40・39回生）清里寮生活。3班に分かれ、それぞれ4泊。1班は60人程度で登山コースもA・B・C班に分かれた（31日まで）

7月19日 [中]5・6年生（42・41回生）が千倉寮で夏季生活（31日まで）

7月20日 [高]11年生（36回生）東北へ修学旅行（5泊6日）

9月26日 [初]景信山登山

10月14日 [高]明星祭、講演会とクラブ発表会（2日間）

10月20日 [中]5～8年生（42～39回生）が奥多摩登山
11月13日 小学校で幼児音楽研究会を開催

11月24日 第7回公開研究会開催（25日まで）

12月19日 [中]音楽会、創作ダンス発表会（武蔵野公会堂）

12月24日 [高]有志が八ヶ岳でスケート行事（28日まで）

12月27日 [高]スキー行事（31日まで）

12月 [高]12年生（35回生）の樋口豊君が、フランスで行われる冬季オリンピックにフィギア・スケートの日本代表で出場、歓送会が開かれる

〈1968年〉

1月6日 [中]スキー行事（11日まで）

1月27日 [初]三鷹公会堂で「白雪姫」を観劇

2月24日 [中]“猪忌”としてマラソン大会

- 2月25日 『残照』（照井猪一郎遺稿集）刊行（佑啓社）
- 3月6日 **〔初〕**民話と童謡を主題とした劇と音楽の会開催（武蔵野公会堂）
- 3月13日 **〔中〕**学習発表会（15日まで）
- 3月23日 小・中・高合同の教職員合宿研究会開催（2日間）。テーマ「1969（昭和44）年度の教育について」

卒業：**〔小〕第41回（41回生）、〔中〕第21回（38回生）**

〔高〕第20回（35回生）

この年度のできごと

★鈴木平三郎三鷹市長から学園児童・生徒に総額10万円の助成金交付。全国初の私学に対する市助成のさきがけとなる。

1968（昭和43）年度

< 44 周年 >

入学：**〔小〕第45回（47回生）、〔中〕第22回（41回生）**

〔高〕第21回（38回生）

- 4月20日 軽井沢の土地処分について評議員会で検討
- 6月4日 教育研究会（教研）協力者集団の総会開催
- 6月16日 **〔高〕**仮装大会
- 6月 校内教科研究会の日程が決まる。数学（6月27日）、美術（7月13日）、国語、技術家庭（9月17日）、理科（9月27日）、体育（10月22日）
- 7月8日 **〔初〕**水泳指導（17日まで）
- 7月19日 **〔高〕**10年生（38回生）関西へ旅行（22日まで）
- 7月19日 **〔中〕**5・6年生（43・42回生）千倉寮で夏季生活（31日まで）
- 7月下旬 **〔高〕**9年生（39回生）千倉寮合宿（8月上旬まで）
- 8月26日 **〔中〕**新7年生補習授業を実施（30日まで）
- 8月 **〔高〕**補習授業を、9・10・11年生（39・38・37回生）には教科不足の点から、12年生（36回生）には受験指導の点から実施
- 9月 軽井沢の土地を、800坪だけ残し売却。上野原寮（沓掛寮）の使用停止
- 10月2日 **〔中〕**陸上競技記録会を開催
- 10月12日 **〔高〕**明星祭の一環として展覧会（13日まで）
- 10月18日 **〔高〕**演劇の会、「赤い雪」を試演
- 10月27日 **〔初・中〕**父親参観日
- 10月 **〔中〕**音楽コンクール
- 11月30日 **〔高〕**合唱コンクール
- 11月 高校の教師が、公立中学の教師と高校入試の件について研究会を行う

- 11月 高校研修会。教科と教科外の問題について論ずる

< 1969 年 >

- 1月6日 **〔中〕**スキー行事（11日まで）
- 1月17日 全園教職員会の規定を検討
- 2月22日 第8回公開研究会を非公開で開催。第8回は非公開の小研究会とし、各教科ごとの研究をする
- 2月26日 慣行としてあった全園教職員会議規則を成文化
- 3月24日 学園の基本的な問題の研究会開催（3日間）

卒業：**〔小〕第42回（42回生）、〔中〕第22回（39回生）**

〔高〕第21回（36回生）

この年度のできごと

★11月に開催予定だった第8回教研集会は年明け2月に変更

1969（昭和44）年度

< 45 周年 >

入学：**〔小〕第46回（48回生）、〔中〕第23回（42回生）**

〔高〕第22回（39回生）

- 5月15日 創立記念日（45周年）、18日に記念式典
- 5月25日 **〔高〕**仮装大会
- 5月30日 早田勤教諭（高校、社会）逝去
- 6月15日 学園経営懇談会の保護者代表8名が推薦される
- 7月初旬 **〔初〕**三鷹台プールで水泳指導
- 7月13日 父母総会（父母代表による財政再建の報告会）開催。学園常任理事会は再建対策委員の構成を提案
- 7月14日 **〔初〕**3・4年生（46・45回生）千倉寮で夏季生活（21日まで）。※5・6年は中止
- 7月19日 「近代化対策委員会」（再建対策委員会）が発足
- 7月23日 23・24日および9月1～6日、中学校の教育をどう改善するかの研究会開催
- 7月23日 高校で、新任教師を中心とした研究会を開催（2日間）
- 7月25日 13日の父母総会欠席者のために、総会の報告書と近代化対策委員会の発足を併せて全家庭に配布
- 7月 **〔中〕**夏季行事中止
- 8月1日 **〔高〕**9年生（40回生）は千倉寮で夏季合宿（7泊）、10年生（39回生）は伊豆松崎で合宿（7泊）
- 8月20日 **〔初〕**明星学園幼年教育講習会
- 8月22日 **〔高〕**補習授業期間（29日まで）
- 8月 **〔高〕**10年生（39回生）有志が奈良を中心と

した関西旅行

9月13日 [高]明星祭(2日間)

9月 [高]演劇の会

10月中旬 [初][中][高]運動会(初等部/高等部10日、中等部19日)

10月 学園財政健全化5ヶ年計画が、理事・評議員・約10名の在校生父親らによって立てられる

11月1日 近代化委員会の業務を引き継ぎ、新評議員会発足

11月4日 [高]9年生(40回生)、11年生(38回生)が伊豆へ修学旅行(4泊)

11月9日 [中]父親参観日

11月10日 毎日新聞に「明星学園高校で都下反戦高校連の集会有った」旨の記事が掲載されたが、これは誤報で、社研の連合研究会のサークル活動であった

11月29日 第9回公開研究会開催(2日間)

11月 [初][高]演劇の会

12月4日 衣笠武夫理事長が全国教職員会を招集し、学園財政再建について検討

12月18日 [中]音楽会(武蔵野公会堂)

〈1970年〉

1月6日 [中]スキー行事(4泊5日)

1月16日 [初]3・4年生(46・45回生)がスケート行事

1月21日 [初]1・2年生(48・47回生)がスケート行事

2月1日 [高]音楽コンクール(三鷹公会堂)

2月1日 寒川道夫小学校長・上川淳中学校長・恩地邦郎高等学校長が辞任し、鈴木満男が小・中・高校長を兼務する

2月19日 [中]音楽会(武蔵野公会堂)

2月21日 [高]演劇の会

2月25日 [中]マラソン大会

3月8日 [中]生徒全員が山梨県の巨摩中学校で合唱を鑑賞

3月14日 [初]音楽と劇の会(2日間)(三鷹公会堂)

3月17日 [中]5～8年生(44～41回生)の学習発表会(三鷹公会堂)(18日まで)

3月 [初]小鳥小屋が完成

卒業：[小]第43回(43回生)、[中]第23回(40回生)
[高]第22回(37回生)

1970(昭和45)年度 <46周年>

入学：[小]第47回(49回生)、[中]第24回(43回生)
[高]第23回(40回生)

5月25日 私立初等学校研究会が開かれる

5月26日 [高]グアム島の高校生音楽使節団を迎えて

交歓演奏会(武蔵野公会堂)

5月31日 [高]仮装大会

5月 高校「高等部教育要覧」(45年版)を刊行

5月 小学校教職員全員で、連休を利用して千倉・清里寮の視察を行う

7月17日 [初]3・4年生(47・46回生)千倉寮で夏季生活(24日まで)

7月18日 [高]演劇の会

7月22日 [中]山の生活(8月1日まで)

7月24日 [中]5・6年生(45・44回生)が千倉寮で夏季生活(8月1日まで)

8月3日 [高]9年生(41回生)千倉寮生活(2班に分かれて9日まで、各3泊)

8月27日 [初]1・2年生(49・48回生)清里寮で夏季生活(2泊)

9月11日 [初]自転車教室開催

10月31日 [高]明星祭(2日間)

11月8日 [中]父親参観実施

11月 [中]校内球技大会

11月27日 公開授業研究会(30日まで)

12月17日 [中]音楽会(武蔵野公会堂)

〈1971年〉

1月6日 [中]スキー合宿(11日まで志賀高原)

2月20日 [高]演劇の会(武蔵野公会堂)

2月25日 [中]猪盃記念のマラソン大会

3月7日 [低]演劇と音楽の会(三鷹公会堂)

3月20日 [中]第24回卒業式(41回生)と学習発表会が行われる(武蔵野公会堂)

卒業：[小]第44回(44回生)、[中]第24回(41回生)

[高]第23回(38回生)

この年度のできごと

★「学校制度問題委員会」から4・4・4制の検討に関する報告書が出される

1971(昭和46)年度 <47周年>

入学：[小]第48回(50回生)、[中]第25回(44回生)
[高]第24回(41回生)

6月 [初]父親参観日

7月16日 『漫思凡考—上田八一郎先生を偲ぶ—』刊行

7月17日 [初]3・4年生(48・47回生)千倉寮で夏季生活(各3泊、24日まで)

7月19日 [高]演劇の会

7月21日 [中]7・8年生(44・43回生)清里寮で夏季生活(31日まで)

7月21日 募金のための懇談会(中学校にて)

7月22日 [中]5・6年生(46・45回生)千倉寮で夏季

生活（31日まで）

7月 〔高〕11年生（40回生）4方面（東北、黒四ダム、高山、上高地）に別れて修学旅行（26日まで）

8月2日 〔高〕10年生（41回生）千倉寮で夏季行事（8日まで）

9月 学校の体制については現体制で教育の充実を計ること、拡大教務会で確認（9月）

11月1日 〔高〕明星祭（3日間）

11月20日 〔中〕父母参観日

11月20日 第10回公開研究会開催

11月22日 〔初〕ドッジボール大会（1971～1973年度、4・4・4制終了まで毎年行われる）

12月12日 〔中〕ゴヤ展を見学

12月14日 中学校教師が公立小学校の教師たちと懇談会

12月16日 〔高〕演劇部発表会（高円寺会館）

12月20日 〔初〕3・4年生（48・47回生）「森は生きている」を観劇

12月22日 〔中〕音楽会

12月23日 〔高〕音楽部発表会（武蔵野公開堂）

12月24日 〔高〕スキー行事（28日まで）

12月25日 〔初〕清里寮でスケート行事（28日まで）

〈1972年〉

1月1日 金沢嘉市、遠山啓両氏が教育顧問に就任

1月1日 〔初〕スケート行事。神宮スケート場（8日まで）

1月6日 〔中〕スキー行事（10日まで）

2月7日 学園集会が行われる

2月20日 〔高〕演劇クラブが発表会（武蔵野公会堂）

2月27日 〔初〕第5回劇と音楽の会（武蔵野公会堂）

3月20日 〔中〕学習発表会（武蔵野公会堂）

卒業：〔小〕第45回（45回生）、〔中〕第25回（42回生）

〔高〕第24回（39回生）

1972（昭和47）年度

< 48周年 >

入学：〔小〕第49回（51回生）、〔中〕第26回（45回生）

〔高〕第25回（42回生）

6月18日 小学校で第1回「今の教育についてかたり合う会」

6月24日 〔高〕仮装大会

7月17日 〔初〕3・4年生（49・48回生）千倉寮で夏季生活（2班に分かれて各3泊、20日まで）

7月17日 〔中〕7・8年生（45・44回生）清里寮で夏季行事（31日まで）

7月21日 〔高〕11年生（41回生）東北修学旅行（5泊）

7月24日 〔高〕9年生（43回生）千倉寮で夏季行事（31

日まで）

8月15日 〔中〕5～8年生（47～44回生）補習授業（22日まで）

8月20日 〔高〕補習授業（30日まで）

8月28日 〔初〕1・2年生（51・50回生）清里寮で夏季生活（2泊）

9月1日 中学校教職員が清里寮で研修会（3日まで）

9月7日 〔中〕5年生（47回生）清里寮で移動教室（11日まで）

10月1日 第2回「今の教育を語る会」開催。小学校で、幼稚園・保育園の先生を招いて、幼児教育と小学校教育の関わり合いを語る会を催す

10月15日 「次年度から9年生を中南部へ移す」旨の通知文書を保護者宛に配布（4・4・4制終了へ）

10月25日 〔初〕ドッジボール大会

10月 高校体育館（第1体育館）に温水シャワー完成

11月1日 〔高〕明星祭（3日間）

11月2日 〔高〕高校生と金沢嘉市顧問との懇談会

11月25日 第11回公開研究会開催（2日間）この第11回は「明星学園中南部公開研究会」と称した

12月3日 〔中〕父親参観日

12月20日 〔中〕音楽会（武蔵野公会堂）

12月22日 〔初〕「森は生きている」観劇（杉並公会堂）

12月22日 〔初〕4年生（48回生）スケート教室。清里寮（27日まで）

12月27日 〔初〕5年生（47回生）スケート教室。軽井沢星野温泉ホテル（3泊4日）

〈1973年〉

1月7日 〔中〕スキー行事（11日まで）

1月30日 〔高〕音楽祭（杉並公会堂）

1月31日 高校教育と全学園教課の話し合いが持たれる

2月3日 〔初〕視覚障害児の統合教育に関する研究会開催

2月10日 〔初〕演劇の会（2日間、武蔵野公会堂）

3月9日 〔高〕教育懇談会、進学指導と生活指導について

3月17日 〔中〕学習発表会

3月20日 〔中〕第26回（43回生）武蔵野公会堂ホールにて卒業式

3月21日 教育課程の研究会開催（中学校にて、22日まで）

卒業：[小]第46回（46回生）、[中]第26回（43回生）

[高]第25回（40回生）

この年度のできごと

★後援会から体育館建設資金として150万円寄付される

★千倉明星村の管理事務所2階を宿泊可能に改良

1973（昭和48）年度

< 49周年 >

入学：[小]第50回（52回生）、[中]第27回（46回生）

[高]第26回（43回生）

5月14日 [高]H・Rの日、全クラス別に都内近郊見学

5月21日 [中]5年生（48回生）清里寮で合宿（4泊）

5月25日 [中]6年生（47回生）清里寮で合宿（4泊）

6月10日 [初・中]父親参観日

6月13日 中学校の数学教師が遠山啓顧問を招き研究会

6月22日 [中]球技大会（23日まで）、5・6年生（48・47回生）ハンドボール、7～9年生（46～44回生）バレーボール

7月16日 [初]3・4年生（50・49回生）千倉寮で夏季生活（3泊）

7月17日 [中]7・8年生（46・45回生）清里寮で夏季行事（3班に分かれて4泊、30日まで）

7月17日 [高]11年生（42回生）十和田・能登・高山・乗鞍クラス別合宿旅行。この年から数年間、修学旅行をクラス単位の合宿旅行として実施（28日まで）

8月20日 中学校教師が研究会を清里寮で行う（24日まで）

8月27日 [初]1・2年生（52・51回生）清里寮で夏季生活（2泊）

10月13日 [高]映画「戦争と人間」鑑賞（新宿ミラノ座）

10月 [初]ドッジボール大会

11月1日 [高]小運動会、明星祭前夜祭

11月2日 [高]明星祭（4日まで）

12月5日 [初]スケート教室

12月23日 [初]清里寮スケート行事（3泊）

12月25日 [高]スキー合宿（30日まで、野沢温泉）

12月27日 [高]スケート合宿（30日まで、清里寮）

<1974年>

1月6日 [中]スキー行事（4泊）

1月7日 [中]スケート行事（3泊）

1月27日 [初]父親参観日。

1月28日 遠山啓顧問との話し合いの会（中学校にて）

1月30日 [高]音楽祭（三鷹市公会堂）

1月 [初]1～3年生（52～50回生）スケート教室

2月1日 小・中学校長代行に遠藤豊就任

2月23日 [初]劇と音楽の会（武蔵野公会堂）

2月26日 [初]「動物会議」を観劇（朝日生命ホール）

2月26日 創立者の赤井米吉学園長逝去（86歳）

2月28日 [初]新1年生（53回生）父母の会開催

3月2日 第2体育館（小・中学校）完成、落成式

3月9日 赤井米吉学園長学園葬

3月18日 [中]学習発表会

3月22日 次年度授業研究会（中学校で24日まで）

卒業：[小]第47回（47回生）、[中]第27回（44回生）

[高]第26回（41回生）

この年度のできごと

★公開研究会は行われなかった

★高校の新カリキュラムが決定

★学園財政3ヵ年計画樹立

★1974年3月末をもって4・4・4制終了

1974（昭和49）年度

< 50周年 >

入学：[小]第51回（53回生）、[中]第28回（47回生）

[高]第27回（44回生）

★この年から6・3・3制。小学校1～6年生を[小]、中学校7～9年生を[中]、高等学校10～12年生を[高]と表記する

4月 [中]9年生は小・中学校キャンパス（井の頭）へ移る

4月9日 [高]教科内容説明のオリエンテーション

4月 小・中学校職員室を一つにする

5月15日 創立記念日（50周年）、式典は11月に開催

6月22日 [高]仮装大会

7月 遠山啓氏、わかる算数PTA教室を開催

7月19日 [中]7年生（47回生）清里寮夏季行事、8年生（46回生）川俣・鬼怒川夏季行事

7月20日 [小]千倉寮で夏季生活（29日まで）

7月28日 [中]9年生（45回生）清里寮で夏季行事（31日まで）

8月28日 [中]7・8年生（47・46回生）清里寮で夏季行事（30日まで）

8月 [高]女子バスケットボール部が、東京代表4校の1校としてインターハイ（福岡）出場

9月1日 中学校で授業についての研究会（2日間）

10月15日 [小・中]創立50周年記念小・中学校合同運動会

11月1日 [高]明星祭（3日まで）

11月2日 [高]中野光氏、高校生対象に「明星の史的意義」についての講演

11月3日 創立50周年記念式典、慰霊祭、祝賀パーティ、歴史展が行われ（2日間）、記念出

- 版『明星の年輪—明星学園50年のあゆみ』が刊行される
- 11月22日 第12回公開研究会開催（2日間）
- 11月28日 **[中]**山梨県巨摩中学校を見学
- 12月20日 **[中]**音楽会（21日まで）
- 12月25日 **[高]**スキー行事（29日まで）
- 12月27日 **[高]**スケート行事。清里寮（30日まで）
- 〈1975年〉
- 1月22日 全園会議開催
- 2月8日 **[小]**スケート教室（よみうりランド）
- 2月15日 **[高]**第11回音楽会
- 2月26日 赤井米吉遺稿集『この道』刊行（一光社印刷所）
- 3月 小・中学校校内職員研究会を千倉寮で行う（2泊3日）

卒業：[小]第48回（48回生）、[中]第28回（45回生）
[高]第27回（42回生）

この年度のできごと

- ★次年度から学校行事としてのスキー・スケート行事を中止と決定

1975（昭和 50）年度

< 51 周年 >

入学：[小]第52回（54回生）、[中]第29回（48回生）
[高]第28回（45回生）

- 4月 小・中学校長に遠藤豊が就任
- 4月8日 **[高]**在校生・新入生のオリエンテーション（9日まで）
- 4月 **[高]**男女共修「生活科」を新設、授業開始
- 4月30日 全園会議
- 5月1日 **[小・中]**防災訓練
- 5月2日 **[小・中]**学年学級活動の日
- 5月22日 **[高]**芸術鑑賞、前進座「さんしょう太夫」観劇（三鷹公会堂）
- 5月28日 **[高]**球技大会（親睦と協力）
- 5月29日 **[小]**光化学スモッグにより児童生徒に被害が出たため、小学校の各教室前に洗眼器を取り付ける
- 5月 **[高]**生徒指導部が、生徒に向けて「真の自由を保障するために」を発行
- 6月1日 **[小・中]**父親参観日
- 7月 千倉寮の改築工事第1期（50周年記念事業）完了
- 7月 後援会から「千倉寮改築資金」として1975年度1,000万円、76年度以降10年間に毎年300万円、計4,000万円寄付される
- 7月17日 **[中]**7・8年生（48・47回生）清里寮で夏

- 季行事（4班に分かれて30日まで各3泊）
- 7月21日 **[小]**4～6年生（51～49回生）千倉寮で夏季生活（31日まで各3泊）
- 7月21日 **[高]**11年生（44回生）がクラス別合宿旅行（能登、金沢、立山・黒部、飛騨・高山、四国、倉敷、津和野・萩等）
- 8月 校内職員研究会（千倉寮、2泊）
- 9月 校内職員研究会（武蔵野公会堂）3日間
- 11月1日 **[高]**明星祭（3日間）
- 11月18日 **[中]**合唱コンクール
- 11月22日 小・中学校、第13回公開研究会開催（2日間）
- 12月 高校『明星の高校教育』創刊号発行
- 〈1976年〉
- 1月31日 **[高]**第12回音楽会（杉並公会堂）読売日本交響楽団のオーケストラ鑑賞と、高校音楽部を中心に、卒業生・教師のハレルヤ・コーラス等を上演
- 3月6日 **[小]**劇と音楽の会（2日間）

卒業：[小]第49回（49回生）、[中]第29回（46回生）
[高]第28回（43回生）

この年度のできごと

- ★1月、高校で「運営委員会」が発足。校内の組織・機構と集団指導体制を目的とした。また「教育研究部」も新設された
- ★PTAとの共催で講演会・研究会等が行われるようになり、6月6日には国分一太郎氏、6月8日には金沢嘉市氏、9月19日には遠山啓氏、2月1日には上野省策氏の講演会が開かれた
- ★学校行事が学年・学級単位で計画・実行されるようになり、これまで伝統的に行われてきた全校的な集団登山・夏季行事・見学や遠足は姿を消した
- ★小・中学校の学校行事で明星学園行進歌が歌われなくなった
- ★この年度の高校受験者数は461名と過去最高。この年以降しばらく受験者数が増え続け、1981年2月は900名となった

1976（昭和 51）年度

< 52 周年 >

入学：[小]第53回（55回生）、[中]第30回（49回生）
[高]第29回（46回生）

- 4月9日 武者小路実篤後援会長逝去
- 4月27日 創立同人照井げん先生逝去（85歳）
- 5月16日 照井げん先生追悼式
- 6月2日 **[高]**「各行事についての討議資料」に基づいて旅行案を検討
- 6月6日 **[小・中]**父母参観日

7月5日 [小]各学年4回ずつ、吉祥寺パインクレ
スト（室内プール）で水泳指導
7月5日 小・中学校音楽室の上棟式
7月15日 高校、校舎改築開始（翌年3月末完成予定）
7月 高校、校舎増築開始（翌年8月完成予定）
7月 [小]千倉寮で夏季生活
7月 [中]清里寮で夏季行事
9月1日 [高]11年生（45回生）飛騨・高山へ合宿
旅行（3泊）
9月22日 中学校で林竹二氏（教育哲学者）の社会
科授業研究会開催
9月25日 [小・中]音楽室完成お祝いの音楽会開催
9月29日 高校研究会「討議資料その1」を発行
10月10日 [小・中]運動会
10月21日 [高]マラソン大会
10月 千倉寮の改築工事第2期（50周年記念事
業）が完成
11月1日 [高]明星祭、仮装大会（3日間）
11月3日 P T Aバザー（高校）
11月21日 小・中学校で第14回公開研究会開催（2日
間）
12月12日 [小・中]父母参観日
〈1977年〉
2月23日 [高]第13回音楽会（三鷹公会堂）
3月5日 [小]劇と音楽の会（2日間）
3月11日 [小・中]第1回合唱祭
3月19日 高橋昭八教諭（高校、理科）逝去
3月23日 校内職員研究会（25日まで千倉寮にて）
卒業：[小]第50回（50回生）、[中]第30回（47回生）
[高]第29回（44回生）

1977（昭和52）年度

< 53周年 >

入学：[小]第54回（56回生）、[中]第31回（50回生）
[高]第30回（47回生）

4月6日 高校新校舎完成。各教科の職員室へ引越し
4月25日 後援会長に千秋実氏就任
5月9日 [小]毎週水曜日に学年別水泳指導を開始
（吉祥寺パインクレストにて）
5月15日 高校新校舎落成祝賀会を改正。第1部は
来賓招待、第2部は父母・卒業生パーティ
5月30日 高校新校舎・視聴覚室のこけら落とし演
奏会（ピアノ・ヴァイオリン）開催
5月31日 [高]第1回学力テスト（10・11年生、英
語・国語・数学）
5月 [小]5月中旬から下旬にかけて、また9月
に、移動教室を実施
6月1日 [高]第1回基礎学力テスト実施（12年生、

社会・理科）

6月5日 [小・中]父母参観日
6月17日 [高]第14回音楽祭（三鷹公会堂）、芸術
鑑賞として卒業生の林峰男氏（32回生、
国際コンクールで入賞）のチェロ独奏を
鑑賞
7月 [小]千倉寮で夏季生活
7月 [中]清里寮で夏季行事
7月30日 衣笠武夫理事長逝去
8月17日 寒川道夫前小学校校長（国語）逝去
9月2日 [高]10年生（47回生）千倉寮で合宿（3
班に分かれて各2泊、8日まで）
9月29日 [高]前進座公演「最後の一句」観劇（三
鷹公会堂）
9月30日 衣笠武夫理事長学園葬
9月 職員校内研究会開催（2泊）
10月5日 [高]「高校教育総点検運動」開始、日程
発表
10月8日 [高]マラソン大会
10月9日 [小・中]運動会
10月30日 [小・中]合唱祭
10月 [高]「討議資料集」（77年版）発行
11月1日 [高]明星祭。テーマは「創造」（3日間）
11月12日 小・中学校、第15回公開研究会、1,562人が
来校。テーマは「人間教育の追求―授業と
表現活動で子どもの可能性を引き出す」
12月 高校『明星の高校教育』第2号発行
〈1978年〉
1月17日 高校で教頭・運営委員会の選挙が行わ
れ、加藤信夫が教頭に就任
3月4日 [小]劇と音楽の会
卒業：[小]第51回（51回生）、[中]第31回（48回生）
[高]第30回（45回生）

この年度のできごと

- ★小学校中学年の移動教室で、千倉の青木さんの畑約500
坪を借りて、サツマイモ、落花生を栽培する
- ★学園主催の講演会は1月27日（前年度）に遠山啓氏、7月
6日に園部三郎氏、10月14日に羽仁説子氏、11月8日に
国分一太郎氏を招いて開催される

1978（昭和53）年度

< 54周年 >

入学：[小]第55回（57回生）、[中]第32回（51回生）
[高]第31回（48回生）

4月3日 高校研究会開催①一貫教育と高校の課題
②「評価」について③上川淳・堀淳二両
先生を囲んで
4月 [高]10年生が7クラスとなる

5月1日 [高] 高校生全員を対象に基礎学力テスト実施（理科・社会）
 5月2日 [高] 高校学力テスト2日目、10・11年生対象（英語・国語・数学）
 5月 高校『明星の高校教育』第3号発行
 5月 高校「高校部報」第1号発行、保護者に配布（運営協議会に対する高校の見解、行事について等）
 7月 [小] 千倉寮で夏季生活
 7月 [中] 清里寮で夏季行事
 9月3日 [高] 10年生（48回生）千倉寮で合宿（3班に分かれて各2泊、9日まで）
 9月 職員校内研究会開催、3月に続いて2度目
 10月7日 [高] マラソン大会
 10月29日 [小・中] 第3回合唱祭
 11月1日 P T A 学年学級委員会の主催で「教科別懇談会（今回は数学）」が行われる
 11月3日 [高] 明星祭（3日間）
 11月11日 [小・中] 第16回公開研究会開催、テーマ「『人間教育』の追及」（2日間）
 12月 高校『明星の高校教育』第4号発行
〈1979年〉
 2月9日 [高] 第15回音楽祭
 2月28日 高校研究会開催
 3月3日 [小] 演劇発表会（2日間）
 3月7日 [小] 6年生（52回生）が会津へ修学旅行
 3月24日 [高] 希望者参加の社会科奈良旅行を実施（4泊5日）

卒業：[小]第52回（52回生）、[中]第32回（49回生）

[高]第31回（46回生）

この年度のできごと

★中学校の卒業式を生徒の手で、という趣旨から卒業式の計画・進行を生徒が行う

★小・中学校『明星の教育』創刊号発行（秋）

1979（昭和 54）年度 < 55 周年 >

入学：[小]第56回（58回生）、[中]第33回（52回生）

[高]第32回（49回生）

4月 明星自由大学（明星教育研究所主催）学内実施を決定
 5月1日 [高] 基礎学力テスト（理科・社会）
 5月2日 [高] 基礎学力テスト（英語・国語・数学）
 5月27日 [小] 父母参観日
 7月20日 高校の研究会を奥多摩・青梅で開催（2日間）
 7月 高校『明星の高校教育』第5号発行
 7月 [小] 千倉寮で夏季生活

7月 [中] 清里寮で夏季行事
 8月27日 職員校内研究会開催（2日間）
 9月 [高] 10年生（49回生）千倉へ旅行
 10月28日 [小・中] 合唱祭
 11月10日 [小・中] 第17回公開研究会開催（2日間）
 11月17日 中学9年生（50回生）対象に高校内部進学予備テストを実施（この年から開始）
 11月 赤井米吉元学園長胸像除幕式
 12月5日 高校で1976年の討議資料を元に「各行事の方針、総括集」がまとめられる
 12月11日 新理事会発足、松井憲紀氏理事長就任
 12月21日 [高] スキー教室（志賀高原3泊）
 12月26日 [小] スケート同好会、清里寮でスケート教室（29日まで）
 12月 『明星学園報』第1号発行
〈1980年〉

2月7日 [高] 第16回音楽祭（三鷹公会堂）
 2月13日 高校の研究会で「来年度の行事計画」を作成
 2月27日 小学校は日赤による災害応急手当の講習会を開く
 3月8日 [小] 学習発表会、前期（1～3年生）と後期（4～6年生）に分けて行う
 3月18日 理事会で恩地高校長と遠藤小・中校長との内部進学に関する合意書が提示される
 3月23日 小・中学校教員校内研究会（25日まで）

卒業：[小]第53回（53回生）、[中]第33回（50回生）

[高]第32回（47回生）

この年度のできごと

★小・中学校『明星の教育』第2号を発行（秋）

1980（昭和 55）年度 < 56 周年 >

入学：[小]第57回（59回生）、[中]第34回（53回生）

[高]第33回（50回生）

4月2日 高校の研究会を千倉寮で開催。討議資料（その4）第1部・新カリキュラムの検討に向かつて、第2部「行事」研究会のまとめと今年度の企画
 5月1日 [高] 基礎学力テスト（理科・社会・英語・国語・数学）（2日間）
 5月6日 [高] 球技大会（2日間）
 5月13日 高校カリキュラム検討委員会開催。討議議題は「選択制度について」「必修・選択・講座についての考え方」
 5月22日 [中] 7年生（53回生）、千倉寮へ移動教室（2泊）
 6月5日 [中] 9年生（51回生）保護者宛に内部進

学についてのお知らせを配布
 6月13日 内部進学についての説明会開催
 7月16日 **[中]**合唱祭
 7月18日 **[中]**7年生(53回生)八ヶ岳登山(3泊で天狗岳、清里寮)第2班は23日～
 7月20日 **[中]**8年生(52回生)八ヶ岳登山(4泊で硫黄赤岳、清里寮)第2班は25日～
 7月20日 高校、新カリキュラム編成をテーマとする研究会(2日間、武蔵野公会堂)
 7月21日 高校『明星の高校教育』第6号発行
 7月22日 **[小]**4年生(56回生)千倉寮で夏季生活(3泊)
 7月25日 **[小]**5年生(55回生)千倉寮で夏季生活(3泊)
 7月28日 **[小]**6年生(54回生)千倉寮で夏季生活(3泊)
 8月 **[小]**2・3年生(58・57回生)千倉寮で夏季生活(2泊)
 7月 「校長選任に関する内規」が決定
 8月27日 高校教科研究会開催(武蔵野公会堂)
 9月1日 小・中学校職員校内研究会開催(2日間)
 9月3日 小学校の総合学習室(マルチパーパスルーム)が完成
 9月9日 小学校前期職員による人形劇の会「花さき村のぬす人」、パーパスルームの柿落し
 9月初旬 **[高]**10年生(50回生)は千倉(2泊)
 9月10日 **[高]**11年生(49回生)は旅行後、食中毒の疑いがあり学年閉鎖
 9月26日 高校次期校長に上田八郎を選出
 10月9日 **[高]**マラソン大会(府中市営グラウンドにて)
 11月8日 **[小・中]**第18回公開研究会開催(2日間)
 11月18日 小学校入学試験
 11月 内部進学問題について、上田八郎高等学校長・遠藤豊小・中学校長名の文書を保護者宛に配布
 11月 松井憲紀理事長が勲3等旭日中綬章を受賞
 12月5日 9年生(51回生)対象に内部進学予備テスト実施
〈1981年〉
 2月10日 **[高]**第17回音楽祭(三鷹公会堂)
 2月18日 高校入学試験の受験者数が過去最高の約900名となる
 3月1日 **[中]**合唱祭
 3月7日 **[小]**劇と音楽の学習発表会
 3月17日 **[小]**前期(1～3年生)、餅つき会の会
 3月 理事会、1984年に迎える学園創立60周年記念事業構想を発表

3月31日 恩地邦郎高等学校長が退任
卒業：**[小]**第54回(54回生)、**[中]**第34回(51回生)
[高]第33回(48回生)
この年度のできごと
 ★教育を考える会、お父さんの会、教育懇談会、内部進学委員会、一貫教育を創る会、などさまざまな会で明星教育が語られる
 ★小・中学校『明星の教育』第3号発行(秋)
 ★井の頭の国鉄官舎跡地で、明星小学生が土器の破片を発見したことをきっかけにここが先住民住居遺跡と認められ、三鷹市教育委員会の調査が始まる。教職員と生徒の希望者が発掘調査を見学

1981(昭和56)年度 <57周年>

入学：**[小]**第58回(60回生)、**[中]**第35回(54回生)
[高]第34回(51回生)
 4月 高等学校長に上田八郎が就任
 4月9日 **[高]**10年生(51回生)高尾山薬王院でオリエンテーション合宿(1泊)
 4月10日 高校から保護者宛に、内部進学テストに関する高校の対応・経過・見解等を明確化した通知を発送
 5月6日 小・中学校職員会議において内部進学テストの総括が行われる
 5月10日 高校から小・中学校へ、内部進学テスト問題についての高校の見解と今後の課題を提示
 5月23日 生活指導の方法・処置等を含めた「遅刻ゼロ運動」が高校部会で提案される
 5月24日 新高校建設問題(遠山塾高校)について教職員組合から理事会宛に公開質問状が出される。これを受け理事会では客観的な調査を実施
 5月27日 **[小]**2年生(59回生)清里寮へ移動教室
 5月27日 **[中]**7年生(54回生)大菩薩峠、8年生(53回生)水割山登山
 6月6日 中学校が招いた盛岡市の「わらび座」が体育館で公演
 7月 **[小]**千倉寮で夏季生活
 7月 **[中]**7年生(54回生)が清里寮で夏季行事
[中]8年生(53回生)が鳳凰三山で夏季行事
 8月18日 学園運営の基本方針として理事会は「明星学園・建学の原点を求め明日への出発」と題する文書を、『明星学園報』第4号に発表

9月1日	小・中学校の校内研究会開催（3日間）。 子どもの校内生活および訓育の問題が初めて提案・討議される
9月7日	[高] 10年生（51回生）伊豆韮山・富士見ランドへ合宿旅行（2泊）
9月14日	高校で組合主催の全園研究会と教育研究会開催
9月21日	臨時部会・全園会議開催（2日間）
9月	遠山塾高校の建設問題については、学園は新高校建設の意思のないことを学園報で表明
10月10日	[高] 明星祭。テーマは「飛翔」（2日間）
10月17日	[高] マラソン大会（多摩湖）
11月14日	[小・中] 第19回公開研究会開催（2日間） 〈1982年〉
1月11日	[中] 9年生（52回生）に学力テスト実施
1月18日	[中] 9年生各組で内部進学テスト実施、 監督・採点は中学校、面接は高校が担当
1月20日	[小・中] 4～9年生（57～52回生）がオペラ「べっかんこ鬼」を鑑賞（三鷹公会堂）
1月21日	高校で教頭・運営委員の選挙を実施、加藤教頭と5委員を選出
1月26日	高校部会で「1982年内部進学の方針と具体的方針について」をまとめる
1月	三鷹市の水道料金値上げ（78%）に対し減免措置を請願
1月	第1回全園父母会を開催（武蔵野公会堂）以降毎年継続
2月3日	[高] 第18回音楽祭（杉並公会堂）
2月17日	高校新カリキュラム委員会から、4・4・4制を振り返り、文部省の教育課程再編・改革の内容と、新カリキュラムに向けての準備・討議の必要性和、当面のスケジュールについて発表がある
2月	学園創立60周年記念委員会が発足し、出版・行事・建設の3小委員会設立を決定
3月1日	[中] 第5回合唱祭
3月6日	[小] 劇と音楽の会
<u>卒業：[小]第55回（55回生）、[中]第35回（52回生）</u> <u>[高]第34回（49回生）</u>	
この年度のできごと	
★小・中学校『明星の教育』第4号発行（秋）	
★臨時職員会が、遠山塾高校・内部進学・PTA関係のことでひんぱんに開かれる	
★学校教育で「もっと縦割りの関係の中で教育していく必要がある」ことが提案され、6年生にリーダー的仕事をさせる意味で、1年生の送り迎え・リレー会の復活、運動会の応援などを計画し、実施する	

1982（昭和57）年度

< 58周年 >

入学：[小]第59回（61回生）、[中]第36回（55回生）[高]第35回（52回生）

4月2日	理事・教職員の有志が合宿教育懇談会を開催（箱根三井生命寮）
4月9日	[高] 10年生（52回生）高尾山薬王院オリエンテーション合宿（1泊）
4月9日	[高] 11年生（51回生）映画「家族」鑑賞、進路指導の一環として12年生（50回生）対象に短大講師の説明会を実施
5月2日	高校研究会開催。全体討議で①学園の理念、②現カリキュラム出現までの経過、③新カリキュラム委員会の提案について
5月13日	小学校で幼年研究会（以降、幼年研と略す）開催
5月21日	[中] 7年生（55回生）三浦半島荒崎海岸、8年生（54回生）鎌倉へ見学旅行
5月31日	[中] 学力テスト実施
6月	設設計画中の啓学園（遠山塾高校）から遠藤豊氏を校長に就任させたいとの要請があり、遠藤豊校長は1983年3月末をもって退職したいとの辞表を提出したので、理事会はこれを受理する
7月	[小] 千倉寮で夏季生活
7月	[中] 7・8年生（55・54回生）八ヶ岳登山（この年から清里寮を使わなくなった）
8月	明星会の寄付により60周年記念事業のひとつとして軽井沢上野原寮の改築に着工
9月1日	小・中学校校内職員研究会開催（2日間）
9月初旬	[高] 10年生（52回生）群馬県野反湖キャンプ
9月10日	[高] 明星祭。テーマは「脱出」（2日間）
9月29日	高校職員一同から「PTAについてこう考える―高校の父母と教師の協力について―」の会報への掲載をPTA会長に要請
10月7日	[高] マラソン大会（多摩湖）
10月18日	[中] 9年生（53回生）小笠原へ旅行（5泊）
11月6日	[小・中] 例年通りの公開研究会は行わず、公開研究授業を開催（2日間）
12月19日	[小・中] 第6回合唱祭
12月21日	高校研究会開催。新カリキュラム（教育内容と系列）と学級経営について
〈1983年〉	
1月14日	高校の各専門部が中学校9年生（53回生）の保護者向けに高校の教科課程、生徒の進路指導等について説明会開催
1月18日	[中] 内部進学用学力テスト実施

1月23日 軽井沢研修寮が完成、祝賀会開催
 2月1日 **[高]**第19回音楽祭（三鷹公会堂）
 2月18日 高校入学試験（受験者数500余名）
 2月 赤井つる氏（創立者赤井米吉夫人）逝去
 3月 学校会計コンピュータシステム完成
 3月31日 遠藤豊小・中学校長、無着成恭小・中学校教頭が辞任
 3月31日 上田八郎高等学校長が退任
卒業：[小]第56回（56回生）、[中]第36回（53回生）
[高]第35回（50回生）

1983（昭和58）年度 < 59周年 >

入学：[小]第60回（62回生）、[中]第37回（56回生）
[高]第36回（53回生）
 4月 小・中学校長に依田好照、高等学校長に恩地邦郎が就任。小・中学校は学校組織、事務分掌の改変。運営委員会を中核とする各種委員会による集团的運営を開始
 4月 小・中学校の依田好照新校長が教育方針の再確認を行う
 4月10日 **[高]**10年生（53回生）オリエンテーション合宿実施（サマーランド、1泊）
 4月 **[高]**11年生（52回生）野沢那智氏講演会、12年生（51回生）は短大講師の説明会
 4月 **[高]**入学時に防災アンケート提出を義務付ける
 4月 **[高]**英語の到達度別コース授業を実施
 5月2日 **[高]**芸術鑑賞会、映画「ガンジー」を鑑賞
 5月13日 小学校で幼年教育研究会開催
 5月18日 **[高]**生徒への呼びかけ「授業を充実させよう」を配付
 5月27日 **[小]**5年生（58回生）箱根へ遠足、6年生（57回生）国立歴史博物館見学
 5月 学園創立60周年記念事業案発表 ①委員メンバー、②事業計画、③建設計画。
 6月 全園教科研究会開催
 6月 **[高]**球技大会
 7月14日 **[小]**1年生（62回生）が校内宿泊体験（1泊）
 7月 **[小]**千倉寮で夏季生活
 7月 **[中]**7年生（56回生）南八ヶ岳登山、8年生（55回生）北アルプス登山
 7月21日 高校研究会開催、テーマ「学校づくりの未来像—イメージ」
 7月 全園父母会開催、依田好照新校長が教育方針説明

7月 彫刻家・正木隆氏（36回生）からステレンス大型作品4基寄贈、高校に設置
 8月27日 **[小]**3年生（60回生）千倉寮で夏季生活（2泊）
 8月31日 **[高]**防災対策（生徒・学校の対応策）まとめ
 9月5日 **[高]**10年生（53回生）野反湖キャンプ（2泊）
 9月 生徒募集時の「学校案内」が初めて全園的に1冊にまとまる
 10月6日 **[高]**マラソン大会
 10月9日 **[高]**明星祭（2日間）
 10月 内部進学テストについて、小・中・高の英・数・国合同教科会を開催
 11月12日 公立中学校への入学説明会実施
 11月16日 **[高]**内部進学テストの実施にあたり1979年の基本的観点を確認
 11月22日 **[小]**従来の公開研究会のやり方をやめ「総合学習公開研究会」として実施。
 11月28日 **[高]**内部進学テスト実施。
 11月 P T Aバザー開催（高校）
 12月10日 次年度の内部進学テスト結果取扱について、中・高校の校長間で合意書ができる

<1984年>

1月4日 **[中]**スキー教室再開。志賀高原高天原スキー場（4泊）
 1月7日 八ヶ岳・清里寮、火事で焼失
 2月2日 **[高]**第20回音楽祭（杉並公会堂）
卒業：[小]第57回（57回生）、[中]第37回（54回生）
[高]第36回（51回生）
 この年度のできごと
 ★新カリキュラムの決定
 ★内部進学の件（一貫教育の解釈と小・中への要望）に関しては4月25日の部会に対し執行部（教務：田崎、生徒指導部：井口）から提案されるが、その総括的見解が5月25日に提示される

1984（昭和59）年度 < 60周年 >

入学：[小]第61回（63回生）、[中]第38回（57回生）
[高]第37回（54回生）
 4月14日 病氣療養中の伊藤迪教諭（小、算数）逝去
 4月28日 **[中]**9年生（55回生）合唱発表会
 5月13日 創立60周年記念式典。児童生徒の美術展・協賛展（吉祥寺東急百貨店6・7階）
 5月15日 創立記念日（60周年）
 7月17日 **[中]**7年生（57回生）八ヶ岳登山
 7月18日 **[小]**4・6年生（61・59回生）千倉寮で夏

	季生活（第1班、3泊）
7月22日	[小] 4・6年生（61・59回生）千倉寮で夏季生活（第2班、3泊）
7月22日	[中] 8年生（56回生）夏季行事（24日まで）
7月26日	[小] 5年生（60回生）千倉寮で夏季生活（3泊）
9月30日	[小・中] 合同運動会
10月4日	[高] マラソン大会
10月5日	[高] 明星祭（3日間）
11月10日	小・中学校公開研究会開催
11月10日	小・中学校『明星の教育』第5号発行
〈1985年〉	
1月4日	[中] スキー教室（4泊5日）志賀高原高天ヶ原スキー場
2月21日	[高] 第21回音楽祭（武蔵野市民文化会館）
2月27日	[中] マラソン大会
3月9日	[小] 学習発表会（2日間）
卒業：[小]第58回（58回生）、[中]第38回（55回生）	
[高]第37回（52回生）	

1985（昭和60）年度 < 61周年 >

入学：[小]第62回（64回生）、[中]第39回（58回生）	
[高]第38回（55回生）	
7月	[小] 4・6年生（62・60回生）千倉寮で夏季生活（第1班、18日から3泊）（第2班、22日から3泊）
7月19日	[中] 7年生（58回生）八ヶ岳登山（2泊）
7月22日	[中] 8年生（57回生）常念岳登山（3泊）
7月26日	[小] 5年生（61回生）千倉寮で夏季生活（3泊）
9月29日	[小・中] 合同運動会
10月11日	[高] 明星祭（3日間）
10月25日	小・中学校公開研究会開催
12月3日	[高] マラソン大会（多摩湖）
〈1986年〉	
1月5日	[中] スキー教室（4泊5日）志賀高原高天ヶ原スキー場
1月14日	[小] どんどこ焼き
2月7日	[高] 第22回音楽祭（武蔵野市民文化会館）
3月	高校『明星・明星学園高校紀要8』発行（7号までは『明星の高校教育』の題名で発行）
3月2日	[小] 学習発表会
3月12日	[中] 9年生（56回生）合唱発表会
卒業：[小]第59回（59回生）、[中]第39回（56回生）	
[高]第38回（53回生）	

1986（昭和61）年度 < 62周年 >

入学：[小]第63回（65回生）、[中]第40回（59回生）	
[高]第39回（56回生）	
5月18日	高校に第3体育館落成
5月28日	[小] 5年生（61回生）大島社会科見学（2泊）
7月15日	[中] 7年生（59回生）八ヶ岳登山（2泊）
7月18日	[小] 4・6年生（62・60回生）千倉寮で夏季生活
	第1班は18日～3泊、第2班は22日～3泊
7月26日	[中] 8年生（58回生）燕岳登山（3泊）
7月26日	[小] 5年生（61回生）千倉寮で夏季生活（3泊）
10月10日	[高] 明星祭。テーマ「WAKUWAKU」中庭に大パネル展示
10月25日	小・中学校公開研究会開催
11月	『都市を描く子どもたち—明星学園中学校の生活の絵・十年間の記録』（現代美術社）発行
11月27日	[高] マラソン大会
〈1987年〉	
1月5日	[中] スキー教室（4泊5日）。この年から5、6年生希望者も参加。志賀高原高天ヶ原スキー場
1月14日	[小] どんどこ焼き。この頃から毎年実施。
2月13日	[高] 第23回音楽祭（武蔵野市民文化会館）
3月1日	[小] 学習発表会
3月11日	[中] 9年生（57回生）合唱発表会
卒業：[小]第60回（60回生）、[中]第40回（57回生）	
[高]第39回（54回生）	

1987（昭和62）年度 < 63周年 >

入学：[小]第64回（66回生）、[中]第41回（60回生）	
[高]第40回（57回生）	
4月	高等学校長に加藤信夫が就任
5月7日	[小] 5年生（62回生）大島社会科見学（2泊）
7月18日	[中] 7年生（60回生）八ヶ岳登山（2泊）
7月18日	[小] 4・6年生（63・61回生）千倉寮で夏季生活（第1班、3泊）
7月22日	[小] 4・6年生（63・61回生）千倉寮で夏季生活（第2班、3泊）
7月26日	[小] 5年生（62回生）千倉寮で夏季生活（3泊）
7月26日	[中] 8年生（59回生）燕岳登山（3泊）
9月	高校『明星・明星学園高校紀要9』発行

10月9日 [高]明星祭。テーマ「BRIGHTER, THE PLANETS!」(3日間)

10月24日 小・中学校公開研究会開催

11月26日 [高]マラソン大会

〈1988 年〉

1月5日 [中]スキー教室(4泊5日) 網張温泉スキー場

1月14日 [小]どんと焼き

2月6日 [中]マラソン大会

2月8日 [高]第24回音楽祭(武蔵野市民文化会館)

2月28日 [小]学習発表会

卒業：[小]第61回(61回生)、[中]第41回(58回生)

[高]第40回(55回生)

1988 (昭和 63) 年度 < 64 周年 >

入学：[小]第65回(67回生)、[中]第42回(61回生)

[高]第41回(58回生)

5月10日 [小]5年生(63回生) 伊豆大島へ社会科見学旅行(2泊)

7月18日 [中]7年生(61回生) ハヶ岳登山(2泊)

7月18日 [小]4・6年生(64・62回生) 千倉寮で夏季生活(第1班、3日)

7月22日 [小]4・6年生(64・62回生) 千倉寮で夏季生活(第2班、3泊)

7月23日 [高]第1回語学研修豪州ブリスベン(8月13日まで)

7月24日 [中]8年生(60回生) 白馬岳登山(3泊)

7月26日 [小]5年生(63回生) 千倉寮で夏季生活(3泊)

9月1日 [高]11年生(57回生) 北海道コース別旅行(4泊)、10年生(58回生)と12年生(56回生)は特別授業

10月9日 [高]明星祭。テーマ「TOO HOT!」(2日間)

10月22日 小・中学校公開研究会開催

11月26日 [高]マラソン大会

〈1989 年〉

1月5日 [中]スキー教室(4泊5日) 志賀高原高天ヶ原スキー場

1月 高校『明星・明星学園高校紀要10』発行

2月8日 [高]第25回音楽祭(三鷹市公会堂)

3月 『画集 みつめる目—明星学園小学校の実践—』発行

3月5日 [小]学習発表会

3月11日 [中]9年生(59回生) 合唱発表会

卒業：[小]第62回(62回生)、[中]第42回(59回生)

[高]第41回(56回生)

この年度のできごと

★高校で、非公式な形でオーストラリア語学研修ホームステイを実施。この後定着する海外留学の第1回目となる。
同じ形式で1991年度まで4年間実施される

1989 (昭和 64/ 平成 1) 年度 < 65 周年 >

入学：[小]第66回(68回生)、[中]第43回(62回生)

[高]第42回(59回生)

5月17日 [小]5年生(64回生) 伊豆大島へ社会科見学旅行(2泊)

7月18日 [小]4・6年生(65・63回生) 千倉寮で夏季生活、第1班は18日から3泊、第2班は22日から3泊

7月22日 [中]7年生(62回生) ハヶ岳登山(2泊)

7月25日 [中]8年生(61回生) 燕岳登山(3泊)

7月26日 [小]5年生(64回生) 千倉寮で夏季生活(3泊)

7月31日 [高]第2回語学研修、豪州パース(8月23日まで)

10月7日 [高]明星祭。テーマ「現実逃避」(2日間)

10月21日 小・中学校公開研究会開催

11月22日 [高]マラソン大会(府中多摩川公認マラソンコース)

〈1990 年〉

1月5日 [中]スキー教室(4泊5日) 志賀高原高天ヶ原スキー場

2月7日 [高]第26回音楽祭(三鷹市公会堂)

3月4日 [小]学習発表会

卒業：[小]第63回(63回生)、[中]第43回(60回生)

[高]第42回(57回生)

1990 (平成 2) 年度 < 66 周年 >

入学：[小]第67回(69回生)、[中]第44回(63回生)

[高]第43回(60回生)

5月23日 [小]5年生(65回生) 伊豆大島へ社会科見学(2泊)

6月6日 [小]6年生(64回生) 淡路島徳島修学旅行(2泊)

7月18日 [小]4・5・6年生(66・65・64回生) 千倉寮で夏季生活(3班に分かれて各2泊、29日まで)

7月20日 [中]7年生(63回生) ハヶ岳登山(2泊)

7月23日 [高]第3回語学研修、パース(8月15日まで)

7月24日 [中]8年生(62回生) 西穂高登山(2泊)

9月29日 [高]明星祭。テーマ「KICK AND STA

RT」(2日間)
 10月1日 [中]9年生(61回生)韓国へ修学旅行(4泊5日)
 10月27日 小・中学校公開研究会
 11月24日 [高]マラソン大会
〈1991年〉
 1月5日 [中]スキー教室(4泊5日)志賀高原高天ヶ原スキー場
 2月6日 [高]第27回音楽祭(三鷹市公会堂)
 3月3日 [小]学習発表会
 3月12日 [中]9年生(61回生)合唱発表会
卒業:[小]第64回(64回生)、[中]第44回(61回生)
[高]第43回(58回生)

1991(平成3)年度 <67周年>

入学:[小]第68回(70回生)、[中]第45回(64回生)
[高]第44回(61回生)
 4月 『みる つくる かんがえる—一明星学園小学校の総合学習—』(ぎょうせい)発行
 5月15日 [小]5年生(66回生)伊豆大島へ社会科見学旅行(2泊)
 6月 高校『明星・明星学園高校紀要11』発行
 7月18日 [小]6年生(65回生)千倉寮で夏季生活(3泊)
 7月18日 [中]7年生(64回生)八ヶ岳登山(2泊)
 7月22日 [中]8年生(63回生)立山登山(2泊)
 7月22日 [小]5年生(66回生)千倉寮で夏季生活(3泊)
 7月24日 [高]第4回語学研修、パース(8月14日まで)
 7月26日 [小]4年生(67回生)千倉寮で夏季生活(3泊)
 9月28日 [高]明星祭。テーマ「LET'S BE HAPPY」(2日間)
 10月20日 小・中学校『明星の教育/1時間の授業 中学校篇』発行
 10月27日 小・中学校公開研究会開催
 11月24日 [高]マラソン大会
〈1992年〉
 1月5日 [中]スキー教室(4泊5日)志賀高原高天ヶ原スキー場
 1月14日 [小]どんと焼き
 2月6日 [高]第28回音楽祭(三鷹市公会堂)
 3月1日 [小]学習発表会
 3月12日 [中]9年生(62回生)合唱発表会
卒業:[小]第65回(65回生)、[中]第45回(62回生)
[高]第44回(59回生)

1992(平成4)年度 <68周年>

入学:[小]第69回(71回生)、[中]第46回(65回生)
[高]第45回(62回生)
 7月18日 [中]7年生(65回生)八ヶ岳登山(2泊)
 7月19日 [小]4・5・6年生(68・67・66回生)千倉寮で夏季生活(3班に分かれて4年生2泊、5・6年生3泊、29日まで)
 7月22日 [中]8年生(64回生)唐松岳登山(2泊)
 7月24日 [高]オーストラリア語学研修ホームステイ(8月15日まで)
 7月28日 [高]第1回短期交換留学、パース(8月16日まで)
 *この年、Eastern Hills High School(以降、E.H.H.Sと略)とSwan View Senior High School(以降、S.V.S.H.Sと略)の2校と姉妹校提携を結び、学園のプログラムをスタートさせる

9月26日 [高]明星祭。テーマ「WAKE UP!」(2日間)
 10月20日 小・中学校『明星の教育1時間の授業 小学校篇』発行
 10月24日 小・中学校公開研究会開催
 11月21日 [高]マラソン大会
 12月28日 [高]オーストラリア留学生来日(1月15日まで)

〈1993年〉
 1月5日 [中]スキー教室(4泊5日)志賀高原高天ヶ原スキー場
 2月10日 [高]第29回音楽祭(三鷹市公会堂)
 3月7日 [小]学習発表会
 3月12日 [中]9年生(63回生)合唱発表会
卒業:[小]第66回(66回生)、[中]第46回(63回生)
[高]第45回(60回生)

1993(平成5)年度 <69周年>

入学:[小]第70回(72回生)、[中]第47回(66回生)
[高]第46回(63回生)
 5月6日 [小]5年生(68回生)伊豆大島見学旅行(2泊)
 6月18日 [高]球技大会(2日間)
 7月18日 [小]4・5・6年生(69・68・67回生)千倉寮で夏季生活(29日まで)
 7月18日 [中]7年生(66回生)八ヶ岳登山(2泊)
 7月23日 [中]8年生(65回生)穂高登山(3泊)
 7月28日 [高]第2回短期交換留学豪州パース(8月14日まで)
 10月2日 [高]明星祭。テーマ「RENEWAL FAC

TORY」(2日間)
 10月23日 小・中学校公開研究会開催
 11月22日 [高]マラソン大会
〈1994年〉
 1月5日 [中]スキー教室(4泊5日)
 1月7日 [高]第2回交換留学生来日、オーストラリア協力校(S.V.S.H.S、E.H.H.S)(1月24日まで)
 2月9日 [高]第30回音楽祭
 2月26日 [中]8年生(65回生)合唱発表会(武蔵野市民文化会館)
 3月5日 [小]学習発表会(2日間)
 3月12日 [中]9年生(64回生)合唱発表会
 3月17日 [高]リトアニア女子バスケットボールチーム来校、国際親善試合実施
卒業:[小]第67回(67回生)、[中]第47回(64回生)
[高]第46回(61回生)

1994(平成6)年度 <70周年>

入学:[小]第71回(73回生)、[中]第48回(67回生)
[高]第47回(64回生)
 5月10日 [小]5年生(69回生)伊豆大島へ見学旅行(2泊)
 5月15日 創立記念日(70周年)。記念式典挙行(高校第3体育館)
 5月21日 幼年教育研究会開催(軽井沢研修寮・2日間)
 5月22日 [高]高校軽井沢セミナー(29日まで)
 7月18日 [中]7年生(67回生)八ヶ岳登山(20日まで)
 7月19日 [小]4・5・6年生(70・69・68回生)千倉寮で夏季生活(29日まで)
 7月24日 [高]オーストラリアへ短期交換留学(8月14日まで)
 8月 [高]高校総体富山大会に女子バスケットボール部と陸上部が出場
 9月1日 [高]11年生(63回生)北海道へコース別旅行(4泊)
 9月28日 [小]6年生(68回生)飛騨高山へ修学旅行(2泊)
 10月1日 [高]明星祭。テーマ「BE-FREE」(2日間)
 10月4日 [高]タイからテバラット教諭が来日、高校の教壇に立つ(21日まで)
 10月4日 [中]8年生(66回生)尾瀬登山(3泊)
 10月22日 小・中学校公開研究会開催
 11月19日 [高]東京都私立中学高等学校音楽祭に

12支部代表としてアンサンブル部が出演
 11月22日 [高]マラソン大会
〈1995年〉
 1月4日 [高]第3回交換留学生来日。オーストラリア協力校(S.V.S.H.S、E.H.H.S)(23日まで)
 1月5日 [中]スキー教室(4泊)
 2月9日 [高]第31回音楽祭
 3月5日 [小]学習発表会
 3月12日 [中]9年生(65回生)合唱発表会
 3月 加藤信夫高等学校長退任
卒業:[小]第68回(68回生)、[中]第48回(65回生)
[高]第47回(62回生)
この年度のできごと
 ★小・中学校『明星の教育—保健体育篇』を刊行

1995(平成7)年度 <71周年>

入学:[小]第72回(74回生)、[中]第49回(68回生)
[高]第48回(65回生)
 4月 松井憲紀理事長が高等学校長を兼任
 4月26日 小・中・高合同教育研究会開催
 5月10日 [小]5年生(70回生)伊豆大島へ見学旅行(2泊)
 7月18日 [中]7年生(68回生)八ヶ岳へ登山(20日まで)
 7月19日 [小]4・5・6年生(71・70・69回生)千倉寮で夏季生活(29日まで)
 7月23日 [中]8年生(67回生)夏季行事。裏磐梯、八丈島、駒ヶ岳、奥穂高、奈良(31日まで)
 7月24日 [高]オーストラリアと交換留学(8月13日まで)
 9月1日 [高]11年生(64回生)修学旅行。北海道、沖縄、ボルネオ、タイ、マレーシア東海岸・タマンネガラ(5日まで)
 9月30日 [高]明星祭。テーマ「ABOUT」(2日間)
 11月15日 松井憲紀理事長・高等学校長逝去
 11月28日 [高]マラソン大会
 12月16日 松井憲紀理事長・高等学校長学園葬(高校第3体育館)
〈1996年〉
 1月5日 [中]スキー教室(4泊)
 1月13日 [高]アンサンブルクラブが第2回全国高等学校選抜オーケストラフェスタに出場(2日間)
 2月9日 [高]第32回音楽祭
 2月23日 [中]8年生(67回生)合唱発表会(武蔵

野市民文化会館)
 2月29日 [小]学習発表会・作品展示会(3月5日まで)
 3月3日 [小]学習発表会(1・2・6年生)
 3月7日 [小]学習発表会、4年生(71回生)朗読会
 3月13日 [中]9年生(66回生)合唱発表会(三鷹市芸術文化センター)
 卒業:[小]第69回(69回生)、[中]第49回(66回生)
[高]第48回(63回生)

1996(平成8)年度

< 72 周年 >

入学:[小]第73回(75回生)、[中]第50回(69回生)
[高]第49回(66回生)
 4月 手塚光雄理事長が高等学校長を兼任。
 5月8日 [小]5年生(71回生)伊豆大島へ見学旅行(3泊)
 6月5日 小・中・高合同教育研究会開催
 夏 [小]プール教室をやめる
 7月7日 [中]9年生(67回生)北海道へ修学旅行(4泊)
 7月17日 [小]4・5・6年生(72・71・70回生)千倉寮で夏季生活(27日まで)
 7月26日 [高]オーストラリアと交換留学(8月13日まで)
 7月末 学校5日制についての保護者アンケートを学園が実施
 8月18日 [中]7年生(69回生)ハヶ岳登山、8年生(68回生)燕岳登山(25日まで)
 8月24日 小学校幼年教育研究会(夏期講座)開催(2日間)
 8月27日 [高]11年生(65回生)コース別修学旅行、沖縄、韓国、北海道、マレーシア東海岸(9月5日まで)
 8月 高校コンピュータールーム新設、校舎耐震補強工事、図書室改修、大職員室新設
 9月28日 [高]明星祭。テーマ「FREEDOM」(2日間)
 10月2日 [小]6年生(70回生)奈良へ修学旅行(2泊)
 10月26日 小・中学校公開研究会開催
 11月6日 小・中・高合同教育研究会開催
 11月22日 [高]マラソン大会
 <1997年>
 1月5日 [中]スキー教室(4泊)
 1月8日 [高]オーストラリア姉妹校2校から交換留学生来日(2週間滞在)
 2月6日 [高]第33回音楽祭

3月2日 [小]学習発表会
 3月31日 手塚光雄高等学校長退任
 卒業:[小]第70回(70回生)、[中]第50回(67回生)
[高]第49回(64回生)
 この年度のできごと
 ★小・中学校『明星の教育—中学校の幾何教育』発行
 ★中学校9年生(67回生)が1年間かけて取り組んだテーマをまとめた「卒業論文集」、クラスごとに全4冊完成

1997(平成9)年度

< 73 周年 >

入学:[小]第74回(76回生)、[中]第51回(70回生)
[高]第50回(67回生)
 4月1日 小・中学校Webサイト開設
 4月 [小・中]完全学校週5日制開始
 4月 高等学校長に黒川実が就任
 5月7日 [小]5年生(72回生)伊豆大島へ見学旅行(2泊)
 6月11日 小・中・高合同教育研究会開催
 7月18日 [中]7年生(70回生)ハヶ岳登山(2泊)、8年生(69回生)白馬岳登山(4泊)
 7月19日 [小]4・5・6年生(73・72・71回生)千倉寮で夏季生活(29日まで)
 7月19日 [高]ニュージーランドへ英語研修(8月6日まで)
 7月22日 [高]オーストラリアと交換留学(8月11日まで)
 8月 [高]インターハイ京都大会で女子バスケットボール部が準優勝、陸上部女子走り高跳びで決勝進出
 9月27日 [高]明星祭。テーマ「∞(アンフィニ=無限大)」(2日間)
 10月25日 小・中学校公開研究会
 11月1日 [高]国際交流・タイから生徒来日(8日まで)
 11月5日 小・中・高合同教育研究会
 11月22日 [高]マラソン大会
 <1998年>
 1月4日 [中]スキー教室(3泊)
 1月8日 [高]オーストラリアから生徒来日(2週間滞在)
 1月28日 [高]タイのサラシット高校から生徒17名と教師2名が来日、交流
 2月6日 [高]第34回音楽祭
 2月27日 [中]第2回全校合唱発表会
 3月7日 [小]学習発表会
 3月29日 [高]社会科主催奈良・京都学習旅行(3泊)

3月31日 依田好照小・中学校長退任

卒業：[小]第71回（71回生）、[中]第51回（68回生）

[高]第50回（65回生）

この年度のできごと

★ダイオキシン対策のため校内の焼却炉を完全廃止

1998（平成 10）年度 < 74 周年 >

入学：[小]第75回（77回生）、[中]第52回（71回生）

[高]第51回（68回生）

4月 小・中学校長に和田武久が就任

5月11日 [小]5年生（73回生）伊豆大島へ見学旅行（2泊）

6月10日 小・中・高合同教育研究会

7月19日 [小]4年生（74回生）5年生（73回生）6年生（72回生）千倉夏季生活（29日まで）

7月21日 [中]7年生（71回生）八ヶ岳登山、8年生（70回生）蝶ヶ岳登山（28日まで）

7月21日 [高]ニュージーランドへ英語研修（8月8日まで）

7月21日 [高]オーストラリアと交換留学（8月8日まで）

9月26日 [高]明星祭。テーマ「Individuality（個性）と環境」（2日間）

10月24日 小・中学校公開研究会

11月1日 [高]国際交流・タイから生徒来日（8日まで）

11月4日 小・中・高合同教育研究会

11月21日 [高]マラソン大会

<1999年>

1月4日 [中]スキー教室（3泊）

1月11日 [高]国際交流・ニュージーランドから生徒来日（23日まで）

2月4日 [高]第35回音楽祭

2月17日 小・中・高合同教育研究会

2月26日 [中]第1回中学校マラソン大会（都立武蔵野公園）、この年より毎年実施

3月6日 [小]学習発表会

3月8日 [小]4・5年生（74・73回生）、第1回駅伝大会開催（井の頭公園）、この年より毎年実施

3月10日 小・中学校の『明星の教育 1999春』発行

卒業：[小]第72回（72回生）、[中]第52回（69回生）

[高]第51回（66回生）

1999（平成 11）年度 < 75 周年 >

入学：[小]第76回（78回生）、[中]第53回（72回生）

[高]第52回（69回生）

4月13日 職員会議で小学校新校舎内部の仕様にについて検討

4月26日 夕方より農園（高校敷地脇）のくい打ち作業

4月27日 [小]3年生（76回生）が井の頭公園「オシドリ1,000羽計画」に参加

5月3日 大伴恭一教諭（高校、英語）逝去

5月12日 [小]5年生（74回生）伊豆大島へ見学旅行（2泊）

5月30日 [小・中]運動会、小学校校舎（ジグザグ校舎）建て替えのため春季に開催

7月7日 仮設校舎の建築が始まる

7月12日 校舎建築のため池の生物の引越し

7月14日 [小]小学校校舎改築のため児童は仮設校舎へ引越し

7月16日 木工室にて、並河萬里氏（17回生）撮影による写真集の出版記念会

7月17日 明星会主催の校舎お別れ会「さよなら校舎」開催。

7月19日 [小]4年生（75回生）5年生（74回生）6年生（73回生）千倉寮で夏季生活（29日まで）

7月21日 [中]7年生（72回生）八ヶ岳登山（23日まで）

7月25日 [中]8年生（71回生）グループ別行事。式根島、妙高登山、裏磐梯キャンプ、山中湖キャンプ（8月25日まで）

7月 高等学校Webサイト開設

7月末 1学期終了後、改築のため小学校校舎（ジグザグ校舎）と特別教室（女学校時代からの建物）の解体工事が始まる

8月5日 [高]オーストラリアへ英語研修（8月25日まで）

8月24日 [高]体験入学（26日まで）

8月26日 [小]仮設校舎へ引越し（31日までに完了）

9月25日 [高]明星祭。テーマ「表現する」（2日間）

10月23日 小・中学校公開研究会開催

11月22日 [高]マラソン大会

<2000年>

1月4日 [中]スキー教室（3泊）

2月8日 [高]第36回音楽祭

2月12日 [小]病気療養中の飯田達彦教諭（小、算数）逝去

3月5日 [小]学習発表会

3月10日 [小]4・5年生(75・74回生) 駅伝大会
 3月20日 [高]社会科主催奈良京都学習旅行(3泊)
 卒業:[小]第73回(73回生)、[中]第53回(70回生)
 [高]第52回(67回生)

2000(平成12)年度 <76周年>

入学:[小]第77回(79回生)、[中]第54回(73回生)
 [高]第53回(70回生)
 4月28日 小・中学校『明星の教育 2000春』発行
 5月17日 [小]5年生(75回生)伊豆大島へ見学旅行(2泊)
 7月17日 [高]オーストラリア研修(8月8日まで)
 7月18日 [小]4・5・6年生(76・75・74回生)千倉寮で夏季生活(28日まで)
 7月18日 小学校仮設校舎の取り壊し作業が始まる
 7月21日 [中]7年生(73回生)ハヶ岳へ登山(2泊)
 7月25日 [中]8年生(72回生)グループ別行事。谷浜、歴史体験、酪農体験、裏磐梯キャンプ(8月25日まで)
 7月 全校統一Webサイト開設
 8月25日 [高]屋久島学習旅行(高校理科主催)(4泊)
 8月31日 小学校新校舎引渡し式
 9月 小学校新校舎完成
 9月1日 [小]新校舎引越し(3日間)
 9月25日 タイ・サラシット高校生が小学校を見学(高校インターナショナル・ウィーク)
 9月27日 [高]インターナショナルデー(インターナショナル・ウィーク9/15~9/27)、この年から開始。以降毎年実施
 9月23日 [高]明星祭、テーマ。「I×明星=∞—新☆自己発見」(2日間)
 10月28日 小・中学校公開研究会
 11月7日 [小]3年生(77回生)お泊り遠足(都民の森、1泊2日)
 11月16日 [小]3年生(77回生)農園で芋掘り
 11月22日 [高]マラソン大会
 11月28日 田近洵一氏を招き、国語の学習会を開く
 <2001年>
 1月4日 [中]スキー教室(3泊)
 2月7日 [高]第37回音楽祭
 3月4日 [小]学習発表会
 3月9日 [小]4・5年生(76・75回生)駅伝大会
 3月26日 遠藤豊元小・中学校長(中、理科)逝去
 卒業:[小]第74回(74回生)、[中]第54回(71回生)
 [高]第53回(68回生)

2001(平成13)年度 <77周年>

入学:[小]第78回(80回生)、[中]第55回(74回生)
 [高]第54回(71回生)
 5月16日 [小]5年生(76回生)伊豆大島見学旅行(2泊)
 5月 小学校英語導入のための具体的な検討に入る
 7月1日 地域防災拠点になることを三鷹市と契約する。「避難所等施設利用に関する協定書」を交わす
 7月6日 佐藤学氏講演会
 7月17日 [高]オーストラリアへ英語研修(8月8日まで)
 7月17日 [中]8年生(73回生)グループ別行事。山里体験、キャンプ、海体験、釣り、甲斐駒ヶ岳登山(8月2日まで)
 7月19日 [小]4年生(77回生)5年生(76回生)6年生(75回生)千倉寮で夏季生活(28日まで)
 7月19日 [中]7年生(74回生)ハヶ岳登山(2泊)
 7月19日 [高]八重山学習旅行(4泊)
 8月22日 高校体験入学(25日まで)
 8月23日 [高]韓国学習旅行(5泊)
 8月25日 [高]屋久島学習旅行(4泊)
 9月1日 小・中学校、高校正門に警備員を配置
 9月 小学校南棟前列前広場に、雲梯・登り棒など遊具を設置
 9月20日 [高]インターナショナルデー(インターナショナル・ウィーク9/15~9/20)
 9月22日 [高]明星祭。テーマ「楽~明星らしさ」(2日間)
 10月27日 小・中学校公開研究会
 11月 小学校推薦入学制度開始
 11月 千倉寮は食堂棟のみ残し解体
 11月22日 [高]マラソン大会
 12月3日 恩地邦郎元高等学校長逝去
 <2002年>
 1月4日 [中]スキー教室(3泊)
 2月7日 [高]第38回音楽祭
 2月23日 [中]合唱発表会
 3月3日 [小]学習発表会
 3月 [小]4・5年生(77・76回生)駅伝大会
 卒業:[小]第75回(75回生)、[中]第55回(72回生)
 [高]第54回(69回生)
 この年度のできごと
 ★高校の学習旅行(修学旅行)はこの年で終了

2002（平成14）年度**< 78 周年 >**入学：[小]第79回（81回生）、[中]第56回（75回生）[高]第55回（72回生）

- 4月 保護者・来校者にカード式入校証の着用を義務付ける。同時に教職員もカードの着用を開始する
- 4月 [小]英語学習がスタート（1～6年生が週2時間）
- 5月22日 [小]5年生（77回生）伊豆大島へ見学旅行（2泊）
- 7月17日 [中]8年生（74回生）グループ別行事。尾瀬、白神山地、妻良、戸田、妙高登山（8月1日まで）
- 7月17日 [高]オーストラリアへ短期留学（8月8日まで）
- 7月18日 [中]7年生（75回生）ハヶ岳登山（2泊）
- 7月19日 [小]4年、5年、6年生（78、77、76回生）千倉で夏季生活（民宿・矢原荘、28日まで）
- 7月 [小]イングリッシュキャンプ開始
- 9月 [小]「学校生活のしおり」を配布
- 9月7日 [高]明星祭。テーマ「『輪』～ミンナシダイ?!ジブンシダイ!!」（2日間）
- 10月26日 小・中学校公開研究会開催
- 11月12日 タイからの留学生が小学校参観
- 11月22日 [高]マラソン大会

<2003 年>

- 1月4日 [中]スキー教室（3泊）
- 2月6日 [高]第39回音楽祭
- 2月23日 [高]社会科主催京都奈良学習旅行（4泊）
- 2月24日 [中]合唱発表会
- 2月26日 [中]マラソン大会
- 3月2日 [小]学習発表会
- 3月12日 [小]4・5年生（78・77回生）駅伝大会
- 3月 [小]第76回（76回生）、[中]第56回（73回生）、
[高]第55回（70回生）卒業式
- 3月 大震災の発生および警戒宣言発令を想定したマニュアルを作成する

卒業：[小]第76回（76回生）、[中]第56回（73回生）[高]第55回（70回生）**2003（平成15）年度****< 79 周年 >**入学：[小]第80回（82回生）、[中]第57回（76回生）[高]第56回（71回生）

- 5月21日 [小]5年生（78回生）伊豆大島へ見学旅

行（2泊）

- 5月30日 [高]球技大会（2日間）
- 7月2日 [小]演劇部、いちょうの広場でパフォー
マンスを行う（2日間）
- 7月5日 [中]体験入学
- 7月17日 [高]オーストラリアへ短期留学
- 7月20日 高校体験入学（2日間）
- 7月22日 [中]7年生（76回生）ハヶ岳登山
- 7月22日 [小]4・5・6年生（79・78・77回生）千
倉で夏季生活（30日まで）
- 7月22日 [中]8年生（75回生）夏季行事。登山（南
アルプス甲斐駒ヶ岳・仙丈岳）、陶芸、歴
史文化（山梨県明野村埋文センター・平
林遺跡発掘調査参加）、英語キャンプ（稲
城市・米軍基地）、遠泳、染物、紙つく
り、泥遊び、ガラス工芸、土いじり、コ
ンピュータ等（30日まで）
- 8月1日 [中]美術作品展示。ラフォーレ原宿（18
日まで）
- 8月23日 中学校体験入学（25日まで）
- 9月6日 [高]明星祭。テーマ「彩－S A I－」（2
日間）
- 9月25日 「アンデルセン賞図書展」を小学校図書室
にて開催（10月5日まで）
- 10月25日 小・中学校公開研究会
- 11月6日 ドイツの交流校、カミュー・クローデル
高校から20名が小学校参観に訪れる
- 11月8日 [高]インターナショナルデー（インター
ナショナル・ウィーク11/1～11/8）
- 11月12日 タイからの留学生が小学校参観
- 11月20日 [高]マラソン大会
- 11月22日 中学校体験入学
- 12月9日 [小]京王電鉄、2年生（81回生）に「安
全教室」実施
- 12月23日 中学校体験入学

<2004 年>

- 1月4日 [中]スキー教室（3泊）
- 2月5日 [高]第40回音楽祭（調布グリーンホール）
- 2月25日 [中]マラソン大会
- 2月27日 [中]合唱発表会（武蔵野市民文化会館）
- 2月29日 [小]学習発表会
- 3月11日 [小]4・5年生（79・78回生）駅伝大会
- 3月11日 [中]9年生（74回生）卒業研究発表会（2
日間）

卒業：[小]第77回（77回生）、[中]第57回（74回生）[高]第56回（71回生）

2004（平成 16）年度 < 80 周年 >入学：[小]第81回（83回生）、[中]第58回（77回生）[高]第57回（74回生）

- 4月 教職員再雇用制度スタート
- 5月15日 創立記念日（80周年）。記念式典挙行（第2体育館）
- 5月15日 小・中学校の『明星の教育 2004春』発行
- 5月 [中]9年生（76回生）特別授業、林流日本舞踊を学ぶ（組ごとに4日に分けて実施）
- 5月31日 [小]5年生（79回生）伊豆大島へ見学旅行（2泊）
※台風でこの日に延期になった
- 6月17日 [小]4・5年生（80・79回生）特別授業、千石正一氏（自然環境研究センター主幹）による「千石先生のいきもの講座」
- 6月21日 [中]8年生（76回生）特別授業「この人に会いたい」第1回目、宮城永久子氏（三鷹市障害地域自立センター）を招き、障害者の自立と支援活動について話を伺う
- 6月23日 全園研究会
- 6月26日 中学校体験入学
- 7月5日 [中]9年生（75回生）沖縄へ修学旅行（4泊）
- 7月15日 [高]オーストラリアへ短期留学（8月4日まで）
- 7月19日 [高]体験授業（2日間）
- 7月18日 [小]4・5・6年生（80・79・78回生）千倉で夏季生活（各2泊、26日まで）
- 7月20日 [高]夏季補習・インターンシップ・ボランティア期間（31日まで）
- 7月20日 [中]7年生（77回生）八ヶ岳へ登山（2泊）
- 7月20日 [中]8年生（76回生）コース別夏季行事（妙高登山、尾瀬、西湖、海釣り、陶芸）
- 7月30日 上川淳元中学校長（小・中、社会）逝去
- 8月8日 [小]4・5・6年生（80・79・78回生）イングリッシュキャンプ。福島県、プリティッシュヒルズ（2泊）
- 8月19日 [高]中国・タイへ短期留学（28日まで）
- 8月27日 中学校体験入学（2日間）
- 9月23日 [小・中]運動会
- 9月25日 [高]明星祭。テーマ「遊」（2日間）
- 10月23日 小・中学校公開研究会
- 11月4日 [高]インターナショナルデー（インターナショナル・ウィーク10/30～11/6）
- 11月12日 [中]9年生（75回生）文学散歩、東京大空襲慰霊の旅（江東区を歩く）

- 11月22日 [高]マラソン大会
- 12月20日 [高]第5回北海道スキー・スノーボード（4泊）

<2005 年>

- 1月4日 [中]スキー教室（3泊）
- 1月14日 [中]9年生（75回生）卒業研究発表会（2日間）
- 2月3日 [高]第41回音楽祭
- 2月18日 [中]マラソン大会
- 2月24日 [中]合唱発表会
- 2月27日 [小]学習発表会
- 3月10日 [小]4・5年生（80・79回生）駅伝大会（玉川上水沿い）
- 3月27日 [高]社会科主催奈良京都学習旅行（4泊）
- 卒業：[小]第78回（78回生）、[中]第58回（75回生）
[高]第57回（72回生）

2005（平成 17）年度 < 81 周年 >入学：[小]第82回（84回生）、[中]第59回（78回生）[高]第58回（75回生）

- 4月25日 「個人情報取り扱いについて」のお知らせを配布
- 5月11日 [小]5年生（80回生）伊豆大島へ旅行（2泊）
- 5月24日 [中]8年生（77回生）荒磯海岸（神奈川県逗子市）磯遊び
- 5月27日 [中]7年生（78回生）高川山（山梨県大月市）へ登山
- 5月27日 [中]9年生（76回生）鎌倉グループ散策
- 6月9日 [中]7年生（78回生）ものづくりの授業（14日まで）
- 6月15日 全園授業研究会（小・中にて）
- 6月22日 全園授業研究会（高校にて）
- 6月28日 [中]8年生（77回生）文学散歩、「正義派の舞台を歩く」門前仲町・茅場町・人形町
- 7月14日 [高]オーストラリアへ短期留学（8月3日まで）
- 7月19日 [高]インターンシップ実施期間
- 7月19日 [中]7年生（78回生）八ヶ岳登山（2泊）
- 7月20日 [中]8年生（77回生）コース別夏季行事（尾瀬、式根島、ダイビング、鹿島槍、海釣り、道志村キャンプ）
- 7月20日 [小]4・5・6年生（81・80・79回生）千倉で夏季生活（各2泊、28日まで）
- 8月1日 [中]8年生（77回生）キャンプ
- 9月24日 [高]明星祭
テーマ「笑～LAUGH&SMILE～」(2日

間)
 10月22日 小・中学校公開研究会
 10月28日 **[中]** 8年生 (77回生) 文学散歩、古都鎌倉を歩く
 11月4日 **[小]** タイ・ドイツ・オーストリアからの留学生と3年生が交流
 11月5日 **[中・高]** インターナショナルデー (インターナショナル・ウィーク10/29～11/5)、この年から9年生 (76回生) も参加
 11月18日 **[高]** マラソン大会 (多摩川沿い)
 11月 学校周辺の道路路側帯が色分けされ、歩道が強調される
 11月 小・中学校の施設に関してアスベストの調査を実施問題なしとの結果が出る
 12月15日 手塚光雄元理事長・元高等学校長逝去
<2006 年>
 1月4日 **[中]** スキー教室 (7日まで)
 1月11日 AED 導入に伴い、救命救急の講習会を実施
 1月 **[中]** 9年生 (76回生) 卒業研究発表会
 1月30日 **[小]** 竹内敏晴氏 (表現活動) によるワークショップを6年生 (79回生) と教師を対象に行う
 2月1日 **[高]** 第42回音楽祭
 2月18日 **[中]** 合唱発表会
 2月24日 **[中]** マラソン大会 (都立武蔵野公園)
 2月26日 **[小]** 学習発表会
 2月 小学校の教育相談を生活指導部から独立して位置づける
 3月10日 **[小]** 4・5年生 (81・80回生) 駅伝大会
卒業: **[小]** 第79回 (79回生)、**[中]** 第59回 (76回生)
[高] 第58回 (73回生)

2006 (平成 18) 年度**< 82 周年 >**

入学: **[小]** 第83回 (85回生)、**[中]** 第60回 (79回生)

[高] 第59回 (76回生)

4月 中・高一貫6・6制スタート、中学校は土曜日授業開始
 4月6日 **[中・高]** 合同始業式 (第3体育館)
 5月24日 **[小]** 5年生 (81回生) 伊豆大島へ旅行 (2泊)
 5月26日 **[中]** 7年生 (79回生) 高川山登山
 5月30日 **[中]** 8年生 (78回生) 「人体の不思議展」見学と横浜グループ散策
 5月30日 **[中]** 9年生 (77回生) 文学散歩、上野・浅草・樋口一葉「わかれみち」の舞台
 6月29日 鈴木満男元小・中・高校長 (高校、国語)

逝去
 6月30日 **[小]** サッカー部と野球部が、教員との交流試合を行う
 7月3日 **[小]** 演劇クラブ、ミニ発表会
 7月17日 **[中]** 8年生 (78回生) コース別体験 (尾瀬、蓼科、式根島、甲斐駒ヶ岳)
 7月18日 **[高]** オーストラリアへ短期留学 (8月8日まで)
 7月19日 **[中]** 7年生 (79回生) ハヶ岳登山 (2泊) 荒天の中の登山となる
 7月21日 **[小]** 4・5・6年生 (82・81・80回生) 千倉で夏季生活 (各2泊、29日まで)
 7月31日 **[中]** 8・9年生 (78・77回生) ニュージーランドへ短期留学 (8月16日まで)
 8月22日 **[高]** タイへ短期留学 (29日まで)
 9月23日 **[高]** 明星祭。テーマ「Like a Rolling Stone」(2日間)
 10月21日 小学校公開研究会、この年から小学校単独で開催
 10月31日 **[中]** 7年生 (79回生) 飯盒炊爨。川井キャンプ場
 11月4日 **[中・高]** インターナショナルデー (インターナショナル・ウィーク10/30～11/4)
 11月17日 **[中]** 8年生 (78回生) 鎌倉散策
 11月18日 **[中]** 9年生 (77回生) 文学散歩、「東京大空襲慰霊の旅」
 11月22日 **[高]** マラソン大会
 11月22日 **[中]** 9年生 (77回生) バレーボール大会
 12月7日 **[小]** 神沢利子氏 (児童文学作家) が2年生 (84回生) に特別授業を行う
 12月12日 **[中]** 8年生 (78回生) サッカー大会
<2007 年>
 1月4日 **[中]** スキー教室 (7日まで)
 2月7日 **[高]** 第43回音楽祭 (調布グリーンホール)
 2月13日 **[小]** 5年生 (81回生) がスウェーデンからの留学生と交流会を持つ
 2月17日 **[中]** 合唱発表会 (武蔵野文化会館)
 2月25日 **[小]** 学習発表会
 2月28日 **[中]** マラソン大会 (都立武蔵野公園)
 3月10日 **[中]** 9年生卒業研究発表会 (2日間)
 3月12日 **[小]** 4・5年生 (82・81回生) 駅伝大会
 3月24日 **[小]** 4・5年生 (82・81回生) 春休みオーストラリアへ短期留学 (4月3日まで)
 3月31日 和田武久小学校長、黒川実中・高等学校長退任
卒業: **[小]** 第80回 (80回生)、**[中]** 第60回 (77回生)
[高] 第59回 (74回生)

この年度のできごと

★[中] 7年生 (79回生) 合唱コンクール

2007 (平成 19) 年度 < 83 周年 >入学 : [小] 第84回 (86回生)、[中] 第61回 (80回生)[高] 第60回 (77回生)

- 4月 小学校長に一瀬清、中・高等学校長に渡辺京が就任
- 4月24日 原田満寿郎元教諭 (小・中、社会) 元理事、逝去
- 5月1日 [高] 音楽部、ベルリンへ研修旅行 (5月14日まで)
- 5月9日 [小] 5年生 (82回生) 伊豆大島へ見学旅行 (2泊)
- 6月1日 [中] 8年生 (79回生) 荒崎海岸磯遊び
- 6月1日 [中] 9年生 (78回生) 三番瀬潮干狩り
- 6月11日 [中] 7年生 (80回生) 高川山登山
- 6月20日 [小] オーケストラ鑑賞教室
- 6月27日 [小] ICU教授と学生による特別授業。「インドについて」講義。その後インドの学校と明星小学校とで絵の交流をおこなう
- 7月11日 [小] 1年生 (86回生) に安全教室を実施 (道の歩き方、横断歩道の渡り方)
- 7月19日 [中] 7年生 (80回生) ハヶ岳登山 (2泊)
- 7月20日 [小] 4・5・6年生 (83・82・81回生) 千倉で夏季生活 (各2泊、28日まで)
- 7月30日 [中] 8・9年生 (79・78回生) ニュージーランドへ短期留学 (8月14日まで)
- 8月27日 [中] 8年生 (79回生) 夏季行事。奥阿賀 (新潟県) 民泊体験 (3泊)
- 9月3日 [小] 夏休み作品展実施
- 9月22日 [中・高] 明星祭。テーマ「ECOJOY!!」(2日間)
- 10月1日 [小・中] 運動会、雨のためこの日に順延
- 10月20日 小学校公開研究会
- 11月11日 [中・高] インターナショナルデー (インターナショナル・ウィーク11/5~11/11)
- 11月29日 [中] 7年生 (80回生) 合唱コンクール
- 11月29日 [高] マラソン大会 (府中・多摩川)
- 11月 [中] 8年生 (79回生) 第1回職場体験
- 12月6日 [小] 2年生 (85回生) に「安全教室」を実施 (京王電鉄)

<2008 年>

- 1月4日 [中] スキー教室 (3泊)
- 2月6日 [高] 第44回音楽祭 (調布グリーンホール)
- 2月23日 [中] 合唱発表会 (武蔵野文化会館)
- 2月24日 [小] 学習発表会

- 2月27日 [中] マラソン大会 (武蔵野公園)
- 3月11日 [小] 4・5年生 (83・82回生) 駅伝大会
- 3月11日 [中] 9年生 (78回生) 卒業研究発表会 (2日間)
- 3月24日 [小] 5・6年生 (82・81回生) 有志がオーストラリアへ短期留学 (4月3日まで)

卒業 : [小] 第81回 (81回生)、[中] 第61回 (78回生)[高] 第60回 (75回生)

この年度のできごと

★[高] オーストラリア短期留学

★出口一彦理事長就任。

2008 (平成 20) 年度 < 84 周年 >入学 : [小] 第85回 (87回生)、[中] 第62回 (81回生)[高] 第61回 (78回生)

- 5月16日 カタールの公立学校校長・教頭十数名が小学校に来校、参観する
- 5月21日 [小] 5年生 (83回生) 伊豆大島へ見学旅行 (2泊)
- 6月2日 [小] 1年生 (87回生) と6年生 (82回生) の合同遠足 (昭和記念公園)
- 6月18日 [小] 鑑賞教室、新国立劇場合唱団による世界民謡、ディズニー、オペラコーラス鑑賞
- 7月7日 小学校教師向けに、特別講演「携帯世界の子どもたち」藤川大祐 (千葉大准教授)
- 7月11日 [小] 1・2・3年生 (87・86・85回生) 歌の交換会
- 7月17日 [小] 1・2・3年生 (87・86・85回生) サマースクール開催 (19日まで)
- 7月18日 [小] 4・5・6年生 (84・83・82回生) 千倉で夏季生活 (各2泊、26日まで)
- 7月18日 [高] オーストラリアへ短期留学 (8月7日まで)
- 7月22日 [中] 7年生 (81回生) ハヶ岳登山 (2泊)
- 7月28日 [中] 8・9年生 (80・79回生) ニュージーランドへ短期留学 (8月12日まで)
- 8月20日 [高] タイへ短期留学 (30日まで)
- 8月25日 [中] 8年生 (80回生) コース別夏季行事 (奥阿賀、鹿島槍、山中湖、式根島、熊野古道)
- 9月13日 [中・高] 明星祭。テーマ「日本」(2日間)
- 9月21日 [小・中] 運動会 (雨のため中断、後半は9月23日に実施)
- 10月25日 小学校公開研究会
- 11月8日 [中・高] インターナショナルデー (インターナショナル・ウィーク11/4~11/7)

- 11月10日 [中] 8年生 (80回生) 第2回職場体験 (15日まで)
- 11月27日 [高] マラソン大会 (調布市多摩川土手)
- 12月1日 [中] 7年生 (81回生) 合唱コンクール
(2009年)
- 1月4日 [中] スキー教室 (3泊)
- 2月5日 [高] 第45回音楽祭 (アミューたちかわ)
この年から9年生 (79回生) が高校音楽祭に参加
- 2月22日 [小] 学習発表会
- 2月14日 [中] マラソン大会 (都立武蔵野公園)
- 2月28日 [中] 合唱発表会
- 3月10日 [小] 4・5年生 (84・83回生) 駅伝大会
- 3月10日 [中] 9年生 (79回生) 卒業研究発表会 (2日間)

卒業: [小] 第82回 (82回生)、[中] 第62回 (79回生)
[高] 第61回 (76回生)

2009 (平成 21) 年度 < 85 周年 >

入学: [小] 第86回 (88回生)、[中] 第63回 (82回生)
[高] 第62回 (79回生)

- 4月 小学校は携帯電話の持ち込み禁止 (3月19日にお知らせを配布。子どもに持たせる必要がある家庭は学校へ申請する制度をスタート)
- 5月15日 創立記念日 (85周年)
- 5月17日 創立85周年を祝う会 (吉祥寺東急イン)
- 5月20日 [小] 5年生 (84回生) 伊豆大島へ見学旅行 (2泊)
- 6月25日 [小] 6年生 (83回生) 特別授業、「ネット社会の危険性」和田翔太氏 (NPO法人企業教育研究会)
- 7月13日 [高] 10年生 (79回生) 学年旅行。山中湖 (1泊)
- 7月 [高] 高校短期留学 (オーストラリア、台湾) は新型インフルエンザ流行のため中止
- 7月19日 [小] 1・2・3年生 (88・87・86回生) サマースクール開催 (2日間)
- 7月21日 [中] 7年生 (82回生) ハヶ岳登山 (2泊) 濃霧のため2日目の赤岳登頂を断念し、阿弥陀のゴルフコースを選択
- 7月21日 [小] 4・5・6年生 (85・84・83回生) 千倉で夏季生活 (各2泊、29日まで)
- 7月27日 [中] 8年生 (81回生) 佐渡へ旅行 (3泊)
- 8月3日 [中] 8・9年生 (81・80回生) ニューゼalandへ短期留学 (8月18日まで)
- 8月8日 第1回「夏の教室」開催 (2日間)。在校

生・地域の小学生・保護者・卒業生・一般の方などのべ478人が16講座に参加

* 2日目の全体会は3人の卒業生によるトークセッション「わたしの表現と明星学園」古屋兎丸 (漫画家・53回生)、中島たい子 (小説家・56回生)、唯野未歩子 (女優・映画監督・59回生)

- 9月 [小] 防災頭巾義務化
- 9月26日 [中・高] 明星祭。テーマ「百花繚乱」(2日間)
- 10月1日 [小] 3年生 (86回生) 宿泊遠足 (桧原村都民の森)
- 10月24日 小学校公開研究会
- 10月 [小] 地元の農家、倉本農園で大根掘り
- 11月7日 [中・高] インターナショナルデー (第10回インターナショナル・ウィーク11/2～11/7)
- 11月9日 [中] 8年生 (81回生) 第3回職場体験
- 11月16日 上田八郎元高等学校長 (高校、理科・数学) 逝去
- 11月26日 [高] マラソン大会 (調布市・多摩川河川敷)
- 12月18日 [中] 9年生 (80回生) 卒業研究発表会 (2日間)
- 12月22日 [高] スキー・スノーボード教室。北海道ニセコ (25日まで)

(2010年)

- 1月4日 [小] 英語キャンプ (6日まで)
- 1月16日 [中] 8年生 (81回生) 職場体験発表会
- 2月5日 [高] 第46回音楽祭 (アミューたちかわ)
- 2月13日 [中] 合唱発表会 (武蔵野文化会館)
- 2月19日 [中] マラソン大会
- 2月28日 [小] 学習発表会
- 3月1日 [中] 7年生 (82回生) 「この人に会いたい」有機農家・田下隆一氏 (卒業生) の話を聞く
- 3月3日 [中] 9年生 (80回生) 「この人に会いたい」ホームレスの自立を支援する雑誌「ビッグイシュー」に携わる、詩人の大江慎治氏の話聞く
- 3月9日 [小] 4・5年生 (85・84回生) 駅伝大会
- 卒業: [小] 第83回 (83回生)、[中] 第63回 (80回生)
[高] 第62回 (77回生)

この年度のできごと

★『明星の教育』を小・中・高で一冊にまとめる

2010（平成22）年度**< 86 周年 >**入学：[小]第87回（89回生）、[中]第64回（83回生）[高]第63回（80回生）

- 4月15日 [小]「生活上のルールについて」のお知らせを配布
- 5月12日 [小]5年生（85回生）伊豆大島へ見学旅行（2泊）
- 5月23日 [中]8年生（82回生）奥阿賀（新潟県）へ旅行（3泊）キャンプと民家泊体験
- 6月12日 [中]中学校生徒自治会主催・縦割り交流会
- 6月30日 [小]鑑賞教室
- 7月10日 [高]11年生（79回生）山中湖学年旅行
- 7月18日 [高]オーストラリアへ短期留学。生徒27名参加（8月7日まで）
- 7月20日 [小]6年生（84回生）小菅村で夏季生活、この年は6年生のみ千倉へ行かなかった
- 7月22日 [中]7年生（83回生）ハヶ岳登山。3日間晴天に恵まれた赤岳登山（2泊3日）
- 7月24日 [小]5年生（85回生）千倉で夏季生活（2泊）
- 7月27日 [小]4年生（86回生）千倉で夏季生活（2泊）
- 7月27日 [中]8・9年生（82・81回生）ニュージーランドへ短期留学（8月10日まで）
- 8月7日 第2回「夏の教室」開催（2日間）
- 8月16日 [小]英語キャンプ（2泊）
- 8月 [高]タイへ短期留学
- 9月18日 [中・高]明星祭（2日間）
- 10月2日 [小・中]運動会。これまでの6色から4色対抗となり、応援合戦は5・6年生と中学生がそれぞれ行う
- 10月5日 [小]6年生（84回生）奈良へ修学旅行（これまでより1日延長して3泊）
- 10月23日 小学校公開研究会
- 11月6日 [中・高]インターナショナルデー（第11回インターナショナル・ウィーク11/1～11/6）
- 11月8日 [中]8年生（82回生）第4回職場体験（13日まで）
- 11月25日 [高]マラソン大会（多摩川河川敷）
- 12月18日 [中]9年生（81回生）卒業研究発表会（2日間）
- 12月22日 [高]スキー・スノーボード教室（3泊）
- 12月26日 [中]スキー行事（3泊）

<2011年>

- 2月4日 [高]第47回音楽祭（アミューたちかわ）

- 2月27日 [小]学習発表会
- 2月10日 [中]合唱発表会（武蔵野市民文化会館）
- 2月25日 [中]マラソン大会
- 3月9日 [小]4・5年生（86・85回生）駅伝大会
- 3月11日 東日本大震災発生。帰宅できなかった児童・生徒数名が教師と共に学校に宿泊。余震や停電、交通の混乱、原発事故の影響などからこの後予定されていた卒業式・終業式などはすべて中止
- 3月13日 [高]第63回卒業式（78回生）は中止
- 3月15日 [中]第64回卒業式（81回生）は中止
- 3月19日 [小]第84回卒業式（84回生）は中止
- *子どもたちの荷物を取りに来た保護者に卒業証書を渡す
- 3月27日 [高]第63回卒業証書授与（希望者のみ）（78回生）

卒業：[小]第84回（84回生）、[中]第64回（81回生）[高]第63回（78回生）**2011（平成23）年度****< 87 周年 >**入学：[小]第88回（90回生）、[中]第65回（84回生）[高]第64回（81回生）

- 4月3日 [中]第64回卒業証書授与の会（81回生）
- 4月4日 [小]第84回卒業証書授受（84回生）
- *3月11日の東日本大震災で卒業式が中止になったため
- 5月15日 創立記念日（87周年）。学園主催の「門出を祝う会」で前年度12年生（78回生）の卒業を祝う
- 5月30日 井の頭校地、石井英章氏所有土地（底地権）売買契約締結
- 6月2日 緊急連絡をWebメールで通知することを開始
- 7月5日 [中]8年生（83回生）奥阿賀へ旅行（4泊）
- 7月16日 [高]オーストラリアへ短期留学。生徒25名参加（8月7日まで）
- 7月21日 [中]7年生（84回生）ハヶ岳登山（2泊）
- 7月21日 [小]例年の夏季行事は、東日本大震災の余震による津波、原発事故への懸念からすべて中止4・5年生（87・86回生）のみ10コースのコース別活動、6年生（85回生）は特別授業2講座を行う
- 7月23日 [小]4・5年生（87・86回生）オーストラリアへ短期留学（7月31日まで）
- *3月に行えなかったため夏に実施
- 7月29日 牟礼校地、浅見家所有土地（底地権）売買契約締結
- 7月30日 [中]中学校で6年生（85回生）体験入学実施

7月31日 [中] 8・9年生 (83・82回生) ニュージ
ランドへ短期留学 (8月16日まで)

8月7日 第3回「夏の教室」この年から夏に1日、
秋に1日、計2日間開催となる

8月19日 [高] タイへ短期留学。生徒19名参加 (29
日まで)

9月7日 小・中・高合同防災訓練 (3年ごとの大が
かりな訓練) を開始

9月23日 [中・高] 明星祭 (2日間)

10月4日 [小] 5年生 (86回生) 白根・浅間火山学
習 (2泊)

* 毎年5月に行って来た恒例の伊豆大島旅行 (火山学習) が
震災の影響で中止となったため季節と場所を変更して実施

10月22日 小学校公開研究会

10月23日 [中] 公開授業と研究会

11月5日 [高] インターナショナルデー (インター
ナショナル・ウィーク10/31～11/5)

11月14日 [中] 8年生 (83回生) 第5回職場体験 (19
日まで)

11月22日 [高] マラソン大会 (調布市多摩川サイク
リングロード)

11月23日 第1回「秋の教室」

12月17日 [中] 9年生 (82回生) 卒業研究発表会 (2
日間)

12月21日 [高] スキー・スノーボード教室 (3泊)

12月26日 [中] スキー行事 (3泊)

〈2012 年〉

1月27日 [中] 8年生 (83回生) 職場体験報告会

1月31日 [高] 第48回音楽祭 (武蔵野文化会館)

2月19日 [中] 合唱発表会 (アミューたちかわ)

2月24日 [中] マラソン大会 (都立武蔵野公園)

2月26日 [小] 学習発表会

3月7日 [小] 4・5年生 (87・86回生) 駅伝大会
(井の頭公園・西園)

3月21日 [小] 4・5年生 (87・86回生) オーストラ
リアへ短期留学 (4/1日まで)

3月23日 [高] 社会科主催「奈良京都旅行」。在校
生・卒業生45名参加 (3泊)

卒業: [小] 第85回 (85回生)、[中] 第65回 (82回生)
[高] 第64回 (79回生)

2012 (平成 24) 年度

< 88 周年 >

入学: [小] 第89回 (91回生)、[中] 第66回 (85回生)
[高] 第65回 (82回生)

5月21日 [小] 金環日食をみる会を実施 (グラウン
ドにて)

6月1日 [高] 体育祭 (2日間)

7月11日 [小] 4・5・6年 (88・87・86回生) 合同
黒姫夏季行事 (3泊)

7月18日 [高] オーストラリアへ短期留学 (8月7日
まで)

7月18日 [中] 8年生 (84回生) 奥阿賀へ旅行 (4泊)

7月23日 [中] 7年生 (85回生) ハヶ岳登山 (2泊)。
第4回「夏の教室」

7月30日 [中] 8・9年生 (84・83回生) ニュージ
ランドへ短期留学 (8月15日まで)

8月19日 [高] タイへ短期留学 (29日まで)

9月3日 [小] オーストラリア (アデレード) から
小学生の短期留学生受け入れ (13日まで)

9月29日 [中・高] 明星祭 (2日間)。テーマ「myoj
oyfle おもてなし」

10月20日 小学校公開研究会開催

10月21日 [中] 公開授業と研究会開催

11月10日 [中・高] インターナショナルデー (イン
ターナショナル・ウィーク11/5～11/10)

11月12日 [中] 8年生 (84回生) 第6回職場体験 (17
日まで)

11月18日 第2回「秋の教室」

11月28日 [高] マラソン大会

12月15日 [中] 9年生 (83回生) 卒業研究発表会 (2
日間)

12月22日 [小] 英語キャンプ (2泊)

12月22日 [高] スキー・スノーボード教室 (3泊)

12月26日 [中] スキー行事 (3泊)

〈2013 年〉

1月29日 [高] 高校第49回音楽祭 (アミューたちか
わ)

2月22日 [中] 合唱発表会 (武蔵野文化会館)

2月24日 [小] 学習発表会

2月27日 [中] マラソン大会 (武蔵野公園)

3月6日 [小] 4・5年生 (88・87回生) 駅伝大会

3月19日 [小] 4・5年生 (88・87回生) オーストラ
リアへ短期留学 (31日まで)

3月31日 一瀬清小学校長、渡辺京中・高等学校長
退任

卒業: [小] 第86回 (86回生)、[中] 第66回 (83回生)
[高] 第65回 (80回生)

2013 (平成 25) 年度

< 89 周年 >

入学: [小] 第90回 (92回生)、[中] 第67回 (86回生)
[高] 第66回 (83回生)

4月1日 小学校長に平田和孝、中・高等学校長に
河住貴夫が就任

5月8日 [小] 5年生 (88回生) 伊豆大島へ見学旅

行(2泊)
 7月21日 [小]4・5・6年(89・88・87回生)黒姫
 で合同夏季生活(3泊)
 7月27日 第5回「夏の教室」
 9月21日 [高]明星祭(2日間)
 10月6日 プレ90周年イベント(吉祥寺東急イン)
 10月19日 小学校公開研究会開催
 11月9日 [中・高]インターナショナルデー(イン
 ターナショナル・ウィーク11/5～11/9)
 11月17日 第3回「秋の教室」
 11月28日 [高]マラソン大会
 12月22日 [高]スキー・スノーボード教室(3泊)
 12月26日 [中]スキー行事(3泊)
〈2014年〉
 1月4日 [小]英語キャンプ(2泊)
 1月30日 [高]音楽祭
 2月21日 [中]合唱発表会
 2月25日 [中]マラソン大会
 3月2日 [小]学習発表会
 3月20日 [小]4・5年生(89・88回生)オーストラ
 リアへ短期留学(31日まで)
卒業：[小]第87回(87回生)、[中]第67回(84回生)
[高]第66回(81回生)

2014(平成26)年度 <90周年>

入学：[小]第91回(93回生)、[中]第68回(87回生)
[高]第67回(84回生)
 5月 [小]5年生(89回生)伊豆大島見学旅行
 (2泊)
 5月11日 創立90周年記念式典・ホームカミングデ
 イ開催
 5月15日 創立記念日(90周年)
 7月8日 [中]8年生(86回生)奥阿賀旅行(3泊)
 7月19日 [高]オーストラリア短期留学(8月8日ま
 で)
 7月22日 [中]7年生(87回生)八ヶ岳登山(2泊)
 7月27日 [中]イギリス語学研修(8月10日まで)
 7月27日 第5回「夏の教室」開催
 8月20日 [高]タイ短期留学(29日まで)
 9月20日 [高]明星祭(2日間)
 10月18日 小・中学校公開研究会開催
 11月5日 [高]インターナショナルデー
 11月10日 [中]8年生(86回生)職場体験(15日ま
 で)
 12月26日 [中]スキー教室(3泊)
〈2015年〉
 2月20日 [中]マラソン大会

2月26日 [中]合唱コンクール開催

2月3日 [高]音楽祭

卒業：[小]第88回(88回生)、[中]第68回(85回生)
[高]第67回(82回生)

2015(平成27)年度 <91周年>

入学：[小]第92回(94回生)、[中]第69回(88回生)
[高]第68回(85回生)
 5月27日 [小]5年生(90回生)伊豆大島へ見学旅
 行(2泊)
 7月15日 [小]4・5・6年生(91・90・89回生)千
 倉で夏季生活(各2泊、24日まで)
 7月8日 [中]8年生(87回生)奥阿賀旅行(2泊)
 7月22日 [中]7年生(88回生)八ヶ岳登山(2泊)
 8月上旬 [高]和太鼓部全国大会優勝
 9月19日 [高]明星祭(2日間)
 11月6日 [小]鑑賞教室
 11月9日 [中]8年生(87回生)職場体験(14日まで)
 11月28日 小・中学校公開研究会開催
〈2016年〉

1月4日 [小]イングリッシュキャンプ(2泊)
 2月4日 [高]音楽祭
 2月18日 [中]マラソン大会
 2月23日 [中]合唱コンクール開催(この年からコ
 ンクール)
 2月28日 [小]学習発表会
 3月9日 [小]4・5年生(91・90回生)駅伝大会
 3月27日 [小]オーストラリア短期留学(～4月7日
 まで)
 3月末 高校グラウンド人工芝・タータングラウ
 ンド完成
卒業：[小]第89回(89回生)、[中]第69回(86回生)
[高]第68回(83回生)

2016(平成28)年度 <92周年>

入学：[小]第93回(95回生)、[中]第70回(89回生)
[高]第69回(86回生)
 4月 小学校校長に福田純一が就任
 5月25日 [小]5年生(91回生)伊豆大島へ見学旅
 行(2泊3日)
 6月6日 [中]8年生(88回生)奥阿賀旅行(2泊3
 日)
 7月15日 [小]4・5・6年生(92・91・90回生)千
 倉で夏季生活(各2泊3日、25日まで)
 7月20日 [中]7年生(89回生)八ヶ岳登山(2泊3
 日)

8月13日 [中] オーストラリア短期留学 (8月26日まで)
 9月5日 [小] オーストラリア留学生受け入れ (15日まで)
 10月24日 [高] インターナショナル・ウィーク (31日まで)
 11月8日 [小] 鑑賞教室
 11月7日 [中] 8年生 (88回生) 職場体験 (12日まで)
 11月26日 小・中学校公開研究会開催
〈2017年〉
 1月5日 [小] イングリッシュキャンプ (2泊3日)
 2月2日 [高] 音楽祭
 2月21日 [中] 合唱コンクール開催
 2月24日 [中] マラソン大会
 2月26日 [小] 学習発表会
 3月20日 [小] オーストラリア短期留学 (～31日まで)
 卒業: [小] 第90回 (90回生)、[中] 第70回 (87回生)
 [高] 第69回 (84回生)

2017 (平成 29) 年度 < 93 周年 >

入学: [小] 第94回 (96回生)、[中] 第71回 (90回生)
 [高] 第70回 (87回生)
 5月13日 第2回ホームカミングデイ
 5月25日 [小] 5年生 (92回生) 伊豆大島へ見学旅行 (2泊)
 7月3日 [中] 9年生 (88回生) 十勝民泊旅行 (4泊)
 7月5日 [中] 8年生 (89回生) 奥阿賀旅行 (2泊)
 7月17日 [小] 4・5・6年生 (93・92・91回生) 千倉で夏季生活 (各2泊3日、26日まで)
 7月19日 [中] 7年生 (90回生) ハケ岳登山 (2泊)
 7月29日 [中・高] タイ短期留学 (8月8日まで)
 8月12日 [中] オーストラリア短期留学 (8月25日まで)
 9月23日 [高] 明星祭 (2日間)
 9月30日 [小・中] 合同運動会
 10月18日 [小] 6年生 (91回生) 奈良へ修学旅行 (2泊)
 10月25日 [高] インターナショナル・ウィーク (31日まで)
 11月6日 [中] 8年生 (89回生) 職場体験 (11日まで)
 11月25日 小・中学校公開研究会開催
 12月18日 [小] 音楽会
〈2018年〉
 1月4日 [小] イングリッシュキャンプ (2泊)

1月30日 [高] 音楽祭
 2月20日 [中] 合唱コンクール開催
 2月23日 [中] マラソン大会
 2月25日 [小] 学習発表会
 3月20日 [小] オーストラリア短期留学 (～31日まで)
 3月31日 小学校校長福田純一が退任
 卒業: [小] 第91回 (91回生)、[中] 第71回 (88回生)
 [高] 第70回 (85回生)

2018 (平成 30) 年度 < 94 周年 >

入学: [小] 第95回 (97回生)、[中] 第72回 (91回生)
 [高] 第71回 (88回生)
 4月1日 小学校校長に剛力正和が就任
 5月23日 [小] 5年生 (93回生) 伊豆大島へ見学旅行 (2泊)
 7月 理事長に平田和孝が就任
 7月2日 [中] 9年生 (89回生) 陸前高田民泊旅行 (4泊)
 7月5日 [中] 8年生 (90回生) 奥阿賀旅行 (2泊)
 7月20日 [小] 4・5・6年生 (94・93・92回生) 千倉で夏季生活 (各2泊、28日まで)
 7月20日 [高] オーストラリア短期留学 (8月9日まで)
 7月23日 [中] 7年生 (91回生) ハケ岳登山 (2泊)
 7月27日 [中] タイ短期留学 (8月6日まで)
 8月11日 [中] オーストラリア短期留学 (8月24日まで)
 9月10日 [小] オーストラリア留学生受け入れ (16日まで)
 9月22日 [高] 明星祭 (2日間)
 9月29日 [小・中] 合同運動会
 10月24日 [小] 6年生 (92回生) 奈良へ修学旅行 (2泊)
 10月25日 [高] インターナショナル・ウィーク (31日まで)
 11月5日 [中] 8年生 (90回生) 職場体験 (10日まで)
 11月25日 小・中学校公開研究会開催
〈2019年〉
 1月4日 [小] イングリッシュキャンプ (2泊)
 2月7日 [高] 音楽祭
 2月18日 [中] 卒業研究発表会
 2月19日 [中] 合唱コンクール開催
 2月22日 [中] マラソン大会
 2月24日 [小] 学習発表会
 3月20日 [小] オーストラリア短期留学 (～31日まで)

3月31日 河住貴夫中・高等学校長退任
卒業：[小]第92回（92回生）、[中]第72回（89回生）
[高]第71回（86回生）

2019（平成31/令和1）年度＜95周年＞

入学：[小]第96回（98回生）、[中]第73回（92回生）
[高]第72回（89回生）

4月 中・高等学校長に平野康弘が就任
 5月22日 [小]5年生（94回生）伊豆大島へ見学旅行（2泊）
 7月1日 [中]9年生（90回生）沖縄修学旅行、初の伊平屋島民泊（4泊）
 7月18日 [小]4・5・6年生（95・94・93回生）千倉で夏季生活（各2泊、26日まで）
 7月18日 [高]オーストラリア短期留学（8月7日まで）
 7月22日 [中]7年生（92回生）八ヶ岳登山（2泊）
 7月25日 [中・高]タイ短期留学（8月4日まで）
 7月26日 [中]タイ短期留学（8月5日まで）
 8月10日 [中]オーストラリア短期留学（8月23日まで）
 8月23日 [小]English Camp（2泊）
 8月27日 [中]8年生（91回生）有志奥阿賀旅行（2泊）
 [中]9年生（90回生）社会科有志学習旅行（2泊）
 10月11日 [小]台湾留学生受け入れ（17日まで）
 10月23日 [小]6年生（93回生）奈良へ修学旅行（2泊）
 10月23日 [高]インターナショナル・ウィーク（29日まで）
 11月11日 [中]8年生（91回生）職場体験（16日まで）
 11月23日 小・中学校公開研究会開催
 12月26日 [小]台湾留学（30日まで）

〈2020年〉

1月24日 [中]卒業研究発表会（2日間）初の小学生対象発表会が実現
 1月30日 [高]音楽祭
 2月15日 [中]職場体験報告会、この年が最後となる
 2月20日 [中]マラソン大会
 2月23日 [小]学習発表会
 2月25日 [中]合唱コンクール開催
 3月2日 新型コロナウイルス感染症（Cov-19）感染拡大のため3月2日から全校臨時休校。これ以降に予定していたすべての行事は中止または延期

3月8日 [高]第72回卒業式（87回生）延期（3/31）
 3月15日 [中]第73回卒業式（90回生）卒業生・保護者・教員のみで実施
 3月17日 [小]第93回卒業式（93回生）特別時程で実施
 3月20日 [小]オーストラリア短期留学は中止
 3月31日 [高]第72回卒業式を45分間で行う
卒業：[小]第93回（93回生）、[中]第73回（90回生）
[高]第72回（87回生）

この年度のできごと

- ★高校にれいめいホール竣工
- ★新型コロナウイルス感染症（Cov-19）感染拡大

2020（令和2）年度＜96周年＞

入学：[小]第97回（99回生）、[中]第74回（93回生）
[高]第73回（90回生）

4月 [小・中・高]入学式は延期
 4月7日 [小]第1回オンライン授業開始（5月7日まで）
 5月 [小]5年生（95回生）伊豆大島旅行は延期
 5月8日 [小]第97回（99回生）入学式、動画配信にて
 [中]第74回（93回生）入学式、動画配信にて
 6月1日 [小]学校再開
 [高]分散登校（1日1学年）開始
 6月4日 [小]登校準備
 [中]学校再開7年登校日
 [高]学籍番号偶数奇数で分けて分散登校
 6月5日 [中]学校再開8年登校日
 6月6日 [中]学校再開9年登校日
 6月8日 [中]週2回の分散登校
 6月15日 [小]分散登校
 6月18日 [高]一斉登校
 6月22日 [中]一斉登校
 6月27日 [小]入学を祝う会開催
 6月29日 [小]一斉登校
 7月 [小]例年の千倉夏季行事は中止
 8月 [小]イングリッシュキャンプは中止
 8月21日 [高]2学期始業日
 8月25日 [小]2学期始業日
 [中]夏休み明け始業式（この年、授業日数の関係で2学期制とした。1学期の終業日は9月29日）
 10月2日 [中]2学期始業式
 10月21日 [小]6年生（94回生）奈良へ修学旅行（2泊）

10月22日 [中] 7・8年生学年交流会
 秋 [小・中・高] 例年通りの運動会・体育祭は中止、小学校は学年企画の運動会を実施
 11月2日 [中] タテワリ交流会
 11月5日 [中] 9年（91回生）創作ダンス発表会（運動会代替）
 11月 [高] インターナショナル・ウィーク
<2021年>
 1月8日 [中] 第2回オンライン授業開始（3月21日まで）
 2月 [高] 音楽祭中止
 2月22日 [中] 合唱コンクールは保護者参観なしで実施
 2月25日 [小] 学習発表会は学内発表のみで実施
 3月 [小] オーストラリア短期留学は中止
卒業：[小]第94回（94回生）、[中]第74回（91回生）

[高]第73回（88回生）

この年度のできごと

★5年生（95回生）伊豆大島見学旅行は延期

★9年生（91回生）沖縄修学旅行は中止

2021（令和3）年度 <97周年>

入学：[小]第98回（100回生）、[中]第75回（94回生）

[高]第74回（91回生）

6月7日 [高] 体育祭は感染症対策として学年別で開催。7日：11年生（90回生）、8日：12年生（89回生）、9日：10年生（91回生）
 7月 [中] 8年生（93回生）夏季行事は中止
 7月 [小] 4・5・6年生（97・96・95回生）千倉夏季行事は中止
 8月 [高] オーストラリア短期留学は中止
 8月 [小] イングリッシュキャンプは中止
 9月18日 [高] 明星祭、在校生のみ参加で1日限りの開催
 10月2日 [小] 運動会。感染症対策として小・中別日、保護者参観なしで開催
 10月3日 [中] 運動会、無観客で開催
 10月10日 [小] 6年生（95回生）奈良へ修学旅行（2泊）
 10月13日 [小] 5年生（96回生）伊豆大島見学旅行（2泊）
 11月3日 [中] 9年生（92回生）沖縄修学旅行（4泊）
 11月10日 [小] 6年生（95回生）伊豆大島見学旅行（2泊）
 11月21日 小・中学校公開研究会をオンライン開催
 12月 [高] タイ短期留学は中止

<2022年>

1月21日 [中] 9年生（92回生）卒業研究発表会（2日間）
 2月 [高] 音楽祭は中止
 2月24日 [中] 合唱発表会
 3月 [小] オーストラリア短期留学は中止
 3月31日 剛力正和小学校長退任
卒業：[小]第95回（95回生）、[中]第75回（92回生）
[高]第74回（89回生）

2022（令和4）年度 <98周年>

入学：[小]第99回（101回生）、[中]第76回（95回生）

[高]第75回（92回生）

4月1日 小学校校長に照井伸也が就任
 5月25日 [小] 5年生（97回生）伊豆大島見学旅行（2泊）
 6月 [高] 体育祭は感染症対策として学年別で開催。6日：11年生（91回生）、7日：12年生（90回生）、8日：10年生（92回生）
 7月1日 [中] 9年生（93回生）沖縄へ修学旅行（4泊）
 7月17日 [小] 4・6年生（98・96回生）千倉夏季行事（各班1泊、28日まで）、5年生（97回生）はCov-19流行により中止
 8月16日 [中] 有志ハケ岳タテワリ行事7・8・9年（95・94・93回生）（2泊）
 9月17日 [高] 明星祭（2日間）
 11月7日 [中] 8年生（94回生）大田原民泊行事（2泊）
 11月26日 小・中学校公開研究会

<2023年>

1月20日 [中] 卒業研究発表会（2日間）
 2月1日 [高] 音楽祭
 2月24日 [中] 合唱コンクール
 3月20日 [小] オーストラリア短期留学（31日まで）
卒業：[小]第96回（96回生）、[中]第76回（93回生）
[高]第75回（90回生）

2023（令和5）年度 <99周年>

入学：[小]第100回（102回生）、[中]第77回（96回生）

[高]第76回（93回生）

5月24日 [小] 5年生（98回生）伊豆大島見学旅行（2泊）
 6月 [高] 体育祭は学年別で開催。5日：11年生（92回生）、6日：12年生（91回生）、7日：10年生（93回生）

略年表

7月3日	【中】9年生（94回生）沖縄へ修学旅行（4泊）
7月16日	【高】オーストラリア短期留学
7月17日	【小】4・5・6年生（99・98・97回生）千倉夏季行事（各1泊2日、28日まで）
7月19日	【中】7年生（96回生）ハヶ岳登山（2泊）
8月16日	【中】オーストラリア短期留学
9月5日	【小】夏休み作品展
9月16日	【中・高】明星祭（2日間）
10月24日	【高】インターナショナルウィーク
10月30日	【高】インターナショナル・デイ
11月13日	【中】8年生（95回生）大田原民泊行事（2泊）
11月25日	小・中学校公開研究会
12月22日	【高】タイ短期留学（29日まで）
12月26日	【小】台湾短期留学（30日まで）
〈2024年〉	
1月18日	【中】卒業研究発表会（2日間）
1月30日	【高】音楽祭
2月20日	【中】合唱コンクール
3月3日	【小】学習発表会
3月20日	【小】オーストラリア短期留学（31日まで）
卒業：【小】第97回（97回生）、【中】第77回（94回生）	
【高】第76回（91回生）	

2024（令和6）年度 < 100周年 >

入学：【小】第101回（103回生）、【中】第78回（97回生）	
【高】第77回（94回生）	
5月7日	創立100周年記念式典開催（武蔵野の森総合スポーツプラザ メインアリーナ）
5月15日	明星学園創立100周年
5月19日	創立100周年記念祝賀会（吉祥寺エクセルホテル東急）

修学旅行一覧

他にも“修学旅行”と呼ばない旅行が毎年行われた

西暦	和暦	学年	回生	行き先	出発日	日数
1927	昭2	小	6	1 関西	5月24日	3泊
1928	昭3	小	6	2 関西	10月29日	3泊
1929	昭4	小	6	3 関西	10月29日	3泊
1930	昭5	小	6	4 関西	9月30日	
1931	昭6	小	6	5 関西	10月27日	4泊
1932	昭7	小	6	6 関西	10月25日	6泊
		女	5	1 北陸	11月4日	5泊
1933	昭8	小	6	7 関西	10月20日	5泊
1934	昭9	小	6	8 関西	11月6日	6泊
		女	5	3 奥日光		2泊
1935	昭10	小	6	9 関西	11月5日	6泊
		女	5	4 上高地	10月13日	3泊
1936	昭11	小	6	10 関西	11月4日	1泊
		女	6	5 上高地	10月13日	4泊
1937	昭12	小	6	11 関西	11月	
		女	5	6 上高地		3泊
1938	昭13	小	6	12 日立鉾山と水戸		1泊
		女	5	7 上高地・天竜峡	5月30日	4泊
1939	昭14	小	6	13 関西	11月4日	6泊
		女	5	8 上高地・天竜峡	6月5日	3泊
1940	昭15	小	6	14 関西	11月13日	5泊
		女	5	9 上高地・天竜峡	6月10日	5泊
1941	昭16	小	6	15 軽井沢	7月15日	9泊
		女	5	10 上高地・天竜峡	10月7日	3泊
1942	昭17	小	6	16 関西	10月27日	6泊
		女	5	11 上高地・天竜峡	6月8日	3泊
1943	昭18	小	6	17 関西	10月	6泊
1947	昭22	小	6	21 日光	11月17日	1泊
		女	5	16 箱根		1泊
1947年に新制中学校、1948年に新制高等学校が発足						
1948	昭23	小	6	22 千倉	7月21日	6泊
		高	3	16 箱根		
1949	昭24	高	3	17 箱根		
1950	昭25	高	3	18 蓼科	10月10日	
1951	昭26	高	3	19 塩原・那須	9月	
1952	昭27	小	6	26 箱根内輪山	6月	
		中	3	23 関西	11月5日	4泊
		高	3	20 志賀高原熊の湯	7月	
1953	昭28	中	3	24 関西	11月5日	4泊

西暦	和暦	学年	回生	行き先	出発日	日数
		高	3	21 上高地	7月	
1954	昭29	小	6	28 伊豆大島	6月1日	
		中	3	25 関西	11月4日	4泊
		高	3	22 高山・乗鞍・上高地・白骨	7月20日	4泊
1955	昭30	小	6	29 清水・箱根	3月22日	1泊
		中	3	26 関西	11月	
		高	3	23 平泉・十和田	7月20日	5泊
1956	昭31	小	6	30 清水・箱根		1泊
		中	3	27 関西	11月	
		高	3	24 志賀高原熊の湯	7月22日	3泊
1957	昭32	中	3	28 関西	11月3日	4泊
		高	3	25 中尊寺・十和田湖	7月23日	5泊
1958	昭33	小	6	32 静岡・清水・箱根	6月5日	1泊
		高	3	26 東北・十和田湖	7月20日	5泊
この年・1959年4月から「4・4・4制」開始						
1959	昭34	小	6	33 静岡・清水・箱根	5月27日	1泊
		中	3	30 関西	10月3日	4泊
		高	3	27 男鹿半島・十和田湖	7月24日	5泊
1960	昭35	小	6	34 静岡・清水・箱根	5月31日	1泊
		高	12	28 東北	7月	5泊
1961	昭36	小	6	35 清水・登呂	5月31日	1泊
		中	9	32 伊勢・奈良・京都	11月8日	4泊
		高	12	29 東北	7月18日	6泊
1962	昭37	小	6	36 北伊豆・静岡	5月31日	1泊
		中	9	33 関西	9月	
		高	12	30 十和田・奥入瀬	7月	
1963	昭38	小	6	37 水郷・銚子・京葉	5月21日	1泊
		中	8	35 北関東・南奥羽	5月	2泊
		高	12	31 東北	7月17日	5泊
1964	昭39	中	8	36 東北	5月19日	3泊
		高	12	32 東北	7月22日	5泊
1965	昭40	小	6	39 霞ヶ浦	5月19日	2泊
		中	8	37 東北	5月19日	2泊
		高	12	33 東北	7月18日	6泊
1966	昭41	中	8	38 東北三陸見学	5月25日	3泊
		高	12	34 東北	7月16日	5泊
		高	11	35 東北	7月16日	4泊
1967	昭42	高	11	36 東北	7月20日	5泊
1968	昭43	高	11	37 東北	7月18日	6泊
1969	昭44	小	6	43 富士五湖		3泊

西暦	和暦	学年	回生	行き先	出発日	日数
		中	9	40	伊豆	11月4日 4泊
		高	11	38	伊豆	11月4日 4泊
1970	昭45	高	11	39	東北	7月17日 6泊
1971	昭46	中	9	42	寸又峡	11月24日 1泊
		高	11	40	東北・黒四・飛騨 高山・上高地 グループ別	7月22日 4泊
1972	昭47	高	11	41	東北	7月21日 5泊
1973	昭48	中	9	44	尾瀬	10月1日 3泊
		高	11	42	十和田・能登・高山・乗鞍 クラス別	7月17日 4泊
1973年度末で4・4・4制終了、以降は6・3・3制						
1974	昭49	中	9	45	尾瀬	10月1日 3泊
		高	11	43	クラス単位	7月21日 4泊
1975	昭50	中	9	46	尾瀬	9月30日 3泊
		高	11	44	能登・金沢・立山 黒部・飛騨高山・ 四国・倉敷・津和 野萩 クラス別	7月21日 4泊
1976	昭51	小	6	50	伊豆大島	
		高	11	45	飛騨・高山	9月1日 3泊
1977	昭52	小	6	51	越後湯沢	3月2日 2泊
		高	11	46	能登・金沢 (2班に分かれて)	9月2日 4泊
1978	昭53	小	6	52	会津	3月7日 2泊
		中	9	49	沖縄	12月11日 4泊
		高	11	47	東北 (2班に分かれて)	9月2日 4泊
1979	昭54	小	6	53	伊豆修善寺	3月9日 1泊
		中	9	50	沖縄	4泊
		高	11	48	合歓の郷 (三重県志摩市)	9月2日 3泊
1980	昭55	小	6	54	伊豆大島	5月26日 2泊
		中	9	51	尾瀬	10月8日 3泊
		高	11	49	飛騨高山 フィールドワーク (2班に分かれて)	9月1日 3泊
1981	昭56	小	6	55	伊豆大島	5月26日 2泊
		中	9	52	東北、わらび座	9月9日 3泊
		高	11	50	十和田湖 (2班に分かれて)	9月2日 4泊
1982	昭57	小	6	56	三重県山岸会～ 奈良	9月9日 4泊
		中	9	53	小笠原	10月18日 5泊
		高	11	51	近江八幡 フィールドワーク	9月 3泊

西暦	和暦	学年	回生	行き先	出発日	日数
1983	昭58	小	6	57	尾瀬	9月26日 3泊
		中	9	54	長崎平戸	9月19日 3泊
		高	11	52	佐渡島 フィールドワーク	9月5日 3泊
1984	昭59	小	6	58	花巻	2泊
		中	9	55	尾瀬	10月10日 3泊
		高	11	53	企画旅行、能登、 広島	8月31日 5泊 4泊
1985	昭60	小	6	59	猪苗代	1月21日 2泊
		中	9	56	白馬岳縦走登山	8月27日 4泊
		高	11	54	北海道 (2班に分かれて)	8月31日 4泊
1986	昭61	小	6	60	尾瀬	10月6日 3泊
		中	9	57	白馬岳縦走登山	8月25日 4泊
1987	昭62	小	6	61	猪苗代	1月20日 2泊
		中	9	58	韓国	10月11日 4泊
		高	11	56	韓国	9月1日 4泊
1988	昭63	小	6	62	飛騨高山	9月28日 2泊
		中	9	59	白馬岳縦走登山	8月26日 4泊
		高	11	57	北海道 コース別	9月1日 4泊
1989	昭64/平1	小	6	63	飛騨高山	10月24日 2泊
		中	9	60	沖縄	3月7日 4泊
		高	11	58	沖縄 コース別	9月1日 4泊
1990	平2	小	6	64	淡路島・徳島	6月6日 2泊
		中	9	61	韓国	10月1日 4泊
		高	11	59	マレーシア シンガポール コース別	9月3日 4泊
1991	平3	小	6	65	飛騨高山	10月1日 2泊
		中	9	62	九州	9月30日 4泊
		高	11	60	マレーシア コース別	9月2日 4泊
1992	平4	小	6	66	飛騨高山	9月30日 2泊
		中	9	63	長崎平戸	9月28日 4泊
		高	11	61	北海道 コース別	9月1日 4泊
1993	平5	小	6	67	飛騨高山	9月27日 2泊
		中	9	64	韓国	10月4日 4泊
		高	11	62	マレーシア シンガポール タイ コース別	9月1日 4泊
1994	平6	小	6	68	飛騨高山	9月28日 2泊
		中	9	65	中国	10月4日 4泊

西暦	和暦	学年	回生	行き先	出発日	日数
		高 11	63	北海道 コース別	9月1日	4泊
1995	平7	小 6	69	飛騨高山	9月27日	2泊
		中 9	66	五島列島	10月3日	4泊
		高 11	64	北海道・沖縄・タイ ・韓国・マレーシア コース別	9月1日	4泊
1996	平8	小 6	70	奈良	10月2日	2泊
		中 9	67	北海道	7月7日	4泊
		高 11	65	コース別	8月27日	4泊
1997	平9	小 6	71	奈良	10月1日	2泊
		中 9	68	沖縄	9月29日	4泊
1998	平10	小 6	72	奈良	10月6日	2泊
		中 9	69	台湾	9月28日	4泊
		高 11	67	コース別	8月26日	4泊
1999	平11	小 6	73	奈良	10月12日	2泊
		中 9	70	沖縄	9月27日	4泊
		高 11	68	コース別	8月25日	4泊
※この年以降高校の宿泊行事は教科主催の希望者参加型学習旅行に変わった。						
2000	平12	小 6	74	奈良	10月4日	2泊
		中 9	71	沖縄	6月26日	4泊
2001	平13	小 6	75	黒部	10月10日	2泊
		中 9	72	五島列島	10月1日	4泊
2002	平14	小 6	76	奈良	10月9日	2泊
		中 9	73	尾道・四国	7月8日	4泊
2003	平15	小 6	77	奈良	10月8日	2泊
		中 9	74	沖縄	9月29日	4泊
2004	平16	小 6	78	奈良	10月6日	2泊
		中 9	75	沖縄 コース別	7月5日	4泊
2005	平17	小 6	79	奈良	10月5日	2泊
		中 9	76	沖縄・伊江島 民泊	7月4日	4泊
2006	平18	小 6	80	奈良	10月25日	2泊
		中 9	77	沖縄・伊江島 民泊	7月4日	4泊
2007	平19	小 6	81	奈良	11月20日	2泊
		中 9	78	沖縄・伊江島 民泊	7月3日	4泊
2008	平20	小 6	82	奈良	10月8日	2泊
		中 9	79	沖縄・伊江島 民泊	7月7日	4泊
2009	平21	小 6	83	奈良	10月7日	2泊
		中 9	80	沖縄・伊江島 民泊	7月6日	4泊

西暦	和暦	学年	回生	行き先	出発日	日数
2010	平22	小 6	84	奈良	10月5日	3泊
		中 9	81	沖縄・伊江島 民泊	7月5日	4泊
2011	平23	小 6	85	奈良	10月4日	3泊
		中 9	82	沖縄・伊江島 民泊	7月4日	4泊
2012	平24	小 6	86	奈良	9月17日	3泊
		中 9	83	沖縄・伊江島 民泊	7月2日	4泊
2013	平25	小 6	87	奈良	9月19日	2泊
		中 9	84	沖縄・伊江島 民泊	7月8日	4泊
2014	平26	小 6	88	奈良	9月15日	3泊
		中 9	85	沖縄・伊江島 民泊	7月7日	4泊
2015	平27	小 6	89	奈良	10月16日	3泊
		中 9	86	沖縄・伊江島 民泊	7月6日	4泊
2016	平28	小 6	90	奈良	10月19日	2泊
		中 9	87	沖縄・伊江島 民泊	7月4日	4泊
2017	平29	小 6	91	奈良	10月18日	2泊
		中 9	88	北海道十勝民泊	7月3日	4泊
2018	平30	小 6	92	奈良	10月24日	2泊
		中 9	89	陸前高田民泊	7月2日	4泊
2019	平31/令1	小 6	93	奈良	10月23日	2泊
		中 9	90	沖縄・伊平屋島 民泊	7月1日	4泊
2020	令2	小 6	94	奈良	10月22日	2泊
		中 9	91	(コロナ禍で中止)		
2021	令3	小 6	95	奈良	10月10日	2泊
		中 9	92	沖縄・伊平屋島 民泊	11月3日	4泊
2022	令4	小 6	96	奈良	10月19日	2泊
		中 9	93	沖縄・伊平屋島 民泊	7月1日	4泊
2023	令5	小 6	97	奈良	10月18日	2泊
		中 9	94	沖縄・伊平屋島 民泊	7月3日	4泊

運動会・球技・体育祭一覧

1925年	【小】第1回運動会(10月21日)
1926年	【小】第2回運動会(10月21日)
1927年	【小】運動会(10月30日)
1928年	【小・旧中・女】3部合同運動会(5月15日)
1929年	【小・旧中・女】3部合同運動会(10月27日)
1930年	
1931年	【小】運動会(10月25日)
1932年	【小・旧中・女】全園運動会(10月23日)
1933年	【旧中】運動会(9月17日) 【小】運動会(10月17日)
1934年	【小】第10回運動会(10月28日)
1935年	【小・旧中・女】全園運動会(10月28日)
1936年	【小・旧中・女】全園運動会(10月17日)
1937年	【小・旧中・女】3部合同運動会(10月19日)
1938年	【小】第1回体操会(6月26日) 【小・旧中・女】明星学園体育会(10月30日)
1939年	【小】第2回体操会(6月4日)
1940年	【小】第3回体操会(4月29日)
1941年	【小】第4回体操会(6月1日)
1942年	【小】第5回体操会(11月3日) 【小・旧中・女】3部合同運動会(11月8日)
1943年	【小】第6回体操会(6月27日)
1947年	【小・新中・女】体育会 ※天長節を尊び(4月29日) 【小・旧中】体育会 ※端午の節句(5月5日)
1949年	【小・旧中】合同体育会(10月22日) 【小・新中・女】体育会(明星祭の第1部)(11月3日)
1950年	【小】体育会(5月5日) 【小・中・高】体育会(明星祭の第1部)(10月15日)
1951年	【中】体育会(6月25日) 【小・中】体育の会(10月21日)
1953年	【小・中】明星祭体育の日(10月18日) 【高】明星祭第1部運動会(10月25日)
1954年	【高】明星祭第1部運動会(10月24日)
1955年	【小・中】明星祭体育会(10月16日) 【高】明星祭体育会(10月23日)
1956年	【高】球技大会(6月) 【小・中】体育会(10月14日) 【高】明星祭体育会(10月21日)
1957年	【中・高】明星祭の一環として体育会(10月20日)
1958年	【中・高】明星祭の一環として体育会(10月19日)

1959年	※この年から4・4・4制開始、1～4年生を初等部と呼ぶ 【初】体育会小学校の部(10月18日)
1960年	【初】明星祭の一環として体育会(10月9日) 【中】明星祭の一環として体育会(10月16日)
1963年	【初・中】体育会(10月13日)
1964年	【初・中】合同運動会(10月4日)
1965年	【初・中】明星学園運動会(10月10日)
1966年	【初・中】明星学園運動会(10月9日) 【高】体育祭(10月30日)
1967年	【初・中】明星学園運動会(5月21日)
1968年	【初】運動会(10月20日) 【高】体育祭(10月27日)
1969年	【初】運動会(10月10日) 【高】体育祭(10月10日) 【中】運動会(10月19日)
1970年	【中】運動会(10月4日) 【中】球技大会(11月)
1971年	【初】秋の運動会(10月10日) 【中】運動会(10月17日)
1972年	【初】小運動会(5月15日) 【高】体育祭(10月8日) 【初】秋の運動会(10月10日) 【中】運動会(10月15日)
1973年	【中】球技大会(6月22・23日) 【初】秋の運動会(10月10日)
1974年	※この年から6・3・3制 【小・中】創立50周年記念小中合同運動会 (10月15日)
1975年	【高】球技大会(5月28日) 【小・中】運動会(10月10日)
1976年	【高】球技大会(6月4・5日) 【小・中】運動会(10月10日)
1977年	【高】球技大会(6月3・4日) 【小・中】運動会(10月9日)
1978年	【高】球技大会(6月1・2日) 【小・中】運動会(10月8日)
1979年	【高】球技大会(5月30・31日) 【小・中】運動会(10月7日)
1980年	【高】球技大会(5月6・7日) 【小・中】運動会(10月5日)
1981年	【高】球技大会(6月12・11日) 【小・中】運動会(10月10日)
1982年	【高】球技大会(6月11・12日) 【小・中】運動会(10月10日)

1983年	[高]球技大会(6月初旬・2日間) [小・中]運動会(10月9日)	2005年	[高]球技大会(6月3・4日) [小・中]運動会(9月23日)
1984年	[高]体育祭(6月8日) [小・中]秋の大運動会(9月30日)	2006年	[高]体育祭(6月2・3日) [小・中]運動会(10月1日)
1985年	[高]体育祭・球技大会(6月7・8日) [小・中]運動会(9月29日)	2007年	[高]体育祭(6月1・2日) [小・中]運動会(10月1日)
1986年	[高]球技大会(6月13・14日) [小・中]秋の大運動会(9月28日)	2008年	[高]体育祭(5月30・31日) [小・中]運動会(9月23日)
1987年	[高]球技大会(6月12・13日) [小・中]大運動会(9月27日)	2009年	[高]球技大会(6月5・6日) [小・中]運動会(9月20日)
1988年	[高]球技大会(6月13・14日) [小・中]秋の大運動会(9月23日)	2010年	[高]体育祭(6月4・5日) [小・中]運動会(10月2日)
1989年	[高]球技大会(6月16・17日) [小・中]大運動会(9月23日)	2011年	[小・中]運動会(5月29日) [高]体育祭(6月3・4日)
1990年	[高]球技大会(6月8・9日) [小・中]大運動会(9月23日)	2012年	[小・中]運動会(5月26日) [高]体育祭(6月1・2日)
1991年	[高]球技大会(6月10・11日) [小・中]大運動会(9月22日)	2013年	[小・中]運動会(5月25日) [高]体育祭(5月31日・6月1日)
1992年	[高]球技大会(6月5・6日) [小・中]運動会(9月23日)	2014年	[高]体育祭(5月30・31日) [小・中]運動会(5月31日)
1993年	[高]球技大会(6月18・19日) [小・中]運動会(9月23日)	2015年	[高]体育祭(6月5・6日) [小・中]運動会(10月10日)
1994年	[高]球技大会(6月13・14日) [小・中]運動会(9月23日)	2016年	[高]体育祭(6月2・3日) [小・中]運動会(10月1日)
1995年	[高]球技大会(6月6・7日) [小・中]運動会(9月23日)	2017年	[高]体育祭(6月1・2日) [小・中]運動会(9月30日)
1996年	[高]球技大会(6月12・13日) [小・中]運動会(9月23日)	2018年	[高]体育祭(5月31日・6月1日) [小・中]運動会(9月29日)
1997年	[高]球技大会(5月29・30日) [小・中]運動会(9月20日)	2019年	[高]体育祭(5月31日・6月1日) [小・中]運動会(9月28日)
1998年	[高]球技大会(6月5・6日) [小・中]運動会(9月20日)	2020年	コロナ禍で実施せず
1999年	[小・中]運動会(5月30日) [高]球技大会(6月4・5日)	2021年	[高]体育祭(学年別)11年(6月7日) 12年(8日)10年(9日) [小]運動会(10月2日) [中]運動会(10月3日)
2000年	[高]球技大会(6月2・3日) [小・中]運動会(10月1日)	2022年	[高]体育祭(学年別)11年(6月6日) 12年(7日)10年(8日) [小]運動会(10月1日) [中]運動会(10月2日)
2001年	[高]球技大会(6月1・2日) [小・中]運動会(9月23日)	2023年	[高]体育祭(学年別)11年(6月5日) 12年(6日)10年(7日) [小]運動会(9月30日) [中]運動会(10月1日)
2002年	[高]球技大会(5月31日・6月1日) [小・中]運動会(9月22日)		
2003年	[高]球技大会(5月30・31日) [小・中]運動会(9月21日)		
2004年	[高]球技大会(6月4・5日) [小・中]運動会(9月23日)		

編集後記

1983年（昭和58）4月、依田好照先生が小中学校の校長となり、新しい体制が始まった。私はその翌年、若者とベテランが一緒になって「新しい学校を創っていくぞ!」という気概にあふれる中、明星学園の教員になった。創立60周年の年であった。

ちょうど40年間を明星学園とともに過ごしてきたことになるが、この40年間を振り返ってみると、われわれ教員は赤井米吉先生が話された「二つの話」を明星学園のアイデンティティとして受け継いできたのだと改めて確信する。

一つは創立当初、開校披露式の挨拶で話された「明星学園は社会立の学校である」という話。もう一つは、1930年度最初の職員会議での「研究を怠っては、明星学園を創立した意味がない」という主旨の発言である。

1924年6月21日、赤井先生は開校披露式・校舎落成式の挨拶で、4人の創立同人が掲げた「個性尊重・自主自立・自由平等」という建学の理念は、「明星学園の理想であると同時に社会全体の理想なのだ。だから、明星学園は言わば社会立の学校である」と高らかに宣言する。以来、我々はこの100年を通じて「個性尊重・自主自立・自由平等」を身につけた子どもたちを育てていくことを学園の教育活動の中心に置いてきた。

そしてその教育活動は、1930年（昭和5）4月4日の職員会議で、「既成の教育にあまんじるな。何のためにこれほどまでに苦勞をして明星学園という学校を建てたのか。研究し公開することを怠っては明星学園を創った意味がない」という研究学校としての自覚を促す言葉にも表された。我々は100年間、この言葉に支えられてきたのである。

「社会立の学校」と「研究学校」、この二つは明星学園の存在意義を表す言葉として、昔も今も変わることなく100年間受け継がれてきた。

しかし、その一方でそれを実現していくための「しくみ」や「教育環境」は、この100年間に大きく変化してきた。学校の体制だけでも、小学校だけの学校から旧制中学校・旧制女学校をもつ学校へと変化し、また戦後は、小学校・中学校・高等学校の12年間をどのように区切るのかをずっと模索してきた。6・3・3制から4・4・4制へ、そして9・3制から6・6制へ。より良い12年一貫体制を求め続けた結果、12年の体制は大きく変化してきた。実にたくさんのターニングポイントがあった。

明星学園の「100年間のあゆみ」には、学園が保護者、卒業生、さまざまな学園関係者に支えられながら、建学の理念を守りつつ、時代の変化とともにより良い教育環境を求めて、悩み苦しみながらも前進してきた歴史が刻まれている。本誌では、歴史の事実を忠実に伝えるとともに、その時々当事者の思いや、学園を支えてくださった方々の思いも伝えられるように編集してきたつもりである。4人の創立同人が思い描いた理想を、途切れることなく受け継いできた明星学園の歴史に、多くの方に触れていただくことを切に願う。

最後に、この100年史の編集にあたっては、改めて学園史資料室（資料整備委員会）の存在がいかに重要であるかを再認識することとなった。教師や生徒、卒業生たちが残した貴重な写真や文章を90年史に続いて本誌にも使用しているが、このような資料がみごとに整理されている。学園は、次の100年に向けて学園史資料室を一層充実させると共に、次の世代に向けて学園の歴史や教育理念を引き継いでいく努力を怠ってはいけなさと痛感させられた。

そしてそれが同時に、学園の未来を支えていくことに繋がるのである。

この冊子が若い世代の人たちを含めて、多様な人たちの目にとまれば幸いである。

編集委員長 河住 貴夫

『明星の年輪—明星学園 100 年のあゆみ』編集委員会

河住 貴夫	(編集委員長、前中学校高等学校長、中学校体育科)
堀内 雅人	(前中学校副校長、中学校国語科)
一瀬 清	(元小学校長、小学校総合科)
渡辺 京	(元中学校高等学校長、高等学校社会科)
串田 妙子	(学園評議員、36 回生)
大草 美紀	(学園資料整備委員会、51 回生)

協力

依田 好照 (元小中学校長、中学校社会科)、依田 八重子

〈資料整備委員会〉 山森 睦代

〈資料整備ボランティア〉 松居 洋子、中山 みつ、中林 裕子、板橋 桃代、柵木 香、上野 晶子、
相馬 洋子、本間 良子

〈保 護 者〉 三枝 育子、福岡 美弥子、小端 アキコ、田島 千尋、田中 めぐみ

〈卒 業 生〉 山森 南花 (89 回生)

〈学園事務局〉 東 れいか、長尾 元美、小島 春奈、副島 理子

写真撮影

表紙・扉写真 大草 鷹平 (79 回生)

ドローン撮影 柳瀬 雅史 (51 回生)

(敬称略)

裏表紙 星章デザイン 横川 武 (本校美術科教諭・理事・1 回生)

明星の年輪

—明星学園 100 年のあゆみ—

2024 年 5 月 15 日発行

編 集：『明星の年輪—明星学園 100 年のあゆみ』編集委員会

発行者：学校法人 明星学園 平田 和孝

〒181-0001 東京都三鷹市井の頭 5-7-7

電話 0422-43-2195

印刷・製本：株式会社 文伸

